

印刷物仕様書

印刷物名	記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財 「浜通りのお浜下り」調査報告書	数量	(枚 組) 300	<input type="checkbox"/> 部 <input type="checkbox"/> 枚 <input type="checkbox"/> 組 <input checked="" type="checkbox"/> 冊 <input type="checkbox"/> セット
印刷区分	■オフセット <input type="checkbox"/> フォーム <input type="checkbox"/> ダイレクト <input type="checkbox"/> 賞状 <input type="checkbox"/> 地図 <input type="checkbox"/> その他 ()			
用紙規格 ・ 印 刷 面 ・ 印 刷 色	■A <input type="checkbox"/> B 4判 (■仕上がり)	<input type="checkbox"/> インチ× インチ	<input type="checkbox"/> mm × mm	
	【表紙】 220 kg (紙の厚さ) <input type="checkbox"/> 上質紙 <input type="checkbox"/> コート紙 <input type="checkbox"/> アート紙 <input type="checkbox"/> レザック <input type="checkbox"/> 色上質紙 (厚口・特厚口) ■その他 (マットポスト 加工有) ■片面刷/□両面刷 (1色)			
	【本文】 340頁 70 kg (紙の厚さ) ※フルカラー <input type="checkbox"/> 上質紙 <input type="checkbox"/> コート紙 <input type="checkbox"/> アート紙 <input type="checkbox"/> OCR用紙 <input type="checkbox"/> ノーカーボン紙 (青・黒) (N) ■その他 (マットコート紙) <input type="checkbox"/> 減感 (枚目) <input type="checkbox"/> 裏カーボン (枚目) <input type="checkbox"/> 片面刷 (□モノクロ (頁) □2色 (頁) □3色 (頁) □4色 (頁)) ■両面刷 (□モノクロ (頁) □2色 (頁) □3色 (頁) ■4色 (340頁))			
	【仕切紙】 枚 <input type="checkbox"/> 上質紙 <input type="checkbox"/> 色上質紙 (薄口・中厚口) <input type="checkbox"/> その他 () <input type="checkbox"/> 片面刷/□両面刷 (色)			
製 本	■無線 (あじろ) とじ <input type="checkbox"/> 針金とじ (□中とじ □平とじ) (カ所) <input type="checkbox"/> 上製本 <input type="checkbox"/> 見返し ■背文字 <input type="checkbox"/> バラ (枚帯掛) <input type="checkbox"/> 穴 (カ所) <input type="checkbox"/> ミシン (本) <input type="checkbox"/> セット仕上 (枚帯掛) <input type="checkbox"/> 天のり (組・枚 1冊) <input type="checkbox"/> 折り (□二つ折 □三つ折 □巻三つ折 □巻四つ折 □経本折 □観音折) <input type="checkbox"/> その他 ()			
グリーン 購 入	■適合 <input type="checkbox"/> 不適合 <input type="checkbox"/> 対象外			
	【判断基準】 (1)総合評価値 80以上 の印刷用紙を使用すること。(冊子形状のものについては表紙を除く。) (2)印刷物の用途・目的に支障のない範囲で、可能な限りAランクの資材を使用すること。 (3)報告書、ポスター、チラシ、パンフレット等の印刷物には、リサイクル適性を表示すること。 (4)オフセット印刷については、インキの種類ごとに規定された率以上の植物由来の油を含有し、かつ芳香族成分が1%未満の溶剤のみを用いたインキが使用されていること。			
写 真	■カラー 414点 <input type="checkbox"/> モノクロ 点 【内訳】 ■支給 [著作権: □無 (点) ■有 (414点)] □撮影又はレンタル 点			
イラスト	■カラー 63点 <input type="checkbox"/> モノクロ 点 【内訳】 ■支給 [著作権: □無 (点) ■有 (63点)] □書起し又はレンタル 点			
支給原稿	【表紙】 <input type="checkbox"/> 普通紙 ■電子データ (使用ソフト: Illustrator、PDF) 【本文】 <input type="checkbox"/> 普通紙 ■電子データ (使用ソフト: PDF) 【イラスト】 <input type="checkbox"/> 普通紙 ■電子データ (使用ソフト: PDF) 【写真】 <input type="checkbox"/> ネガ <input type="checkbox"/> プリント ■電子データ (使用ソフト: PDF)			
原稿引渡	■受注業者決定時 <input type="checkbox"/> 令和 年 月 日 (予定)			
校 正 責 任 者	所属名 福島県教育庁文化財課 担当者 大和田 内線 (5123) 外線 (024-521-7787)	校正 回数	1回	
納入期限	令和 8年 3月16日 (月)	データ納品	■要 (形式: PDF・高低2種) □不要	
納入場所	福島県教育庁文化財課 (西庁舎4階) 【その他納品先】 □有 (カ所) ■無			
特記事項	特記仕様書あり。 ページ数、写真・イラストの点数は前後する可能性があります。			

- (注) 1 必要な仕様は、別紙に具体的に書き入れること。
2 受注業者は、作業前に校正責任者と打合せを行うこと。
3 リサイクル適性の表示が必要な印刷物 (上記グリーン購入【判断基準】(3)を参照) については、受注業者は速やかに資材確認票を出納局入札用度課に提出すること。

記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財「浜通りのお浜下り」調査報告書 特記仕様書

1 表紙

- 用紙は、「マットポスト220kg 加工有」を使用すること。

2 本文（カラー）

- 本文ページ数には扉・序文・目次・奥付等を含んでいる。

3 校正

- 校正回数は1回とする。（色校正のみ）
- 校正部数は各5部とし、担当者へ提出すること。

4 その他

- 印刷工程表を、契約締結後1週間以内に提出すること。
- データ納品のpdfファイルは、高解像度及び低解像度のものの2種類とし、フォントを埋め込んだハイブリッド版でページ検索を設定すること。
- 原稿引渡及び校正については、教育庁文化財課（福島市杉妻町2番16号西庁舎4階）で行うこと。

序文

浜通りのお浜下り調査委員会 会長 懸田弘訓

「浜下り」とは、ご神体や神輿、あるいは人が浜辺に出て海水を浴びたり、汲んで神前に供えたりする習俗です。日本各地にはさまざまな形態の「浜下り」が存在しますが、福島県「浜通り」には、100 を超える多種多様な「お浜下り」があるとされてきました。しかしながら、昭和、平成を経て「浜通りのお浜下り」を支えてきた集落の変容は著しく、産業構造の変化や価値観の多様化、少子高齢化など、さまざまな社会的・文化的影響を受けて、「お浜下り」をはじめとする祭礼や芸能、習慣等が中断や廃絶に向かう傾向にありました。

そんな「浜通り」を、平成 23(2011)年 3 月 11 日、東北地方太平洋沖地震が襲いました。続いて発生した大津波により、浜辺の集落の中には壊滅したところもあります。さらに福島第一原子力発電所の原子力災害により、全住民の町村外への避難を余儀なくされた自治体もありました。大津波によって海岸部の地形は変化し、また原子力災害により発生した放射線によって、海岸は汚染されました。神が下りるべき「浜」は消え、ケガレを払った「潮」は、逆にケガレを帯びた忌むべきものとなりました。何より、神とともに豊穰を祈念し、言祝いだ人々の姿さえも消えてしまいました。もはや「浜通りのお浜下り」は、潰える運命であるかに見えました。

しかし、多くを失ったからこそ、これまで当たり前にあったものが決して当たり前のものではなかったことに気づいた人々は、苦しい状況の中でも「できることから」という姿勢で、さまざまな祭礼行事を復活させていきました。「浜通りのお浜下り」も、神事のみを行ったり、神輿の渡御場所を変更したりするなど、さまざまな工夫が重ねられました。そうした取り組みの結果、規模の大きな祭礼も、次第に震災以前の規模を取り戻しております。中には、中断していた祭礼を復活させようとする機運が高まった地域もでてきました。

とはいえ、もともと衰退の傾向にあった習俗です。これまでの社会の変容に加え、震災等の被害は甚大であり、各地域はいまだ復興の途上です。今後の継承については、危うい点も多く、ゆえに令和 2(2020)年に「記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財」として選定されたことを契機に、該当する 11 市町村と福島県が協同して「浜通りのお浜下り調査委員会」を組織し、各地の「浜通りのお浜下り」の祭礼と、それに関する民俗についての調査を、令和 4(2022)年度から行ってまいりました。本書は、その調査結果をまとめたものです。

本報告書が、「浜通りのお浜下り」だけではなく、浜通り全域の無形民俗文化財保護に関する意識の高揚を図り、地域文化の活性化と、震災等で大きな被害を受けた市町村の復興に資することとなれば幸いです。

目 次

序 文	1	15. 南相馬市	綿津見神社 (原町区萱浜)
目 次		16. 南相馬市	天満天神社 (原町区下江井)
例 言	4	17. 南相馬市	天満天神社 (原町区小沢)
事業の概要・経過		18. 南相馬市	綿津見神社 (原町区馬場)
組織一覧 (指導機関、調査部会、事務局)		19. 南相馬市	綿津見神社 (原町区大原)
執筆者一覧		20. 南相馬市	益多嶺神社
凡 例	6	21. 南相馬市	稲荷神社
第I章 概 説		22. 浪江町	貴布祢神社
はじめに		23. 双葉町	新山神社
1. 調査の方法		24. 富岡町	諏訪神社
2. 地域の外観		25. 檜葉町	龍田神社
(1) 地理的環境		26. 広野町	八雲神社
(2) 歴史的環境		27. いわき市	諏訪神社・愛宕神社・津守神社・ 星廻宮神社・熊野神社 (久之浜町・大久町)
(3) 東日本大震災の前後と現在		28. いわき市	三嶋神社
3. 「浜通りのお浜下り」について		29. いわき市	熊野神社 (田人町)
津波浸水域と掲載神社分布		30. いわき市	愛宕神社・那智神社・津神社
掲載神社一覧		31. いわき市	熊野神社 (錦町)
第II章 詳細調査		32. いわき市	伊勢両宮神社
1. 新地町 安波津野神社		33. いわき市	諏訪神社 (江名)
2. 相馬市 稲荷寄木神社		34. いわき市	諏訪八幡神社
3. 飯舘村 山津見神社 (大倉)		35. いわき市	温泉神社
4. 南相馬市 日吉神社		36. いわき市	愛宕花園神社
5. 浪江町 若野神社		37. いわき市	白山神社
6. 双葉町 初發神社		38. いわき市	八劔神社
7. 大熊町 秋葉神社		39. いわき市	薄井神社
8. 富岡町 四十八社山神社		40. いわき市	飯野八幡宮
9. 檜葉町 大滝神社・出羽神社		41. いわき市	諏訪神社・安波大杉神社・ 出羽神社 (四倉町)
10. 広野町 大瀧神社・鹿島神社			
11. いわき市 大國魂神社			
第III章 概要調査		第IV章 基本調査	
1. 新地町 諏訪神社		1. 新地町	子眉嶺神社
2. 相馬市 相馬中村神社		2. 新地町	八重垣神社
3. 相馬市 牛頭天王外八社		3. 相馬市	鹿島神社
4. 相馬市 綿津見神社		4. 相馬市	日吉神社 (柏崎)
5. 相馬市 熊野神社		5. 相馬市	日吉神社 (赤木)
6. 南相馬市 虚空蔵堂 (鹿島区)		6. 相馬市	大雷神社
7. 南相馬市 鶏足神社		7. 飯舘村	綿津見神社
8. 南相馬市 御刀神社		8. 飯舘村	山津見神社 (佐須)
9. 南相馬市 津神社		9. 南相馬市	伊勢大御神
10. 南相馬市 八竜神社		10. 南相馬市	牛頭天王
11. 南相馬市 男山八幡神社		11. 南相馬市	塩釜明神
12. 南相馬市 鹿島御子神社		12. 南相馬市	金砂神社
13. 南相馬市 三日月不動堂		13. 南相馬市	薬師堂
14. 南相馬市 冠嶺神社		14. 南相馬市	愛宕権現
		15. 南相馬市	浮洲神社


- | | | | |
|----------|------------------------|----------|---------------|
| 16. 南相馬市 | 若宮八幡神社 | 64. いわき市 | 諏訪神社 (常磐関船町) |
| 17. 南相馬市 | 報徳二宮神社 | 65. いわき市 | 熊野神社 (常磐下船尾町) |
| 18. 南相馬市 | 降居神社 | 66. いわき市 | 熊野神社 (常磐白鳥町) |
| 19. 南相馬市 | 山津見神社 | 67. いわき市 | 熊野神社 (常磐藤原町) |
| 20. 南相馬市 | 山王権現 | 68. いわき市 | 八坂神社 (常磐藤原町) |
| 21. 南相馬市 | 御山神社 | 69. いわき市 | 鹿島神社 (渡辺町) |
| 22. 南相馬市 | 三島神社 | 70. いわき市 | 諏訪神社 (渡辺町) |
| 23. 南相馬市 | 雷神社 | 71. いわき市 | 諏訪神社 (平下大越) |
| 24. 南相馬市 | 出羽神社 | 72. いわき市 | 八坂神社 (平下大越) |
| 25. 南相馬市 | 虚空蔵堂 (原町区小沢) | 73. いわき市 | 新山神社 |
| 26. 南相馬市 | 綿津見神社 (原町区江井) | 74. いわき市 | 天照皇大神宮 (平原高野) |
| 27. 南相馬市 | 相馬小高神社奥の院 | 75. いわき市 | 諏訪神社 (平沼ノ内) |
| 28. 南相馬市 | 八坂神社 | 76. いわき市 | 諏訪神社 (平豊間) |
| 29. 南相馬市 | 日鷲神社 | 77. いわき市 | 八幡神社 (平豊間) |
| 30. 南相馬市 | 星神社 | 78. いわき市 | 二荒神社 (平下山口) |
| 31. 双葉町 | 諏訪神社 | 79. いわき市 | 鹿島神社 (平神谷作) |
| 32. 双葉町 | 稲荷神社 | 80. いわき市 | 立錡鹿島神社 |
| 33. 富岡町 | 麓山神社 | 81. いわき市 | 出羽神社 (平中神谷) |
| 34. 富岡町 | 王塚神社 | 82. いわき市 | 佐麻久嶺神社 |
| 35. いわき市 | 見渡神社 | 83. いわき市 | 神明神社 |
| 36. いわき市 | 鬼越神社 | 84. いわき市 | 二荒神社 (平上高久) |
| 37. いわき市 | 東照宮神社 | 85. いわき市 | 十市神社 |
| 38. いわき市 | 星之宮神社 | 86. いわき市 | 鹿島神社 (四倉町) |
| 39. いわき市 | 稲荷神社 (錦町) | 87. いわき市 | 八幡神社 (四倉町) |
| 40. いわき市 | 八坂神社 | 88. いわき市 | 稲荷神社 |
| 41. いわき市 | 諏訪神社 (山田町) | 89. いわき市 | 諏訪神社 (四倉町) |
| 42. いわき市 | 月山神社 | | |
| 43. いわき市 | 武塔天神神社 | | |
| 44. いわき市 | 鹿島神社 (山田町) | | |
| 45. いわき市 | 北野神社 | | |
| 46. いわき市 | 諏訪神社 (中之作) | | |
| 47. いわき市 | 稲荷神社 (永崎) | | |
| 48. いわき市 | 根渡神社 | | |
| 49. いわき市 | 小名浜観音 | | |
| 50. いわき市 | 鹿島神社 (小名浜) | | |
| 51. いわき市 | 住吉神社 | | |
| 52. いわき市 | 諏訪神社 (小名浜) | | |
| 53. いわき市 | 鹿島神社 (常磐上矢田町) | | |
| 54. いわき市 | 白山神社 | | |
| 55. いわき市 | 熊野神社 (鹿島町) | | |
| 56. いわき市 | 津神社・出羽神社・
根渡神社 (泉町) | | |
| 57. いわき市 | 鹿島神社 (泉町) | | |
| 58. いわき市 | 八幡白山神社 | | |
| 59. いわき市 | 八坂神社 (常磐水野谷町) | | |
| 60. いわき市 | 日吉神社 | | |
| 61. いわき市 | 牛神社 | | |
| 62. いわき市 | 八幡神社 (常磐長孫町) | | |
| 63. いわき市 | 金山神社 | | |

協力者・協力機関一覧

奥付

例言

- 一、本書は、令和 2 年 3 月 16 日に、文化庁より記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財に選択された「浜通りのお浜下り」についての調査報告書である。
- 一、本調査事業は、令和 4 年度～令和 7 年度にかけての文化庁補助事業「民俗文化財調査費国庫補助金」および、福島県、新地町・相馬市・南相馬市・飯館村・浪江町・双葉町・大熊町・富岡町・楡葉町・広野町・いわき市の各調査事業負担金により実施された。
- 一、調査は、聞き取り調査と観察調査を中心に行い、あわせて写真と動画による記録を行った。本書に使用した写真は、令和 4 年から令和 7 年に撮影したものであるが、祭礼の推移を理解するうえで必要な古写真も使用した。
- 一、調査にあたっては、文化庁文化財第一課 玄蕃充子氏、福島県文化財保護審議会会長 鈴木俊行氏にご指導をいただき、地域においては、福島県神社庁浜通り支部、各地の保存会、氏子総代諸氏をはじめ、福島県浜通りの地域の皆様から多くのご教示とご協力をいただいた。
- 一、本文中における「浜下り」の表記は、「はまおり」と読むものとしたが、「はまおり」「はまくだり」「おさがり」等と地域または話者によって千差万別であるため、特にふりがなはふらないものとした。ただし、祭礼の呼称、もしくは特に執筆者が必要と判断した場合には、カタカナ表記もしくはふりがなをつけた。
- 一、「浜通り」とは、福島県太平洋沿岸部の新地町・相馬市・南相馬市・飯館村・浪江町・双葉町・大熊町・富岡町・楡葉町・広野町・いわき市・川内村・葛尾村の 13 市町村をさすが、「お浜下り」習俗が見られるのは、川内村と葛尾村を除いた 11 市町村である。本調査の対象はこの 11 市町村であり、本報告書では特に断りのない限り、この 11 市町村を「浜通り」とする。
- 一、本文中には、不快と思われる用語もあるが、報告書という性格から伝承を尊重し、削除しなかった。
- 一、限られた条件での調査のため、調査委員の誤認や誤記があればお詫びし、今後補完していきたい。
- 一、本書を作成するための調査及び本書の編集は、「浜通りのお浜下り調査委員会」が行った。
- 一、本書の執筆分担は、各項目の末に記した。
- 一、本書の執筆・編集にあたり、多くの方々および関係機関のご協力をいただいた。巻末に敬称を省略して記載した。



ダミー

凡 例

1. 本書は、令和4年度から7年度にかけて、以下の目的を掲げて調査した福島県浜通りのお浜下りをまとめた報告書である。
 - 1) 「記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財」として選定を受けた「浜通りのお浜下り」に関して悉皆的な調査を行い、祭礼の現状を総括的ならびに具体的に把握するとともに、その保存を図る。
 - 2) 浜下りの存する、新地町、相馬市、南相馬市、飯舘村、浪江町、双葉町、大熊町、富岡町、楡葉町、広野町、いわき市の11市町村および福島県が協働して調査事業を行うことで、浜通り全域の無形民俗文化財保護に関する意識の高揚を図り、地域文化の活性化につなげられるようにする。併せて、東日本大震災および関連事故等で大きな被害を受けた市町村の復興に資することができるようにする。 →このあたりは、序文や例言の内容によっては省く
2. 目次では、同じ神社（仏堂）名が同市町村に複数ある場合は正式名称のあとに所在地を（ ）内に記した。
3. 第Ⅰ章 概説に掲載した津波浸水域と掲載神社の図には、掲載神社（仏堂）名と掲載項を〔 〕内に記した。

掲載神社一覧は、市町村を北から所在地ごとに郵便番号順、住所の50音順を基本に並べた。
4. 第Ⅱ章 詳細調査、第Ⅲ章 概要調査、第Ⅳ章 基本調査では、

市町村名、神社（仏堂）名を冒頭に記し、以下、(1) 神社（仏堂）の概要、(2) 祭りの名称、(3) 祭りの由来、(4) 祭日、(5) 伝承団体、(6) 神幸経路、(7) 祭りの内容、(8) 祭礼の状況、(9) 芸能等、(10) 関連資料の順に調査内容をまとめ、最後に参考文献・資料を記載した。

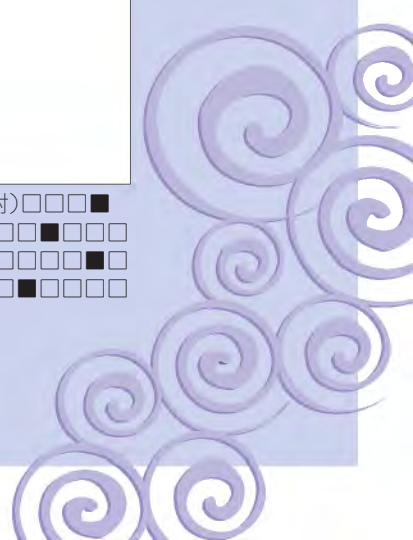
 - 1) 伝承団体のうち、祭りを執り行う宮司の本務社を記載した。
 - 2) 神幸経路図は、おもに国土地理院地図の地理院タイル（淡色地図）を加工して作成した。それ以外の地形図を使用した場合は、それぞれ図の下に明記した。

また、仏堂の浜下りでも経路図は便宜上「神幸経路」と表した。
 - 3) 関連資料の掲載においては、適宜、句読点をつけた。また、字数を推測しうる不読箇所は、□ □で表し、字数不明の場合は□ □で表記した。また、助詞の「江」や「者」も文字の大きさを変えずに掲載した。
 - 4) 執筆者名は、第Ⅱ章 詳細調査、第Ⅲ章 概要調査においては参考文献のあとに、第Ⅳ章 基本調査では神社（仏堂）名のあとに記した。
 - 5) 写真説明のうち、（ ）内には撮影場所や撮影年月日、提供者名等を記した。また、写真の撮影者名は調査員や執筆者の場合は氏名を省いた。
5. 巻末に協力機関および協力者を掲載した。

第I章 概説



(浜通り13市町村、お浜下り11市町村) □□□■
□□□□■□□□□■□□□□■□□□□■□□□
□■□□□□■□□□□■□□□□■□□□□■□
□□■□□□■□□□□■□□□□■□□□□■
■□□□□■□□□□■□□□□■。



第1章 概説

1.調査の方法

資料② アンケート回答率

市町村	回答/送付
新地町	2/2
相馬市	6/7
南相馬市	12/14
飯舘村	2/3
浪江町	3/5
双葉町	3/3
大熊町	1/1
富岡町	2/2
檜葉町	2/2
広野町	2/2
いわき市	38/40
合計	73/82
回答率	89.0%

資料③ 浜下りの状況

浜下り状況	件数
供・渡	38
供・(渡)	17
渡	14
供	6
(供・渡)	22
(渡)	7
全体	104

資料④ 「浜下りをする

市町村名	件数
新地町	3
相馬市	7
飯舘村	1
南相馬市	17
浪江町	2
双葉町	2
大熊町	1
富岡町	2
檜葉町	3
広野町	2
いわき市	64
全体	104

令和4年実施

本調査の対象を、歴史・文化的、また地理的な背景を踏まえて、「相馬地域(新地町・相馬市・南相馬市・飯舘村)」、「双葉地域(浪江町・双葉町・大熊町・富岡町・檜葉町・広野町)」「いわき地域(いわき市)」の3地域に分けて調査を行い、記録を作成することにした。

まず、現状を把握するために、福島県神社庁の協力を得てアンケートを実施した。浜通りにある神社の宮司諸氏に対し、本務・兼務を含めて「浜下り」を実施するかどうか等を尋ねた(資料①アンケート用紙縮小)。アンケートを送付した神社数は82件、89%の回収率であった(資料②)。

これまでの研究等の成果を踏まえ、「浜通りのお浜下り」とは、「祭礼等において、(神仏に)潮水を供えるまたは、神輿等が浜まで下りる、またはその両方を行う」習慣とした。沖縄等のように、「人」が行う「浜下り」もわずかに確認されたが、今回はそれについては取り上げない。

アンケートでは、「潮水を供える・渡御する(神輿が浜まで行く。以下同じ)【供・渡】」「潮水を供える・渡御した【供・(渡)】」「渡御した【渡】」「潮水を供える【供】」「潮水を供えた・渡御した【(供・渡)】」「渡御した【(渡)】」の6タイプのどれに該当するかについて質問した。その結果、アンケートでは104件の「浜下り」が確認された(資料③)。さらにそれを自治体別にしたものが、資料④である。なお、調査により最終的に「浜通りのお浜下り」は、今回158件確認された。

この調査結果をもとに、3地域ごとに4人ずつの調査委員並びに調査員を配置し、令和4年から令和7年にかけて調査を行った。しかし、「浜通りのお浜下り」が選択された令和2年は、新型コロナウイルス(COVID-19)のパンデミックが始まった年で、人が集まるような行事に対しては、「密を避ける」として自粛ムードが広がり、「浜下り」を伴う祭礼も次々と中止、または簡略化されていた。震災等による変化に加え、こうしたコロナ禍の影響も受け、より簡素化される祭礼も増えたなか

での調査となった。さらに、震災等により避難指示が出された市町村では、住民が戻らない・戻れない状況が続いている。かつての祭りの様子について住民に聞き書き調査をしようにも、話者の手配がつかないというケースも少なくなかった。そのため、できるだけ地域資料の掘り起こしに務め、情報を補完するようにしたが、津波で資料はもとより社殿や集落そのものまで流されているところもあり、11 市町村の情報量には偏りが見られることになったことは否めない。また、12 年周期などで行われる祭礼もあり、これについては調査期間中に調査はできないため、過去に行われた調査の資料等をもとにした。

2.地域の外観

(1)地理的環境

福島県の浜通りは、阿武隈山地と海岸との間に、帯のように広がる低平地である。南端のいわき市から北端の新地町まで、延長約 160 キロメートルあり、海岸線は、直線状の単調な形状となっている。北部の相馬地域と南部のいわき地域は、比較的長い砂浜が広がっているが、中部の双葉地域では海岸線まで丘陵が迫って崖となっている。また、この沿岸には、阿武隈山地から、二級河川の真野川、新田川、請戸川、木戸川、夏井川、鮫川等が注ぎ込んでおり、浜通りの人々の生活を支え、田畑を潤してきた。

気候は、寒冷かつ豪雪で知られる東北地方としては例外的である。風向は、年間を通じて陸から海に向かう北西風が最も多いが、夏は逆に海から陸に向かう南西の風が多いため涼しい。一方、冬には北西の風が強いものの、晴天となる日が多く、また降雪もほとんど見られない。

浜通りは、温暖型作物の北限や寒冷型作物の南限となっているものも多く、米や、様々な野菜・果樹栽培などの農業が盛んで、昨今ではみかんやバナナなどの果実等の栽培も話題になっている。また、福島県沖で寒流(親潮)と暖流(黒潮)が交わり良好な漁場となっていることから、沿岸部には漁港が点在し、ノリの養殖業や、かまぼこや鰹節などの水産加工業も盛んである。工業は小名浜港を擁するいわき市で特に盛んで、工場出荷額についていえば、いわき市は東北で最大の規模を誇っている。なお、双葉郡で稼働していた二つの福島原子力発電所は、事故後に廃炉が決定しているが、その作業は難航している。

浜通りを縦断する道は、かつて「浜街道」と呼ばれていた。これが明治 5(1872)年に「陸前浜街道」と称されることになり、現在の国道 6 号線がその道筋を受け継いでいる。これに沿うようにして敷設されたのが常磐線であり、常磐自動車道である。常磐線(いわき～仙台間)は、震災等により線路や駅舎流出などに加え、原子力災害の避難区域が設定されたことにより、双葉郡域を中心に一部区間不通の時期が続いた。全線復旧したのは、令和 2(2020)年 3 月 14 日のことである。それに対して、常磐自動車道は、震災後に開通工事が一気に加速した。平成 16(2004)年には、暫定 2 車線で富岡 IC までは開通していたが、仙台までの延線はなかなか実現しなかった。しかし震災後、工事が急速に進められ、震災の翌年平成 24(2012)年には南相馬 IC - 相馬 IC が開通、平成 26(2014)年には、震災等により通行止めとなっていた広野 IC - 常磐富岡 IC が 3 年ぶりに再開通し、仙台までの全線が開通した。

(2)歴史的環境

今日に見るような「浜通りのお浜下り」が、いつごろから始まったのかは定かではない。しかし、『奥相志』[\[1\]](#)やわずかに残された古文書などから、少なくとも近世まではさかのぼることができそうである。

近世の浜通りは、相馬氏の支配する北部と、岩城氏の支配した南部とから始まる。

まず、北部地域の宇多・行方・標葉の三郡は、中世以来相馬氏が支配していた。相馬氏は、関ヶ

原の戦いをめぐって一時領地没収となるものの、申し開きの末に最終的には三郡が安堵されることになった。一度の国替えもなく相馬中村藩の支配は幕末まで続くが、お家断絶や天明・天保の大飢饉など、大きな危機にも何度か見舞われている。特に天保の飢饉は、天明に劣らぬ大凶作となった。そこで様々な救済策をとりながら、北陸からの浄土真宗門徒の移民招致と、二宮尊徳の「興国安民の法(ご仕法)」を導入して効果を上げ、国力の回復に努めた。人の和を尊び、勤労に励み、質素儉約に勤めるという精神を重視した「ご仕法」は、人々に与えた精神的な効果も大きかったといわれる。また、明治以降、ほとんどの藩士が帰農し、相馬藩の実質はその後も保持された。

一方、南部地域の檜葉・磐城・磐前・菊田 4 郡の地域は、中世以来岩城氏の支配するところであった。しかし、岩城氏も関ヶ原の戦いには応じず、そのために改易となる。そこで下総から鳥居忠政が磐城平藩へ入封するが、鳥居氏は元和 8(1622)年には転封となってしまふ。代わって、上総から内藤政長が入封し、内藤氏支配の泉藩・湯長谷藩も成立する。その内藤氏も延享 4(1747)年には延岡に転封、続いて井上正経が笠間から入封するが、ここから磐城地方の一円支配は崩れ、磐城平藩を中心とした三藩のほか、幕府領、棚倉藩領、笠間藩領などの飛び地が錯綜する領域となった。その後、宝暦 6 年(1756)年に、安藤信成が磐城平藩へ入封し、幕末まで安藤氏の支配が続くが、その支配地や石高には変化がみられた。

戊辰戦争において、浜通り地域の諸藩は会津藩に呼応して戦ったものの、新政府軍に次々と制圧され、8 月上旬には壊滅する。

近代以降、浜通りの開発に大きな影響を与えたのが、常磐炭鉱である。常磐炭鉱は江戸末期から採掘がおこなわれていたが、本格的な近代的な炭鉱としての歴史は、中央資本と地元資本とが組合出資し、「磐城炭鉱社」を設立した明治 6 年ごろからとされる。さらに、西南戦争によって九州からの石炭供給が滞るようになると、需要の高まりから大資本による会社設立が相次ぐようになる。これらの企業による近代的な機械技術、また常磐線の開通による大量輸送が可能になったことにより、採掘量は飛躍的に増大した。戦後も国土の復興に大きな役割を果たした石炭産業だったが、昭和 30 年代後半の炭鉱合理化政策により衰退の一途をたどり、昭和 51 年には閉山を余儀なくされる。

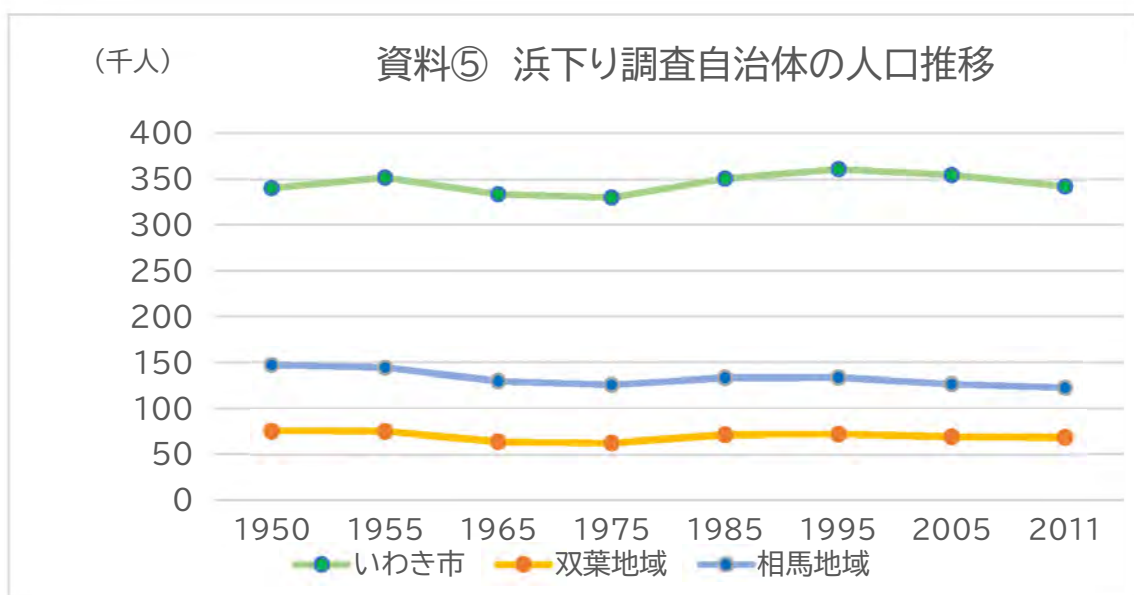
一方、高度経済成長政策は、浜通りの諸地域にも大きな影響を与えた。池田内閣は「所得倍増計画」に基づいて工業の地方分散政策を進めたが、浜通りでは「新産業都市」に常磐地区が、「低開発地域工業開発地区」に相馬が指定された。こうした政策等により、磐城(現小名浜)と勿来では、小名浜港を活用した重化学工業を中核として開発がすすめられていく。急激な経済発展の一方で、農林水産業の従事者は減少し、大量の人口移動が工業地域に向けて行われ、農業の兼業化も進んだ。さらに、急激な開発と工業化は、環境を著しく破壊し、深刻な公害を引き起こした。特に重化学工業が密集する小名浜や勿来では、藤原川、鮫川、またその河口においてカドミウムや水銀などによる水質汚濁が進み、農業や漁業に大きな被害を及ぼした。なお、鮫川河口近くにある御宝殿熊野神社の祭礼では、深夜の眠気覚ましのために稚児の禊が行われていたが、このころから行われなくなっている。そのほかにも、大気・土壌汚染、騒音、振動、悪臭等、浜通り地域は福島県内で最も公害苦情件数の多い地域となった。

石炭産業が衰退していった一方で、原子力発電が新しい希望のエネルギーとして注目を集めるようになっていく。火力発電にくらべてコストパフォーマンスがよく、燃料となるウランは比較的安定して確保できる。昭和 48(1973)年のオイルショックで資源がないことを改めて思い知らされた日本人にとって、原子力発電がとても魅力的に見えたことは否めないだろう。そうした潮流の中で、国の原子力政策の拠点のひとつとなったのが、双葉郡であった。双葉地域は、相馬やいわき地域と異なり、台地上にあって海への出入りが少ない。さらに、開発の進む相馬・いわきからはやや離れ、高度経済成長の開発の流れには乗り切れていなかった地域であった。

東京電力は、大熊町と双葉町にまたがる敷地に福島第一原子力発電所を建設し、昭和46(1971)年に運転を開始した。さらに、富岡町と楡葉町にまたがる敷地には福島第二原子力発電所が建設され、昭和57(1982)年に稼働する。これにより、福島県は水力・火力・原子力を備えた日本最大の「発電県」となり、首都圏の電力の供給源となった。震災前の平成22(2010)年のデータによれば、福島県内の発電状況は、東京都・埼玉県・千葉県・神奈川県に対して、その消費電力の約3分の1を供給していたとされる【2】。こうして、双葉地域は、各種の補償や固定資産税、電源三法交付金等の恩恵と引き換えに、安全性への不安を抱えながら「電力供給地」として歩み始めることになった。

やがて浜通りの諸地域は、バブル期を経て経済低迷の時代が続く中、平成23(2011)年3月11日を迎えることになる。

(3)東日本大震災・原発災害の前後と現在



震災等以前の人口の推移についてまとめたものが、資料⑤【3】である。基本的に浜通りの人口は、戦後から減少傾向にあった。すでに述べたように「新産業都市」として指定されたいわき市に人口は集中し、相馬地域はゆるやかな減少を続けていた。さらにいわき市を含め、少子高齢化が進行し、平成22年時点で、年少人口は13%、また高齢化率は25%を超えて「超高齢社会」が到来していた【4】。過疎化も進み、「浜通りのお浜下り」のみならず、様々な祭礼等の継承が難しくなっていたのである。

震災等によって、浜通りの沿岸部には甚大な被害が出た。まず人的な被害は、資料⑥【5】のとおりである。関連死が非常に多く、いかに原子力災害による避難生活等が過酷であったかを物語っている。3月11日の夜以降、東電福島第一原発の事故により、避難指示の対象が拡大し、12

資料⑥

「浜下り」調査実施自治体の東日本大震災による人的被害

市町村	直接死	関連死	死亡届等	計
新地町	100	9	10	119
相馬市	439	29	19	487
南相馬市	525	521	111	1,157
飯館村		42	1	43
浪江町	151	445	31	627
双葉町	17	160	4	181
大熊町	12	132		144
富岡町	18	456	6	480
楡葉町	11	145	2	158
広野町	2	46	1	49
いわき市	293	138	37	468
合計	1568	2123	222	3,913

R7.9.8現在

日夜には半径20キロメートル以内に
住む人々は、救助や捜索活動を中断
し、着の身着のまま避難せざるを得な
かった。地震や津波による直接死が
多いのもこのためである。避難指示
等の区域は、平成23年(2011)4月
時点で県土の約12%を占めていた
が、令和6年(2024)3月時点で約
2.2%にまで縮小された。しかしなが
ら、南相馬市、飯舘村、浪江町、双葉
町、大熊町、富岡町にまたがる約309
平方キロメートルの地域においては、
いまだ帰還困難とされている(資料⑦
避難指示等の経緯転載)【6】。

市町村	死者 行方不明者の 対人口比	住宅被害		浸水範囲 の被害 事業所	農業被害 被害 面積率
		全壊 (棟)	半壊 (棟)		
新地町	1.4%	439	138	85.9%	32.6%
相馬市	1.3%	1,004	833	34.2%	33.5%
南相馬市	1.6%	2,323	2,430	18.7%	32.4%
飯舘村	0.7%		1		
浪江町	3.0%	772	2,384	22.0%	13.5%
双葉町	2.6%	103	14	21.2%	19.5%
大熊町	1.3%	322	2,994	37.3%	6.2%
富岡町	3.0%	375	4,089	28.1%	7.0%
檜葉町	2.1%	147	1,218	67.7%	24.6%
広野町	0.9%	160	593	73.4%	27.4%
いわき市	0.1%	4,644	32,921	19.7%	5.3%

次に、津波による浸
水は、世帯の約12%、
事業所で約24%が被
害を受けたといわれ
る。特に北端の新地町
で大きく、世帯の約
57%、事業所の約
86%が被害を被った。
事業所の浸水におい
ては、広野町や檜葉町も
7割前後の被害を受け
ている【7】(資料⑧・第
1章「津波浸水域と掲
載神社」参照【8】)。

資料⑨ 浜通りの人口(令和2年国勢調査確定値に基づく推計)

地域	人口 R4.4.1	構成比			人口 震災前 (H22.10.1)
		年少人口 0~14歳	生産年齢人口 15~64歳	老年人口 65歳以上	
		新地町	7,807	12.6	
相馬市	34,063	12.0	55.7	32.3	37,817
南相馬市	57,692	8.8	53.3	37.9	70,878
飯舘村	963	0.2	30.4	69.3	6,209
浪江町	1,122	4.3	69.1	26.5	20,905
双葉町	-	-	-	-	6,932
大熊町	-	-	-	-	11,515
富岡町	1,582	4.4	76.4	19.2	16,001
檜葉町	3,609	7.8	54.3	37.9	7,700
広野町	5,338	8.1	58.8	33.1	5,418
いわき市	326,917	11.4	56.3	32.3	342,249

震災等から、すでに
15年がたとうとしてい
る。現在の人口につい
ては資料⑨【9】、避難指示が出された地域の居住状況については、資料
⑩【10】のようになっている。なおここでいう居住率とは、住民票を置き、
実際に区域内に住んでいる人の割合である。比較的早い時期に避難指
示が解除になった地域は、人口も震災前の水準に戻りつつあるが、現在
でも帰還困難区域を包含する市町村では、依然として帰還は進まず、避
難先に定住することを選んだ住人も少なくない。

注1)大熊町及び双葉町については、人口(男女の内数を含む)または世帯数の推
計値にマイナスとなる項目があるため、自然動態及び社会動態のみ表章している。

人口水準が戻りつつある地域においても、少子高齢化は急激に進んで
おり、浜通りの人口の3人に1人は高齢者という状況である。祭礼の執
行役員や、神輿の担ぎ手、芸能の担い手、すべてにおいて高齢者が中心
となっている。高齢化や少子化、人手不足により、継承を中断するケース
も見られたなか、さらに今度は新型コロナウイルス感染症(COVID-19)
の流行に見舞われてしまった。これにより、一層簡略化が進み、中断や廃

市町村	居住率
南相馬市 (小高区等)	62.9%
飯舘村	33.0%
浪江町	14.5%
双葉町	1.9%
大熊町	6.5%
富岡町	20.4%
檜葉町	67.5%
広野町	90.7%

(2024年2月末時点)

絶を選択する地域もあり、「浜通りのお浜下り」はその存続の危機にある。

註

1. 『奥相志』は、相馬領 3 郡の歴史や、各郷・村ごとの詳細な地理や歴史などについて、中村藩がまとめたものである。1857 年(安政 4)に編纂が開始されたが、事業半ばで明治となり、全領内はまとめきれずに終わった。そのため南標葉郷と山中郷が欠けている。原本は、相馬市指定有形文化財(書跡)である。

2. 福島県『東日本大震災の記録と歩み』2013 p78

3. データ出典:「市町村別人口各年 10 月 1 日現在」より作成

/福島県 Web <https://www.pref.fukushima.lg.jp/sec/11045b/15847.html>

4. 福島県の推計人口(福島県現住人口調査) 月報(平成 23 年 3 月 1 日現在)

5. データ出典:平成 23 年東北地方太平洋沖地震による被害状況即報(第 1801 報)をもとに作成(福島県 Web <https://www.pref.fukushima.lg.jp/site/portal/shinsai-higaijokyo.html>)

なお、表中の「死亡届等」とは、「明確に死亡が確認できる遺体が見つからないが、死亡届等が出されている者」である。

6. 福島県 企画調整部 復興・総合計画課『ふくしまの現在(いま) 復興・再生のあゆみ(第13版)』2024 (福島県

<https://www.pref.fukushima.lg.jp/uploaded/attachment/637690.pdf>)

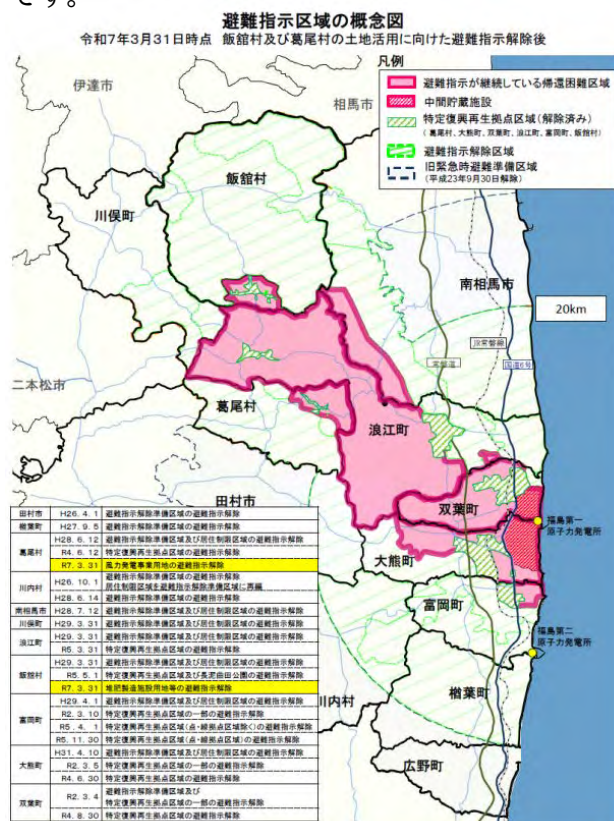
【資料⑦】避難指示の経緯については、

<https://www.pref.fukushima.lg.jp/site/portal/cat01-more.html>

のページにある平成 23 年 4 月 22 日のこの図と



令和7年3月31日のこの図を載せられれば載せてください。載せられなければ、カットでOKです。



7. 衛藤英達 『統計と地図で見る 被害日本大震災被災市町村のすがた』財団法人日本統計協会 2012
8. データ出典:「死者・行方不明者の対人口比」「住宅被害」については、註 7 前掲書をもとに、「浸水範囲の被害」「農業被害」については、註 8 前掲書をもとに作成した。
9. データ出典: 福島県の推計人口(福島県現住人口調査) 月報(令和4年4月1日)より作成
10. データ出典: 註 6 前掲書

参考文献

- 丸井佳寿子・工藤雅樹・伊藤喜良・吉村仁作 『福島県の歴史』 山川出版社 1997
- いわき市 『磐城平城分検討調査報告書』 2022
- 譽田宏・吉村仁作(編) 『街道の日本史 13 北茨城・磐城と相馬街道』 吉川弘文館 2003
- 新福島風土記刊行会 『福島県の歴史と風土』 創土社 1978
- 小林清治 編 『図説 福島県の歴史』 河出書房新社 1989
- 福島県 『東日本大震災の記録と歩み』 2013
- 福島県 Web サイト「海岸の情報」
<https://www.pref.fukushima.lg.jp/sec/41390a/kaiganzyouhou.html>(2025.09.27 参照)
- 国立研究開発法人 森林研究・整備機構 森林整備センターWeb サイト「地勢・地質・気候(福島県)」

https://www.green.go.jp/seibi/kanto/chisei_chishitsu_kiko/fukushima.html#.

<https://www.pref.fukushima.lg.jp/sec/11045b/15847.html> データ

<https://www.pref.fukushima.lg.jp/sec/41045a/kaiganhozen10.html>

福島県総合計画(2022▶2030)

<https://www.pref.fukushima.lg.jp/sec/11015b/comprehensiveplan2022-2030.html>

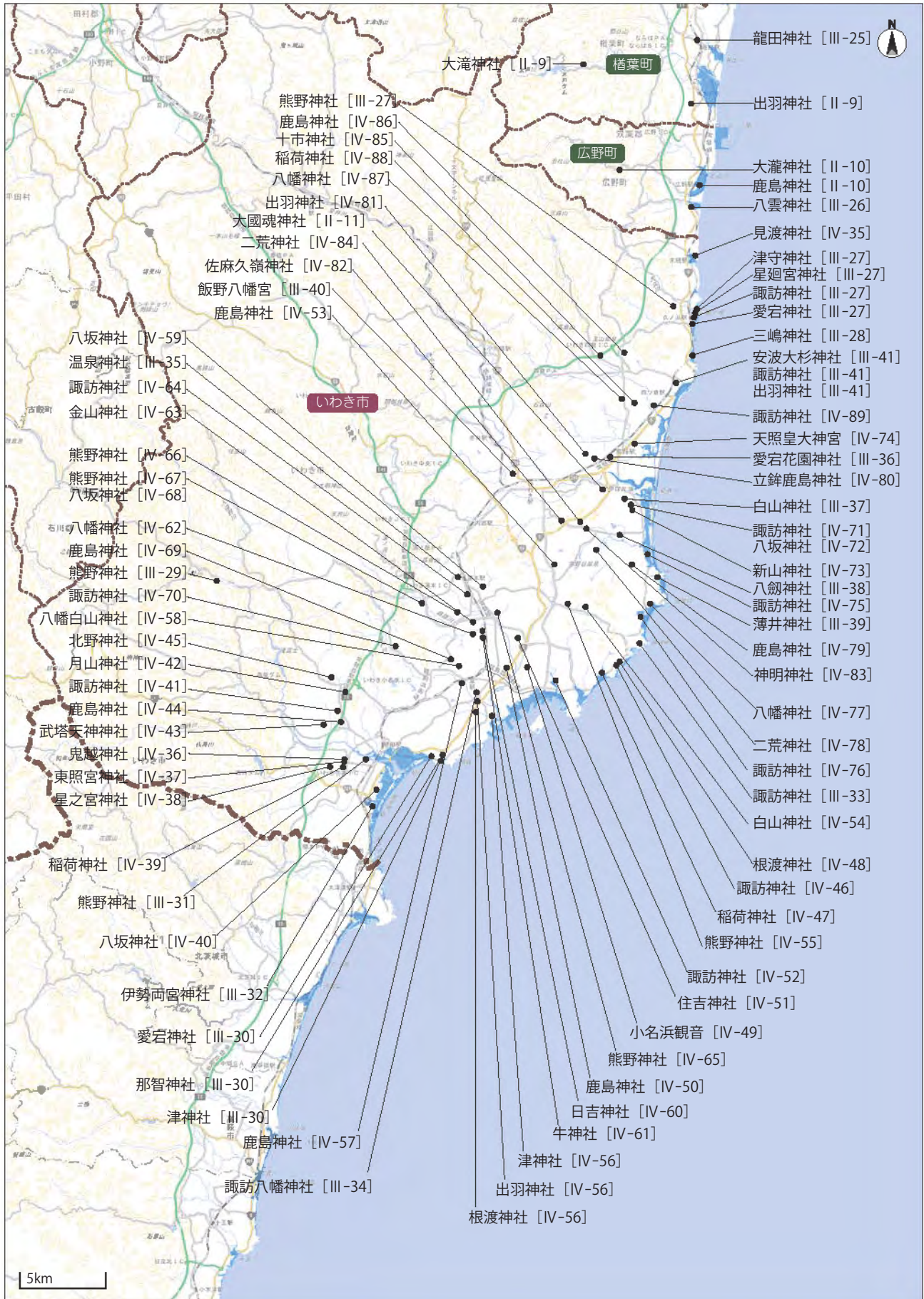
11. 『奥相志』は、相馬領 3 郡の歴史や、各郷・村ごとの詳細な地理や歴史などについて、中村藩がまとめたものである。1857 年(安政 4)に編纂が開始されたが、事業半ばで明治となり、全領内はまとめきれずに終わった。そのため南標葉郷と山中郷が欠けている。原本は、相馬市指定有形文化財(書跡)である。
12. 福島県『東日本大震災の記録と歩み』2013 p78
13. データ出典:「市町村別人口各年 10 月 1 日現在」より作成
/福島県 Web <https://www.pref.fukushima.lg.jp/sec/11045b/15847.html>
14. 福島県の推計人口(福島県現住人口調査) 月報(平成 23 年 3 月 1 日現在)
15. データ出典:平成 23 年東北地方太平洋沖地震による被害状況即報(第 1801 報)をもとに作成(福島県 Web <https://www.pref.fukushima.lg.jp/site/portal/shinsai-higaijokyo.html>)
なお、表中の「死亡届等」とは、「明確に死亡が確認できる遺体が見つかっていないが、死亡届等が出されている者」である。
16. 福島県 企画調整部 復興・総合計画課『ふくしまの現在(いま) 復興・再生のあゆみ(第13版)』2024 (福島県 [ダミー](https://www.pref.fukushima.lg.jp/uploaded/attachment/637690.pdf)
<https://www.pref.fukushima.lg.jp/uploaded/attachment/637690.pdf>)
【資料⑦】避難指示の経緯については、
<https://www.pref.fukushima.lg.jp/site/portal/cat01-more.html>
のページにある平成 23 年 4 月 22 日のこの図と



令和 7 年 3 月 31 日のこの図を載せられれば載せてください。載せられなければ、カットで OK です。



図1 津波浸水域と掲載神社 新地町～榎葉町



樫葉町～いわき市 * 国土地理院発行2.5万分1地形図（東北地方太平洋沖地震津波浸水域範囲および淡色地図タイトル）を加工して作成

第Ⅱ章

詳細調査



1. 新地町 安波津野神社

(1) 神社の概要

名 称／安波津野神社 通称：アンバサマ

所在地／相馬郡新地町谷地小屋字釣師 釣師浜漁港

震災前は^{おおどはま}大戸浜字^{はまみなみ}浜南にあったが、平成23年（2011）3月、東日本大震災の津波による損壊につき、同28年（2016）に現在地に移転した。

由 緒／「津野神社」に関しては『宇多郡村誌』（明治17年〔1884〕）にあるが、鎮座地は浜畑ではなく、アンバサマは大戸浜にあって、通称では「津野神社」とは呼んでいなかった。ただし、アンバサマは「移動をしてあるく神様」であり、以前は浜畑に祀られていたというような伝承はある。

アンバ信仰は、近世の流行神であり、民間信仰でもあり、本社は茨城県^{いなしき}稲敷市にある大杉神社である。東北太平洋岸に分布しているが、土地の神社に「間借り」をしていることが多く、ご神体が神輿そのものであるという伝承が強い。

当社の浜サガリもアンバサマとして実施しており、津野神社の祭典ではない。なお、『新地町史』自然・民俗編（1993）では、釣師の水神社の祭りとしているが、ここに神輿が立ち寄ることもあったものの、この神社の祭礼ではない。

(2) 祭りの名称

アンバサマ

(3) 祭りの由来

各地のアンバサマの祭礼と照らし合わせると、大漁祈願と海上安全が、その祀った理由である。なお、神輿が浜に下ろされるのは、水神社の祭りとして複合されている11月3日の祭日だけでなく、臨時に浜に祀られることもあった。それは、カレイ、ホッキ貝、シラウオなどの漁の仕事が疲れてくると、誰かれとなく示し合わせたように「そろそろアンバサマが下がるころだなあ」と言い合い、ほどなくして、漁協の青年会の幹部たちが山に行って門松を伐ってきて、夜のうちに浜の中央に和船の櫓や帆柱、ホッキ漁に使うマンガなどを重ね、その上に門松を立てておいた。さらにアンバサマの神輿を上げておくと、「アンバサマが下がったから休みだ」と言って、翌朝は海に出る船はなかった。これは戦後も行われていて、最後は神主が来てお祓いをしてから、皆で片づけたという。これは、福島県各浜のアンバ信仰にみられる習俗である。

(4) 祭 日

毎年11月3日であったが、新地漁業協同組合の青年部が少なくなるとともに、神輿を担ぐことができず、平成13年（2001）から神輿を担ぐ祭りは5年に1度になった。

(5) 伝承団体

諏訪神社（Ⅲ-1）宮司、相馬双葉漁業協同組合新地地区（主催者は新地漁業協同組合と、おもに組合青年部：組合員55歳までの組織）。

(6) 神幸経路（図1、以下は昭和41年〔1966〕頃の祭日のようす）

神幸地／相馬双葉漁協新地地区（谷地小屋字浜畑。現在は同所に移転、浜サガリはない）

神幸経路／安波津野神社→漁協前（神事）→M家前→H家前→中磯浜（神事、神楽、昼食：写真3・4）→安波津野神社→漁協前（震災後一度行った浜サガリには中磯まで下りていない）。

漁業（漁協）関係者の家に立ち寄るようなコースをとる。

(7) 祭りの内容

潮水の扱い／青年部長が釣師浜から潮水を汲んできて、漁協前に鎮座されている神輿の前に捧げる



図1 安波津野神社の神幸経路（昭和41年頃） *昭和62年7月20日国土地理院発行2.5万分1地形図を加工して作成

実施内容／潮垢離は、青年部長のみが潮水を汲むときに行う。このことをオシオトリと呼んだ。

行列の順序は、宮司（以前は水神社の宮司。死後に諏訪神社の宮司に代わりを依頼している）→シオマキ（青年部の幹部、升に入れた塩をまく）→紅白の団扇（漁協の幹部、神輿を煽る）→神輿→鏡（漁協組合長）→棟札（漁協代表理事）→大榎（漁協幹部）→金幣（金の幣束、漁協幹部）→白幣（漁協幹部）→五色の布を付けた榎（漁協幹部2人）→小さいほうの白い幣（小型船組合長）→白幣の台（青年部長）→幟旗（部長）→五色の幟旗（一般の年寄り）→神楽のお先祓い→天狗（写真5）→オカシラ（獅子）→太鼓→船名を書いた幟旗（40艘分の旗があり、その他の年寄りなどが持つ）。宮司は神輿が安置されるごとに祝詞を上げる。神輿が安置される「休み場」には、四方に笹竹をめぐらす。

- 祭り当日は、釣師港の船は漁をできずに船止めする。日が昇る前から船ごとに大漁旗を揚げ、満艦飾にする。
- 行列には、組合の漁船に関わる者は乗子（乗組員）も含め、全員が参加することになっていた。
- 漁協の幹部は、羽織袴に紋付をはおり、羽織の背に榎を挿して歩く。
- 行列の神輿は、漁業者の家を中心に立ち寄るが、そのときに神輿を上下に揺らす。これを「練る」と呼んでいる。迎える家では、お神酒2升と米1升とご祝儀1万円を、玄関に置いた机の上に乗せて待っていた。米は3俵くらいに集まったが、酒と共にこれらを漁協の倉庫に保管しておき、混ざり米なので、あとで必要な人に安く譲った。
- 浜サガリは、最後に神輿が漁協前に安置されたあとに行うが、なかなか安置しないのが常套であった。神輿をおさめたあと、それまで神輿を担いでいた青年部が裸になって、小さな榎神輿を担いで、釣師浜の波打ち際に入っていく（写真6）。このときも、なかなかオカに上がらないために、

ロープを樽神輿に結び付けて、ほかの者が引っ張って戻した（写真7）。

（8）祭礼の状況

神輿の行列は、六尺が少なくなるにつれ、リヤカーに乗せ、次には車に乗せて歩くようになった。

平成23年の東日本大震災で神社の拝殿と神輿が破壊され、その年は中止。その後、防潮堤工事により、同28年に現在地に移転。拝殿と神輿は支援により新調した。平成28年に神輿の浜下りを1度行ったが、現在では、毎年11月3日の神事のみを施行している。

（9）芸能等

以前は釣師浜集落に青年会の「神楽部」に10人くらいがおり、これが協力をしたが、漁協関係者や漁師は当初からメンバーに入っていない。祭礼には獅子舞を中心とする。神楽はこの近辺の集落に、それぞれ伝えられていた芸能で、新地町ではほかに、福田・高田・今泉・釣師浜にあった。この「神楽部」は、浜での盆踊りのときの笛吹きや太鼓としても招かれていた。この神楽は震災前から、「神楽部」の人員減少のため、加わらなくなっていた。

浜サガリのあと、漁協の荷捌き場で舞台をかけ、「隣組」対抗で演芸大会を競った。「隣組」は釣師浜・大戸浜・中磯で6組あった。のちには舞台をかけずに、トラックの荷台を用いた。

（10）関連資料

—

参考文献・資料

福島県史料集成編纂委員会『宇田郡村誌』福島県史料集成 第3輯（1952）

新地町史編纂委員会『新地町史』自然・民俗編（1993）

川島秀一『漁撈伝承』法政大学出版局（2003）

川島秀一『春を待つ海—福島震災前後の漁業民俗』富山房インターナショナル（2021）

【川島秀一】



写真1 かつての釣師浜の集落と大戸浜のアンバサマ（S63.5.1）



写真2 神輿の巡行（大戸浜地区 S41頃 相馬双葉漁業協同組合新地地区）



写真3 中磯の「休み場」（S41頃 相馬双葉漁業協同組合新地地区）



写真4 浜で奉納される神楽（S41頃 相馬双葉漁業協同組合新地地区）



写真5 行列と神楽（中磯地区 S41頃 相馬双葉漁業協同組合新地地区）



写真6 神輿を海の中へ担ぎ入れる（S41頃 相馬双葉漁業協同組合新地地区）



写真7 ロープで海から引き戻される神輿（S41頃 相馬双葉漁業協同組合新地地区）



2. 相馬市 稲荷寄木神社

(1) 神社の概要

名称／稲荷寄木神社

所在地／相馬市磯部字大浜320

由緒／当社には漂着神伝承が付随する(写真1)。神社の縁起は中村藩の地誌『奥相志』や寄木神社別当の寺島家に伝わる「磯部村寄木大明神縁起」、民間の口伝などがある。

寄木神祠、或は圭木神という。(中略) 牡鹿郡寺島の出身で佐藤伊勢の小人(下僕)となった寺島三郎という者がいた。寺島はのちに引退して漁師になり古磯部に住んだ。漁をしているとき不思議な古木が網にかかる。その夜のことで、この古木を箱に納め釘を打って閉じ藁薦で覆えとの神託を受けた。天正十三年乙酉年春某月のことで、それを機に祠を建てて寄木明神として祀るようになり、三郎は市大夫と改名し寄木明神を信奉した(『奥相志』「磯部邑」)。

「別当」とよばれる寺島家に伝わる卷子「磯部村寄木大明神縁起」は、末尾に文政三年に「再写」した旨の添え書きがある。暦応2年(1339)7月下旬の頃、当国磯部村の漁師与五作が海に出て網を下ろしたところ、5、6尺ばかりの古木が網にかかった。投げ捨てても網にかかること3度、立腹した与五作は砂浜にこの古木を放置したが、夜になるとこの古木が白昼のような光を放った。奇譚に驚いた与五作はこれを寄木明神として祀り、のちに寺嶋市太夫と名乗って神職となった。また神託によって与五作は伊勢参宮をし、伊勢の旅で求めた獅子頭を寄木明神の神前に奉じ、これを「お伊勢神楽」と称するようになった。古木は伊勢国磯部から流れ着いたものであった(寺島家蔵「磯部村寄木大明神縁起」)。

寄木神は後年稲荷神と併せ祀られるようになり、近年は台畑の金比羅神社も境内地に遷されてご遷宮に加わるようになった。

(2) 祭りの名称

ご遷宮、お浜おり、お浜くだり。

(3) 祭りの由来

網にかかった古木は、伊勢国の磯部から伐採した木の根が流れ着いた、という伝承が「遷宮」を示唆するが、浜下り、遷宮の由来を直接示すものではない。

(4) 祭 日

例祭は4月15日である。10月第一土曜日には「お衣替」と称し、寄りついたご神体を納めた厨子の薦を別当が編んで着せ替える神事がある。もともと祭日は旧暦3月15日で、寄木を祭りはじめたのがこの日だといわれていた。

「ご遷宮」「お浜おり」は亥年ごとに実施し、直近の平成31年(2019)亥年の「御遷宮」は「第57回」と数えた。残された祭礼の記録によれば遷宮祭は昭和5年(1930年午年)、同22年(1947年亥年)、34年(1959年亥年)、46年(1971年亥年)、58年(1983年亥年)に行われており、亥年の実施は古くからのことではないかもしれない。前々回の亥年遷宮祭は平成19年(2007)で、3月24日が前夜祭、3月25日遷宮祭本祭り、3月26日が後祭りであった。平成31年は3月30日前夜祭、3月31日本祭り、後祭りは4月1日である。近年は3月最終日曜日を遷宮祭に充てているが、4月の例もある。

(5) 伝承団体

恵比須太神宮(柏崎)宮司が稲荷寄木神社宮司を兼務していたが、恵比須太神宮宮司逝去後は八坂神社(小泉)宮司が兼務。

寄木神社だけではなく、合祀されている稲荷神社、境内に遷した金比羅神社の遷宮も同時に行うた

め「稲荷神社、寄木神社、金比羅神社遷宮祭実行委員会」を組織して実施する。会長は稲荷寄木神社氏子総代長が務め、氏子から選出される氏子総代、別当寺島家、宮司が加わって実行委員会を組織する。平成31年の遷宮祭の実行委員会は実行委員長1人、副委員長2人、会計3人、庶務2人、監事2人、委員2人の12人に別当と宮司が入った。

磯部地区の大洲、大浜、芹谷地、上古（上ノ台と古磯部をあわせて）が稲荷寄木神社の氏子の範囲で、230世帯ほどあったが、平成23年（2011）の東日本大震災以降は住民が激減している。

（6）神幸経路（図1・2）

神幸地／神幸地は大浜海岸で、昭和46年には砂浜に砂を盛って玉石で周囲を囲み、^{いみだけ}斎竹を立てて注連縄を張り、寄木と稲荷の神輿を据える壇を築いていた。昭和58年のご遷宮にも砂浜に祭場（立場・お休み所などともいう）を設けたと思われるが、数十年前から外海に面した大浜海岸が侵食されるようになって砂浜が減少し、場所を変えるなどして祭場が変化している。

神幸経路／神幸経路も年代によって少しずつ違っている。

昭和46年までは別当の寺島家の氏神の祠にご神体を下遷宮させていた。遷宮祭には朝、そこから2基の神輿を出した。担ぎ手は、稲荷の神輿は上古、寄木は大浜と芹谷地、大洲の若者が担ぐものとされてきた。行列は決まった道順で巡行するが、神輿が通る道には、7日ほど前から道の両側に注連を張っておいた。まず、古磯部浜の祭場、大洲船溜^{ふなだまり}の祭場で休み、大浜祭場に至る。氏子の漁師が海に入って桶に潮水を汲んで神輿に供える。祭場でも潮水を奉納し、すべての芸能を奉納してから還御となる。神社に帰着し、神輿からご神体を本殿に移したのは午後6時頃になった。

平成19年3月25日の遷宮祭では、寄木神社を出た神輿は、東側の鳥居から南に向かい上ノ台を通って古磯部の「上古公会堂」に着く。神事と芸能奉納ののちに西に向かい県道を北上、磯部小学校の脇を通って大浜の公民館、駐在所、芹谷地から大洲の磯部漁港船溜の祭場着。次に南下して海岸の道に向かう。大浜の海岸に祭場を設けていたが、海が荒れていたため予定を変更し大浜の祭場を丸太水産のコウナゴの干場に変更した。ほかの祭場と同様、神事と芸能の奉納があり神社に向かう。還御は神社の集落側（北側）の鳥居から階段を上って神輿を担ぎあげ、本殿にご神体を納めた。

平成31年は、東日本大震災で磯部の中心集落が流失したあとの遷宮祭であった。下遷宮した社務所から神輿を出して南に向かい、上ノ台から西に曲がって磯部小学校の南側に出る。その後西進し、磯部中学校脇の^{きつねあな}狐穴団地（災害公営住宅）祭場を経由して再び県道に出て県道を北上。磯部山信田住宅団地（鷺山住宅とよぶ災害公営住宅）内の鷺山集会所に祭場を設けた。鷺山の住宅団地を巡ってから、津波で流された集落跡を抜けて神社北側の鳥居から階段を上って還御。その後、ご神体を本殿に安置した。

（7）祭りの内容

潮水の扱い／平成19年や次の平成31年には、氏子の1人が白装束に下帯姿になって桶を持ち、神社東側の浜（大浜）から潮水を汲んで神前に供えた。

実施内容／昭和46年の遷宮祭では、大浜祭場で氏子の2人が上半身裸の下帯になり、三宝にあげた桶を掲げて胸の深さまで海に入り、桶に潮水を汲んで祭場に戻る。これを潮垢離と称していた。祭壇前で神職に手渡し、安置した寄木（向かって右）と稲荷（同左）の厨子（神輿）に、潮水の入った桶を三宝のまま供える。海に入るのは氏子の漁師とされており、寄木と稲荷の2社に供えるため（昭和46年当時金比羅神社の神輿はなかった）、2人で潮垢離に当たった（写真2～4）。

平成19年の祭礼では行列が出発する前の、25日朝6時に潮を汲んだ。K氏が白装束に下帯姿で神社を出て、近くの大浜海岸から海に入って桶に潮水を汲み、幣殿に供えた。桶の潮水はご神体の厨子に触れる者が清めに用いるもので、桶を持って行列に加わるわけではない。平成31年の遷宮祭でも同様であった。



図1 稲荷寄木神社の神幸経路 (平成19年3月25日) *平成3年9月1日国土地理院発行2.5万分1地形図を加工して作成



図2 稲荷寄木神社の神幸経路 (平成31年3月31日)

① 平成19年の遷宮祭

3月24日の前夜祭

関係者神社社殿集合（11時30分）、神職による神事（11時47分）。別当ほか関係者は白衣着用、神楽敬神会は法被、その他の参列者は背広着用。別当が開扉（11時51分、社殿改修後にご神体は本殿に戻した。かつては下遷宮後、本祭まで別当宅の氏神に安置しておくものであった）、献饌など神事（12時）、拝殿内で磯部神楽と余興奉納、境内で子ども手踊の奉納（14時から大浜、上古、大洲、芹谷地の順）、拝殿内で直会（15時30分）。

3月25日の遷宮祭本祭

- ・潮汲み（6時10分）。K氏が白装束、下帯姿になり、神社東側の大浜の浜に出て海に入り、桶に潮水を汲む（写真5）。潮水の入った桶は本殿前の階段に供える。
- ・打ち鳴らし（6時35分）。拝殿で実行委員長挨拶、神事、祝辞など。
- ・境内の社殿前で磯部神楽の奉納（7時20分）。
- ・寄木・稲荷・金比羅3社のご神体をそれぞれの神輿に移す（7時20分）（写真6）。神輿は3基。
- ・社殿前で子ども手踊奉納（7時50分）（写真7）。
- ・委員長が行列帳を読み上げ、それに従って行列を整え、境内を出発（8時30分。列順と配役人数は後掲）（写真8）。
- ・古磯部（上古公会堂）到着（9時19分）。公会堂前祭場で神事を執り行い、続いて手踊の奉納。祭壇は斎竹に注連を張り、周囲に紅白の幕を巡らせる。祭壇には寄木、稲荷、金比羅の順で3基の神輿を並べ、その前に棟札や持ち物、餅や赤飯などの神饌を供える。上古公会堂のほか、古磯部の民家を借用して早めの昼食をとった。
- ・古磯部出発（11時）。
- ・大洲漁港の大洲船溜祭場到着（12時）。祭場で神事、続いて芸能奉納。大洲船溜祭場では、すべての芸能を省略しないで奉納し、子どもたちが曳くササゼンと呼ばれる縁起物のタイとホッキ貝、ヒラメを象った造り物を載せた山車も披露（写真9）。大洲船溜の祭場出発（13時50分）。
- ・大浜祭場到着（14時20分）。大浜祭場は大浜地区の海岸に設けていたが、悪天候で海が荒れているため、急遽、近くの水産会社の干場を借りて祭場に変更した。大浜祭場で神事、続いて芸能の奉納（14時35分）。
- ・大浜祭場を出発し、堤防側を通り神社に戻った（16時13分）。
- ・3社のご神体を納めた厨子を本殿内に安置（16時20分）。神社への還御予定時刻は18時であったが、悪天候で古磯部出発を30分繰り上げ、各祭場とも順次切り上げて還御した。

3月26日の遷宮祭後祭り

遷宮祭3日目は「後祭り」と称する。午前7時に実行委員会、磯部敬神会のメンバーが社殿に集まり着座。とくに神事はない。実行委員長の挨拶のあと、神社の境内で磯部神楽の奉納（写真10）、手踊の奉納を行い、芸能を出したそれぞれの地区に向かい、午前8時頃から希望する家の庭先で手踊などを披露する。

踊り子たちを迎え入れる家では一家そろって一行を出迎え、踊り子たちは踊りを披露しながら家内繁盛などの口上を述べる。踊組にはお礼の「お花」を奉納する。「村回り」はたいてい夕方までかかる（写真11）。組によっては中村の町まで遠征し、知り合いの商店や得意先で芸能を披露して「お花」をもらい歩くこともある。

実行委員会は、夕刻から直会をかねた集会を開催し、今回の遷宮祭の実行委員会を解散し、一連の祭礼が終了する。

平成19年の遷宮祭列帳 * () 内数字は人数

御先騎馬：騎馬武者(1)、太鼓(3)、猿田彦(1)、塩湯(1)、ササゼン世話(9)、曳手大洲(11)・芹谷地(13)・上古(7)・大浜(5)、舞子：手踊師匠、世話人、歌い手、籠馬含め、大浜(37)・上古(20)・大洲(23)・芹谷地(41)、名旗(3)、白杖(2)、大麻(1)、御棟札：別当(1)、神楽：敬神会長(1)、御子：代表(1)、稚児：代表(1)、日旗・月旗各(1)、五色旗(5)、神饌(9)、白幣(3)、神鏡(3)、金幣(3)、神刀(2)、由来書(1)(寺島家)、先武者(1)、真榊(1)、御鳳輦：神輿稻荷(11)・寄木(13)・金比羅(10)、真榊(1)、後武者(1)、白旗・赤旗各(1)、宮司(1)、時間係(2)、招待係実行委員全員(約16)

この順で神輿は巡行し、これに一般参加者もつく。

② 平成31年の遷宮祭

磯部地区が東日本大震災によって被災して最初の遷宮祭であったため、例年とは異なる点が多かった。

3月30日の前夜祭

関係者は正午に神社に集合。神事(12時半から13時まで)、境内で磯部敬神会による磯部神楽の奉納(13時から)、境内で大浜手踊会、上古手踊会、磯部青年会による手踊の奉納(16時まで)。

3月31日の遷宮祭本祭

関係者は8時に神社に集合。8時30分から社務所内で委員長挨拶、来賓祝賀、神事。9時、境内で磯部神楽の奉納。9時30分から大浜・上古、青年会の順に手踊奉納。下遷宮した社務所でご神体を神輿に移す(寄木、稲荷、金比羅の3基の神輿)。神輿行列の出発(11時)、鷲山集会所到着(12時30分)、鷲山集会所での神事、芸能の奉納と昼食(12時30分から14時30分)。鷲山集会所出発(14時30分)、神社到着(15時30分)、その後、遷座、ご神体安置。

4月1日の後祭り

関係者神社集合(8時)、後祭り神事のあと磯部神楽、大浜、上古、磯部青年会の手踊奉納(8時10分から)。午前中で遷宮祭終了。

遷宮祭行列は次のとおりであった。なお、() 内数字は人数。

太鼓：白衣着用(3)、猿田彦：白衣装束(1)、塩湯：白衣(1)、銘旗(白衣)(3)、白杖：白衣(3)、棟札：別当(1)、神楽：磯部敬神会会長(1)、巫女・稚児(若干名)、日旗・月旗：白衣(2)、五色旗：羽織袴(5)、神饌：羽織袴(8)、白幣：羽織袴(3)、神鏡：羽織袴(3)、金幣：羽織袴(3)、神刀：羽織袴(3)、由来書：羽織袴(1)、先武者：甲冑(1)、真榊：羽織袴(2)、御鳳輦：神輿、白上下、稲荷・寄木・金比羅(各10)、後武者：甲冑(1)、白旗・赤旗：羽織袴(2)、宮司(1)

(8) 祭礼の状況

東日本大震災の津波によって、磯部漁港をはじめ、磯部地区の中心部の大洲、大浜、芹谷地、古磯部は人家が流失し、相当数の犠牲者を出した。また、停泊していた漁船のほとんどを失い、海産物の加工場も罹災。家を失った住民は、震災直後は市内の避難所に身を寄せた。かつての家並みのあった地区は移転促進地区に指定され、住宅を再建できなくなったため、高台の鷲山地区や狐穴地区を造成して災害公営住宅を設けた。相馬市立磯部中学校付近の磯部山信田(鷲山)住宅団地、狐穴住宅団地に人家の中心が移ったが、住民の多くは磯部地区を離れ、磯部地区全体の世帯数は激減している。

平成31年亥年は大震災後初のご遷宮であった。大震災後8年、住民の減少は深刻で、参加人員を確保し祭礼の経費を調達が困難なかでの実施であったが、磯部神楽、大浜手踊会、上古手踊会、青年手踊会など神楽や手踊の奉納ができた。しかし、この祭りの呼び物であったササゼンの造り物も津波で流されてしまい、平成31年には出場することなく稚児の参加も少なかった。地区外に住む人も多いことから時間や練習場所の調整や確保に手間取りはしたが、練習を重ねて披露できた。また、人

家が失われ景観が大きく変わったため、神輿渡御も従来の神幸経路とはまったく異なり、新たな住宅団地を巡る道順に変更された。震災によって疲弊した磯部地区を盛り上げようということで、地区外に住む住民にも声がけして参加を促し今回の遷宮祭は全うできたものの、磯部地区にゆかりを持たない次世代の人たちが、手間のかかるこのような祭りを次回に継承できるかどうか、重い課題を背負っている。

(9) 芸能等

『寄木神社誌』には、昭和5年から昭和46年までの間の遷宮祭に奉納した芸能が記録されているので再録する。ここに取り上げた芸能団体は、磯部神楽を除きそのときの遷宮祭に奉納することを目的に臨時に組織された。併せて平成19年の奉納芸能も示しておく。なお磯部敬神会による磯部神楽は、稲荷寄木神社氏子総代の下部組織として普段から活動している青年によって担われている。

昭和5年

大浜芹谷地青年笠踊、大浜芹谷地女子青年笠踊、大浜芹谷地子供手踊、上古青年踊。

昭和22年(1947)

大浜青年笠踊、芹谷地青年笠踊、芹谷地女子青年笠踊、芹谷地子供手踊、上古青年踊、上古子供手踊、大洲子供手踊。

昭和34年

大浜青年笠踊、大浜子供手踊、芹谷地青年笠踊、芹谷地部落子供手踊、芹谷地子供手踊、上古青年踊、上古子供手踊、大洲子供手踊。

昭和46年

大浜芹谷地青年笠踊、大浜子供手踊、芹谷地子供手踊、上古青踊、上古子供手踊、大洲子供手踊。かつての遷宮祭には多くの芸能組が組織されて、規模の大きな祭りであったことがよくわかる。

平成19年

ササゼン／ササゼンは寄木神社の遷宮祭に欠かせない練風流^{ねりふりゅう}の山車で、水色の印半纏に鉢巻きの子どもたちが引綱を持ち、歌を歌いながら曳き回して歩く。ササゼンは割り竹を組んで魚の形の骨組みを作り、下地に幾重にも新聞紙を重ね貼りした5メートルほどの造り物である。そこに大きなタイを描き、張りぼてのホッキ貝とヒラメも添える。これを台車に乗せた船の上に据え付けて大漁旗を飾る。船に乗り込んだ歌い手が引き手と一緒に「磯部大漁歌い込み」を歌いながら引き回す。

磯部神楽／稲荷寄木神社に属す磯部敬神会の獅子神楽で、18歳くらいになった氏子の長男が加入したが、現在は磯部にゆかりのある若者が務める。会長は氏子総代の1人が当たる。神社の例祭に舞い、正月には「悪魔祓い」をして氏子全戸を回ったが、東日本大震災後「悪魔祓い」は一時中止した。「しが」「通り」「幕舞」「幣束舞」「鈴舞」「乱舞」「太刀のみ」から構成され、余芸には「鳥刺舞」「種まき」「おかめ」「天狗」「彰義舞」などがある。遷宮祭には必ず最初に演じて場を清める。

手踊／手踊には青年の手踊や子ども手踊などがある。平成19年は「大浜手踊会」「上古子供手踊会」「大洲手踊」「芹谷地手踊会」の4つの手踊の組が奉納した。これらの手踊の組は常設ではなく、「遷宮祭」に向けて臨時に組織される。小学生に加入を促し、小学生を主体にして学齢前の幼児や中学生が加わることもある。「遷宮祭」に向けて踊りの師匠を頼み、歌い手も確保して1年ほど前から準備し、揃いの衣装や採物なども誂える。

手踊の曲目は師匠により異なるが、伊勢音頭、麦搗き、目出た、二遍返し、佐渡おけさ、神長老^{かんちよろ}林、花笠音頭、磯部大漁節、笠踊、大漁節、大漁唄い込み、浜甚句、流れ山、さのさ節、酒屋唄などが共通する。歌い手は幕を周囲に下げ造花を飾った大きな傘の下で歌う。

手踊の組には陣羽織に袴、陣笠を被り、腰に大小を指し、作り物の馬の首、尻に籠の馬の尻を付けた「籠馬^{かごうま}」が付く。男の幼児が務め、大人の世話人の指導で踊組の先導をする。

(10) 関連資料

「文政三年再写 磯部村寄木大明神縁起」(別当寺島家所蔵)

参考文献・資料

相馬市史編纂会『奥相志』(『相馬市史』4 資料編1 1969)

佐々木長生「浜下り神事の分布と考察」(岩崎敏夫編『東北民俗資料集』(4) 萬葉堂書店 1975)

寄木神社誌編集委員会『寄木神社誌』(1986)

福島県神社庁相馬支部『管内神社誌』(2006)

相馬市『相馬市史』9 特別編II 民俗(2007)

磯部遷宮祭実行委員会『平成19年丁亥 稲荷神社、寄木神社、金比羅神社遷宮祭記録』(2007)

磯部遷宮祭実行委員会『平成31年稲荷神社・寄木神社・金比羅神社遷宮祭記録簿』(2019)

【岩崎真幸】



写真1 ご神体出現の奉納絵馬(拝殿内 H18.5.5)



写真2 昭和46年遷宮祭の大浜での潮水汲み(相馬市磯部 S43.3)



写真3 祭場は大浜の砂浜に設け、神輿の台は玉石で築いていた(相馬市磯部 S46.3)



写真4 昭和46年の大浜の祭場全景(相馬市磯部 S46.3)



写真5 当日朝、神社近くの浜から潮水を汲む（相馬市磯部 H19. 3. 25）



写真6 ご神体を神輿に移す。藁を被った厨子が漂着した木の根を祀ったとされる寄木神社ご神体（相馬市磯部 H19. 3. 25）



写真7 行列出発前、社頭での手踊の奉納（相馬市磯部 H19. 3. 25）



写真8 神輿の行列。神社関係者は羽織袴の正装（相馬市磯部 H19. 3. 25）



写真9 ササゼンを曳く子どもたち（相馬市磯部 H19. 3. 25）



写真10 大洲船溜祭場での磯部神楽の奉納（相馬市磯部 H19. 3. 25）



写真11 本祭翌日の後祭りの手踊の村回り（相馬市磯部 H19. 3. 25）

3. 飯館村 山津見神社

(1) 神社の概要

名称／山津見神社（十六善神）

所在地／相馬郡飯館村大倉字大倉555

由緒／応永13年（1406）年、横手御所（現：南相馬市鹿島区横手）に館を構え、真野郷700町・山中300町を領した岩松蔵人の氏神（十六善神）として祀られたと伝えられる。蔵人の嫡子専千代丸は、逆臣により海岸の崖から突き落とされ殺害された。残った姫君が一人ご神体を背負い、大倉の地まで逃げ延びた。その際、姫君は懐妊しており、姫が崎という山に登り出産したが直ちに死去した。忠左衛門という者がこれを見つけ、一社を建て村鎮守として崇敬した。この神を信心する者は難産の憂いなしという。忠左衛門（現在の郡家）の子孫が代々当社の鍵持ちを勤める。江戸時代、岩井山福善寺（天和2年〔1682〕開山）が別当寺として奉仕していた。元文3年（1738）10月に再興され、明治3年（1870）、神仏分離令により山津見神社と改称し、現在に至る。

(2) 祭りの名称

お浜おり、おさがり。南相馬市鹿島区では「タンタンボウズ」と呼ばれている（一説には、行列で鳴らす太鼓の音になぞらえているという）。

(3) 祭りの由来

神社の由緒や由来に関わる伝説

- 一説には、由緒で記載した「忠左衛門」は「桑折忠左衛門」といい、岩松家の家臣であり姫君と共に大倉に逃げてきて、出産し死去した姫君と子どもを葬り、逃げる際に担いできた十六善神を祀ったといわれる。
- 大倉地区で言い伝えられている岩松氏の上陸地点である現在の南相馬市鹿島区南海老字釜前付近（『奥相志』では鳥浜付近）や桑折忠左衛門の本家など、岩松氏に由縁あるところを神輿が渡御する。
- 姫君が真野川を遡って逃れる際、横手の御所を忍んで泣いたところを「なけび沢」、産気付いたところを「湯舟」、死去した山を「姫が崎」という。
- 古くは（時期不明）山津見神社の祭典を執行するとき、神殿への神輿の出し入れおよび渡御中に檜を先頭にして、供奉する人びとが鉄砲を打ち鳴らし、「ホーウ」「ホーウ」と大声で関の声を挙げていた。これは岩松氏の逆臣に対して神の威光を示し、威嚇しながら渡御するためだといわれている。昭和40年代には神社を神輿が出発する際、鉄砲で空砲を撃った（関連資料①-1）。平成になってからはこの行事は行われていない。
- 南相馬市鹿島区横手の唐神溜池の前を通る時はいっさい音を鳴らさず、足早に通過する。この溜池にいるへびを起こさないためだという。『奥相志』には唐神溜池（堤）にすむという大蛇の伝説が記されている。鹿島区鹿島の千倉明神跡の前を通る時も同様で、ほかの神様の前を通してもらうので、静かに、そして足早に通化するのだという。

その他

- 行列の途中、希望者にはお札（紙札、板札、箱札）を頒布する。
- 行列の途中、希望者には五色の幣束を頒布する。かつては、鼠除けのため、養蚕を生業としていた家に頒布した（約50本）。
- 昭和40年代までは安産祈願のためオマクラを神輿に付けた（関連資料①-2）。

- ・神輿に付いている造花を貰うとその年は豊作になるということで、氏子たちは造花を家に持ち帰った（関連資料①-3）。造花は、昭和30年代まで鹿島御子神社（Ⅲ-12）の氏子が製作していたが、作る人がいなくなり大倉地区で製作するようになった。平成23年（2011）の東日本大震災前は、大倉地区婦人会が製作しており、震災以降は同婦人会の後継団体である「こぶし会」の手により製作されている。
- ・行列に女性がたくさん付いてくると豊作になるという（関連資料①-4）。

（4）祭 日

毎年新暦4月第3土曜日・日曜日。鹿島区鹿島の鹿島御子神社の例祭に合わせて行う。東日本大震災に伴う原子力発電所事故後、お浜おりは行われていない。

祭日の変遷／旧暦4月17日・18日（江戸後期の記録：関連資料①等）

→新暦4月20日・21日（大正5年〔1916〕の記録：関連資料④等）

→新暦4月第3土・日曜日（昭和後期から平成22年）

（5）伝承団体

綿津見神社（Ⅳ-7）宮司、氏子総代、大倉地区氏子（令和7年現在）。

（6）神幸経路（図1）

神幸地／南相馬市鹿島区南海老字釜前付近

神幸距離／片道約25キロメートル

神幸経路／平成12年（2000）、筆者が奉仕した記憶および祭典関係者への聞き取りに基づき記録したもので、過去に報告された諸資料と若干相違点がみられる。なお、写真は平成17年（2005）撮影のものを掲載した。

1日目：山津見神社（写真1）→湯舟の休み場（大倉地区内／写真2）→松が平の休み場（大倉地区内／写真3）→鹿島区上栃窪の休み場（写真4）→初発神社（南相馬市鹿島区横手）。ここで昼食→ここから鹿島区鹿島の町内に入り（写真5）、鹿島御子神社でいったん休息→鹿島のF家（北郷タクシー）前で休息と祭礼（写真6）。その後、千倉グランド付近のJR常磐線の線路、千倉明神跡、国道6号を横切り北右田の集落→南海老字釜前付近で神事（写真7・8）→千倉グランド付近の国道6号およびJR常磐線の線路を横切り、鹿島御子神社に神輿を安置する。神職は鹿島御子神社、供奉者は鹿島区内の旅館に宿泊。

2日目：鹿島御子神社→横手のK家（岩松家御所跡近く。お膳の接待を受ける）→鹿島区上栃窪のT家（お膳の接待を受ける）→福善寺（写真9）（大倉地区、山津見神社に隣接。直会、神楽奉納／写真10）→山津見神社

なお、昭和40年代までは、山津見神社から浜までの約25キロメートルにもなる行程を、神職は馬に乗って、神輿は氏子が肩にかついで渡御した（関連資料①-5）。その後、神職は乗用車、神輿は軽トラックに乗って渡御するようになった。鹿島の町内では、神輿を車から降ろし、徒歩で神幸する経路もある。

（7）祭りの内容

潮水の扱い／神輿に供奉する者1人が、波打際でサカキ（お祓いに使用する大麻）を潮水に浸し、神職が修祓の行事の時、大麻を用いて神輿と供奉する人びとに振りかける。潮水は汲まない。

1日目：山津見神社にて午前8時30分頃、発輦祭。

打ち鳴らし、修祓、祝詞奏上、玉串奉奠、打ち鳴らし（これらの神事は各神社や岩松氏ゆかりの家で繰り返される）。社殿から神輿を出し、神社の周りを時計回りに3周する。

大倉地区湯舟の休み場では石の上に神輿を置く。打ち鳴らし、修祓、祝詞奏上、打ち鳴らし（これらの神事は各休み場で繰り返される）。賽銭やお酒、旗などの奉納物がある。松が平の休み場で

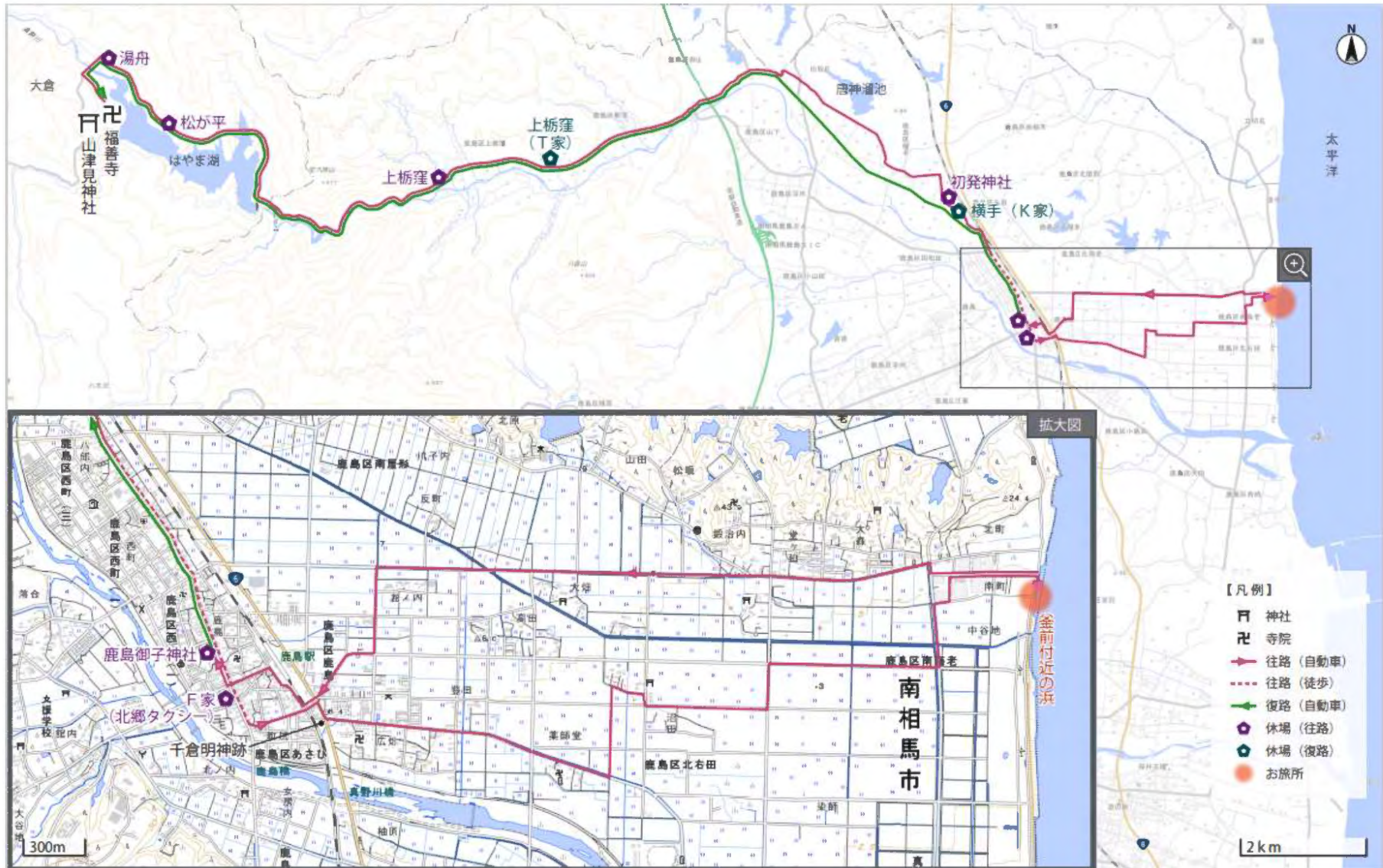


図1 山津見神社（大倉）の神幸経路（平成12年4月15・16日）

も湯舟の休み場同様奉納物がある。

南相馬市鹿島区に入って、上栢窪の休み場では地区の人びとが道端に出てきて神幸行列をお出迎えし、賽銭などが奉納される。二宮尊徳像がある手前で休息する。

御山^{おやま}、角河原^{つのがわら}を経て、唐神溜池の前を通る時は、鳴り物をやめ足早に通る。

横手の初発神社で昼食をとり、鹿島御子神社で休息。その後、鹿島のF家前で神事を執り行い浜に向う。その途中、千倉の千倉明神跡の前を通る時は、鳴り物をやめ足早に通る。

北右田では地区の人びとが道端に出てきてお出迎え。賽銭などが奉納される。

南海老字釜前付近の浜に着くと神輿を海の方に向けて置く。神輿供奉者の1人がサカキを持ち浜に下り、海水に浸す。ここでの修祓では海水につけたサカキを大麻としてお祓いする。ここでの神事終了ののち、鹿島御子神社にお殿入り（神輿還御）。

2日目：鹿島御子神社を午前8時頃ご登御（神輿の出発）。

鹿島区横手、岩松家御所跡近くの岩松家旧家臣であるK家で神事。お膳の接待あり。その後、上栢窪のT家（飯館村に多数の信者がある法印の家）にて神事。お膳の接待あり。

鹿島区との境で大倉地区氏子による出迎えあり。

福善寺で昼食・直会、神楽奉納ののち、山津見神社に還御。神社の周りを時計回りに3周する。神輿を社殿に納め、還御祭を執り行う。神輿に付いている造花を氏子がもらい解散となる。

(8) 祭礼の状況

平成22年（2010）にお浜下りを執行。翌23年以降、福島第一原子力発電所事故による全村避難を経て、現在もお浜おりは中断している。ただし、平成24年（2012）から新暦4月第3日曜日に神事のみが行われている。

(9) 芸能等

芸能名称／大倉の神楽

芸能由来／諸説あり。神社創建時、あるいは400年前、300年前というが詳しいことはわかっていない。

ただ太刀のみの所作があるので浜通り地方から伝わったものであるといわれている。

芸能の管理と組織／戦前から昭和50年代の記録によると青年団が運営していた。役員には会長1人、副会長2人、幹事5人、会計2人、監事3人を選出した。練習は新暦1月3日または4日から10日まで会長宅か隠居家の空き家、師匠宅などを借りて行った。現在は保存会が結成され、不定期に大倉行政区所有の集会場や体育館で行っている。

芸能の奉納時期と場所／昭和50年代の記録によると、新暦1月3日または4日に芸能の練習が始まり、終わる11日午前「笠揃い」をして午後神楽を披露した。1月14日の朝に山津見神社と福善寺、その後区長宅に回り、3日間地区内全戸を回った。これを「村回り」という。村回りを終えたあと、同20日には「笠はずし」といって、午後1時頃から会計報告を兼ねた慰労会を開催した。

4月20日、山津見神社お浜下りの当日、地区内にある休み場で略式の神楽を披露した。翌日神輿が帰ってきた際、神社に隣接する福善寺境内で奉納された。平成に入ってからには休み場での奉納はない。昭和40年代にはお浜おりの際、鹿島御子神社で神楽を奉納していたようだが、平成に入ってからにはこの場所での奉納はない。

また、大倉字日向^{ひなた}の愛宕神社^{あたご}（旧暦6月24日例祭日）、同字宮内の東照大権現（旧暦7月17日）例祭日の祭礼日に神楽が奉納されていたが、両社とも真野ダム（はやま湖）に沈んだため行われていない。現在は8月上旬に開催される「はやま湖まつり」や毎年2月に行われる村の芸能発表会などで披露されている。また、平成30年（2018）には草野地区鎮座の綿津見神社（IV-7）の例祭で披露された。

(10) 関連資料

① 昭和40～50年代の祭礼古写真



1 山津見神社を神輿が出御する際、鉄砲で空砲を撃った（綿津見神社所蔵）



2 神輿に安産祈願のオマクラを付けた（氏子をはじめ沿道に出てきた信者の人たちからも奉納があった。綿津見神社所蔵）



3 神輿を追いかける氏子の人びと（綿津見神社所蔵）



4 豊作を願い、神輿に付けた造花をもらい帰宅に着く氏子（飯館村教育委員会所蔵）



5 馬と徒歩で神幸していた頃の様子。これから往復50キロメートルの神幸行列（綿津見神社所蔵）

②「村々調 山中」(抜粋)

大倉村

(中略)

村鎮守
一 十六大善神 堂式間四面 祭日 四月十七日
別當 福善寺

木像厨子入
元文三年午十月

此御神北郷二而真野郷七百町山中三百町領し給ふ横
手村御所岩松卿与奉申候御方之氏神也 然二岩松卿
落城之後御姫御老人彼御神跡ヲ背負ひ當村迄御逃
遊候処 其節御懐胎二而姫ヶ崎与申山ニ登り御出産
被遊直ニ御死去被成候 此ヲ忠左衛門与申もの見附
夫々當所ニ一社奉建立村鎮守与崇敬仕候 今モ此
御神ヲ強信心候得者難産之憂なし 諸人奉祈候 且
又此忠左衛門与申もの當時桑折沢次先祖ニ而代々善
神社之締り開扉鍵持ニ御座候
毎年四月十七日祭礼之節 北郷下蛭村高野釜迄神輿
御臨幸御塩垢離之礼式有之 夫々鹿嶋大明神ニ一夜
御旅泊 翌十八日還幸ニ相成候 其節鹿嶋検断所ニ
おゐて熊川様々神輿御供之もの之内式人江昼飯壹度
振被下置事ニ御座候

(「村々調 山中」『旧陸奥中村藩山中郷基本資料』東北アジア
研究センター報告二三号 二〇一六)

資料解説 この資料は『旧陸奥中村藩山中郷基本資料』にある編者岩本由輝氏の「はしがき」および「解題」によると、明治4年(1871)に完成した地誌『奥相志』編纂のため嘉永元年(1849)に書き上げられ、相馬中村藩に提出されたものである。ただし『奥相志』における「山中郷」の部分は廃藩置県の影響で完成を見るに至らなかった。

原本は東日本大震災後、『奥相志』の著者斎藤完隆の子孫である相馬市の海東家で実施された史料レスキューの際、発見された。その後、岩本由輝氏を中心に同書の解説が進められ、平成28年(2016)、東北アジア研究センターの手により翻刻された。

資料には神社の由緒とお浜おりの神事について記され、江戸時代の神事のように伝える貴重なものとなっている。

ここに出てくる「岩松卿」とは応永13年(1406)8月、鎌倉の甘縄(現在の神奈川県鎌倉市長谷あたり)から海路、現在の南相馬市鹿島区に下向して鹿島区横手に御所を構え、千倉庄(現在の南相馬市鹿島区)と草野(現在の飯館村)を領した岩松蔵人義政のことである。

『奥相志』によれば、応永26年(1419)、義政が亡くなると岩松家の家臣が謀叛を企て、正長4年(1428)、13歳の嫡子専千代丸を蒲庭浦(現在の相馬市蒲庭)に誘い出し殺害した、とある。これが当資料にある「岩松卿落城」ということであろう。その後、岩松家の領地は相馬氏に属した。

また「熊川様」とは、戦国末期から江戸時代初期、草野館(飯館村)に居館した岡田兵庫が元和6年(1620)、後継者なく死去した際、その領地(大倉地区を含む)を譲られた娘婿である熊川氏の子孫のことである。

代々当社の鍵持ちを務めてきた郡家所蔵資料にも同内容の記載があるが、こちらは、明治37年(1904)に桑折之治により書き写されたものであり、文末に「右者相馬旧藩主御三之丸記録より写し取候もの也」とある。このほか、この資料とほぼ同文のものが明治45年(1910)に編纂された『新館・大須組合村郷土誌』にも記されている。

③ 元文3年の棟札（山津見神社所蔵）

資料解説 平成28年（2016）に飯館村文化財記録保存事業実行委員会が行った調査によると山津見神社には江戸時代から平成にかけての棟札が14枚保管されている。

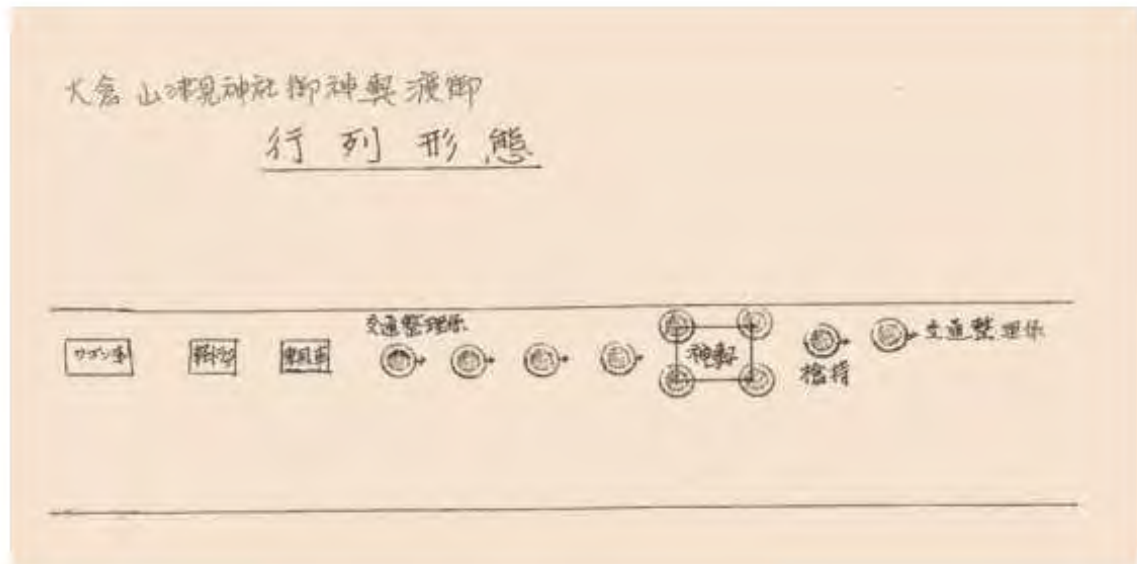
この資料はその中で最古のものであり、十六善神（山津見神社）のお堂が再興された元文3年（1738）に安置されたものである。

この棟札から、別当寺である福善寺は歓喜寺（現在の相馬市中村にある真言宗の寺院）の管轄下であったことや、祭事には村を統括する肝煎、それを補佐する村老むらおさが関わっていたことがわかる。



我々 哀愍衆生者 等今敬礼	皆元文第三歳 戊午月吉日 別當大蔵 邑福善寺 具住泰岸	大工 平左衛門 但野市兵	奉 再興十六善神堂 一字法久住諸人 快楽村中繁榮 攸	肝煎 佐藤清左衛門	本 佐藤□左衛門	聖主 天中天 迦陵頻伽聲	大導師 歡喜寺廿八世 傳燈遮梨貞精	佐藤由□右衛門 村
---------------------	---	--------------------	--	--------------	-------------	--------------------	-------------------------	--------------

④ 「大倉山津見神社御神輿渡御行列形態」（綿津見神社所蔵）



資料解説 平成21年（2009）のお浜おりに際して南相馬警察署に届けた道路使用許可申請書の控えである。大倉地区や山津見神社等に神輿渡御の列帳は確認できず、現時点で行列の形態がわかる唯一の資料である。ワゴン車—軽トラック—乗用車—神輿—櫓持と続いており、行列の傍らに交通整理係が配置されている。

⑤ 「祭典御届」(綿津見神社所蔵)



祭典御届
 相馬郡大須村大倉鎮座
 村社山津見神社
 右慣例ニ依リ四月廿日例祭執行仕候
 間此段及御届候也
 追テ今日相馬郡八沢村海老濱マテ神輿渡
 御式執行仕候
 右社掌
 大正五年四月十日
 久米耕造

資料解説 この資料は大正5年(1916)、当時山津見神社の社掌(宮司)であった久米耕造氏が中村警察署・原町警察署に祭典執行を届けた書類の一部である。江戸後期に旧暦4月17日・18日を祭礼日としていたのと違い、大正時代、新暦4月20日に神輿渡御が行われていたことがわかる。いつ頃から祭礼日を新暦4月20日に変更したのかははっきりしないなか、4月20日の祭礼日が確認できる最古の資料である。その後、祭礼日は新暦4月第3土・日曜日に変わる。

参考文献・資料

- 相馬市史編纂会編『奥相志』(『相馬市史』4 資料編1 1969)
- 飯館村史編纂委員会編『飯館村史』第3巻 民俗(1976)
- 飯館村史編纂委員会編『飯館村史』第1巻 通史(1979)
- 大倉部落史編纂委員会『大倉部落史』(1980)
- 福島県立博物館『福島県立博物館調査報告第28集 福島県における浜下りの研究』(1997)
- 西徹雄監修『図説 相馬・相双の歴史』(2000)
- 鹿島町史編纂委員会『鹿島町史』第6巻 民俗編(2004)
- 福島県神社庁相馬支部『管内神社誌』(2006)
- 飯館村文化財保存記録事業実行委員会『いのり・ねがい・こころのタイムカプセル 飯館村寺社文化財』(2017)

【多田仁彦】



写真1 山津見神社から発御(大倉 R7.4.16 南相馬市博物館)



写真2 湯舟の休み場。大石の上が神輿の休み場(大倉 R7.4.16 南相馬市博物館)



写真3 松が平の休み場。こちらも大石の上に神輿を休ませる (大倉 R7.4.16 南相馬市博物館)



写真4 上栢窪の休み場 (南相馬市鹿島区上栢窪 R7.4.16 南相馬市博物館)



写真5 鹿島町内に入り、徒歩で行列する (南相馬市鹿島区鹿島 R7.4.16 南相馬市博物館)



写真6 F家(北郷タクシー)前で休息 (南相馬市鹿島区鹿島 R7.4.16 南相馬市博物館)



写真7 サカキを潮水に浸す (南相馬市鹿島区南海老字釜前付近 R7.4.16 南相馬市博物館)



写真8 浜での神事 (南相馬市鹿島区南海老字釜前付近 R7.4.16 南相馬市博物館)



写真9 福善寺での神楽奉納 (大倉 R7.4.16 南相馬市博物館)



写真10 岩井山福善寺全景 (R7)

4. 南相馬市 日吉神社

(1) 神社の概要

名称／日吉神社 通称：サンノウサマ

所在地／南相馬市鹿島区江垂字中館158

由緒／北畠顕家が南朝方の拠点とした霊山城（相馬市と伊達市境の霊山に立地）は、康永元壬午年（1342）3月に陥落した。北畠配下の桑折五郎元家一行13人は、主従7人が七福神に変装し、「宝財獅子踊」と称して城の鎮守「山王権現、熊野権現」を奉じながら江垂の地に落ち延び、当地にこの神を祀ることになった（『奥相志』「江垂邑」）。

(2) 祭りの名称

日吉神社のオサガリ、山王様のオサガリ、オハマクダリ、オハマオリなどともいう。神社側では特別祭典、申年大祭と称している。

(3) 祭りの由来

『奥相志』の「江垂邑」の「山王祠」の項に、

康永三甲申年四月初申日遷宮祭礼を行う。「郡主」が行列して山王の神輿を守り宝財神樂が行列に従った。烏崎浜に神幸し潮水で垢離を取ったという。それ以来十三年を一期として今に至る。宝財獅子踊が神輿に従い、仮の「君侯」の行列が烏崎浜まで行き、潮水で垢離を取り海辺で宝財獅子六方小踊を奉納する。翌日から三日間は観音寺で六方小踊を演じる。

とあり、鎮座した康永3年（1344）以降定期的に「神幸」「潮垢離」を続けていると伝える。

12年ごとの申年に社殿の屋根の葺き替えや補修をする。屋根茅は村の共有地から購入し、屋根替えの経費と手間は氏子の間で賄う決まりであったが、昭和53年（1978）に本殿の屋根を銅板葺きにしたため、屋根替えはなくなった。社殿の補修に先立って下遷宮し、申年大祭は新たな社殿への上遷宮という意味を持つ。なお、浜下りに関する漂着神伝承はない。

(4) 祭 日

干支の申年の春先に大祭は行われる。古来、旧暦4月初申であったというが、明治37年（1904）の郷社昇格を機に旧暦4月27・28日に変更したという（「昭和31年無形文化財指定申請書」）。昭和31年（1956）も4月27・28日を踏襲したが、同43年（1968）から4月21日に変わり、55年（1980）は4月19日（土）、22日（日）、23日（月）と土日を勘案するようになった。平成4年（1992）は4月第一土・日、同16年（2004）も4月第一土・日、28年（2016）は直近の申年の大祭で、4月2日（土）・3日（日）。2日にお浜下り、3日は「御開帳」であった。

(5) 伝承団体

平成28年の大祭では、日吉神社宮司が「斎主」を務め、親戚筋の男山八幡神社（Ⅲ-11）宮司も奉仕する慣例がある。日吉神社の氏子は神社が立地する大字江垂のほか、塩崎、川子、大内、小島田の範囲である。大祭は各集落の氏子総代で組織される「日吉神社特別祭典委員会」を中心に、日吉神社崇敬者、浜総代（大字烏崎）が加わり実施に向けて協議する。特別祭典委員会は日吉神社総代から祭典総裁を1人出し、副総裁2人、会計2人のほか、江垂、塩崎、川子、大内、小島田の行政区長も入る。

1年半ほど前から氏子総代や氏子の大字の祭典係が会合を持ちながら大祭の準備を重ね、祭りの経費は氏子からの積立金、一般からの募金で賄う。

(6) 神幸経路（図1）

神幸地／神社から4キロメートルほど離れた鹿島区烏崎集落の通称烏崎浜（烏浜）に祭場を設け、

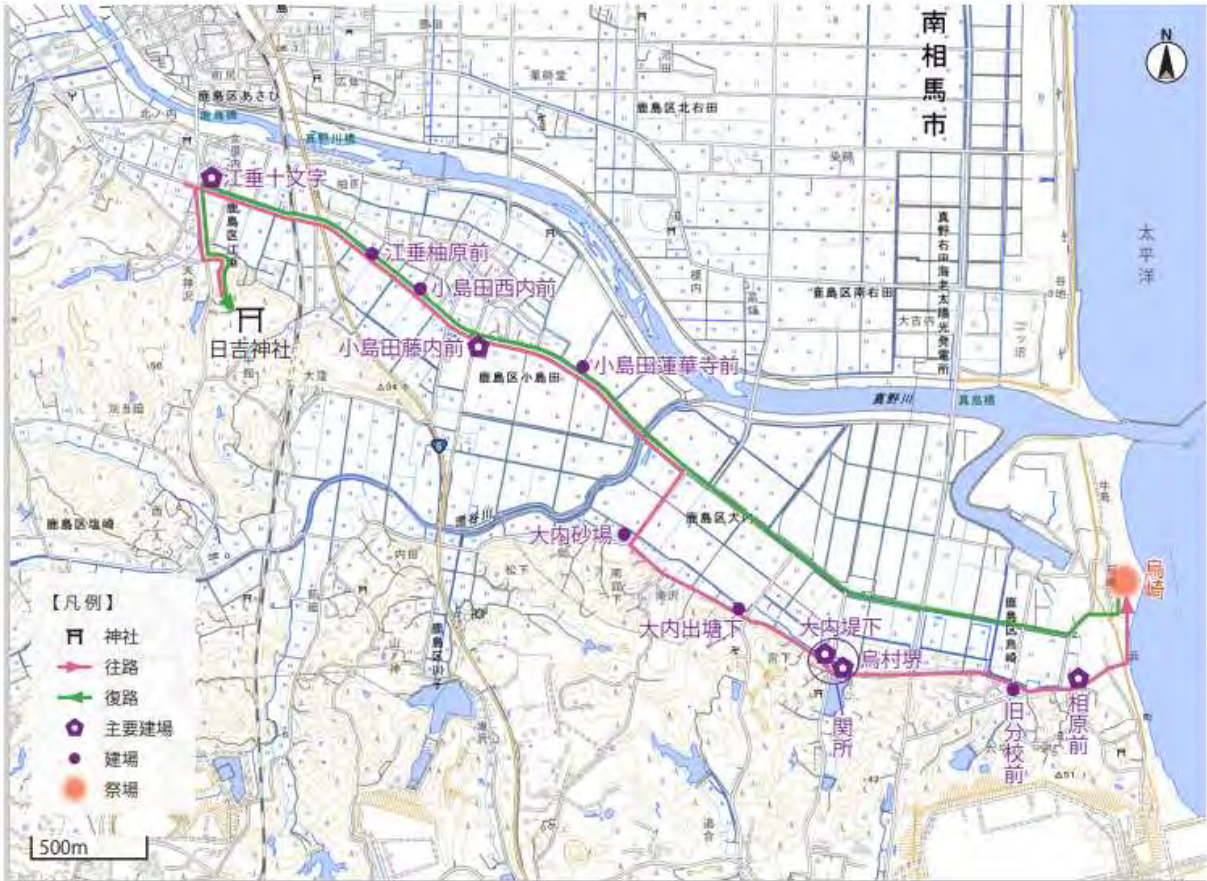


図1 日吉神社の神幸経路（昭和55年4月20日）

祭場に向かって神幸し、祭場での祭礼が終わると神社に還御する。

神幸経路／神社を出発し、途中に設けた^{たてば}建場に神輿を安置して芸能を奉納し、次の建場に向かう。建場はお旅所で、その数は社会情勢を反映し、祭りごとに増減がある。たとえば、大きな被害を受けた平成23年（2011）の東日本大震災後初めて行われた平成28年の大祭では、鳥崎集落の流失、神幸経路が未整備であるため、建場は「江垂十文字」と大内鳥崎境の「堤下」の2か所に限定された。

建場は十字路や寺社前に設けられ、立地する大字がそれを設営する。これらの建場は大正9年（1920）の「祭典規定」に明文化されており、それ以前からの建場を踏襲したものと考えられる。

なかでも、「江垂十文字」「小島田^{とうないまえ}藤内前」「大内堤下^{からすむらざかい}」「鳥村堺^{つづみした}」「相原前（札場）^{ふだば}」を「主要建場」という。道沿いの空き地の四周に斎竹を立てて注連を巡らせ、中に台を置き、神輿を安置する。神輿の前で宮司が祝詞を読み、大字の役員が玉串をささげて祭式を執り行ったあと諸芸の奉納がある。大字内から大勢が見物に集まり、賽銭や祝儀を出す。「江垂袖原前」「小島田西内前」「小島田蓮華寺前」「大内砂場」「大内出塘下」の建場は神輿が立ち寄る程度で、短時間で通過する。鳥崎の「旧分校前（旧真野小学校鳥崎分校）」の建場は「お昼場」ともいい、昼食をとる目安にしてきた。

なかでも重要なのが大字大内と鳥崎との境にある「大内堤下」と、連続した「鳥村境」の建場で、「関所」ともよばれ、型に則った儀式が執り行われる。

そのあとは鳥崎集落を抜け、集落北側の砂浜に設けた祭場に向かう。

(7) 祭りの内容

潮水の扱い／海に入って、桶に潮水を汲んで神輿の神前に供え、大榊で修祓する。この一連の流れを潮垢離という。

実施内容／潮を汲むのは鳥崎の区長が代々務めることになっている。下帯に白装束に着替え、裸足に

なった区長が、神輿の前で神職から桶を受け取り2人の警固の先導で海に入る。潮水は3つ目の波の先まで進んで汲むものとされ、胸のあたりまでの深さに浸かる。汲んだあと、潮が入った桶をささげて警固の先導で祭場に戻り神職に手渡す。神職は桶を神輿の神前に供え、大榎で神輿や祭場を祓い、その後一連の祭式を行う。

① 昭和55年の「申年大祭」

直近の平成28年の「申年大祭」は例年とかなり異なる手順であったので、「申年大祭」の典型例として昭和55年（1980）を取り上げておきたい（『鹿島日吉神社のお浜下り』による）。昭和55年申年大祭は4月19日から21日まで3日間にわたって執り行われた。

4月19日は「献撰祭」で、神社役員や関係者が拝殿に参集して献撰する。

本祭の「御発幸祭」は翌日4月20日であった。午前5時半、本殿内で宝財踊を演じるなかで神職が神輿にご神体を移す。行列帳に従って行列を組み、6時に神社を出発する。大字額（村額）を先頭に大字ごとに行列を組みため列は長大になる。大正9年の「祭典規定」に従い、先陣が大字塩崎、次いで川子、鳥崎、大内、寺内、小島田、鹿島、江垂順で、お供の大字が多ければ行列は長くなる。

行列は別記の経路をたどって建場に立ち寄りながら、午後1時に浜の祭場に到着し「御浜祭」となった。昭和55年当時は、徒歩で建場を経由し海岸の間を往復するので、8～9キロメートルも歩く。昭和55年大祭では11か所の建場を設けた。出発時には行列は一体となって進むが、芸能を演じる建場を経るごとに行列は途切れていく。

「大内堤下」の建場に入る前には整列し直し「関所」に臨む。「関所」の鳥崎側には紋付羽織袴で正装した鳥崎集落の「御目付」とよばれる「浜役員」が待ち受け、警固役の青年2人が6尺の長さの青竹の棒を組んで道をふさぐ。行列先頭が「関所」に到着すると、神社の「祭典総裁」が「祭典列帳」と「引渡状」を鳥崎の「本締」である「浜格取締」に渡し、鳥崎から発行する「受取状」と交換する。「関所」を境に行列の運用は鳥崎集落（「浜格」と称する）に委ねられる。浜格本締と御目付は「祭典列帳」に従い、人員と芸能の内容を照合する。近年はかたちばかりになっているが、吟味が厳密な時代には演目の省略や欠員があると厳しく追及し、やり直しを命じることもあったという。建場で時間がとられるため、海岸の祭場までは7、8時間もかかる。

竹矢来で囲った「お浜の祭場」は鳥崎集落の北側の広い砂浜に設けられる。浜の祭場の設営は鳥崎に一任されており、大正9年の「祭典規定」によって、祭りの10日前まで矢来竹200本と警固用の5寸竹（孟宗）25本を鳥崎に届けることになっている。砂浜に円形に竹矢来を設けて内側を祭場とし、祭場の奥には砂を盛って神輿を置く祭壇を築く。祭場への入り口は海側で、2本の幟を立て鳥崎の警固役が警固の竹を持って入り口を固める。行列が到着すると海側から祭場に進み、海側に向けて祭壇に神輿を安置する。

行列の一行は竹矢来の内側に敷いた莫菴に着座し「お浜祭」となる。お浜祭は、潮を汲んで神前に供える「潮垢離」と「諸芸奉納」からなる。昭和55年は奉納する芸能の数が多いため、お浜祭りは夕方までかかった。諸芸奉納ののち還御する。還御の順序は出発時と逆で、先陣が江垂、後陣は塩崎が務める。帰路は堤下を通らずまっすぐ神社を目指す。お供の芸能はその大字までお供し、役員や大字代表は神輿に付き従う。帰着が午後8時で、ただちに宝財踊の奉納のなかで、ご神体を本殿に納めた。その後「還幸祭」となり午後9時に終了した。

4月21日は「御開帳祭」。神社境内の社殿前と別に設けた特設の舞台の2か所で午前9時から諸芸の奉納がなされ、奉納は終日かかる。大正9年の「祭典規定」では、「御開帳式」には氏子は「一戸一人」参拝するものと定めている。3日にわたる「浜下り大祭」の中心になる神輿の行列は、関係者を含めると600人もの規模であった。

② 平成28年の「申年大祭」 *を付した写真は年代が違うが参照として掲載した。

「日吉神社特別祭典御供列帳」(平成28年)によれば、平成28年の祭典総裁は日吉神社神社総代長、副総裁も総代から選出された。()内は人数。行列の順は祭礼額(2)、大麻(1)、塩崎獅子踊(6)、宝財額(2)、宝財踊(17)、江垂神楽(14)、棟札(1)、大榎(2)、小榎(3)、五色旗(3)、金襴旗(2)、奉幣(3)、御供物(5)、棟札(2)、齋官(1)、宮脇(5)、御神輿(15)、齋主(1)、五色旗(2)、これに一般参列者が付く。東日本大震災後初めての大祭は、列帳記載の参列者が87人と例年に比べ規模は縮小された。

平成28年列帳のなかの「祭礼額」「宝財額」はこの祭りに特有な配役である。前回の平成16年までは「村額」とか「村印」「大字額」と呼ばれる配役があったが、平成28年には見当たらない。「額」とか「印」は、竹竿のさきに大字名や芸能名を書いた行灯形の箱を取りつけ、天辺に模造の芭蕉の葉の飾りを挿した標識で、お供の大字や芸能組の先頭に付き、行列の所属を示す(写真1*)。すでに元文5年(1740)の列帳にも登場する配役であった。「村額」はお供する大字の数を表している。

平成28年の大祭は4月2日朝、慣例に従い拝殿で宝財踊を演ずるなかで「齋主」がご神体を神輿に移す(写真2*)。祭典総裁の指揮で、列帳の順に境内で行列を組み神社を出る(写真3)。以前は全行程徒歩であったが、平成に入ってから自動車なども使うようになった。江垂十文字の建場(江垂研修センター)までは徒歩で向かい、建場に神輿を安置して宝財踊、江垂神楽、塩崎獅子踊を奉納(写真4)、そのあとはマイクロバスやトラック、乗用車で「大内堤下」(関所とよばれる建場)まで移動。関所前で行列を整え、関所では祭典取締と浜格との間で行列の受け渡しをする(写真5)。その後、一行は浜の祭場に向かう。鳥崎集落は東日本大震災の大津波で人家が流失し更地の状態で道路も未整備であった。浜に設けた祭場は例年ならば竹矢来を組むが、この年は長さ1.8メートルほどの竹杭を砂に挿して注連を張り、円形に祭場を設けた。海砂を盛った上に海側に向けて神輿を安置し「お浜祭」となる(写真6)。慣例通り鳥崎区長が潮水を汲み(写真7)、齋主が神輿に供えて神事をし(写真8)、諸芸奉納に移る。浜の祭場で奉納したのは宝財踊、江垂神楽、塩崎獅子踊、鳥崎の子供手踊のみであった(写真9・10)。芸能奉納後神社に還御し(写真11*)、拝殿で宝財踊を踊るなかでご神体を神輿から本殿に納め還幸祭を終えた。その後、社殿内で江垂宝財踊、江垂神楽、塩崎獅子踊が奉納され、境内では日置流印西派の弓芸、川子の手踊、川子の鳥刺、鳥崎の子供手踊、下町の子供手踊の奉納のほか小島田の甕猩々かめしやうじやうが披露された(写真12*)。例年は翌日の御開帳で諸芸が奉納されたが、今回は浜下りの当日にまとめてしまい、翌日4月3日の御開帳は神事のみを斎行し、申年大祭を終えた。

(8) 祭礼の状況

平成23年に発生した東日本大震災を機に浜下り大祭の規模やかたちは大きく変わった。それ以前も、平成に入ると少子高齢化がすすみ、省略や縮小化が目立つようになっていた。大震災の津波による集落の被災、放射能汚染による避難は、祭りを支えてきた集落の弱体化、世帯の流出を招き、行事の省略や規模縮小が格段に進んでいる。昭和55年と平成28年の大祭を比較するとそれがよく分かる。

お浜祭の竹矢来の内側の祭場には莫蔭を敷き詰め、祭礼の役員のほか、お供行列の参加者は大字ごとに分かれて着座し、昼食をとりながら神輿の前で演ずる奉納芸能を見物して半日楽しんだ。大正9年の「祭典規定」では「鳥崎より五名以内の『茶番』を出し各祭典係員に饗応すること」とあるように、接待係を出してもてなすほどであった。竹矢来の外側にも、鳥崎集落のほか、お供の大字の家族、近郷の人たちが飲食物持参で奉納芸能の見物に集まり、たいへんな賑わいになったが、大震災により鳥崎の人家が失われたあとの大祭にはその面影はない。また、高い防潮堤は、浜辺に神輿を下ろすことを難しくしてしまった。

(9) 芸能等

浜の祭場では氏子内外の大字の諸芸が奉納される。平成28年は宝財踊、江垂神楽、塩崎獅子踊の3芸能に限られたが、それまでの「申年大祭」では多くの芸能の奉納があった。

昭和31年は塩崎の昭和踊、鳥崎の手踊3組、大内の万作踊と女子手踊、小島田は神楽と甕狸々、江垂は宝財踊、神楽、獅子舞、御葛籠馬^{おつづらうま}、ほかに手踊、弓芸なども加わった。

昭和55年の場合は、江垂宝財踊、江垂神楽、小島田神楽、江垂御葛籠馬、塩崎獅子舞、川子大鳥毛^{おおとりげ}、小島田大鳥毛、江垂鳥毛、大内万作、鳥崎北組手踊、川子手踊、鳥崎中組手踊、大内手踊、塩崎手踊、小島田狸々、寺内手踊などがお供している。3日目の「御開帳」にも神社で諸芸奉納がなされ「申年大祭」は終わるが、ムラマワリと称し、大字内で希望する家をまわって奉納した芸能を披露して歩き「お花」をいただく。

江垂宝財踊／日吉神社の「浜下り大祭」に限られる芸能で、12年ごとの大祭以外に演じることはない。

演者は江垂集落内の10～12歳の長男とされてきたが、条件を緩和しても踊り手を確保しにくい現状にある。遷宮と不可分の芸能で、これを演じないとご神体が動かないといい、下遷宮のときから踊る。変装した7人の侍が山王権現を奉じてこの地に出現したという伝説を、12年ごとに再現、追体験するものと考えられる。類例のない芸能で、この呼称や芸能史的な位置づけについては今のところ詳らかではない。

大祭の数か月前に躍り手を選定して練習を始める。かつては江垂在住の申年生まれの家督の12歳の男子から7人選んだとか、特定の家で継承したなどともいい、神話と結びつく厳格な芸能であった。配役は、柄杓まわし、オコダキ（オトダキともいう子ども抱きのこと。抱いた子は山王権現とも伝える）、山伏、獅子、^{ざるしたかぶ}箆下被り（箆籠下冠）、道心坊（カネタタキともいう）、座頭（ザトノボウと称している）。このほかに囃子として笛が付く。先頭の柄杓まわしが前歌を歌いながら舞庭に入り、7人が輪になって後歌を歌いながら執り物を振って左回りに舞う。

すでに元文5年の列帳に「ほうさいかんばん」「同おどり子」とあるので、江戸時代中期にはこの芸能があったと考えられる。安永5年（1776）の列帳には「宝財」、文政7年（1824）にも「宝財」、『奥相志』には「宝財獅子踊」とある。

類例がないとはいえ「宝財踊」は江垂以外にも「万作踊」などと称し伝承されている。これは江垂宝財踊から派生したもので、福島県立相馬農蚕学校の佐藤弘毅が昭和初期に当時の日吉神社宮司から許可を得て生徒に伝えたものという。佐藤は配役の7人に、^{すりこぎ}摺木かつぎ、伊勢詣、^{さいふり}賽振の3人を加えて10人にしたともいう。

塩崎獅子踊／大字塩崎に伝わる芸能で、「獅子舞」とも呼んでいる。獅子は4人で雄雌2人ずつからなる。小学1年から6年までの子どもが演じる。獅子頭は猪を象り、金色の日天を付けた雄、銀色の月天を付けた雌からなる。

江垂神楽／大字江垂の獅子神楽で、宝財踊と共に門外不出とされてきた。日吉神社例祭のほか正月中の「悪魔祓い」と称する江垂内各家の祈祷にも舞う。この神楽も青年たちが担ってきた。剣の舞と獅子舞からなる。

手踊／青年の手踊、女子の手踊、子ども手踊など年齢や性別に沿った各種の手踊がある。手踊はこの地方に盛んな芸能のひとつで、踊りの組は12年ごとの浜下りのような大きな祭礼に合わせて臨時に編成することが多い。かつては大字鳥崎の近隣組の上、中、下から手踊を出していた。子ども手踊は、踊り手経験者が成長して母親になり、子や孫に加入を勧めるかたちで継承されることも少なくない。

御葛籠馬／練風流の一種で、江垂、台田中にあり、小島田の甕狸々も同様である。飾り付けをした馬を引き回し、馬の前後に立った歌い手が、道中めでたい歌を歌う。馬の左右に^{つづら}葛籠を下げ、その上

に色とりどりの花嫁の帯を30枚ほど重ねて敷き、さらに紅白の幕を巻いた櫓を組んで造花を飾る。

(10) 関連資料

「元文五歳かのへ申四月二日 山王様御浜下り行烈帳」(福島県鹿島町『鹿島町史』第4巻 近世資料、平成5年所収) が記録ではもっとも古い。近世の資料としてはほかに安永5年の「山王大権現御祭禮行烈帳」、寛政元年「日吉権現菩薩御浜下供列」、文政7年「山王大権現御祭禮行烈帳」、安政7年「御山王行烈帳」などがある。明治時代以降の関係資料も多数ある。大正9年の「郷社日吉神社特別祭典例」「細則」は従来からの慣例を明文化した文書で、この祭りの厳格なルールを示す資料である。関係する「お供部落」でも公文書としての祭礼記録を保管している。

参考文献・資料

相馬市史編纂会『奥相志』(『相馬市史』4 資料編1 1969)
福島県鹿島町『鹿島日吉神社のお浜下り』鹿島町文化財調査報告書 (1981)
福島県鹿島町『鹿島町史』第6巻 民俗編 (2004)
「平成二十八(丙申)年四月二日 日吉神社特別祭典御供列帳」「同日吉神社御浜下り大祭式順番」(竖帳文書) 南相馬市博物館 DVD『日吉神社の浜下り - 本編』(2016)
「無形文化財指定申請書 日吉神社御浜下り大祭」(謄写刷、昭和31年4月の大祭記録。福島県無形文化財に申請するための鹿島町の調査か)

【岩崎真幸】



写真1 大字大内の行列。先頭に「籠馬」次に「村印」、お供が続く (H4.4.5 南相馬市博物館)



写真2 ご神体(左)を動かす際には宝財躰を踊る(日吉神社拝殿 H16.4.4 南相馬市博物館)



写真3 江垂十文字建場に向かう神輿行列 (H28.4.2 南相馬市博物館)



写真4 塩崎獅子踊の奉納(江垂十文字建場 H28.4.2 南相馬市博物館)



写真5 「関所」、堤下建場での行列の受け渡し (H28. 4. 2 南相馬市博物館)



写真6 烏崎浜の祭場。海側から祭場に入る。竹矢来の組み方が前回までと違う (H28. 4. 2 南相馬市博物館)



写真7 潮垢離。烏崎区長が潮水を汲む (烏崎浜 H28. 4. 2 南相馬市博物館)



写真8 潮水を浜の祭場で神輿に供える (烏崎浜 H28. 4. 2 南相馬市博物館)



写真9 諸芸奉納 (江垂神楽 烏崎浜 H28. 4. 2 南相馬市博物館)



写真10 諸芸奉納 (烏崎子供手踊 烏崎浜 H28. 4. 2 南相馬市博物館)



写真11 神輿が神社に還幸する (H16. 4. 4 南相馬市博物館)



写真12 風流の山車、大字小島田の「甕狸々」 (H4. 4. 5 南相馬市博物館)

5. 浪江町 茗野神社

(1) 神社の概要

名称／茗野神社くさの 通称／アンバサマ

所在地／双葉郡浪江町請戸なみえ まちうげど ひがしむかい 東 迎 38

由 緒／双葉郡浪江町請戸は、阿武隈山地あぶくまに端を発して太平洋に注ぐ請戸川の河口にある集落である。請戸川は水量が多く、河口の地形が船着き場に適していることから古くから港が開かれた。江戸時代には相馬中村藩の浜倉が2つ置かれ、南標葉郷しねはと北標葉郷の年貢米はここに集められた。藩の千石船の出入りも盛んで、岩手県の宮古などから南部鉄も運ばれた。

平成23年(2011)の東日本大震災で被災するまで請戸の集落の戸数は約400戸で、半農半漁ながら生活の基盤は漁業であった。この地方の漁船には、今なお茗野神社にちなむ明神丸という名がよくみられる。

茗野神社の祭神は高竈神たかおかみのかみで、古来、降雨や止雨を司る神として信仰されている。平安時代の初期に編まれた『延喜式』の巻第十に「標葉郡一座小 茗野神社」とあり、古くは浮渡明神うけどともいわれた古社である。また、相馬中村藩が編纂した『奥相志』によると、茗野神社の縁起は次のとおりである。

はるか昔、浮渡(茗野)の沖から船が一艘たどり着いた。中には神女が9柱おり、霊なる光を放ち、その美しさは尋常のものではなかった。浜の阿部という者が怪しんで、鉾を握りしめてこれに向かったが、老夫婦が叱ってとめた。そして神女を崇拝して茅の庵を造って移した。老夫婦は翌朝行ってみると、紫の雲がたなびき、よい香りが漂っていた。すると神女は、東国にとどまって国の安全と繁栄をかなえ、災難を除き、荒波を静めて海難を救うであろう。そのためは茗野の小島に社殿を建て、茗野の神を祀るようにと告げた。老夫婦は喜んでそのとおりにした。それからは海が荒れても、この神に祈るとたちどころに静まった。養老年間(717~724)になって、元正天皇はこの話を聞き、神像9柱を造って贈った。その後、年を経て小島は波に洗われて崩れ落ちたために、社殿は現在地に移したという。

(2) 祭りの名称

安波祭りあんば

(3) 祭りの由来

海辺の近くに鎮座する茗野神社は、一般には「アンバサマ」といって親しまれている。アンバ(安波)とは、茨城県稲敷市阿波の大杉神社のことといわれているが、船には必ず祀る船霊様の親神という伝承もある。当地でも豊漁・海上安全の神として地区の人びとの信仰を集めてきた。大杉神社を総本社とする安波信仰は、漁師によって太平洋岸一帯に広まり、その分霊は各地に祀られていることから、この地にも伝えられたと考えられる。

(4) 祭 日

毎年2月第3日曜日。かつては旧暦1月24日。戦後まもなく新暦の2月24日になり、その後、現在の日程に変わった。

茗野神社の祭りは、村祈祷と安波祭りである。村祈祷は元日から3日、または4日にかけて行われた。神楽に携わる会員は元日の午前8時までに青年会場に集合して準備を整え、それよりまず舞を茗野神社に奉納し、さらに集落の南から北に向かって戸ごとに舞い込んだ。これを「村回り」といった。旧年中に不幸のあった家は遠慮した。忌の期間は、親は1年間、出産は差支えなかった。3日までに回りきれないと、翌4日に巡った。「朝神楽」といって早いのが喜ばれた。各家では神棚か床の

間のある部屋で舞った。祝儀はコメ1、2升で、多い家では5升到現金を添えた。この「村回り」は昭和12年（1937）頃までで、以後中止し、同21年（1946）に再興したが、同40年代（1965～74）に再度中止した。

安波祭りには社殿での祭典のあと神楽と田植踊を奉納し、ご神体を神輿に遷して、すぐ近くの請戸海岸まで渡御して、潮水を供え、神楽と田植踊が披露される。

(5) 伝承団体

茗野神社宮司、茗野神社氏子、請戸神楽保存会、請戸芸能保存会。

ただし、令和5年（2023）は同町内にある初發神社（北幾世橋字町後）の禰宜が執り行った。

(6) 神幸経路 (図1)

神幸地／もとは請戸浜。東日本大震災以降、神幸は行われていない。

神幸経路／先神輿と後神輿にお供をした一行は、出御すると神社の鳥居をくぐって南北に通っている大通りに出て、ともに南下する。先神輿はそのまま集落のはずれまで進み、そこから戻って左折して、北西の集落を回ってから浜の祭場に向かう。一方、後神輿は大通りの途中で先神輿を待ち、合流すると出発し、途中から分かれて集落の北部を回り、鈴木酒造店で先神輿を待ち、合流すると揃って浜の祭場に向かう。



図1 茗野神社の神幸経路（東日本大震災以前）

*昭和62年6月30日国土地理院発行2.5万分1地形図を加工して作成

(7) 祭りの内容

潮水の扱い／令和5年度は祭礼の開始前に前もって手桶に潮水を汲み、これを供えた。東日本大震災以前は、神輿が集落を練り、浜の祭場に設けた御小屋おこやに着いてから汲んだ。

実施内容

東日本大震災以前

祭りに先立って、氏子の新婚は「婿役」といって、御小屋といっている祭場や神輿が渡御する道路の注連張りをする。当日は、神楽の太鼓打ちとそれを担ぐ役も担う。また、祭りに携わる者は、その間は堆肥や下肥などには穢れるといっって触れない。

祭り当日、午前10時半から社殿に神社や漁業の関係者、消防団の役員などが参列して祭典が行われ、巫女舞も奉納される。引き続いて社殿前で神楽と田植踊、手踊も行われる。

これより神輿渡御である。先駆、社号旗、塩撒き、囃子方、神楽、金銀の御幣、神幣、宮司、神輿、田植踊の踊り手の順に進む。神輿は安波大明神と大杉大明神のご神体を遷した2基である。このほかに樽神輿と子ども神輿も、お祓いを受けて出発する。神輿は集落内を練り、午後1時過ぎに浜の祭場に設けた御小屋に着く。

御小屋には幕が張っており、その上座には砂を盛り上げた壇が作られている。両神輿はここに海に向けて安置し、子ども神輿も置かれる。ここでも修祓、祝詞奏上、玉串奉奠などの祭式が行われる。神職は水引をかけた杓と桶を青年の役員に渡すと、青年は沖に進んで潮水を汲み取って持ち帰り、神職に渡す。神職は浄めの祝詞を唱えながら柄杓でこれを神前に供える。

この神事が、神輿が浜に渡御する「浜下り」の主たる行事であるが、当地ではこの祭りを「浜下り」とは呼んでいない。この桶の潮水の濁り具合で漁や稲作の豊凶も占うという。潮水を供える神事は質素ながら整っており、占いがついていることも珍しい。ここでも神楽と田植踊や手踊が奉納される。

この頃、樽神輿が到着して、海に入って勇ましく揉む。樽神輿は戦後まもなく漁師などによって始められたものであるが、今ではこの祭りに欠かせないものになっている。

浜での神事がすべて終わると、神楽と田植踊の一行は新築あるいは船を新造した家、さらには厄年の家族のいる家、商売繁盛などで依頼があった家などに舞い込む。午後4時頃に還御となり、社殿前で神楽を舞い、祭りはすべて終わる。

令和5年

2月19日朝10時、**菖野神社**の境内に氏子、神楽と田植踊の両保存会等の面々が集合。また、現在は請戸地区外に避難している方も含め、元町民も集まった（写真4）。

初發神社の禰宜により、修祓、献饌、祝詞奏上、雅楽奏上、玉串奉奠と一連の神事が執り行われた（写真5）。神事が終了すると、諸芸能の奉納となり、神楽および田植踊と手踊が奉納され（写真6～8）、地域の豊漁・豊作、復興とともに、**菖野神社**の再建が祈願された。しかし、安波大明神と大杉大明神の神輿の渡御や町内巡行などは行われていない。それでもこの年には、少しでもかつての姿を取り戻すため、神社奉納のあとに請戸の商店街跡、災害公営住宅の請戸住宅団地、幾世橋住宅団地の3か所で田植踊が披露された。

(8) 祭礼の状況

平成23年、東日本大震災により浪江町の沿岸部は甚大な津波被害を受けた。これにより**菖野神社**の社殿も流出。当時の宮司と家族も犠牲となった。平成24年（2012）には本殿跡に仮社殿が造営されるが、福島第一原子力発電所の事故による影響で祭礼は中断を余儀なくされた。平成30年（2018）には避難指示の一部解除により、じつに7年ぶりに地元で斎行された。しかし、津波被害の著しかった請戸地区は引き続き災害危険区域に指定されており、実質的には人が住むことはできない。祭礼の担い手であった地域住民も請戸から離れて生活を営んでおり、祭礼の実施にあたっては大きな労力が必要とされる状況である。

また、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の流行拡大に伴い、令和3・4年（2021・22）は規

模を縮小し、関係者で神事のみを執り行うというかたちをとらざるを得なかったが、令和5年には諸芸能を奉納するかたちに戻すことができた。

こうしたなかで、これまでは社殿跡地の境内で行われてきたが、令和6年(2024)には13年ぶりに社殿が再建され、竣工式とともに安波祭りも社殿の前で斎行された。

(9) 芸能等

令和5年にはコロナ禍を経て3年ぶりに社殿跡地で神楽および田植踊が奉納された。以前は浜に祭場が設けられ、神輿の渡御に併せて、ここでも芸能が奉納された。震災以降は浜への渡御が行われていないため、浜での芸能奉納も行われていない。

神楽／大神楽系の舞で、一般には「神楽」といつているが、明治時代に請戸に住んでいた横山八百八の尽力があったことから、「八百八神楽」の別名もある。舞は、戦後まもなくまでは青年団、それ以降は請戸芸能保存会(現在は、請戸神楽保存会)が継承している。しかし、令和5年時点での会員は9人と減少傾向にあり、しかも東日本大震災の影響から会員が県外を含む町外に居住していることから、合同の稽古の実施が難しいという問題も抱えている。

舞は4種あり、令和5年もこれらが奉納された。初めは「四方固め」である。次は「幣束舞」で、続いて「鈴舞」。最後は「あばれ」(一般には「乱舞」とか「散舞」)である。激しく舞うことからついた名であろう。

獅子頭は新旧の2つがある。古いものは鼻が大きくて高く、彫りも深く堂々とした造りである。江戸時代の比較的早い時期の作と思われる。塗りが一部はがれ、ひび割れもあることから使用していなかったが、大震災の津波で流失した。新しいものは古いものより高さが約8センチメートル高く、一般の獅子頭に近い。

神楽は前述のように、横山八百八が、現在の南相馬市^{おだか}小高区村上から習い受けたという。たしかに村上の神楽とよく似ている。しかし、その一方で同区^{つかばら}塚原からとの伝えもある。いずれにせよ古い獅子頭は江戸時代のものであることから、一時中断したのを惜しみ、明治になって八百八らが復活したのであろう。舞は4種目すべてを伝えていて、信仰深く、しかも格調高く舞っていることなど、この地方の典型的な舞である。東日本大震災により一時中断したが、神楽は平成26年(2014)に再興した。

田植踊／田植踊は、本来は小正月に戸ごとに舞い込んで豊作を祈る予祝の芸能である。請戸ではこの茗野神社の安波祭りに行われ、かつては祭礼のあと4、5日かけて全戸を巡った。昭和32年(1957)頃までは青年団が継承していたが、のち、請戸芸能保存会が引き継いだ。昭和30年代からは、請戸の中心である本町^{もとまち}の育成会に属する中学生を主とし、高校生も加わるようになった。しかし、本町の戸数は40数戸のために後継者不足となり、のち請戸小学校(請戸小学区全域)の小学4年生から6年生の児童で、中打ちには中学生が加わることもあるというかたちになった。

また、東日本大震災後には、神楽同様、踊り手となる児童は県外を含む町外へと避難を余儀なくされた。そのため、現在は年齢や地域の縛りを緩めて踊り手の確保と育成に努めているが、居住地が離れたことによる稽古や行事への参加が難しいという問題も抱えている。

田植踊のあと、「大漁節」や「伊勢音頭」などの手踊も踊る。とくに漁師の家で「大漁節」は歓迎されたという。

かつては社殿前での奉納のあとは神輿に供奉して浜の祭場に向かったが、平成7、8年(1995・96)頃からは神輿と離れ、祝い事や厄流し、祈願などの依頼があった民家などを巡ってから浜に向かうようになった。また、浜での祭礼の後、神社に戻るまでも民家を巡った。震災後は浜への渡御がなくなったこと、また請戸地区自体が津波被害により往時の町並みを残してはならず、そもそも住民もいないため、こうした村回りは行われなくなっている。

田植踊については、次のような伝えがある。約330年前の延宝年間に、この地方は大凶作に見舞われ疫病も流行した。そのため若野神社に祈ったところ翌年は豊作になった。村人は喜んで旧暦1月24日に社殿で宴を開いて感謝した。村人が踊りだすとどこからともなく2人の踊り手が現れて加わった。神職にたずねると神の子であるという。村人は神に感謝の念が通じたと信じ、この日を祭日にするとともに、田植踊も奉納するようになったという。

実際、田植踊は約200年前の文化年間からそう遡らない時期に会津盆地で生れ、県北地方を経て、たびたび飢饉に見舞われた旧相馬中村藩内に急速に広まった。したがって当地の伝承は、若野神社への厚い信仰が背景にあって生まれたのであろう。前述のように当地には南相馬市小高区村上から習い受けたと伝えていて、先方にも同様な伝承があることから、この伝えは史実とみてよいかと思われる。この田植踊は、旧相馬中村藩内のみならず、県内の田植踊のなかでも、歌は小節こぶしの多い技巧的な節回しで、踊の振りは一変ながら芸能化が進んでいる。近年、後継者難で担い手は子どもに移したが、これは県内ではさきがけである。

震災後は浪江町役場を置いた二本松市で、被災からわずか4か月後の平成23年7月2日から田植踊の練習を開始した。これは当時副会長の佐々木繁子氏やいわき市大國魂神社おおくにたま（II-11）宮司の山名隆弘氏の尽力によるもので、8月21日にいわき市のアクアマリンふくしまで開催された民俗芸能合同公演イベント「海道の歴史と文化に学ぶ」にて「請戸田植踊」を披露した。これは再興第1号で、中断している他の保護団体に大きな影響を与えた。さらに、翌24年からは2月に福島市の仮設住宅を巡り、町内の避難者に勇気を与えた。同26年から、現地の若野神社での祭典執行が復活する令和4年（2022）以前には仮設住宅の広場に祭壇を設け、遠く請戸の地から若野神社の祭神を一時的に勧請して踊りを奉納した。

（10）関連資料

—

参考文献・資料

- 懸田弘訓『ふくしまの祭りと民俗芸能』歴史春秋出版株式会社（2001）
福島県教育委員会『福島県の祭り・行事』福島県文化財調査報告書第425集（2005）
浪江町史編纂委員会『浪江町史』別巻II 浪江町の民俗（2008）

【懸田弘訓・山口拡・大里正樹】



写真1 仮の社殿前に据えられた祭壇（若野神社社殿跡地 R5. 2. 19）



写真2 供えられた潮水（若野神社社殿跡地 R5. 2. 19）



写真3 令和5年時の祭祀場の遠景（神社跡）（苕野神社社殿跡地 R5. 2. 19）



写真4 氏子、芸能の保存会等が集まり神事が始まる（苕野神社社殿跡地 R5. 2. 19）



写真5 初禊神社禰宜により一連の神事が斎行される（苕野神社社殿跡地 R5. 2. 19）



写真6 神楽奉納（苕野神社社殿跡地 R5. 2. 19）



写真7 田植踊の奉納（苕野神社社殿跡地 R5. 2. 19）

写真8 かつての商店街跡でも踊った（請戸地区の中心地であった本町付近 R5. 2. 19）



6. 双葉町 初發神社

(1) 神社の概要

名 称／初發神社

所在地／双葉郡双葉町長塚町56

由 緒／社頭に掲げられた由来記は以下のとおりである。

相馬妙見宮初發神社は祭神天之御中主大神を奉祀し、造化の大主万物の元靈にして森羅万象、此の大神の御神頼に依らざるはなし。其の御神徳の昭著なること神典に明かなれば多言を要せず。

抑も当神社の御来歴を回顧するに皇朝第五十代桓武天皇の御代下総国（現千葉県）染谷川の川上に建立したる相馬氏累代の鎮守なり。

相馬小次郎平将門朝臣の相馬孫五郎平重胤朝臣元亨三年後醍醐天皇の宣により当国の檢断職に補せられ移封下向の途、当区別処館に至り此の地に累世崇敬の妙見大明神を勧請し奉り元標葉の総鎮守と定め初發の社号を冠せられたり。然るにこの当時此の地は人跡烟々たる寒村にして爾来地方開発に伴い物産の繁栄を来されたり。相馬讃岐守平顕胤朝臣の代に到り天下泰平国家安穩郷中安泰五穀豊穰を祈願、神蹟益々新たに代々藩主厚く篤敬し数多の神田神地を奉納、大永三年郡内三十二ヶ村の郷社と改め嚴重に春秋祭祀藩費を以て執行され、靈驗愈々著しく殊に天明卯年の大飢饉に当郷は五穀成就、飢死少なく万民は憐れみ広く世を救うの御神徳の嚴然として廣大無辺なることを悟り益々当地方の崇敬篤く、祭日には四方遠近よりの参詣多し。

因みに当社の祭日は

月次祭 毎月二十二日 祈年祭 正月二日

春 祭 四月二十二日 秋 祭 九月二十二日

式年例大祭 亥年 四月二十二日

(2) 祭りの名称

初發神社式年遷宮祭、式年例大祭、オサガリ、ハマサガリ

(3) 祭りの由来

先に掲げた由来記に「式年例大祭」とあるように、浜下りの行事はこの「式年例大祭」の時、すなわち亥年の行事であった。祭礼日は、もともとは旧暦3月22日だったが、それが新暦の月遅れで4月22日となり、さらに行列や神輿渡御の人員を集める都合上、その前後の土日にあわせて祭礼日を決めるようになったという。初發神社の式年例大祭の実施日（3日間のうち、潮垢離神事のある中日）について、残された近年の記録の範囲では、昭和46年（1971）は、4月22日（木曜、大安、旧3月27日）の平日に浜下り行事を行っていた。その後、昭和58年（1983）は4月17日（日曜、旧3月5日）、平成7年（1995）は4月23日（日曜）、平成19年（2007）は3月31日（土曜）というように、会社勤めの人でも参加しやすい日程が選ばれるように変化していったとみられる。

亥年に執行される式年例大祭のなかでも、最も大切な行事が「潮垢離神事」であった。高倉洋尚宮司（昭和37年〔1962〕生まれ）はこの浜下りの行事の意義を、浜に下りて潮垢離をすることで、ご祭神の神威を回復するものととらえている。

亥年以外は、神社で祭典（神事）だけは行っているが、神輿が浜へ下りることはない。浜へと神輿が巡幸するのは亥年のみである。伊勢神宮の例でいえば「式年遷宮」として社殿を造り変えるのであるが、初發神社も式年例大祭として、亥年ごとに社殿や境内のどこかを修繕したうえで、神輿が浜まで巡幸する、というしきたりであるという。

神社の運営に関しては、式年例大祭のようなかたちでの神社の修繕は、神社の維持管理のための資

金確保という面でも、大事なことであった。初發神社の場合は、12年間はそれを元手に維持管理をし、また12年経てば傷んだところを修繕し浜下りの神輿巡幸を行い、寄付を募る、そうしたサイクルがあった。また、潮垢離に関しては、初發神社以外でも、高倉宮司の兼務している範囲では、社殿に何らかの修理をした場合は臨時に浜に下りるものだという意識が氏子も含めてある。修繕等を行った際に、神威を高めるために浜に下りるあるいは潮水を供える（潮垢離をする）ということが重要であるという。高倉宮司の兼務する双葉町内のいくつかの神社（中野八幡神社〔※震災で流失〕や郡山八幡神社）に残る古い棟札にも、神社のここを造り替えたから浜に降りた、という旨を記したものが複数あったという。双葉町周辺では多くの場合、社殿等を造り替えることはハマクダリ・オサガリ（海浜に降りること）を伴うものであり、これは天領と相馬領の違いなのかもしれないとのことである。参考として、高倉宮司が兼務する同じ双葉町内の中野八幡神社は、平成23年（2011）、東日本大震災の津波によって社殿が流失し、あらためて避難区域の神社を祀る場（帰還困難区域など立ち入りの難しい多くの神社からそれぞれの御霊を招いて神事を執り行う場）である「合祭殿」を兼ねるかたちで再建・整備された。中野八幡神社および合祭殿の竣工祭にあたり、高倉宮司自身も近くの中浜まで行き、桶に汲んだ潮水を神前に供えたという。神社の新築や造替、修繕等に当たって、神社のご祭神が海浜へと降りること、あるいは神前に潮水を供えることにより、祭神の神威を高めるという儀式は重要なことであった。

(4) 祭 日

春祭は毎年、古くは旧暦3月22日（その後、新暦4月22日に変更）。浜下り（神輿の渡御）を伴う式年例大祭は12年ごとの亥年4月22日。

(5) 伝承団体

初發神社宮司。かつては青年会や老人会があった。もともとは6部落それぞれにもお神楽団体（保存会）があった。長塚一区、長塚二区、下長塚、上羽鳥、下羽鳥、寺松の以上6集落が氏子地区である。

(6) 神幸経路 (図1)

神幸地／郡山海岸

神幸経路／平成19年の渡御当日の神幸経路は以下のとおり。

8時半に役員らが集合し、神社での大祭の前にあらかじめ山側の氏子集落を神輿が神幸する。9時に神社を発輿、9時30分、下羽鳥地区の御旅所着。10時、上羽鳥地区の御旅所着。10時30分、寺松地区御旅所着。11時、神社に神輿が戻り、11時30分から式年例大祭の神事を行う。13時30分、神社前に参列者一同が整列し、神輿が浜へ向けて神社を出発。14時15分、長塚町を下向し、双葉駅を経て「請戸入口」交差点を右折し、下長塚の御旅所へ到着。その後、下長塚を経て県道254号（長塚請戸浪江線）を東進して交差点に至る。交差点を経て中浜部落に向かう。中浜を経て南進し、中浜橋を渡り海岸へ向かう。その後、15時半をめぐりに郡山海岸にて潮垢離神事を行う。16時半、郡山海岸を発輿。郡山地区上道を西進。郡山正八幡神社を経て下条地区に入る。双葉町役場北側の道路を通り、町役場に立ち寄る。国道6号、柳橋を渡り、消防屯所に至る。その後、新山地区の街並みの中を北進し、長塚地区へ戻る。17時30分、初發神社に神輿が到着し還御祭を実施。

(7) 祭りの内容

潮水の扱い／年男が海に入り、海水を桶に汲んで持ってくる。その後、宮司が汲んできた海水に榊を浸し、神輿へと散供する。

実施内容／関連資料にあるように、12年に1度の式年例大祭として、1日目の前夜祭・移御祭、2日目に大祭式・潮垢離神事・還御祭（この日に神輿が巡幸）、3日目の後鎮祭と、3日間にわたって行事が行われる。

神輿の巡幸は、昔は海岸までの道中をすべて担いで歩いてしたが、平成19年には行程の途中では



図1 初發神社の神幸経路（平成19年3月31日）

*昭和62年5月30日および6月30日国土地理院発行2.5万分1地形図を加工して作成

一部トラックを使うなど、運営面や行程面で無理のないように改善が図られた。

初發神社の式年例大祭では、海浜までの長い距離を神輿が巡幸する。その行程では、氏子の6地区（長塚一区、長塚二区、下長塚、上羽鳥、下羽鳥、寺松）だけでなく、ほかの地区も通行することとなる。このため巡幸ルートにある氏子地域外（両竹、中浜、中野、下条、新山の各地区）の区長にも依頼し、それぞれの区長が御先塩おさきじおを捧持し、地区内を巡幸する神輿の行列を先導する。御先塩とは三方に載せた塩のことで、その三方を持って歩けばおのずと塩が散って清めになり、その後ろを猿田彦がさらに清めて歩く。

神幸地は郡山海岸だが、もともと神輿が浜に下りたのは中浜が主であった。昔の中浜には岸壁もなく神輿の行列が容易に下りられたという。その後、海岸の整備などで中浜の海岸には下りるのが難しくなり、郡山海岸へと神輿の巡幸先を変更したという。

初發神社の神輿の各地区における御旅所は、寺松、上羽鳥と下羽鳥、下長塚、郡山海岸などに設けられた。御旅所は公民館や広場など、トラックや車等も止められる場所が使われる。各御旅所では祝詞をあげてから女子児童による浦安の舞を奉納し、それから神樂が奉納される。御旅所によっても違うようだが、羽鳥と寺松の御旅所では上羽鳥の神樂が奉納された。

平成19年は、1日目に神輿にご神体を移御したうえで、2日目は午前中の早い時間に山手にある3集落（寺松、上羽鳥、下羽鳥）を回っている。その後、神輿は一度神社へ戻り、午後には海浜へ向けてあらためて行列が出発するのである。

神社での大祭式に続いて、拝殿前の舞台や境内では、浦安の舞や長塚の神樂、上羽鳥の神樂が奉納された（写真1）。また、氏子地区ではないが、隣の新山地区の消防団による「宝財踊」もあわせて奉納された。

神社を出発するときには、列帳が読み上げられ、参列者は行列を整える。行列が出発すると長塚町を下向し（写真2）、次の御旅所は下長塚である。下長塚では、公民館の道路を挟んだ向かいに空き地があり、そこに神輿が安置された（写真3）。

神輿が向かう郡山海岸には柱やタケ、幟を立てて、神社の幕を張りめぐらした祭場が設えられている。神輿はそこに安置され、潮垢離神事が執り行われる（写真4）。年男が海に入り（写真5）、海水を桶に汲んで持ってくる。宮司がサカキを汲んできた海水に浸し、神輿へと散供し、祝詞を奏上する（写真6）。前後して、神輿が海岸に到着する頃には「標葉せんだん太鼓」の奉納演奏があり、祭場内では神輿を前にして御神楽奉納（長塚・羽鳥）と宝財踊（新山地区消防団）の奉納がある。神事終了後、神輿は帰路につき、郡山正八幡神社や双葉町役場を経て、初發神社へと還御する。

3日目は後鎮祭の神事と直会、直会が終わると祭りの後片付けが行われ、一連の行事が終了する。

(8) 祭礼の状況

初發神社は東京電力福島第一原子力発電所から約4キロメートルの近さに位置している。東日本大震災と原発事故に伴って、現在に至るまで多くの双葉町民が長い避難生活を余儀なくされており、平成19年の式年例大祭を最後に、初發神社では浜下り行事は行われていない。式年例大祭として亥年に行われる行事であり、本来ならば、平成19年の次は令和元年（亥年：2019）に式年例大祭を行うべきところだったが、震災後の氏子地域への帰還の状況が整っていなかったことや、多少遅らせて行うにしても、翌年以降は新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の流行により開催できなかった。ただ、被災した初發神社の社殿自体はその亥年の式年例大祭を見越して、間に合うように修繕を終えていた。高倉宮司自身は「祭りをやる気満々でいた」とのことである。宮司自身も現在はいわき市在住ながら、頻繁に双葉町に足を運び、昼間は初發神社の社務所に詰めて奉仕されている。

なお、毎年恒例の神事については、震災後3年目ぐらいから、春の祭典だけは復活して続けており、令和4年（2022）からはようやく秋の祭典も復活した。避難生活を送る氏子の人びとはいわき市在住者が最も多いというが、全国各地に居住している。それでも神事の時には、氏子総代と区長ら10人ほどが集まるという。現在では震災から14年以上を経過し、双葉町での生活経験の記憶が薄い、あるいはないという世代も増えつつあり、行事の継承には困難を抱えている。

今回の調査にあたり高倉宮司からご提供いただいた資料には、平成7年と平成19年当時の行事の記録写真があるが、その当時巡幸した街並みは地震や津波、原発事故という複合的な災害の影響を受け、さらにはその後の長期避難、解体除染、復興工事等が進むなかで多くが失われた。これらの写真資料は、行事のみならず、震災以前の当時の町のようすを伝えるものとしてきわめて貴重である。

(9) 芸能等

平成19年の式年例大祭では、浦安の舞、長塚の神楽、上羽鳥の神楽が奉納されている。また、氏子地区ではないが、隣の新山地区の消防団による「宝財踊」もあわせて奉納された。神事も大事だが、「神にぎわい」としての芸能は大事な要素であるという。

(10) 関連資料

「相馬妙見宮初發神社式年例祭大祭式 式次第」(抜粋)

[裏紙]
「平成十九年三月三十日（金）
三十一日（土）
四月一日（日）
相馬妙見宮
式年例祭大祭式 式次第
初發神社
双葉町長塚鎮座
相馬妙見宮初發神社社務所」
[2頁]
式年大祭齋員 [所役]

宮司 相馬妙見宮初發神社宮司 高倉洋尚
副齋主 双葉町 稻荷神社 宮司 嶋濱人
[祓主、陪讀、幣帛、撤饌（瓶子の蓋）]
齋員 大熊町 麓山神社 宮司 酒井正直
[大麻、膳部、案後取、玉串後取（幣殿）]
齋員 川内村 諏訪神社 宮司 久保田裕
樹 [塩湯、警蹕、手長1、軾後取、外玉串]
齋員 東京都 天沼八幡神社 宮司 鶴岡
隆志 [御饗後取、警蹕、手長2、祝詞後取]
獻幣使 広野町 檜葉八幡神社 宮司 岡田
正士

随員 相馬妙見宮初發神社 権禰宜 高倉
文向〔前導、典儀、手長3、幣帛、太鼓、
獻幣使玉串〕

伶人 久之浜 諏訪神社 宮司 高木美郎
〔竈笛〕

伶人 浪江町 碧野神社 禰宜 鍋島彰教
〔笙〕

伶人 大熊町 諏訪神社 宮司 武内重賢
〔箏樂〕

舞人 大熊町 諏訪神社 禰宜 守山かね子

〔3頁〕
神饌一覽
前夜祭（八台）
一、米二升 二、酒一升 三、海魚二匹 四、
野菜 五、野菜 六、果物 七、果物 八、
塩・水

大祭式（十二台）
一、米二升 二、酒一升 三、餅 四、野鳥
五、海魚二匹 六、川魚二匹 七、海菜 八、
野菜 九、野菜 十、果物 十一、果物 十
二、塩・水

潮こり神事 海岸にて
列中神饌に同 ◎、海水

還御祭（六台） 神社守護神職が献饌する。（午
後四時三十分）
一、米二升 二、酒一升 三、海魚二匹 四、
野菜 五、果物 六、塩・水

後鎮祭（八台）
一、米二升 二、酒一升 三、海魚二匹 四、
野菜 五、野菜 六、果物 七、果物 八、
塩・水

〔4頁〕
前夜祭、移御式次第
齋員 宮司 高倉洋尚、齋員 木幡清人、齋
員 高倉文尚

第一鼓 大太鼓

修祓
宮司一拝（宮司にあわせ神前を向き行う）
閉扉 齋員警蹕三声
献饌 瓶子の蓋をあける
祝詞奏上

◎移御式（明りを消し、絹垣を張る。宮司以下齋
員、参列者覆面をする）
宮司本殿に参入 灯明は拝殿のみ
出御、入御 御輿を正面に移動、齋員警蹕
（奏樂又は大拍子の連打）
玉串を奉りて拝礼 御輿の前で行う
宮司以下祭典委員長、祭典委員、他
撤饌 瓶子の蓋をしめる

閉扉 齋員警蹕三声
宮司一拝（宮司にあわせ神前を向き行う）
第二鼓 大太鼓
退下、直会 社務所
※神饌は午後五時までに献饌する。案類は予
め鋪設する。
準備物―神饌八台、玉串三十本、絹垣、覆面

〔5頁〕
前夜祭、移御式略図（略）

〔6頁〕
大祭式次第（事前に各所役の確認をすること）
宮司以下齋員、参列者 祓戸に着く 前に
手水の儀有り
修祓―神饌所、供奉物、宮司以下齋員、参列者
の順 境内の社頭に鋪設する
参進―所定の座に着く 伶人進樂を奏す

第一鼓 大太鼓
宮司一拝 参列者一同做う
閉扉―宮司伺候する 所役二名警蹕三声
奏樂
献饌―十二台 奏樂
宮司祝詞奏上 参列者一同低頭
献幣使幣帛を供す
献幣使祭詞奏上 参列者一同低頭
浦安の舞奉奏 境内の舞台にて
玉串を奉りて拝礼 奏樂
宮司―齋員列拝 献幣使―随員列拝
祭典委員長、氏子総代、区長、氏子青年会、
招待者、金幣、銀幣、奉幣、色幣、一般 各
代表 境内参列も同時に行う
撤饌―瓶子の蓋をしめる 奏樂
宮司一拝 参列者一同做う
第二鼓 大太鼓
齋詞舞奉奏、神樂奉納（長塚、羽鳥）、宝財
踊り奉納

※列中の読み上げ―祭典委員、氏子青年会は行
列を整理し混乱せぬよう供奉物を手渡す。
参進は午前十一時二十分、発輿は午後一時三
十分。渡御御先塩は各行政区長とする。

〔7頁〕
大祭式略図（略）
※玉串は殿上三十本、境内は二百本準備する。
※屋食は、受付の際祭典委員が渡し確認するこ
と。

〔8頁〕
列中
御先乗（消防団ポンプ車、騎馬）―猿田彦―社
号旗―御先塩（区長）―笛、太鼓―籠馬―稚児、
武者、神子―満作花―五色旗―神籬―大櫛―

大麻―紅白旗―色幣―神饌(六合)―四神旗
―奉幣―銀幣―宝財踊り―金幣―御神楽(長
塚・羽鳥)―神幣(祭典委員)―金幣(殿
内)―宝剑―神鏡―御神馬―副齋主―齋員
(冷人倉)―櫛箱―御輿―宮司―齋員―御幣
(招待者)―崇敬者、他

※御旅所(海岸)に搬出する物は、速やかに
準備する。

案二台、大拍子、玉串十本、大麻、神饌
(列中)、桶、神籬(潮こり用)、C D 他

潮こり神事式次第 御輿海岸に着輿

海岸に到着する頃 標葉せんだん太鼓奏納演奏

大拍子

修祓―御輿、宮司、齋員、歳男(二名)、参列
者、海

潮こり―歳男二人、桶、櫛を持ち海水を献上す
る。宮司、献上された海水を御輿に散供する。

祝詞奏上

玉串を奉りて拝礼―宮司(齋員列拝)、祭典
委員長、歳男

大拍子

御神楽奉納(長塚・羽鳥)、宝財踊り奉納

〔9頁〕

潮こり神事略図(略)

海岸に陣を作り竹、幕を張りしめ繩をはって
おくこと。

還御祭次第 鳥居より還御直ちに御輿を拝殿に
着輿(神社守護神職は事前に献饌
しておく。六合)

大太鼓、大拍子を連打 入御終了まで

宮司座に伺候する 齋員、参列者覆面をし絹
垣を張る。

出御、入御 齋員二名警蹕、奏楽

海水献上 副齋主

祝詞奏上

玉串を奉りて拝礼

宮司―齋員列拝 祭典委員長―参列者列拝

閉扉 齋員二名警蹕三声 奏楽

宮司一拝 参列者一同做う

大太鼓―終了後退下、直会 祭儀終了の一鼓

〔10頁〕

還御祭略図(略)

※直会は社務所及び農協の二階で行う。

後鎮祭略図(略)

〔11頁〕

後鎮祭次第

齋員 宮司 高倉洋尚、齋員 木幡清人、齋員
高倉文尚

第一鼓 大太鼓

修祓

宮司一拝(宮司にあわせ神前を向き行う)

閉扉(御神体を大床まで出御)宮司覆面をする

齋員警蹕三声

献饌 瓶子の蓋をあける

祝詞奏上

玉串を奉りて拝礼

宮司―齋員列拝 祭典委員長、祭典委員、
他(参列者は、覆面をして幣殿まで進む)

撤饌 瓶子の蓋をしめる

宮司一拝(宮司にあわせ神前を向き行う)

第二鼓 大太鼓

退下、直会

※直会終了後、かたづけを行う。一般参拝者
は拝殿で参拝する。閉扉時間は、正午まで
とする。

午後零時三十分閉扉 齋員警蹕三声

〔12頁〕

相馬妙見宮初發神社御輿渡行順路

予定時間 〔御先塩〕

午前八時三十分 集合 祭典委員長、上下羽
鳥、寺松方部祭典委員、他

午前九時 羽鳥、寺松方部へ参輿

午前九時三十分 下羽鳥旅所に至る。〔羽鳥区長〕

午前十時 下羽鳥をへて上羽鳥旅所に至る。

〔羽鳥副区長〕

午前十時三十分 上羽鳥をへて寺松旅所に至
る。〔寺松区長〕

午前十一時 寺松旅所をへて神社へ還輿。

午前十一時三十分 式年大祭の齋行

午後一時三十分 神社前整列参輿。〔長塚一区長〕

午後二時十五分

長塚町を下向、駅をへて請戸入口を右折下長
塚旅所に至る。〔長塚二区長・下長塚区長〕

下長塚をへて県道を東進して交差点に至る

〔両竹区長〕

交差点をへて中浜部落へ向かう。〔浜野副区長〕

中浜をへて南進し中浜橋を渡り海岸へ。〔浜
野区長〕

午後三時三十分 郡山海岸にて潮こり神事

午後四時三十分

参輿 〔郡山区長〕

郡山上道を西進する。〔郡山区長〕

郡山正八幡神社をへて下条に入る。〔下条区長〕

役場北側道路を通り、役場を通り国道、柳橋
を渡り屯所に至る。〔新山区長〕

新山町を北進し長塚へ 〔長塚一区長〕

午後五時三十分 神社拝殿へ着輿 還御祭

(高倉洋尚氏所蔵)

資料解説 相馬妙見宮初發神社の浜下りに関わる記録類は、昭和48年（1973）4月22日（旧3月27日）と昭和58年4月17日（旧3月5日）に執行された行事の列帳（2冊とも横（長）帳の形式のもの）、および平成19年3月30日～4月1日に執り行われた「相馬妙見宮初發神社 式年例祭大祭式次第」（ワープロで作成された、ホチキス留めの文書記録）が宮司の高倉家に残されている（写真7）。高倉家は、現・高倉洋尚宮司より3代前の高倉尚芳氏が明治時代に初發神社の宮司となって以来、初發神社・新山神社（III-23）等の宮司を務めてきた。それ以前の宮司は松本家が務めていたという。新山神社や中野八幡神社など、宮司を務める神社は6社にのぼる。1990年代から高倉洋尚氏が宮司を務めているが、祭礼の運営には宮司に就任する以前から長くかかわってきた。ほかにも古い記録類があったとのことだが、東日本大震災と原発事故、その後の長期避難によって損壊した自宅とともに失われてしまったものも多いという。写真も最近のものが残るのみである。

上記のそれぞれの列帳は行列の役割の名称と担当する人物の氏名をすべて書き上げたもので、神社からの行列の出発にあたって列帳の記載内容のすべてを役員が大声で読み上げて紹介する。一人ひとりの役割と氏名を呼ぶため、この列帳の読み上げだけで30分ぐらいかかったという。呼ばれた人は神社から数十メートル以上離れた駅前^{かりぎぬ}の信号のあたりを先頭に、最後尾の初發神社境内まで続く大行列を作り、読み上げが終わってからようやく出発となった。神職の装束も、通常の祭典であれば狩衣を着用するところだが、この式年例大祭では基本的には「正服」で参加してほしい旨、協力してもらう神職たちへ宮司から依頼していたという。規模としても格式としても、それだけ盛大な行事であったということがうかがえる。

ここでは、過去に行われた祭礼の記録のうち、直近の平成19年の式次第を記載した。これは祭礼の執行当時に高倉洋尚宮司自身が作成したもので、祭典の儀礼部分をおもに担う立場から、特に神事を行う場の設えなどが詳しく記載されており、潮垢離神事の記述などには海水の取り扱いについても事細かに記されている。とりわけ、海で年男が桶に汲んだ海水は、浜での神事に供えるだけでなく、持ち帰って還御祭の時にも供えられていることなど、多くの情報が含まれるため、全文掲載するものである。なお、本資料12頁の渡行順路では予定時間を先に記載した。

参考文献・資料

「昭和四十六年四月二十二日 式年遷宮列中原簿 相馬妙見宮初發神社」高倉洋尚宮司所蔵

「昭和五十八年四月十七日 式年遷宮列中原簿 相馬妙見宮初發神社」高倉洋尚宮司所蔵

【大里正樹】



写真1 大祭式後の初發神社境内での神楽奉納（H19.3.31 高倉洋尚氏）



写真2 双葉町の市街地を巡幸する神輿（長塚町地区 H7.4.23 高倉洋尚氏）



写真3 御旅所での浦安の舞奉納（下長塚地区公民館前
H19. 3. 31 高倉洋尚氏）



写真4 郡山海岸での潮垢離神事祭場（H19. 3. 31）



写真5 年男が海に入り潮水を汲む
（郡山海岸 H19. 3. 31）

写真6 郡山海岸での潮垢離神事
（H7. 4. 23 高倉洋尚氏）

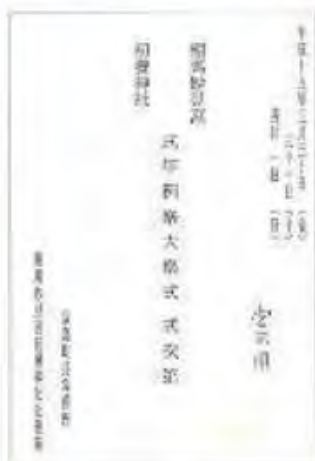


写真7 宮司宅に残る過去の祭礼記録類（左から昭和46年、昭和58年、平成19年 高倉洋尚氏所蔵）

7. 大熊町 秋葉神社

(1) 神社の概要

名称／秋葉神社

所在地／^{おおくままち}双葉郡^{くま、くままち}大熊町大字熊^{くま}字熊^{くま}町829

由緒／~~祭神として火之迦具土神を祀る。~~この秋葉神^{しよはつ}当社は、初^{しよはつ}登神社（旧熊村の氏神）の境内に、熊町集落（字熊町）の単位で祀る神社として、明治末期に秋葉権現を勧進して建立された比較的新しい神社である（写真1）。旧村の氏神の場合と異なり、氏子組織・氏子総代はないという（田中滋子「ムラの形成とマケ―福島県双葉郡大熊町町区―」より）。「火伏せの神様」だといわれている。

(2) 祭りの名称

オサガリ、秋葉神社祭典、秋葉神社渡御祭、秋葉神社御遷宮、秋葉神社遷宮祭

(3) 祭りの由来

地区で伝えている祭りの由来記（昭和53年〔1978〕3月26日の渡御祭実施時に案内用に配布された文書か）には以下のようにある。

秋葉神社は火伏の神様として知られております。総鎮守総本山は、遠州浜松の国秋葉山秋葉神社にあり、神霊を勧請して、ここ初登神社の境内に末社として祭ったと思われま（年代不明）。

祭神は火之迦具土神です。神は言伝により伊邪那岐命・伊邪那美命の御子で農の神として雑草の生い茂っている野山を焼き払い、いわゆる焼畑農業の始まりで作物（五穀）を蒔き収穫を計ったとされ農耕守護の神として崇敬されておりましたが、一方では火の「力」が万物全てを焼き尽くす神でもあった。その恐ろしさに恐れをなして、祭神火之迦具土命を祭り、火防・火伏の神として信仰しました。町内火防鎮護のため、毎年旧暦2月18日には盛大な祭典を行っております。現在はその祭日に一番近い日曜日と決め、また三年毎町内上げての渡御祭は、御神輿を担ぐ若者、きれいに着飾った巫女（神子）たちの行列が熊町～緑ヶ丘と一巡します。沿道は大勢の信者でにぎわいます。本年はその渡御祭を3月26日に執行されます。

（以上原文ママ）

(4) 祭 日

旧暦2月18日がもともとの祭日で、いつの頃からか3月18日になった。しかし、その後氏子が参加しやすいように3月中の土日に移行したが、平成23年（2011）の東日本大震災以降は行われていない。なお、祭礼実施日については関連資料の祭礼記録一覧（表1）も参照されたい。

(5) 伝承団体

麓山神社（IV-33）宮司（もとは同じ町内の多田家が宮司を務めていた）。字熊町（東日本大震災直前の頃で100戸ほどが居住）は4つの班からなり、この1～4班が祭礼の運営を回り番で務めていた。

(6) 神幸経路（図1）

神幸地／熊川海岸（熊川海水浴場）

神幸経路／「オサガリ」は神輿行列を組んで神社と熊川の浜を往復する。天候が悪いときはオサガリをしないこともあった。神社から海岸までは2キロメートルくらいあるので、往復4キロメートル歩いた。早朝に神社を出て、昼には神社に戻ってきて直会をする。

まず神社を出発して、行列は一路、熊川海岸（熊川海水浴場）①を目指す。浜を祭場として神事を行ったのち、往路とは異なる道（熊川北岸の集落内）を通過し、氏子区域の北の端のお旅所②（目印の注連縄を道に張ってある所）で一度休み、その後、熊町地区の旧街道沿いの街並みを南端まで進む。氏子区域の南の端のお旅所③（目印の注連縄を道に張ってある所）で再び休んだあと、神社

へと還御。その後直会となる。

(7) 祭りの内容

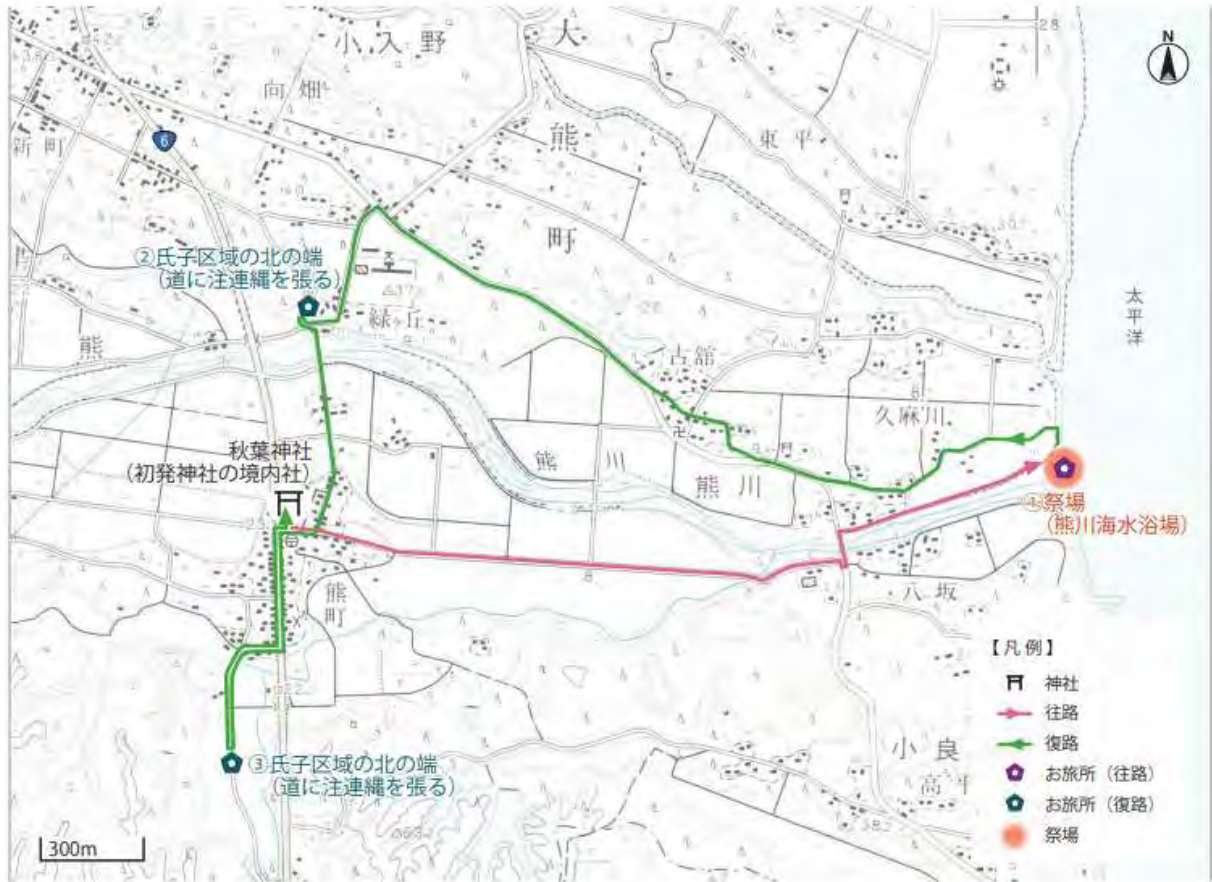


図1 秋葉神社の神幸経路（平成19年3月25日）

*昭和62年6月30日国土地理院発行2.5万分1地形図を加工して作成

潮水の扱い／汲んだ潮水で神輿を祓う。潮水は消防団の人が海に入りバケツで汲んだもの。汲み方には特別な作法はない。平成元年（1989）当時の酒井利家宮司の覚書（「平成元年四月一日 記」）（写真2）によれば、行列を組まない年も、塩榊（シオサカキ）と称し、消防団の人が祭礼当日に熊川海岸へ行き、潮水に浸したサカキを神社へ持ち帰り、神前に供える。

実施内容／表1の記録類によれば、秋葉神社の祭りは少なくとも昭和26年（1951）以降はほぼ毎年行われてきたが、神社で神事を行う（塩榊を供える）だけの年と、3～4年に1度を目安に神輿渡御を行う年とがあった。昭和37年（1962）頃を境に、それまで基本的に毎年だった神輿渡御は、間をあけての実施となった。また昭和42年（1967）以降、秋葉神社祭典に引き続き「交通安全祈願祭」が実施され、直近の平成22年（2010）まで恒例行事となっていた。これらの変更の経緯は定かではないが、国道6号の整備が進み自動車の交通量が激増したこと、渡御に伴う道路使用許可手続きの煩雑さ、それに前後して地区内でも交通死亡事故が複数回あったこと、などが影響したとみられる。

秋葉神社の神輿渡御は、表1の記録類について記事内容を分析すると、昭和26、28～35、37、52、57、60、63年、平成4、11、15、19年に実施したことが確認される。また昭和42～47年の「役割帳」には「神輿行列なし ポンプ自動車で塩榊 熊川浜へ」など、略式（神輿渡御を伴わない年）の行事内容の記事もみられた。なお秋葉神社以外では昭和55年（1980）に、同じ境内の初発神社の社殿造営に伴う「初発神社御宮清遷宮」として、特別に神輿渡御・浜下りを実施した記録も残る。

町区は4班に分かれている。東日本大震災前の平成22年（2010）頃の町区は96世帯463人で、1つ

の班は25戸くらいになる。神輿は町区の人たちが参加して行列を作って担いだ。各家からは糯米を集め、餅をついた。ついた餅は投げ餅にしたり、神札と一緒に氏子に配ったりする。オサガリで使うサカキとタケ（斎竹）は4つの班が交代で準備する。サカキを切ってくる班、タケを採ってくる班があり、それらを採る人を「山男」という。小良^{おら}浜^{はま}の山の半日陰になる山にはいいサカキが生えているので、そこから取ってくる。「大榊」（お祓いに使う3～4尺のサカキ）1本、「根榊」（根のついたサカキ）4本を用意する。根榊は神社の四周に次の年まで挿しておく。4つの班それぞれには交代で務める「ヤド」があり、地区に残る祭典記録の表紙にも多く記載されている。あらかじめヤドに集まって木版で神札を刷って準備しておく。また、餅つきなども班単位で順番に務めていた。

行列には氏子各家から1人は参加することになっており、若い人たちが神輿を担いだ。行列は消防団員が主体になって警備などに当たった。行列には騎馬（武者）が出て先導する。しかし、天候が悪いときには出ないこともある。昭和30年代には3～4騎、多いときは7騎出たこともある。出場するのは農耕馬で、農耕馬が少なくなって牛を出したこともある。騎馬武者はあらかじめ出場を申し込んでおくが、甲冑を着用しなければならないので、出場したい人は甲冑を借りる。騎乗する人は背中にサカキの枝を挿して行列に従う。

浜に着くと騎馬の者がサカキを海水に浸す。この潮に浸したサカキを「塩榊」と呼ぶ。塩榊は潮水に浸して騎馬武者が持ち帰り神前に供える。また、騎馬武者とは別に、新築した家で神輿を止めて火伏せのお祓いを希望する家にも塩榊を配る。行列が省略されるようになると、騎馬だけが海岸に出るようになり、塩榊だけを持ち帰るようになった。子ども神輿（樽神輿ともいう）も出した。7歳くらいまでの女子は、希望すれば衣装を着けてミコ（神子）として行列に参加する。衣装は借りたり、自前で誂えたりもした。行列はあらかじめ警察署から道路占用許可書をとらなければならず面倒であった。行列には「猿田彦」（写真3）がつく。秋葉神社は火伏せの神なので、猿田彦役の人は農業用の噴霧器（通常は農薬や水を撒くのに使うもので、多くの農家が持っている道具）を背負い、沿道に集まってきた人たちに噴霧器で水をかけ、これが火伏せのまじないになる。火伏せに効くというので、びしょぬれになるほど水を掛けられると、自慢しあったものであった。法被を着て消防団も一緒に歩く。

オサガリをする熊川の浜では、熊川集落の人たちが祭場を作って待っていてくれる。氏子地域ではないが、渡御の際には熊川集落の人たちの協力が不可欠である。熊川集落の人が砂浜に神輿を据える場所を砂で台状に設け、四隅に斎竹を立てて注連縄を張って祭場を準備しておく。行列を作らなくなってからは軽トラックに神輿を載せ、熊川の浜まで運ぶようになった。行列を組んで歩いた時代には、集落の人たちが沿道で神輿が来るのを待っているが、通過時間が分からずに子どもたちなどは待ちわびて退屈したものであった。行列には太鼓と笛がつくので、太鼓の触れで行列が近づくのが分かる。

新築した家には神輿が立ち寄るものであった。屋敷内に入り祭壇に神輿を据え、そこで火伏せのご祈祷をする。火伏せのお祓いをした家には、潮に浸した塩榊を置いてきた。これは神棚に供える。祭りの前には紙の神札（写真4）を刷り、氏子に配る。また、希望者には「箱札」（写真5）を出した。浜の祭場では、砂の台の上に神輿を据え、汲んだ潮水で神輿を祓う。潮水は消防団の人が海に入りバケツで潮水を汲んだものであり、汲み方には特別な作法はない。

（8）祭礼の状況

秋葉神社は東京電力福島第一原子力発電所から約5キロメートルの近さに位置している。東日本大震災と原発事故に伴って、現在に至るまで多くの大熊町民が長い避難生活を余儀なくされており、平成22年の祭礼を最後に、秋葉神社では浜下り行事は行われていない。

なお、同じ境内のおもな社である初発神社の社殿は、震災や長期避難等による建物の被害が大きく

旧社殿は解体、令和5年（2023）に社殿が新築された。秋葉神社の社殿は昭和63年（1988）に改築されたものだが、建物が受けた被害はさほどなく、震災前の姿を現在も保っている。神輿や道具など祭礼関連資料は町区の集会所に保管されていたが、復興工事が進むなかで集会所も解体され、地区所有の祭礼関連資料は町内各地区の資料類とともに町の施設内で保管されている。

現在では震災から14年以上を経過し、神社周辺も優先的に除染され一部立ち入り可能となった場所はあるものの、周辺には帰還困難区域とされている場所も多く、住民の帰還は進んでいない。令和7年（2025）現在、たとえば宮司はいわき市で、町区の区長は会津若松市で暮らしている状況にある。大熊町民でも町での生活経験の記憶が薄い、あるいはないという世代も増えつつあり、行事の継承には困難を抱えている。

いっぽうで、あとに述べるように、この秋葉神社にはきわめて多くの祭典記録が残されているほか、平成4年（1992）3月29日撮影の「秋葉神社遷宮祭」の写真（初登神社の鳥居をくぐって秋葉神社の神輿が遷御する場面を写したもの）、また、平成11年（1999）3月22日撮影の「渡御祭」の写真（いずれも地区の故山田栄次郎氏撮影）がある（写真6・7）。これらの資料は、行事のみならず、震災以前の当時の町の様子を伝えるものとしてきわめて貴重である。

(9) 芸能等

この秋葉神社の渡御祭に関して、今回の調査では、芸能の奉納は確認されなかった。

(10) 関連資料 *紙軸の都合上、改行箇所は「/」で示した。

① 「秋葉神社祭典役割帳」

表紙

「昭和二十六年三月二十五日（旧二月十八日）

塚本喜英宅

秋葉神社祭典役割帳

- 1、祭典係 幾橋重蔵
- 1、社号旗 鳥村丞一郎
- 1、猿田彦 志賀馨
- 1、騎馬祭典係 鈴木隆
- 1、御神馬
- 1、神鏡 塩水 中野春吉／鈴木徳一
- 1、花 寺島重政／中原卯三郎
- 1、先旗 岩手千明／青田利雄／関根七郎／吉田光雄／木村行成／木幡貞一／鈴木清一
- 1、御洗米 木下仲夫
- 1、御神饌（野菜） 杉沢静
- 1、御神饌 西内時重／伊佐野義光
- 1、祓串 前田耕智／荒木幹夫利光
- 1、塩榊 伊佐野義光／飯塚国雄
- 1、大榊 青田行雄
- 1、根榊 佐々木修三
- 1、五色榊 末永隆清／荒木幹夫／青田利雄／佐々木郷八
- 1、立神籠 塚本喜英
- 1、神籠 山田幸太郎

- 1、先武者 川村安広
- 1、神幣 前田耕智／武内重次／大内直清／太田泰治／志賀穠／吉田忠／志賀実／木幡勝尾／太田秀昂／田中静雄／梅田一馬／渡辺金寿／佐々木郷八／横田一郎／井戸川政治／酒井剛／太田稲尾／西名清／中野忠／西内利郎／石田丈之助
- 1、笛 鈴木春一／吉田哲男
- 1、宮太鼓 鈴木勝／加井利雄
- 1、祭官 酒井利家
- 1、寶銭箱 佐々木新助／荒木幹夫
- 1、神輿 鎌田博栄／畑川親一／志賀登／草野正一／木村行夫／志賀利男／加藤政男／横田英郎
- 1、齋主 多田悟
- 1、神子 西内ユミ子／佐々木ユウ／小野キヨ子／太田ソノ子／愛川子
- 1、劍 塚本喜英
- 1、前奏幣 西内憲郎（時重）／佐々木親兵衛／太田四朗
- 1、奉幣 太田耕治／佐々木泰明／末永高義／酒井哲／飯塚清／末永重儀／水間政明／中野栄奈／吉田三郎／田村久義
- 1、後旗 赤井茂／二瓶清次郎／木村一郎／吉田正亀／内山正一／宮谷亀太郎
- 1、大玉串 生松千代定／吉田子之助／青田善

- 一、 騎馬 一 / 末永重儀 / 青田三郎 / 中野武 / 酒井武 / 小堀兼吉 / 田村京松 / 横須賀俊男 / 志賀望 / 千葉昭二 / 中野俊重 / 高橋守 / 吉田良仲 / 佐久間勝治 / 志賀政八 / 志賀宗男 / 末永徳 / 二瓶吉雄 / 織田五郎 / 磯部俊成 / 木村玄 / 福田浩 / 吉田光男 / 東大三郎 / 愛川和一 / 渡辺勝綱 / 磯部泰造 / 市村茂 / 棚林竹吉 / 木本栄
 - 一、 騎馬 畑川健一 / 広島忠雄 / 千葉公平 / 末永慎正 / 佐々木武夫 / 梅田武夫
- (大熊町町区所蔵)

② 「秋葉神社祭典役割帳」

表紙

「昭和廿八年三月二十五日(旧二月十八日)」

田村久義宅

秋葉神社祭典役割帳

祭典係 荒木利光
杉沢 静

- 一、 祭典係 荒木利光 / 杉沢 静
- 一、 社号旗 中原卯三郎
- 一、 猿田彦 梅田武夫
- 一、 騎馬祭典係 佐久間政敏
- 一、 御神馬 前田耕智
- 一、 神鏡 塩水 中野信成 / 鈴木隆
- 一、 花 小堀信男 / 宮谷亀太郎
- 一、 先旗 赤井茂 / 中野春吉 / 菅原茂 / 鈴木勝 / 末永徳
- 一、 御洗米 関根七郎
- 一、 御神饌 荒木幹夫 / 梅田利男
- 一、 祓串 西内時重
- 一、 塩榊 佐々木修三
- 一、 大榊 木本幸治
- 一、 根榊 志賀宗男
- 一、 五色榊 田中静男 / 佐々木親兵衛 / 竹内重次
- 一、 立神籬 佐々木弘綱 / 小野弘
- 一、 神籬 田村久義
- 一、 先武者
- 一、 神幣 塚本喜英 / 欠 西内利郎 / 末永隆清 / 吉田忠 / 西内憲郎 / 末永憲頭 / 欠 太田四朗 / 大内直清 / 欠 佐々木郷八 / 欠 太田秀昂 / 欠 坂井剛 / 欠 志賀美 / 中野俊重 / 欠 西名清 / 太田泰治 / 太田稻尾

- 一、 笛 / 木村玄 / 飯塚国雄 / 武内重信
 - 一、 宮太鼓 吉田哲男 / 中野忠士
 - 一、 祭官 遠藤義二 / 欠 田村巨
 - 一、 御神札 酒井哲
 - 一、 賽銭箱 鎌田栄
 - 一、 神輿 木村行夫 / 志賀望
 - 一、 神輿 志賀登 / 青田善一 / 山田栄次郎 / 欠 田村一郎 / 志賀利男 / 棚林竹吉 / 木村一郎 / 中野茂
 - 一、 斎主 多田悟
 - 一、 神子 横田輝子 / 織田君子 / 山田たい子 / 太田菊子 / 志賀梅子 / 田中信子
 - 一、 剣
 - 一、 前奉幣 杉沢静 / 荒木利光 / 横田一郎 / 太田芳一郎
 - 一、 奉幣 太田耕治 / 水間政明 / 中野栄宗 / 志賀昇 / 川村広 / 山田幸太郎 / 末永重儀
 - 一、 後旗 酒井正耕 / 鈴木隆 / 千葉昭仁 / 吉田良長 / 青田寿男 / 青田忠義
 - 一、 大玉串 欠 井戸川政治 / 三原良雄 / 東大三郎 / 渡辺金治 / 欠 木幡明 / 欠 青田三郎 / 酒井武 / 愛川和一 / 福田浩 / 織田五郎 / 磯部俊成 / 吉田光男 / 高橋守 / 吉田美 / 生松千代定 / 志賀政八
 - 一、 騎馬 末永慎正 / 田村量
 - 一、 樽御輿 祭典係 加藤政男 / 佐々木親兵衛
 - 一、 余興係長 飯塚国雄 / 武内重信
 - 一、 猿田彦 志賀馨
 - 一、 騎馬祭典係 鈴木隆
- (大熊町町区所蔵)

③ 「秋葉神社祭典費徴集及会計簿」

表紙

「昭和廿八年三月二十五日(旧二月十八日)」

田村久義宅

秋葉神社祭典費徴集及会計簿

- 会費 一戸当 七拾円
- 一班 木村一郎 / 井戸川政治 / 志賀積 / 生松千代定 / 鈴木ハジメ / 志賀望 / 塚本喜英 / 吉田光男 / 田村巨 / 吉田子之助 / 田中静男 / 田村久義 / 小堀兼吉 / 中野春吉 / 横須賀みさを / 酒井武 / 吉田正亀 / 杉沢静 / 木村行夫 / 志賀芳雄利雄 / 酒井哲 / 幾橋重蔵 / 荒木幹夫 / 鈴木勝 / 二十四名

二班 荒木利光／荒木秀明／草野正一／宮谷
太郎／石田文之助／志賀昇／吉田忠／西
内憲郎／末永高義／末永隆清／西内利郎
／佐々木新助／佐々木修三／加藤政男／
木村玄／志賀政八／田沢庄助／吉田哲男
／水間政明／志賀宗男／前田耕智／土屋
四郎／西内時重／中原卯三郎／菅原茂／
寺島重政／高橋守／26名

三班 中野茂／赤井茂／槻林竹吉／中野忠士／
中野榮宗／中野信成／佐々木弘綱／梅田
一馬／梅田ハル／末永重儀／小野フミ／
鈴木隆／福田浩／飯塚國雄／千葉弘／小
野弘／中野俊重／吉田良長／末永茂／
佐々木学／横田一郎／鈴木徳一／木幡勝
尾／愛川和一／大内直清／川村広／佐々
木郷八／黒沢才二／東大三郎／横山栄／
前原トミ／31名

四班 太田耕治／太田秀昂／渡辺松吉／三原良
雄／坂井剛／山田幸太郎／志賀実／佐久
間勝治／竹内重信／太田四朗／武内重次
／木本新吉／鎌田栄／畑川親一／関根七
郎／西名清／伊佐野義光／末永徳／青田
善一／遠藤義二／太田泰治／磯部俊成／
青田寿雄／青田三郎／織田五郎／岩手千
明／広島忠吉／渡辺芳衛／嶋原京一／太
田稲尾／石黒ナカ／根本則男／三拾名

御札代 貳百円也
第一班 千六百拾円也
第二班 千六百七拾円也
第三班 貳千貳拾円也
第四班 貳千百円也
収入合計 七千七百円也

支出部
一金七百五拾円也 中折五十帖
一金參百円也 中折二十帖
一金八拾円也 赤インク2
一金八拾円也 墨汁2
一金六拾円也 筆3
一金百円也 道路使用許可証
一金貳百円也 魚代
一金百八拾円也 水引一五本
一金參百五拾円也 御札拾
一金百貳拾円也 五色生地 四本
一金百八拾円也 トーフ代
一金五百貳拾円也 神酒二升代
一金五拾円也 塩代
一金八円八拾錢也 水引 五本
一金七拾円也 仙花紙10枚

一金百円也 麻 三十匁
一金八拾五円也 新毛入切 五切
一金百八拾円也 扇子六本
一金拾參円貳拾錢也 水引 十一本
一金參百円也 官主手袋2
一金貳百円也 白足袋2
一金百円也 草履2
一金百円也 白米一升
一金六百円也 笛四本代
一金參百円也 ティーフ
一金百五拾円也 中折十帖
一金六百円也 初穂料
一金六百円也 樽神輿 巫子 菓子
一金參百円也 宿料
一金貳百円也 魚代
一金四拾円也 樽神輿菓子不足追加
一金拾五円也 画鋏 一箱
一金參百六拾八円也 演芸費

支出合計 七千七百円也
収入 七千七百円也
支出 七千七百円也

秋葉神社改修 会計

収入
一班 千五百円也
二班 千五百円也
三班 千五百円也
四班 千五百円也
収入合計 六千円也

支出
一金四百六拾円也 材料出 酒一升
一金百貳拾五円也 クギ
一金貳千五百円也 トタン五枚
一金千円也 トタン職二日半
一金參百五拾円也 ペンキ 一本
一金九百貳拾円也 神酒 二升
一金參百円也 製材代
大工 三人・・・寄付
支出計五千六百五拾五円也

収入 六千円也
支出 五千六百五拾五円也
残高 參百四拾五円也

大熊町町区所蔵)

表1 町区所蔵の秋葉神社祭典関係記録類一覧 *Sは昭和、Hは平成

No.	資料の表題	祭礼執行日	No.	資料の表題	祭礼執行日
1	秋葉神社祭典役割帳	S26. 3. 25	42	秋葉神社祭典会計簿	S52. 3. 7
2	初発神社祭典費徴収及会計簿	S27. 8. 11	43	消防ポンプ披露式・熊地区水路落成式帳	S52. 3. 7
3-1	秋葉神社祭典役割帳	S28. 4. 1	44	秋葉神社祭典役割帳	S53. 3. 26
3-2	秋葉神社祭典費徴収及会計簿	S28. 4. 1	45	秋葉神社祭典会計簿	S53. 旧2. 18
4	初発神社祭典寄符名簿	S28. 7. 31	46	秋葉神社祭典役割	S54. 3. 16
5	初発神社祭典費徴収及会計簿	S28. 8. 31	47	秋葉神社祭典会計簿	S54. 3. 16
6	秋葉神社祭典役割帳	S29. 3. 22	48	秋葉神社祭典役割	S55. 3. 2
7-1	秋葉神社祭典費徴収及会計簿	S29. 3. 22	49	秋葉神社祭典会計簿	S55. 3. 2
7-2	初発神社祭典寄符名簿	S29. 7. 30	50	初発神社御宮清遷宮役割帳	S55. 3. 24
8	秋葉神社祭典役割帳	S30. 3. 12	51	秋葉神社祭典役割	S56. 3. 22
9-1	秋葉神社祭典費徴収及会計簿	S30. 3. 12	52	秋葉神社祭典役割	S57. 3. 14
9-2	初発神社祭典寄符名簿	S30. 8. 8	53	秋葉神社祭典役割	S58. 3. 6
10	秋葉神社祭典役割帳	S31. 3. 29	54	秋葉神社祭典会計簿	S58. 3. 6
11	秋葉神社祭典費徴収及会計簿	S31. 3. 29	55	秋葉神社祭典役割	S59. 3. 20
12-1	秋葉神社祭典役割帳	S32. 3. 19	56	秋葉神社祭典会計簿	S59. 3. 20
12-2	秋葉神社祭典会計簿	S32. 3. 19	57	秋葉神社祭典役割	S60. 3. 31
13	初発神社祭典帳	S32. 7. 18	58	秋葉神社祭典役割	S61. 3. 9
14-1	秋葉神社祭典役割帳	S33. 4. 6	59	秋葉神社祭典役割	S62. 3. 8
14-2	秋葉神社祭典会計簿	S33. 4. 6	60	秋葉神社祭典役割	S63. 4. 3
15	秋葉神社祭典会計簿	S34. 3. 26	61	秋葉神社祭典役割	H 1. 4. 2
16	秋葉神社祭典役割帳	S35. 3. 15	62	秋葉神社祭典役割	H 3. 3. 31
17	秋葉神社祭典会計簿	S35. 3. 15	63	秋葉神社祭典役割	H 3. 3. 31
18	秋葉神社祭典役割帳	S37. 3. 23	64	秋葉神社祭典役割	H 4. 3. 29
19	秋葉神社祭典会計帳	S37. 3. 23	65	秋葉神社祭典会計簿渡御祭	H 4. 3. 29
20	秋葉神社祭典余興係会計帳	S37. 3. 23	66	秋葉神社祭典役割	H 5. 3. 7
21	秋葉神社祭典会計簿	S40. 3. 20	67	秋葉神社祭典並に交通安全祈願祭役割	H 8. 3. 31
22	秋葉神社祭典会計簿	S41. 3. 9	68	秋葉神社祭典並に交通安全祈願祭役割	H 8. 3. 31
23	秋葉神社祭典役割帳	S41. 3. 9	69	秋葉神社祭典役割	H11. 3. 22
24	秋葉神社祭典役割帳	S42. 3. 28	70	秋葉神社祭典	H14. 3. 3
25	秋葉神社祭典会計簿	S42. 3. 28	71	秋葉神社祭典役割	H15. 3. 30
26	秋葉神社祭典役割帳	S43. 3. 16	72	秋葉神社祭典会計簿	H15. 3. 30
27	秋葉神社祭典会計簿	S43. 3. 16	73	秋葉神社祭典	H16. 3. 7
28	秋葉神社祭典会計簿	S44. 4. 4	74	秋葉神社祭典会計簿	H16. 3. 7
29	秋葉神社祭典役割帳	S45. 3. 25	75	秋葉神社祭典	H17. 3. 6
30	秋葉神社祭典会計簿	S45. 3. 25	76	秋葉神社祭典会計簿	H17. 3. 6
31	秋葉神社祭典役割帳	S46. 3. 4	77	秋葉神社祭典	H18. 3. 5
32	秋葉神社祭典会計簿	S46. 3. 14	78	秋葉神社祭典会計簿	H18. 3. 5
33	秋葉神社祭典役割帳	S47. 4. 1	79	秋葉神社祭典役割	H19. 3. 25
34	秋葉神社祭典会計簿	S47. 4. 1	80	秋葉神社祭典	H19. 3. 25
35	秋葉神社祭典役割帳	S48. 3. 22	81	秋葉神社祭典会計簿	H19. 3. 25
36	秋葉神社祭典会計簿	S48. 3. 22	82	秋葉神社祭典	H20. 3. 2
37	秋葉神社祭典役割帳	S49. 3. 10	83	秋葉神社祭典会計簿	H20. 3. 2
38	秋葉神社祭典役割帳	S50. 3. 30	84	秋葉神社祭典	H21. 3. 1
39	秋葉神社祭典会計簿	S50. 3. 30	85	秋葉神社祭典会計簿	H21. 3. 1
40-1	秋葉神社祭典役割帳	S51. 3. 18	86	秋葉神社祭典	H22. 3. 7
40-2	秋葉神社祭典会計簿	S51. 3. 18	87	秋葉神社祭典会計簿	H22. 3. 7
41	秋葉神社祭典役割帳	S52. 3. 7			

以上 87件93冊

資料解説 秋葉神社の祭典の関連資料として特記すべきは、その「祭典役割帳」や「会計簿」などが昭和26年（1951）以降、東日本大震災の前年である平成22年（2010）の分まで、87件（93冊）が一通り残されていることである。これらは町区集会所（現在は解体）内にかつて保管されていたもので、祭礼などの事務用品や御神札の材料や版木（スタンプ）などと合わせて引き出し型の衣装ケースの中に保管されている。町地区全体としての祭礼の貴重な記録であり、一部「初発神社祭典寄符名簿」や「消防ポンプ披露式・熊地区水路落成式」といった別の行事の記録も含まれるものの、基本的にはほとんどが「秋葉神社」の祭典（多くは浜下りを伴った）の記録である。町区の最も大きな神社は初発神社であるが、その境内社である「秋葉神社」の祭礼が最大の祭礼だったことが明確に分かる。1冊にまとまっているものもあるが、あとになると「祭典記録」と「会計簿」がセットで作成されるようになっていく。筆者は町教育委員会の協力を得て、この記録類を悉皆調査する機会を得た。調査の結果として、衣装ケース内に保管されていた記録類すべての表題と祭礼執行日を表1に示した。なお、記録類はいわゆる横（長）帳の形式であり、こよりで綴じられている。3-1・3-2のように枝番を付した資料は、このこよりで2冊の横（長）帳がつなげてあり、1件2点と数えている。記録の形式は一定しており、東日本大震災による中断前の最後の開催となった平成22年まで、過去の記録のやり方を引き継ぎながら、横帳形式での記録作成と手書きによる筆文字での筆記を守っていた。

表1に示した祭礼記録類のうち、最も古く70年以上の歳月を経ている昭和26年『秋葉神社祭典役割帳』および昭和28年『秋葉神社祭典役割帳』を所蔵者の許諾を得て全文を翻刻し、掲載した。

参考文献・資料

田中滋子「ムラの形成とマケ―福島県双葉郡大熊町町区―」『大熊町史資料』第1集 大熊町教育委員会（1979）

【大里正樹】



写真1 秋葉神社（初発神社境内 R7.1.20）



写真2 塩榊に関する記述のある宮司の覚書 平成元年四月一日記（R7.3.9 酒井正直宮司所蔵）



写真3 猿田彦の面 (R7.1.20 大熊町町区所蔵)



写真4 御紙札 (全氏子配付用の紙札:左)

写真5 御神札 (申込者用の箱札:右)

(いずれも R7.1.20 大熊町町区所蔵)



写真6 平成4年の渡御祭 (H4.3.29 大熊町町区所蔵)



写真7 平成11年の渡御祭 (H11.3.22 大熊町町区所蔵)



左から

写真8 昭和26年「秋葉神社祭典役割帳」

写真9 昭和28年「秋葉神社祭典役割帳」

写真10 昭和28年「秋葉神社祭典費徴集及会計簿」

(いずれも R7.2.18 大熊町町区所蔵)

8. 富岡町 四十八社山神社

(1) 神社の概要

名称／しじゅうはっしやさん四十八社山神社

所在地／とみおかまち双葉郡富岡町大字下郡山字下郡17

由緒／神社は富岡町の国道6号に沿う南面の山の中腹にある。氏子は毛萱けがやと下郡山の2字である『大日本名蹟図誌』(関連資料①)には、祭神は海津見神と四十八社大神で、旧社号は「四十八社大明神」といい、標葉郡の総社とあったとある。中世には宮古氏が奉仕し、のち浄土宗浄林寺が別当になり、天保3年(1783)5月3日の大火で焼失した。伝記によると、天長10年(833)に標葉郡の郡司が郡内の諸社を合祀し、一郡の総社とした。神名の明細は失ったが、総数48社であることから四十八社大明神といい、郡衙を置かれたことから村名を郡山とあった。郡司館または郡家は当社境内に接した丘原にあり、古井戸等も今に残っている、とある。

明治になって「海津見神社」と改称されたが、その後、旧社号に近い「四十八社山神社」と再び改められた。四十八社山神社への再改称の時期については、戦前に編まれた『富岡町郷土誌』(1981の復刻版を参照)では、「明治四十一年内務大臣より四十八社山神社とし改称の件許可せる」とも、「明治四十五年六月此の如く改称せり」ともあり、詳らかでない。

海の神である海(棉)津見神ほかを祭神としているだけに漁師の信仰は厚く、浪江町請戸なみえまちうげど、富岡町小良ヶ浜おらがはま、南相馬市小高区村上おだかくむらかみ、大熊町熊川おおくままちくまがわ、さらにはいわき市や茨城県などの漁業関係者の参拝も多かった。なお、四十八社山神社の信仰圏に関しては時代による変化もうかがえる。先述の『富岡町郷土誌』では、四十八社山神社のご神体の漂着伝承について、一度は請戸浜に寄りついたが村人に拒まれたと伝え、請戸の人びとだけは「神罰あるにより来訪せずといふ」と記される。古くは請戸の漁業者は参拝していなかったようである。

(2) 祭りの名称

四十八社山神社例大祭(渡御祭)、四十八社山神社の浜下り、四十八社山神社の浜下がりの神事などの呼称がある。このほか「千度あげ(千度祓い)」も合わせて行われ、しかも重視されていることから、この名もよく知られている。

(3) 祭りの由来

『大日本名蹟図誌』(関連資料①)には次のようにある。

毛萱浜の海岸近くの住民は田が少ないことから多くは漁業で生計を立てていた。山は海に迫って断崖が多く、崖下は数里にわたって狭く、砂漠状で暴風の際は行人の避難場所で、東浜街道第一の難所であった。海には岩礁が乱立し、漁舟が触れるとたちまち砕け、波が荒い時は大船も砕かれるほどだった。神社の近くの毛萱浜の漁師・与七は常にこれを憂い、神に祈っていた。ある夜、夢に神託があった。海から一つの箱が寄り付くので拾い上げて神社に納めなさい、さすれば海での風波の難をのがれ、疾病から救い、特に安産をかなえると。翌朝、与七は身を清めて行屋の磯で海上を眺めると一つの箱が浮き沈みしてくるのが見えた。与七は恐れながら拝み、感激の涙で箱をいただき、四十八社山神社に納めた。これが永久3年(1115)9月15日のことで、それ以来靈験あらたかな神として、当国はもとより、武蔵、相模、安房、上総、下総、常陸などの諸国から多くの人びとが参拝に訪れた。毎年旧暦9月15日に毛萱浜の磯に神輿渡御の祭祀を行うのはこの故事にもとづく、と漂着神の伝説とともに四十八社山神社の祭日の由来を延べている。なお、千度あげについての記述はない。

(4) 祭日

前述の『大日本名蹟図誌』には、漂着神の縁起から旧暦9月15日に神輿渡御を行ったとある。一般

に浜下りは卯月八日であるが、当社ではいつの頃からか4月22・23の両日になった。のち4月第2土・日曜日になり、さらに10月の第2土・日曜日になった。10月になったのは近年であることから、ここでは春の日程で記す。

前日は宵祭りで千度あげ、翌日は本祭りで、神輿の浜下りがある。古くから祭りには雨は降らずに、風が吹くといわれている。

(5) 伝承団体

四十八社山神社宮司、四十八社山神社氏子。

昭和50年代の氏子の戸数は、下郡山が57戸、毛萱は35戸であったが、年ごとに減っている。祭りは宮司を中心に氏子総代が両字から数人ずつ選出されていて、両区長も運営にあたる。また、祭りには両大字から、原則各戸1人が参加する。

「花ふき」という、マトイ（神花）に差したり氏子に分けるサクラといっている造花は、氏子の下郡山と毛萱の2字から1戸1人が出て作る。かつては各区長宅であったが、のち公民館になった。「サクラ」は田の神が宿るとされるだけに、注目すべきものである。

(6) 神幸経路 (図1)

神幸地／毛萱浜（行屋磯）

神幸経路／渡御の一行は出御すると参道を下り、山裾に添って北東に進み、国道6号を渡ると間もなく右折して側道を進み、海岸の祭場に向かう。途中で2か所でいったん神輿を神輿台に載せて小休止をするが、短時間休むだけで祭式は行わない。神輿は浜に着くと、すぐに祭場の注連縄で囲まれた中に安置する。帰路も往路と同じ道を通って戻る。

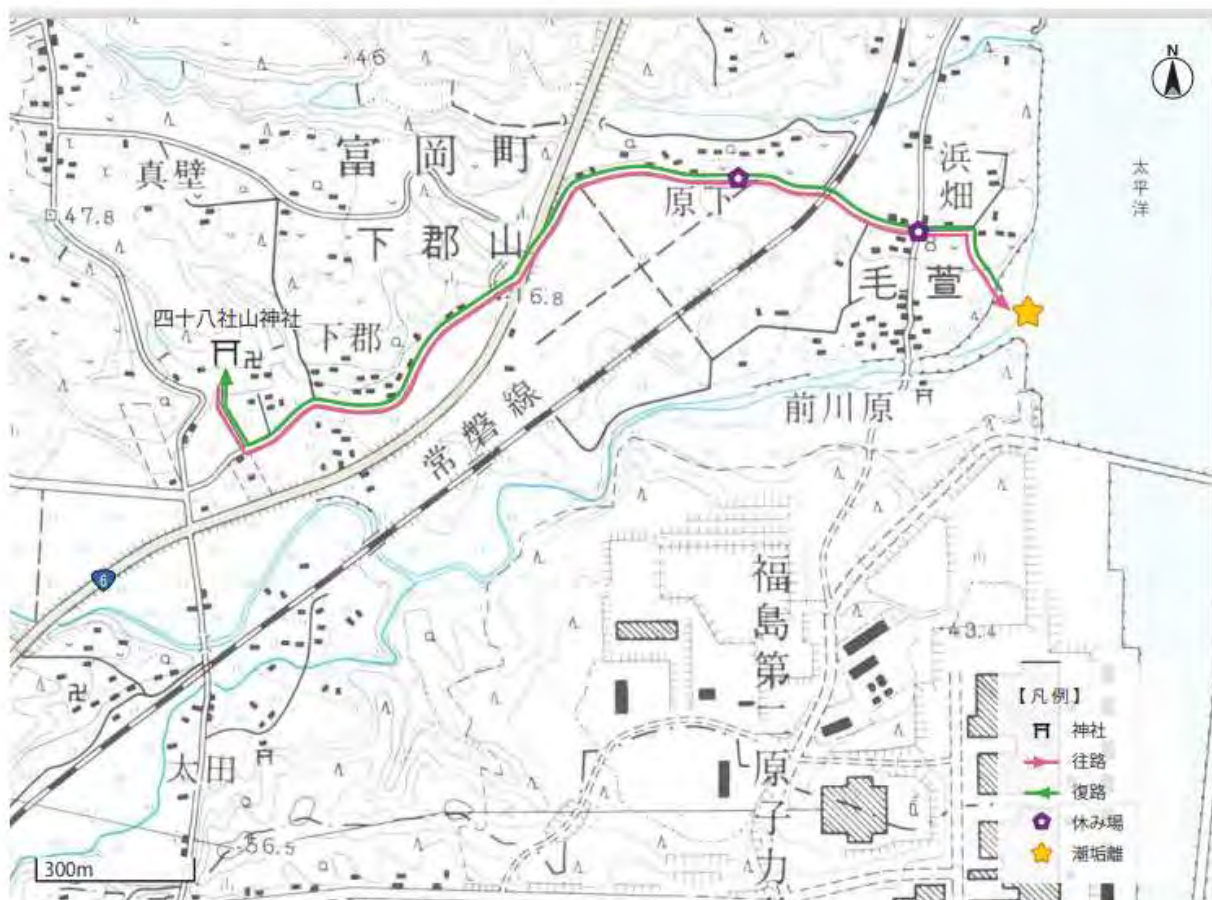


図1 四十八社山神社の神幸経路（東日本大震災以前）

*平成2年9月1日国土地理院発行2.5万分1地形図を加工して作成

(7) 祭りの内容

潮水の扱い／宮司がサカキの枝を持って波打ち際に進み、サカキを3回潮水に浸してから神輿まで戻り、サカキの枝についた潮水を神輿と参列者に振りかける。

実施内容／四十八社山神社の浜下がりのの神事について、以下、筆者（懸田）の昭和54年（1979）の調査に基づき記述する。

祭りに先立つ4月15日は「花ふき」で、かつては2地区に分かれて、それぞれの区長宅でマトイ（神花）や氏子の軒下に差すサクラという造花を多数作る。近年は公民館で一緒に作業をしている。

宵祭りの4月22日、午後7時頃に氏子の各家から1人ずつ神社に集まり、千度あげを始める。神輿は拝殿に安置する。これは毛萱・郡山の両区長が弓張提灯を持って先頭に立ち、拝殿での太鼓の連打を合図に、一同で「センドウ センドウ」と唱えながら、社殿を右回りに3周回り、1周ごとに社殿正面で「ササ ホーホー」と唱えることを繰り返す。ついで、天王、天神、稲荷、疱瘡、風神、水神の小祠のなかで、社殿に近い天王の小祠をやはり3周回る。この間、太鼓と大拍子の連打を続ける。続いて社殿で宵宮の祭式がある。

このほか、祭祀の詳細は、幸いにも同社の宮司であった宮古氏が平成21年（2009）にノートに記した記録（冒頭に「四十八社山神社例大祭（渡御祭）」と記されたもの）があり、そのコピーが、のちに体調を崩した宮古正宜宮司に代わって神事を取り仕切った双葉町長塚・初發神社（Ⅱ-6）の高倉洋尚宮司の手元に残されていた。東日本大震災以後は神輿渡御はじめ祭事もままならない状況となり、それと前後して高齢であった宮古宮司も死去した。四十八社山神社を本務社としてきた宮古家に社家としての後継ぎはなく、現在は兼務社として檜葉町の神職が宮司を務めている。社家伝来の資料等も確認できないなかで、コピーとはいえ、宮古氏が書き残したこの記録はきわめて貴重である。以下、祭式の詳細はそれによる。

なお、この時の祭礼写真も確認できなかったため、昭和54年頃の調査時のものを参照として掲載した。

前夜祭

宵祭り、つまり前夜祭は19時から斎行され、祭式の次第は以下のとおりである。

- ① 定刻になったら太鼓を8回打ち、区長以下参加者で千度あげを開始（写真1）。その間、太鼓と大拍子をタタドン、タタドン、タタドンドンと打ち続ける。千度あげ終了後、拝殿に上がり終わった頃大拍子を打ち祭典に入る。
- ② 修 祓／神饌、幣束、玉串、参列者の順に祓い清める。
- ③ 斎主一拝／宮司が本殿に向かって一拝、参列者もそれにならう。
- ④ 献 饌／神饌として5つの三方に神酒、水、塩、米、スルメ、野菜、果物を載せて供えておく。神事はあげつけの状態（あらかじめ神饌を供えた状態）で行い、この時に神酒と水器の蓋を取る。
- ⑤ 祝詞奏上／宮司が前夜祭の祝詞を奏上する。
- ⑥ 玉串奉奠／斎主、総代、区長、青年部代表の順に玉串を奉り拝礼。平成21年（2009）は下郡山総代、毛萱総代、下郡山区長、毛萱区長、下郡山青年部代表、毛萱青年部代表の順に行い、総代については全員が玉串奉奠を行った。
- ⑦ 撤 饌／この時に神酒と水器の蓋を戻す。
- ⑧ 斎主一拝／宮司が本殿に進み出て一拝、参列者もそれにならう。
- ⑨ 大太鼓連打／大太鼓を連打する。
- ⑩ 斎主の挨拶／祭式の修了を告げ、謝意を表す。
- ⑪ 直 会／参列者一同が神酒を頂く。直会の間に、翌日の打ち合わせと確認もする。

渡御祭（発輿）

翌日の本祭りは、午前9時から社殿で祭式を行う。神饌として9つの三方に酒、米、おふかし、野菜、魚、海藻、水と塩、果物、菓子を載せて供えておく。また、拝殿の中央に神輿を安置し、下手奥に案を置いて、その上に奥から威儀物（幣串、薙刀、手鉾、神楽、大麻、曳竹2本）を置く。これらは渡御行列に手分けして持つ。

拝殿の正面左右の外には、それぞれ五色の旗を立てる。その前にはマトイを立てて置く。これらも渡御には持ってお供をする。

祭式の次第は、以下のとおりである。

- ① 太鼓（大拍子）連打／太鼓（大拍子）を連打する。
- ② 修 祓／参列者を祓う。
- ③ 斎主一拝／宮司が本殿に進み出て一拝、参列者もそれにならう。
- ④ 御扉開扉／宮司が本殿の扉を開いたあと、本殿内に参入する。
- ⑤ ご神体出御／神輿の左右を幕で隠し、宮司は手袋とマスクを着用のうえで参列者に見えないようご神体を袖で隠し持ち、神輿に遷す。この間、氏子の人に太鼓を連打する。
- ⑥ 宮司一拝／宮司がご神体を納めたあと、その神輿に向かって一拝する。
- ⑦ 祝詞奏上／宮司が神輿に向かって発輿祭の祝詞を奏上する。
- ⑧ 威儀物（採物）授与／当番の氏子総代が供奉者の名を読み上げ、威儀物（採物）を渡す。
- ⑨ 神楽奉納／社殿前で下郡山の神楽を奉納する（写真2）。

午前10時過ぎ、一同は社殿前に整列し行列が発する（写真3）。先頭は信心深い希望者が扮する猿田彦、次がサカキを持った両区長、五色旗持ち、大太鼓持ち、下郡山と毛萱から1本ずつのマトイ、氏子総代数人の神幣持ち、神輿（担ぎ手4人）、馬上の宮司、巫女（2人）、氏子多数。行きは毛萱が中心で、帰路は下郡山が中心となる。これは1年ごとに交替する。途中、2か所で神輿を台に載せて休むが、お旅所としての神事はない。

渡御祭（海岸の御仮屋）

約2キロメートル先の浜の祭場に着くと、信者は競ってマトイに飛びつき、造花を奪い合う（写真4）。この花は魔除けとして各家の神棚に供えられるという。

海辺の砂浜には2間四方ほどの間隔で笹竹を立て、注連縄を張った「御仮屋」といっている祭場が設けられていて、神輿は海を向けて安置する。その前に案を置き、神酒、塩、水、米、魚、野菜を供える。これらは毛萱の氏子で整える。神輿の前に、総代と区長が正座する。

浜での神事を「渡御祭」といっている。祭式は、まず、宮司がサカキの枝を持って波打ち際に進み、サカキを3度潮水に浸してから神輿まで戻り、サカキの枝についた潮水を神輿と参列者に振りかける（写真5）。海岸の御仮屋での祭式の次第は、以下のとおりである。

- ① 大拍子連打
- ② 修 祓／神饌、玉串、氏子総代、区長、参列者の順に祓い清める。
- ③ 献 饌／神饌として4つの折敷に野菜、酒（一升瓶）、水、塩、米、魚を載せて供える。海岸の御仮屋で供える神饌については、毛萱地区が準備する。この時に神酒と水器の蓋を取る。
- ④ 祝詞奏上／宮司が渡御祭の祝詞を奏上する。
- ⑤ 玉串奉奠／斎主、氏子総代、区長の順に玉串を奉り拝礼。
- ⑥ 神札授与／関係者に神札を渡す。
- ⑦ 撤 饌／この時に神酒と水器の蓋を戻す。
- ⑧ 神酒拝戴／参列者一同で神酒を頂く。
- ⑨ 神楽舞／神前で下郡山の神楽を奉納する。

⑩ 還 幸／神輿は車で帰る。

祭式の間、乳児を抱いた両親が何組も神輿のもとに寄り、順に左右に分かれてわが子を神輿の下を通して3回受け渡す(写真6)。これは前年の祭り以降に生まれた乳児で、こうすることにより丈夫に育つという。筆者が調査した昭和54年(1979)は約10組であった。続いて神輿の前で神楽が舞われ(写真7)、舞が終わると一同は魔除けとして順に獅子頭を噛んでもらう。

還幸祭

正午頃、再び列を整えて神社に戻る。神輿が神社の下の鳥居に到着したあと、そこからは氏子たちが神輿を担いで拜殿まで運び入れる。一同は前夜祭と同様に揃って、社殿を回って参拝する千度あげを行う(写真8)。終わると一同は社殿に正座して「還幸祭」を執り行う。還幸祭の祭式の次第は、以下のとおりである。

- ① 斎主一拝／宮司が神輿に向かって一拝、参列者もそれにならう。
- ② ご神体入御／ご神体出御と同様の作法で、宮司がご神体を神輿から本殿へと遷す。
- ③ 修 祓／神饌、玉串、参列者の順に祓い清める。
- ④ 献 饌／この時に神酒と水器の蓋を取る。
- ⑤ 祝詞奏上／宮司が還幸祭の祝詞を奏上する。
- ⑥ 玉串奉奠／斎主、氏子総代、区長、青年部代表の順に玉串を奉り拝礼。
- ⑦ 撤 饌／この時に神酒と水器の蓋を戻す。
- ⑧ 御扉閉扉／宮司が本殿の扉を閉じる。
- ⑨ 斎主一拝／宮司が本殿に向かって一拝、参列者もそれにならう。
- ⑩ 太鼓連打／大太鼓を連打する。
- ⑪ 宮司挨拶／宮司が参列者に祭典の終了を告げ、謝意を表す。
- ⑫ 直 会／一同が神酒を頂く。

なお、『富岡町史』(関連資料②)にも刊行当時(昭和62年[1987])の詳細な浜下りの記録があるので、あわせて参照されたい。

(8) 祭礼の状況

四十八社山神社での「千度あげ」は「千度参り」と同様に、きわめて丁寧な参拝の作法である。神輿に供奉した「花」は神霊が依りついたものとされ、これを頂くのは魔除けになるというだけでなく、作占のためでもある。これは県内では南会津町田島や同町伊南などでもみられる。当地は漁業関係に携わっている氏子も多いだけに、マトイを頂くことができれば海上安全で豊漁がかなえられ、豊作にも恵まれると信じられている。しかし、のちにマトイの奪い合いは取りやめ、下郡山・毛萱2字のマトイの花をそれぞれの氏子に配るようになった。

また、乳児を神輿の下で受け渡すのも、神のご利益を得て丈夫に育ってほしいという願いで、県内で同様の作法はみられず、貴重である。

なお、震災後は、2年にわたって神輿を鳥居前まで担ぎだしただけで、宮司の死去も重なり、それ以後中断している。

(9) 芸能等

神 楽／出御に先立ち社殿前で、さらに浜の祭場で祭式の後に神楽を舞う。

神楽の芸態はこの地方の典型で、最初は「幕舞」とか「四方固め」といい、獅子遣い2人が幕の中に入り、前被りが幕の中から両手で幕を広げ、四方を巡る、次に「幣束舞」で、前被りは右手を出して幣束を持ち、振りながら四方を巡る。続いて「鈴舞」で、右手に鈴、左手に幣束を持ち、これも採物を振りながら同様に巡る。さらに「乱舞」とか「散舞」といい、獅子幕に2人が入って激しく舞って納める。

(10) 関連資料

①「福島県磐城国双葉郡富岡町大字下郡山鎮座 村社 海津見神社之景」

※句読点や改行は筆者による。

祭神 海津見神 四十八社大神

当社ハ旧号四十八社大明神ト称シ、標葉郡ノ総社ト唱ヘシ古社ニシテ由緒正シク、旧記等モ多ク之有リシガ、中世奉仕神主宮古氏退転ニ及ビ不幸ニシテ浮図氏ノ手ニ落チ浄土宗浄林寺別当トナリ、天保三年五月三日火災ノ際尽ク烏有ニ歸シタリ。

然ルニ地方ノ旧家ニ当社創建ニ係ル事歴ヲ載セラレタル書類少カラス。其伝記ニ拠ルニ当社ハ淳和天皇ノ天長十年標葉郡ノ郡司ヲ此ノ地ニ置カレシ時、大領真壁某郡治ヲ施行スルニ方先ヅ郡内ノ諸社ノ神靈ヲ総祀シテ礼典ヲ執行セラレタル一郡ノ総社ナリ。

神名ノ明細ニ至テハ既ニ其伝ヲ失シ、今之ヲ詳カニシ難シト雖モ、当時礼典ニ預リシ総数四十八社ナルヲ以テ四十八社大明神ト称シ、代々ノ郡司崇敬ヲ極メ一郡ノ尊信モ亦比類ナカリキ。古代ノ実蹟ニ照スニ大領ノ古墳ヲ今ニ真壁塚ト唱ヘ郡衙ヲ置カレシ地ナルヲ以テ村名ヲ郡山ト唱ヘ、郡司館又ハ郡家ノ在リシ旧址ハ当社境内ノ地接キノ丘原ニシテ残礎古井等今尚ホ存在シ歴々トシテ徴スベシ。

当地ハ中世標葉郡ト唱ヘ地形ハ山岳起伏シテ平地極メテ少ナシ、就中海岸付近ノ部落ハ耕田ニ乏シク人民概ネ漁業ヲ以テ生計ヲ営メドモ、山勢海ニ迫リテ断崖甚ダ多ク崖下数里ノ間狭長ノ砂漠ニシテ、俄カニ暴風激浪ノ際ヒハ行人避難ノ場所ナク、怒濤ノ為メニ奪ヒ去ラルハニ至ル。東浜街道第一ノ難所ナリ。海中ニハ岩礁乱立シテ漁舟之ニ触ルル時ハ忽チ微塵トナリ、潮流奔騰シテ崖下ニ激スルトキハイカナル大船巨舟モ泡沫ト共ニ碎クルノ惨事ヲ呈スル。年トシテ之ナキハナシ。

当社近傍ノ毛萱浜ノ漁師与七ナル者、常ニ之ヲ憂ヒ当社ヲ尊信シ祈ルニ、海上ノ穩漁業幸福ノ以テシ朝夕怠リナシ。与七人ト為リ温厚ニシテ慈善ノ心深ク、神モ其丹誠ニ感シ給ケン、或夜夢ニ神託アリ。汝ノ願フ所ハ公衆ノ為ニシテ己ノ私ニアラス、汝ノ赤誠愛ス可シ宜シク海上ヨリ寄り来ル一函ヲ取上ケテ当社ニ納ムベシ、然ラバ海ニハ風波ノ難ヲ除キ、陸ニハ疾病災厄ヲ救ヒ、殊ニ安産ヲ守護ス可シ、汝明朝行屋磯ニ待ツヘシ、ト告ゲ玉フ。

明朝、与七身ヲ清メテ行屋磯ニ出テ海上ヲ眺ムルニ果タシテ一函ノ波ニ漂テ浮沈シ来ルヲ見ル。与七恐懼九拝、感涙ニ咽ヒツツ寄り来ル一函ヲ頂キ直ニ四十八社ノ内陣ニ納メ奉ル。当社ノ神秘ニシテ何人モ之ヲ拝観スルヲ得ザル宝函ナリ。実ニ永久三年九月十五日ノ事ニ係ル。

爾来神威益赫灼トシテ靈驗殊ニ新ナリ。当国ハ申スニ及バズ、武相房総常等ノ諸国ヨリ参拝ノ信徒踵ヲ接ス。毎年旧曆九月十五日毛萱浜行屋磯ニ於テ神輿渡御ノ祭典ヲ執行スルハ此故事ニ因テナリ。

明治維新ノ始メ四十八社大神ト称シ、別当浄林寺住職更ニ復飾ノ上、曾テ絶家トナリシ神主宮古氏ノ家名ヲ再興シ宮古正志ト称シ神主トナリ、明治六年磐前県ノ命令ニ依テ海津見神社ト改称シテ村社ニ列シ、宇佐見正泰祠掌トナリ、明治十五年宮古武雄祠掌トナリ、明治卅一年宮古純蔵社掌ニ任ゼラル。

因ニ当社ノ事歴述ルガ如シ。然ルニ海津見神社ト改称セラレタルハ頗ル允当ヲ欠クモノニ似タリ。蓋シ当社ノ信者十中ノ八九ハ漁業者ナルヲ以テ、所祭海神ノミト推定セラレシ結果ナラン歟、遺憾ニ堪ヘザル次第ナリ。方今社号復旧ノ請願ヲ提出セン為メ書類取調中ナリ。

社掌 宮古純蔵述

明治卅八年十月刻／光彰館製版／華陽写／如水刀

渡邊市太郎『大日本名蹟図誌』第拾貳編 磐城岩代之部 第五卷 明治39年(1906)

②「四十八社山神社の浜下がりの神事」(抜粋)

現在の例祭は、十月九日・十日の両日である。前日は宵祭りで先導祓、翌日は本祭りとなり、神輿の浜下がりの儀式がある。

祭神は綿津見神であり、社は昔、毛萱地区にあって、四十八社大明神と称していた。八一二年(弘仁三年)現在地である下郡山に移り、ニカ村持になった。

祭りには昔から雨が降らないで風が吹くという言い伝えがあり、漁に対する信仰心から熊町、小良ヶ浜、相馬小高の村上、請戸から南はいわきや茨城など遠いところからも参拝に来ていた。

毎年十月初めには花フキをする。花はまといに挿したり、氏子の家ごとに分ける桜花であり、下郡山、毛萱の二地区の人達は別々に集まって作っている。

十月九日の宵祭りには、午後七時頃から両地区の各戸より、ひとりずつ神社に集まり、社前に整列して、「千度あげ」の祈願を行っている。それは、下郡山、毛萱の行政区長が弓張提灯をもって先頭に立ち、一斉に「千度、千度」と声高く唱えながら、社殿を左から三回まわり、一回まわる度に正面で、「ササ、ホーホー」と唱え、それをくり返すことにしている。次いで天王の宮を同じように左回りに三回くり返す。それが終わると社殿において、宵宮よいのみやの神事を行い、直会なおらいとなり、翌日の本祭りの打ち合わせをして終わる。

このように八社様の祭りは下郡山、毛萱両地区の人達が神社に寄り集まり、神域の清掃や飾りつけ、潔斎を体験して、祭りを迎える古いならわしによったものである。

十月十日の本祭りには、午前九時より神事をとりおこない、御霊代を神輿に移し、その間は奏楽がなされ、ついで神楽が奉納される。それが終わると神輿のお下がりとなる。

行列は天狗(猿田彦命を模し、信心する者が希望する)、榊、五色、大太鼓、マトイ(飾り花をさす)、金幣数基(氏子総代)、神輿、宮司、稚児、一般氏子の序列である。行きは毛萱が中心であり、帰途は下郡山が中心となることが通例となっている。

途中ニカ所ほど神輿の休む「お旅所」が設けられてあり、床机が並べられている。各家の人達は神輿の通る道筋に出て、さい銭をあげて神輿を拝む。約二キロメートルほどで毛萱の砂浜に着御し、神輿は海に向かって鎮座される。宮司は榊を手に捧げて持ち、波打ち際に立って、三度潮水に浸してから神輿の前に戻り、神に供え、それをもってお祓いをし、祝詞奏上となる。

その間、昨年の祭り以後に生まれた幼児を抱いた父親や母親たちは、わが子を神輿の下を三回くぐらせる。左右両側に分かれた親たちが力を合わせて行う神事であり、わが子の無事成長を祈願するものである。

続いて神楽の奉納があり、その神楽に頭を噛んでもらうと悪魔除けになると信じられ、それは災厄防止や息災延命に起因しているといわれる。また、マトイに飾られた桜花は、各戸に分けられ、それが持ち帰られ神棚にあげられる。

正午ごろ、再び行列を整えて還御となり、神体を神輿より本殿に遷して神事は終わる。

この神事は古いならわしによって行われ、浜に下ってみそぎを行うことは、地区民の安全と無病息災、五穀豊穡を祈願したものであったろう。

富岡町史編纂委員会『富岡町史』第三巻 考古民俗編(1987)

③『富岡町郷土誌』(抜粋)

第三章 郷土の人文地理

第四節 社寺及宗教

四十八社山神社

位置及建築 富岡町大字下郡山字宮の前に鎮座す

社 格 村社

祭 神 大綿津見神外四十七柱を祭る

縁 起 大同二年大綿津見神を祭り、天長年間淳和天皇の御代に総社とされ郡司制度設けらるるに
当り郡内の神社の祭典を一ヶ所に行ふ処となり郡内四十七柱の神をこの社に祭り行ふ明治四十一年
内務大臣より四十八社山神社とし改称の件許可さる。

什宝器 日露戦利品七冊弾丸五個、方匙壺個

財 産 動産壺千円、不動産山林一段一畝

氏子数 六十三戸

祭 礼 九月十五日

富岡町教育委員会『富岡町史資料 富岡町郷土誌』（1981）

④『富岡町郷土誌』（抜粋）

第四章 郷土の特殊なる方面の調査

第二節 風俗、習慣、口碑、伝説

七 口碑、伝説、迷信

1. 史 実

四十八社山神社

大字下郡山に在り。往古は四十八柱大明神と称へたりと云ふ。案ずるに往古神体仏像等を海中に
投じたることありしが如し。或は本地垂迹の説より起りたることにあらずや。この神も亦海中より
上陸せられ請戸浜に寄らんとせり。然るに土民拒みて止まず。遂に大字毛萱の浜に上陸せらる土民
畏し今の地に安祀せしと言ふ。靈験にして諸者遠近より来集す。然れども請戸浜のみは神罰あるに
より来訪せずといふ。本社は其の後綿津見神社と称へたりしが明治四十五年六月此の如く改称せり。

富岡町教育委員会『富岡町史資料 富岡町郷土誌』（1981）

参考文献・資料

懸田弘訓「四十八社山神社の浜下り」『うつくしま祭り50選スペシャル』福島テレビ（2002）

四十八社山神社元宮司・故宮古正宜氏による記録「四十八社山神社例大祭（渡御祭）」（2009か、双葉町長塚・初發神
社宮司高倉洋尚氏コピー提供）

【懸田弘訓・大里正樹】



写真1 宵祭りに社殿を回って拝礼する
（四十八社山神社境内 S54か）



写真2 社前で神楽奉納（四十八社
山神社境内 S54 か）



写真3 神社から海辺の祭場に渡御行列
(四十八社山神社参道 S54 か)



写真4 祭場に着くとマトイを奪い合う (毛萱浜 S54 か)



写真5 サカキを潮水に浸して、神輿に振りかける (毛萱浜 S54 か)



写真6 乳児を神輿の下で受け渡す (毛萱浜 S54 か)



写真7 浜の祭場での神楽奉納 (毛萱浜 S54 か)



写真8 還御すると社殿を回って拝礼する (四十八社山神社境内 S54 か)

9. 檜葉町 大滝神社・出羽神社

(1) 神社の概要

名称／大滝神社

所在地／双葉郡檜葉町上小埜字柴坂

由緒／縁起によれば大同2年(802)に、紀伊国(和歌山県)熊野の那智麻呂という修験者が熊野の分霊を奉じ、鳥を道案内にして海路北上した。那智麻呂は木戸川の河口にさしかかったときにお告げを聞いて川を遡ることにきめ、村人の山内縫殿介の案内でさらに上流にのぼり、雄滝・雌滝のある所を神地と定め、神々を祀ったと伝えられる。那智麻呂はここで生涯にわたって神に仕え、修験の道に精進したという。山内縫殿介の子孫とされる山内家は、その縁で現在も奥宮の鍵持ちの役を担っている。

名称／出羽神社

所在地／双葉郡檜葉町山田岡字羽黒山1

由緒／近世の木戸山田村(のち山田岡村と山田浜村に分村)の鎮守であった。棟札等の資料によると、寛文10年(1670)に本殿建立、正徳元年(1711)に神輿が寄進されたとある。明治6年(1873)に神仏分離により出羽神社と改名。

(2) 祭りの名称

檜葉大滝神社の浜下り(福島県指定重要無形民俗文化財指定名称)、ハマクダリ(地元での呼称)

(3) 祭りの由来

漂着伝説や寄神の形態 神社の由来で述べたとおり、大滝神社の起源は熊野の行者である那智麻呂が鳥を道案内として海路を北上し、この地に神を祀ったとされる。三本足の鳥は熊野の神の遣いとされている。

禁忌やその他の伝説 那智麻呂が常食としていたウリを栽培していた畑を、鳥がたびたび荒らすので、その退散を祈ったところ、鳥は三声ほど鳴いて滝壺に落ちたという。ウリ畑の跡は今も残っており、近くに鳥塚もあり、集落では鳥の害はないとされている。また、上小埜小山にはキュウリを作れないとされる家もある。さらに、那智麻呂が携えてきた杖をこの地に差したところ芽をふき根が張り、奥宮境内の爺杉と婆杉はそれが成長した木であると伝えられている。

(4) 祭日

かつては毎年4月5日から4月9日までの5日間で、4日目である4月8日に浜下り(浜下り神事)が行われたが、昭和51年(1976)から浜下りを新暦の4月第2日曜日に固定し、その前後の木曜日から月曜日まで5日間を祭日としている。

(5) 伝承団体

木戸八幡神社宮司、木戸八幡神社禰宜(出羽神社の神事を執行する)、木戸八幡神社氏子総代会、出羽神社氏子総代会、小埜義団(上小埜の祭礼組織)、甚六会(下小埜の祭礼組織)、羽黒会(山田岡の祭礼組織)、清之会(前原の祭礼組織)。

祭礼執行の中心となるのは小埜義団であり、元来は明治期に自警団(夜廻り隊)として設立したものであるが、現在は祭礼組織としてのみ機能している。各戸から原則1人(多くは長男)が参加し、役職は、総理、幹事、会計、世話人の4役がある。任期は1年で、総理を終えると義団を抜けて顧問となる。

(6) 神幸経路(図1・2)

神幸地／山田浜(津之神社)



図1 大滝神社の神幸経路（2日目の下山祭）(R6. 4. 12)



図2 大滝神社・出羽神社の神幸経路（4日目の浜下り）(R6. 4. 14)

神幸経路／令和6年度（2024）の4日目の浜下り経路は以下のとおり。

木戸八幡神社（宮出し）→下小埞→山田岡にて出羽神社の神輿行列と合流①→津之神社（山田浜）にて潮垢離②→前原のお旅所（清之神社）にて神事③→下小埞のお旅所（集会所）にて神事・浦安の舞奉納④→ぼら坂（法螺坂）のお旅所（下小埞）⑤にて神事→木戸八幡神社（宮入り）

（7）祭りの内容

潮水の扱い／神輿が津之神社に到着すると、宮司と補佐役（氏子総代が義団の総理）が山田浜の防波堤から浜辺に下り、補佐役が笹竹を海に浸して宮司の持つサカキに潮水を振りかける。宮司は浜辺から防波堤を上って津之神社に戻り、安置された神輿にサカキから潮水を振りかける。潮水を汲んで供えることはない。

実施内容／祭りは4月第2日曜日の浜下りを中心に行われるが、その3日前、木曜日から「農止め」といって、地区内の農作業は休みとされる。氏子は地区内に祭りの幟旗を立てるが、近年では勤務の関係から前週の日曜日など氏子たちが時間の取れる日に立てることが多い。小埞義団の役員はこの日の15時に木戸八幡神社に集合し、奥宮とされる木戸川上流の大滝神社に移動して準備をはじめ。夕方からは木戸八幡神社宮司、鍵持ち（山内縫殿介の子孫とされる山内家の当主または後継ぎの者）、氏子総代、道案内の猿田彦役も大滝神社に集まり、神事が行われる（写真1）。その後一同は拝殿（「籠り堂」とも呼ばれる）の炉に灯を灯し、神酒をいただき、食事をして暖を取って時を過ごす。その間、出羽神社の祭礼組織「羽黒会」が神酒を持参し、拝殿にて小埞義団と盃を酌み交わす。日付が変わり午前0時になると宮司と一同は下帯一本となって神社から木戸川に下り、布滝の下流の滝淵で水垢離をとる（写真2）。「滝」は大滝神社のご神体と考えられることから、その上には絶対に入らないものとされる。拝殿の炉に火を灯し、一同はご神体を守って夜籠りをするが、これをオコモリといっている。かつては、境内は女人禁制であった。また、戦前まではいわき方面からも参拝者が多数集まり、社殿内に入りきれないので、境内の木の下で焚き火をして夜を明かしたという。

翌2日目（第2金曜日）は下山祭で、朝9時に宮司、氏子総代たちが木戸八幡神社に集合し、マイクロバス（ワゴン車）で大滝神社に向かう。服装は宮司が装束、他の参加者は背広にネクタイをしめ、義団員はその上にハッピーを着用する。10時頃から大滝神社の籠り堂にて神事が行われ、宮司が本殿から小さな木製の笈にご神体を遷す。笈は最初に義団の総理が背負って参道を上り鳥居まで進むが、その際にサカキの葉を口にくわえ、手にサカキの枝を持つ。なお、口にサカキの葉をくわえるのは御霊代に息がかからないようにするためで、以降渡御中に笈を背負う人は必ずサカキの葉をくわえる決まりになっている。笈を先頭にし、鍵持ち、宮司、禰宜、氏子総代、義団の役員という順で鳥居を抜け、一行は木戸川に沿って里宮の木戸八幡神社に向う（写真3）。笈を背負う役は義団総理から幹事、会計と交代するが、背負う順番の指示は鍵持ちが行うことになっている。かつては背負う希望者が多く、籤で決めたこともあり、全員が背負えるようにと、わずかな距離で交代したという。途中のお旅所は、かつては女平、夫太郎、下川原、上川原、小山の5か所であったが、現在は女平、夫太郎、川原（場所は以前までの下川原のお旅所。川原地区が合同で神事を執行）、小山の4か所である。お旅所はいずれも道のそばで鳥居があり、サカキなどの木が植えてある。ここにゴザ、ブルーシートなどをひき、それぞれの集落の老若男女多数が酒と重箱に詰めたご馳走を持ち寄って待っている。一行が到着する時間を見計らって代表が村境まで出迎えるところもある。一同が到着すると、笈を小さな土段か石の上に安置する。神酒や餅を供え、それを前にして宮司が祝詞を奏上し、神事が執行される。このあと直会で、持ち寄った重箱を開いて、宮司、鍵持ち、氏子総代表、行政区長の順で酒が注がれ、20分間ほど酒を酌み交わす（写真4）。素朴ながら和やか情景である。最後にお旅所でご馳走にあずかったことへの返礼として、行政区長の音頭で謡（「高

砂」「四海波」)を一同で唱和し、終了後、女平地区代表が笈を背負い、次のお旅所である夫太夫へと向かう。20分ほど酒を酌み交わす(写真4)。素朴ながら和やかな情景である。最後にお旅所でご馳走にあずかったことへの返礼として、行政区長の音頭で謡を一同で唱和し、終了後、女平地区代表が笈を背負い、次のお旅所である夫太夫へと向かう。次の集落に入ると、笈はその集落の有志が交代で背負う。最後のお旅所である小山を過ぎて木戸八幡神社に近づくと笈は再び義団の総理が背負い、猿田彦役がサカキを持って先導し、隊列を整えて参道を進む。社殿に到着すると、宮司は笈からご神体を仮宮となる木戸八幡神社本殿に遷す。この夜、宮司と鍵持ちは社殿に泊まってご神体を見守る。

3日目(第2土曜日)は、本祭りの前日であり「花ふき」が行われる。かつてはこの日に義団が社務所に集まって、色の付いた紙を切って細い割り竹に張り付けて、多くの造花を作ったが、近年は老人会や子ども会が前日までに集まって作るようになった。朝9時に義団員が木戸八幡神社の境内に集合し、「花」と呼ばれる造花を神輿の屋根に飾り、花梵天と呼ばれるマトイも作る(写真5)。また、この花は神輿が通る道筋の家々にも配り、各家では軒先にさす。よく各地の春祭りで、社殿や神輿、家々を生花または造花で飾ることがあるが、これもその類であろう。

夕方、社務所に明日の浜下りにお供する人びとが集まり、17時から宮司宅にてオベッカが行われる。これは本来、穢れを祓うために家族や一般の人びとと火を別にして食事をし、身を清めた名残である。宮司、総代長による挨拶の後、乾杯、食事となるが、かつては地区ごとの当番制で男のみが料理を作っていた。料理の内容は特に決められていないが、令和6年(2024)は豚カツとマグロ刺身、大根のナマス、汁物で、外部からの仕出しと氏子の女性たちにより準備されている。また、この場で明日の本祭りの役割分担も決められる。ここでも最後に謡を一同で唱和する(写真6)。

4日目(第2日曜日)は本祭りで、「浜下り」である。小埜義団は8時に木戸八幡神社に集合し、準備にかかる。8時30分から祭典となり、宮司による祝詞奏上、修祓ののち、大滝神社のご神体を木戸八幡神社の神輿に遷す。この際にご神体の納められていた笈を持つのは鍵持で、宮司が神輿にご神体を遷し終わると再び祝詞奏上があり、出御前の祭典が終了する。これを「宮出し」といっている。このあと総代長から渡御行列が発表されるが、猿田彦を先頭にして、祓い串、花梵天、旗、笛・太鼓の囃子方、賽櫃、神輿、宮司(騎馬)などの神職、鍵持ち、氏子総代、区長であり、そのあと信者が続く(写真7)。一行は笛、太鼓の囃子により山田浜に向かって出発するが、沿道では地域の人びとが集まってきて、賽銭、米、お菓子などを神輿や子ども神輿、賽銭用のリヤカーに供える(写真8)。

一方、頃合いをみて山田岡の出羽神社でも神職(木戸八幡神社禰宜)、氏子総代、羽黒会らが集まって、出御の祭式を行い、猿田彦の先導で、五色の旗や花梵天も供奉して神社を出発し、山田浜へと吹かう道の途中で合流する。大滝神社と出羽神社の両社の行列先頭である猿田彦が互いに挨拶を交わし(写真9)、これより出羽神社の行列が先導して2つの神社の行列がともに山田浜の海辺に鎮座している津之神社に向かう(令和6年度は出羽神社の神輿はトラックにて渡御)。

山田浜に到着すると、信者は一斉に花梵天に寄り集まって造花を奪い合う。あっという間に、花はすっかりなくなる。これは魔除けにもなるといって神棚に供える。両社の神輿は、津之神社の前に並べて安置され、これより潮垢離の神事になる。一同は両社の神輿の前に正座し、まず神職の修祓がある。終了後、宮司はサカキを持ち、そのあとに続いて補佐役(氏子総代か義団の総理)が笹竹を持って浜辺に下る。浜辺に着くと補佐役が笹竹を海に浸し、潮水を宮司のサカキに振りかける(写真10)。津之神社に戻ると、宮司はサカキから潮水を両社の神輿に振りかける。さらに氏子総代も繰り返し振りかける。一同は神輿の前に正座をして、祭式が執り行われる(写真11)。修祓・宮司の祝詞奏上に続き、謡の「高砂」と「四海波」を唱和し、直会になる。この間、信者はめいめい持

ってきた笹竹をサカキに触れて帰る。これは潮水のご利益を分け与えてもらうためと思われる。

正午前に、再び列を整えて次のお旅所である前原地区の清之神社に向かう。この頃はお供の人数も増えて、行列は祭礼の中で最も長くなる。清之神社に着くとやはり神輿を安置し、祭式がある。このあと、氏子総代によってコメ、ウシなど今年のおもな農作物の値の競り合いが行われる（写真12）。氏子は農家が多いために値が高い方が喜ばれ、見る間に上がってゆき、笑いもでる。これはかつて特定の人に神を降ろして託宣を得た作占の名残であると考えられる。このあとやはり直会がある。

やがて両社の神輿行列は出発するが、途中、下小埜に入ると、大滝神社の神輿の担ぎ手が、上小埜義団から地元の甚六会と交代する。やがて下小埜のお旅所である下小埜集会所に到着すると両社の神輿を安置して、神事が行われる。その後、公民館の庭に笹竹をさして注連縄を張った中で、浦安の舞が奉納されると、終わり次第に直会となり、謡を唄う。ここで参加者全員が昼食をとり、小休止してから両社の神輿がともに出発する。途中、道の分岐点で大滝神社の一行は出羽神社の行列を見送るが、この際に、両社の神輿は激しくぶつかり合ってもみ合い、沿道から大きな歓声が上がる（写真13）。大滝神社の行列は最後であるばら坂のお旅所に寄り、神輿を安置して祭典があり、他所と同様に直会、謡が行われる（写真14）。15時過ぎに木戸八幡神社に宮入し、ご神体を本殿に還し、この日の神事は終わる（写真15）。令和6年度は、このあとで子どもたちに向けての餅まきが行われた。この後、宮司、鍵持ち、氏子総代、猿田彦、上小埜地区の協議委員、小埜義団の三役は社務所にて直会を行うが、この際の謡は義団総理が唄い出しを行う。直会の間に三役以外の義団員は神輿の片づけを行い、終了後、義団を卒業した顧問も集まってきて、義団だけの打ち上げが行われる。ここでの料理は義団三役の妻たちが準備する。

5日目の（第2月曜日）は後祭りで、還山祭、「お上がり」とも呼ばれる。8時45分に木戸八幡神社の社殿前で還御祭の神事が行われ、ご神体を再び笹に遷し、途中はお旅所で休むことなく奥宮の大滝神社に向かうが、現在は9時頃にワゴン車（もしくはマイクロバス）に乗って移動する（かつて徒歩で移動した時代は12時頃に到着した）。9時20分頃に大滝神社の駐車場に到着すると、鍵持ちが先頭となってサカキを持ち、宮司、総代長、氏子総代、義団総理の順で大滝神社に向かう。神殿の前で還山祭が行われ、ご神体を本殿に戻す（写真16）。帰路、一行はワゴン車にて木戸八幡神社に戻り、直会を行って5日間にわたった祭りはすべて終了する。徒歩で移動していた時代は「お上がり」も一日がかりであったが、現在は午前中で終了している。

この祭礼においてご神体を納めた笹を多くの人びとが担ぐのは、そのご利益にあやかるためである。また、造花をたくさん飾るのは、前述のように、田植えを始めるにあたって、豊作をかなえてくれる田の神が依りついている花を迎えた行事の名残である。これはほかでもみられるが、多くの造花に加えて花梵天まで作るなど、ひととき丁寧である。

さらに奥宮の大滝神社には熊野の分霊を祀ったという縁起があるだけに、目に見える信仰の対象は那智の滝と同じく雌雄の滝である。ここに案内した山内縫殿介も修験者であったと思われるが、その子孫が今なお鍵持ちとして重要な役を担っているのも注目すべきである。福島県の重要無形民俗文化財に指定されている。

（8）祭礼の状況

平成23年（2011）の東日本大震災により祭礼は中断したが、平成25年（2013）に総代、小埜義団役員が集まって大滝神社拝殿にての神事を復活させ、以降平成29年（2017）まで毎年4月に大滝神社にて神事のみが行われた。

その後、上小埜地区でも帰還する住民が増え、祭礼運営に必要な区費が集まってきたこともあって義団を中心に再開を望む声が大きくなり、平成30年（2018）に木戸八幡神社の神輿渡御が再開した。

ただし、この年は山田浜までの渡御は行わず、檜葉まなび館（現檜葉小学校）校庭にて神事が行われ、小・中学生による浦安の舞も奉納された。なお、祭典では海水を事前に浜から木桶に汲んできて、神前に供えている。翌令和元年（2019）には山田浜までの神輿渡御（子ども神輿も復活）が行われ、出羽神社の神輿とも合流して、宮司による潮垢離を含む5日間の祭礼の行程が復活した。

しかし、令和2年（2020）からは新型コロナウイルス感染症（COVID-19）により再び神輿渡御を中断せざるを得なくなり、翌年までの2年間は木戸八幡神社の拝殿にて神事のみが行われた。

令和4年（2022）に入り新型コロナウイルス感染症が一定の落ち着きをみせてくると、地区の若者たちから祭礼の再開を希望する意見が出され、同年4月8日に大滝神社から笈でご神体を遷して木戸八幡神社での神事が行われ、奥宮でのオコモリ、山田浜までの神輿渡御、潮垢離は行わないものの一部省略した形態での祭礼を復活させた。さらに翌令和5年（2023）には、小埜義団からすべての行程を含む完全な私たちでの祭礼の復活について希望が出され、宮司と総代が協議を重ねて完全復活を決定し、同年4月6日から9日まで、滝の淵での水垢離、奥宮でのオコモリ、山田浜までの神輿渡御、潮垢離を含む全行程が復活した。さらに、令和6年（2024）からは、宮司の騎馬と清之神社での「競り」が復活している。

（9）芸能等

浦安の舞／4日目の午後、下小埜のお旅所にて、地元の女子児童4人により奉納される。内容は扇の舞と鈴の舞との組み合わせで、衣装は中に白衣と緋袴、その上にチハヤと呼ばれる巫女衣装を着用し、髪には花簪をつける。公民館の前庭にしめ縄を張り、ブルーシートを敷いた上で舞う。舞の奉納は戦後中断していたが、昭和51年（1976）に上小埜地区の小学校5年生4人が飯野八幡神社（いわき市／Ⅲ-40）で指導を受けて復活し、現在に至っている。

（10）関連資料

「令和六年度 大瀧神社例大祭のご案内」

陽春の候 大瀧神社例大祭も間近となりました。当神社は伝承によれば、およそ千二百年の昔大同二年に熊野那智山本宮より御分霊を奉戴し、木戸川上に御鎮座以来木戸川鎮護の神また神徳靈験あらたかな大瀧大明神として永く崇尊されて参りました。

ご存じのとおり例大祭のお浜下り神事は前後五日間にわたって齋行され、祭りの伝統的な精神を継承するものとして県の重要無形民俗文化財に指定されております。

今年は左記の予定で神輿渡御を行います。ご多用中恐れ入りますが、角煮におかれましては、神の恵みを拝戴しつつ誠意を捧げて奉仕されますようお願い申し上げます、お知らせいたします。

記

令和六年四月十四日（日）

九時〇〇分、木戸八幡神社にて例大祭齋行

九時三〇分、神輿行列出発

十時三〇分、山田岡にて出羽神社の神輿行列と合流

十一時〇〇分、津神社にてお塩垢離（山田浜）

十一時三〇分、清神社にて神事

十二時二〇分、下小埜旅所「集会所」にて神事・浦安の舞奉納

十三時二〇分、ぼら坂旅所にて神事

十四時〇〇分、木戸八幡神社に宮入り・直会

〈神輿渡御の行程〉

木戸八幡神社（宮出し）→下小埜→山田岡→津神社（山田浜）→清神社（前原）→小埜集会所→ぼら

坂（下小墻）→木戸八幡神社（宮入）

以上

令和六年三月吉日

宮 司 宇佐神正道

氏 子 総 代 一 同

※大瀧神社例大祭の五日間の日程は、別紙の通りです。

（別紙）

「令和六年 大瀧神社例大祭の日程」

十一日（木）例大祭初日

十七時〇〇分、木戸八幡神社を出発、奥宮本社にてお籠り、永垢離。

十二日（金）下山祭

八時〇〇分、木戸八幡神社に集合し、大瀧神社に出発

※上小墻行政区は自動車を準備

九時〇〇分、奥宮より宮出し、女平、夫太郎、川原、小山の各旅所を經由して、

十四時三〇分、木戸八幡神社に宮入り。直会。

※この日より、宮司、鍵持ちは神社にお籠り。

十三日（土）お浜下りの準備

花作り（老人会）と注連縄張り等（上小墻行政区）は別の日に行うこともある。

十七時〇〇分、社務所（宮司宅）にてお別火

（お別火には、宮司、鍵持ち、上小墻総代、猿田彦役、義団三役、上小墻区長・副区長参加）

十四日（日）お浜下り・神輿渡御

九時〇〇分、木戸八幡神社にて例大祭

九時三〇分、神輿渡御出発

十時三〇分、山田岡にて出羽神社の神輿行列と合流

十一時〇〇分、津神社にてお塩垢籬（山田浜）

十一時三〇分、清神社にて神事

十二時二〇分、下小墻旅所「集会所」にて神事・浦安の舞奉納

十三時二〇分、ぼら坂旅所にて神事

十四時〇〇分、木戸八幡神社に宮入り・直会

十五日（月）還山祭

九時〇〇分、木戸八幡神社を出発。奥宮に宮入りの後、一同下山し、木戸八幡神社にて直会。

（大瀧神社配布資料）

参考文献・資料

岩崎敏夫・懸田弘訓『大瀧神社浜下り神事（檜葉町無形文化財調査報告書）』檜葉町教育委員会（1979）

檜葉町史編纂委員会『檜葉町史』第2巻 自然・考古・古代・中世・近世資料（1988）

檜葉町史編纂委員会『檜葉町史』第1巻 通史 上（1991）

福島県立博物館『福島県立博物館調査報告第28集 福島県における浜下りの研究』（1997）

懸田弘訓『歴春ふくしま文庫46 ふくしまの祭りと民俗芸能』歴史春秋社（2001）

懸田弘訓『うつくしま祭り50選スペシャル』福島テレビ（2002）

福島県文化財報告書第425集『福島県の祭り・行事—福島県祭り・行事調査報告書—』福島県教育委員会（2005）

檜葉町教育委員会『檜葉町の民俗 暮らしの足あと』（2006）

今村瑠美「大瀧神社の「浜下り」の儀礼と組織」『磐城民俗』第36号 磐城民俗研究会（2011）

【鍵水実・懸田弘訓・大里正樹】



写真1 1日目、大滝神社拝殿でのオコモリの神事（大滝神社拝殿 R6.4.11）



写真2 1日目午前0時、布滝の下の淵での水垢離（大滝神社近くの木戸川 R6.4.11）



写真3 2日目朝、ご神体の入った笈を先頭に下山（大滝神社鳥居前 R6.4.12）



写真4 2日目朝、最初のお旅所、女平での直会（R6.4.12）



写真5 3日目朝、小埜義団による準備（花纏）（木戸八幡神社 R6.4.13）



写真6 3日目夕方、オベッカでの謡（木戸八幡神社宮司宅 R6.4.13）



写真7 4日目朝、猿田彦を先頭に行列が出発（上小埜宮前 R6.4.14）



写真8 沿道の住民から、子ども神輿に賽銭が入られる（上小埜宮前 R6.4.14）



写真9 出羽神社の行列と合流。両社の薩田彦が挨拶（山田岡 R6. 4. 14）



写真10 宮司が浜辺に下り、サカキに潮水を振りかける（山田浜 R6. 4. 14）



写真11 津之神社での神事。大滝・出羽両神社の宮司による祝詞奏上（山田浜 R6. 4. 14）



写真12 帰路、清之神社での農作物の競り（R6. 4. 14）



写真13 帰路の分岐点で大滝・出羽両社の神輿が激しくもみ合う（下小埜 R6. 4. 14）



写真14 最後のお旅所、ぼら坂での神事（R6. 4. 14）



写真15 木戸八幡神社に到着し、ご神体を神輿から移す（R6. 4. 14）



写真16 5日目朝、宮司がご神体を大滝神社本殿に遷す（R6. 4. 15）

10. 広野町 大瀧神社・鹿島神社

(1) 神社の概要

名称／大瀧神社

所在地／広野町上浅見川字大舟1

由緒／瀬織津姫命を祀る。広野町の西、浅見川を河口から6キロメートルほど遡ったところにある「大滝」(写真1) そのものをご神体とする神社である。滝つぼの近くに、コンクリート製の小屋があり、そこに小さな祠が安置されているだけで、社殿はない。神社の詳細は不明だが、永承5年(1050)あるいは延享元年(1744)の創建との伝承がある。女人禁制とされていた時代もあったようである。

名称／鹿島神社

所在地／広野町下浅見川字本町144

由緒／武甕槌命・経津主命を祀る。かつての浜街道沿いにある本町集落の南端に鎮座する。貞観8年(866)に常陸国鹿島神社から勧請したと伝えられている。旧下浅見川村の鎮守とされてきた。

(2) 祭りの名称

タンタンペロペロ、タンタンペロペロの祭り、大瀧神社・鹿島神社例大祭

(3) 祭りの由来

(4) 祭日

毎年4月8日が祭日とされ、旧暦で行われていたが、平成には新暦の4月8日に近い日曜日を本祭り、前日を宵祭りとしている。

(5) 祭祀組織

大瀧神社の伝承団体／檜葉八幡神社宮司(広野町上北迫)、上浅見川：桜田・大谷内・長畑・狐石・小松の氏子、祭典執行委員(委員長、副委員長、会計などの役職あり)

鹿島神社の伝承団体／檜葉八幡神社宮司(広野町上北迫)、祭典執行委員(委員長、副委員長、会計などの役職あり)

(6) 神幸経路(図1)

神幸地／浅見川河口付近の浜辺

大瀧神社の神幸経路／古くは4月7日(宵祭り)に神が山から下りるものであった。

4月7日の行程：浅見川上流の滝の傍にある大瀧神社～小滝平のお旅所(大字上北迫との境となる地に設けられる)～二本櫓のお旅所(上北迫の二本櫓との境となる地)にて、笈で運んできたご神体を神輿へと移す「お山さがり」の神事～南山集落を神輿が渡御～小松集落のお旅所で神事～長畑のお仮宿に着輿(7日夜から翌朝までお仮宿に安置)。

4月8日の行程：朝、神事のあとに長畑のお仮宿を発輿～大谷内集落を神輿が渡御～昼頃、桜田集落のお旅所で鹿島神社の神輿と出会う～(以下は鹿島神社と同じ)～鹿島神社前で2社の神輿をもみ合い「ワッショイ」の掛け声で別れ～もと来た道を長畑集落のお仮宿へと戻る～お仮宿にて再びご神体を笈に移す～氏子代表が上流の大瀧神社まで神を送り、還御。

鹿島神社の神幸経路／距離が大瀧神社より短いため、神輿の渡御は4月8日のみであった。

4月8日の行程：鹿島神社にて神事(ご神体を神輿へ移御)、発輿～本町のお旅所(北端。下北迫



図1 大瀧神社・鹿島神社の神幸経路（令和6年4月7日） *平成12年6月広野町発行2.5万分1地形図を加工して作成

との境の地)～昼頃、上浅見川地区との境(桜田集落のお旅所)へ出向き、鹿島神社の神輿と出会う～(以後は鹿島神社神輿が先導)駅前通り～広野駅前お旅所(以前は小学校の校庭)での神事～2社の神輿があらためて本町北端のお旅所を訪れて神事～浅見川河口にて浜下りの神事～浜下り終了後、帰路に就く～鹿島神社前で2社の神輿をもみ合い「ワッショイ」の掛け声で別れ～鹿島神社ではご神体が神輿から本殿へと還御。

(7) 祭りの内容

潮水の扱い／担ぎ手たちが神輿を担いで波打ち際を回ったあと、浜に設けられた祭場に大瀧神社・鹿島神社の2つの神輿を安置し、さらに海水を湯飲み茶碗などに入れて神前に供えた。合わせてお神酒などその他の神饌も供えた。それから神事を行い、宮司が祝詞を上げたという。

直近では令和元年(2019)に鹿島神社の神輿だけが浜下りをした(本来は大瀧神社の神輿も共に浜下りをするが、近年は浜までの渡御ができない状況にある)。浴衣の上に祭りの法被を羽織った人びとが神輿を担いだ。

鹿島神社で代々氏子総代を務めるN氏(昭和22年[1947]生まれ)からの聞き取りによれば、鹿島神社の神輿の担ぎ手の場合、正装をするということで、昔は紋付の羽織(多くは絹)を身に付けて神輿を担いだという。袴は着けなかった。神輿を肩に担ぐとどうしても羽織を傷めてしまうので、N氏の場合は絹ではなく木綿の羽織を使っていたという。このため、気軽に海の中へ入るということとはなかった。

とはいえ、震災前までに毎年やっていた範囲では、それでも担ぎ手の若者たちが酔った勢いで海の中に深く入ることも時にはあったという。また、若い青年団員たちは神輿を担ぎながら海へ入って、波打ち際を右回り(上から見ると時計回り)に3周して神輿を上げたあとで、その1年間の新

入団員や子の誕生といった慶事のあった団員を皆で担ぎ上げて、海の中へ投げ入れる、といったこともあった。伝統的なものではなかったようだが、それは一種のお清めや祝福、通過儀礼のようなものと捉えられていた。

実施内容／大瀧神社を「女神（ひめ神）」、鹿島神社を「男神」とし、2つの神社が、上浅見川桜田のお旅所で出会い、一緒に浜に下りるといふ祭礼であった。年に一度の出会いの祭礼で、昭和後期までは、にぎやかな笛や太鼓の囃子とともに行列を組み、神輿が浜に向かった。太鼓をたたく音「タンタン」、笛を吹く音「ペロペロ」から、「タンタンペロペロ」の呼称がついたとされる。平成に入った頃には、すでに笛はなく、太鼓のみとなっていた。

① 平成3年（1991）までの祭礼

『広野町史』民俗・自然編（1991）から故・大迫德行氏（元福島県民俗学会長）の文章を引用する。

上浅見川地区での祭りの準備は、三月下旬、大瀧神社の祭典執行についての協議会が区長宅で開かれるのをもち始まる。協議会には、大字区長・氏子総代二人（もとの庄屋の子孫、根本・芳賀の両家が歴代務める）・協議員（桜田・大谷内・長畑・狐石・小松の各集落から代表二名で構成）から成るが、氏子総代を除いて一期二年の任期となっている。

また、協議員の中から各集落一名の世話人が選出されるが、世話人は招待状の発送、神職や青年団との打ち合わせ、神輿の屋根を飾る花葺きなどの造花や、梵天の製作、招待者の接待などの任にあたる。ほかに会計一名を選出し、祭典に関する会計全般を担当させる。

下浅見川地区では大字区長が祭典執行委員長を務め、五行政区から協議員が選出され、この協議員を中心に神事が執行される。上浅見川と同様三月下旬になると、区長宅に集まり、祭典についての協議を行い直ちに準備に入る。青年団は同時に団長宅に集まって役割などを決める。

両社の浜降りは、最近では本祭りの四月八日に近い日曜日に行っているが、七日は宵祭り、八日を本祭りとして二日間に亘って行われる。

上浅見川では、七日が宵祭り。大字区長宅に氏子総代・世話人・祭典係の協議員らが朝から集まり準備に入る。まず長畑のお仮屋に飾る注連縄が作られ、幣束餅といわれる紅白のお供え用の餅（後に小さく切りお護符として各家に配る）などの神饌を用意する。この幣束餅用の糯米は、毎年二軒の氏子総代が奉納し、二重ねの供え餅が作られる。ほかに花（花葺き）が作られるが、これは小滝平のお旅所（大字上北迫との境となる地に設けられる）に出迎えに行く時に持参する。

青年団は祭典係と称し、この祭礼の中心的な役割を果たす。団員はこの日、宿（順廻り）に集まり、団長が大字区長宅に出向いて祭り全般の指示を仰ぎ準備に入る。お旅所を作り、各集落の旗立て場に幟旗を立て、また、家々に配る花纏の準備などの仕事を分担する。

お旅所は注連縄を張りめぐらし、中央に清い砂を盛りあげて作る。神輿巡幸の折には、お旅所に安置した神輿に人々が餅や菓子を供え祈祷が終わるとお護符として撒く。

七日の昼頃、上浅見川の区長宅から、神職・氏子総代・大字区長・協議員・青年団代表らが大瀧神社に向う。社前において神事が行われ、神官がご神体を笈に遷す。

笈に遷されたご神体は、青年団員によって護持され、小滝平を経て、上北迫の二本櫓との境となる地に作られたお旅所に向かう、これを「お山さがり」という。

戦前までは、笈を背負う役の青年は前の晩に行屋に籠り、滝壺で水垢離をとり潔斎をした。また、これには徴兵検査を受ける年齢の者は必ず参加するものとしていた。また、大瀧さま（大瀧神社）には女人は参詣してはいけないし、近づいてもいけないと称し女人禁制の場所でもあった。

ご神体は村境のお旅所で、長畑のお仮屋から運ばれてきた神輿に遷されご祈禱が行われるが、ここの儀式を「出会い」という。村境で神霊を迎える境迎えの神事と考えることができよう。ご祈

禱の後、人々が供えた餅や菓子などが参拝者に撒かれる。

一連の神事が終わると神輿はお旅所から下り南山の集落内を巡って、馬橋前に設けられた小松のお旅所でご祈祷を行った後、夕刻には長畑のお仮屋に納められる。御輿は奉斎する人々の村落をめぐるのである。

下浅見川では、総出で鹿島神社の清掃、本町のお旅所作り、神輿の通る場所に注連縄張り、幟旗を立てる（各行政区の役員により）。花葺は青年団の協力を得て宿（廻り宿）で作られる。

鹿島神社には、八日の朝から区長・氏子総代・青年団代表などが参集し、神事後ご神体が神輿に遷され、本町の北端（下北迫との境の地）に設けたお旅所に安置され午前の神事は終わる。

8日が本祭り。大滝神社の神輿渡御に参加する人々は、十時頃には長畑のお仮屋前に集まる。神事後、ご神体を神輿に遷す宮出しを行い、投げ餅が撒かれ、ご発輦。神輿は大谷内集落を経て桜田（上浅見川）に設けたお旅所に向かう。

一方鹿島神社の神輿も、本町から桜田（上浅見川）のお旅所に向い、昼頃には大滝・鹿島両社の神輿がお旅所で出会う。この桜田は下浅見川との境の地である。

両社とも神幸行列は、御神酒注ぎ・猿田彦・神楽の頭・幣束（総代が奉持）・榊・大太鼓・小太鼓・神官・神輿・花纏・子どもの神輿と続く。下浅見川での猿田彦役は、厄年の人かその年に結婚した人が担当し幣束は歴代社総代を務める根本氏が奉持する。

上浅見川の桜田のお旅所で出会った大滝・鹿島の神輿を前に一連の神事を執行し、終わると投げ餅が撒かれ、鹿島神社を先頭にご発輦となる。下浅見川の桜田から駅前通りを通って駅前に設けられたお旅所（以前は小学校の校庭）に神輿を安置する。ここではご祈祷と投げ餅が行われた後、各集落の花纏の花が氏子に分け与えられる。昔は、「作がよくなる」といって、花纏の花をむしり取り神棚に供えたという。

両社の神輿に従っていた子ども神輿は、駅前解散するが、青年の担ぐ両社の神輿は、一旦本町のお旅所に向い、ここでご祈祷と投げ餅が行われた後、浜に向って渡御する。

砂浜に祭場が作られ、海に望んで両社の神輿を安置し、潮垢離の神事が執り行われる。この神事は神官が潮水を汲んで神輿に供え、総代が奉持してきた榊を三度左回りに潮水に浸して神輿にふりかける。その後青年達に担がれた神輿が海に入り、三度左回りをして潮垢離をとる。

氏子総代が奉持してきた幣束を浜に据え、区長・協議員の奉持してきた榊（かきだれ）を潮水に浸し幣束にかけ、終ると榊は砂浜にさし、幣束は持ち帰る。修祓、祝詞奏上などの一連の神事があって浜での行事のすべてが終る。

両社の神輿は帰路につくが、鹿島神社前で「ワッショイ」の掛け声で別れ、鹿島神社の神輿はただちに社に還御になり、ご神体は本殿に遷される。

大滝神社の神輿は長畑のお仮屋に戻り、ご神体を笈に遷し、迎えに出た時の人々に護持され、その日のうちに還御になる。戦前までは、本祭りの八日にはご神体がお仮屋に泊り、翌九日に還御になった。

祭典の終了後、神札と細かに切った紅白の幣束餅をお護符として各家に配る。一方青年団では「作り花」を同時に一、二本ずつ配り、受けた家では神棚に供え、祝儀を包む。又、下浅見川の駅前通りでは三本を受けるが、受けた花を軒先に挿しておいた。

（以上、引用）

なお、上記引用文中に「笈に遷されたご神体は、青年団員によって護持」「戦前までは、笈を背負う役の青年は前の晩に行屋に籠り、滝壺で水垢離をとり潔斎をした。また、これには徴兵検査を受ける年齢の者は必ず参加するものとしていた」との記述がある。これについて補足すると、たとえば行屋（こもり堂と呼んでいた）はかつて滝から数百メートル下流にあったという。ある年の集

中豪雨で浅見川が増水した際に流されてしまい、以後建物は再建されなかった。詳細な年は不明だがそれほど前のことではなく、ある祭典執行委員の男性（昭和30年〔1955〕生まれ）は、当時のことを記憶している。この男性は大水がひいたあとで、流された行屋の建材や土台の敷石などを片付けるために、チェーンブロックなどの機材を持って自身の父親と共に現場に行ったという。今ではもう建物のあった痕跡も分からなくなっている。また、青年たちがかつて毎年担いで滝と集落とを往復してきた笈（写真2）は、現在はお仮宿に保管されており、内部には「昭和十四年四月八日／神威／加護／祈皇軍必勝／日支事変三週年紀念／近衛歩兵第二聯隊／青木與茂／根本勝次」という墨書がある。特に戦前の氏子男性たちにとっては、徴兵検査を受けて大瀧神社の祭りに参加することをもって、地域内では一人前の成人男性とみなされたということであり、一種の成人儀礼としての側面があったといえる。このように、この祭りでは青年団などの若い世代が重要な役割を果たしてきた。

加えてこの祭りは、青年団（18～35歳までの地区の男性が加入するものとされていた）をはじめとして、各集落単位で年ごとに順番に担当する祭典執行委員長（かつては区長と兼務）の家が祭りの宿となること、伝統的に2つの家が代々氏子総代を務めることなど、祭りを執り行ううえでの地区住民たちの役割の多さが特筆される。従来のやり方は地区在住の専業農家の当主（後継ぎである長男）が担うことで可能なものであった。これは高度経済成長以後の生業や生活様式・住宅の変化、少子高齢化、東日本大震災等々の大きな社会変化を経て、近年の継承の困難さにもつながっている。

② 東日本大震災後の祭礼

大瀧神社：平成31年（2019）4月7日に実施。長畑のお仮宿から神輿を出し、神事を行う。神輿の渡御は、お仮宿から100メートルほど（県道249号線との合流地点まで）を往復したのみ。ただし、猿田彦や花まといをそろえての行列は組んだ（写真3）。神輿は、台車に乗せられて運ばれた。その後、お供えものやお菓子などをまいた。50人程度の参拝があり、近くの子どもたちも訪れて、スーパーの袋などを持って、楽しそうに撒かれたお菓子を拾い集めていた。希望者には、花まといの花も配られた。

鹿島神社：平成30年（2018）4月8日に実施。鹿島神社から出御した神輿は、にぎやかに集落をめぐり、駅前まで渡御。神事等ののち、単独で浜へと下り、海の中へ入った（写真4）。

③ コロナ禍後の祭礼

（8）祭礼の状況で詳述する。

（8）祭礼の状況

大瀧神社の祭礼（神輿渡御）は平成21年（2009）の4月5日・6日までは実施されていたが、後継者難などにより、翌22年（2010）は地区として実施しないという結論になり、以後中断した。また、鹿島神社の祭礼は、平成22年には単独で実施したが、翌年には東日本大震災により中断した。

その後、後述のとおり、鹿島神社では平成30・31年、大瀧神社では平成31年に各社単独での祭りが復活したものの、令和2～5年（2020～23）までは新型コロナウイルス感染症（COVID-19）が流行し、コロナ禍明けの令和6年（2024）に両社とも単独の祭りとして再開されて現在に至る。以下、2つの時期に分けて詳述する。

① 東日本大震災後～コロナ禍以前

大瀧神社の祭礼は震災以前に中断、鹿島神社は「伝統の継承」よりも「継続すること」を重視して継続されていた。

平成23年3月13日午前11時、原子力災害の情報が錯綜するなか、町長は全町民に避難指示を発令する。広野町は、東京電力第一原子力発電所から20～30キロメートル圏内にあったことから、町の判断で避難を開始したのである。その後4月22日には、広野町全域が緊急時避難準備区域に指定さ

れたが、9月30日には解除され、「除染」事業が始まった。翌年の平成24年（2012）3月30日には、町長発令の避難指示が解除され、町民帰還に向けた町長メッセージが発表される。以後、徐々に帰町が進み、令和7年（2025）現在、人口については震災前の水準まで回復している。

当該祭礼を含め、震災等により中断されていた町内の祭礼を再興しようという目的で、平成29年（2017）5月～9月には、「まつり再開に係る意見交換会」が開催された。地域住民や有識者などを交えて、課題の洗い出しや具体的な方策などについて意見が交わされた。これにより、次第に祭礼再興への機運も高まり、亀山神社「百矢祭」、八雲神社（Ⅱ-26）祭礼（浜下り）、鹿島神社祭礼（浜下り）が順次再開されていく。

当該祭礼は、まず鹿島神社のほうが先に再開する。鹿島神社は、比較的高い場所にあるとはいえ、海のすぐそばなので拝殿や鳥居も津波の被害にあい倒壊（本殿は無事。拝殿は再建済）した。当時、拝殿には、祭礼の浴衣や太鼓、旗、猿田彦面などが保管されており、これらは海水に浸かってしまった。さらに、その後の全町避難の混乱のなか、猿田彦面が盗難にあってしまう。猿田彦役は、祭礼の先導役であり、地域でもこれを務めることは名誉なこととされてきた（上浅見川地区での話であるが、猿田彦役を担当した人は男児を授かる、という言い伝えもあった）。この盗難により、祭礼再開への意欲が大きく削がれていた（なお、その後猿田彦面は新調された／写真5）。また、神輿の担ぎ手は集められたとしても、執行、運営を行う人材の確保や運営資金の調達に課題があった。それでも、なんとか再開にこぎつけることができたのは、震災後にボランティアなどに入った東京方面からの若者たちの協力もあってのことである。平成30・31年の祭礼では、観光バスを仕立てて、数十人の若いボランティアが祭礼の神輿の継ぎ手として駆け付けた。

一方、大瀧神社については、氏子間でも意見がまとまらず、再開が難しい状況にあった。特に、「筧でご神体を遷す」などの特殊な習俗が付随することから、どうあっても人手の確保が必要で、かつその神性ゆえに祭りを代々統括してきた家との交渉も、町外避難中などの事情もあり困難だった。しかし、できることから始めよう、という氏子有志らの思いから、平成31年4月、とりあえず神輿を出して神事を行う、というかたちでの再開にこぎつけた。わずか200メートルほどの渡御ではあったが、集まった人びとは、かつての祭礼のようにまき餅や菓子、花まといなどに歓声を上げていた。

平成31年は、大瀧神社、鹿島神社ともに祭礼が行われたが、それぞれ単独での祭礼としての復活であり、かつてのタンタンペロペロのように、大瀧神社の神輿を迎えて、2社合同の祭礼とするまでには機運は高まらなかった。

② コロナ禍後の祭礼

令和6年4月7日には、新型コロナの感染症法上の位置づけが「5類」に移行（令和5年〔2023〕5月8日）してから初めての祭礼日を迎え、大瀧神社・鹿島神社とも、それぞれで祭りを実施した。ある氏子総代の話では、「コロナ禍であっても何かしらやらないと、お祭りがなくなってしまう、という危機感があった」という。

大瀧神社／上浅見地区・大瀧神社では、コロナ禍以前の祭礼と同規模で、おもに長畑のお仮宿を祭場として神事が行われた。長畑のお仮宿の神事に先立って、まず神社の祢宜1人と祭典執行委員など地区役員数名が車で上流の滝の傍の大瀧神社まで出向き、神を迎える神事を行った（写真6）。ここでは、神饌としては米や酒などのほか、役員1人が滝の近くの川岸まで下り、コップに川の水を汲んで神前に供えた。祢宜が例祭の祝詞（神社本庁の例文に準じた祝詞）を奏上し、その後参列者が1人ずつ玉串奉奠を行った。この年は、ご神体の運搬には筧を使わず、祭神を依り代（金色の御幣）に移し、木の小さな御神札箱おふだばこに納めた（写真7）。後述するが、この金色の御幣は、この年の祭りの全行事が終了したのちに川へと流される。神を迎える神事を終えて、大瀧神社の神はその御神

札箱の状態では長畑のお仮宿へと車で直行した。平成21年以前の祭礼では「お山さがり」などと称し、長畑に至るまでの間に小滝平・二本櫛・南山・小松などいくつかの集落（お旅所）を経由したが、それは平成31年同様、省略された。

長畑に到着すると、山を下りた大瀧神社の神（金色の御幣）は、お仮宿にある神輿へと移御された。これで氏子の集落に神が迎えられたこととなる。この年は担ぎ手の不足により神輿はお仮宿に安置されたまま、渡御することはなかった。ただ、当日の来賓・関係者一同の集合写真には行列を先導する猿田彦役（装束を身に着ける）や、獅子頭役も参加していた（写真8）。加えてお仮宿前には「奉納大瀧神社 平成七年四月吉日 長畑部落一同」の2本の幟旗とともに、本来は神輿行列とともに巡幸し行列を彩る「花まとい」も立てられていた（写真9）。また、地区の伝統行事として、神輿を前に広野町長以下多くの来賓や参列者を迎えて神事が執り行われ（写真10）、その後の投げ餅（写真11）や花まといの授与（写真12）などは、コロナ禍以前同様に多くの地区住民が集まり賑わいを見せた。

平成21年以前の祭礼では、神をお迎えするにもお送りするにも、滝の傍の大瀧神社まで足を運び、かつご神体は笈に入れて若者が背負って運ぶものとされていた。なおコロナ禍前の平成31年撮影の写真では、笈に真新しい注連縄が張られており、笈を使用したとみられる。担い手が不足するなかではそうした従来のかたちは難しくなり、金色の御幣を神の依り代とし、祭礼終了後は川へ流すようになった。令和6年の場合は大瀧神社の現地まで神をお送りする代わりに、神事終了後、宮司と役員数名が長畑地区内を流れる浅見川（お仮宿から道を少し下った橋付近）の川岸に下り、金の御幣を川に流して神を送り返す儀礼を行った。笈を使わずさらに滝との往復を1度に減らすというかたちで儀式の簡略化を図った。地域の祭りそのものを続けていくことを優先したやむを得ない選択である。

鹿島神社／令和6年4月7日には、神社境内の一角に四方に竹を立てて注連縄などを張った清浄な空間を設け、普段は拝殿に置かれている神輿を屋外へと出して安置した。下浅見川でも、この年は神輿が集落を回ることはなかったが、神社の本殿から神輿の中へのご神体を移御し、氏子住民が神輿を参拝するなど、短時間ながらも祭典を行った。

大瀧神社・鹿島神社とも、同じ宮司であり、当日は神職2人（宮司・祢宜）で両者の祭典を執り行った。この日（令和6年4月7日）は午前10時30分から、宮司により鹿島神社の祭典が行われた。また同時刻に並行して、浅見川上流の滝の傍の大瀧神社ではもう1人の神職（祢宜）により神を迎える神事が執り行われていた。

鹿島神社の祭典を終えた宮司はその後直ちに長畑の大瀧神社お仮宿へと移動し、午前11時からは大瀧神社での祭典を執り行った。それぞれ単独の祭礼になっている現状とはいえ、本来は合同で行われる祭りであり、今なお両社の祭りは同日に行われている。

令和6年の祭礼の内容はおおむね以上のおりである。近年では2つの神社の神輿がともに浜まで渡御するかたち（いわゆる「寄り合い祭り」）での開催は困難な状況にあるが、祭典執行委員を中心として復活の努力が続けられている。

(9) 芸能等

いずれも現在は廃絶しているが、大瀧神社・鹿島神社の祭礼に関連するものとして、過去には以下の芸能等が伝承されていた。

上浅見川地区の獅子神楽／獅子頭は現在も残されており、神輿の行列の際にはともに歩く。沿道で、神輿行列を見に来た人や神輿をお参りに来た人の頭を噛んで厄払いをすることもある。昭和18年（1943）・25年（1950）の古写真にも、青年達の集合写真の前に獅子頭が置かれており、過去に青年団が神楽を伝承していたとみられるが、獅子の踊り方や演目、囃子等の詳細は不明である。

上浅見川地区の謡^{うたい}／この謡は、大瀧神社祭礼の際、持ち回りで担当する宿（やど。地区内の祭礼時の集会場所として、その年ごとに異なるが区長の家などが選ばれる）において、祭りの直会の席などで、もてなしのお礼として披露されるものだった。祭りに限らず、結婚式やお祝いの席にはこの謡がつきものだったといい、かつては近隣の師匠のもとで講習会などもしていたようである。

上浅見川地区に生まれ、青年団長や神社や祭礼役員等を歴任してきた高木親男氏（昭和16年〔1941〕生まれ）は、多くの祭り写真と共に地区で歌われていた「喜多流 小謡」の歌詞本（ホチキス止めの印刷物。地区で配られたものとみられ、裏表紙に「長畑地区集会所落成祝賀会記念 平成13年3月31日（土）」とある）を現在もお持ちである。平成13年（2001）年の長畑地区集会所落成祝賀会のプログラムにも、主催者や来賓の挨拶、乾杯のあと、「祝宴 謡『高砂 四海波 目出度』」と記され、地区の祝いの席では地区伝統のこの謡がつきものであった。

なお「喜多流 小謡」の歌詞本などに見られる謡の歌詞は以下のとおり。

「高砂」

所は高砂の 尾の上の松も年ふりて 老の波もよりくるや
木の下影の落葉かくなる迄 命ながらえて
尚いつまでか生の松 それも久しき 名所かな

「四海波」

四海波静かにて 国も治まる時津風 枝もならさぬ御代なれや
あい相生の松こそ 目出度かりけれ げにや仰ぎても
こともおろかや かかる代に 住める民とて豊かなる 君の恵ぞ有難き

「目出度」

一、目出度めでたの 若松様よ 枝も栄える 葉も茂る
一、とさま百まで わしゃ九十九まで ともに白髪の 生えるまで

(10) 関連資料

祭礼古写真（上浅見川・高木親男氏所蔵）



1 昭和18年4月8日の祭典 神輿出御の景（上浅見川・長畑のお仮宿前）



2 昭和25年4月8日の集合写真（上浅見川・長畑のお仮宿の隣家前）

資料解説 上浅見川地区に生まれ、平成12・13年に祭典執行委員長（兼区長）を務めた高木親男氏は、青年団長や神社や地区の役員を歴任する傍ら、趣味で地区行事の写真などを多く撮影してきた。また自身の撮った写真だけでなく、古写真も所蔵されており、ここでは昭和18年と同25年の祭礼写真を掲載する。いずれもかつての祭りのようすを知ることができる貴重な資料である。

特に昭和18年の集合写真は長畑地区の大瀧神社のお仮宿前での集合写真で、装束を着た猿田彦や、幣束やサカキを持った人びと20人ほどが写る。その背景にはお仮宿の屋根や鳥居、渡御のために装飾された神輿も写りこんでいる。また、昭和25年の古写真は大瀧神社お仮宿のすぐ隣にあったとい

う個人宅（茅葺き屋根の母屋）の前での若者たちの集合写真で、その中央の足元には獅子頭が置かれている。

どちらの写真にも、直近の祭礼でも立てられていた花まといは写真の左側に写っており、昭和18年のものはしだれ柳のように長く垂れた形なのに対し、昭和25年は近年のものと同様、傘に近い形をしているなど、形状の違いも見てとれる。

参考文献・資料

広野町教育委員会『広野町の文化財』（2006）

広野町『広野町史 民俗・自然編』（1991）

広野町『福島県広野町東日本大震災の記録Ⅰ ふる里” 幸せな帰町・復興” への道のり』WEB版

福島県立博物館編『福島県立博物館学術調査報告書第28集 福島県における浜下りの研究』福島県立博物館（1997）

【大里正樹・丹野香須美】



写真1 大瀧神社のご神体である「大瀧」（R6. 4. 7）



写真2 大瀧神社のご神体を運ぶ笈（上浅見川・長畑のお仮宿前 H31. 4. 7）



写真3 大瀧神社の神輿渡御（上浅見川・長畑のお仮宿前 H31. 4. 7）



写真4 東日本大震災後初めての浜下り（鹿島神社）（浅見川河口 H30. 4. 8）



写真5 新調された猿田彦面（鹿島神社）（H30. 4. 8）



写真6 浅見川上流の滝の傍にある大瀧神社に神を迎えに行く（R6. 4. 7）



写真7 大瀧神社での神事（R6. 4. 7）



写真8 大瀧神社祭典参列者の集合写真（上浅見川・長畑のお仮宿前 R6. 4. 7）



写真9 花まとい（上浅見川・長畑のお仮宿前 R6. 4. 7）



写真10 大瀧神社祭典での神事（上浅見川・長畑のお仮宿前 R6. 4. 7）



写真11 大瀧神社での投げ餅（R 上浅見川・長畑のお仮宿前 R6. 4. 7）



写真12 花まといの花をもらい受ける人びと（上浅見川・長畑のお仮宿前 R6. 4. 7）

11. いわき市 大國魂神社

(1) 神社の概要

名称／大國魂神社 通称：スギナミサマもしくはスゲナミサマ

所在地／いわき市平菅波字宮前

由緒／縁起によると、大和朝廷が置いた石城国の国造であった建古呂命が祀ったという。神社の東、約250メートルのところには国指定の史跡「甲塚古墳」(円墳)がある。その頂きには「八方睨みの松」といわれる黒松の銘木があったが、枯死したことにより昭和53年(1978)に伐採された。ここには石城国造が葬られたとの伝承がある。

さらに平安初期に蝦夷を平定するために遣わされた坂上田村麻呂が、当地を通る際に古い祠を見て大國魂神社と知り、戦勝を祈願し、のちに社を寄進したという伝説もある。「延喜式」神名帳にも記載されている「磐城七社」筆頭の古社で、この地方の信仰の中心的な役割を果たしてきた。

(2) 祭りの名称

一般には「大國魂神社のお潮採り」といわれてきたが、福島県が重要無形民俗文化財として指定するにあたって、歴史的な経緯を考慮して「磐城大國魂神社のお潮採り神事」とした。

(3) 祭りの由来

伝えによると、その昔、塩屋崎灯台の麓の豊間浜の靈通川(大和川ともいう)に、大國主命の姿をした石(「お姿石」)がたどり着いた。これが大國魂神社のご神体とされている。ゆえに豊間の浜へと下りるのだという。

(4) 祭日

現在、5月3日は「例大祭」と「宵祭り」(大和舞と稚児舞の奉納)、4日は「神輿渡御祭」が行われる。大國魂神社の祭礼のなかでも最も大きな規模をもつ。4日には豊間浜でのお潮採りが行われる。なお、4日には子ども神輿も出て、3字を巡る。

元禄10年(1697)の内藤家文書「万覚書」(明治大学博物館所蔵)に「大國魂大明神神事之儀」は4月8日とあり、さらに社蔵の天保3年(1832)に宮司の山名伊豆守が「寺社御役所」に提出した「大國魂神輿奉迎薄磯村誓約書」(関連資料②)にも、やはり「例年四月八日」とあるように、もともとは旧暦4月8日、つまり卯月八日の祭礼である。なお、大正～昭和の戦前には新暦の5月15日に行われていたらしい。しかし、戦後、「子どもの日」等が制定されたことなどをふまえ、より旧暦の「4月8日」に近い5月3～4日に祭日が定められた。

(5) 伝承団体

大國魂神社宮司、大國魂神社氏子会、菅波青年会、山崎青年会、荒田目御神輿保存会、豊間海友会

(6) 神幸経路 (図1)

神幸地／豊間海岸

神幸経路

5月4日午前6時30分、「遷座祭」が行われ、神輿が拝殿から出御する。石段を下りきったところにある石鳥居の下で「出だし拝み」を行う。

その後「オサカムカエ(サカムカエ)」といって、決められたお旅所を一日かけて巡行する。

最初は大鳥居下の「馬場先」で行われる。これは菅波全区のためのお旅所である。神輿は、「金倉坂」までは、菅波・荒田目・山崎の3字合同で担ぐ。「馬場先」のお旅所をあとにし、荒田目の水田が広がるなか、愛谷江筋の水路に沿うように「上大越」のお旅所へ向かう。このお旅所は、山肌に繁る木々の間から、大きな岩がのぞいている場所で、神輿を安置するための石もある。厳かな

「^{ひもろぎ}神籬」と呼ぶにふさわしい雰囲気のお旅所である。すぐそばの下大越との境近くの三差路には、注連縄が張られ、ここが聖域であることを示している。次の「下大越」のお旅所（写真1）は、県道15号（小名浜四倉線）沿いにある。交通量はそれなりにあるので、交通整理をしながら神輿が進む。なお、「上大越」と「下大越」のお旅所は、^{はくさん}白山神社（Ⅲ-37）のお旅所ともなっている。白山神社は浜下り後の復路で立ち寄るので、かち合うことはない。

さらに県道15号を南下し、藤間中学校の近くの「藤間」のお旅所へ向かう。その後、さらに南下し、^{しもたかくやがわせ}県道241号線（下高久谷川瀬線）との交差点を右へ折れて、下高久方面へ向かう。「下高久」^{かみ}「神谷作」のお旅所は、田植え正月のような松飾りに加え、ツツジやフジの花も飾られていてとても華やかである（写真2）。その後、^{ぬまのうち}沼ノ内集落を横切って、弁天岬の近くにある「沼ノ内」のお旅所へ向かう。そこから、今度は^{うすいそ}薄磯の集落を縦断して、金倉坂へと向かう。この「金倉坂」のお旅所での神事ののち、神輿は豊間の人たち（豊間海友会）によって担がれ、およそ2キロメートルの道を豊間海岸へと向かう。豊間海岸で潮垢離祭と稚児舞の奉納後、昼食をとる。

午後は14時30分頃に豊間海岸を出発し、豊間の集落を巡ったあと、神輿はトラックに載せられて、一路荒田目・山崎方面へと向かう。人びとは、バス等で移動する。

「荒田目」でのオサカムカエのあと、神輿は荒田目の人たちに担がれて「甲塚」へと向かう。古墳の頂上で神事を行い、その後、水田のなかのあぜ道を「山崎」のお旅所へと向かう。途中、荒田目と山崎の境で、荒田目の人たちから山崎の人たちへと神輿の受け渡しが行われる。山崎の集落に入ったら、「山崎」のお旅所まで山崎の人たちが担ぐ。巡るべきお旅所はこれで終了となり、ようやく還御となる。

^{みずもり}水守神社前の交差点で、神輿は山崎の人たちから菅波の人たちへと受け渡される。ここから大國魂神社までの約500メートルは、菅波の人たちが神輿を担ぐ。

「宮入り」は3字合同で神輿を担ぎ、拝殿までの石段を登っていく。神輿は拝殿へと上げられ渡御が終了する。総延長約25キロメートルの神幸経路である。

ところで、昭和も終わり頃からは、祭礼も簡素化が進んだが、大國魂神社が発行した平成3年（1991）に発行した『大國魂神社神輿渡御祭の今昔』という小冊子には、明治35年（1902）生まれの鈴木勝治氏の体験をもとにした、昭和の中頃までの祭礼のようすが記されている。それによると、お旅所が現在とは幾分異なる点がある。これをまとめたものが図2である。

詳細な経路は不明だが、往路12、復路6、往復18か所のお旅所を回り、「宮入り」は、午前零時を回るのが慣例だったという。このように、昭和の頃の大國魂神社の浜下りは、今よりもお旅所の数が多く、また日付が変わる深夜にまで及ぶ祭礼であった。お旅所の数が多いのは、その意味が現在とは少し異なっているためである。図2のお旅所の多くは、「（ダイコクサマを信仰する）講中」の人たちによって設けられ、オサカムカエが行われていた。往路12か所のお旅所のうち、最初の「石崎」は荒田目の集落であるため「組内安全」のオサカムカエであるが、2番目以降はすべて「講中安全」のためのオサカムカエである。したがって、神輿がこれらのお旅所を渡御するときには、講の人びとが歩いて参拝するときの道（^{こどう}「古道」）を通ったといわれる。今日のオサカムカエは、ムラの境界近くにお旅所が設けられており、そのムラの安寧を祈願するという意味合いのものになっているが、本来は、豊間までの広範な地域において「大國魂神社（ダイコクサマ）」を信仰する人びとの安寧を祈願するというものでもあったことがうかがえる。

（7）祭りの内容

潮水の扱い／氏子が海に入り、桶に潮水を汲む。桶の潮水は瓶子に入れられ、神輿に供えられる。

実施内容

3日は、神殿の扉が開け放たれ、午後2時から「例大祭」が始まる。その後、翌日の渡御祭の準



図1 大國魂神社の神幸経路(令和元年5月4日)



図2 大國魂神社の昭和の頃のお旅所

備が始まり、神輿の飾りつけなどが行われる。準備が終了する午後4時頃から、1時間程度、直会となる。午後6時からは「宵祭り」となり、社殿に向き合って建てられている神楽殿で、大和舞と稚児舞が奉納される。稚児舞では、観客らに菓子や扇などがまかれる。

4日は、午前6時30分の「遷座祭」から始まる。祝詞奏上のもと、宮司は本殿からご神体を神輿に遷す。この際に反閤^{へんぱい}といって大きな足音を立てる。神の来臨を意味すると思われ、本県では珍しい習わしである。準備が整うと神輿は若者に担がれて四十八段の石段を慎重に下りていく。鳥居下の石畳までくると「出だし拝み」といわれる神事を行う。このときに、花火が打ち上げられ、祭りの始まりと神輿の出御が集落の人たちに知らされる。これより渡御の開始である。

神幸経路で前述したように、神輿が渡御する集落は広く、菅波、上大越、下大越、藤間、下高久、神谷作、沼ノ内、薄磯、豊間、さらに戻って荒田目、山崎を巡る長大な道のりとなる。あまりにも長いため、近年は状況によってルートを変更したり、人はバスや自家用車、神輿はトラックで移動したりするなど工夫して催行している。オサカムカエでは、焼いたタイを2匹腹合せにして皿に載せたものと、ダイコンやニンジン、エビ（サクラエビ）を酢であえたナマスが供えられる。なお、このナマスは、このあたりの集落では祝い事には欠かせない。田植え正月（いわゆるサナブリ）や上棟式などにも供される料理である。修祓や祝詞奏上、玉串奉奠などの神事のもと、謡曲「高砂」と、いわきの代表的な祝い唄である「めでた」が手拍子に合わせて唱和される。

その後、直会となり、タイとナマスを参列者でいただく。腹合せのタイは子孫繁栄というよりは、豊作と豊漁の祈願であろう。正午過ぎ、浜に近い金倉坂まで進むと、豊間海友会の若者が出迎えていて神輿を引き受け、豊間浜に向かう。

浜へと下りた神輿は、まず砂浜に注連縄を張った祭場に安置され、神輿の屋根の四隅には、アカジ（生魚）が下げられる（写真3）。祭壇にその他の供物が並ぶと、「潮垢離祭」が開始される。

まず修祓があり、次に氏子青年会の代表が桶を持って海に入り、潮水を汲む（写真4）。この間、神職は波打ち際で笹竹を振って清める（写真5）。神職は桶から潮水を瓶子に移して神輿前の祭壇に供える。このあと祝詞奏上、玉串奉奠などの祭式と、随行する少女たちの「稚児舞」奉納がある（写真6）。その年の状況によっては、「大和舞」が奉納されることもある。

さて、一連の神事が済むと、これより豊間海友会の若者が神輿を担ぎ出して海へと入る（写真7）。これは、この祭りの見どころのひとつとなっており、参列する人びとが最も沸く儀礼でもある。

神輿には長い綱がつけられている。神輿が流されないようにするためのもので、若者の一部は浜にいてこの綱を引く。浜で人びとが見守るなか、神輿はどんどん沖へと進んでいく。担ぎ手の肩ほどまで海水につかるため、遠くから見ると、まるで波の上を神輿が進んでいくかのようにも見える。ここまで神輿が海に入る「浜下り」は、今日ではほとんど見られなくなってしまった。

このあとは昼食となり、社総代らは豊間公民館で休憩する。神職らは、代々豊間での宿を務めてきたE家の本家筋の家（E家）で昼食をとる。

昼食のち、神輿は豊間浜を出発して帰途につく。午後のお旅所はまず氏子区域の「荒田目」である。ここでは、花火が打ち上げられ、神輿が集落に戻ってきたことを告げる。ここからは荒田目の人びとが神輿を担ぐ。荒田目には国指定史跡「甲塚古墳」があり、お旅所となっている。ここは飛び地境内になっており、古墳がお旅所というのは珍しい。まず、古墳の周りを時計回りに3周したのち、神輿を担いで急な斜面を登っていく（写真8）。頂に設けられた祭壇で神事が行われたあと、荒田目の人びとが地区のほうに向かって万歳三唱する。その後、今度は斜面を滑り落ちるようにして、神輿が下ろされる。この登り下りに、傾きかけた陽の光で神輿はひとときわ輝く。

今度は、神輿は山崎の人びとが担ぎ、山崎の集落へと向かう。そのあと神輿の一行は鎮座地である菅波の区長宅と青年会長宅に寄り、還御は午後8時30分頃となる。「宮入り」前には、高揚した

青年たちが神輿をなかなか神社へ戻そうとせず、幹部らが電灯を持って指図にあたる、という光景も見られることがある。「宮入り」に際しては花火が上げられ、祭りの終了が集落に伝えられる。神輿は拝殿の周りを時計回りに3周したあと、拝殿に上げられ「遷幸祭」となる。宮司はご神体を神輿から取り出し反閤で本殿に返す。祭式が終わると社務所で直会があって、祭りは終わる。

県内の浜下りでは規模が大きく、しかも古例を厳格に守り伝えていて、毎年行われている祭礼である。お旅所での直会では謡曲と祝い唄の「めでた」が唱和され、さらに供物の腹合せのタイやナマスが振る舞われるなど、祭式は丁寧であり、神輿が海に入るのは壮観である。また、神輿を若者が村境で引き継ぐなど、祭りの組織にも古い習わしが残っている。

昭和の頃の祭礼のようすについて

再び、『大國魂神社神輿渡御祭の今昔』の記述から引用する。

神官の乗る馬と、その馬を巡る祭礼のようすについて、次のように描かれている。

昔の事を思えば、春の大祭神輿渡御の際は、前触れ太鼓は一足先に行き、その後から神官様は馬に乗って神輿の先になり、また赤い^{ヒゴロ}緋の生地で大國魂明神と書いた御神旗は、やはり神官様と同様神輿の前になって高く押し立てていったのである。それで神官様の乗る馬に付いて申し上げれば神官様宅では常に乗馬用として、昔から昭和の中頃まで飼い馴らして置いたのである。この馬は全身真白な^{コマウマ}駒馬であった。(中略)

それで今頃になって思い出して考えて見ると、昔は本当に風変りの行事があった。それであの当時の事の例を申し上げれば、信者の内で^{ナリモノ}鳴物献上という行事であった。それは軍人上りとか、または常に漁師の様な方が神輿渡御に際して鉄砲を^{カッ}担いでお神輿のお供をして、所々で神輿が休んでお酒迎いの式を行い、終ってこの場を立つ時、鉄砲を空に向けて二發続けて打ち鳴らしたのである。すると神輿かつぎの連中は此の鉄砲の音と共に気合が付いて、威勢よく声を張り上げて担ぎ出し、足並揃えて次の休み場所まで急ぐのである。また、これと同時に、神官様の^{バテイ}馬丁が^{タツナ}手縄を握り、神官様が馬に跨がるとこの馬は必ず大きな声で^{イナナ}嘶くのが此の馬の一つの癖であった。でも此の馬の^{イナナ}嘶きが神輿渡御に対して非常に張り合いが付いて本当に効果的であった。

(中略)そして、途中無事に氏子内の荒田目治部内橋の^{タモト}袂のお酒迎いの場所に到着すると、神官様の乗って来た馬は自分が永く住んで居る所の森を見覚えあるかの如く、向うの神社の森を眺めて、毎年同じ様な態度で^{キツト}屹度聲高々と^{イナナ}嘶くのが此の馬の^{トクチョウ}特徴であった。(中略)それで鳴物献上者は荒田目に到着すると、只今お神輿が帰って来た事を知らずが如く、鉄砲を空に向けて二發続けて打ち鳴らしたのである。すると氏子の皆様方は鉄砲の音を聞いて神輿が帰って来た事を知って安心したのである。

旧4月8日が祭日だった時代には、^{ふたあら}二荒神社(上高久/IV-86)、^{やつるぎ}八剣神社(下高久/III-38)、白山神社(下大越/III-37)、二荒神社(下山口/IV-80)、薄井神社(薄磯/III-39)大國魂神社の神輿が浜に結集し、そこに見物や参拝の者が訪れて、浜はたいそうな混雑だったという。その混雑のなかでも、大國魂神社の白馬と緋色の旗は、特に目を引いたとも記述されている。

こうした注目を一身に浴びた華やかな馬に対して、裏方を支えた^{ごくつけうま}「穀箸馬」という馬がいる。これは、氏子のなかから借りうけたもので、役付の人の弁当とか、豊間の宿で使用する品等を運び、そして帰りには浜で神輿に上がった魚とかお賽銭等を運んだ。

なお、「鳴物献上」の名残であろうか、現在は、出御(大國魂神社)、荒田目のお旅所(図1-⑩)、還御(大國魂神社)の3度、花火が打ち上げられている。

さらに、現在のようすとかなり趣が異なるのが、祭礼の佳境である「浜下り(海中渡御)」である。引用する。

午後には豊間浜地元の漁夫達が^{イナナ}大漁祈願のため大國魂神社の神輿を担ぎ、塩屋埼燈台下の豊間

築港の海中深く遙か沖まで行き、その後舟で迎えに出る。(中略)それから神輿が海から上ってこんどは豊間漁夫連中は、塩屋町、八幡町、柳町、と町内安全祈願のため、町内廻りをして、これが終わると、薄磯境の金倉稻荷神社まで送り、ここから菅波三氏子青年達が元気よく神輿を取って帰途に着くのである。時刻は午後五時ごろであるのが例である。

現在でも、大國魂神社ほど深く海中に入る例は、久之浜の三嶋神社(Ⅱ-28)だけであるが、かつては、さらに深いところまで入っていたことがわかる。舟で迎えに出るほどということは、担ぎ手は「泳ぐ」状態だったことだろう。ちなみに、昭和18年(1943)、豊間築港から上がったとき、沖から塩屋埼燈台を目指して米軍から艦砲射撃を受け、急いで逃げ帰ったというエピソードも『大國魂神社神輿渡御祭の今昔』に記されている。

(8) 祭礼の状況

東日本大震災が起きたのは3月11日、したがってその約2月後が祭日であった。神幸経路のある集落はことごとく浸水し、薄磯や豊間の集落は大津波ではほぼ壊滅状態、浜は瓦礫で覆われた。この2つの集落は、津波による被害が市内でも最も大きかった場所で、多くの犠牲者も出た。地形も変化してしまい、今ではかつての面影すらない。

平成23年(2011)のこの祭りは震災直後であっただけに、神輿渡御は行われず、豊間浜での神事のみにとどまった。祭式には案を置いて祭壇を設け、潮水を汲み取って供え、神社と地元豊間の関係者十数人が参列して行われた。潮水は神社に持参して、神前に供えた。翌24年(2012)に至るも、まだ海辺には瓦礫があって浜に下りられないために、堰堤の路上を祭場とし、潮水などを供え、ほぼ例年どおりの祭式を執り行った。

少しずつ従来の姿を取り戻して入ったが、この祭礼における豊間での儀礼等には大きな変化が生じた。まず、沿岸の集落が大津波で流されてしまったため(第Ⅰ章 概説図●参照)、市内外の別の地域へと移転した世帯が多く、祭礼を支えることが難しくなっている。また、震災前までは代々E氏が宿元を務めてきたが、大津波によりE家は流出し、E氏も豊間から移転することになった。

浜辺での神事のあとは、社総代らは、E家の庭に莫菴を敷いて、神職らは座敷で昼食をとるのが習わしだった。昭和の頃までは、関係者らは各自おむすびを持参して豊間まで行き、神社では塩味を強めにして作ったキリボシダイコンと酒を宿まで運び、宿のE家では、神社からのまかない料に応じて、刺身などのおかずを準備したという。そして昼食後は、豊間の町を神輿が渡御した。幸いにも、E氏の本家筋のE氏が部分的にこの習慣を受け継ぎ、現在、神職らはこのE氏宅で昼食をとっている。さらに、集落の住人が激減してしまったため、かつてのように豊間の集落を神輿が練り歩くということも意味がなくなってしまった。現在は、神輿を載せたトラックが、復興途上の豊間の新興住宅地を経由して、荒田目へと戻っている。このように豊間での習慣が、震災後に大きな変貌をとげてしまった。

なお、新型コロナウイルス感染症(COVID-19)が流行した令和2～4年(2020～22)においても、震災直後同様に、規模を縮小するなどして祭礼は継続された。

神輿の担ぎ手や執行のための人手不足は、当祭礼でも悩みの種ではあるが、状況に応じて臨機応変に実施するなど、工夫を重ねながら継承されている。

(9) 芸能等

稚児舞(巫女舞)／稚児舞は小学校高学年の少女4人が横に並び、扇子と鈴を持って舞う。少女たちを4人1組として2～3組養成し、交代でお旅所で奉納する。稚児は素手で出て、採物である鈴と扇子を載せた案の前に横に並んで座り、採物をとる。囃子につれて採物を前に掲げて鈴を振り、両手を上下に振ったあと、立ってやはり同様に上下に振る。次に、左に、さらに右を向いてから、右回りに回り戻る。これを3回繰り返す。位置の移動はない。座って採物を返す。祭礼では、このあと扇子を載せた三方を持って立ち、左右に振ったあと参拝者に撒く。おもな神社に伝わる「浦安舞」

とは異なり、県内には類例の少ない古風な巫女舞である。稚児は、かつては長女に限っており、舞に参加することを「稚児に上げる」といって、その家では紅白の餅を搗いて神社に持参した。

大和舞／大和舞は出雲系神楽で、用具を納めてある長持には「倭舞神楽」とある。現在は「三番叟」「三本剣」「猿田彦舞」「恵比寿舞」「大黒舞」「天の岩戸舞」「天の宇豆女（受売）の舞」と「稚児舞（巫女舞）」の8座が演じられる。かつてはこのほかに「鹿島舞」「稻荷舞」「蠟燭（燈明）舞」「二本剣」「翁舞」もあった。「三番叟」が、太々神楽に組み込まれているのは県内でも当社だけである。また、「三本剣」は中通り地方にもみられるが、これは主として修験者が舞った山伏神楽や法印神楽の演目で、3人の舞方が真剣を持って輪になり、交互にまたぎ、あるいは剣をくぐるなどの難しい技を披露する。これが当社に伝わることは注目すべである。

なお、大和舞は、戦後一度中断していた時期があり、昭和60年（1985）に再興され、この祭礼の宵祭りで奉納されるようになった。

(10) 関連資料

①「豊間村永年千道祭誓詞」

一 当村ニおゐて流行病有之候ニ付、此度鎮疫祭之、御祈念御願申上度、右ニ付願望之儀、大國魂様江正月廿八日豊間村々永年御千道指上候様仕度、奉心願候、依之、村一同打揃右御願申上候義、私共引請証書并印形、如件

豊間 惣村代

天明五年巳四月廿九日

組頭 源 八 印

同 與兵衛 印

同 市右衛門 印

同 与市兵衛 印

同 五郎右衛門 印

庄屋 四家新右衛門 印

山名伊豆守様

(大國魂神社所蔵)

資料解説 天明5年（1785）4月29日、豊間村の庄屋と組頭が揃って、はやり病を鎮める祭を依頼するために、大國魂神社の山名伊豆守に宛てたもの。それにあたって、末永く毎年正月28日に全村をあけて大國魂神社へ千道（度）参りをするといっている。「千道祭」は、現在でも1月28日に行われている祭礼で、翌天明6年（1786）から行われるようになったという。豊間村と、大國魂神社との深いつながりを示す資料である。

②「大國魂神輿奉迎薄磯村誓約書」

一 大國魂大明神神事之儀、例年四月八日内藤因幡守様御領分豊間村江神幸仕来候処、去々寅ノ四月八日右豊間若キ者共 御領分薄磯村若キ者共与神輿肩入之儀ニ付、口論之上怪我人等も出来仕、既御掛ケ合ニも相成候処、荒田目村名主源左衛門下大越村久右衛門藤間村名主定右衛門半之丞北白土村大橋庄左衛門、菅波村箱崎庄助沼之内村名主庄五郎、右七人之者共内済取扱、事済ニ茂可相成処、為取替一札一条ニ付破談ニ相成、去卯ノ四月中之事済候迄者神幸見合候様被 仰付、当年迄式ケ年内神事取行イ罷在候処、此度前書七人之者共外ニ薄磯村市郎治取咤ヲ以、豊間薄磯両村之面々、昨十二日沼之内村名主庄五郎宅江集り、別紙為取替証文之通、内事ニ相済候、然ル処、此節疫癘瘡瘡流行仕候ニ付、来ル十五日豊間村迄神幸致與候様、両村之者共願之趣右扱人々相願候間、事済ニ相成候義ニ御座候得ハ、任其意神幸仕度奉願上候、右願之通被 仰付被下置候様、奉願上候、以上

菅波村 天保三壬辰年六月 山名伊豆正

御役所 寺社

(大國魂神社所蔵)

資料解説 かつて4月8日には、各村からやってきた神輿で、薄磯や豊間などの浜がおおいに賑わったという。血気盛んな若者が大勢集まり、さらにそこに祭りの祝酒が入るのだから、ちょっとした悪ふざけやかからかいから、大喧嘩へと発展することも珍しくはなかったらしい。大國魂神社についても、「大正時代の初め頃、大國魂神社の神輿の渡御を大越の人たちが邪魔をしたため、菅波・荒田目の人たちと大喧嘩になった」とか、「昭和31年には、金倉坂で、大國魂神社の神輿を渡す(通す)、渡さない(通さない)で、神輿が大破するほどの大喧嘩になった」などの話がある。この資料でも、そのような大喧嘩の顛末が述べられている。

「一昨年の寅年」すなわち、文政13年(1830)4月8日、豊間村と薄磯村の若者たちが、口論の末、ケガ人が出るほどの大喧嘩を引き起こした。そこで、村の名主らが仲裁に入ったものの決裂してしまい、さらには去年(天保2年[1831])の4月中に話がまとまらなければ、神幸するなど(磐城平藩の役所から)申しつけられてしまった。2年間神幸できずにいたが、なんとか話をまとめるに至り、(6月)12日に証文を取り交わし、和解が成立。ついては、このところ疫病が流行っているの、来たる15日に豊間村まで神幸してほしいと、両村から願いが出た。したがって、(大國魂神社の神輿の)神幸の許可を出してほしいという旨の内容となっている。

このように、いわき市内の卯月八日の浜下りは、かなり荒っぽい勢いがあったことがうかがえる。それだけ地域社会にとって重要な祭礼であったということでもあるだろう。昭和の頃のこうした「事件」は、程度の差こそあれ、いわき市内ではよく聞かれることである。

さらにこの資料では、疫病を払うために急遽6月15日に神幸をするよう依頼していることにも注目したい。6月15日は、いわき市内でも各地でテンノウサマ(天王様)の祭りが行われていた。基本的に「浜下り」は、卯月八日の祭礼で行われるもので、漂着神伝説をたどるように海へ向かい、潮の浄祓力を以て神の甦りを果たすものとされてきたが、それだけではなく、この資料のように、旧6月15日に浜下りする祭礼が少なからず確認されている。こうした、祇園信仰と結びついた浜下りがあることもいわきの浜下りの特色のひとつであるといえる。

〔資料筆耕／四家久央・守谷早苗 解説／丹野香須美〕

参考文献・資料

令和7年度 大國魂神社例大祭(準備総会資料) 令和7年4月大國魂神社
いわき地域学会『いわき地域学会夏井地区総合調査報告』(1988)
山名隆弘監修『いわきのお宮と祭り』『いわきのお宮と祭り』刊行会(2009)
大國魂神社『大國魂神社神輿渡御祭の今昔』(1991)

【懸田弘訓・丹野香須美】



写真1 下大越のサカムカエの祭場(平下大越 R1.5.4)



写真2 お旅所にはツツジやフジも飾られる(下高久 R1.5.4)



写真3 神輿に生魚を飾る (豊間海岸 R1.5.4)



写真4 潮水を桶に汲みとる (豊間海岸 R1.5.4)



写真5 笹竹を潮水に浸し神輿に振りかける (豊間海岸 R1.5.4)



写真6 稚児舞(巫女舞)奉納 (豊間海岸 R1.5.4)



写真7 神輿を海に入れる (豊間海岸 R1.5.4)

写真8 神輿が甲塚に登る (平荒田目 R1.5.4)



第Ⅲ章

概要調査



1. 新地町 諏訪神社

(1) 神社の概要

名称／諏訪神社

所在地／相馬郡新地町大字福田字諏訪90番地

由緒／文明年中（1469～87）、宇多郡の総鎮守として信州の諏訪神社を黒木（相馬市）に勧請し、のちにその分霊を移したという。旧福田村の総鎮守として尊崇された。

(2) 祭りの名称

春季例大祭

(3) 祭りの由来

村中が悪病に悩まされた寛延元年（1748）に始まったと伝えられる。

(4) 祭日

毎年5月2～3日

(5) 伝承団体

諏訪神社宮司、旧福田村住民。

(6) 神幸経路（図1）

神幸地／新型コロナウイルス感染症（COVID-19）流行（令和2年〔2020〕）以前は、神輿は中里公会堂まで下がっていた。それ以前は、三滝川沿いの道と国道6号の交わる所（以前は「みちのく食堂」があったところ）まで神輿は下りていた。そこで、埴浜から汲んできていた潮水で祓った。このことを「オハマクダリ」と呼ぶが、さらに、それ以前（昭和50年代）は埴浜まで下がっていたといわれる。

神幸経路／平成時代に入ってから。諏訪神社→三滝川に入って潔斎→末社の山神社（沢口公会堂）→末社の水神（中里公会堂）→諏訪神社。



図1 諏訪神社の神幸経路（平成時代に入ってから）

*昭和62年7月20日および10月30日国土地理院発行2.5万分1地形図を加工して作成

(7) 祭りの内容

潮水の扱い／以前に用いた潮水を汲むバケツと柄杓があったが、今は行っていない。潮垢離の代わりに三滝川に入って潔斎をする。

実施内容／行列の神輿は、諏訪神社の神輿と、境内社の八重垣神社の神輿、獅子舞を奉納する大神宮の神輿、子ども神輿（のちに「女神輿」に改名）など、3～4基が担がれる。

- ・2か所の旅所（ウツシノミヤ）である山の神（沢口公会堂）と水神（中里公会堂）は南向きに建てられており、そこでは幕を張っておき、神輿3基を安置させる。以前は、参加者が持参した重箱を開いて宴会が開かれた。福田十二神神楽（子ども神楽）は、両所で奉納される。山の神のあるところは「地蔵森」と呼ばれ、三滝川は「地蔵沢川」と呼ばれていた。ここは諏訪神社の奥宮に対する遥拝所であった。
- ・神楽に関わる子どもたちには、祭礼に先立って、大切な役割がいろいろとあった。ひとつは祭礼の道具作りや幟旗を立てたりした。もうひとつは、「赤土まき」と呼ばれ、山の崖からヤマズナ（山砂）でもある赤土を持ってくる。大人たちも手伝い、それを軽トラックで運んで、神輿の道筋に沿って、30メートル間隔でスコップを用いて土壇を作る。これは道路のみで、旅所には置かない。これは、前日に行われる。
- ・前日の宵祭りは午後7時から、祭礼の関係者のみが集まる。カサコシ（慰労会）もあり、そのまま神社に泊まる関係者もいた。

(8) 祭礼の状況

令和元年（2019年）まで行っていた祭礼は新型コロナウイルス感染症の流行で中止が続き、現在も神楽が奉納されなくなるなど、簡素化された祭礼が続いている。現在はむしろ、秋季例大祭の11月3日に神輿が神社の近くまで下り、その後、福田小学校へ行き、そこで神楽が奉納されている。

以前は、神楽3基を担うには40～50人が必要だったので、人を集めるために、行列の前に旧福田村内のソフトボール大会などを開催してから、そのまま神輿を担いでもらったりしていた。「子ども神輿」を「女神輿」に名を変えたのも、少女や女性に神輿を担いでもらうためだったという。

(9) 芸能等

祭礼のオハマクダリに奉納される福田十二神神楽（福島県重要無形民俗文化財）は、小学生を中心とする神楽衆である。三滝川から汲んできた水を神楽にかけたあと、巫女の舞（明神の舞）、幣束の舞（四方固めの舞）、恵比寿の舞、毘沙門の舞、種蒔きの舞、春日の舞、二本剣の舞、三本剣の舞、八幡の舞、獅子の舞などを奉納する。宵祭りにも拝殿で奉納されるが、本祭りでは、その他の踊りも奉納された。宵祭りが始まる前には、子どもたちだけで沢口公会堂に行き、拝礼してから神社へ行った。

(10) 関連資料

①『奥州宇田郡福田村村内旧説記』（抜粋）

毎年七月廿八日、神輿東海へ御下り御塩垢離ヲ上奉、始ハ寛延元年辰年村中悪病悩候故右為祈之始リ今ニ無怠転相行候事

山東隠士『奥州宇田郡福田村村内旧説記』天明2年（1782）

② 諏訪明神社（現諏訪神社）（抜粋）

○浜降りの神事

この神事は明治末年ごろまで「お浜降り」と称して神輿が埴浜まで下り潮垢離をとったという。のちに浜までは下らず作田まで神輿が渡御し、地蔵沢川に塩をまき神官が梵天を浸して神輿に振りかけ還御したという。

新地町史編纂委員会『新地町史』自然・民俗編（1993）

【川島秀一】



写真1 神社から神輿が出発する (昭和50年代 諏訪神社)



写真2 旅所では子どもたちの神樂が奉納される (昭和40年代 諏訪神社)



写真3 最終の安置所へ向かう2基の神輿 (昭和40年代 諏訪神社)

2. 相馬市 相馬中村神社

(1) 神社の概要

名称／相馬中村神社 なかむら 通称：オミョウケンサマ

所在地／相馬市中村字北町140・141

由緒／相馬中村神社は天之御中主尊 あめのみなかぬしのみこと を祭神としているが、神仏分離以前は妙見宮と呼ばれ、祭神は北辰星王、北辰七星であった。これは妙見菩薩を表すもので天之御中主は妙見菩薩の垂迹であるという。桓武天皇に連なる平良文、平将門が戦にあたって妙見尊が示現し戦勝に導いたという故事にならい、将門の後裔の千葉氏、相馬氏は妙見を守護神として祀った。元亨年間（1321～24）、相馬氏が奥州の地に下向する際も千葉氏から分祀した妙見尊 かみおた を奉じ、上太田 おだか（南相馬市原町区）、小高（南相馬市小高区）と本拠を移しながら氏神として尊崇してきた。慶長16年（1611）、中村城を築城して小高城から移った際にも、本尊を城内の仮宮に遷座し、寛永20年（1643）に新たに造営した社殿に安置した。その経緯は『奥相志』「中村一」にも詳しい。中村に遷してからも妙見宮社殿の修復を重ねながら、神仏分離の時期まで別当は真言宗歎喜寺（妙光院）、祠官は社家の田代家が務め、相馬氏の氏神、中村藩の鎮守としての役割を担ってきた。神仏分離を機に中村神社になり、さらに相馬中村神社となって現在に至る。

(2) 祭りの名称

御遷宮、遷宮浜下り。相馬中村神社は旧藩主相馬家の氏神であるとともに中村藩の鎮守でもあったことから、近代以降も旧中村藩の祭り、中村の町あげての祭りとされてきた。平成30年（2018）の遷宮祭も「復興祈念浜下り野馬追行列祭」と銘打ち、神社行事に限定しないで、平成23年（2011）の東日本大震災の津波で被災した海岸部の祈念行事、復興行事としての意味も持たせたという。

(3) 祭りの由来

漂着伝説や遷宮祭に伴う由来はない。

(4) 祭日

社殿の屋根替や大がかりな修復の際に遷宮祭は斎行される。遷宮祭の間隔は10数年から30年前後と不定期で、開催月日も同じ時期ではない。直近の平成30年の遷宮祭は東日本大震災の大地震に伴う社殿の修理後のもので、平成30年6月16日に行われた。前回は平成4年（1992）年で、国の重要文化財指定後の社殿の解体修理に伴う遷宮であった。なお、社殿修復に先立ち必ず下遷宮がある（写真1）。平成28年（2016）6月19日夜、ご神体を本殿から社務所への下遷宮があり、遷宮祭は2年後の平成30年に斎行された。

(5) 伝承団体

相馬中村神社の遷宮祭は「中村のマチあげての祭り」という意味合いを持つ。平成30年の遷宮祭は「第18回相馬妙見中村神社式年遷宮奉賛会」「復興祈念浜下り野馬追祭実行委員会」を組織して実施している。奉賛会会長は相馬双葉漁業協同組合長、副会長は相馬商工会議所会頭など4人、理事長中村神社総代長、常任理事18人、評議員4人。名誉顧問に相馬家33代当主、最高顧問は相馬市長など2人、顧問に相馬家ほか前中村神社総代長など6人が入る。実行委員会には相馬市、観光協会、商工会議所、氏子総代会、婦人講中、企業代表なども加わる。

(6) 神幸経路（図1）

神幸地／原釜の浜。元文4年（1739）の記録（関連資料⑤）に「原釜笠岩ノ脇ノ山江御仮屋建」とあるように、原釜浜と尾浜を隔てる笠岩と呼ぶ岩山に祭場を設けた。相馬港の港湾整備により笠岩は縮小し、その一部に相馬市伝承鎮魂祈念館が建った。



図1 相馬中村神社の神幸経路（平成30年6月16日）

神幸経路／下遷宮した社務所から神輿を出し、騎馬行列を伴って中村4町（おおまち たまち うわまち うだ 大町、田町、上町、宇多川町）を通過して相馬市民会館駐車場まで行列を進めた。そこからはトラック自家用車、馬搬車で原釜街道を原釜津神社に向かう。津神社で行列を整え神輿を担いで原釜海水浴場の砂浜に設けた祭場を目指した（写真2）。神事終了後、神輿行列は騎馬武者を伴い相馬双葉漁協前を通り（か）カネヨ水産駐車場まで進み、そこからトラック自家用車などに乗せ換えて相馬市民会館に戻り、再び列を整えて神社に還御した。

(7) 祭りの内容

潮水の扱い／祭場では潮水を汲んで神前に供えた。潮垢離、お水取りなどという。

実施内容／平成30年6月16日の遷宮祭は中村市街の行列を「復興祈念浜下り野馬追行列祭中村ルート」とし、原釜津神社からの行列を「復興祈念浜下り野馬追行列祭松川浦ルート」とした。相馬中村神社の浜下り遷宮祭の行列と、観光的な意味合いを持たせた相馬野馬追行列を組み合わせたかたちをとった。

午前8時30分集合。下遷宮にご神体を安置した社務所から神輿を出し、8時45分に神社境内で行列を組み、相馬市民会館まで中村4町を練り歩き、9時40分市民会館着。市民会館で車に乗り換えて原釜津神社に向かう。午前11時津神社に着き、行列を組み直して、原釜海水浴場の祭場まで神輿を進め、11時20分会場到着。海水浴場の砂浜に神輿を安置し、いみだけ 斎竹を立てて祭場を設け「お水取り行事」となる。氏子総代2人が白丁に着替え烏帽子を被り、それぞれ柄杓と桶を持って胸の深さまで海に入る。柄杓で潮水を汲み、もう1人が持つ桶に注ぎ入れた（写真3）。これを浜の祭場の神前で宮司に渡し、宮司は小さな容器に潮を汲み替え、サカキを浸して神輿を祓い（写真4）、容器を三宝にあげて供物と共に供えた。その前で祝詞奏上、玉串奉奠の神事を執り行った。相馬家からは「潮垢離総括名代」として当主の名代が列席している（写真5）。

神事のあと祭場で昼食をとり、12時30分から「乗切競馬」と称し、砂浜の波打ち際で騎馬武者に

よる競馬を行っている（写真6）。13時から再び行列を整えて祭場を徒歩で出発し、騎馬武者と共に松川浦の海沿いの尾浜地区を歩き、14時に（有）カネヨ水産の駐車場に到着。相馬市民会館駐車場まで車に乗り換えて移動した。市民会館からは「お上がり行列」として中村城跡の大手門を通して神社境内に還幸している。19時から神社では遷宮祭を執り行った（写真7）。

6月17日は9時から稚児行列、そのあと神社では餅まきをして一般参拝に入った。

平成30年の浜下り行列配役は次のとおりであった。なお、（ ）内の数字は人数。

神名旗(1)、騎馬(4)、五色角旗(5)、螺役(4)、陣太鼓(1)、太鼓打(2)、御供(1)、騎馬(3)、九曜旗(1)、黒地緋ノ丸(1)、潮垢離統括名代／相馬家(3)、騎馬(2)、黒地緋ノ角旗(1)、紫地白丸旗(1)、長蛇旗(1)、騎馬(2)、総代騎馬(2)、神名旗(1)、源平旗赤(1)、源平旗白(1)、錦旗(1)、御供(2)、神官(2)、氏子総代長(1)、氏子副総代長(1)、氏子総代(4)、榊箱、騎馬(1)、四神(2)、御神輿(33榊箱も持つ)、四神(2)、騎馬(2)、宮司(1)、騎馬(1)、氏子総代(5)、総代騎馬(2)、騎馬(4)

遷宮祭に先立つ下遷宮は平成28年6月19日23時に斎行された。社殿から参道石段下まで「天之浮橋」と称する幅白布を敷く。照明は消し、篝火と松明をともし、各種持物を持った総代のほか神職が境内末社の形代を奉じる。宮司はご神体を奉じ、周囲を「御絹垣」に囲まれながら「天之浮橋」の上を歩いて仮殿の社務所まで進み、零時近く、社務所の仮殿にご神体ほかを安置した。

(8) 祭礼の状況

遷宮祭は、社殿の修築の際などに、あらかじめご神体を本殿から別な社に遷す下遷宮を受けて行う祭りのため、今後も継続されるものと思われる。遷宮祭は平成23年に予定されていたが、東日本大震災の地震、その後の数度にわたる福島県沖地震等により社殿が傷み、震災や続く災害の混乱で斎行できる状況ではなかった。平成30年になって社殿の修理も済み、遷宮祭を実施できる環境が整った。

この遷宮祭は神社行事としてだけでなく、津波被害を受けた沿海部の復興祈念祭も兼ねることにしたため、相馬市商工観光課、観光協会、商工会議所、商店会など行政や公的機関もかかわっている。これも相馬中村神社が持つ性格の特異性の反映と思われる。

(9) 芸能等

芸能の奉納はない。

(10) 関連資料

以下、相馬中村藩の年譜である『相馬藩世紀』（『稿本相馬藩世紀』含む）から浜下りにかかわる記録を取り上げた。なお、紙幅の都合上、資料表題のみとし、資料文は抜粋した。

① 寛永二十癸未年（1643）相馬義胤代（2代藩主）『義胤朝臣御年譜』二

- 一、（八月）廿七日、妙見堂御造替成就、今の宮ナリ 此日、朝五時、原釜江御浜下り神幸、同晩遷宮
- 一、廿八日、妙見於社前神楽御湯祭
- 一、廿九日、御代参岡田八兵衛相務、以後諸士参拝 神楽前日同然、御造営奉行 大工棟梁 六左衛門

② 寛文十庚戌年（1670）相馬忠胤代（3代藩主）『忠胤朝臣御年譜』三

- 一、（寛文十年）三月十三日 妙見御遷宮、辰ノ刻、御浜下り神幸、鉄炮拾挺 弓五張 鎗拾本 石川十太夫 真言十二ヶ寺 社人 神幸ノ次第、別記有之略
御名代村田與左衛門駕牽馬
御騎馬 八名（木幡 水谷 泉 富田 熊 村田 岡部 堀内）
太守、長友江御出
同日八半時御宮入
- 一、十四日 社前御法楽神楽 御湯祭
太守・昌胤君ニも妙光院（妙見宮の別当寺。真言宗歡喜寺末、真言十二か寺筆頭）江御成、侍朝

五時半より御庭ノ御仮屋へ詰ル

岩松院殿御仮屋 御法楽拝見、芝居人数七千人程

③ 元禄五壬申年（1692）相馬昌胤代（5代藩主）『昌胤朝臣御年譜』三

④ 享保二丁酉年（1717）相馬尊胤代（7代藩主）『萬榮日録』二

⑤ 元文四己未年（1739）相馬尊胤代（7代藩主）『萬榮日録』六

一、（元文四年）三月十二日妙見下遷宮

妙見御本宮ヨリ末社迄、御屋ね替御修復有之、屋ね方之者四拾人程、江戸より差下、五・六月中出来、正遷宮御浜下りノ御神幸相調候様ニ被仰付、惣引受大奉行堀内 中奉行原 小奉行佐藤（以下四名）

（中略）

一、（元文四年）五月十八日、妙見宮御屋ね替え出来、

一、同日、妙見御社地ノ稻荷宮御屋ね替出来、

一、（五月）廿二日、妙見正遷宮、巳ノ上刻御浜下り、

御名代 堀内十兵衛胤總

原釜江神幸、御鉄炮十挺、御弓五張、御長柄十本

御旗奉行 西内十郎右衛門、真言十五箇寺三ヶ寺駕、十二ヶ寺馬、田代右京進駕 社家五騎泉左衛門 相馬外記（中略）

御道筋、享保二年酉十二月三日御遷宮、御浜下りノ通、大町ヨリ西光寺裏門前、北勘兵衛屋敷脇ヨリ北飯渕江、於原釜笠岩ノ脇ノ山江御仮屋建、始真言修法、御社家法楽、還幸申ノ刻、神幸ノ次第別記アリ

一、廿三日、妙見堂ニ而御法楽、

御庭江諸士出席、小屋掛ケ服指合用捨、懐妊ハ臨月計鹿給候者ハ、五十日ノ内兩日トモニ禁之、御堂ニ而真言宗法楽、巳ノ刻ヨリ午ノ刻迄、

御湯祭 三釜

舞台ノ内雑花トテ、色々ノ絵ヲ切りヌキ掛之、

十八神道 田代右京進務之

右十八神道相済、火劔 社人三人

十二番神楽

大散供

勧請舞 神子舞 神招 開行器 諏訪舞 大野辺 劔舞 四季ノ舞 五龍王 延舞 岩戸 大楽

一、廿四日 神戸開、惣社参、

⑥ 宝暦九己卯年（1759）相馬尊胤代（7代藩主）『続撰御年譜』拾四

⑦ 安永二癸巳年（1773）相馬恕胤代（8代藩主）『恕胤君御代』九

⑧ 寛政二庚戌年（1790）相馬祥胤代（9代藩主）『山嶠公記』八

⑨ 文化六己巳年（1809）相馬樹胤代（10代藩主）『樹胤朝臣世紀』六

⑩ 文政六癸未年（1823）相馬益胤代（11代藩主）『益胤公御年譜』十一

（文政六年）五月

一、妙見御神幸御物入三百八拾貳兩壹分壹朱 内百五拾五兩余寄進外米百一俵余

六月四日

一、今日触出壺町触案詞左之通

来ル七日妙見正遷宮御浜下りニ付、惣御家中并嫡子隠居二男三男御目見限り、長友へ明ケ六ツ半時揃相詰、御神幸可奉拝旨、先例之被仰付候 日記

(中略)

六月七日

一、妙見社へ六ツ半時御社参御上り御、御行列御繰出之節、御注進有之、物頭番所へ御下り被遊、御鳳輦御通行之節、御下座ニ而御平伏被遊、此節御刀此方共持之、御後ニ罷在、御行列大町辺へ御出之頃、御跡より供奉被遊候事 日記

六月八日

一、正遷宮辰之刻御供揃置、五ツ半時過御注進有之御社参、十二ヶ寺勤行へ御逢被遊、御拝し相済妙光院へ御下り、神楽殿ニ而十八神道御湯立、音楽、火剣迄相済中入ニ相成、御酒御赤飯差上、夫より十二神楽相済七ツ時御上り被遊候事

六月九日

一、御戸開巳之刻、御供揃置、四ツ時過御注進有之、御社参勤行へ御逢被遊、御拝し末社不殘御拝し御上り被遊候事 日記

⑪ 天保十二辛丑年（1841） 相馬充胤代（12代藩主）『充胤公御年譜』七

⑫ 安政六己未年（1859）相馬充胤（12代藩主）『充胤公御年譜』二十五

六月十二日

一、御神幸ニ付、朝六時半時御供揃、寺社奉行より御使番之御案内申来候所ニ而、妙見社之御参詣被遊、直ニ御帰城、又候御案内有之、物頭番所江御出、御行列御覧被遊、御鳳輦御見掛被遊候処ニ而御下座御拝し被遊、御行列三十間程を置、供奉御勤被遊候事 御用人日記

六月十三日

一、妙見社正遷宮ニ付、五ツ時御供揃ニ而寺社奉行より御案内申上、妙見社江御参詣、十二ヶ寺勤行え御逢被遊、夫より妙光院え御下り、神楽殿ニ而十八神道勤行、音楽、御湯立、火剣、十二神楽有之、右神楽中入之所ニ而、御酒御赤飯、上之惣御家中、社僧、諸職人等迄同様被成下、夕七時半時頃御上り被遊候事 御用人日記

資料解説 寛永19年（1642）8月、中村城内で中村妙見堂造営が始まり、翌寛永20年8月27日「造替成就」。当日早朝「原釜江御浜下り」し晩に「遷宮」成る。この記録（**関連資料①**）が「浜下り」という用語の初出かと思われるが、「下り」を「おり」「くだり」「さがり」と読ませるのかは不明である。中村藩主相馬家歴代の正史『相馬藩世紀』には、「妙見堂」遷宮浜下りが寛永20年に続き、寛文10年、元禄5年、享保2年、元文4年、宝暦9年、安永2年、寛政2年、文化6年（1809）、文政6年、天保12年にも確認でき、近代現代もこの祭礼は継承されている。なお、安政6年の遷宮浜下りについては町人の視点の記録もある（『吉田屋源兵衛覚日記』〔第4冊の1〕）。

参考文献・資料

相馬市史編集会編『奥相志』「中村一」（『相馬市史』4 資料編1 1969）

『稿本 相馬藩世紀』

（財）文化財建造物保存技術協会編著『重要文化財相馬中村神社本殿・幣殿・拝殿保存修理工事報告書』宗教法人相馬中村神社（1993）

統群書類聚完成会『相馬藩世紀』1（1999）

統群書類聚完成会『相馬藩世紀』2（2002）

岩崎真幸「近世史料にみる『浜下り』—相馬中村藩の『相馬藩世紀』から『福島の民俗』52 福島県民俗学会（2024）

八木書店『相馬藩世紀』3（2025）

持館泰校訂『吉田屋源兵衛覚日記』〔第4冊の1〕相馬郷土研究会（1985）

【岩崎真幸】



写真1 蠟燭の明かりでご神体を遷す。境内の北野天満宮に下遷宮した（相馬中村神社社殿内 S64. 11）



写真2 行列を整え原釜海水浴場の祭場を目指す（原釜大津地内 H30. 6. 16）



写真3 柄杓を使い桶に潮水を汲む（原釜浜 H30. 6. 16）



写真4 潮水に浸けたサカキで神輿を祓う（原釜浜 H30. 6. 16）



写真5 祭場での相馬家名代（原釜浜 H30. 6. 16）



写真6 祭場の浜での乗切競馬（原釜浜 H30. 6. 16）



写真7 修復が済んだ社殿（相馬中村神社 H30. 6. 16）

3. 相馬市 牛頭天王外八社

(1) 神社の概要

名称／牛頭天王外八社（あるいは牛頭天王外八尊とも）

所在地／相馬市磯部字信成

由緒／疫気退散従心誅罰戦功成就のため八幡太郎源義家が寛治元年（1087）、奥羽両国に勧請した7か所の牛頭天王の一つという。天文元年（1532）には、領主の相馬顕胤が尖山（烏帽子山）に牛頭天王を祀り土地の守り神とした。明治13年（1880）、氏子が堂宇を再建。同21年（1888）に現在の鎮座地に遷座し、その後明治33年（1900）、屋根替、拝殿を新築したが傷んだために、同45年（1912）に再建したという（文殊堂住職村岡聖、妙楽寺岩崎素孝による明治45年2月記の「牛頭天王外八尊社由緒略縁記（石碑銘文）」）。

牛頭天王は『奥相志』磯部邑の「牛頭天王小祠」と思われ、「古磯部にあり。創立来歴不詳、神祠を安んず。六月十五日、九月十五日、二度之を祭る。別当大聖院」とある。「外八社」は牛頭天王に合祀された八柱の神仏で、三吉大権現、成田不動明王、田神、葉山本地薬師如来、船玉本地信成大士、山神、八大龍王、疱瘡神を指す。

磯部村には多くの小祠があり、本山派修験、羽黒派修験の管轄下にあった。多数ある既存の神仏を後年合祀したものと考えられ、八幡太郎の伝説は後年の付会かもしれない。

(2) 祭りの名称

遷座祭、遷宮祭、オサガリ、オクダリ

(3) 祭りの由来

子年に浜下りするというが、子年にまつわる伝承はない。明治21年 戊子つちのえねの年、現在地に社殿を遷座し、このあと明治33年、同45年と社殿を修築している。明治33年が 庚子かのえね、45年も 壬子みずのえねなので、遷座した明治21年を基準にして12年ごとに子年の祭りが行われるようになったのかもしれない。

(4) 祭 日

12年ごとの子年に斎行。日にちは決まっていないが、春先に実施してきた。行列を組んでオサガリをしたのは平成20年（2008）3月29日。令和2年（2020）の子年は、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の流行により、関係者だけで祭りを済ませた。

(5) 伝承団体

妙楽寺住職（天台宗、相馬市磯部字大浜）が導師となり、「牛頭天王外八尊遷宮祭実行委員会」が執り行う。氏子総代は5人。氏子は上ノ台うえのだいと古磯部こいそべの60戸（上ノ台と古磯部をあわせて上古じょうこと称している）。なお上ノ台と古磯部の集会所は古磯部地内にあり「上古公会堂」と称していた。

(6) 神幸経路（ 1）

神幸地／古磯部の浜（浜に近い古磯部にある上古公会堂に祭場を設ける。

神幸経路

平成20年の場合

神社で午前9時半に仏事、焼香。境内で芸能の奉納するなか、神輿に神像を移す（午前10時）。行列の読み上げ（10時過ぎ）、10時半、神輿と行列が神社を出る（写真1）。県道を北上し上ノ台集落に向かい東進、上ノ台集落に入って南下し、上ノ台四辻を古磯部へ向かう（写真2）。子ども手踊は行列の途中、辻にさしかかると踊りを披露する。午前11時20分、古磯部地内にある上古公会堂の上古祭場に到着。公会堂の広場の周囲は紅白幕で囲い西寄りに斎竹を立てて祭壇を設えた。来賓席も作り、地区の人びとが周囲に集まる。



図1 牛頭天王外八社の神幸経路（平成20年3月29日）
*平成3年9月1日国土地理院発行2.5万分1地形図を加工して作成

祭壇の奥に神輿を据え、棟札、3本足のカラスとウサギを描いた和鏡様の飾り物、種々の供物を供え、香炉などの仏具のほか、潮水が入った桶2個も供える（写真3）。潮水はあらかじめ当番の者が浜から汲む（後述）。11時半に祭壇の前で妙楽寺住職が仏事を執り行い（写真4）、遷宮祭委員長挨拶のあと、来賓や関係者、氏子の人たちは昼食をとりながら奉納の芸能を見物した。

奉納する芸能は上ノ台や古磯部の子ども手踊、上古の青年の手踊（写真5）などで、余興の芸能をはさみながら12時半から1時間半ほどかけて演じている。奉納芸能は遷宮祭に際して臨時に組織するもので、「上古（芸能）保存会」として正月あたりから師匠を頼んで練習をしている。

午後2時、再び古磯部の祭場から行列を組んで、古磯部から西に進み、県道を越えて神社に還幸する（写真6）。午後2時半、神体を神輿から本殿に移し、持参した潮水の入った桶も神前に供える。午後2時半からは関係者が拝殿で直会をした。

甲冑を着けた警護役や、陣笠、陣羽織姿で馬の首の作り物を首からさげ、馬の尻を付け、鞭を持った「籠馬^{かごうま}」が加わる。甲冑をつけた武者姿の者は神輿の警固、籠馬の子ども6人（写真7）、成人2人は行列や芸能を先導する。当地方の浜下り行列に共通する配役である。

令和2年の場合

6月22日に、牛頭天王外八尊御遷宮実行委員会の役員のみが神社に集まり開会。実行委員長挨拶、読経、焼香、神事をし、記念写真撮影後直会をして祭りを終えた。

(7) 祭りの内容

潮水の扱い／古磯部の浜から潮を汲む。遷宮祭のあとも汲んだ潮は桶に入れたまま祭壇に供えておく。

実施内容／神輿行列が古磯部にさしかかる頃、役職の者2人がそれぞれ木桶を持ち、古磯部の浜に向かう。白装束（白のタツツケに脚絆、白の上衣を着て、白足袋、白緒の草履）を着用する。古磯部

の海岸に至り、草履と脚絆をはずし、各自桶を持って（写真8）波打ち際から潮水を汲む。作法はとくにない。服装を整えてから桶を捧げて上古の祭場に向かう。祭場では祭壇の桶を供える。還幸する際には潮水を入れた桶を持って神社に帰り、神前に供えておく。令和2年にも役員があらかじめ2つの桶に潮を汲み祭壇に供えた。

（8）祭礼の状況

平成20年は東日本大震災の前年の祭りであった。次の子年の令和2年は、磯部地区の主要な集落が大津波を受け多くの死者を出し集落や生業基盤も流失した東日本大震災以降初めて実施される遷宮（座）祭となる。

令和2年遷宮祭実施のために1月7日に「実行委員会」を立ち上げ（委員長1人、副委員長2人、庶務2人、会計2人、委員4人）、検討を始めた。東日本大震災以降人口減少がはなはだしく、予算規模も縮小せざるを得ないため、上古集落全戸からの参加、行列規模も縮小することにした。祭場は磯部小学校体育館を予定し、それまでの公会堂や古磯部集落は流失したため行列のルートも新たに計画し、上古保存会でも子ども手踊、青年踊、ヤッコなどの練習を始めていた。

しかし前年の令和元年（2019）末から始まった新型コロナウイルスの流行は、翌2年に入って緊急事態宣言、非常事態宣言が発出される事態となり、外出や集会の自粛や中止を余儀なくされた。実行委員会でも中止を検討したが、牛頭天王が疫病退散の神でもあることから遷宮祭を「中止」とはせずに、もともとの祭日である6月14日に変更し、芸能の奉納は諦め、実行委員会のメンバーだけが集まり、僧侶の読経のみで済ませた（写真9）。潮水は祭りの前に古磯部の浜から新しい桶に汲み入れておき、神前に供えて祭りに臨んだ（写真10）。

（9）芸能等

平成20年は「上古保存会」により、上古子ども手踊、上古青年手踊を演じた。令和2年も「上古保存会」で上古子ども手踊、上古青年手踊、ヤッコの奉納のために練習を開始したが、新型コロナウイルスの流行で、芸能の奉納は中止した。

（10）関連資料

参考文献・資料

相馬市史編纂会編『奥相志』（『相馬市史』4 資料編1 1969）
相馬市『相馬市史』9 特別編Ⅱ民俗（2017）

【岩崎真幸】



写真1 平成20年遷宮祭当日の神社（磯部字信成 H20.3.29）



写真2 行列が上ノ台、古磯部方面へ向かう（上ノ台地内H20.3.29）



写真3 上古祭場の祭壇。手前左右に潮を入れた桶を供える (H20. 3. 29)



写真4 導師による読経仏事 (上古祭場 H20. 3. 29)



写真5 青年手踊の奉納 (上古祭場 H20. 3. 29)



写真6 祭場からの還幸 (古磯部地内 H20. 3. 29)



写真7 籠馬役 (上古祭場 H20. 3. 29)



写真8 桶を捧げて祭場に向かう (古磯部の浜 H20. 3. 29)



写真9 令和2年の遷宮祭。祭壇にはあらかじめ汲んだ潮水を供えた (神社祭壇 R2. 6. 14)



写真10 令和2年の遷宮祭は新型コロナウイルスの流行のため関係者だけで読経仏事を行った (神社拝殿 R2. 6. 14)

4. 相馬市 綿津見神社

(1) 神社の概要

名 称／綿津見神社

所在地／相馬市蒲庭^{かばにわ}字狩野^{かの}213-2

由 緒／『奥相志』^{おうそうし}蒲庭村の「八竜権現祠」が当社である。記事には「鹿野にあり。小祠地は山なり。縁起不詳。神形甲冑騎馬の木像なり、長さ五寸許」とある。

『管内神社誌』の由緒をかいつまんで示せば、

多田舎人は柏崎村子安明神の祠官であったが、文化12年（1815）、山中郷草野村八竜大明神の祠官として草野に移住した。多田の故郷の柏崎、蒲庭の両村は海に面し、漁業を生業としているにも拘わらず海の神が祀られていないことを村人は憂慮していた。文化13年（1816）4月8日、多田は村人の望みを受け、草野の八竜大明神を分霊した神輿を蒲庭に安置し、海上安全・大漁満足を祈願する神として祀りはじめたと伝える。

とある。佐々木長生氏の昭和50年（1975）の聞き書きでは、もともと旧家K家の氏神であったともいう。

(2) 祭りの名称

春の例大祭、オハマクダリ（お浜下り）、ハマクダリ

(3) 祭りの由来

—

(4) 祭 日

毎年4月8日であるが、近年は4月8日に近い日曜日に変更、令和6年（2024）の例大祭は4月7日、翌7年（2025）は4月6日であった。

(5) 伝承団体

八坂神社（小泉）宮司、綿津見神社氏子。氏子は蒲庭の38戸で、内部は4班（イッキ組）に分かれ各班から氏子総代を出す。

(6) 神幸経路（図1）

神幸地／蒲庭浜

神幸経路／蒲庭集落の西の山に祀られている社殿から神輿を出し、境内を下りて東に向かい、集落内を通過して蒲庭浜の祭場に至る。浜の祭場での神事とその場での直会が終わると集落内を通過して神社に戻る。

(7) 祭りの内容

潮水の扱い／潮水を桶に汲んできて神前に供える。

実施内容／潮垢離の当番は2人で、海辺で白装束に着替える。烏帽子はなくしてしまった。桶とバケツ、柄杓を持って堤防を越えて浜に下り、消波ブロックの隙間から潮水を汲む。決まった作法はない。桶の大きさは径18センチメートル、深さ8.5センチメートル（桶は2個。胴には墨書がありいずれも「奉納村岡孝 昭和五十八年四月三日」）。令和7年はポリバケツと柄杓だけを持参して潮水を汲み（写真1）、神社に持ち帰ってバケツの潮水を桶に汲み替えた（写真2）。潮の入った桶は社殿の神前に供える。

蒲庭浜は砂浜であったが、徐々に丸石だらけの浜に変わった。以前は「離れ岩」という岩にできた潮だまりに溜まった潮を汲んだ。しかし、岩が浸食されて海から汲むようになった。

例大祭前日の午前5時から神社の境内の掃除をする。



図1 綿津見神社の神幸経路（令和7年4月6日）

例大祭当日は午前10時頃、氏子総代、組の代表や参列者が境内に集合し、社務所（倉庫）から神輿、机椅子、道具類を出し、神前には供物なども供えて準備を始める。

準備の途中で当番2人が潮垢離に出発する。軽トラックに桶、バケツを載せて向かう。潮水を汲んで戻ると、桶（2個）の潮水を神前に供え神事が始まる。参列者は20人程度。潮を振りかけることはない。神事が終わると宮司が神輿にご神体の入った厨子を神輿に移す。

神輿は簡素な素木造りで、大きさは台部が86センチメートル×70センチメートル、屋根は縦横65センチメートルの方形で、宝珠が載る。胴部は縦横高さとも38センチメートル。担ぎ棒は2本で長さは180センチメートル程度。台の上にご神体を納めた厨子を置き、方形の社やしろを被せる（写真3）。

神輿に厨子を納めたあと参道の階段を下ろし（写真4）、「綿津見神社前」の吹き流しを先頭に、五色の籠を持った人が行列を作る。神輿や供物、道具、太鼓は軽トラックに積み込む。旗持ちだけが徒歩、神輿を載せ太鼓を叩く軽トラックと太鼓を従えて20分程度で浜の祭場に到着する（写真5）。

祭場は「オハマクダリのお旅所」などと呼ばれていて広場になっており、「奉納綿津見神社」の幟を一对立てる。また、1メートル四方、高さ50センチメートルほどのコンクリートの壇の四周にいみだけ斎竹を立てて注連を張り、海側を向けて神輿を据える（写真6）。神輿の前には供物と潮水の入った桶を供える。『蒲庭調査報告書』調査時点の昭和39年（1964）当時、浜の祭壇は現状の造りになっていた。それ以前は、毎年祭りのたびに石で築いたもので、佐々木氏の聞き書きにも、玉石で基礎を作り砂で固めて祭壇を設け、ここを「休み所」と称していたとある。

浜のお旅所には蒲庭の氏子が順次集まり、午前11時半頃から神輿の前で神事がある（写真7）。祝詞奏上のおと、氏子総代長、氏子総代、各班長が氏子を代表して玉串をあげる。そのあとお旅所のある野外に机と椅子をならべ、神輿の前に氏子全員で直会をする（写真8）。現在は仕出しの弁当と菓子、缶ビール、茶などで談笑するが、かつては各家で作った料理を持ち寄った。1時間近く



写真1 蒲庭の浜に下りて潮を汲む (R7. 4. 6)



写真2 神前に供えるときは、2つの桶に潮水を入れなおす (R7. 4. 6)



写真3 ご神体を納めた厨子を神輿に入れる。神輿は簡素である (R7. 4. 6)



写真4 神社は山の上にあるので、慎重に階段を下ろす (R7. 4. 6)



写真5 蒲庭の浜には高い防潮堤が築かれて、祭場と海が分断された (R7. 4. 6)



写真6 浜の祭場には以前から祭壇が設けられていて、海に向けて神輿を安置する (R7. 4. 6)



写真7 祭場での神事。堤防上から撮影。向かいの植林地は津波で流された屋敷地 (R7. 4. 6)



写真8 神事が終わると氏子の人たちは仕出し弁当を広げ、飲みながら談笑する。このあと神社に還幸するが、氏子の人たちが集う野外の直会の場になっている (R7. 4. 6)

5. 相馬市 熊野神社

(1) 神社の概要

名称／熊野神社 通称：立切熊野神社

所在地／相馬市蒲庭字館前314（神社が立地する山を「館の山」と呼ぶ）

由緒／熊野神社は、「奥の法師熊野権現」とも称し、熊野権現と奥の法師（弘法大師）を併せ祀ったという。武田信玄に仕え名を挙げた甲州の小畑某の孫3人が奥州に下り、佐竹氏、相馬氏、伊達氏に仕えた。相馬氏に仕えた次男は立切に住み愛澤新助と名乗った。熊野はもともと愛澤氏の氏神であったという。『奥相志』「蒲庭村」の由緒では、八沢浦で獲れた鮭を弘法大師に背負わせたために災厄を招き、それを鎮めるために熊野を祀りはじめたという。

(2) 祭りの名称

オサガリ、オハマクダリ、例祭

(3) 祭りの由来

オサガリについての由来はとくにないが、『奥相志』蒲庭村に「奥の法師熊野権現祠」「毎年四月八日神輿を八沢の湊の傍に下し祭礼を行ふ」とあって、近世末には神輿を毎年八沢湊に下ろす祭りがあった。

(4) 祭日

毎年4月8日に例祭を執り行っていたが、最近では氏子の都合に合わせて4月8日に近い日曜日に斎行している。

(5) 伝承団体

伊勢大御神（南相馬市鹿島区）宮司、熊野神社氏子総代と氏子。

立切は19戸全戸が当社の氏子になっている。平成23年（2011）の東日本大震災まで立切は3班、27戸で構成されていたが、津波の被害を受けて南相馬市鹿島区に隣接する第3班の6戸は流失し、転出する家も出て戸数は減少した。愛澤の本家が代々「大総代」を務める。

(6) 神幸経路（図1）

神幸地／湊浜（湊の浜ともいう）

神幸経路／毎年4月8日に神輿を出して八沢湊まで下りていた（『奥相志』）ことを記憶する人はなく、経路も不明である。

13年目ごとの遷宮祭には神輿行列を出し、これをオサガリという。遷宮祭の行列は神社を出て県道を北に上り、立切公会堂で休む。そのあと田圃を横切って東の山際を進み、太田神社の角を曲がって再び県道に出る。旧鹿島町境を湊浜に向かい浜の祭場で潮水を供え、祭りを執り行ってから還幸する。

毎年の例祭の前には、神前に供えるために湊浜で潮水を汲むので、その経路も示しておく。

(7) 祭りの内容

潮水の扱い／湊浜の海から潮水を汲み、神前に供える。

実施内容／例祭日の前日の朝、氏子全戸が人足に出る。熊野神社と田の神を祀る太田神社の2社で祭りを行うので2社の境内の掃除、旗立てを行う（写真1・2）。

例祭当日は午前10時過ぎ、当番2人が軽トラックで湊浜に向かい、防潮堤を伝って浜に下りて桶とポリバケツに潮水を汲む（写真3）。木の桶は直径20センチメートルほどで、昭和14年（1939）1月27日の「石鳥居記念」に詠えたものと、昭和24年（1949）4月8日に愛澤某が奉納したものである。普段着のまま波打ち際で潮を汲み、汲んだ水はその場でペットボトルに詰めかえて（写真4）



図1 熊野神社の神幸経路（平成2年） *平成3年9月1日国土地理院発行2.5万分1地形図を加工して作成

持参する。

まず太田神社（田の神様）の祭りがあるので、神前に神饌とペットボトルを供える（写真5）。午前11時から太田神社の例祭が始まり（写真6）、祝詞奏上、玉串奉奠を行ったあと熊野神社に向かう。

熊野神社の例祭は午後0時頃から始まる。熊野神社の本殿前にも供物と共にペットボトルに入れた潮水を供えて神事を行い、神前で神酒を飲んで神事を終える。太田神社も熊野神社も列席者は氏子総代と班長、区内の工場関係者である。午後1時頃から立切の集会所（防災倉庫）に場を移し、神職を囲んで直会をする（写真7）。

翌日は「旗さげ」で後片付けをする。立切の氏子の3班が毎年交替で当たり、下ろした幟旗は総代の愛澤家で保管する。

遷宮祭のオサガリ（神輿渡御）は平成2年（1990）を最後に行われていない。オサガリには神輿を神社から出し、集落の道路を通過して立切の集会所の広場にいったん神輿を安置する。そこで芸能を奉納したあと、行列は東側の山際を通過して太田神社を抜け、湊浜の祭場に向かう。湊浜の祭場は堤防と松林の間に設け、^{いみだけ}斎竹を立てて注連を張ったなかに神輿を安置する。そのあと浜に下りて潮水を汲んで供え、湊浜の祭場でも芸能を奉納して飲食する。その後、神社に戻り、ご神体を本殿に戻す。

遷宮祭は茅葺屋根を葺き替えたときに行った。立切には古い家が12軒あり、茅葺屋根だった時代は共同のカヤハラを持っていて、毎年12軒共同でカヤ刈りをしていた。そのカヤで1年に1軒ずつ家の屋根の葺き替えをする。13年目は神社の屋根を葺き替えることになっていた。そのため御遷宮は13年ごとに行われるといわれている。しかし、棟札によれば必ずしも13年ごとともいえない。

拝殿内に掲げた札には昭和45年(1970)と昭和55年(1980)の神輿行列の配役が記録されていて、神輿の行列の規模がわかる(関連資料⑥)。

(8) 祭礼の状況

平成23年の東日本大震災では襲った津波で1つの班6戸が流されて犠牲者を出し、氏子の多くも避難を強いられた。熊野神社は館の山にあるので津波は受けなかったが、太田神社は流失した。震災の混乱によりこの年4月の例祭は中止した。立切は八沢浦の北端にあたる。南に広がる八沢浦は干拓事業で大正年間に陸地化し、浜際には立切を通り海老集落(南相馬市鹿島区)に至る道路が通っていた。道路沿いの松林は津波ですべて流され、道も付け替えられている。田圃が広がる古田^{こでん}というあたりも大震災の津波で地形が大きく変わった。震災後は、もとの堤防をかき上げして防潮堤を高くすることになったため、祭りで潮を汲む必要性を陳情し、防潮堤にステップを取り付けて浜に下りられるよう配慮してもらった。

遷宮祭のオサガリ(神輿渡御)も平成2年(1990)を最後に行われていない。立切の住人が徐々に減少し、神輿の担ぎ手をはじめ行列を構成する人員、芸能を奉納する余裕もなくなってきたのが理由である。社殿内には昭和55年(1979)に新造した素木の神輿(写真8)が保管してあるが、担ぎ手がいないために使われていない。

毎年齋行している例祭も、新型コロナウイルス感染症(COVID-19)の流行拡大により緊急事態宣言が発出された令和2年(2020)には、役員(大総代、総代3人、区長)だけが集まって神事を行い、神札を配って終わった。また、例祭日も変更している。

(9) 芸能等

拝殿の奉納写真によれば、遷宮祭には立切独自の青年手踊や子どもによる万作踊、女兒の手踊が奉納され、遷宮祭のために踊組が組織された。平成2年には子どもの手踊を奉納していた。

(10) 関連資料

① 御正体/直径20センチメートルほど。

② 神鏡/12センチメートルほどの和鏡。

③ 幟旗(麻布製か) / 「⁽¹⁸⁶⁴⁾元治元年四月卯

八日 奉納熊野大権現御宝前 当村住人願主理三良」御正体の敷物として用いている。

④ 奉納写真/6点

- 1) 昭和戦前期、時代は特定できない。青年手踊集合写真
- 2) 昭和33年(1958) 遷宮 子供万作踊、子供手踊(写真9)
- 3) 昭和33年4月 子供万作踊
- 4) 昭和45年(1970) 3月25日 大遷宮祭 女子子供手踊世話人一同
- 5) 昭和55年(1980) 3月30日 神幸式子供手踊世話人一同
- 6) 平成2年(1990) 4月1日 御遷宮記念子供手踊

⑤ 棟札/19枚

- 1) 明治3年12月15日 王政復古棟札
- 2) 明治11年4月4日 屋根葺替 祭主鈴木禎久 氏子頭愛澤富之助
- 3) 明治20年旧4月8日 奉祝蒲庭村鎮座龍神社合殿 鈴木建久
- 4) 明治24年4月8日 屋根替 神官穂積建久 氏子総代愛澤為之進
- 5) 明治26年旧4月8日 神輿新営 鈴木建久 氏子総代愛澤為之進
- 6) 明治30年旧9月27日 建替熊野神社 鈴木建久 惣代愛澤為之進
- 7) 明治41年旧12月8日 拝殿改造 社掌鈴木貞巳 惣代愛澤為之進、鈴木徳五郎
- 8) 大正5年旧4月8日 拝殿新造 社掌鈴木伊助 氏子惣代愛澤為之進、鈴木徳五郎、鈴木住衛

氏子17戸

- 9) 大正9年4月8日 雨覆瓦葺 社掌鈴木伊輔 氏子惣代愛澤為之進、鈴木住衛
- 10) 昭和14年1月8日 鳥居建設 社掌森伊織 氏子惣代愛澤一二、飯野精太郎、村井林治
- 11) 昭和24年5月5日旧4月8日 屋根替 森幸禱 氏子総代愛澤一二、鈴木満、鈴木善雄 氏子28戸
- 12) 昭和33年1月24日 雨屋新築上棟式
- 13) 昭和33年4月1日 雨屋新築 森幸禱 氏子総代愛澤一二、石橋善右衛門、高橋達造、大橋武夫
- 14) 昭和45年3月25日 拝殿改築 森鎮雄 総代建設委員長石橋清明
- 15) 昭和45年3月25日 拝殿改築遷宮祭
- 16) 昭和55年3月30日 奉造御神輿 森鎮雄 氏子総代石橋清明ほか4人
- 17) 平成2年4月1日 拝殿新築 森鎮雄 総代愛澤充雄他4人
- 18) 平成2年4月1日 遷宮祭棟札
- 19) 令和4年5月吉日 修拝殿 森幸彦 総代長愛澤一弘

⑥ 拝殿内の掲額

- 1) 昭和45年3月25日拝殿改築時の「祭典列帳」 * () 内数字は人数、□は不読箇所
□村接待整理(2)、御使番(1)、御先払(1)、大旗(1)、五色旗(5)、大麻□、大榎□、甲冑武者(1)、手踊世話人(3)、踊子(10数人)、供物(7)、稚児(2)、神鏡(1)、御棟札(棟梁)、御棟札(総代)、神主(1)、奉幣、榎幣、御神輿(4)、大榎(1)、踊子名簿(13)
- 2) 昭和55年3月30日御神輿新調神幸式 (写真10)
代表総代(1)、総代(4)、世話人長(1)、世話人(4)、祭典実行委員(1)、御使番(1)、師匠(3)、踊子(14)、御神輿(4)、御使番(2)、稚児(2)

資料解説／関連資料によれば、遷宮祭は屋根替えや社殿などの改築修理の際に行われるもので、例祭に比べると踊りなど芸能の奉納もあって行列の規模も大きい。ただし定期的に遷宮がなされているわけではない。

参考文献・資料

相馬市史編纂会編『奥相志』(『相馬市史』4 資料編1 1969)

福島県神社庁相馬支部『管内神社誌』(2006)

【岩崎真幸】



写真1 熊野神社 (館の山 R6. 4. 14)



写真2 太田神社 (田の神様 流失後同じ社地に再建 R6. 4. 14)



写真3 例祭の朝に湊浜で潮を汲む (R6. 4. 14)



写真4 潮をペットボトルに詰める (湊浜 R6. 4. 14)



写真5 田の神に供えた潮水 (太田神社 R6. 4. 14)



写真6 田の神の例祭 (太田神社 R6. 4. 14)



写真7 直会 (立切の集会所 R6. 4. 14)



写真8 熊野神社の神輿 (この御輿でオサガリする R6. 4. 14)



写真9 昭和33年遷宮の奉納芸能掲額 (R6. 4. 14)



写真10 拝殿内に掲げてある昭和55年の行列木札 (R6. 4. 14)

6. 南相馬市 虚空蔵堂

(1) 寺院の概要

名称／虚空蔵堂（真言宗豊山派平出山摩尼院宝蔵寺持仏堂）

所在地／南相馬市鹿島区北海老字北畑20

由緒／『宝蔵寺史』の歴代住職の記録によれば、元暦元年（1184）創建。本尊は能満虚空蔵菩薩。往昔、江垂の桜平館主（中世、真野氏康）が鬼門の守護としてこの虚空蔵菩薩と右田の八剱明神（御刀神社／Ⅲ-8）を信仰し、宝蔵寺に100石の寺田を寄進したという。天正年間（1573～92）、領主相馬郷胤の代に毎年正月4日に堂行を行い、守り札を公館に納めた。元禄5年（1692）、病氣平癒を祈願した藩主相馬昌胤が回復したことから堂を再建して仏恩に報いた。文久3年（1863）に焼失。慶応元年（1865）再建。

(2) 祭りの名称

遷座式、（虚空蔵尊の）お浜下り、虚空蔵さまのオサガリ。

(3) 祭りの由来

『宝蔵寺史』によれば「文化3年（1806）3月19日、虚空蔵菩薩お浜下り執行」「嘉永6年（1853）3月24日、虚空蔵堂屋根替え、お浜下り執行」「文久3年（1863）7月29日夜、燈明より出火して虚空蔵堂を焼く」「慶応元年（1865）、…虚空蔵堂を再建、8月19日落慶入仏の法要、お浜下りが執行され、同21日には尊像の御開帳」「大正2年（1913）…4月27日、虚空蔵堂屋根替落慶法要、お浜下りを執行」「昭和12年（1937）4月13日、虚空蔵堂屋根替、お浜下り執行」「昭和36年（1961）4月1日、虚空蔵堂屋根替え落慶、お浜下り執行」とあり、お浜下りが文化3年（寅年）以外は丑年に堂宇の再建や屋根替えを伴って執行されてきたことがわかる。祭りの由来は不明である。

(4) 祭日

12年ごとの丑年3月、屋根替えなどの堂宇修復の落慶法要の折に執行する。古くは（具体的な年代は不明）8月にも実施したという。

令和3年（2021・丑年）に遷座式を予定していたが、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の流行により執行できなかった。この虚空蔵尊は丑寅虚空蔵尊とも呼ばれ、丑年と寅年生まれ守護本尊であることから、翌令和4年（2022）の寅年に延期した。

(5) 伝承団体

宝蔵寺住職、宝蔵寺役員、北海老地区・南海老地区の人びと。

(6) 神幸経路（図1）

神幸地／南海老字蛭沼の浜（通称：高屋釜の浜）

神幸経路／虚空蔵堂→大門町建場（北海老公会堂前）→反町三差路→字境（鍛冶内と堂ヶ埴の境）→巴境→大字境（北海老と南海老の境）→字境（北町と南町の境）→南海老グラウンド→（東日本大震災前は港行政区に港公会堂ほかの建場数か所）→字境（北町と南町の境）→金砂神社前→祭場（高屋釜の浜）→竹駒神社（行列の先陣・後陣が入れ替わる）→虚空蔵堂。

(7) 祭りの内容

潮水の扱い／汲んで本尊に供える。

実施内容／ご本尊を海浜に遷し「浜下り」の儀式を行う。南相馬市の寺社の中で、「浜下り」を行うのは神社に多く、市内の寺院では鹿島区北右田の薬師堂（Ⅳ-13）・北海老の虚空蔵堂・鹿島の三日月不動堂（Ⅲ-13）、原町区小沢の虚空蔵堂（Ⅳ-25）のみである。神式と仏式では、その方法に差異はあるものの、海浜に神幸し潮水で禊をし、蘇生復活を図るという意図はかわらない。



図1 虚空蔵尊の浜下り経路（令和4年3月26日）

平成9年（1997）3月29日の場合、北海老・南海老・港の人びとが参集。7時に僧侶の読経（法要）のもと、本尊を厨子から輿に遷す遷座式を行い、諸芸奉納。列帳に従い本尊を奉斎して行列を組み、浜祭場に向かった（写真1）。途中、字境、辻、祠堂などの建場で輿を休ませ、港公会堂前で読経、諸芸奉納が行われた。

東日本大震災後の令和4年（2022）3月26日の祭礼は関係者のみで行列を組み、移動にはトラックと自家用車を使って時間を短縮した。螺役だけは従ったが諸芸の奉納はなかった。

午後12時過ぎ、本尊を厨子から輿に遷す遷座式を行い（写真2）南海老字蛭沼の浜祭場に向かった（写真3）。祭場は浜の防潮堤の陸側、風力発電タワー下の空き地に設け、竹矢来などは作らず防護フェンスに幟旗などを立てかけた。尊座の輿は海に向かって安置（写真4）。午後1時過ぎ、潔斎した南海老の区長が、波消ブロックの間から新桶で潮水を汲んで（写真5）主僧に渡し本尊に供える（写真6）。従来は波を3つ越えたところから清浄な水を汲んでいた。法会が営まれ、総代長の挨拶のち午後1時半過ぎに早々と「お上がり」（遷御）した。前回までは、法会に続き諸芸能が奉納されて遷御となった。行列は南海老と北海老のムラ境で先陣と後陣が入れ替わり、到着は夕刻になる。今回は午後2時半に堂に戻った（写真7）。翌日は御開帳があり、従来は地区ごとに諸芸の村マワリが行われた。

（8）祭礼の状況

東日本大震災の津波は旧八沢浦にも押し寄せ、干拓の中にあった大字北海老の港行政区の家々を壊滅させ、新たな防潮堤の下になった港行政区は解散せざるを得なくなった。このため、1年延期した令和4年のお浜下りでは、規模を縮小し神幸経路も変更することになった。また、芸能の省略はコロナ禍も原因の一つになっている。

(9) 芸能等

大正14年（1925）は、大正踊（南屋形・南海老・北海老）、万作踊（北海老）、手踊（北海老）が奉納された。昭和12年（1937）は港・南海老・北海老の各組が踊りを奉納。

現代は、祭礼当日は虚空蔵堂境内からの出発時、途中の各建場、浜祭場の竹矢来の中、境内への到着時、そして、翌日の境内での御開帳式典での諸芸奉納。その後、地元地区内を回っての披露と、2日間にわたり村マワリの披露をした。しかし、震災後は、住民の移転や少子化により、港行政区の万作踊や子ども手踊などは奉納できなくなった。

万作踊／北海老の万作踊（青年団員・消防団員）。昭和60年（1985）頃までは港の万作踊。

手踊／南海老の子ども手踊。震災以前はほかに南海老の青年手踊、北海老の子ども手踊、港の子ども手踊。

(10) 関連資料

参考文献・資料

「大正十四年乙丑年遷座式列帳（虚空蔵尊）」（1925）

相馬市史編纂会編『奥相志』（『相馬市史』4 資料編1 1969）

平出山宝蔵寺『宝蔵寺史』（1984）

鹿島町史編纂委員会『鹿島町史』第6巻 民俗編（2004）

虚空蔵尊お浜下り遷座式祭典執行委員会 DVD『虚空蔵尊お浜下り遷座式祭典（矢来～復路）』（2009）

南海老芸能保存会制作 佐々木哲男撮影 DVD『虚空蔵尊のお浜下り』（2009）

南相馬市『鹿島町の神社と仏閣』（2009）

佐々木長生「浜下りと大震災」『季刊 東北学』第29号 東北芸術工科大学東北文化研究センター（2011）

南相馬市・みなみそうまチャンネル制作・著作 DVD『虚空蔵尊お浜下り遷座式祭典』（2022）

【二本松文雄】



写真1 東日本大震災前、防潮堤を通る行列（南海老宇北原 H9.3 佐々木長生氏）



写真2 虚空蔵堂（R4.3.26 南相馬市博物館）



写真3 虚空蔵尊を載せた輿（南海老海岸
R4. 3. 26 南相馬市博物館）

写真4 浜祭場（南海老海岸
R4. 3. 26）



写真5 潮水を汲む（南海老海岸
R4. 3. 26 南相馬市博物館）



写真6 虚空蔵尊に潮水を供えて読経（南海老海岸
R4. 3. 26）



写真7 虚空蔵堂に戻る（R4. 3. 26）

7. 南相馬市 鶏足神社

(1) 神社の概要

名称／鶏足神社

所在地／南相馬市鹿島区北海老字林崎107

由緒／鶏足神社のある場所は、泥土煮尊という神が被っていたトサカの冠を落としたところとか、地域の人びとを苦しめた大雨を鶏がとめ、その足跡が残されていたという伝説からこの名がついたともいわれている。延喜式内社の「冠嶺神社」はこの社であるともいわれる（鹿島区上栢窪の冠嶺神社や原町区信田沢の冠嶺神社も推定地に挙げられている）。

(2) 祭りの名称

御浜下、御浜降、オサガリ

(3) 祭りの由来

(4) 祭日

12年ごとの酉年4月はじめまたは4月8日。近年は3月末に移行している。直近の平成29年（2017）のオサガリは3月25日が神輿渡御の本祭り、翌26日は御開帳と奉納芸能のムラマワリであった。平成5癸酉年（1993）、同17乙酉年（2005）のオサガリ本祭りは3月26日の土曜日に催行された。

(5) 伝承団体

「お浜下り遷宮祭祭典委員会」を設ける。祭典委員長は鶏足神社総代長、副委員長は総代3人、受付会計も総代2人、ほかに北海老、南海老、港の区長で構成し、当社を兼務する伊勢大御神（通称：シモノダイジングウ）宮司も加わる。

(6) 神幸経路（図1）

神幸地／南海老字蛭沼の浜（通称：高屋釜の浜）

神幸経路／北海老・南海老集落内。順路の三差路や丁字路、地区境などには「建場」を設ける。建場には竹杭に「建場」と墨書した木札を下げ、平成23年（2011）の東日本大震災で被災する前の平成17年（2005）のオサガリでは、北海老の大畑→藤金沢溜池下→T家前→宝蔵寺入口（町場、北海老公会堂前とも）→北海老バス停前（OZ家前）→南海老大森（大字界）→南海老北町（N家前）（写真1）→北海老磯ノ上大字界（写真2）→H家前→金砂神社前と10の建場を設けた。

浜の祭場の神事、昼食後の復路は竹駒神社前建場（中谷地）に立ち寄り還御した（写真3）（図1では主要建場以外省略）。平成5年（1993）のオサガリでは、さらに6か所の建場が加わっていたように、遷宮祭により「建場」の数には増減がある。浜側の人家が流失した平成28年（2016）には建場の数は減少している。かつては相馬市境の釜舟戸にも建場があった。

(7) 祭りの内容

潮水の扱い／区長が祭場で白装束に着替え、新しい桶を持って御使番と警固の先導を受け、胸のあたりまで海に入り、桶に潮を汲む。潮を汲むことを「潮垢離をとる」（写真4）という。口に紙をくわえ神前に進み、神職に桶を渡し、神職が神前に供える（写真5）。平成28年は消波ブロックの間から汲んだ。

実施内容／平成29年の祭りでは、社殿で神事をして、ご神体を神輿に移す。境内では南海老の大蛇神楽、北海老の万作踊（写真6）、綾踊、北海老の子ども手踊（写真8）、南海老の子ども手踊（写真9）の順で芸能を奉納。その後、祭典委員長の指示で列順を整え行列を編成して午前9時に神社を出て浜に向かった。



図1 鶏足神社の神幸経路（平成17年3月26日）

配役を平成5年の「鶏足神社お浜下り遷宮祭列帳」に従って示せば、以下のとおりである。なお、（ ）内は人数。

御使番 (3)、御先警固 (3)、御先払 (3)、大旗 (3)、五色旗 (青黄赤白黒各2)、大麻 (2)、大榊 (2)、五色大榊 (2)、鉾 (2)、神弓 (2)、小榊 (人数不明)、御神楽 (南海老大蛇神楽)、子供御使番 (15)、踊 (南海老手踊、港手踊、北海老万作踊、北海老手踊 (2組)、五色 (青黄赤白黒各2)、御神酒 (2)、赤飯 (2)、野菜 (2)、海菜 (2)、掛魚 (2)、菓子 (2)、塩 (2)、副神官 (1)、馬添 (1、神職は乗馬するので馬添がつく)、稚児 (人数不明)、螺役 (3)、神鏡 (総代、区长)、御棟札 (総代、区长)、神幣 (1)、金幣 (1)、鉾 (2)、御神輿警固 (2)、御神輿 (12)、御神輿警固 (2)、五色大榊 (2)、大榊 (2)、神官 (1)、馬添 (1)、押 (3)、後旗 (3)、御押警固 (2) と並んだ。祭典委員長 (総代1)、副委員長 (総代3)、受付会計 (総代2)、北海老、南海老、港区長 (各1) などの役職は紋付羽織袴姿で役を担う。神輿は白の上衣、白ズボン、白足袋の担ぎ手がリヤカーに載せてひく。

行列は全行程徒歩であった。行列配役や経路は平成17年も同様で、平成29年のオサガリもこれを踏襲している。

建場では神輿を止め、集まった地区の人が神輿を拝み、お供の芸能を見物する。高屋釜の浜では、堤防と背後の松林の間の砂浜の広場に四角に竹矢来を組み、祭場を設営する。一行が到着すると、竹矢来の内側に海に向けて神輿を据えて神事が始まる。礼螺 (法螺貝の吹鳴) のあと、潮水を汲んで神輿に供える「御潮垢離奉納」が続く。修祓、祝詞奏上など一連の神事のあと「御神楽、踊奉納」となる。東日本大震災以前のオサガリの祭場では、集落の人たちも大勢集まり、昼食をとりながら奉納する芸能を見物した。

浜での行事を終えると帰路につく。途中の竹駒稻荷神社の建場では往路の先陣と後陣を入れ替えて還御する決まりになっている。神社に到着するとご神体を本殿に納め、潮水の入った桶も供える。

翌日は御開帳で、お供の芸能は神社に奉納したあと、芸能の組ごとに、終日大字内の各家を門付けして歩く。これをムラマワリと称し、各家では訪れてくる組に「お花」を奮発する。

平成28年は午前7時、9時に神輿渡御開始、10時宝蔵寺入口、11時磯ノ上大字界、12時祭場到着、潮垢離神事、神楽・踊奉納。その後、自家用車等で神社に還御しご神体を本殿に納め、翌26日は各芸能組が朝から震災後新しくできた住宅団地を含めムラマワリをした。

(8) 祭礼の状況

平成29年の祭りは東日本大震災後初のオサガリであった。東日本大震災では、海に面した南・北海老集落は津波で甚大な被害を受け多くの犠牲者が出た。北海老の港地区は全戸流失し、南海老の北町、南町、釜前、蛭沼、中谷地の人家もほとんどが失われ、鶏足神社の足元まで津波が押し寄せた。多くの家に移転し、氏子の数も減ったなかでの祭礼は開催も危ぶまれたが、住民と総代の尽力で実施できた。神輿が渡御する南海老の北町、南町、中谷地は人家や小祠が流失して荒地に変わり、祭場の高屋釜周辺の松林も失われた。新たに高い防潮堤が海側に築かれたため、海と隔離されたなかでの潮垢離神事になり、見物人も少なかった。

少子高齢化、地区内人口の減少が続くなかで、次の西年に同規模のオサガリができるかどうか、課題を抱えたままである。

(9) 芸能等

南海老大蛇神楽・万作踊・手踊／大蛇神楽を伝えた子孫、南町のK家が神棚に古い獅子頭を保管していたが、明治時代末にK家は北海道に移住したため、後年屋敷地を譲り受けたO家が屋敷地内に祠を設けて大蛇神楽関係の文書などと共に保管したという。しかし、東日本大震災の津波で一家の人が流され、すべての資料が失われた。詳しい経緯は『鹿島町史』第6巻 民俗編に譲るが、寛政8年(1796)の北海老牛頭天王浜下り時には存在が確認できる古い神楽で、青年会で継承してきた。

南海老の大蛇神楽を除き、手踊や万作踊などはオサガリに奉納するために大字内の子どもや若者たちが臨時に編成した芸能組である。数か月前から踊りや歌の師匠を頼み大字の公会堂などで練習を重ねる。祭礼で奉納するとともに、翌日の御開帳の日は門付けに回る。地域社会と浜下りとの結びつきが分かる。

(10) 関連資料

- ① 天明2年(1782)4月23日「鶏足大明神正遷宮烈帳」
- ② 文化5年(1808)9月「鶏足権現萱替諸入方控帳」

鹿島町史編纂委員会『鹿島町史』第6巻 民俗編(2004)

資料解説 『奥相志』^{おうそうし}によれば、遠古の祠官は宮崎亀太夫、江戸時代には紺野氏が代々相続して、江戸時代末は紺野河内正。一方、資料①の参列者から、当時の司祭者は鈴木出雲守で、大蛇神楽、笛、太鼓などの諸芸奉納が行われていたことがうかがえる。資料②からは、当時の堂宇が萱葺であったこともわかる。

参考文献・資料

相馬市史編纂会編『奥相志』(『相馬市史』4 資料編1 1969)

小嶋尚撮影 8ミリ・DVD『北海老 鶏足神社のお浜下り』(1981)

南相馬市『鹿島町の神社と仏閣』(2009)

佐々木長生「浜下りと大震災」『季刊 東北学』第29号 東北芸術工科大学東北文化研究センター(2011)

南相馬市博物館企画・榎福島映像企画制作 DVD『鶏足神社の浜下り』(2017)

【二本松文雄・岩崎真幸】



写真1 南海老の大蛇神楽 (北町建場 H17. 3. 26)



写真2 磯ノ上大字界の建場で芸能の奉納 (H29. 3. 25)



写真3 神幸行列 (帰路) (南海老宇大森 H17. 3. 26)



写真4 汲んだ潮水を運ぶ (浜祭場 H17. 3. 26)



写真5 潮水を供えて神事 (浜祭場 H17. 3. 26 南相馬市博物館)



写真6 北海老の万作踊 (浜祭場 H17. 3. 26 南相馬市博物館)



写真7 北海老の子ども手踊 (北町建場 H17. 3. 26 南相馬市博物館)



写真8 南海老の子ども手踊 (浜祭場 H17. 3. 26 南相馬市博物館)

8. 南相馬市 御刀神社

(1) 神社の概要

名称／御刀神社

所在地／南相馬市鹿島区北右田字 劔ノ宮112

由緒／御刀神社は延喜式内社に比定されており、日本の劔社三社のうちの一社と称されてきた。延喜5年（905）に御正体を収め、国家鎮護の神としたという。御正躰は鏡と劔で、大社であったが後世になって小祠となり、社田も失ったという。

『奥相志』によれば、江戸時代末には古代の劔が秘蔵されていたという。元禄2年（1689）に社殿が修復され、正徳2年（1712）、中村藩主相馬尊胤がこの神社の由緒を確認し、社田5石3斗を寄進してから里民の信仰が高まった。

(2) 祭りの名称

遷宮祭、お下がり、浜下り

(3) 祭りの由来

—

(4) 祭 日

12年ごとの子年、4月15日。

(5) 伝承団体

伊勢大御神（通称：シモノダイジングウ）宮司、北右田地区・南右田地区の人びと。

(6) 神幸経路（図1）

神幸地／南海老字蛭沼の浜（通称：高屋釜の浜）だったが、近年は南右田海岸。

神幸経路／御刀神社→北右田→南右田→祭場。



図1 御刀神社の神幸経路（令和5年4月19日）

(7) 祭りの内容

潮水の扱い／区長などの代表が潮垢離をとり（写真1）、潮水を神前に供える。

実施内容／神職2人が馬に乗り神輿の前後を守護し、南右田海岸まで渡御（写真2）。

神幸途中で休む建場は5、6か所あり、神楽と手踊を奉納した（写真3）。浜祭場には竹矢来を組み、その中に神輿を安置した（写真4）。その後、各種の芸能を奉納してから還御した。

(8) 祭礼の状況

以前は北右田と南右田の各戸が参加したが、平成8年（1996）4月14日の催行時にはほとんど北右田の氏子だけになった。

平成23年（2011）3月11日の東日本大震災では、海岸から約1.8キロメートルの低湿地に位置する御刀神社は、南右田・北右田集落とともに津波で壊滅的な被害を受けた。鎮守の杜だけが広大な平原の中に島のように残ったが、社殿は鎮守の杜の中に打ち寄せられた瓦礫の下敷きになって倒壊した（写真5）。

震災からの復興途上、令和2年（2020）には新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の流行のため、祭りの規模を大幅に縮小し、役員と神職で神事のみを行い（写真6）、神幸・芸能の奉納は中止した。

(9) 芸能等

神 楽／従来は、大蛇神楽。一体の神楽を北右田・南右田で共有しているが、御刀神社の祭礼の時は北右田が舞う。

手 踊／従来は、北右田の子ども手踊も奉納した。

(10) 関連資料

—

参考文献・資料

相馬市史編纂会編『奥相志』（『相馬市史』4 資料編1 1969）

鹿島町史編纂委員会『鹿島町史』第6巻 民俗編（2004）

南相馬市『鹿島町の神社と仏閣』（2009）

【二本松文雄】



写真1 潮垢離をとる（南右田海岸 H8. 4. 14 南相馬市博物館）



写真2 渡御の行列（御刀神社 H8. 4. 14
南相馬市博物館）



写真3 建場で大蛇神楽の奉納（H8. 4. 14
南相馬市博物館）



写真4 浜祭場での神事（南右田海岸
H8. 4. 14 南相馬市博物館）



写真5 平成23年の東日本大震災で集落は壊滅的な被害を受けた。社殿は流れ寄った瓦礫の下敷きになり、鎮守の社だけが残った（R5. 4. 19 南相馬市博物館）



写真6 社殿跡地に小さな祠を再建し、役員と神主
で神事のみ催行（R5. 4. 19 南相馬市博物館）

9. 南相馬市 津神社

(1) 神社の概要

名称／津神社

所在地／南相馬市鹿島区 烏崎^{からすぎき うしじま}字牛島595（東日本大震災前）

南相馬市鹿島区烏崎^{みなみやち}字南谷地4（震災後の再建地）

由 緒／津神社は真野川河口の入江を利用した真野川漁港に面し、漁業の神として信仰されていた。

祭神は大綿津見神（綿津見大神）。江戸時代の別当は大内村の光福院。

しかし、平成23年（2011）の東日本大震災の津波で、烏崎地区の民家や漁船とともに社殿を流失した。震災後、烏崎地区は災害危険区域に指定され、南谷地に烏崎公会堂を新築し、公会堂敷地の一角に津神社を遷座した。

(2) 祭りの名称

お浜下り（おはまくだり・おはまおり）、お下がり、御潮垢離が訛って「オショゴリ」ともいう。

(3) 祭りの由来

鎮座来歴不詳だが、創建は江戸時代初期といわれている。近年では、昭和59年（1984）に本殿・幣殿・拝殿を改築した。春の例祭に、神輿が烏崎浜に渡御し、家内安全、海上安全、大漁満足を祈願する。

(4) 祭 日

江戸時代には丑年の旧3月18日。近年は丑年の4月8日に変わり、さらにその前の土曜日か日曜日になった。

(5) 伝承団体

日吉神社（Ⅱ-4）宮司、烏崎地区・大内地区の人びと。

(6) 神幸経路（図1）

神幸地／烏崎浜

神幸経路／津神社（写真1）→相馬双葉漁業協同組合鹿島支所・牛島→石崎→浜→町→戸屋→南入→街並みの南端から防潮堤を下りて浜に出る→烏崎海浜公園・浜矢来（浜祭場）→津神社

(7) 祭りの内容

潮水の扱い／潮垢離神事では、烏崎区長が白装束になり、潮水に息がかからぬよう口に紙をくわえて海に入り、新しい桶に潮水を汲んで浜矢来（浜祭場）で神輿に供える（写真2・3）。

実施内容／東日本大震災前、烏崎行政区は戸数150～160戸、隣組は16組あった。祭りには烏崎の区長、氏子総代、漁協組合長、農協組合長、大内の区長、氏子総代、原町火力発電所本部長ら多くの人びとが集まった。神社での神事のあと、神輿を担いで烏崎地区内を巡り、烏崎海浜公園から浜に下りた。浜には竹矢来を組んだ浜矢来（浜祭場）に砂を盛った祭壇を設け、神輿を安置する。潮垢離神事ののち、浜矢来の中で諸芸奉納を行い、神社に戻る（写真4）。

烏崎の神社に限らず、烏崎浜でオショゴリ（お潮垢離）するお浜下りは、大内の大光溜池^{だいこう}から浜までの行事は浜格（烏崎地区）が取り仕切るのがしきたりで、それを守らないと浜を貸さない。つまり、烏崎地区の祭の作法で執行しなければ、浜での祭礼を認めないという不文律があった。

翌日の御開帳では、御開扉、神事、諸芸奉納、直会のあと、御閉扉が行われる。

(8) 祭礼の状況

相双地方の漁業協同組合が合併する前、鹿島漁協では嫁不足対策として日曜定休とした。

平成23年に起きた東日本大震災の津波で烏崎地区の民家は約9割が流出し、家を再建できない災害



図1 津神社の神幸経路（平成21年4月5日）

危険区域に指定されたため、地域外に移転した家が多い。烏崎の公会堂や津神社、八竜神社（Ⅲ-10）が流失したため、震災後は南谷地に公会堂を新築し、その一角に両社を遷宮した。現在は2社合同で祭礼を行っている。震災後のこうした状況から神事のみ行い、神幸や諸芸奉納は中断している。

（9）芸能等

祭礼当日の諸芸奉納は神幸前の境内と浜矢来の祭場の中、翌日の御開帳に奉納される。小島田の神楽や大内の万作踊が奉納されたほか、2台の山車が供奉する。1つは浦舟の上に張り子の鯨くじらを乗せたもの、もう1つは直径1.5メートルほどの張り子の蕪かぶで、「浜大漁おおか、陸万作」を表すといわれる。

烏崎は真野川漁港を擁する半農半漁の集落で、鯨は大漁満足、蕪は豊年満作を象徴する縁起ものである。いずれの山車も四つ車に乗せ、鯨は10歳前後の男子が、蕪は同年齢の女子がそれぞれ10数人ずつついて引く（写真4・5）。唄は30歳前後の男性2人が、山車の舵を取りながらうたう。

鯨や亀は豊漁をもたらす寄り物として、日本各地で漁民の信仰を集めている。烏崎でも同様に、社殿裏に「鯨大明神」「亀明神」を祀った碑があった。明治29年（1896）に鯨が寄り付き、付近の人びとはその恩恵に預かり「鯨大明神」の供養塔を建て、鯨の霊を祀るとともに大漁を祈願した。しかし、東日本大震災の津波に遭い、社殿も碑も失われてしまった（写真6）。

烏崎には北組、中組、南組の3組の子ども手踊があり、小学生以下の女子に男子が少し加わることもあった。しかし、東日本大震災の津波で、手踊の衣装や道具がすべて津波で流された。

平成25年（2013）には衣装や道具を新調し、烏崎ひと組として一時復活したが、現在は休止している（写真7）。多くの住民が移転したため、「烏崎の子ども手踊」として残していくことは容易ではない。

（10）関連資料

南相馬市教育委員会 DVD『第6回 南相馬市 民俗芸能発表会』[出演：鯨引き（烏崎行政区）ほか] 平成23年2月6日 南相馬市民文化会館（ゆめはっと）にて開催。

参考文献

相馬市史編纂会編『奥相志』（『相馬市史』4 資料編1 1969）
福島県立博物館『福島県立博物館調査報告第28集 福島県における浜下りの研究』（1997）
川島秀一『漁撈伝承』ものと人間の文化史109 法政大学出版局（2003）
鹿島町史編纂委員会『鹿島町史』第6巻 民俗編（2004）
南相馬市博物館企画展図録 第24集『自然の恵みと祭り 一海と川一』（2006）
南相馬市『鹿島町の神社と仏閣』（2009）
佐々木長生「浜下りと大震災」『季刊 東北学』第29号 東北芸術工科大学東北文化研究センター（2011）
藤井弘章「東北地方太平洋岸のウミガメの民俗—東日本大震災後の追跡調査を踏まえて」『民俗文化』第25号 近畿大学民俗学研究所（2013）
福島民友新聞社『ふくしまの民俗芸能—ふるりの誇り ふたたび—』（2015）

【二本松文雄】



写真1 東日本大震災前の真野川漁港と津神社（烏崎字牛島 H21.4.5 南相馬市博物館）



写真2 潮垢離（烏崎海岸 H21.4.5 南相馬市博物館）



写真3 神輿の神前に潮水を供える（烏崎海岸 H21.4.5 南相馬市博物館）



写真4 浜矢来（浜祭場）（烏崎海岸 H21. 4. 5 南相馬市博物館）



写真5 鯨引き（津神社 H21. 4. 5 南相馬市博物館）



写真6 蕪引き（烏崎海岸 H21. 4. 5 南相馬市博物館）



写真7 鯨大明神碑（中央）・亀明神碑（右）・金刀比羅神社碑（左）。東日本大震災の津波で流失（津神社 H21. 4. 5 南相馬市博物館）



写真8 烏崎南組子供手踊・籠馬（手前）（津神社 H21. 4. 5 南相馬市博物館）

10. 南相馬市 八竜神社

(1) 神社の概要

名称／八竜神社 通称：ハチリュウサン

所在地／南相馬市鹿島区烏崎字戸屋（八竜山）（東日本大震災前）

南相馬市鹿島区烏崎字南谷地4（東日本大震災後）

由緒／集落の南方に小山がある。江戸時代には八竜神祠があったので、八竜山といった。江戸時代の別当は大内村本山派修験光福院。

(2) 祭りの名称

お浜下り、お下がり。

(3) 祭りの由来

神仏分離令以前、大内村本山派修験の光福院が別当を務めた。春の例祭に、ご神体の渡御があり、神輿が浜に渡御し、浜の祭場に神輿を安置する。神輿の前に桶に入れた潮水を奉納し、海上安全・大漁満足を祈願した。

(4) 祭日

江戸時代には旧4月8日。現代は毎年4月第1日曜日。

(5) 伝承団体

日吉神社（Ⅱ-4）宮司、烏崎地区の人びと。

(6) 神幸経路（図1）

神幸地／烏崎浜

神幸経路／八竜神社（八竜山・八龍山）（写真1）→烏崎地区南半（写真2）→烏崎字町と字浜の境の防潮堤から海岸に下りる（写真3）→正面の海岸が浜祭場（写真4～6）→烏崎字町と字浜の境の防潮堤→八竜神社（写真7）。

(7) 祭りの内容

潮水の扱い／お潮垢離が訛って「オショゴリ」と称した。烏崎区長が新しい桶で潮水を汲み、浜祭場で神輿の前に供えた。

烏崎の神社に限らず、烏崎浜でオショゴリするお浜下りは、大内の大光溜池から浜までの行事は浜格（烏崎地区）が取り仕切るのがしきたり。それを守らないと浜を貸さない。つまり、烏崎の祭のしきたりに従わないと、烏崎浜での潮垢離など浜祭場での行事に浜を使用できないということである。

実施内容／平成23年（2011）の東日本大震災前、烏崎行政区は戸数150～160戸、隣組は16組あった。祭りには隣組長が集まり、神社では特にお祓いは行わず、神輿を担いで八竜山を下り、すぐに浜に下りた。

震災以前に防潮堤ができてからは、防潮堤の上を少し北上すると浜に下りられる所があり、そこから浜に出た。浜にタケを4本立て、注連縄を巡らせて浜祭場とし、神輿を安置した。その後、潮水を供え、修祓、玉串奉典を行った。浜での神事が終わると、八竜神社に戻ったが、神社では特に神事はしなかった。

(8) 祭礼の状況

祭礼の内容も時代とともに変わってきた。相双地方の漁業協同組合が合併する前、鹿島漁協では嫁不足対策として日曜定休とした。しかし、以前の八竜神社の祭日は日にち指定だったので平日になることが多く、若い人たちが祭りに参加できなくなっていた。

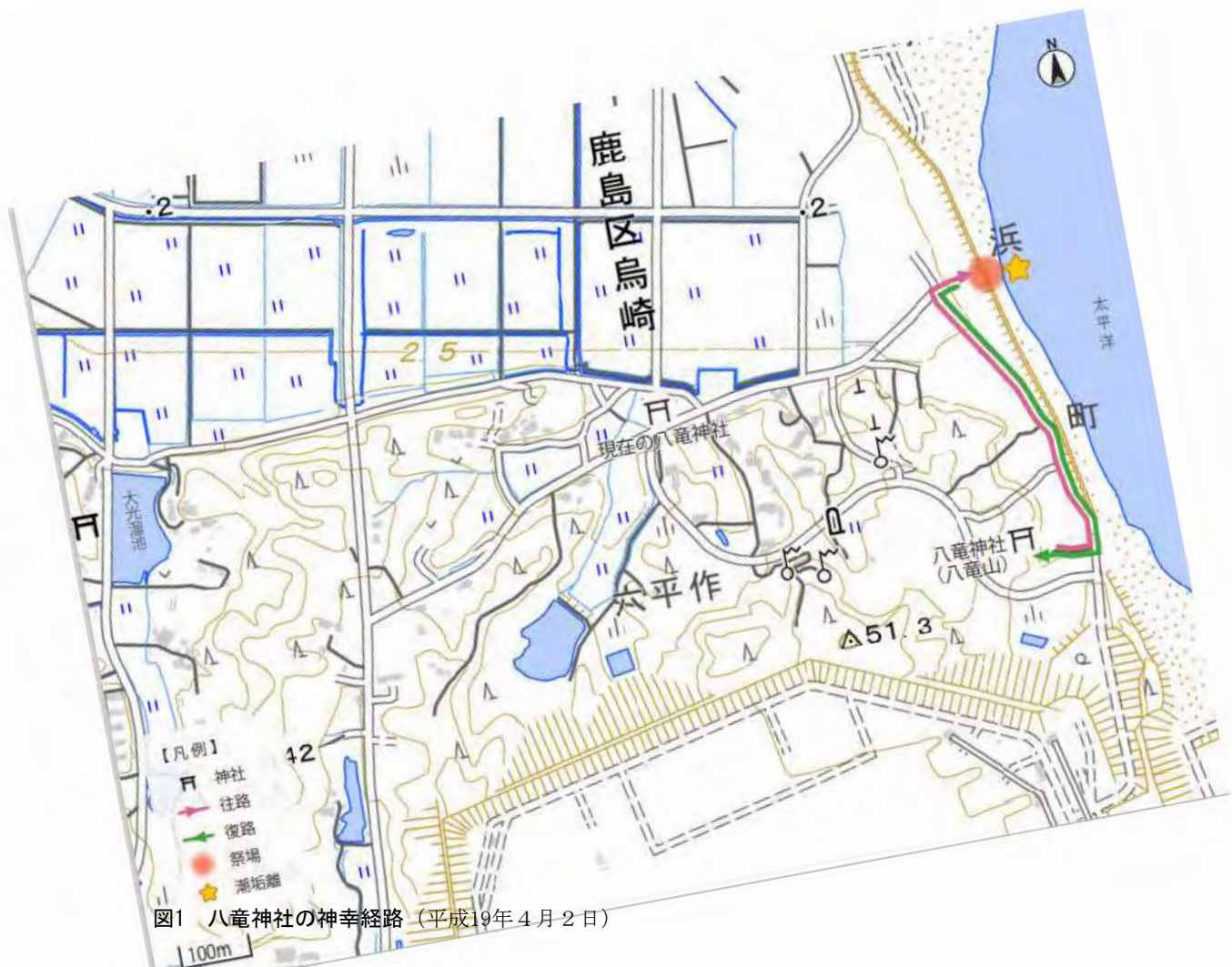


図1 八竜神社の神幸経路（平成19年4月2日）

その後、津神社（Ⅲ-9）の毎年の例祭と八竜神社の毎年のお浜下りを4月第1日曜日に行うようになった。八竜神社のお浜下りは9時頃から漁協の船主に出てもらい、津神社の例祭は八竜神社のお浜下りが終わって11時頃から烏崎行政区の役員だけで神事のみ行うことにした。津神社のお浜下りは、別途12年ごとの丑年に行っている。

東日本大震災の津波で烏崎公会堂や津神社、八竜神社が流失し、震災後に南谷地みなみやちに公会堂を新築、その一角に両社を遷宮した。現在は2社合同で祭礼を行っている。

(9) 芸能等

—

(10) 関連資料

—

参考文献

相馬市史編纂会編『奥相志』（『相馬市史』4 資料編1 1969）

南相馬市『鹿島町の神社と仏閣』（2009）

佐々木長生「浜下りと大震災」『季刊 東北学』第29号 東北芸術工科大学東北文化研究センター（2011）

佐々木長生「四月八日と浜下り ―相馬地方の八竜神の浜下りを中心に―」（日本風俗史学会東北・北海道支部『日本風俗史学会東北・北海道支部 研究紀要』第4号 2022）

【二本松文雄】



写真1 神輿が神社を出る (H19.4.2 佐々木長生氏) 右
上角補正



写真2 地区内を神幸する神輿 (鳥崎字浜 H19.4.2 佐々
木長生氏)



写真3 神輿が浜に下りる (H19.4.2 佐々木長生氏)



写真4 浜祭場で神事 (H19.4.2 佐々木長生氏)



写真5 潮水を汲む (2007.4.2 佐々木長生氏)



写真6 神輿に潮水を供える (H19.4.2 佐々木長生氏)



写真7 神輿が神社に戻る (H19.4.2 佐々木長生氏)

11. 南相馬市 男山八幡神社

(1) 神社の概要

名称／男山八幡神社

所在地／南相馬市鹿島区寺内字八幡林 256

由緒／『奥相志』「寺内邑」によれば「八幡宮」の由来は次のとおりである。建武中（1334～38）、国司の源頭家（北島頭家）の一族、真野五郎は伊達郡の桑折から真野郷に移った。横手村にいた真野五郎の三男真野三郎は岩松義政を嗣（跡継ぎ）として千倉ノ庄、山中の1000町を領した。三郎はのちに寺内村に隠栖し、八幡と諏訪を祀って守護神とした。この神は妊婦を守る神といわれ、祈る者は安産するという、というものである。

別な由緒もある。文徳天皇の治世、藤原興世が陸奥守となり当地に住したが、奥羽2州の国守となって羽州に移った。貞観年中（859～877）、興世はこの地に隠棲し、大きな邸を設け真野長者と呼ばれるようになった。山城国から男山八幡をこの地に勧請して国土安穩、婦女安産、嬰兒堅固を祈ったという（『鹿島町の神社と仏閣』）。

本山派修験伝法院が別当であったが、神仏分離以降西綾成が八幡神社の社掌を務めた。明治7年（1874）に寺内、小池、榎原3か村の村社になり、昭和2年（1927）には郷社になった（『鹿島町の神社と仏閣』）。

(2) 祭りの名称

男山八幡神社のオサガリ、男山八幡神社お浜下り遷宮大祭

(3) 祭りの由来

12年ごと戌年にオサガリをする。オサガリに関する由来については不明。

(4) 祭日

オサガリの日には決まっていないが戌年の春に行われる。旧暦3、4月というが、残された列帳によると、昭和に入ると新暦4月中に実施されている。なお、春季例祭は4月5日、秋季例祭は11月23日。

ここでは直近のオサガリである平成30年(2018)戊戌4月7日土曜日、翌8日の祭りを取り上げた。

(5) 伝承団体

男山八幡神社宮司を含め、男山八幡神社遷宮大祭執行委員会が主体となって祭りのいっさいを行う。委員会は寺内、小池、榎原、牛河内、岡和田の4集落の氏子総代、区長、宮司らによって組織し、氏子総代（祭典総代を兼ねる）のなかから全体を統括する総裁、副総裁などの役職を選出する。

男山八幡神社からの行列は堤下建場から大字烏崎に入ると行列の管理は「浜格」と呼ばれる烏崎集落に委ねられるという決まりがあり、大字烏崎でも、区長を中心に受け入体制を整えている。

(6) 神幸経路 (図1)

神幸地／烏崎浜

神幸経路／神社の参道から県道267号に出て、東方に進む。「福装鹿島」手前を南に折れ江垂へ。烏街道を東進し小島田を通って安の子橋を渡る。橋から100メートルほど進んで南に折れて大内集落へ。出榎下堤前を東進して烏崎に入る。平成23年（2011）の東日本大震災前は烏崎集落内で建場を設けたが、津波で烏崎の集落が跡形もなくなったため、真野川漁港を通り、海浜公園から烏崎の浜の祭場に出る。帰路は大内の集落に立ち寄らず、海浜公園から神社に還幸する。建場は江垂十文字（江垂総合研修センター）、小島田公会堂（消防屯所）、大内堤下（出榎下堤の土手の下で、烏崎村との境になる）の3か所に設けた。

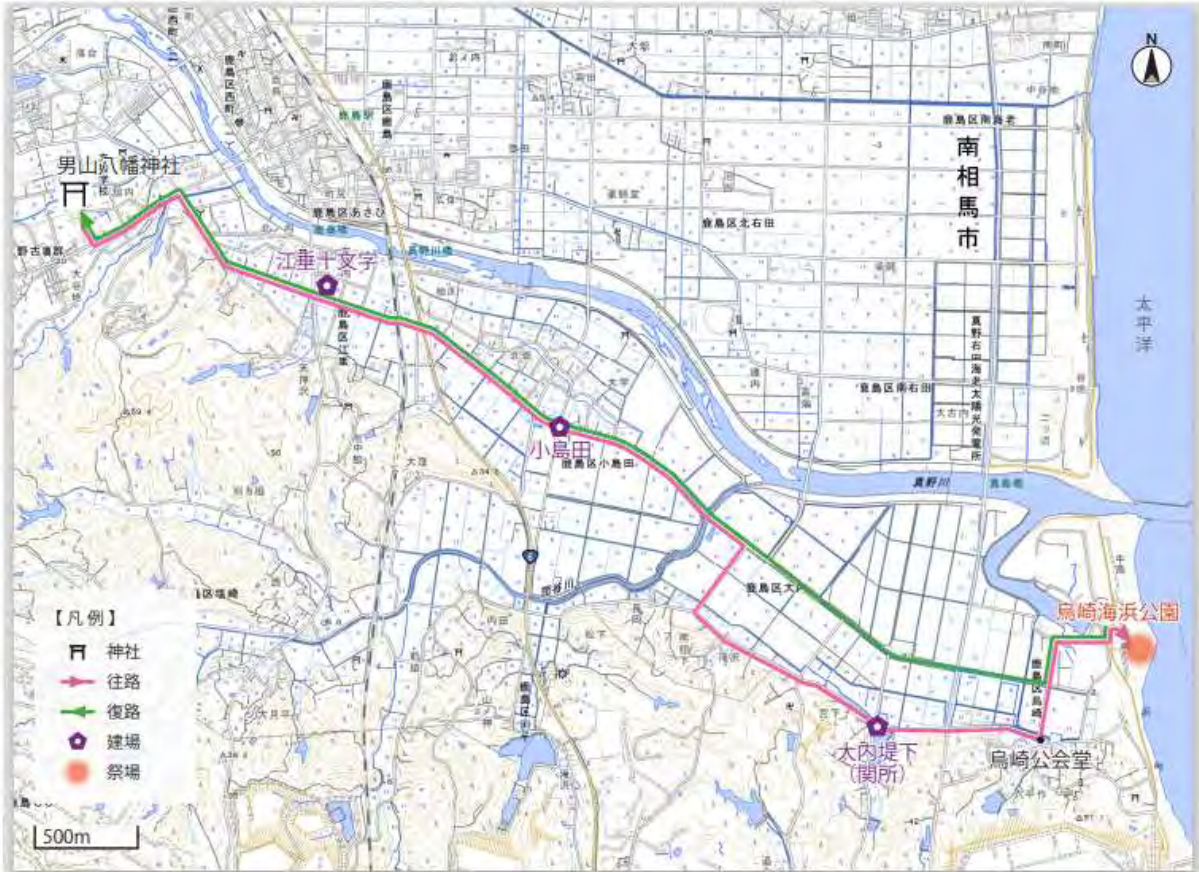


図1 男山八幡神社の神幸経路 (平成30年4月7日)

(7) 祭りの内容

潮水の扱い／桶に潮水を汲んで神輿の神前に供える。

実施内容／潮堀離は、あらかじめ神職が浜を祓い、白装束に着替えた烏崎の区長が注連縄をつけた桶を受け取り、警護役の先導で波打ち際から海に入って、波を3つ越したあたりまで進んで潮を汲む。汲んだ桶を捧げ持って祭場に戻り、神職に手渡す。受け取った神職はそれを神前に供える。

祭りの前までに浜格の烏崎集落では竹矢来を回し、幟を立てて浜の祭場を整備しておく。また、男山八幡神社の氏子は神社の掃除や旗立てをして準備を終えておく。

4月7日は午前5時に花火を打ち上げて知らせ、午前6時に関係者や各集落の「お供」が集合する。午前7時に社殿で神事。役職者は袴に袴、白足袋で列席（行列では笠を被る）。また、大字の役職者は紋付羽織に袴。「若殿」役は陣羽織に馬袴姿。社殿内でご神体を神輿（鳳輦）に移し、3人の法螺役の法螺貝の合図で神輿を外に出す（写真1）。神輿の担ぎ手は白装束に烏帽子、草鞋履き。

総裁の挨拶のあと祭典総代が、「列帳」に基づき行列の配役と列順を読み上げる。行列は大字単位に組織されており、これを「お供」と称する。取り決めたとおり、先陣は大字岡和田、二番が小池・榑原、三番寺内（牛河内、浮田、小山田、上寺内、大内を含む）、四番江垂、五番が鹿島の順になる。帰路はこれとは逆に、先陣は鹿島が務める。

列帳には行列の順序と氏名が記されているが、氏名は（ ）内に人数で示した。

岡和田村印世話人(2)、村印持(2)、岡和田禰持(1)、小池村印世話人(2)、村印持(2)、御先払(1)、御徒士(2)、祭典係(1)、神官(1)、口取(1)、小池獅子踊世話人(3)、踊引き(1)、笛(5)、踊(4)、籠持ち(2)、列奉行(2)、籠長持(2)、御押(2)、寺内村印世話人(2)、村印持(3)、前駆(2)、道祖(1)、江垂神楽会長（祭典組頭1）、江垂神楽副会長（副祭典組頭1）、祭典組(10)、若殿付御徒士(1)、御殿(1)、口取(2)、武者(3)、大旗(3)、下町子供手踊世話人(2)、笛(1)、太鼓(1)、踊子(13)、傘持

(1)、神官(1)、口取(2)、相馬流山踊ジュニアの会世話人(2)、師匠(1)、太鼓(1)、踊子(8)、寺内大蛇神楽会長(1)、師匠(1)、笛(2)、太鼓(2)、神楽(4)、小旗(3)、稚児引き(2)、稚児(4)、大麻(2)、中榊(2)、大榊(7)、五色榊(3)、若人(2)、五色旗(5)、法螺(5)、供物(7)、塩水(2)、榊箱(4)、錦旗(2)、神幣14、金幣(16)、宝幣(2)、神鏡(1)、御棟札(3)、神官(1)・口取(1)、御神輿(13)、御神輿脇(総代5)、神官(1)、口取(1)、立傘(2)、御徒士(1)、鈇箱(2)、烏毛(1)、御弓(2)、御押(1)、御使番(総裁付と部落付2)

このほか台所世話人(3)、用具などの運搬(4)、堤下建場で待ち受ける浜格側の役職は次のとおりである。烏崎祭典区長(1)、祭典取締(2)、祭典元締(2)、御先警固(2)、警固(4)、氏子総代(2)、隣組長(2)。

参道に整列し午前8時に行列は神社を出発する。最初の建場まで行列は徒歩で向かう(写真2)。神職は口取が付いた馬に乗る。「神幸経路」(図1)に示したように、祭場までの道筋には江垂、小島田、大内それぞれに「建場」と称するお旅所を設けており、大字の公会堂や消防屯所の広場が建場になる。斎竹いみだけのなかに神輿を据え、広場でお供してきた芸能を奉納する。

江垂十字の建場(午前8時30分)では法螺役が法螺貝を吹奏し、芸能の奉納に移る。小池獅子踊、江垂の神楽、鹿島下町子供手踊、流山踊、寺内大蛇神楽の順で奉納して、小島田の建場に向かう。小島田の建場には午前9時過ぎに到着し、屯所の広場で同様に芸能の奉納があった。大内堤下の建場は、大字大内と烏崎の大字境になっており、浜格の烏崎の役員と警護役が行列の到着を待ち受けている。役員は黒紋付の羽織袴姿、警固役は股引に緋の着物を尻端折りにして豆紋の手拭を首にかけ、手には青竹の棒を持つ。

平成30年は小島田、堤下建場からはバスに分乗して移動し、建場近くで下車して徒歩で向かった。先陣の岡和田の行列が堤下に到着したのは午前10時50分頃。すべての行列が揃うと、神社側の総裁と浜格の祭典区長との間で、行列の受け渡しの口上が交わされる。そのあと浜格の役員は、手元の列帳をもとに行列の吟味をする。青竹の警固棒を持った警護役が、棒を交差させて道路をふさぎ、浜格の役員が列帳の役柄と名前を読み上げ、行列がそれと一致するかを確かめてから通す。列帳どおりに吟味するので時間がかかる。堤下建場を一行が通り終えたのは午前11時30分近くであった。

東日本大震災前のオサガリでは烏崎の集落内に建場を設けていたが、集落が津波で壊滅したため、昼食をとってから祭場に直接向かった。真野川漁港の相馬双葉漁業協同組合鹿島支所近辺にバスを止め、行列を組んで防潮堤を越えて烏崎の浜の祭場(烏崎海浜公園)に着いたのは午後12時30分であった。

烏崎浜の砂浜に直径40メートルほどの馬蹄形に矢来竹を組み、海側には「奉納男山八幡神社」の幟旗2本を立てて入り口とする祭場が設けられている。これは浜格、烏崎集落の責任で設営される。神輿は祭場奥の砂で築いた祭壇に安置し、供物を供え、旗や幣束、サカキなどの持物は神輿周辺に挿すなどして捧げ、行列の一行は祭場内で大字ごとに着座して祭場内で修祓を受ける。

その間、烏崎の区長は白装束に着替え、午後1時前神前で祓いを受けたあと注連を回した桶を受け取り、烏崎の御先警固や浜格役人の先導で、区長のみが海に入る。腰のあたりの深さ(波を3つ越えた深さといわれる)から潮水を汲み、桶を捧げ持って祭場に戻る。神前で宮司に桶を渡して神前に供え神事を行う。汲んだ潮を神輿に捧げ、祝詞奏上、玉串奉奠といった祭式を行う。海に入り潮を汲み、それを神輿に捧げる一連の行事を「潮垢離」と称している。

潮垢離に続き、お供の芸能の奉納がある。お供の人たちは祭場内の所定の場所に陣取って奉納する芸能を見学する。前回までは地元の烏崎の人びとや、氏子の家族が多数詰めかけて竹矢来の外から見物していたが、今回見物人は少なかった。

平成30年のオサガリには小池の小池三匹獅子踊(写真3)、江垂の獅子神楽、鹿島町の下町子供

手踊、鹿島の流山ジュニアの会による流山踊、寺内の寺内大蛇神楽がお供し、浜の祭場ではこの順に演目を省略せずに演じた。12年前の昭和57年（1982）のオサガリには江垂の神楽、鹿島下町四区子供手踊、小池三匹獅子踊、小島田の神楽、鳥崎北組子供手踊、寺内青年手踊の6組の芸能のほか、寺内の稚児60人弱、子供籠馬10人がお供しており、奉納する芸能の数やお供の人数は東日本大震災の前に比較すると減少している。

午後3時に芸能の奉納を終えると、神輿を祭壇から下ろし、再び行列を整えて還幸する（写真4）。浜の祭場からは行列順を往路と逆になる。今回は、神輿はトラックに積み、行列はバスを利用して還幸した。神社に神輿が戻ると、本殿（写真5）にご神体を移し、午後4時過ぎに還御の神事を執り行ってオサガリは終了した。次の4月8日は御開帳であったが、特段の行事はない。

（8）祭礼の状況

オサガリは12年という間を置くため、祭礼にはその時代の社会情勢が反映される。したがって、前回にならってはいるが、まったく同じかたちをとることはない

新型コロナウイルス感染症（COVID-19）が流行した令和2～4年（2020～22）には行われていないので、これによる直接的な影響はない。しかし、平成23年の東日本大震災の影響は甚大で、浜格として重要な役割を担ってきた鳥崎集落の大部分が津波で壊滅し、従来のような対応は不可能になった。同時に東京電力福島第一原子力発電所の事故による避難を契機とした転職、移転による影響も大きく、少子高齢化が急速に進展している。とくに芸能を育んできた「お供」の集落が、芸能の組織を維持できなくなる傾向が顕著にみられるようになり、成年のオサガリに向けての見通しも立てにくくなっている。

コロナ禍の間、練習を中止したり、奉納を省略したことで芸能継承のモチベーションが弱まっている。男山八幡神社の祭りに不可欠な小池の三匹獅子踊の中断はその余波を受けたものといえる。しかし、中断していた寺内の大蛇神楽のように、平成30年のオサガリを機に復活した例もある。

（9）芸能等

奉納する芸能は、その時々に応じて異なる。男山八幡神社のオサガリでは小池の三匹獅子踊は必ず奉納するものといわれている。平成30年のオサガリには5つの芸能の奉納されている。

- ① 小池の三匹獅子踊
- ② 江垂の神楽
- ③ 鹿島下町子供手踊
- ④ 相馬流山踊
- ⑤ 寺内の大蛇神楽

（10）関連資料

男山八幡神社では過去の列帳などを所蔵している。浜下りに関する資料は36点確認する。

男山八幡神社では「男山」と冠するようになるのは、列帳の大正11年（1922）からで、明治期までは「八幡神社」「大字寺内八幡神社」と称していた。最も古い記録は明治19年（1886）の「祭典入費調」と「御普請并御浜下二付集会決定録」である。

以下、男山八幡神社の浜下りに関する資料を一覧にまとめた。



男山八幡神社大祭典列帳類（一部）

No.	資料年代	西 暦	表 題
1	明治19年	1886	八幡社祭典入費調
2	明治19年	1886	御普請并御浜下二付集会決定録
3	明治43年	1910	八幡神社祭礼行列帳
4	明治43年	1910	大字鹿島八幡神社祭礼行列帳
5	明治43年	1910	八幡神社祭礼行列帳 上真野村岡和田
6	明治43年	1910	八幡神社烏浜へ渡御御列帳 大字小池榑原
7	明治43年	1910	大字寺内八幡神社浜渡御御列帳
8	大正11年	1922	男山八幡神社御祭礼御供列帳
9	昭和 9年	1934	男山八幡神社御神行列帳
10	昭和 9年	1934	郷社八幡神社祭典列帳
11	昭和 9年	1934	郷社男山八幡神社大祭典列帳 大字寺内
12	昭和33年	1958	男山八幡神社大祭典列帳
13	昭和33年	1958	男山八幡神社大祭典列帳 鹿島町
14	昭和33年	1958	男山八幡神社大祭典岡和田列帳
15	昭和33年	1958	男山八幡神社大祭小池列帖
16	昭和33年	1958	男山八幡神社大祭典寺内列帳
17	昭和33年	1958	男山八幡神社大祭神楽列帳
18	昭和33年	1958	男山八幡神社大祭横手列帳
19	昭和33年	1958	男山八幡神社御浜下祭典祭式参拝順番帳
20	昭和33年	1958	男山八幡神社大祭典寺内列帖
21	昭和33年	1958	男山八幡神社大祭典列帳鹿島町
22	昭和45年	1970	男山八幡神社大祭典列帳
23	昭和45年	1970	男山八幡神社特別祭典供奉列帳
24	昭和45年	1970	男山八幡神社大祭典列帳鹿島町
25	昭和45年	1970	男山八幡神社大祭典小池列帳
26	昭和45年	1970	男山八幡神社大祭典寺内列帳
27	昭和45年	1970	男山八幡神社祭典神楽列帳
28	昭和57年	1982	男山八幡神社お浜下り大祭列帳
29	昭和57年	1982	男山八幡神社特別祭典供奉列帳
30	昭和57年	1982	男山八幡神社お浜下り大祭列帳 鹿島祭典
31	昭和57年	1982	男山八幡神社お浜下り大祭列帳 岡和田
32	昭和57年	1982	男山八幡神社大祭典寺内列帳
33	昭和57年	1982	八幡神社祭典神楽列帳 小島田
34	平成 6年	1994	男山八幡神社お浜下り大祭列帳
35	平成18年	2006	男山八幡神社お浜下り大祭列帳
36	平成30年	2018	男山八幡神社お浜下り大祭列帳

資料解説 上記の一覧のうちNo.1と2は、オサガリの必需品や神社の屋根替の具体的な作業経過を示す珍しい資料である。また「お供」集落でもそれぞれの列帳を準備し、過去の列帳などの記録は大字文書として保管している。12年ごとの祭りは、記憶だけでは再現が困難で、前回の記録が不可欠であることを物語っている。これらの資料はすべて複写し、守谷早苗氏が筆耕した。

参考文献・資料

- 相馬市史編纂会編『奥相志』（『相馬市史』4 資料編1 1969）
- 福島県神社庁相馬支部『管内神社誌』（2006）
- 南相馬市博物館 DVD『男山八幡神社戊辰お浜下り』（2007）
- 南相馬市『鹿島町の神社と仏閣』（2009）
- 男山八幡神社『男山八幡神社戊辰お浜下り遷宮大祭』（私家版写真集）（2018）

【岩崎真幸】



写真1 社殿から神輿を出す (H30. 4. 7)



写真2 建場を目指す行列 (寺内から江垂への道中 H30. 4. 7)



写真3 小島田の建場での小池の獅子舞を披露 (鹿島区小島田 H30. 4. 7)



写真4 浜の祭場を発ち神社に戻る行列 (鹿島区烏崎 H30. 4. 7)



写真6 東日本大震災前の烏浜の祭場 (鹿島区烏崎 H18. 4. 5)



写真5 あらかじめ修理を終えた男山八幡神社本殿と玉垣 (鹿島区寺内 H30. 4. 7)

写真7 東日本大震災後の祭場は規模も集まる人も減少した (鹿島区烏崎 H30. 4. 7)



12. 南相馬市 鹿島御子神社

(1) 神社の概要

名称／鹿島御子神社

所在地／南相馬市鹿島区鹿島字町199

由緒／鹿島御子神社は茨城県にある鹿島神宮の祭神武甕槌命の苗裔神（御子神）で、鹿島の苗裔神は東北各地の太平洋岸や河川を遡上した要所に多い。

(2) 祭りの名称

鹿島御子神社遷宮祭（お浜下り大祭）

(3) 祭りの由来

鹿島神宮では12年ごとの午年に式年大祭御船祭りという壮麗で大規模な祭典を行う。神輿に乗せた鹿島の神に約2000人が供奉して陸上を大行列し、北浦沿岸の大船津に下り、湖岸にそびえる一の鳥居を通して御座船とよばれる豪華に飾り付けた船に神輿を乗せ、それに供奉する100艘以上の大船団とともに水上渡御して、潮来の水上で香取神宮の神と出会って戻るといふ祭典である。

福島県浜通り地方ではさまざまな神社や寺院でもお浜下りが行われるが、鹿島御子神社の場合は茨城県の鹿島神宮式年遷宮祭が伝わった可能性も考えられる（宮司談）。

古い記録は昭和35年（1960）の伊勢湾台風の洪水により流失。

(4) 祭日

12年ごとの寅年、4月20日。現在は4月第3土曜日。

(5) 伝承団体

鹿島御子神社宮司、鹿島・上真野・八沢地区の人びと（太平洋戦争前までは真野地区も参加していた）。

(6) 神幸経路（図1）

神幸地／昔は（具体的な年代は不明）海老浜だったが、現在は真野川河口の右田浜。

神幸経路

昭和61年（1986・寅年）：鹿島御子神社→第1建場（鹿島1区 スーパーマルヤス前）→第2建場（横手字北畑 JA横手共同集荷場）→第3建場（永田字永田：藤倉ゴム横）→第4建場（南屋形：阿弥陀寺南側交差点）→祭場地（鹿島字北千倉：千倉グラウンド）→第5建場（鹿島4区：ナショナル製靴向かい）→旧社地（鹿島印刷前）→鹿島町役場→鹿島御子神社

令和5年（2023・辰年）：鹿島御子神社（徒歩）→鹿島体育館前（横手字川原）→第1建場（横手字北畑 JA横手共同集荷場）→第2建場（南屋形字延命田：カントリーエレベーター）→第3建場（鹿島字北千倉：千倉体育館）→鹿島御子神社。

(7) 祭りの内容

潮水の扱い／潮垢離は、昔は海老浜で行ったが、現在は、祭り前日に真野川河口の右田浜で桶に潮水を汲み、4本竹と注連縄を張った結界の中で竹筒に入れて神輿に奉納する。祭り当日、第3建場（お旅所の千倉体育館）に神輿を安置し、潮垢離奉納を行う。

実施内容／神輿渡御する。氏子・芸能団体が行列に伴う。神社および各建場で芸能を奉納。

明治時代から太平洋戦争前までは朝5時頃神社を出発し、全行程徒歩で海老浜に下りて潮垢離をとる、夕方6時頃神社に戻った。

戦後は行程を短縮し、浜まで下りずに千倉体育館をお旅所とするようになった。また、海老浜の砂浜が浸食により消滅したため、現在は真野川河口近くの右田浜で潮垢離をとるようになった。

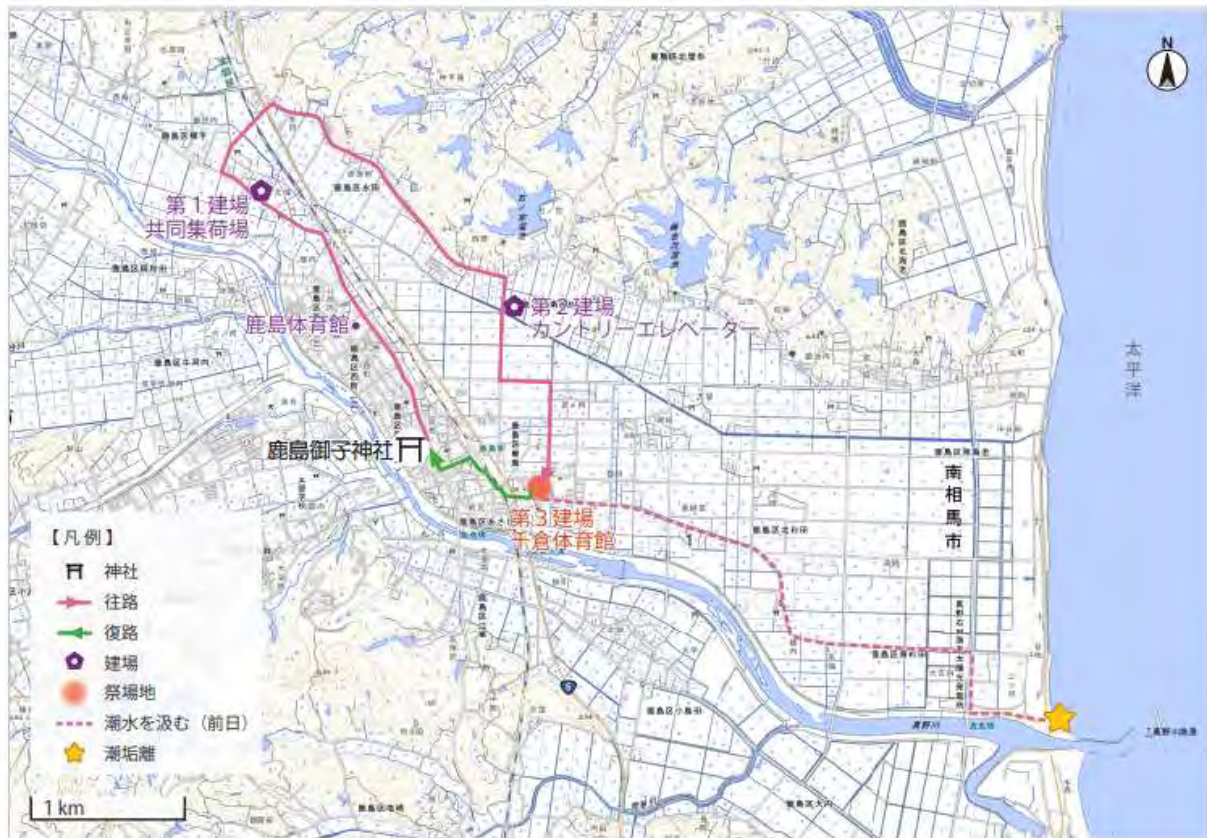


図1 鹿島御子神社の神幸経路（令和5年4月16日）

令和5年4月祭礼では、前日の15日に右田浜で潮垢離をとった（写真1）。祭礼当日は徒歩で鹿島御子神社を出発し（写真2）、鹿島体育館前からバスに乗車。第1建場（JA横手共同集荷場）へ進み、神事と大蛇神楽（写真3）、下町子ども手踊（写真4）を奉納。バスで第2建場（カントリーエレベーター）へ進み、神事と大蛇神楽・下町子ども手踊を奉納。第2建場から徒歩で第3建場（千倉体育館）に進む（写真5）。第3建場（祭場地）で潮垢離奉納、献饌、祝詞奏上など各種神事を執り行う（写真6・7）。この年は特に、始祖神である茨城県の鹿島神宮から献幣使を迎え、鹿島神宮の幣帛を献幣した。その後、雅楽、大蛇神楽、下町子ども手踊が奉納された。昼食の後、神幸行列は鹿島御子神社へ戻る。

なお、社務所の軒先や、昭和時代頃までは行列が通る街並みの軒先に、「花」と呼ばれる長さ1メートルほどの割竹の棒に色鮮やかな紙で作った造花を数個付けたものを飾っていた（写真8）。お浜下りの祭礼で同様の造花を飾り縁起物とする例は、鹿島区鹿島の三日月不動尊（III-13）や飯館村大倉の山津見神社（II-3）にもみられる。これは、正月に歳神を迎えるために山からマツを取ってくるように、「花」を神の依代とするものであろう。4月8日の「花まつり」はお釈迦様の誕生日を祝う仏教行事とされ、釈迦誕生の立像を安置する花御堂は花で飾られている。一方、この日は「卯月八日」「神の日」ともいわれ、お浜下りが多く行われる日である。また、阿武隈高地に多く見られるハマ信仰では山宮と里宮の交代の祭の日、山の神が田の神として去来する日もいわれている。「花まつり」は仏教行事とこうした民俗信仰とが重層した行事と思われる。

（8）祭礼の状況

継続。本来は令和3年（2021・寅年）4月に実施するところ、同年2月13日の福島県沖地震被害復興のため延期。さらに令和4年（2022・卯年）3月16日の福島県沖地震の被害復興のため、令和5年（2023・辰年）4月15日に再延期して継続している。

(9) 芸能等

昭和61年：獅子舞（小池・写真9）、御葛籠馬（台田中：鹿島東部の行政区）、神楽・大蛇舞（鹿島御子神社）、神楽（北右田）、大蛇神楽（南柚木）、神楽（北屋形）、神楽（南柚木）、神楽（小島田）、手踊（鹿島）など多くの神楽が奉納された。それ以前は、40組もの神楽が集まったといわれている。境内に祀られている雷神社は、明治の神仏分離のうちに社殿を建立して、北郷（現在の鹿島区）に祀られていた各雷神社を合祀したものといわれており、中村藩では各郷社の雷神社で神楽を演じ、豊作を祈願したと伝えられていることを裏付けている。また、栃窪・海老・烏崎の手踊が出た年もあった。

令和5年：小池の獅子舞が先頭で、これが来ないと祭りが始まらないといわれてきたが、近年保存会が解散したため、小池の獅子舞の頭を飾ることで奉納とした。今回、実際に踊られたのは鹿島御子神社の大蛇舞と下町子ども手踊のみとなり、芸能の保存・伝承が喫緊の課題となっている。

(10) 関連資料

—

参考文献・資料

相馬市史編纂会編『奥相志』（『相馬市史』4 資料編1 1969）

鹿島町史編纂委員会『鹿島町史』第6巻 民俗編（2004）

南相馬市『鹿島町の神社と仏閣』（2009）

佐々木長生「御旅所への神幸 浜下りの神事—いわき地方を中心に—」『福島県立博物館紀要』第37号（2023）

南相馬市・南相馬チャンネル制作・著作 DVD『鹿島御子神社のお浜下り』（2023）

福島民友新聞社『ふくしまの民俗芸能—ふる里の誇り ふたたび—』（2015）

【二本松文雄】



写真1 潮垢離（右田浜 R5.4.15 南相馬市博物館）



写真2 街なかを進む行列（鹿島字町 R5.4.16 南相馬市博物館）



写真3 下町子ども手踊（第1建場 JA横手共同集荷場 R5.4.16 南相馬市博物館）



写真4 大蛇舞（第2建場 南屋形 JAカントリーエレベーター R5.4.16 南相馬市博物館）

写真5 神幸行列（鹿島字上沼田 R5. 4. 16
南相馬市博物館） →電線消せる？



写真6 祝詞奏上（祭場地 千倉体育館 R5. 4. 16 南相馬市博物館）



写真7 竹筒に潮水を入れて供える（祭場地 千倉体育館 R5. 4. 16 南相馬市博物館）



写真8 小池の獅子舞（鹿島御子神社境内 令和5年は休止 H27. 4. 19 南相馬市博物館）

写真9 鹿島御子神社の社務所の軒先に飾られた「花」（R5. 4. 15 南相馬市博物館）



13. 南相馬市 三日月不動堂

(1) 寺院の概要

名称／三日月不動尊

所在地／南相馬市鹿島区鹿島字岩妻

由緒／元亨年間（1321～24）、相馬重胤の奥州下向に従って修験弥勒寺が不動尊像を背負い、相馬郡（現在の千葉県北西部から茨城県南部）から行方郡牛越邑（現在の南相馬市原町区牛越）に移った。のちに現在地に移り、天正年間（1573～92）に田中城代田中忠次郎郷胤（相馬義胤の弟）の祈願寺の一つとなった。正保年間（1644～48）に鹿島の大火で堂は焼けたが、尊像は樹上に飛び移って無事に発見されたという。

江戸時代は本山派修験岩台山弥勒寺五台院が別当。本尊は不動明王。

(2) 祭りの名称

遷座祭（浜下り）

(3) 祭りの由来

—

(4) 祭 日

12年ごとの酉年3月中旬の日曜日。江戸時代は正月4日に行法。

(5) 伝承団体

昭和時代までは現地にあった五台院の岩妻家、現在は安養寺住職、台田中行政区（鹿島区鹿島の東部）の人びと。

(6) 神幸経路（図1）

神幸地／右田浜

神幸経路／三日月不動堂・台田中集会場（写真1）→O家前（写真2～4）→台田中屯所→Y家前→田神様（写真5）→鹿島小学校駐車場→三日月不動堂・台田中集会場。

(7) 祭りの内容

従来のお浜下りの報告では取り上げられてこなかった事例だが、福島県や茨城県では、神社ではなく寺院が行う「お浜下り」もある。当地区では、鹿島区北海老の虚空蔵堂（Ⅲ-6）、北右田の薬師堂（Ⅳ-13）、鹿島の三日月不動尊で行われており、珍しい事例である。

潮水の扱い／例祭当日の朝、区長・区長代理が右田浜に行き、区長が新しい桶で潮水を汲んでくる。

実施内容／三日月不動堂に右田浜から汲んできた潮水を供え、護摩壇で護摩を焚く。お葛籠馬とご本尊を収めた厨子を載せたご鳳輦を中心に、行列が台田中行政区を練り歩き、三日月不動堂に戻る。

(8) 祭礼の状況

三日月不動尊は酉年の守り本尊として信仰されている。近年の祭礼は平成29年（2017）3月19日に実施。本来は生き馬を使うが、この年は軽トラックに木馬のお葛籠馬を載せて行列した。木馬や馬具は、相馬野馬追北郷騎馬会に所属する台田中行政区の住民から借用した。

不動堂前でお葛籠馬唄（花唄）を奉納したあと、約百人で行列をつくり、ご本尊とともに地区内を練り歩いて、地区の平穏などを願い、祭礼を通じて地域住民の絆を強めた。

(9) 芸能等

お葛籠馬／練り風流の一種で、南北朝時代に霊山で敗れた北畠氏が落ちのびる際に一行の姫が乗ったと伝えられている。馬の背の左右に葛籠を縛り付け、その上に赤黄青緑白の袋帯を30本折り重ね、さらにその上に縦2尺（約60センチメートル）、横1尺5寸（約45センチメートル）の檣を載せて紅



図1 三日月不動尊の浜下り経路（平成29年3月19日）

白の布を巻き、造花を飾ったもの。馬方が馬を引き、各建場でお葛籠馬唄をうたう。唄の師匠は馬方経験者の先輩。

お葛籠馬は鹿島字町のK家に代々伝わってきたといわれ、江垂のお葛籠馬もあるが、台田中に伝わった経緯は不明。

台田中のお葛籠馬は三日月不動尊のほか、鹿島御子神社（Ⅲ-12）のお浜下りにも供奉した（写真6）。

(10) 関連資料

享保20年（1735・卯年）3月18日の不動堂修復の棟札。平成17年・29年の記録写真。平成29年の書類一式・記録ビデオ。

参考文献

福島県鹿島町『鹿島町史』第6巻 民俗編（2004）

「御葛籠馬 練り歩く 三日月不動尊で遷宮祭」『福島民報』平成17年（2005）3月15日付

「三日月不動明王 遷座祭で絆強く」『福島民報』平成29年（2017）3月21日付

【二本松文雄】



写真1 神幸行列が出発 (三日月不動堂 H29. 3. 19 台田中行政区) →水平補正



写真2 神幸行列 (広畑 H29. 3. 19 台田中行政区)



写真3 神幸行列 (広畑 H29. 3. 19 台田中行政区)



写真4 馬方がお葛籠馬唄(花唄)をうたう (広畑 H29. 3. 19 台田中行政区)



写真5 神幸行列 (館ノ内 H29. 3. 19 台田中行政区) →水平補正



写真6 鹿島御子神社のお浜下りに供奉した台田中のお葛籠馬 (S49. 4. 22 大橋新氏)

14. 南相馬市 冠嶺神社

(1) 神社の概要

名称／冠嶺神社 通称：ハチリュウサマ

所在地／南相馬市鹿島区上栃窪字宮下235

由緒／正徳2年(1712)と思われる文書には「行方郡千倉庄真野郷栃久保村式内冠嶺神社 祭神天津彦火瓊々杵尊 八龍大明神 祭神天津彦火々出見尊(中略) 神領高貳石御奇附 正徳二辰歳 神主渡辺肥後正大ナリ」とあって、2柱を祀り延喜式内社に比定されている。

一方、『奥相志』「上栃窪邑」の「八竜神祠」の項にある「冠嶺八竜両社略縁起」によれば、寛喜2年(1230)4月8日道祖神山(立石)から今の地に遷し、さらに茗野神社も相殿にして冠嶺八竜茗野の3柱を祀ることになった、とする。さらに八竜大明神は両栃窪、小山田、山下、角川原5か村の「惣鎮守」とされていた。

(2) 祭りの名称

例祭のことを常例祭と称し、神輿を浜に下ろして潮垢離をとる祭りをオサガリといった。12年ごとに行う祭りは遷宮祭とかご遷宮とよぶ。

(3) 祭りの由来

前記の「冠嶺八竜両社略縁起」は「浜降り」の由来についても説く。冠嶺八竜茗野の3柱を合殿にしたときに「浜降り」をするようになったこと、7月7日に神輿を出して角川原の熊木明神に一宿すること、そのあとで下蝦(海老)の浜に下りて還幸したという。『奥相志』「角川原邑」には当村内に熊野権現宮があり(後年八坂神社境内に遷したという)、その神木を「熊木」と称していたというが、八竜の「浜降り」には触れていない。

(4) 祭日

常例祭は4月8日である。遷宮祭は12年ごと成年の4月に実施している

(5) 伝承団体

鹿島御子神社(Ⅲ-12)宮司、冠嶺神社氏子。

(6) 神幸経路(図1)

神幸地／明治時代あたりまでは神輿が下海老の浜(鹿島区下海老)にオサガリしたという。

神幸経路／海老浜にオサガリしていた時代の神幸経路は不明である。神輿の渡御はないが、現在も春の例祭に先立って潮水を汲む「潮垢離」を行っている。もともとは海老の浜から潮を汲んだというが、海老浜が侵食されるにしたがって砂浜がなくなったため、海老浜の南の右田浜で汲むようになり、さらに真野川河口に変わった。

平成23年(2011)の東日本大震災以降は、防潮堤が築かれたことから真野川河口(右田)の海から汲む。現在の潮垢離は当番に任せられており、自家用車で出向くので決まった経路はとくにないが、冠嶺神社→御山→山下→浮田→岡和田→町→北右田→南右田→真野川河口の右田浜という経路をたどることが多い。

(7) 祭りの内容

潮水の扱い／海に入り汲む。

実施内容／「潮垢離」は潮を汲むこと。汲んだ潮そのものもシオゴリと称している。

氏子の2軒が毎年回り番で例祭当日の潮垢離を担当する(写真1)。一年以内に不幸があった家では憚って次の家に回す。例祭に先立ち、当日朝6時頃に神社からタケの容器を受け取って自家用車で神社を出て浜に向かう。東日本大震災後に防潮堤が築かれてからは、真野川河口の右田側の堤



図1 冠嶺神社の潮垢離の経路（東日本大震災後）

防を下りて浜に出る。砂浜から海に入り適当な深さのところから潮を汲むことにしており、午前6時30分頃になる。

汲み方は当番に任せられており、バケツで潮を汲む場合もあれば（写真2）、タケの容器に直接汲み入れることもある。あらかじめ氏子総代がマダケ1節分で容器を1本作り、こぼれないように栓も付ける。バケツで汲んだ場合はタケの容器に潮水を入れ替えて栓をする。決まった作法はない。潮を入れた容器は神社に運び、容器のまま本殿前に供え10時頃から始まる例祭に備える（写真3）。

例祭は午前10時、宮司の打鳴らしに始まる。祓い、本殿の開扉、タケの容器の「潮垢離」は宮司が本殿内中央に置く。献饌、祝詞奏上、鈴による清祓い、玉串奉奠、撤饌、「潮垢離」を本殿外側に出して閉扉、打鳴らしのあと参列者が神酒をいただく。神事は45分ほどで終わり、上柵窪集会所で直会がある。玉串奉奠は冠嶺神社氏子総代長ほか氏子総代、潮垢離の当番など20人ほどである。タケの筒は次の祭りまで置いたままにする。

八竜様には三柱の「おそばの神」（「お供の神」とも）が祀られていて、もともと氏子の氏神であった。毎年オサガリしていた時代には「おそばの神」も八竜様と一緒に浜に下がり「潮垢離」をとったという。「おそばの神」は水神（O家の氏神）、勝子明神（T家）、熊野（N家）とされる（佐々木長生「浜下り神事の分布と考察」による）。現在は「三方荒神」（K家）も加わる。例祭にはこれらを納めた厨子も幣殿に並べ、ゆかりのある家からも参列して玉串を捧げる。

佐々木の報告では、タケの容器にいれた潮水（潮垢離）を振りかけ供え物を清めたというが、近年は栓をはずして供えるだけになっている。

12年目ごとの戌年には神社や境内の補修をして遷宮祭を行っている。遷宮祭で神輿が海に下がることはなく、上柵窪の集落内を回る。遷宮祭があった昭和57年（1982）4月4日、平成6年（1994）4月3日の列帳、祝儀帳は、神楽の奉納を依頼する隣接する柵窪集落の集会所に保管されている。

昭和57年の遷宮祭は4月4日（写真4）。午前7時に氏子が神社に集合し、午前8時に御鳳輦（神輿）が神社を出発。神輿を安置する「建場」は、上柵窪公会堂、久保町、西ノ内、西平に設け、1か所30分をかけて神事を行い芸能の奉納をしている（写真5）。「御昼場」で昼食をとり午後4時に神社に還御した（関連資料②）。

(8) 祭礼の状況

神輿が浜に毎年オサガリし「潮垢離」したのは明治時代頃までであったらしいが、「潮垢離」とりだけは現在でも常例祭前に行っている。ただし潮を汲む浜には変遷がある。もともと海老浜で汲んでいたが、浜に下りることが難しくなったため、しだいに南の右田浜に移った。しかし、東日本大震災後に高い防潮堤が整備されて浜に下りることができなくなったため、真野川河口から右田浜の潮を汲んでいる。

(9) 芸能等

常例祭には芸能は奉納しない。遷宮祭には柗窪神楽、上柗窪宝財踊、上柗窪手踊などの奉納があった。奉納する芸能は時に応じて変化している。

(10) 関連資料 * () 内は人数 □は不読箇所

①「冠嶺神社遷宮御供割予定」

[表紙]

「 明治四拾五年三月

冠嶺神社遷宮御供割予定

氏子中 」

御供奉者

装束 麻上下若シクハ羽織袴着用

信号係 (1)、村印 (2)、先駈 (2)、大旗 (2)、道祖 (1)、豊年踊上柗窪有志 (世話掛 3)、大榎 (2)、神楽柗窪連中、御神馬 (2)、小榎 (21)、小旗 (数名)、大麻 (2)、洗米 (2)、塩 (2)、餅 (2)、赤飯 (2)、掛肴 (2)、神酒 (2)、棟札 (区長、大工)、神幣 (1)、奉幣 (2)、大榎 (2)、副祭主 (1)、口取 (1)、榎箱 (4)、先 (1)、小旗 (8)、御蛇神楽 (南柚木連中)、御鳳輦 (廻番、9 註：9人のうち「御塩水貰」は鎌田子之助とある)、氏子惣代 (3)、御神鏡 (1)、四方堅 (甲冑具足着用、4)、小旗 (6)、神官 (乗馬1、口取1)、押 (2)、接待係遷宮総務委員 (4)、取締遷宮世話掛 (4)、有志騎馬御供 (1)、口馬 (1)、会計賄世話取締 (3)、料理方、同従者 (7) □、カゴ馬 (1)、御使番 (4)、女子供花持 (22)、小山田連中青年組頭 (1)、青年組踊 (10)、踊女子供 (7)

同九日村社并猪狩宅ニテ上柗窪万作踊、柗窪神楽 青年連中外□狂言 餅三升

柗窪神楽連中ニハ八日酒五升赤飯にしめ

同九日ニハ上柗氏子中ヨリ花トシテ金貳円キタ

同日上柗窪氏子并借家人等御供ノ人ノ数八十人

人等御供ノ人数八十人江 肴壺勺とふ⁽⁵⁾婦芋等ノ肴 酒三斗ニテ沢山ニ有之候

(柗窪公会堂保管)

②「冠嶺神社遷宮列帳」

[表紙]

「 昭和五十七年四月四日

冠嶺神社遷宮列帳

延喜式内 社務所 」

氏子集合時間 午前七時

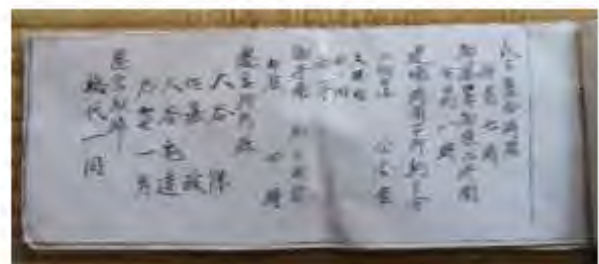
御鳳輦御繰出時間 午前八時

建場時間一ヶ所約三十分

上柗窪公会堂 久保町 西ノ内 西平

御昼場約三時間 午後四時

遷宮行列係 (4) 遷宮取締総代一同



遷宮取締兼招待係 (4)、警備係 (上栢窪消防団一同)、村印 (2)、先拂 (2)、錦旗 (2)、道祖 (1)、栢窪神楽、上栢窪宝財踊、上栢窪手踊、大榎 (2)、神幣 (2)、小榎 (2)、大麻 (2)、^(神饌カ)饌 (1)、塩水 (1)、餅 (1)、赤飯 (2)、掛魚 (1)、御神酒 (2)、供物 (2)、稚児 (19)、棟札〈新〉 (2)、棟札〈旧〉 (2)、神幣 (2)、大榎 (1)、小榎 (1)、榎箱 (2)、小旗 (4)、御神鏡 (2)、笛 (1)、太鼓 (2)、五色旗 (5)、神人 (2)、御鳳輦 (9)、神官 (1)、立傘持 (1)、四方固 (4)、後押 (2)、御使番 (7)、会計 (4)

(栢窪公会堂保管)

資料解説 資料②から、行列は浜まで行かなかったことが分かる。

参考文献・資料

相馬市史編纂会編『奥相志』(『相馬市史』4 資料編1 1969)

佐々木長生「浜下り神事の分布と考察」岩崎敏夫編『東北民俗資料集』(4) 萬葉堂書店 (1975)

福島県神社庁相馬支部『管内神社誌』(2006)

【岩崎真幸】



写真1 潮垢離の当番は2人。潮の容器はタケの筒。栓をして持ち帰る (真野川河口右田浜 R6. 4. 7)



写真2 潮を汲む。この年はバケツで汲んだ (真野川河口右田浜 R5. 4. 6)



写真3 神前に供えた潮が入ったタケ筒、手前の厨子がお供の三柱の神 (冠嶺神社本殿 R5. 4. 6)



写真4 昭和57年の遷宮祭で挨拶する祭典実行委員長(冠嶺神社 S57. 4. 4)



写真5 昭和57年4月4日の遷宮祭で奉納された子ども手踊 (冠嶺神社 S57. 4. 4)

15. 南相馬市 綿津見神社

(1) 神社の概要

名称／綿津見神社（旧八龍権現）

所在地／南相馬市原町区萱浜字一本松120

由緒／江戸時代までは八龍権現と称し、信仰の対象は八龍権現と鎌倉権五郎景政（甲冑騎馬像）であった。八龍とは八大龍王という仏教でいう8体の龍の王のことで、水や川、雨乞いに関する信仰の対象とされてきた。「宝永元年（1704）二月、大旦那（相馬）叙胤公」の上棟文があった。江戸時代の別当は八龍山成就院。

社殿正面上部の向拝は、水しぶきを上げて躍動する龍の彫刻で装飾されていた（写真2）。社殿内には献額が2点あり、絵は消えかかっていたが1枚は白装束の2人の後ろに茶色の着物を着た10人程が1列に並ぶようすが描かれていた。2枚目も数人が1列に並ぶもので、2本の傘を掲げているのがわかる。神幸行列か手踊の歌い手が入る傘が判然としなかった。あるいは雨乞いのようすを描いていたのであろうか（写真3）。

しかし、平成23年（2011）3月11日の東日本大震災の津波で、社殿や絵馬・祭礼用具等の文化財は流失してしまった。

(2) 祭りの名称

お浜下り

(3) 祭りの由来

お浜下りと雨乞いの関係は不明だが、雨乞いについて紹介しておきたい。

原町の人びとは、雨乞いする時は萱浜に下らなければ雨が降らないとあって萱浜に下った。朝日観音に中宿をとり、行き帰りに休んだ。浜で蓑笠を持って1列に並び、ササに水を付けて、「雨もたしや竜王や沖に雲ささえて ザァーザァとふってこー」と呪文を唱え、丘のほうへ走っていき、笠で沖から雨を呼ぶ。雨乞いすると一粒でも雨が降ったという。

(4) 祭日

毎年。本来は旧4月8日であったが、昭和45年（1970）頃には原町区の北原と北萱浜の祭りを統一して4月24日に行った。平成9年（1997）からは4月第4日曜日に行っている。

(5) 伝承団体

相馬小高神社宮司、萱浜地区の人びと。

(6) 神幸経路（図1）

神幸地／萱浜海岸

神幸経路／綿津見神社（写真4）→萱浜海岸（写真5）→綿津見神社

(7) 祭りの内容

潮水の扱い／地引網が盛んだった頃は、地引網の頭が波を3つ越えて潮水を汲んできた。その後は区長が潮水を汲み（写真6）神輿に供えた。宮司が潮水にサカキを浸して神輿に振りかけた。

実施内容／前日の夜に拝殿で夜籠りした。拝殿に塩を振って清めてから籠り、お神酒をいただいて神を祀った。当日は、神社から真っ直ぐ海へ下る。

かつては、神輿が神幸する道を塩で清めながら浜まで下った。祭場は八龍権現の本屋敷前で砂を盛り上げ（のちにコンクリートで祭場を作った／写真5）、竹笹を立てて注連縄を張り、神輿を安置した。海上安全と集落全体の安全を祈願した（写真7）。

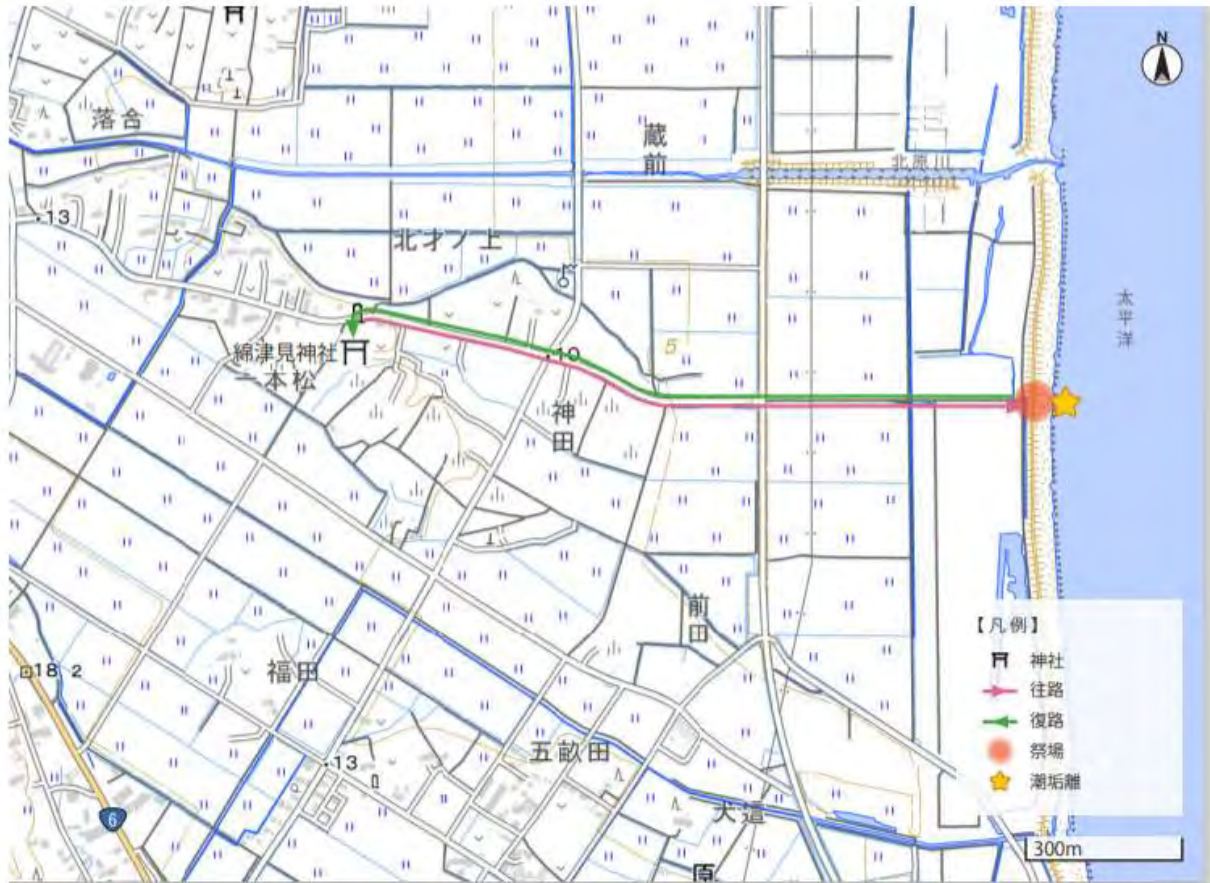


図1 綿津見神社の神幸経路（平成18年4月23日）

(8) 祭礼の状況

萱浜地区は東日本大震災で津波に襲われ、人命・家屋とも甚大な被害を受けて移転した家も多い。社殿や祭礼用具も流失し、新たに小さな祠を設けたが、社殿や祭礼の再興は容易ではない。

(9) 芸能等

南萱浜の神楽が奉納されていたが、中断している。平成18年（2006）4月23日の祭礼では、芸能の奉納はなかった。また、かつて行われていた南萱浜の宝財踊ほうさいの持ち物の太鼓やササラ、鉢巻があったが、東日本大震災の津波で流失した。

(10) 関連資料

—

参考文献

佐々木長生「浜下り神事の分布と考察」岩崎敏夫編『東北民俗資料集』(4) 萬葉堂書店（1975）

南相馬市『原町市史』第9巻 特別編Ⅱ「民俗」（2006）

佐々木長生「四月八日と浜下り 一相馬地方の八竜神の浜下りを中心に」（日本民俗史学会東北・北海道支部『日本民俗史学会東北・北海道支部 研究紀要』第4号 2022）

【二本松文雄】



写真1 鎮守の杜と祭りの幟（東日本大震災で流失 H18. 4. 23 南相馬市博物館）



写真2 綿津見神社向拝の龍の彫刻（東日本大震災で流失 H18. 4. 23 南相馬市博物館）



写真3 行列のようすを描いた絵馬（東日本大震災で流失 H18. 4. 23 南相馬市博物館）



写真4 神職がご神体を神輿に遷す（神輿は東日本大震災で流失 H18. 4. 23 南相馬市博物館）



写真5 萱浜海岸に設けた祭壇に神輿を安置する（H18. 4. 23 南相馬市博物館）



写真6 萱浜海岸で潮水を汲む（H18. 4. 23 南相馬市博物館）



写真7 神輿に潮水を供えて祈禱する（萱浜海岸 H18. 4. 23 南相馬市博物館）

16. 南相馬市 天満天神社

(1) 神社の概要

名称／天満天神社

所在地／南相馬市原町区下江井字小谷津

由緒／戸時代末の中村藩領内の地勢や神社仏閣を記した『奥相志』には天満天神社に関する記載はない。創建は祭りが開始された明治時代初期か。

(2) 祭りの名称

天神様のお下がり、お浜下り、柏天神の祭り（端午の節供に行われ、柏餅を供えることからこう呼ばれている）。

(3) 祭りの由来

昭和43年（1968）の『神社新報』によれば、明治初年、学制が立てられて寺子屋の勉強から小学校教育に切り替わる頃、「子供たちが勉強好きになって、なんでも自分たちで自主的にやろうとする気持ちがあくように」との村人たちの子どもたちに対する祈りの心から始められたものという。

(4) 祭 日

始められた明治初年から昭和30年代までは旧暦5月5日の端午の節供に行われてきた。その後は新暦5月5日の子どもの日に改められた。

(5) 伝承団体

相馬小高神社宮司、下江井地区氏子の子どもたち。

(6) 神幸経路 (図1)

神幸地／小沢浜

神幸経路／昭和35年（1960）頃までは、下江井集落センター→下江井集落→下江井の天満天神社→下江井集落→小沢橋→小沢の天満天神社（小沢の神幸と合流）→小沢集落センター前→富士権現神社前→防潮堤→虚空蔵尊前→小沢浜→防潮堤→小沢の天満天神社→小沢橋→下江井集落→下江井の天満天神社→下江井集落センター。

平成15年（2003）には、下江井集落センター→下江井集落→下江井の天満天神社→下江井集落→下江井集落センター。

(7) 祭りの内容

潮水の扱い／潮水に浸したサカキで神輿に潮水を振りかける。

実施内容／昭和43年の『神社新報』によれば、祭礼の概要は以下のようなものである。

早朝から下江井・小沢両地区の小中学生がそれぞれ20人ほど地区の宿（頭屋）に集まる。子どもたちが大人の手を煩わすことなく頭を中心にして万事をすすめる。頭は中学2年生で、3年生は相談役といった立場。少子化で、のちに中学3年生が頭を務めるようになった。なお、経費その他の大事な面は、大人の区長が相談にのる。

祭りに先立ち、子どもたちが4月末頃に社殿と神輿の掃除をする。5月5日、社殿の前に子ども神輿、根こじのサカキ（ここではサカキの苗木のこと）、太鼓、大きな神饌櫃を並べ、神職による祭典を行う。五色の旗をなびかせ笛太鼓を奏でながら下江井の行列が小沢の天神様に到着すると、小沢の行列が待ち受けていて、一緒に神職のお祓いを受け、両地区の行列が一つになって小沢海岸に向かう。

沿道には、できたての柏餅やお菓子を持った住人があちらこちらの家から門口に出て行列を迎え、

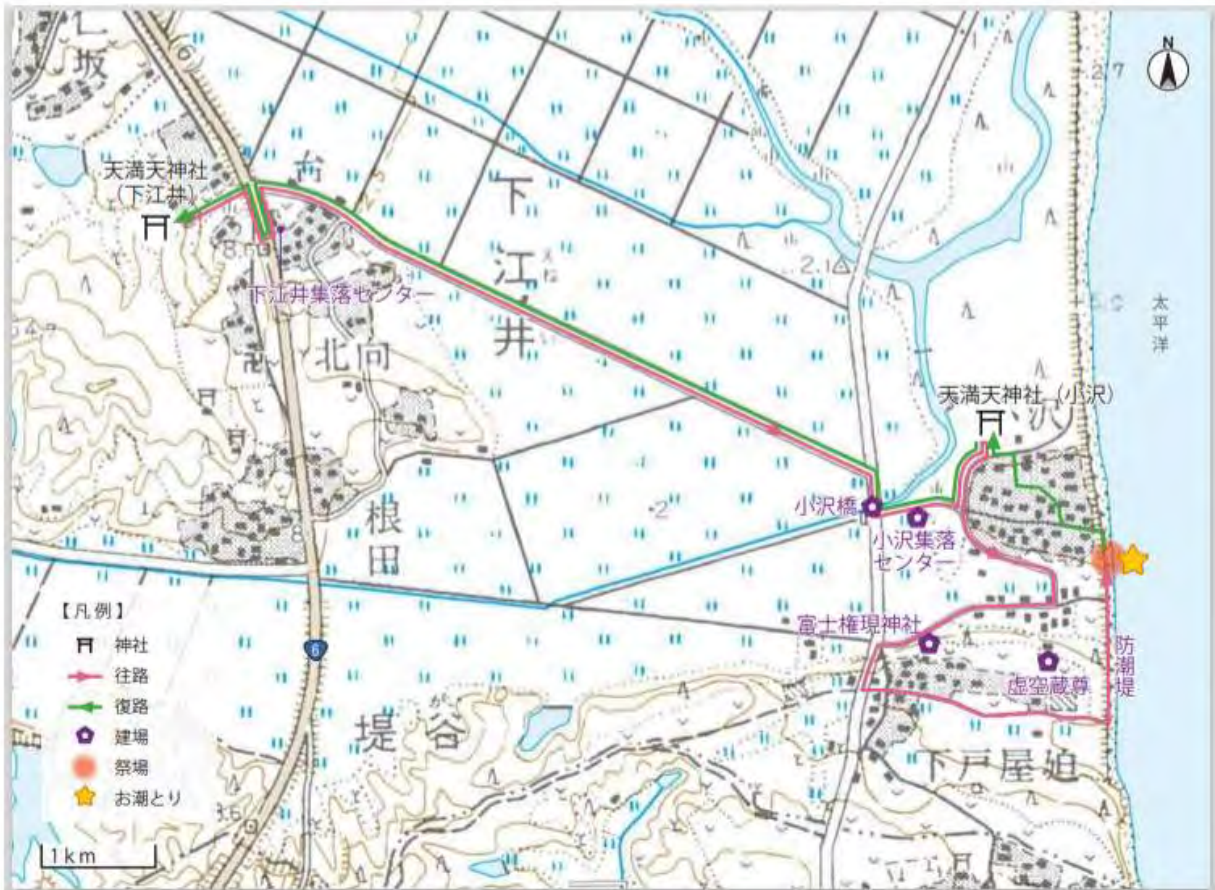


図1 天満天神社の神幸経路 (昭和35年頃まで)
 ＊平成21年3月南相馬市発行2.5万分1地形図を加工して作成

その菓子等を2人の少年が担いだ神饌櫃に入れる。

小沢浜に着くと、両地区の神輿が海に向かって据えられ、「お潮とり」が始まる。2人の少年が裸足になって海に入り、潮水に浸したサカキで神輿の屋根に潮水を振りかけ、さらに参列した子どもたちの頭上も同様にお祓いして神事を終える。

神事のあとは砂浜で直会。お供えの柏餅をいただき、その後約1時間余興などを楽しみ、再び行列を整えて遷御の儀に移り、それぞれもとのお宮に遷座して、各自頭屋に帰り直会ののち祭りを終える。

昭和44年(1969)頃から、小沢・下江井それぞれで子ども神輿が神幸するようになった。行列には神輿担ぎほか20人程必要だが、下江井では少子化が進んで人数が不足しているため、家々を回るのではなく、神輿や道具を保管している下江井集落センターから天満天神社の小さな祠まで行列する小規模なかたちが変わっていった。平成20年(2008)には、少子化のため、頭は小学4年生が務めた。神輿行列が国道6号を横断して細い坂道を登り、林の中の小さな祠の前で神事を行って集落センターに戻った。

この地域の子どものお浜下りは、子どもたちの健やかな成長を地域全体で祝うとともに、ムラの一員としての社会的訓練でもあった。

(8) 祭礼の状況

原町区の小沢・下江井・江井・堤谷つつみがい合同の天神様のお下がり子どもたちが合同で行う祭礼で、明治初年から昭和40年代まで約100年間続いてきた。昭和30年(1955)頃は子どもが200人ほど参加した。しかし、いずれも小さな集落のため子どもの数もしだいに減少し、中止の声もあったが何とか続

けてきた。

昭和43年（1968）は明治維新100年の記念すべき年ということで、相馬小高神社宮司が地域住民を説得して開催にこぎつけた経緯もあった。この時（5月5日）には福島県文化財専門委員岩崎敏夫氏らによる下江井を含めた「小沢の天神様のお下がり」調査が行われている（『神社新報』）。

昭和46年（1971）は4地区合同としては最後の祭礼となり、参加者は小沢・堤谷で20人ほど、江井・下江井で20人ほどと少なくなり、以後、下江井では祭礼を中断した。

平成20年、南相馬市博物館がお浜下りの映像記録を制作するため約40年ぶりで祭礼を再興し（写真2～7）、神輿を新調した。映像記録は下江井集落センターで完成披露上映を行った。

平成23年（2011）3月に発生した東日本大震災では、津波が下江井地区にも達し、家屋や農地にも大きな被害を与えた。さらに、下江井地区は、東京電力福島第一原子力発電所から20キロメートル圏内に位置することから、事故当初は避難指示区域に、平成24年（2012）4月16日からは避難指示解除準備区域に指定され、住民はなかば強制的に避難させられて、平成28年（2016）7月まで地域に住民不在の期間が続いた。そのため、震災後はお浜下り神事は行われていないが、子どもたちが地区内を巡って柏餅をいただく、地域コミュニティー行事として続いている。

（9）芸能等

—

（10）関連資料

—

参考文献・資料

「九十数年絶やすことなく 子供たちだけでだけで奉仕 福島県原町市の“天神まつり”」『神社新報』昭和43年（1968）6月8日付

南相馬市博物館 DVD『南相馬の子どもの祭り 小沢と下江井の天神様のお下がり』（2008）

【二本松文雄】



写真1 昭和中期の「天神様のお下がり」（下江井 S35頃 相馬小高神社）



写真2 神輿行列が出発（下江井集落センター H20.5.5 南相馬市博物館）



写真3 柏餅を供える沿道の住民（下江井字小谷津 H20. 5. 5 南相馬市博物館）



写真4 神輿のうしろに太鼓、神饌箱が続く（下江井字小谷津 H20. 5. 5 南相馬市博物館）



写真5 「明治参拾六年 旧五月五日」銘の神饌箱に柏餅がいっぱい（下江井字小谷津 H20. 5. 5 南相馬市博物館）



写真6 丘を上る神輿行列（下江井字小谷津 H20. 5. 5 南相馬市博物館）



写真7 丘の上の祠でお祓いを受ける子どもたち（下江井字小谷津 H20. 5. 5 南相馬市博物館）

17. 南相馬市 天満天神社

(1) 神社の概要

名称／天満天神社

所在地／南相馬市原町区小沢字小沢

由 緒／戸時代末の中村藩領内の地勢や神社仏閣を記した『奥相志』には天満天神社に関する記載はない。創建は祭りが開始された明治時代初期か。祭神は菅原道真。

(2) 祭りの名称

天神まつり、天神様のお浜下り、お下がり、お潮とり

(3) 祭りの由来

昭和43年（1968）の『神社新報』によれば、明治初年、学制が立てられて寺子屋の勉強から小学校教育に切り替わる頃、「子供たちが勉強好きになって、なんでも自分たちで自主的にやろうとする気持ちがわくように」との村人たちの子どもたちに対する祈りの心から始められたものという。

(4) 祭 日

始められた明治初年から旧暦の端午の節供に行っていたが、太平洋戦争以後は新暦5月5日に改められた。

(5) 伝承団体

相馬小高神社宮司、小沢地区氏子の子どもたち。以前は長男のみで、相談役は中学3年生。

(6) 神幸経路 (図1)

神幸地／小沢浜

神幸経路／小沢の天満天神社→小沢集落センター前→富士権現神社前→防潮堤→虚空蔵尊前→小沢浜→防潮堤→小沢の天満天神社

(7) 祭りの内容

潮水の扱い／潮水に浸したサカキで神輿に潮水を振りかける。

実施内容／昭和43年の『神社新報』によれば、祭礼の概要は以下のようである。

早朝から小沢と下江井それぞれの小中学生が20人ほど地区の宿（頭屋）に集まる。子どもたちが大人の手を煩わすことなく頭を中心にして万事をすすめる。頭は中学2年生で、3年生は相談役といった立場。少子化で、のちに中学3年生が頭を務めるようになった。なお、経費その他の大事な面は、大人の区長が相談にのる。

祭りに先立ち、4月末頃、子どもたちが社殿と神輿の掃除をする。5月5日、社殿の前に子ども神輿、根こじのサカキ（サカキの苗木）、太鼓、大きな神饌櫃を並べ、神職による祭典を行う。小沢の行列は五色の旗をなびかせ笛太鼓を奏でながら、下江井の行列を待ち受け、一緒に神職のお祓いを受けて両地区の行列が一つになって小沢海岸に向かう。

沿道には、できたての柏餅やお菓子を持った住人があちこちからの家から門口に出て行列を迎え、その柏餅等を2人の少年が担いだ神饌櫃に入れる。柏餅の進献は神に差し上げるとともに、「ムラ」をあげた子どもたちへの愛情の現れでもあるという。

小沢浜に着くと、両地区の神輿が海に向かって据えられ、「お潮とり」が始まる（写真1）。2人の少年が裸足になって海に入り、潮水に浸したサカキで神輿の屋根に潮水を降りかけ（写真2）、さらに参列した子どもたちの頭上も同様にお祓いして神事を終え、神職が奉仕して祭典を執り行う。

祭典のあとは、砂浜で直会。お供えの柏餅をいただき、その後約1時間余興などを楽しみ、再び行列を整えて遷御の儀に移り、それぞれもとのお宮に遷座して、各自頭屋に帰り直会ののち祭りを

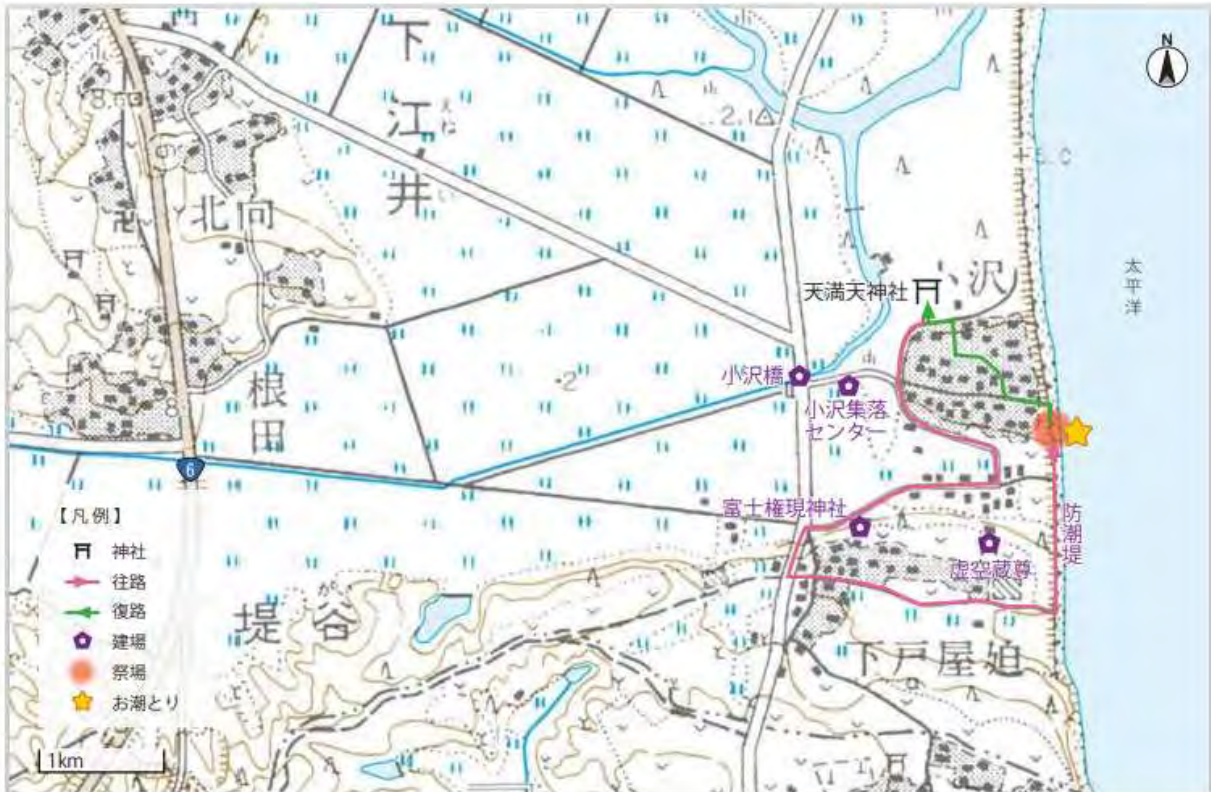


図1 天満天神社の神幸経路（平成20年5月5日）
 *平成21年3月南相馬市発行2.5万分1地形図を加工して作成

終わる。

平成20年（2008）に小沢地区・下江井地区のお浜下りが再興された時には、合同ではなくそれぞれで祭礼を行い、子ども神輿が神幸した。小沢では、浜祭場は砂浜ではなく防潮堤の上で、中学生が階段を下りて消波ブロックの間から潮水を汲んで神輿に供えた。神職がサカキに潮水を浸し、神輿に振りかけた。

この頃でも小沢・下江井地区ともに農休みで、田畑仕事や猟は行わなかった。

この地域の子どものお浜下りは、子どもたちの健やかな成長を地域全体で祝うとともに、ムラの一員としての社会的訓練でもあった。

(8) 祭礼の状況

原町区のつつみがい小沢・下江井・江井・堤谷合同の天神様のお下がり子どもたちが合同で行う祭礼で、明治初年から昭和40年代まで約100年間続いてきた。昭和30年（1955）頃は子どもが200人程参加した。しかし、いずれも小さな集落のため子どもの数もしだいに減少し、中止の声もあったが何とか続けてきた。昭和43年（1968）には、明治維新100年の記念すべき年ということで、相馬小高神社宮司が地域住民を説得して開催にこぎつけた経緯もあった（『神社新報』）（写真3）。昭和46年（1971）4地区合同の祭礼は最後となり、参加者は小沢・堤谷で20人ほど、江井・下江井で20人ほどと減少し、翌年から祭礼は中断したが、平成17年（2005）に再興した（写真4～10）。また、この祭礼は男子のお祭りとして続けてきたが、少子化のため女子も参加するようになった。平成20年（2008）、南相馬市博物館がお浜下りの映像記録DVDを制作し、小沢集落センターで完成披露上映を行った。

平成23年（2011）に発生した東日本大震災では、海岸沿いの小沢地区は津波で壊滅的な被害を受け、多くの人家とともに神社も流失した（写真11）。さらに、東京電力福島第一原子力発電所の事故により住民に避難指示が出されたこともあり、震災後は住民のほとんどが移転したため、残念ながら神社と祭りは再興していない。

(9) 芸能等

—

(10) 関連資料

—

参考文献・資料

「九十数年絶やすことなく 子供たちだけでだけで奉仕 福島県原町市の“天神まつり”」『神社新報』昭和43年(1968) 6月8日付

南相馬市博物館 DVD『南相馬の子どもの祭り 小沢と下江井の天神様のお下がり』(2008)

【二本松文雄】



写真1 「“お潮とり”の神事」(『神社新報』昭和43年6月8日付掲載写真 (株)神社新報社)



写真2 「小沢海岸で天神まつりの神幸式」(『神社新報』昭和43年6月8日付掲載写真 (株)神社新報社)



写真3 昭和43年の天神様のお下がり(小沢浜 相馬小高神社宮司と文化財調査員、小沢区長 S43.5.5 相馬小高神社)



写真4 籠馬を先頭に進む行列 (H17. 5. 5 南相馬市博物館)



写真5 天満天神社と神輿、太鼓、根ごしのサカキ、神饌櫃 (H17. 5. 5 南相馬市博物館)



写真6 御神輿行列 (小沢口H17. 5. 5 南相馬市博物館)



写真7 神饌櫃に柏餅を供える沿道の住民 (小沢 H17. 5. 5 南相馬市博物館)



写真8 防潮堤の階段から海岸に下りて潮水を汲む中学生たち (小沢海岸 H17. 5. 5 南相馬市博物館)



写真9 浜祭場での神事 (小沢海岸 H17. 5. 5 南相馬市博物館)



写真10 東日本大震災により流出する前の天満天神社 (小沢字小沢 H17. 5. 5 南相馬市博物館)

18. 南相馬市 綿津見神社

(1) 神社の概要

名称／綿津見神社（旧八竜権現） 通称：ハチリュウサマ

所在地／南相馬市原町区馬場字台78

由緒／寛治5年（1091）6月創建といわれ、八竜様と呼ばれていた。江戸時代は別当修験天雨山一明院。明治元年（1868）の神仏分離令を受け、明治3年（1870）に八竜神祠から綿津見神社と改称した。現在でも、社殿入口には旧社号「八竜社」の扁額が掲げられている（写真1）。祭神は鎌倉権五郎景政、八幡太郎義家（白馬に乗った甲冑武者）。

(2) 祭りの名称

綿津見神社大祭、八竜様

(3) 祭りの由来

浜に下りる祭りの由来は不詳だが、江戸時代には、例祭は毎年4月8日で、神輿が雫村の海浜に下りた。

(4) 祭日

昭和26年（1951）の大祭以降、大祭（御神輿渡御）は4年に1度に改め、今日に至る。例祭は毎年4月8日に近い日曜日または4月第1日曜日。

(5) 伝承団体

相馬太田神社宮司、馬場地区の人びと。

(6) 神幸経路（図1）

神幸地／60～70年前まで祭場地は河原（馬場地区を流れる笹部川だと思われるが、詳細は不明）だったが、現在は馬場公会堂。

神幸経路／江戸時代には別当、給人、郷土らが騎乗して従い、雫浜に下っていた。大正時代末からは雫浜および片倉への渡御を略し、馬場地区内のみ神幸となったという。

それ以前に雫浜・片倉へ渡御していたのは、高倉の国見山やニッ森の山頂で雨乞いした例のように、旧八竜権現を水神として祀り、浜や沼で雨乞いしたあと、片倉の鎌倉山で雨乞いしたのであるうか。

現代は、綿津見神社→（写真2）→滝ノ原立場（写真3）→（写真4）→欠下立場→土場立場→祭場地（馬場公会堂）→綿津見神社。

(7) 祭りの内容

潮水の扱い／馬場行政区長が雫浜で潮汲みの儀を行い、潮水を神前に供える。

実施内容／地区の発展、家内安全、五穀豊穡を祈願する。

なお、昭和初期には、渡輿の途中、字萱堀子と字原にかけた道路を利用した三角競馬が有名であった（図1参照）。日本では各地の祭礼で馬が神の乗り物として献上され、神聖な存在と考えられてきた。また、競馬を奉納することで神の力が増し、豊作や天下泰平がもたらされるとされていた。

しかし、太平洋戦争で馬も徴用され、開催不能となった。

(8) 祭礼の状況

平成23年（2011）3月11日の東日本大震災の原子力発電所事故後、住民、特に若い世代が移転して人口が減少している。交通整理も含めて人員が約60人必要。経費も数十万円程必要で、祭りの実施が難しくなっている。

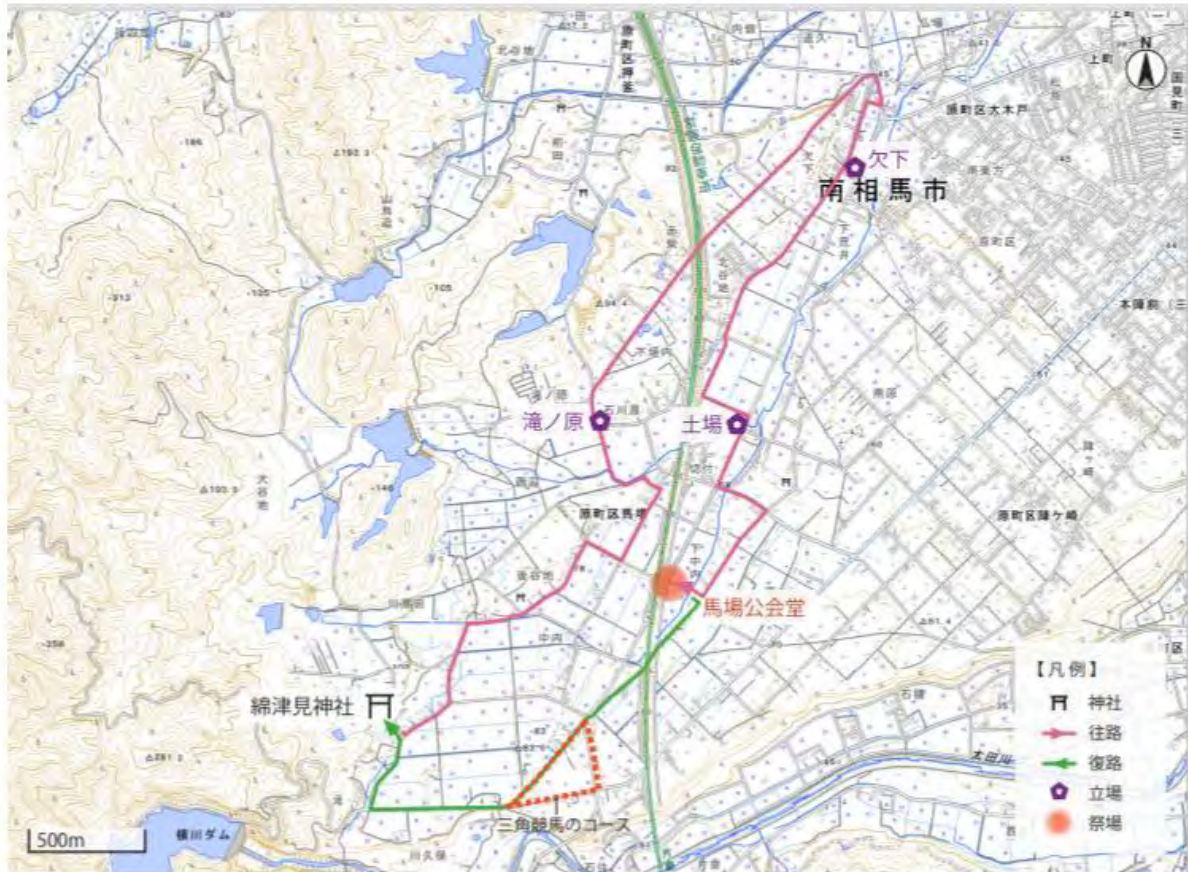


図1 綿津見神社の神幸経路（平成17年4月3日）

(9) 芸能等

平成17年（2005）の事例を以下に記す。

浜下り出発前、神社で神楽を奉納し（写真5）、各立場では諸芸奉納する。そして、祭場の馬場公会堂では広場に舞台を設け、走り駒の陣幕と紅白幕で飾り、11の諸芸が奉納された。

「平成17年4月3日執行 綿津見神社大祭 芸能奉納プログラム」によれば、馬場公会堂では、

- ① 相馬甚句他（唄）民謡教室
- ② 花笠音頭他（踊り）ひばり会
- ③ おいとこ（踊り）芸能保存会（写真6）
- ④ 子供達はプリキュア 若妻会と子供達
- ⑤ 相馬二編返し 滝一組
- ⑥ 手品 欠下組
- ⑦ 3B体操 団体 石神生涯学習センター
- ⑧ 壁塗甚句 垣の内組（写真7）
- ⑨ 水戸黄門、遊庭（踊り）婦人会
- ⑩ 宮城さんさ時雨（踊り）ひばり会
- ⑪ 相馬野馬追相撲甚句（唄）原町甚句会

という順で芸能が奉納された。

馬場地区では馬場芸能保存会という団体はじめ、いくつかの組（数軒の地縁組織）からもさまざまな民俗芸能が奉納される。一方、子どもたちに人気のアニメキャラクターや手品など、現代的な出し物もあり、高齢者から幼児まで楽しめる娯楽として人気がある。

こうした新旧芸能を取り入れていることが、馬場地区で多くの民俗芸能が伝承されている秘訣なのかもしれない。

(10) 関連資料

鎮守 旧村社 綿津見神社 由緒

馬場字台七八番地外四筆 境内二千九百平方メートル

本神社は、天長五年（西暦八二八）行方郡馬場村台の岡に源義家を祭り八幡宮と称す。寛治五年（一〇九一）馬場村の豪族馬場久太夫が守護神として祠を再建し、鎌倉権五郎景政八幡太郎義家を祭り当村の鎮守となし八竜社となす。祭神大綿津見神御神体、甲冑を帯、白馬に騎る。永享九年（一四二七）八竜大権現宮方四尺に建つ。十一代藩主治部少輔重胤創建す。重胤公、五台山に隱遁する二年前である。古来正月十日、当社に於て鹿狩の礼式を行う。歩卒の将一騎歩卒一隊を率い、列居し山先蓑を着し猪となりて出づ歩卒鳥銃を放ち、猪転々として其の式終る。是即ち、高胤公父君重胤公の病を見舞ため狩猟に託し五台山の居館に入り父君に調す。重胤公、其の孝志に感じ、爾来一年に三度の対顔有りと云う。天明荒年以來、右の規式を略し以後初祈禱を執行し、村内の弥栄と住民の安全五穀豊穰を祈願す。神酒料初穂錢土器萱等、公厨より出す。

毎年四月八日、祭礼を行う。御神輿雫村の海浜に下る。別当及び給人郷士騎して従う。渡輿の途中、立場で競馬を行う。乗切競馬、三角競馬が有名であった。大戦で馬も供出され、開催不能となる。

（神社入り口の石碑）

資料解説 江戸時代まで日本の宗教は神仏習合の時代で、相馬地方各地では八竜権現あるいは八竜大明神のお浜下りが行われていた。しかし、明治初年になると、明治政府によって神仏分離令がしかれ、仏教的な称号を改めることとなった。

八竜は竜神・水神としての性格から、海神である綿津見神を祀る綿津見神社と社名を改め、綿津見神社のお浜下りとして現代に続いている。

参考文献・資料

相馬市史編纂会編『奥相志』（『相馬市史』4 資料編1 1969）

荒孝一郎撮影 DVD『馬場 綿津見神社大祭（お浜下り）』（2001）

佐々木長生「四月八日と浜下り ―相馬地方の八竜神の浜下りを中心に―」（日本風俗史学会東北・北海道支部『日本風俗史学会東北・北海道支部 研究紀要』第4号 2022）

【二本松文雄】



写真1 神事御祈禱 社殿入口には旧社号「八竜社」の扁額（H17.4.3 南相馬市博物館）



写真2 阿武隈高地を背景に進む神幸行列 馬場字後谷地
(H17. 4. 3 南相馬市博物館)



写真3 滝ノ原立場で休み、共同飲食 (H17. 4. 3 南相馬市博物館)



写真4 沿道の住民が初穂料を上げ、お礼を受ける (馬場字赤柴 H17. 4. 3 南相馬市博物館)



写真5 綿津見神社で馬場の神楽奉納 (H17. 4. 3 南相馬市博物館)



写真6 祭場で郷土芸能奉納 (「おいとこ」馬場芸能保存会 馬場公会堂 H17. 4. 3 南相馬市博物館)



写真7 祭場で郷土芸能奉納 (「壁塗甚句」垣の内組 H17. 4. 3 馬場公会堂 南相馬市博物館)

19. 南相馬市 綿津見神社

(1) 神社の概要

名称／綿津見神社（旧八龍権現）

所在地／南相馬市原町区大原字宮下209

由緒／『奥相志』によれば、旧社であるが鎮座の始まりは不詳とされている。天文年間（1532～55）、相馬頭胤の 舅 が伊達晴宗との戦のため、小高城（現：南相馬市小高区）を出て、八木沢（現：相馬郡飯館村）経由で伊達郡掛田（現：伊達市霊山町）へ出軍した。途中の大原で、家臣の天野尾張からこの八龍神祠は鎌倉権五郎景政の神霊であると聞き、戦勝祈願したところ大勝利を収めたという。以来、神官田代氏が天野家に仮住まいして、国家安全・子孫繁栄を祈願して祭祀を行ったという。江戸時代は別当万蔵院。祭神は鎌倉権五郎景政（神体は騎馬像）。

(2) 祭りの名称

遷宮祭

(3) 祭りの由来

—

(4) 祭 日

『奥相志』に「例祭四月十七日、海浜の神幸有り」と記載されている。

大正7年（1918）も4月17日。平成10年（1989）頃からは4月29日（祝日・みどりの日）に変更。

(5) 伝承団体

相馬太田神社宮司、大原地区の人びと。

(6) 神幸経路（図1）

神幸地／江戸時代には萱浜。現代は大原と深野の大字境にあたる新田川河畔（栢木橋北側）。

神幸経路／江戸時代は萱浜まで神幸した。昭和50年（1975）頃までは、神輿がいったん帰社して神体



図1 綿津見神社の神幸経路（平成17年4月29日）

を別の白木の神輿に遷し、それから字町の佐藤家に下がって、その前の南北約100メートルの通り（旧街道）で「七回半の神輿」が往復した^{*}。この間に民謡「流れ山」をうたいながら、供奉者は神輿を素手でたたいた。神輿が壊れると豊作になると信じられていた。その後の神幸経路は、綿津見神社→栢木のお旅所（栢木橋北側の新田川河畔、大原と深野の大字境）→大原公会堂→綿津見神社。

^{*}全国各地の祭礼で「七度半の使」をするものがある。南相馬市鹿島区の日吉神社（南鹿-11）のお浜下りでは、川子地区の芸能「若殿行列」が、神社から「七度半の迎え」を受けて初めて出立するしきたりがある。これらは日本人の時間認識として、本来7日間の忌籠りをすることを表象したもので、忌籠りを完了したあとに頭屋や司祭者が出御することを意味すると考えられている。

（7）祭りの内容

潮水の扱い／ —

実施内容／祭りの朝、社殿に氏子や行政区の役員が参列し、神職が祈祷する（写真1）。社殿には大正10年（1921）4月17日に堀池雲岳（行年80歳）が描いた駒絵の陣幕を掲げる。雲岳は駒絵の名人として著名な画人で、相馬地方に多くの作品を残している。

社殿前で大原の神楽（写真2）と大原の獅子舞を奉納。神輿を中心に、五色幡、大幣が神社を出発する（写真3）。大原と深野の大字境、新田川河畔（栢木橋北側）の栢木のお旅所に神幸し（写真4）、大原の神楽と大原の獅子舞を奉納（写真5）。復路の途中、大原公会堂の立場で神輿を下ろして神事を行い、神社に戻る。

（8）祭礼の状況

明治初期までは萱浜海岸まで下っていたが、現在は大原と深野の大字境の新田川河畔（栢木橋北側）まで下る。

（9）芸能等

神幸の前に綿津見神社で、大原芸能保存会が大原の神楽と大原の獅子舞（四匹獅子舞）を奉納する。また、新田川河畔の祭場でも神楽と獅子舞を奉納する（写真6）。

（10）関連資料



大正時代の奉納額（綿津見神社 H17.4.3 南相馬市博物館）

資料解説 大正7年（1918）4月17日に社殿の竣工を記念して奉納されたもの。雨漏りによると思われる文字のにじみがあるが、神社の由緒や「毎歳四月十七日…神輿海濱ニ渡ラセラルル…」という浜下りに関する記事がある。

参考文献

相馬市史編纂会編『奥相志』（『相馬市史』4 資料編1 1969）

岩井宏實「七度半^{しちどはん}の使」の民俗的時間認識『日本人の民俗時間認識に関する総合的研究』国立歴史民俗博物館民俗研究部編（1986）

福島県神社庁相馬支部『管内神社誌』（2006）

南相馬市博物館企画展図録 第26集『相馬の画人 堀池雲岳をめぐる世界』南相馬市博物館（2006）

南相馬市『原町市史』第9巻 特別編Ⅱ「民俗」（2006）佐々木長生「四月八日と浜下り ―相馬地方の八竜神の浜下りを中心に―」（日本風俗史学会東北・北海道支部『日本風俗史学会東北・北海道支部 研究紀要』第4号 2022）

【二本松文雄】



写真1 綿津見神社で神事（H17. 4. 29 南相馬市博物館）



写真2 綿津見神社境内で「大原の神楽」奉納（H17. 4. 29 南相馬市博物館）



写真3 神幸行列が神社を出発（H17. 4. 29 南相馬市博物館）



写真4 栢木のお旅所（栢木橋北側 H17. 4. 29 南相馬市博物館）



写真5 栢木のお旅所で「大原の獅子舞」奉納（栢木橋北側 H17. 4. 29 南相馬市博物館）



写真6 大原公会堂立場で神事（大原字台畑 H17. 4. 29 南相馬市博物館）

20. 南相馬市 益多嶺神社

(1) 神社の概要

名称／益多嶺神社 通称：甲子大国社、大井のダイコクサマ

所在地／南相馬市小高区大井字宮前144

由緒／延喜式内社行方八社のうちの一社に比定されている。

『奥相志』の「小高郷大井邑」の「甲子祖大宮祠」には、

大井、塚原の鎮守で例祭は4月8日。甲子祖大宮大明神と称した。中ノ郷北原に鎮座していたが、応永2年（1395）大井村に移る。以来4月8日に神輿を海浜に下す。

とあり、還幸のとき垂谷落としの神事があり、その内容を記している。また「他邦の養蚕をなす者当祠を信じて来拝し守札を受く」というように、養蚕守護の神であり、危険な仕事に従事する船乗り、大工、炭焼きなどは、産屋祭で「おゆるし」を受けると災難を免れるという信仰もある。

ダイコクサマすなわち大国主大神、少彦名大神。

(2) 祭りの名称

大祭は3日にわたって行われた。前日はオコモリ（お籠り）とかオベッカ（お別火）といい、2日目の本祭りには神輿の渡御があり、オハマクダリ（お浜下り）とかオサガリともいう。オシオトリや垂谷落とし（タライオトシなどとも）もこの日におこなった。3日目が裏祭り（ウラマツリ）で、大井の人たちは重箱持参で境内に集まって終日楽しみ、演芸などの催し物もあった。

昭和19年（1944）までは大祭を続けてきたが、戦時中の事情で神輿渡御に伴う神事は中断を余儀なくされ、戦後は2度再興されたものの神輿の渡御はなくなった。現在でも祭りは続いているがかつての賑やかさは失われている。

(3) 祭りの由来

—

(4) 祭 日

大祭は4月29日（昭和の日）。古くは旧暦4月8日であったが、大正5年（1916）から新暦5月8日に変更になった。しかし農繁期と重なるため、昭和38年（1963）に新暦4月8日になり、平成に入ってから4月29日の「みどりの日」に変わった。

昭和37年（1962）までは大祭前日まで桑畑をうない終え、3日間は「手休み」で農休日になり、神社に参拝した。祭りが終わると水田の仕事にとりかかるものとされていた（『大字史おおい』）。

また、当社では正月、節分、大祭、甲子祭には神社で黒酒（濁酒）を醸し、神前に供え参拝者にふるまってきたが、近年は酒造会社に依頼している。

(5) 伝承団体

益多嶺神社宮司、益多嶺神社氏子。戦後しばらくまでは「祭典組」が主体になって祭りを行った。昭和20年（1945）頃の大井地区は100戸ほどからなり、9～10組ほどの隣組に分かれていた。祭典組は大祭を執行するための組織で、隣組から選出された役員と、大井地区内の若者（セイネンと呼ばれた）から成り、総勢40～50人程になった。役員は40歳代の人で、祭りには紋付羽織に袴を着用し、白足袋を履いた正装、若者たちはシラハリ（白丁）を着て、烏帽子を被り、素足に草鞋を履いて参加した。加入したての若者にとって祭典組の役員は威厳があった。

(6) 神幸経路 (図1)

神幸地／塚原の「お浜」、垂谷

神幸経路／益多嶺神社→岩ノ迫踏切→安藤宅→善丁橋→荒町第二踏切→大井甲子橋→小高・北泉線→

塚原公会堂→K宅→お浜→お諏訪様（諏訪神社）→H宅→M宅→S I宅→小高・北泉線北上→野馬道（村境）→垂谷→白幡神社→I宅→S A宅→番屋前→A宅→大井会場→久能→益多嶺神社。
 基本は徒歩で、往復5キロメートルほどの行程である。



図1 益多嶺神社の神幸経路（昭和59年5月8日）

(7) 祭りの内容

潮水の扱い／潮水を容器に汲み、潮水をサカキにふりかける。

実施内容／潮水を汲むことをシオトリとかシオカキという。神輿を担ぐ青年が容器を持って潮水を汲み、これをサカキに振りかける。潮水をかけたサカキをシオカキとも称した。また、このあと行われる垂谷落としの神事に出場する馬も、それに参加する青年に曳かれて海に入り潮垢離をとった。神輿につけたものと同じ紙垂を馬の尾やタテガミに結わえておいた。

オベッカ：本祭り前日のことで。オコモリともいう。神社の境内の池の傍らに2間×3間ほどの「青年会場」とか「祭典事務所」と呼ばれる建物があって、ここで神楽や余興の踊りの練習をした。参加者は各自潔斎をし、神社で醸したドブロクを飲みながら一夜を過ごす。夕食と本祭り当日の朝食はここで煮炊きしたものを食べた。古くは7日ほど前から社務所に籠り、食事もよそでは口にできなかった。

大祭の前日は祭典組の祭典委員長や係長、副係長などの役員がここに詰め、大祭の行列の配役を決めた。

本祭りのオハマクダリ：本祭りの早朝は大井の堰や小高川で水垢離をとってから、日の出の時間に神社に隻合し、神事のあと神輿にご神体を納めて「お行列」をつくる。神輿行列が塚原浜に神幸することをオハマクダリ、オサガリといい、浜と垂谷で神事を執り行いながら還御する。行列の配役は別記。

行列につく「おろし馬」は、還御途中の垂谷落としの神事に出場する馬で、これらの馬も一緒に

水垢離をとって身を清めた。

行列は笛や太鼓を打ち鳴らしながら大井・塚原地区を一巡し、集落の人が出迎えるなか、塚原浜の「お浜会場」に向かう。会場到着は午前10時前後になる。お浜会場には船のソロバン（枕木）を積んで砂を盛り上げ、神輿を安置する。

オナマの奉納：塚原の船方（漁師）は、神輿が浜に到着すると同時に、獲った魚を奉納する習わしがあった。そのため、当日は沖合800～900メートルほどにテンマセンを漕ぎ出し、奉納するカレイやアイナメを釣る。神輿の動きを沖からながめて浜に着くのを待つ。奉納する魚は「オナマ」と呼ばれ唐櫃に納めて供えられた。

オシオトリ、シオカキ：神輿の担ぎ手の青年は、海に入りタライに潮水を汲む。これをオシオトリ、オシオゴリといい、汲んだ潮水に浸したサカキをシオカキとよぶ。シオカキで神輿を祓い祭場も清め、このあとの垂谷落としの祭場もシオカキで清める。このとき、おろし馬と垂谷落としの参加者も海に入ってオシオトリ、オシオゴリをする。

垂谷落とし：馬による作占の神事で「作見」などともいい、稲の作柄を占った。3頭のおろし馬は農家から借り、稲の「早生」「中生」「晩稲」に見立てる。おろし馬が急坂を順調に下ることができれば、その作柄は良好と判断する。

尾根に神輿を据えてシオカキで場や一同を清めてから始まる。おろし馬に、シラハリを着て烏帽子をかぶり草鞋履きの「乗り手」がまたがり、落馬しないよう麻縄で右手を馬のタテガミ、左手を尾に縛り付ける。馬の前方左右に「前っぴき」2人がつき、馬のハミ（クツワの馬が噛む部分）と馬の首のうしろで手を繋ぐ。乗り手の両脇には、腕を綾に組んだ「脇役」が左右に数人で乗り手を支え、ほかの者は馬の後足を折りたたんで馬の尻を押さえつけながら急坂を引きずり下ろす。数十メートルの急坂を滑走する危険な神事であった。どんな暴れ馬でもおろし馬をさせるとおとなしくなった。北側の草山は黒山の人だかりになった。

垂谷落としを終えると、行列を整え、摂社の白幡神社に立ち寄り、奉納されたニンニクを唐櫃に納めてから神社に還幸し、ご神体を本殿に納めた。

裏祭り：翌日は裏祭りで、境内ではいろいろな催しがあつて賑わった。昭和30～40年代までは、赤飯を炊き重箱持参で家族そろって参拝し、境内で一日を過ごした。現在も裏祭りにニンニクを求める人が多い。

(8) 祭礼の状況

塚原の浜と神社の間を往復する浜下りの神輿行列、お浜でのオシオトリ、垂谷落としの神事は昭和19年までは毎年の行事であったが、当局（警察か）からの達しで翌20年に中止され、それ以降中断している。しかし、昭和38年5月8日と昭和59年5月8日の大祭は「遷宮祭」として実施し（写真1～4）、オハマクダリの神輿渡御やオシオトリを行った。垂谷落としの神事は昭和38年の遷宮祭には実施されているが、昭和59年の大祭で行われたかどうかは確認できていない。戦後の2度の祭りを除き、神輿渡御とそれに伴う神事は実施されていない。

明治の頃までは、境内で競馬や乗馬して球を打ち合う打球も行われていたという。

(9) 芸能等

大井の神楽が行列に従い奉納する。大井の神楽は太神楽で、正月元旦、大祭、初甲子祭、終甲子祭に神前で奉納する。かつては旧正月14日、15日に悪魔祓いとして集落内各家を回ったが、戦後各家回りは中断した。戦時中は大井祭典組が神楽を継承したが、戦後再び青年が担うようになった。しかし、若者が少なくなり、平成2年（1990）に大井神楽保存会を結成している。

大井の青年団には神楽部、おどり部、余興部があり、余暇を見つけて練習し、神社の大祭の裏祭りなどに演じた。青年団には田植踊もあつて旧暦1月14日、15日には各家を回ったという。

(10) 関連資料

「昭和38年5月8日 益多嶺神社お浜下り列帳」(抜粋) * ()内の数字は人数

祭典長、副祭典長、前駆馬、社号旗(4)、房付五色旗(5)、大麻(1)、塩(1)、洗米(1)、神楽(2)、大榊(2)、大五色旗(5)、大太鼓(2)、笛(3)、神官(1)、榊箱(2)、唐櫃(2)、中五色旗(5)、小太鼓(2)、笛(2)、明妙(1)、照妙(1)、五色榊(3)、鋒・鈴鋒・塩榊(1)、大拍子(1)、奉幣(3)、神籬(1)、御神輿(8)、傘(1)、小五色旗(5)、祭典係(3)、五色旗(5)、おろし馬

大字史おおい編纂委員会編『大字史おおい』(2002)

参考文献・資料

佐々木長生「垂谷落としの神事」東北民俗の会『東北民俗』8(1973)

南相馬市『おだかの歴史』民俗編3 町場と里の民俗(2018)

【岩崎真幸】



写真1 浜下りの行列。先頭は榊箱(大井から塚原までの道中 S59.4.8 西村利秀氏)



写真2 浜下りの行列。行列には騎馬武者がつく(大井から塚原までの道中 S59.4.8 西村利秀氏)



写真3 塚原浜の祭場(S59.4.8 西村利秀氏)



写真4 塚原浜祭場に安置した神輿(S59.4.8 西村利秀氏)

21. 南相馬市 稲荷神社

(1) 神社の概要

名称／稲荷神社 通称：エビスワイナリ

所在地／南相馬市小高区蛭沢字広畑206

由緒／『奥相志』によれば、寛文年間（1661～73）に祠を再建し、貞享3年（1686）には鳥居が寄進された。また、奇怪で信じるに足らない説としながらも、ある時相馬の殿様が放った鷹を狐が食べてしまい、殿は怒り、狐は稲荷の使いであるからと言って稲荷の宮を壊してしまった。6・7年後、殿が宮中からの命で近衛公をもてなした際、近衛公に蛭沢の明神がよりつき、「祠を失い浮浪して来た」といって、殿の許しを得た。近衛公が稲荷を呼ぶと大きなガマの姿に化け、さらに元服して戴冠正装した男子に化けて拝謁したため、殿はこれに感動して社殿を再興したという。古来、霊験が顕著ということで、領内だけでなく他領からも多くの参拝者が訪れた。

江戸時代には中村藩歴代藩主の信仰も篤かった。18世紀初めから19世紀中頃まで相馬昌胤をはじめ、尊胤、怨胤、益胤、充胤らの歴代藩主が参拝に訪れ、社田の寄進、多額の寄付を受けている。その間の宝暦5年（1755）9月25日、火災に遭い社殿・縁起の書を焼失したため、鎮座の来歴は不詳とされている。またその際、ご神体は自ら54メートルほど南の樹上に逃れたという。宝暦6年（1756）、本殿・拝殿を元のように再建している。江戸時代末の祠官は佐藤大和正。

(2) 祭りの名称

お潮入れの神事、オサガリ

(3) 祭りの由来

浜下り神事の由来は不明。

(4) 祭日

毎年（不定）2月初午祭、5月5日

(5) 伝承団体

稲荷神社宮司。

江戸時代から近代の地引網漁、井田川浦の浦漁、近海での鰹漁などの盛時には、多くの漁業関係者の信仰を集めた。2月初午の祭礼には、地元の漁師だけでなく相馬やいわきなど地元以外の漁業関係者による代参講の参拝者で賑わった（写真2・3）。現在のお浜下りには、蛭沢地区や浦尻地区の人びとが参加している。

(6) 神幸経路（図1）

神幸地／昭和32年（1957）、旧2月初午には、御前浜と称する浦尻浜で「お潮入れの神事」を行った。

稲荷神社→女場→蛭沢字藤谷の十字路（蛭沢郵便局）建場→井田川御祖神社建場（写真4）→宮田川→浦尻→浦尻浜→稲荷神社

(7) 祭りの内容

潮水の扱い／神官がサカキを潮水に浸して神輿に振りかける。

実施内容／昭和32年（1957）の祭りのようすは以下のものであった。

それ以前と同様に、旧2月初午の前日、青年たちによる夜籠りをした。初日は例祭、2日目は正遷宮、3日目は後祭り。正遷宮に神輿を担ぐのは浦尻の漁師たちで、神輿を中心に行列を組み、蛭沢・浦尻の集落を回った。浦尻浜で「お潮入れの神事」を行い、神社に還御した。

沿岸漁業の盛時、蛭沢の農村地域では稲荷神は豊穰をもたらす神といい、浦尻の漁師たちは神輿が出ないと海が荒れて不漁になるといって信心し、巡行を心待ちにしていたという。



図1 稲荷神社の神幸経路（昭和32年旧2月初午）

(8) 祭礼の状況

大正初期まで、正遷宮祭は20年ごとに行われ、^{つのべうち}角部内の貝塚浜へ神輿が下がり、潮垢離をとった。大正後期からは、小遷宮と称して毎年浦尻浜にお下がりした。

昭和12年（1937）の日中戦争から昭和20年（1945）の太平洋戦争終結までは大戦の非常時ということで中止されたが、同27年（1952）に復活し、浦尻浜へ浜下りした（写真5）。そして昭和32年（1957）、20年ぶりに蛭沢、浦尻の集落を神幸し、潮垢離をとったのが最後で、以後は中断している。

平成23年（2011）の東日本大震災では、氏子や信者の多い小高区や浪江町などの沿岸部の集落では津波により多くの人命と家屋を失い、壊滅的な被害を受けた。さらに福島第一原子力発電所の事故により、原発から20キロメートル圏内にあるこの地域の人びとは避難生活を強いられた。震災後、各種の復興事業が進んでいるが、令和7年（2025）現在でも小高区の人口は震災前の約3分の1にとどまっている。地域の復興は道半ばで、祭礼の復興も厳しい状況にある。

(9) 芸能等

諸芸奉納では「浦尻の神楽」（写真6）はじめ各集落から種々の芸能が奉納された。時には浪江町刈宿^{かり}の神楽など他地区の神楽が奉納されることもあった。浦尻の神楽は、浦尻集落の村祈祷と蛭沢稲荷の祭礼以外には舞うことが禁じられていた。

(10) 関連資料

参考文献・資料

相馬市史編纂会編『奥相志』（『相馬市史』4 資料編1 1969）

南相馬市『おだかの歴史』民俗編1 海辺の民俗（2008）

【二本松文雄】



写真1 稲荷神社 (R7. 3. 31)



写真2 初午祭り当日の神社の入り口。初午にはかざぐるまを買ったり奉納する習俗がある (H19. 3. 16)



写真3 初午祭り (稲荷神社幣殿 H19. 3. 16)



写真4 井田川御祖神社。井田川字西迫 井田川浦干拓事業の完成をたたえ、干拓地の農業繁栄を祈願して、干拓地を見渡せる丘の上に建立された (R7. 3. 31)



写真5 昭和27年の「お潮入れの神事」(浦尻浜 『小高の歴史』 民俗編1 海辺の民俗 より転載)

写真6 稲荷神社の初午の祭りで奉納された浦尻神楽。浦尻神楽は稲荷神社の祭礼以外は浦尻から出さない、門外不出の神楽であった。東日本大震災以降、神楽組は活動を休止している (H19. 3. 16)



22. 浪江町 貴布祢神社

(1) 神社の概要

名称／貴布祢神社

所在地／双葉郡浪江町大字棚塩字東原66

由緒／東日本大震災後の平成28年(2016)に神社入口に建てられた説明板(表面)より引用する。

村社 貴布祢神社

鎮座地 浪江町大字棚塩字東原65(※番地は原文ママ)

御祭神 高閼神 暗閼神

摂社 大山祇神社(平成23年3月倒壊)

天武天皇の大室2年(西暦702年)、染羽国棚塩字東原の地に勧請す。鎌倉時代より標葉氏代々の崇敬なるも15世紀より相馬市所領となり特に元禄時代藩主昌胤公尊信厚く代々木幡氏(豊氏)が社家として奉仕し現在に至る。公遺品多数社家に伝わる。

平成23年3月11日の東日本大震災により社殿等大破、氏子なる南棚塩在住の住民83戸津波にて全戸流失、更に東京電力第一原発の放射能汚染事故により立入禁止区域となり全町民避難す、平成28年3月現在も居住制限され諸人県内外に離散のままにて帰還の見通しなし

平成28年3月 宮司 木幡輝秋 謹書

(2) 祭りの名称

おはまおり、貴布祢神社遷宮祭

(3) 祭りの由来

『奥相志』には棚塩村の項に、「神社／津の明神 貴船明神合殿 宮方五尺 東原に在り。社地は山、老松森々社前に坂有り、高さ六七尺ばかり。里社。祭礼九月十九日。社司豊兵庫頭。伝に云ふ、往古大室某年九月十九日両神海中より出現す。享保十九甲寅年十二月宮火災に罹り消失す。縁起書棟札焼亡す。是より先宝永中宮再建の時昌胤公反亀甲の紋を寄附す。火災の時紋を放ち社内に納む。今に存す。」とある。また、渡邊市太郎『大日本名蹟図誌』では、「福島県磐城国双葉郡幾世橋村大字棚塩鎮座 村社貴布祢神社及地藏堂之景」として境内図と由緒が掲載され、「村社 貴布祢神社／祭神 高たか籠おかのかみ神／合祀 天日大神 塩釜大明神 養蚕神／当社ハ文武天皇ノ大室二年九月十九日海中ヨリ光明ヲ放テ出現シ玉フ」などの記述がある。

上記の由緒のいずれも祭神が海中から出現したと伝え、浜下り行事の伝承とあわせて、ご神体の漂着伝承も有する神社の一つである。

棚塩の貴布祢神社は、木幡家が平成23年(2011)の東日本大震災の発災当時まで神社の傍に居住し、長く社家を務めてきた。現宮司の木幡輝秋氏(昭和9年[1934]生まれ)は貴布祢神社を本務社とし、ほかに兼務社として双葉町内3社の宮司を務めている。本稿の記載内容の多くは木幡宮司からの聞き書きによっている。

その木幡家に伝わる先祖代々の記録「新古万津代々家記録帳」(嘉永6年[1853]4月改)には、貴布祢神社ではなく妙見社の記述ながら「一、安政五戊午初正月廿四日御取付／妙見社御屋根替ニ付三月十八日御浜下り…」の一文が見られ、安政5年(1858)時点での「御浜下り」の語が明確に確認できる貴重な資料である(資料①)。貴布祢神社の浜下りは不定期ではあるが、社殿や境内(石段や鳥居等)について新築や修繕といった何らかの工事を行った場合に「遷宮祭」と称して、浜下り行事を行うものであったという。

直近の過去の例としては昭和63年(1988)と昭和60年(1985)にいずれも遷宮祭として浜下りを実

施しており、この時は4年間に2回という頻度での開催となった。具体的には昭和63年10月23日(日)の貴布祢神社本殿屋根替工事竣工および記念碑除幕式に伴う遷宮祭、昭和60年10月20日(日)の貴布祢神社拝殿修復に伴う遷宮祭で、いずれも社殿修理や屋根替などの工事完了を記念して神輿が浜へと巡幸し、潮水を汲んで神前に供えるなどの神事を行った(写真1~9)。

関連資料に掲載の神社所蔵および木幡家所蔵の棟札や古記録類を見るかぎり、明確に「御浜下」(明治30年〔1897〕)、「浜御神幸」(大正7年〔1918〕)の記述があり、ほかに社殿修繕等を記念した棟札類にも「正遷宮」「遷座」「小遷宮」「遷宮祭」などの記載があることから、その都度、浜への神幸も伴っていたとみられる。

(4) 祭 日

『福島県における浜下りの研究』(1997)によれば9月19日とあり、前述した由緒の祭日と同様である。もっともこれは旧暦9月19日のこととみられ、宮司からの聞き書きによればその後日程は変化しており、月遅れの10月19日が例大祭の日となったという。宮司の経験した範囲では、より人の集まりやすい前後の土日に実施することが多かった。また、神社で何らかの工事をする場合は、その竣工式は10月の例大祭にあわせて行うようにしていたという。前述したように、直近の浜下り行事が行われた昭和60年、同63年も、また後述する東日本大震災後、平成30年(2018)に行われた社殿・境内等の復旧工事に伴う竣工祭も、いずれも10月19日前後の土日に開催されていることと一致する。

いっぽう、関連資料にみるように、貴布祢神社の浜下り行事の古い行列帳には万延2年(1861)2月27日、明治14年(1881)4月6日、同44年(1911)4月8日(月齢3月10日)、という記載もあり、祭日は一定していない場合もあることが分かる。これは屋根の葺き替えなど、社殿等の修繕が完了した時点で随時、遷宮祭(浜下り行事)を行っていたものと解釈することができる。

(5) 伝承団体

貴布祢神社宮司、棚塩地区氏子、氏子総代(A家が世襲する永代総代と通常の氏子総代とがある)。

(6) 神幸経路(図1)

神幸地／棚塩の海岸(旧マリンパークなみえ、旧棚塩排水機場の付近の海浜)

神幸経路／神社の参道を下りて直ちに西進、その後左折し集落の家並みの方向へと南下する。昭和63年の場合、図1の総代宅①をお旅所として行列が小休止した。その後、永代総代宅(図1の総代宅②)の前を必ず通過する。また、その南側のお旅所にはテントが設えられており、行列が長めの休憩をとる。それから地区の南端(請戸川北岸)まで南下し、その後は北東へのびる道を進み、各氏子総代宅の前を通りつつ集落内を神幸する。次に棚塩の海岸へと向かい、浜下りの神事を行う。神事終了後、最後に神社正面の集落を通過して参道を直進、還御となる。

(7) 祭りの内容

潮水の扱い／その年の若い年男が白装束で海に入り手桶に潮水を汲む。その潮水を神前に供える。

実施内容／祭礼当日は、神社にて神輿へご神体を移御する神事ののち発輿となる。神社出発時には列帳を読み上げ、行列を整える。神社を出発したあとは、図1の神幸経路のとおり、神輿の行列が集落を巡幸し、棚塩の海岸へと向かう。棚塩の海岸につくと、神輿は紅白の幕と注連縄を張り巡らした祭場(お旅所)に安置される(写真5)。若い年男が白装束で海に入り手桶に潮水を汲む(写真6)。その潮水は神前に供えられる。

近年の浜下り行事に関する行列帳などの資料については、東日本大震災での宮司宅の被災(津波による水損や長期避難による経年劣化)により多くが失われた。残された資料②の「村社貴布祢神社葺替遷宮式列帳」(明治44年4月8日)をもとに、行列の役割をまとめて順番に示すと以下のとおりである。

御先乗／先塩／道祖／社号旗／儀仗／剣武者／神職／御神馬／榊箱／神職／造花／武者／神楽



図1 貴布祢神社の神幸経路（昭和63年10月23日）
 ＊昭和62年6月30日国土地理院発行2.5万分1地形図を加工して作成

／笛／太鼓／大榎／大麻／神子／神職／篤志家奉幣／御幣／五色旗／御水／甘菜／辛菜／海藻／木実／菓子／赤飯／餅／神魚／玄米／神酒／洗米／四神鉾／神籬／棟札／御神鏡／御神幣／奉幣／御神輿／奉幣／四神鉾／蚕養神社々号／神鏡／神幣／御色幣／神職／五色旗／造花／殿乗
 これらの役割は明治44年時点のものであり、その後、武者や神馬等なくなったものや不明のものも多いが、写真の残る昭和期の浜下り行事でも基本的に引き継がれていることが分かる。先塩や社号旗（写真3、先塩として、列の先頭を行く白装束の人物が三方に乗せた塩を撒いている）、神子（写真4、装束を着けた稚児が参加している）が確認されるほか、棟札、大榎、御幣、五色旗、各種の神饌などは参列者の集合写真（写真9）からも確認できる。

海岸の祭場では、神事のあと、棚塩の神楽（南棚塩の神楽）が奉納された（写真8）。浜での神事が終了すると、神輿は図1の神幸経路のとおり、神社へと還御する。

(8) 祭礼の状況

棚塩地区は海に面しており、東日本大震災ではとくに津波により壊滅的な被害を受けた。貴布祢神社自体は小高い丘の上にあることから、丘を登る石段の途中まで津波が来襲したものの、社殿のあるところまでは浸水しなかった。とはいえ、本殿一部損傷（瓦屋根、玉垣、板壁）、拝殿一部損傷（傾斜）、板戸等建具全損（余震等による）、社務所全壊、摂社大山祇神社全壊、鳥居・灯籠・記念碑等石造建造物全壊、という甚大な被害であった（被災状況は『東日本大震災 神社・祭り一被災の記録と復興一写真編』参照）。社家である木幡家も貴布祢神社のすぐ下（参道の脇）にあり、とりわけ1階部分で津波の被害が大きかった。

長く暮らしてきた木幡宮司夫妻の話では、棚塩地区は戸数の変化の少ない集落だったという。跡取りが家を継いで地区に残り、それ以外のきょうだいはみな地区外に居を構えるため、戸数はほぼ一定であった。木幡氏は郷土史家としての著書もあり、有志で「大字棚塩史」の編纂を企図したこともあ

る。東日本大震災後の平成28年に神社入口に建てられた説明板（裏面）には「棚塩略史」を記しており、以下、棚塩地区の歴史と被災後の現状に関する情報として引用する（／は改行位置）。

棚塩略史／浪江町大字棚塩は、北は浦尻、南は請戸川に接し、北半は洪積台地、南半は低平な沖積平野、鹿屋敷遺跡（棚塩霊園地）や狐塚古墳などから、先史時代より人々が居住していた事がわかる。江戸時代から明治22年迄、北標葉郷棚塩村（店塩村・棚野塩村）、元禄時代には136戸、天明3年（西暦1783年）55戸、文久元年（西暦1861年）70戸（社家1戸・山伏1戸・給人6戸・農家62戸）人口469人の記録がある。／昭和50年150戸あり、この頃、東北電力の原発誘致問題を機に南棚塩と北棚塩に分裂した（昭和52年）。／平成23年3月の東日本大震災時、南棚塩は83戸津波で全戸流失、13人が犠牲となった。その時の東電原発事故によって強制避難させられ、棚塩住民は1都道11県に避難した。その後居住制限地域とされ、帰郷不能のまま現在に至っている。

平成28年6月記 宮司

上記のとおり、東日本大震災では、棚塩地区のかつて氏子集落があったところは津波で全戸流失の被害を受けた。このため平成24年（2014）2月4日以降は災害危険区域として指定され、歴史ある集落でも元の場所へ住居を建てることはできなくなってしまった。

貴布祢神社の浜下り行事は、昭和63年10月23日の遷宮祭を最後として現在に至るまで行われていない。とくに、平成30年10月13日（土）には「貴布祢神社大震災復旧工事竣工祭」として神事が行われたが、上記のとおり災害危険区域となった棚塩地区に現在民家はなく、居住者もいないため、浜下り行事を行うことはできなかった。その日、竣工を記念して社殿に納められた棟札には以下のように記されている（／は改行位置）。

奉貴布祢神社大震災復旧工事竣工祭一字／宮司 木幡輝秋（※祢宜・区長・副区長・会計・永代総代・総代長・総代会計の氏名省略）／于時平成三十年十月十三日／工事費（※社号碑・鳥居幟支柱・拝殿等木工事の諸経費の金額省略）／平成二十三年三月十一日東日本大震災により氏人家屋八十三戸全流失、山神社倒壊・石造物全壊・拝殿も傾斜し被害甚大なるも東京電力原発事故による放射能拡散により強制避難指示・立入禁止区域となり修復不可能となった。五年後立入解除となり、ようやく平成二十九年より復旧工事を開始、社号碑・灯籠・幟支柱・石鳥居を順次再建、平成三十年四月拝殿修復工事、山神社再建を始め九月に工事完成し本日竣工祭を斎行す。

その後も貴布祢神社の境内は震災後から現在に至るまで、社殿や鳥居、境内の石碑等、断続的に修復や整備が続けられおり、令和6年（2024）12月にも、参道の中腹に新しい鳥居が建てられた。現在、宮司や氏子が集まる行事としては正月元旦の神事のみになっている。

（9）芸能等

棚塩地区には住民による獅子神楽が伝承されていた。『浪江町史』別巻Ⅱ 浪江町の民俗（2008）には「南棚塩の神楽」として記載され、貴布祢神社の直近の昭和63年10月23日の浜下り行事（遷宮祭）の写真にも、海浜に設けられた祭場での神楽奉納のようすが写っている。現在は踊り手もなく、道具類は宮司宅で保管している。

棚塩の神楽／木幡宮司の著した『浪江町棚塩の記録』によれば、「棚塩の神楽は相馬藩主21代の相馬昌胤公が、元禄14年、城主をやめ幾世橋に北原城を構築し標葉領を分封して隠居した折、標葉各郷の総鎮守に相馬妙見神社（現在の初発神社）を幾世橋の金ヶ森に造営した。また、その時一緒に築城した北原城の殿中に養神殿という神殿を建立した。昌胤公が妙見社と養神殿守護のために、伊勢へ江戸の彫工師山崎小五郎を遣わし、二つの神楽を創作させたのが今の幾世橋と棚塩の神楽である。／現在の神楽の一つは初発神社の宝物角神楽で、もう一つは木幡氏が奉仕した養神殿の女神楽で、棚塩貴布祢神社の宝物として残っている。これらの二つの神楽は、幾世橋では夫婦神楽と呼ばれている。」とある。

神籬式人	掃部関九八郎／安倍貞能
棟札	
御神鏡	安倍寅太郎
御神幣	村長 志賀孝蔵
奉幣	安倍保治郎／安倍政正
御神輿	
奉幣	鈴木勘治／木幡勉
四神鉾式人	志賀敏／鈴木伊助
蚕養神社々号	中野甚之助
神鏡	志賀寅松
神幣	上田寅治
御色幣	一同
神職	
五色旗	前田巳之吉／原下才治郎／菅野仁吉／佐藤巳之松／山崎庄之助
造花	舛田留吉／荒久蔵／山田覚治
殿乗	安倍義建 (貴布祢神社所蔵)

③ 福島県浪江町棚塩鎮座貴布祢神社所蔵棟札一覧 (表 1)

* 木幡輝秋宮司作成、棟札45点の表題と全文翻刻を記した一覧のうち、表題の一覧部分を抜粋して表にした。

No.	和暦	西暦	表題
1	寛保2年	1742	奉造替貴布根大明神宮村安穩運命延長祈願
2	寛保2年	1742	奉修復八幡宮一字
3	宝暦8年	1758	奉建立鳥居一字
4	天明2年	1782	奉造替貴布根大明神天日大権現
5	天保3年	1832	疱瘡守護神正遷宮御璽
6	天保12年	1841	奉造當拝殿清女御法樂氏子繁栄處
7	天保13年	1842	奉造宮天日宮平朝臣充胤公御武運長久
8	嘉永6年	1853	奉造替立貴布祢宮天日宮太守充胤公御代武運長久
9	嘉永7年	1854	奉造替疱瘡守護神氏子疱瘡安全如意攸
10	万延2年	1861	奉遷宮貴舩宮天日宮御武運長久御国家安全大漁満足攸
11	元治2年	1865	卍奉造作白幡大明神宮仁法安樂祈攸
12	明治3年	1870	掛卷毛畏幾貴布根神社棚塩村氏子弥栄幸賜
13	明治4年	1871	掛卷毛畏幾東照宮棚塩村令弥栄幸賜
14	明治4年	1871	掛卷毛畏幾幾世橋村住吉大神玉津島大神口御舎
15	明治4年	1871	掛卷毛畏幾三宮大神北幾世橋村氏子弥栄幸賜
16	明治4年	1871	掛卷毛畏幾稻荷明神南幾世橋村氏子弥栄幸賜
17	明治14年	1881	正遷宮貴布祢神社為拝殿御屋根葺替
18	明治20年	1887	奉修理貴舩神社本社幣殿拝殿石階遷宮祭典
19	明治21年	1888	奉正遷宮稻荷・熊野神社社頭宮中康栄祈攸
20	明治24年	1891	蚕養神社御分靈鎮座式祭典美璽
21	明治27年	1894	奉屋根八坂神社白幡神社遷座祭典璽
22	明治30年	1897	奉葺替村社貴布祢神社本殿拝殿玉垣改造正遷宮御璽
23	明治30年	1897	養蚕神社正遷宮御浜下神幸祭典之璽
24	明治33年	1900	奉建設花崗石華表一基神事式祭典美璽
25	明治14年	1881	秋葉神社御神幸村内安全攸
26	大正4年	1915	奉納貴布祢神社大前錨一丁
27	大正7年	1918	奉改築貴布祢神社拝殿浜御神幸璽氏子繁栄守護
28	大正7年	1918	奉改築貴布祢神社御拝殿屋根瓦葺竣工美璽
29	大正7年	1918	奉修繕小牛田山神社社殿御神幸璽
30	大正7年	1918	奉瓦葺替小牛田山神社神幸美璽

No.	和暦	西暦	表題
31	大正7年	1918	奉瓦葺替小牛田山神社神幸美璽
32	昭和4年	1929	奉新設貴布祢神社石段八十三階小遷宮璽
33	昭和8年	1933	奉葺貴布祢神社拝殿正遷宮美璽
34	昭和8年	1933	奉搬出貴布祢神社拝殿齋材正遷宮美璽
35	昭和8年	1933	奉造宮貴布祢神社拝殿正遷宮美璽
36	昭和10年	1935	新築撰社小牛田山神社遷座祭美璽
37	昭和25年	1950	奉貴布祢神社境内地譲与許可報告祭之璽
38	昭和25年	1950	奉貴布祢神社御昼替報告祭璽
39	昭和25年	1950	奉貴布祢神社氏子復員完了報告祭璽
40	昭和28年	1953	奉神社御土台替外遷宮祭美璽
41	昭和28年	1953	奉修築貴布祢神社殿正遷宮
42	昭和51年	1976	奉葺替貴布祢神社本殿拝殿改造小遷宮美璽
43	昭和60年	1985	奉修復貴布祢神社拝殿遷宮祭
44	昭和63年	1988	奉貴布祢神社本殿屋根替工事竣工遷宮祭美璽
45	平成30年	2018	奉貴布祢神社大震災復旧工事竣工祭一字

④ 棟札 (表1 No.27の棟札全文の翻刻)

(オモテ)

皇祚隆盛 齋主 木幡豊秋

社頭安康 社司 鈴木重明

奉改築貴布祢神社拝殿浜御神幸璽氏子繫栄守護 齋勲七等 高倉尚芳

(ウラ)

大正七年四月三十日 双葉郡長 目黒俊彦

幾世橋村長 佐藤清蔵

神道力

明治三十九年勅令県社以下神社ニ神饌幣帛料供進セラル

当社基本金積立供進指定社トナリ茲ニ拝殿改造落成供進使参尚祭典執行次ニ浜神幸ス

氏子総代 安倍保治郎

工事係 鈴木勘治

志賀幸蔵 安倍義進

平藪喜蔵 佐藤金五郎

横山源太郎 掃部関九八郎

祭典係員 鈴木孝蔵

鈴木幾太郎 鈴木幾太郎

安倍義進 安倍金治

渡辺剛 安倍寅太郎

大字区長 吉野建之助

大工棟梁 大工棟梁

(米価玄米四斗俵拾円五十銭)

(貴布祢神社所蔵)

資料解説 貴布祢神社の社家(木幡家)には多くの古文書が残る。平成23年3月11日発災の東日本大震災の津波により、神社に隣接する宮司宅も浸水し、多くの古文書も被災(水損)した。棚塩にあった宮司宅はその後解体され、地震・津波とその後の原発事故に伴う長期避難により、宮司自身も各地を転々としたあと福島市内に転居したが、被災家屋から箆筒ごと救い出された古文書類の多くが現在も宮司宅に伝えられている。

木幡家の記録「新古万津 代々家記録帳」(資料①)にみるように、木幡家の所管する神社において、社殿の造替にあわせて浜下り行事が行われてきたことは、安政5年(1858)の「妙見社御屋根替」の記録から明らかである。また、それ以外に、浜への御神幸に伴う行列帳などの資料として、年代不明のものも含めて少なくとも「貴船宮天日宮 正遷宮行烈帳」(万延2年2月27日)、「貴布祢神社遷宮行烈簿(明治14年4月6日)」、「村社貴布祢神社葺替遷宮式列帳」(明治44年4月8日)、「 行烈帳」(年月日不明)が今回の調査で確認された。列帳は祭りの行列が出発する前に記載内容を大きな声で読み上げるもので、行列を順番どおり整列させるために重要であった。昭和63

年の遷宮祭の列帳など、近年の資料の多くは宮司宅の津波による被災と長期避難、その後の家屋解体によって失われたが、宮司の経験でも、行列の出発時に列帳は読み上げられた記憶があるという。残された資料にも、祭礼当日のものとみられる人員配置の入れ替えなどを示す見え消しの加除修正が多数見られることから、過去においても列帳はきわめて実用的なものだったと考えられる。

また、これらの資料に関して特に万延2年と明治14年の行列帳は、宮司作成の「福島県浪江町棚塩鎮座貴布祢神社所蔵棟札一覧」(表1)とあわせてみた時、記年銘が同じ棟札もあることが分かる。このことは、神社の新築や修繕・境内整備といった事業が、その後の事業完了を記念する浜下り行事(海浜への神幸)と一連のものであったことをきわめてよく示している。

この「福島県浪江町棚塩鎮座貴布祢神社所蔵棟札一覧」(ホチキス留めの冊子)は、宮司自身が神社にある棟札を悉皆的に整理・翻刻した資料である。これによれば、寛保2年(1742)から平成30年までの記年銘のある45点の棟札のうち、2点には「正遷宮御浜下神幸祭典」(表1 No.23や「浜御神幸」(表1 No.27、資料④)と、明確な浜下り行事の記載があることが特筆される。表1 No.27の棟札本文には「茲ニ拝殿改造落成供進使ノ参尚祭典執行次ニ浜神幸ス」とあり、神前にて拝殿改築の落成を祝する祭典を行ったあとに「浜神幸」すなわち浜下り行事をしたことが読み取れる。また、資料②の行列帳のなかでも浜下りの行列の一員として「棟札」の記載もあり、棟札はそれ自体が、その時々工事完了の象徴物として、神輿とともに浜へ下りるものでもあった。

また、これらの棟札の遷宮関係の記載に注目すると、45点のうち18点には「正遷宮」「遷座」「小遷宮」「遷宮祭」などの文字が確認される(うち1点は前述の「正遷宮御浜下神幸祭典」(表1 No.23)であり「正遷宮」「御浜下」の両方の語を含む)。さきに示した行列帳の表題が「正遷宮行烈帳」「遷宮行烈簿」「遷宮式列帳」など、いずれも遷宮の語を記していることを踏まえると、棟札に遷宮関係の記載がある時には、浜下り行事(海浜への神幸)もともなっていた可能性は高いといえよう。

参考文献・資料

- 渡邊市太郎『大日本名蹟図誌』第拾貳編 磐城岩代之部 第五卷(1906)
相馬市史編纂会編『奥相志』(『相馬市史』4 資料編1 1969)
福島県立博物館『福島県立博物館調査報告第28集 福島県における浜下りの研究』(1997)
木幡輝秋『社家 木幡氏系譜』私家版(2000)
浪江町史編纂委員会『浪江町史』別巻Ⅱ 浪江町の民俗(2008)
木幡輝秋『浪江町棚塩の記録―鎮守 貴布祢神社を中心として―』私家版(2013)
神社新報社『東日本大震災 神社・祭り―被災の記録と復興―写真編』(2016)
木幡輝秋『福島県浪江町棚塩鎮座貴布祢神社所蔵棟札一覧』私家版(奥付等なし、2019以降作成)

【大里正樹】



写真1 幟の立つ神社と隣接する宮司宅。現在は解体された(貴布祢神社入口 S51.4.18か 貴布祢神社宮司 木幡輝秋氏)



写真2 浜へ向かう神輿（棚塩地区内 S60.10.20 貴布祢神社宮司 木幡輝秋氏）



写真3 行列の全体。先頭に先塩や社号旗が写る（棚塩地区内 S60.10.20 貴布祢神社宮司 木幡輝秋氏）



写真4 行列のなかに装束を着た神子（稚児）たちが写る（棚塩地区内 S60.10.20 貴布祢神社宮司 木幡輝秋氏）



写真5 海岸の祭場に神輿が安置される（棚塩の海岸 S60.10.20 貴布祢神社宮司 木幡輝秋氏）



写真7 海岸の祭場での神事（棚塩の海岸 S51.4.18か 貴布祢神社宮司 木幡輝秋氏）



写真6 海に入って手桶に潮水を汲む年男（棚塩の海岸 S51.4.18か 貴布祢神社宮司 木幡輝秋氏）



写真8 海岸の祭場での神楽奉納（棚塩の海岸 S51.4.18か 貴布祢神社宮司 木幡輝秋氏）



写真9 貴布祢神社遷宮祭の集合写真（拜殿前 S63.10.23 貴布祢神社宮司 木幡輝秋氏）

23. 双葉町 新山神社

(1) 神社の概要

名称／新山神社^{しんざん} 通称：秋葉神社（アキバサマ）

所在地／双葉郡双葉町大字新山字東館^{ひがしだて}10

由緒／宗教法人としての登録名称は「新山神社」であるが、「秋葉神社」とも通称される。

渡邊市太郎『大日本名蹟図誌 第拾貳編 磐城岩代之部 第五卷』（明治39年 [1906]）では、「福島県磐城国双葉郡新山村 村社 新山神社及天王山公園之景」として境内図と由緒が掲載されている。それによれば祭神は大山^{おおやまつみのおおかみ} 祇大神であり、八坂大神と秋葉大神を配祀すると記されている。秋葉神社に関しては、

秋葉大神 寛文二壬寅八月十日勸請シ奉ル 本社境内ハ標葉氏ノ城址ナリ風景ノ絶佳ヲ以テ知ラル（中略）明治維新前迄ハ新山大権現ト称シ新田元治奉仕シ別当ハ本村東方院ナリ 明治三年十二月ヨリ長塚村祠掌松本寛満奉仕 同六年ヨリ下手岡村祠掌宇佐見武人奉仕 同廿一年三月ヨリ長塚村祠掌松本寛満奉仕 同卅一年四月ヨリ本村社掌勲八等高倉尚芳奉仕セリ

と記述がある。

(2) 祭りの名称

オサガリ、ハマクダリ、新山秋葉神社御遷宮祭

(3) 祭りの由来

高倉家は、現宮司の3代前の高倉尚芳氏が明治時代に相馬妙見宮初發神社の宮司となって以来、初發神社・新山神社等の宮司を務めている。1990年代からは高倉洋尚氏が父の跡を継いで宮司となったが、洋尚氏は宮司就任以前から父の代理などで祭礼の運営に長く関わってきた。現在は双葉町内6社の宮司を兼務され、本稿の記載内容の多くも高倉宮司からの聞き書きによる。

新山神社の氏子地域としては新山地区と下条地区とがあり、もともと、この氏子地域内については毎年、1月（のちに4月）の祭礼（遷宮祭）の時に神輿が巡幸していた。時代の流れで神輿の渡御する年が3年に1度になり、7年に1度になり、だんだんと変化していった。遷宮祭の列帳などの資料もあったというが、新山神社のほうの記録類は、平成23年（2011）、東日本大震災での宮司宅の被災により多くが失われ、詳細は不明である。

なお、『福島県における浜下りの研究』（1997）によれば、新山神社の遷宮祭はもともと浜にも下りていたとされるが、高倉宮司の経験した1990年代以降の遷宮祭では、海浜まで神輿が渡御したことはない。

(4) 祭 日

1月8日（遷宮祭、神輿の渡御）、9月18日（秋祭り）。なお、『福島県における浜下りの研究』では浜下りの祭日は「1月18日（現4月第3日曜）」とあり、1月の祭りについては寒さが落ち着いた4月に開催時期を移して行われるように変化していた。宮司への聞き取りでは、1月8日は寒いからということで、4月の頭に移動して実施するようになったのだという。後述する平成12年（2000）の「新山秋葉神社御遷宮祭」は4月23日（＝4月第4日曜）の実施であり、日取りは年によって調整して変えていたようである。

(5) 伝承団体

初發神社（Ⅱ-6）宮司、祭典委員会ほか。

(6) 神幸経路（図1）

神幸地／昔は海浜（相馬妙見宮初發神社と同様、郡山海岸）に下りていたというが、少なくとも現宮

司の就任した1990年代以降は海浜への渡御は行われていない。

神幸経路／少なくとも1990年代以降、海浜への渡御はなく、氏子地域である新山・下条の両地区を神幸するだけである。神輿行列は新山神社を出発したのち、まず新山地区の南東の端（氏子^{みたびしよ}区域の境を示す注連縄の付近）まで巡る。新山地区の御旅所①として、先に南下した新山地区の街並みの南端に戻って神輿が休む。その後、神輿は川沿いを北上し、双葉駅付近で橋を渡り、さらに国道6号を渡り、下条地区を巡る。下条地区の御旅所②は双葉町役場（東日本大震災以前の所在地）のそばであった。その後、再び国道6号を横断して帰路につく。往路で立ち寄った新山地区御旅所から往路と同じ街並みを北上し、新山神社へと還幸する。なお、上記の経路はあくまでも平成23年の東日本大震災の被災以前の市街地を前提として記述している。双葉町役場も現在はJR双葉駅前に移転しており、地震による被災、東京電力福島第一原子力発電所事故に伴う長期の全町避難、現在までの復興工事等を経て、周辺の光景が一変していることを付記する。



図1 新山神社の神幸経路（平成12年4月23日）

*昭和62年5月30日および6月30日国土地理院発行2.5万分1地形図を加工して作成

(7) 祭りの内容

潮水の扱い／ —

実施内容／新山神社では、もともと、神輿は新山地区と下条地区の氏子地域内に限っては毎年巡幸するものであった。2つの地区の内、本来は新山地区が大きかったが、のちに下条地区のほうが東日本大震災以前には町役場の近くだったこともあり、新興住宅地として住民が多くなっていった。新興住宅地とはいえ、神社の昔からの世話人がいたので、氏子地区として御神札を配る枚数は多かったという。

隣地区である長塚の相馬妙見宮初發神社の式年例大祭は前後3日間にわたる大規模なお祭りだ

が、新山神社の遷宮祭（神輿渡御）は1日間で終わる。当日は、**ご**神体を移御したのち、神輿が神社を出発する。巡幸の途中、それぞれのお旅所に止まり、祝詞をあげてから神楽と宝財踊をどちらも新山の消防団が行った。

祭りの実施については、東日本大震災による被災以前から人員や経費の問題があり、困難を抱えてはいた。新しい住宅が建つなど氏子地域の住民は増加傾向にあったが、神社の祭りへの寄付は低調であり、休日を利用して祭礼を行うとなると参加したいという人も少なく、神輿の担ぎ手もいないという状況になりつつあった。そうしたなかで、震災以前は下条地区に東京電力㈱の独身寮があったので、そこに住む人たちにも神輿の担ぎ手として協力をお願いしていた。とはいえ地区の婦人会も祭りに関わっていたし、子どもたちも、男子は武者の格好、女子は巫女の格好をして行列について回るなど、祭りの日はたいへんにぎやかな光景であった。

行列の順番は長塚の相馬妙見宮初發神社の例にならっているが、新山神社の場合、宮司は馬に乗ることはせず、神輿とともに歩いて回った。近年に開催された神輿の渡御で年月日が確かなものは平成12年4月23日（日）の「新山秋葉神社御遷宮祭」であり、『双葉町史』第5巻 民俗編には口絵写真（写真1・2）とともに本文中に記載がある。同書より当時の神輿渡御における行列役割を引用すると以下のとおりである。なお、改行部分は紙幅の都合上、「/」印で置き換えた。

新山秋葉神社御遷宮祭行列役割／平成12年4月23日（日）施行／

1. 御先馬／2. 御先塩／2. 猿田彦／4. 社号旗／5. 大神／6. 宝財踊り手／
7. 神楽／8. 笛太鼓／9. 五色旗／10. 大麻／11. 満作花／12. 稚子／13. 五色旗／
14. 神籬^{ひもろぎ}／15. 奉幣／16. 銀幣／17. 金幣／18. 招待者／19. 子供御輿／20. 神幣／
21. 宝剣／22. 神鏡／23. 神饌／24. 神輿／25. 榊箱／26. 宮司／27. 齋員

（8）祭礼の状況

少なくとも現宮司の就任した1990年代以降は浜下り（海浜までの神輿の渡御）は行われていない。修繕を行えば浜に必ず下りるという意識はあるが、とくにこの間は新山神社については修繕などもなく、浜に下りる機会もなかったという。

新山神社は地区内をお神輿が巡幸したのも、はっきりした記録では平成12年に実施したのが最後である（図1参照）。もともとは毎年神輿が渡御していたものが、やがて最後のほうは前の祭礼から3年後、7年後というように間隔はだんだんと広がっていった。かつてに比べれば祭りの規模自体がだいぶ小さくなっていった。被災後の現在は新山地区も下条地区も住んでいる人がなく、神輿の担ぎ手や祭りの担い手そのものがない。

東日本大震災では新山神社の社殿も被災した。ただ新山神社でも、9月の秋祭りの神事だけは震災後も実施してきた。宮司や区長、氏子総代など集まれる関係者のみではあるが、長期に及ぶ全町避難や立入制限等の困難のあるなかでも、神社の祭りは大切な地区の行事であった。被災した社殿は10年以上を経てようやく再建されることとなった。神社名義の財産区に対する東京電力㈱からの補償金や大字からの寄付金を再建費用に充てたという。被災した社殿の隣地（少し高いところ）にある旧社地に新たな社殿が建設され（写真3）、令和5年（2023）9月18日に竣工記念祭（神事としては「移御式」と「遷宮祭」の2つ）が行われた。

この際は浜下りや海水を供えるなどの儀式は行わず、ご祭神を新しい社殿へ移御する神事と芸能の奉納だけであった。とはいえ上述のように「遷宮祭」の名称は式次第にあり、宮司には、本来浜下りや海水を供えるなどの儀式をすべきという意識はあった。浜下りの行事の意義を、浜で潮垢離をすることで祭神の神威を回復するという意味があると、高倉宮司もとらえている。現に高倉宮司の兼務社であり、海岸にほど近い中野八幡神社（帰還困難区域内の神社等を遥拝する「合祭殿」を併設）の再建・竣工時（令和3年〔2021〕8月）には、高倉宮司自身が浜で汲んだ海水を供えたという。しかし

今回（令和5年）の新山神社の竣工祭では、集まれる参列者が宮司、禰宜、区長や総代（遠くは避難先である宮城県仙台市や茨城県つくば市から参加）に限られたこと、総代をはじめ地区住民は上記の仙台市やつくば市、ほかには埼玉県 of 居住者も多く、集まるのがそもそも難しいこと、新山神社から浜までは距離があり、行く経路の途中には帰還困難区域（中間貯蔵施設用地）があることなど、諸般の事情で浜下りは断念したという。

(9) 芸能等

新山地区の消防団として、御神楽と宝財踊を伝承し、神輿の渡御祭や秋祭りの時に演じていた。また、令和5年9月18日の新山神社竣工記念祭には、約20年ぶりに境内で新山芸能保存会による神楽の奉納が行われた。最近では、新山の神楽は町の年初のだるま市の時にも上演されている。獅子頭は新山神社内に保管されている。担い手は氏子総代よりは若い世代の人びとである。

一方で、かつて伝承されていた宝財踊は人が集まらないのと、メンバーの中で震災後から現在までに亡くなった方もいるため、現在は実施が困難になっているという。

(10) 関連資料

なし（東日本大震災に伴う宮司宅の被災により記録類の多くが失われた）

参考文献・資料

- 渡邊市太郎『大日本名蹟図誌 第拾貳編 磐城岩代之部 第五卷』（1906）
福島県立博物館『福島県立博物館学術調査報告書第28集 福島県における浜下りの研究』（1997）
双葉町史編さん委員会編『双葉町史』第5巻 民俗（2002）

【大里正樹】



写真1 新山神社遷宮祭の神輿（H12.4か『双葉町史』第5巻 民俗より）



写真2 新山神社遷宮祭の踊り娘たち（H12.4か『双葉町史』第5巻 民俗より）



写真3 近年新築された新山神社（R7.3.22）

24. 富岡町 諏訪神社

(1) 神社の概要

名称／諏訪神社

所在地／双葉郡富岡町大字本岡字本町西180

由緒／神社で配布されている由緒書（リーフレット）によれば、祭神として建御名方神、御穂津津美神を祀り、信州諏訪郷中州（長野県諏訪市）の上社から勧請したと伝わる。宮司は元祖有員よりの14代頼信以来数十代続いており、江戸時代の慶安3年（1650）に長門守藤原長次に京都神道管長吉田家より神道裁許状を賜り、長く継承し現在の宇佐神家に続く。古くから加持祈祷（護摩祈祷）の祭祀を祈年祭として斎行し、また古くは上手岡、下手岡、千里、上岡、小浜、仏浜、小良ヶ浜、大菅の旧8か村総鎮守であった、とする。

(2) 祭りの名称

浜下り、御下がり、神幸祭（神輿渡御）

(3) 祭りの由来

浜下りをする仏浜に、天明8年（1788）に神輿が漂着したとの言い伝えがある。これを祀るために、祭りが始まったという。

(4) 祭日

例年4月8日。近年は4月の第一土曜日・日曜日。

(5) 伝承団体

諏訪神社宮司、諏訪神社氏子会

(6) 神幸経路（図1）

神幸地／仏浜（東日本大震災以降は神幸なし）

神幸経路／行列は本岡の諏訪神社を出発したのち、①本町（亀田屋酒店の隣）、②中央（菊地書店隣の駐車場）、③天小作（鈴屋金物隣隣の駐車場）、④月の下（富岡第一小学校南門前）、⑤駅前（駅前消防屯所・富岡町公民館駅前分館）、⑥仏浜（浜下り神事以降、諏訪神社までは車で移動する）、⑦小浜（小浜行政区公民館）、⑧下町（下町三社の杜：中央2丁目98付近）、⑨岡内（報徳観光富岡営業所の隣の駐車場）と9つのお旅所を巡り、神社へと還幸する。

なお、上記した各お旅所の目印となる店名などの表記は、あくまでも平成23年（2011）の東日本大震災の被災以前のものであり、現在とは異なっている。地震と津波による被災、東京電力福島第一原子力発電所事故に伴う全町避難、現在までの復興工事等を経て、かつての神幸経路となった街並みから、現在は一変していることを付記する。

(7) 祭りの内容

潮水の扱い／かつては仏浜へ渡御したあと「塩酌み神事」が行われていた。氏子青年会の2人が草履、白足袋、白半股引き、晒し姿で桶と杓を持って海に入り、海水を汲んだ。神職の1人が海水を汲んだ桶を、宮司が杓を持つ。神職が桶の海水を宮司の杓に注ぎ、宮司は祭壇に設けられた3枚のカワラケに注ぐ。この3枚は神社の祀る祭神2柱と海の神を表しているともいう（それぞれ建御名方神、八坂刀売神と御穂津津美神か）。この時神職が小声で唱え言をするが、これは文字に記すことができないという。神職も祭礼の場になると自然に口に出るということで、平時には書き起こすことができないとされている。

こうした神事のかたちで潮水を扱うようになったのは現在の宮司の代になってからで、昭和の終わり頃からだという。神輿が海に入ることはなかった。東日本大震災震災による中断以降、祭礼日

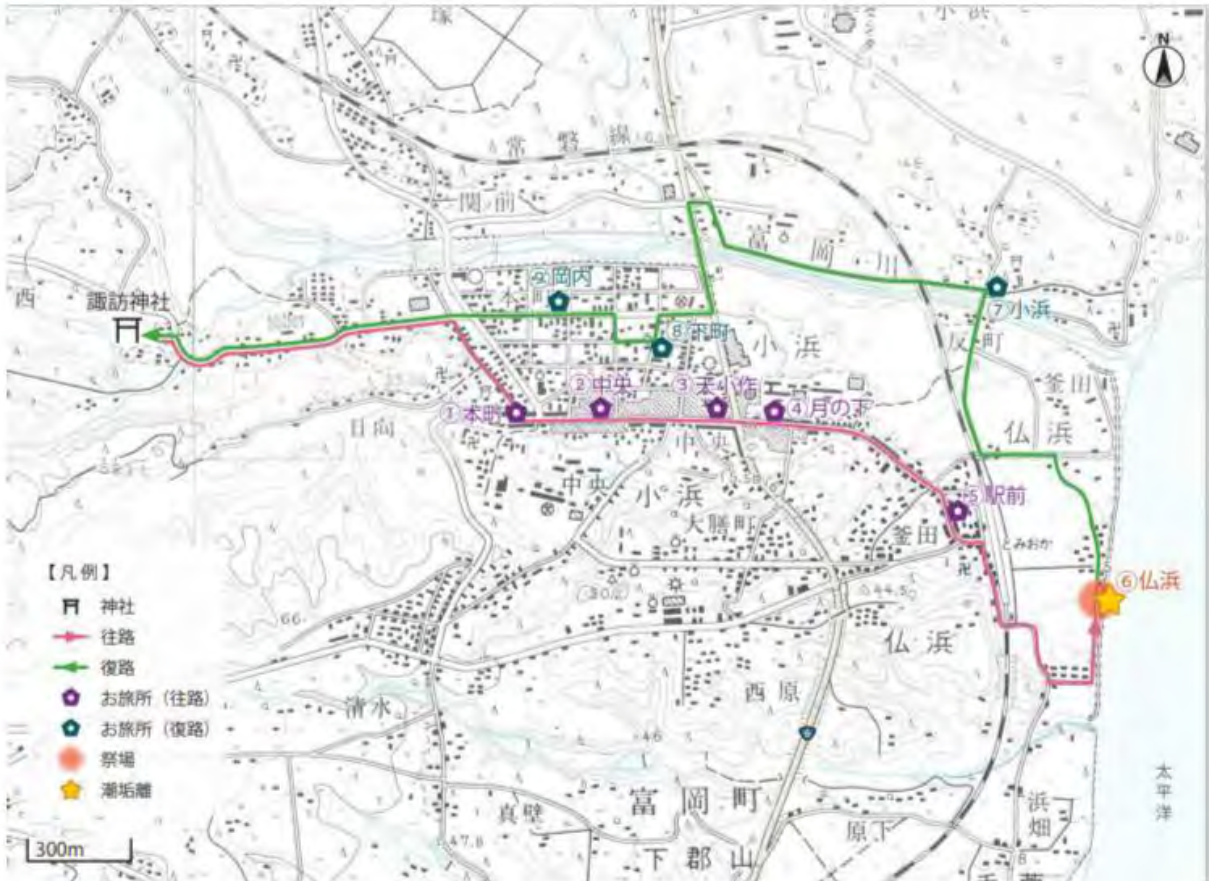


図1 諏訪神社の神幸経路（東日本大震災前まで）

*昭和62年5月30日、6月30日、および平成2年9月1日国土地理院発行2.5万分1地形図を加工して作成

にあわせて宮司が祈祷をすることはあっても、潮水を供えることはされていない。防波堤の建設等もあり、仏浜に下りるのが難しくなったことも要因の一つとして挙げられる。

実施内容／「諏訪神社の浜下がりの神事」について、『富岡町史』第三巻 考古民俗編（**関連資料**）にも刊行当時の詳細な記述があり、あわせて参照されたい。

以下、筆者（山口）が令和4年度に行った過去の祭礼の聞き取り調査に基づき記述する。

祭りの前日に、氏子総代、神社の所在する本岡地区の氏子が準備を行う。同時に、神輿が渡御する各地区でも、お旅所の準備を行う。

本祭りの日は神事を執り行う宮司神官が3、4人、神社役員30人程度、氏子青年会20人程度、稚児行列に参加する小学生30人程度に付き添いの親、地区の人びと、来賓が集まる。8時頃から神幸式が執り行われる。修祓、祝詞奏上に続き、浦安の舞が奉納される。これは氏子から選ばれた小学校高学年から中学生くらいまでの女子4人が舞う。玉串奉奠、御霊代を神輿に遷し、9時頃に発輦となる。行列は先祓いをする神官を先頭に、猿田彦、五色旗を持った氏子が続き、青年会や氏子が笛・太鼓を鳴らしながらあとを歩く。破魔矢を持った稚児行列の後に賽銭箱を担いだ氏子がつき、本岡地区の人びとに担がれた神輿が進む。その後は宮司、神官、金幣をもった総代・役員、来賓と行列が続く（**写真1・2**）。

行列は①本町、②中央、③天小作、④月の下、⑤駅前、⑥仏浜、⑦小浜、⑧下町、⑨岡内と9つのお旅所を巡り、本岡の神殿に還幸する。お旅所はそれぞれの地域で設える。タケ4本を立て注連縄を張り巡らせた中に祭壇を設置する。中に神輿を下し、祭壇に神饌、神酒をお供えして宮司以下地域の氏子役員が玉串を奉げる。その後、浦安の舞（**写真3**）が奉納されて神事が終了すると、お

旅所を設置した地域の若い氏子が神輿を担ぎ、次のお旅所へと運ぶ。駅前と仏浜のお旅所が交互に昼食場所となる。

仏浜では砂浜に降りて神事を行っていたが、震災以前からお旅所で行われるようになっていた。潮水を汲む神事自体しばらく途絶えていたものを、昭和の終わり頃に再開させたという。また、小浜のお旅所から神社までは神輿を車で運ぶようになったため、祭礼奉仕者もバスを使って移動するようになった。稚児行列に参加する子どもたちもお旅所からバスに乗って帰宅するため、このあとは稚児行列もなくなる。

また、戦前は行列に馬を用いていたようだが、軍馬として供出したこともあり、戦後も馬の使用は復活しなかった。幾度か馬の使用を検討する話も出たようだが、道路事情の変化などにより見送ってきたという。

(8) 祭礼の状況

震災以降は実施されていない。宮司はじめ地域の人びとにも再開を希望する気持ちはあるが、担い手不足を大きな理由に再開はなされていない。

(9) 芸能等

神事の中に浦安の舞は含まれるものの、特別な芸能が付随することはない。

(10) 関連資料

「諏訪神社浜下がりの神事」(抜粋)

例年四月八日(近年は、四月の第一土、日曜日に行われる)の神輿の浜下がりの神事は、わが国古来の典型的な祭りである。

祭りの前日の七日は、神社の氏子総代、本岡地区氏子が神社に集まって、本祭りの準備をする。また、神輿の通る中央、月の下、駅前、仏浜、小浜、下町の地区でも祭りの準備が進められる。沿道の両側には、しめ縄をはりめぐらし、お旅所の清掃、飾りつけをする。祭りに必要な花ふきをする。花ふきは紙で作った桜花を竹につけたものであり、^{まとい}纏にさす。さされた花ふきは、あたかも噴水のように青空に向かって広がり、四月の空を色鮮やかに彩るものである。

駅前地区は、お旅所とともに行列に参加する人達への昼食の場所となるので、婦人全員の協力のもとに準備が進められる。

八日、本祭りの日は、午前九時、本岡地区の人々と神社氏子総代、古式豊かな衣裳を身につけた三歳から七歳までの男女の稚児たち約五十名と付き添いの親たちが神社に集まり、神事に参加する。

神殿においては、遷御、発輦の儀がとり行われる。修祓、祝詞奏上の後で、白い衣裳の巫女四名による浦安の舞が奉納される。雅楽の荘重な響きの中で舞う舞は、古式ゆかしいものであり、往古を偲ばせてくれる。続いて玉串奉奠、御霊代を神輿に遷し、神幸(発輦)となる。

午前十時、お下がりの行列の先導は、天狗の面をかぶった猿田彦命が行う。続いて勇壮なふれ太鼓と続く、破魔矢を手にした可愛い稚児と巫女がこれに続いて進む。その後には、ハッピー姿に鉢巻の子どもたちが担ぐ子どもみこしが続き、「わっしょい、わっしょい」と威勢のいいかけ声は、祭りを最高潮にもりあげる。次いで、御霊代の遷された神輿を本岡の人達が担ぎ、神主、金幣を手にした氏子総代と行列は延々と続いていく。

行列は旧道を通り、町の中央へ入り、月の下、駅前、仏浜、小浜、下町と、それぞれのお旅所で休みながら進み、遷御となる。

神輿はお旅所において、その都度神事が行われ、その地区の人々の手によって、次のお旅所まで順々に遷御される。

お旅所においては、神主による修祓、祝詞、浦安の舞の奉納と玉串奉奠の儀がとり行われる。お旅所に集まる善男善女は、おさい錢をあげ、神輿の御霊を拝み、わが家の安全と弥栄を祈願する。

駅前のお旅所においては、行列に参加した全員に昼食とお神酒がふるまわれる。祭りにおいて、飲み食べることは、神と同じものを食べるという神事にのっとり、人々の心に安らぎを覚えさせる。

昼食がすむと、再び行列は仏浜に向かう。昔は、仏浜の砂浜において、浜下りの神事を行ったが、今はお旅所で行われる。その後、神輿は小浜、下町を経て、本岡の神社に還幸となる。

神社においては、入御、祝詞奏上、玉串奉奠を終わり、直会となる。

このようにして春の祭礼は終わりとなる。この神事は、神が海へお下りになり、潔斎をし、人々がそれを拝むことによって、その年の息災と安全と豊作を祈願したものと思われる。

富岡町史編纂委員会『富岡町史』第三巻 考古民俗編 (1987)

参考文献・資料

富岡町史編纂委員会『富岡町史』第一巻 通史 (1988)

【山口 拓・大里 正樹】



写真1 諏訪神社神幸祭の行列（先頭の猿田彦）（富岡町中央商店街・第2お旅所付近 H15.4 富岡町教育委員会）



写真2 諏訪神社神幸祭の行列（神輿）（富岡町中央商店街・第2お旅所付近 H15.4 富岡町教育委員会） →垂直ライン補正可能か



写真3 お旅所での浦安の舞（神輿）（富岡町中央商店街・第2お旅所付近 H15.4 富岡町教育委員会）

25. 檜葉町 龍田神社

(1) 神社の概要

名称／龍田神社。檜葉町^{ならはまち}合併前の旧竜田村^{たつたむら}の村名（JR常磐線「竜田」駅にその名が残る）の由来ともなった神社である。「風宮」「井出神社」との通称がある。明治6年（1873）に龍田神社に改称されるまでは「風宮龍田大明神」と称した。社殿の外側には改称以前の「風宮龍田大明神」、拝殿内部には「風宮」と大書した古い扁額がそれぞれ掲げられている。また、氏子内では、当社が井出地区に鎮座し、社家も井出姓のため、「井出神社」と呼ぶこともあったという。

所在地／双葉郡檜葉町井出上ノ岡^{うえのおか}38

由緒／『檜葉町史』第1巻 通史 上の「第5編 近世 第8章 村々の変遷」では、龍田神社の由緒を以下のように記す。

明治22年4月「竜田村」と冠名した竜田神社の由緒は「風宮竜田大明神と唱え、宝治2年(1248)9月井出玄蕃頭隆吉（神主井出家の祖）が大和国（奈良県）竜田より、風水鎮護の神として勧請した」と伝えられている。祭神は志那都比古神^{しなとひこのかみ}、志那都比女神^{ひめのかみ}の夫婦神である。（中略）

現在の社殿は上ノ岡にあり、寛政2年の建物である。井出村の本郷を見渡せる場所にあるが、由緒書にある勧請の場所は不明である。祭典は旧9月29日に行われており、浜下り神事も受け継がれている。昔、祭日を変更したが祭神に触れて異変があり、元の祭日に戻ったという話も残る。三平下に一本松がある。元禄の頃、井出家の氏族井出弥三郎正倫は平藩寺社奉行を務めた。その時期に植えたといわれる。一本松は浜下り神事の旅所となることから「神輿^{みこし}の松」「田中の一本松」とも言われ、町指定天然記念物である^{*1}。（後略）

なお現在、龍田神社には境内社として、須賀神社（以前は小さな社だったが令和4年〔2022〕6月に新しい社殿が竣工）、熊野神社（令和3年〔2021〕に再建）、佐倉宗吾神社がそれぞれ祀られている。

*1 この松は松くい虫の被害を受けて平成12年（2000）3月に伐採され、現在は指定解除されている。

(2) 祭りの名称

龍田神社渡御祭、風宮祭礼

(3) 祭りの由来

関連資料に掲載の渡邊市太郎『大日本名蹟図誌』の龍田神社の項には、「九月廿九日ハ該社勧請及ビ五穀成就報賽祭ヲ行ヒ井出浜へ渡御アラセラル」とあり、明治期にはすでに浜へ神輿が渡御するかたちでの「浜下り行事」があったことが示されている。それより古い近世までさかのぼる資料は未詳である。

(4) 祭日

『福島県における浜下りの研究』（1997）を含め、それ以前の古い文献では旧暦9月29日とある。これは井出地区の幣束祭り（福島県内には旧暦9月の9・19・29日のいずれかを祭日とする幣束祭りの事例がみられる。井出地区でも同様に、毎年、神社から新しい幣束を受け取り、各戸の屋敷神（敷地内の氏神の祠）に祀る日）でもあった、と『檜葉町の民俗 暮らしの足あと』（2006）にある。一方、今回の聞き取り調査によれば旧暦の10月16日（宵祭り、千度祭）、17日（お神輿の巡幸）の2日間だったともいう。

その後さらに（時期は不明ながら）祭日は変更されたとみられ、現在、境内の掲示板に記されている龍田神社の年間行事は、「歳旦祭 1月1日／祈年祭 旧4月4日／夏祭り 8月15日／渡御祭 11月第1日曜日／新嘗祭 11月23日」となっている。このうちの「渡御祭」（11月第1日曜日）が龍田

神社最大の行事として、東日本大震災の前の年（2010）まで行われ、この日に神輿が海岸へと巡幸していた。町が『檜葉町の民俗 暮らしの足あと』（2006）の編さん時代に撮影した龍田神社渡御祭の記録写真は、平成15年（2003）11月2日（日）の撮影であり、平成15年時点ですでに祭日は「11月第1日曜日」となっていたことが分かる。

（5）伝承団体

龍田神社宮司。社家は代々、神社近くの井出家が務めている。先代宮司（32代目）は井出義典氏（東日本大震災後、平成30年〔2018〕頃に死去）、現宮司（33代目）は井出義秀氏である。井出家は龍田神社のほか、檜葉町内8つの神社の宮司を兼務している。

そのほか、社務長および神社総代（12～13人）、当番氏子、風神会（氏子青年会。震災前の平成22年〔2010〕時点で会員20人ほど）、上井出街道筋氏子、ほか上井出・下井出・井出浜の各住民が関わっていた。

氏子地域はおおよそJR常磐線の線路で仕切られており、線路より山側が上井出、海側が下井出、とくに浜の付近を井出浜という。震災前の時点で、上井出地区で約400世帯（班が24班）、下井出地区で110世帯ほどあったが、全世帯が氏子というわけではない。

とくに氏子が多いのは上井出地区であり、祭り期間中には「奉納 龍田神社例大祭 上井出街道筋氏子一同」と記した地区独自の幟旗（写真1）が多数立てられていた。この「上井出街道筋氏子」とは、具体的には龍田神社とその向かいの家を北の端とし、南の端は新妻材木店およびNTT東日本檜葉電話交換所（井出地区と北田地区との境界）付近まで、南北800メートルほどの間の道沿いにある家々のことで、地図上では道に面した家だけでも50軒程度ある。祭りの前にはこの上井出街道筋の道の両側にサカキと紙垂を付けた注連縄を張り巡らし、その作業は当番氏子や風神会が行った。作業範囲は広く、全域に注連縄を張り巡らすには150本ほどのタケが必要だったという。

「上井出街道筋氏子」の人びとは住居も龍田神社に近く、氏子のなかでもより中核的・指導的立場になる人が多かったようである。昭和50年（1975）に檜葉町内の他地区から移り住み、家を建てて新たに上井出地区の住人となったというある風神会の会員（昭和22年〔1947〕生まれ）は、移り住んだばかりの頃に龍田神社の役員たち（上井出街道筋の氏子）から勧誘され、以後龍田神社の氏子として渡御祭等の行事に関わるようになった。祭りが近くなると街道筋の氏子の主だった人びとから「神輿の担ぎ手をやってくれ」「ゴシキ（五色旗）をやってくれ」等々、祭りで担当する役割を言われたものだった。

本調査において、おもに聞き取りを行ったのは上記の風神会（発足時の名称は氏子青年会、龍田神社青年会とも）の会員数名である。氏子青年会は、昭和20～30年代生まれの龍田神社氏子の男性たちを中心に発足した。発足当時、神社の行事を中心に担っていたのはもっと年上の世代の人びとであった。そのため当時、意欲のある若い氏子たちが神社の行事などに積極的に関わるために作られた組織という。渡御祭に関しては祭りの準備作業などで重いものを運んだり、神輿行列の猿田彦役で長い距離を歩いたり、運営のサポートがおもな活動内容であった。

前述のように、発足当初は氏子青年会と称していたが、長年の活動のなかで会員の年齢層も上がってきたため、平成13年（2001）に風神会と改称したという。一番若い人で昭和40年代生まれの会員もいた。神社境内の奉納物（灯籠等の石造物）にも、奉納時期により「氏子青年会」「風神会」それぞれの名称が刻まれている。また、風神会会員が身に着ける揃いの法被があり、背には「龍」、襟には「龍田神社」と染め抜かれている（写真9・11）。

神輿行列の際、風神会はおもに賽銭箱係や「おなま係^{*2}」、御神札配りなどの役割を務めていた。時に神社と進行中の行列との間を自動車で行き来するなど、必要な場面で機動的にさまざまな手伝いをした。それぞれのお旅所では奉納物や祝儀袋に入れた奉納金などが上がるので、神幸の際にはそうし

た氏子の家々へは神社の御神札も配っていた。

＊2 おなま係はおもに供え物の管理をする係という。鮮魚など、生ものの神饌を「おなま」と呼ぶ。各お旅所でそれぞれ神前に供えられた鮮魚などは神事が済みしだい、おなま係が回収した。これらはすぐに龍田神社へと届けられ、あとで宮司宅あるいは皆が参加する直会の料理などに供された。

(6) 神幸経路 (図1)

神幸地／井出浜 (井出川河口よりやや南側の海岸)

神幸経路／お旅所は全部で16か所あった。年によって変わることもあるといい、「神輿の松(一本松)」以外にはお旅所の明確な名称は確認できなかった。それぞれ「〇〇店の前」「××さん宅の前」といったかたちで言い表されるほか、住宅地図等を参照すると、各お旅所は地区内の小字や集落におおむね対応している。

各お旅所にあたる地名・施設名は以下のとおり (※いずれも東日本大震災以前の名称である)。

神社を出発～①井出地区内(向ノ内集落)～②神輿の松～③井出浜(浜下り)～④井出地区内(本釜集落)～⑤井出地区内(代集落)～⑥井出地区内(前沢集落)～⑦井出地区内(谷地集落)～⑧井出地区内(木屋集落)～⑨街道筋(新妻材木店前)～⑩街道筋(檜葉郵便局の隣)～⑪街道筋(民宿ならば前)～⑫竜田駅前～⑬街道筋(しんたな洋服店前)～(※後述：この間も何か所かに神輿が止まる場合あり)～⑭井出地区内(西原集落)～⑮井出地区内(八石集落、町立檜葉北保育所前)～⑯井出地区内(萩平集落)～神社へ還御。

(7) 祭りの内容

潮水の扱い／風神会員からの聞き取り調査によれば、大昔は浜まで下りて神輿が海に入っていたという。70年ほど前(昭和30年頃)の幼少時の記憶として、龍田神社の神輿が海に入っていたのを見たことがある、という人もいる。



図1 龍田神社の神幸経路 (平成15年11月2日)

＊平成2年9月1日国土地理院発行2.5万分1地形図を加工して作成

しかし、檜葉町教育委員会で所蔵する平成15年11月1日（土）・2日（日）の龍田神社渡御祭の記録写真（全50枚。11月1日の宵祭り（千度祭）に始まり、翌2日は朝のご神体の移御、その後の神輿行列（神社出発～各お旅所や井出浜近くでの神事～神社への還御）、終了後の直会に至るまで、当時の渡御祭の流れに沿って要所要所を撮影している）にも、神輿が海に入る、あるいは潮水を汲むなどのようすは写っていない。聞き取りをした風神会員が経験した範囲では、潮水を汲むことはなかったという。一方で、海岸での神事の写真（写真13）には液体の入った器がお盆に載せて供えられているようにも見え、判然としない。

実施内容／前述したように、渡御祭の祭日は、もともと旧暦9月29日、近年では11月第1日曜日と定められ、前日を含めた2日間行われた。いずれも1日目（渡御の前日）の夜は宵祭りで、千度祭（センドウ祭）を行う。その翌日（2日目）が神輿の渡御する日である。祭りの2、3日前には、井出地区大通りと駅前通りの道の両脇に注連縄（一定の間隔でサカキと紙垂もつけたもの）が張り巡らされる。そうした作業も当番氏子や風神会が担った。

宵祭りに行われる千度祭とは、龍田神社の社殿を「センドー、センドー」と声をあげながら人びとが千度回る、という行事である。なぜ回るのか、という意味までは伝わっていない。千度（1000回）とはいうものの、実際に1000回数えて回るわけではない。たとえば10回を100回として換算するとか、あるいは1～2時間と時間を区切って回りつづけるとか、とにかく何回も社殿の周囲を回ることが大事なのだという。回る時には右回り（上から見ると時計回り）に回る。

参加するのはその日集まった役員（社務長や氏子総代ら）をはじめ当番氏子や風神会員などで、夕方に一同が拝殿内に集まり、宮司によるお祓いなどの神事を執り行ったあと皆で社殿の外に出る。それから各自が幣束を持って社殿を右回りに回り続ける（写真2）。掛け声は先頭の1人が「センドー、センドー」と声を上げ、あとに続く人びとが皆で「センドー、センドー」と唱和する。その繰り返しである。氏子たちが回っているあいだ、宮司は社殿の中で太鼓をたたいている。

これは暗い時間、19～20時ぐらいにかけて行われる行事であった。境内も特に社殿の裏側などはとても暗かった。年にもよるが、参加者各自で懐中電灯を持ったり、社殿の周囲に屋外工事用の照明を設置したりして実施していた。千度祭のあとには簡単な直会があるが、直会も含めて21頃には宵祭りの行事はすべて終えていた。

翌日（2日目）の渡御祭は、参加者は朝7時頃に神社に集合する。この日は最初に、拝殿前に設置された神輿へと龍田神社のご神体を移御する神事がある。宮司が本殿から取り出したご神体を懐に奉持し、神輿の中へと納めるが、この際にご神体が外から見えないよう、社殿の出入り口と神輿の周囲は紅白の幕で覆われている（写真3）。その後、神輿の出発にあたり、社務長や氏子総代らと風神会員、神輿の担ぎ手、猿田彦、五色旗など、行列のそれぞれの役割の人たちが集まってお祓いを受ける。また、地区ごとに子ども神輿も出る（神社から離れた地区の子ども神輿は、神社の神輿行列に途中から合流する）ので、神社に近い上井出地区の子ども会の親子だけは最初から神社に集まり、代表で子ども神輿をお祓いしてもらった。

龍田神社の神輿は平成12年頃に修復されたという。修復以前には、神輿は盆踊り（境内を使用して8月15日に実施）のやぐらなどと一緒に境内の倉庫で保管しており、専用の神輿殿はなかった。行事の準備作業時の不便解消と、神輿の修復完了を契機として境内に「御神輿殿」が新築された（平成14年〔2002〕）。

ほかの浜下り祭礼にみられるような、神輿行列の役割を記した「列帳」が、龍田神社の渡御祭の場合にもあったかどうか、聞き取り調査の範囲では定かでない。少なくとも、本調査においておもに聞き取りをした風神会員は把握していなかった。あるとしても代々の宮司（社家）である井出家もしくは当時の社務長等、より上の世代でないとは分からないとのことである（現宮司は現在職務の

都合で県外に居住のため、聞き取り調査はかなわなかった。

神輿行列の役割のうち、猿田彦の役をやる人は、毎年交代だったという。猿田彦は神輿行列を先導する役として装束や面を着け、さらには高下駄で長距離を歩くことになるため、比較的若い氏子青年会（のちには風神会）の人びとが担当することが多かった。誰が選ばれるかについては、向こう3年間ぐらいは決まっていたという人、その年に言われて急遽担当することになった、という人もおり、厳密に決まっているわけではないようである。

神事が済むと、神輿は社殿の周りを3周してから井出浜までの道を下っていく。神輿の担ぎ手(台車の曳き手)は白装束に烏帽子姿である。神輿の巡幸は移動距離も長く担ぎ手も少ないので、近年はあまり人力では担がなかった。平成15年時点でもすでに、基本的に神輿は専用の台車に載せて移動している(写真4)。ただ神輿が人力(肩に担がず、低い位置で担ぎ棒を持つかたち)で参道入口の鳥居を出る写真(写真5)もあり、宮出し・宮入りで境内を歩く際には人力で神輿を移動したようである。おそらくは大きさの問題で台車では鳥居を通れず、神社前の車道から台車に載せたものとみられる。

行列の全体を写した記録写真(写真4)などいくつかの写真から判断すると、先頭は猿田彦や幣束を持った役員が歩き、そのあとに先導車(軽トラックの上部に龍田神社の御神札、サカキなどを掲げ、荷台に大太鼓を載せている)、五色旗と続く(五色旗は白・赤・青・黄・緑の5本。「龍田神社渡御祭」と書かれた白旗だけがほかの旗よりやや大きく、ほかの4本は「風宮祭礼」と記されている)。

五色旗の後には軽トラックに載せたハナサシ(多数の造花を挿した花万灯)が続く(写真4・6)。ハナサシに挿した造花は、移動中あるいはお旅所で各参拜者に配る(写真7)。場所にもよるが、神社の近くであれば往復時に同じ道を通るので、浜までの往路の間はだいたい造花を残したまま練り歩くという。その後、復路で神輿が上井出街道筋に戻ってきたあたりで、これらの造花は参拜に出てきた氏子の人びとに配ったり、参拜者が自分でもらっていったりするという。神社に還御する頃にはほぼ全て配りきってしまうものであった。各家ではもらい受けた造花は神棚などにあげておくという。

ハナサシの後ろには神職と神輿(白装束に烏帽子姿の人びとが台車を曳く)、さらにそのほか徒歩の参列者が続く。最後尾にはもう1台、軽トラックがついたようである。

神社を出発した神輿は、最初に神社の北方に位置する向の内(ムカイノウチ)集落へと向かう。浜まで至る行程は全部で約4キロメートルの道のりであり、途中16か所のお旅所(お休み所・お休み場とも呼ぶ)があり、神輿を止めて神事を行い、しばらくそこで休む(各お旅所の位置は図1参照)。それぞれのお旅所に担当の氏子たちがおり、あらかじめ四方にタケやサカキを立てて注連縄を張り巡らすなど祭場としての設えを整えた。お旅所を訪れた神輿にはさまざまな神饌(餅・米・魚など)や祝儀袋を供える(写真8)とともに、行列の参加者にもそれぞれビール、煮しめ、赤飯などをふるまった。お旅所は各集落に1か所とは限らず、氏子の家々がまとまってあるところにそれぞれ設けたようである。神輿を安置する場所は個人宅の敷地や門前、集会所などさまざまだが、お旅所になる家でもしその1年間に不幸のあったような場合、その年はお旅所を設けないこともあった。

一方で、神幸経路図の16か所の定められたお旅所以外にも、写真では頻繁に神輿が止まっているようすがみとれる。たとえば平成15年に撮影された渡御祭の写真を見ると、上井出街道筋では、16か所のうちの1つであるお旅所(「民宿ならば」前)での神事のように(写真9)が記録されているが、同じ年の写真で、北側に数十メートルしか離れていない「吉屋茶舗」の門前(写真10)や、ほぼ隣接する「磯藤金物店」(あるいは隣の個人宅)の門前(写真11)にも、そのごくわずかな距離

を移動しただけでそれぞれに神輿が止まり、神職とともに氏子数名（各家の家族とみられる）が座って神事をするようすが写っている。

神輿行列の目的地である井出浜での行事については、海岸近くに、大きさが1メートルにも満たない石の小祠があったといい、その付近が井出浜でのお旅所になっていた。東日本大震災でその小祠は失われてしまったという。消波ブロックが多数設置されており広い場所もないため砂浜へは下りず、海岸の堤防の傍に神輿を安置して神事を執り行っていた（写真12・13）。

龍田神社から海岸までは直線距離では約2キロメートルほどであるが、龍田神社の場合はお旅所が16か所あり、ほかの神社に比べても比較的多い。朝9時頃に神社を出発し、それぞれのお旅所を回って神事と小休憩をとりながら井出浜の祭場とを往復すると、神輿行列が神社に還御するのは15時か15時半くらいだったという。

(8) 祭礼の状況

このお祭りはもともと毎年実施されていたが、東日本大震災以降は実施されていない。震災前の神社の行事を中心に執り行ってきた前宮司の井出義典氏が平成30年頃に亡くなったこと、現宮司は職務の都合上、現在は基本的に福島県外に居住していること、また風神会や氏子住民を中心とする祭りの担い手不足や高齢化などさまざまな事情から、かつてのようなかたちでの祭礼の復活・継承が難しい現状にある。

(9) 芸能等

踊りなどの芸能はなかった。行列の間に笛と太鼓を鳴らすだけである。

(10) 関連資料

「福島県磐城国双葉郡竜田村大字井出鎮座 本社 龍田神社之景」

龍田神社 旧神号風宮龍田大明神

明治六年四月八日龍田神社ト改称

祭神 志那都比古神 又之御名 天之御柱神

志那都比女神 国之御柱神

合祀 倭武命 橘姫命

御形代小石両宮

大和国龍田本宮ヨリ奉遷

金御幣錦包宮入

右ト部朝臣良長祭之

当社ハ人皇八十八代後深草天皇ノ御宇宝治二戊申年九月廿九日大和国龍田ヨリ井出ノ領主井出玄蕃隆吉公ノ勸請スル所ナリ尔来幾星霜ヲ経社殿壊滅シタルヲ以テ元禄十年磐城之城主内藤能登守藤原義高朝臣之カ建造ヲ為シ祭典ヲ举行セリ天明五年七月十九日不幸ニシテ回禄ノ災ニ罹レリ寛政二年ニ至リ井出大和守橘義明公社殿ヲ造営ス降テ文化十二年大和国龍田本宮ヨリ再ビ御神靈ヲ勸請セリ天保三年八月三日正迂宮本宮ノ神主今西兵庫ヨリ分靈ノ遷詞アリ今尚ホ存ス祭典四月四日七月四日両度五穀豊熟ノ祈願ヲナス而テ九月廿九日ハ該社勸請及ビ五穀成就報賽祭ヲ行ヒ井出浜へ渡御アラセラル境内松杉楓ノ古木アリ北ニ井出川ノ清流ヲ見東ニ海岸ヲ望見スルヲ得風景亦佳ナリ

社掌 井出義信

氏子惣代 新妻新三郎

草野亀松

明治三十八年九月

渡邊市太郎『大日本名蹟図誌』第拾式編 磐城岩代之部 第五卷（1906）

参考文献・資料

福島県立博物館『福島県立博物館調査報告第28集 福島県における浜下りの研究』（1997）

檜葉町史編纂委員会編『檜葉町史』第1巻 通史 上（1991）

檜葉町教育委員会編『檜葉町の民俗 暮らしの足あと』（2006）

【大里正樹】



写真1 「上井出街道筋氏子一同」とある幟旗
(H15. 11. 2 檜葉町教育委員会)



写真2 千度祭（センドウ祭）で社殿を回る氏子（龍田神社 H15. 11. 1
檜葉町教育委員会）



写真3 ご神体の移御式での設え（龍田神社
H15. 11. 2 檜葉町教育委員会）



写真4 神輿行列の全景（小豆田集落付近 H15. 11. 2 檜葉町教育委員
会）



写真5 境内を人力で運ばれる神輿（鳥居をくぐる）（龍田
神社 H15. 11. 2 檜葉町教育委員会）



写真6 ハナサシを載せた軽トラック（H15. 11. 2 檜葉町教
育委員会）



写真7 お旅所にて、配られたハナサシを持つ子ども
(H15. 11. 2 檜葉町教育委員会)



写真8 お旅所で供えられるさまざまな神饌 (H15. 11. 2 檜葉町教育委員会)



写真9 民宿ならは前のお旅所 (上井出 H15. 11. 2 檜葉町教育委員会)



写真10 お旅所 (16か所) 以外にも神輿がとまる例 (上井出・吉屋茶舗前 H15. 11. 2 檜葉町教育委員会)



写真11 お旅所 (16か所) 以外にも神輿がとまる例 (上井出・磯藤金物店前 H15. 11. 2 檜葉町教育委員会)



写真12 海岸を訪れた龍田神社の神輿行列 (井出浜 H15. 11. 2 檜葉町教育委員会)



写真13 海岸での神事 (井出浜 H15. 11. 2 檜葉町教育委員会)

26. 広野町 八雲神社

(1) 神社の概要

名 称／八雲神社 通称：テンノウサマ

所在地／双葉郡広野町折木字田中120

由 緒／大正3年(1914)に本殿・拝殿を再建した際の棟札によれば、古来、この地区では氏神として「建速須佐之男命」を祀り崇敬されていたが、仏教伝来により神仏習合の説に従い「牛頭天王」と称し、秀禪院の境内に宮殿を遷したとある。その後、天保・弘化年間(1830～48)の頃に秀禪院が廃絶され、東禪寺の管理となり、同寺の境内に宮殿を遷したが、明治維新により神仏混合を禁じられたことで、明治12年(1879)に現地に遷し宮殿を建てて「八雲神社」と称し、旧折木村(亀ヶ崎を除く)の氏神として祀られている。

(2) 祭りの名称

例大祭、天王さま、お浜下り

(3) 祭りの由来

村の氏神の例大祭として、悪疫退散、五穀豊穡を祈る祭とされている。祭礼の起源は定かではないが、折木字館の旧家である北郷家には、代々伝えられている「八雲立つ」の神詠歌の掛軸があり、祭典に際しては必ずこの掛軸が拝殿に掲げられ、直会などで「八雲神社の御歌」が神詠歌として氏子たちにより歌われる。なお、氏子代表である社総代は各地区総代のなかから選ばれるが、この掛軸については、折木村の「庄屋の家」と呼ばれ北郷K家のみが代々保管している。

(4) 祭 日

現在は毎年7月第4日曜日。

かつて(具体的な年代は不明)は旧暦6月15日であったが、昭和50年代頃から7月15日に近い日曜日となり、その後、現在の祭日となった。

(5) 伝承団体

檜葉八幡神社宮司、八雲神社氏子会。

現在は旧折木村のすべての地域ではなく、大平・高倉・大田川(以上、折木中)、関ノ上・高萩・田中・正木内(以上、折木下)に加えて夕筋(旧夕筋村)が氏子として参加している。なお『広野町史』民俗・自然編によると、「旧折木村のうち正木内・高萩・館・大平・高倉・北沢・南沢の7地区約200人の崇神者により行われる」とあるが、現在は北沢・南沢は参加していない。

現在の祭礼組織は祭礼を総括する社総代1人(任期不定。前社総代の指名により就任。現社総代は14年目)と参加する8地区の代表(各区長)が氏子役員となっており、祭典において玉串奉奠を行う。

(6) 神幸経路 (図1)

神幸地／折木川河口の海岸(防潮堤)

神幸経路／八雲神社拝殿前から石段を下り右折して旧折木村内を神幸。県道との交差点を左折してJR常磐線下のゲートを潜り、田の畦道に入って海岸の祭場に向かう(現在は畦道をトラックにて移動)。

(7) 祭りの内容

潮水の扱い／台風や大波により海に入ることが困難な際には、神輿を海には入れずに祭場に安置し、青年の代表が汲んできた潮水を宮司と社総代がサカキに浸して神輿に振りかけていた。

平成23年(2011)の東日本大震災前までは、折木川河口の海岸に着くとそのまま神輿が海に入り、潮垢離が行われていたが、現在は行われていない。また、東日本大震災の4年後に祭典のみを復活

その後、氏が拝殿内で拝礼するなか、宮司は本殿に昇殿し、ご神体を神輿へと奉還する（写真4）。奉還のち、白装束の青年たちが神輿の添え棒に肩入れし、猿田彦を先頭として、社総代による笛の合図でご神幸が発する（写真5）。青年は白装束に烏帽子をかぶり、履物はコム底の付いていない白足袋のみで、草履等は履かない（写真6）。

準備終了後、10時30分から八雲神社拝殿にて祭典となるが、この前にK家当家が拝殿正面の壁に「八雲立つ」の掛軸を掲げる（写真2）。祭典は、修祓、祝詞奏上、玉串奉奠と一連の神事が執行され、玉串奉奠は社総代、各地区代表、青年代表の順で行われる。また、献饗には必ずキユウリが供えられ（写真3）、かつては、氏はキユウリを作っても天王さまに奉納しないうちには食べられないとされていた。

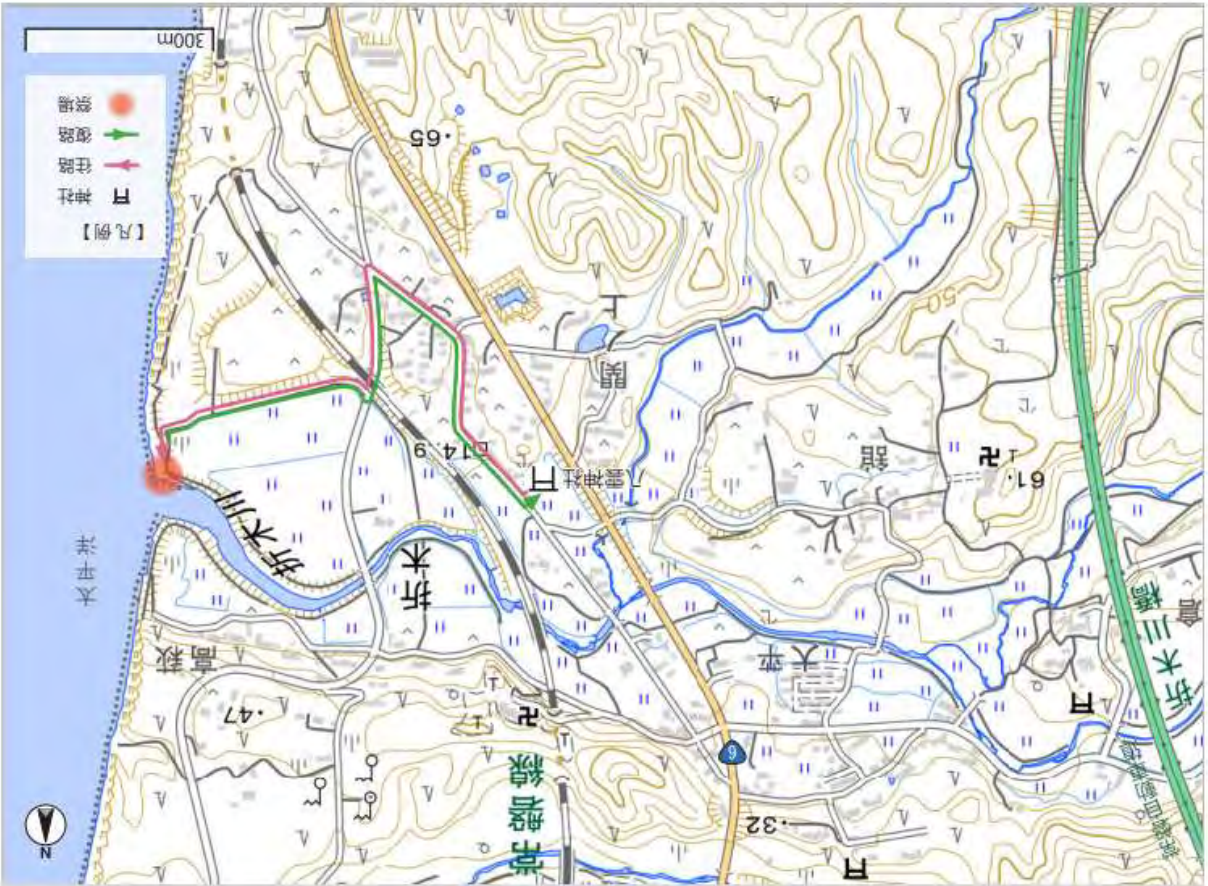
朝8時、八雲神社境内に役員、青年（現在は青年会が解散したため、氏子の子弟有志による）が集合し、準備開始。旗場（5か所）に幟旗を立て、神輿を前庭に出して幣束とサカキを飾り付け、添え棒を固定するために紅白の木綿布の紐を巻き付ける（写真1）。

東日本大震災前までは、前日に社務所に集まって注連縄作りなどの準備を始め、各地区の集會場では花籠はなまといが作られていた。また、かつては前日の準備が終了すると、宵祭りとして社務所で飲食が行われていた。

実施内容／令和6年（2024）7月28日の祭典の流れを以下に記す。

させた際は、前日に青年が一升瓶に潮水を汲んでおき、祭典当日は神幸せず八雲神社拝殿前で神事を行い、潮水を宮司がサカキに浸して神輿に振りかけた。

図1 八雲神社の神幸経路（令和6年7月28日）



上、玉串奉奠という一連の神事が行われる（写真7）。

かつては、神事が終わると「花を散らす」といって、神輿とともに運ばれてきた3本の花纏（ハナと呼ばれる）を参列者たちがお互いに取り合う行事が行われていたが、東日本大震災以後は行われてない。抜き取った造花は各家の神棚に飾られた。

復路も同じ経路をとり、石段を上り神社境内に神輿を安置する。神輿が安置されると、宮司により祝詞が奏上され、参加者が拝礼するなかで宮司によりご神体が本殿に還される。その後、社務所にて直会が行われ（写真8）、すべての行事が終了する。

（8）祭礼の状況

平成23年、東日本大震災による津波被害および東京電力福島第一原子力発電所事故の影響により祭礼は中断されたが、社総代である館地区のK氏らの呼びかけにより、平成26年（2014）7月、4年ぶりに神輿を拝殿から出して飾りつけ、旗場に幟旗も上げ、神社での神事のみを復活させた。その後、毎年7月に神社での祭礼は4年間継続され、前日に浜から一升瓶に汲んできた潮水を宮司がサカキに浸して神輿に振りかける神事も行われていた。

しかし、令和2年（2020）からの新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の影響により祭礼は再び中断となったが、同5年（2023）7月、12年ぶりにトラックによる神輿渡御が復活した。さらに、6年に補助金を活用して担ぎ手の烏帽子、白装束、足袋を揃えることができたのをきっかけとして、同年7月、猿田彦を先頭として、6人の若者による人力での神輿渡御が復活した。復活にあたっては、地区の青年会がすでに解散していたため、氏子役員の子弟を中心とした若者を募り、6人の担ぎ手により渡御を実現させることができた。

（9）芸能等

—

（10）関連資料

—

参考文献・資料

広野町史編纂委員会『広野町史』民俗・自然編（1991）

小林清治・庄司吉之助・菅田宏編「福島県の地名」『日本歴史地名大系7』平凡社（1993）

広野町史編纂委員会『広野町史』通史編（2006）

福島県立博物館調査報告書28集『福島県における浜下りの研究』福島県立博物館（1997年）

【鏑水 実】



写真1 八雲神社境内での神輿の飾りつけ（R6. 7. 28）



写真2 八雲神社拝殿での神事。正面左に「八雲立つ」の掛軸（R6. 7. 28）



写真3 神前に供えられたキュウリ (八雲神社拝殿
氏子総代)



写真4 八雲神社本殿から神輿にご神体が移される
(R6. 7. 28)



写真5 猿田彦を先頭に神輿渡御 (田中地区 R6. 7. 28)



写真6 八雲神社から石段を下り、神輿渡御が出
発 (R6. 7. 28)



写真7 防潮堤の祭場での神事 (折木川河口 R6. 7. 28)



写真8 八雲神社社務所での直会 (氏子総代)

27. いわき市 諏訪神社・愛宕神社・津守神社・星廻宮神社・熊野神社

(1) 神社の概要

名称／諏訪神社

所在地／いわき市久之浜町久之浜字中町16

由緒／記録がないため、具体的な創建年代は不明だが、至徳年間（1384～87）に創建されたと伝えられる。

名称／愛宕神社

所在地／いわき市久之浜町久之浜字南町37

由緒／具体的な創建年代は不明。

名称／津守神社

所在地／いわき市久之浜町久之浜字館

由緒／具体的な創建年代は不明。

名称／星廻宮神社

所在地／いわき市久之浜町久之浜字北町142

由緒／具体的な創建年代は不明。

名称／熊野神社

所在地／いわき市大久町小久字大場113

由緒／具体的な創建年代は不明だが、旧記、棟札写によると、古くから岳廟と称し、崇拝されていたという。祭神は速玉男命、事解男命、伊弉冉命。

(2) 祭りの名称

合同神幸祭。

諏訪神社、愛宕神社、津守神社、星廻宮神社と4社合同の寄合祭。

平成初期までは、熊野神社も合同で浜下りをしてしたが、令和6年（2024）現在は地区内を巡行するかたちになっている。

(3) 祭りの由来

(4) 祭日

毎年5月4日。『郷土誌 久之浜第一小学校』によると、昭和初期、星廻宮神社は旧暦4月8日、諏訪神社は旧暦7月27日に祭礼が行われていた。令和5年（2023）の宮司への聞き取り調査によると、昭和23年（1948）に子どもの日が制定されて以降、5月3日に合同で祭礼を行うようになり、その後、現在の祭日になったという。

(5) 伝承団体

諏訪神社宮司、合同神幸祭実行委員会（各町内会代表、総代会、久之浜・大久地区各協議会などで構成）。浅草や石川町双里（双里祭典実行委員会）などからも担ぎ手が参加した。

(6) 神幸経路（図1）

神幸地／平成23年（2011）の東日本大震災の前までは、大久川河口に神輿を渡御していたが、震災後は、地区内を巡行するかたちになった。

神幸経路／令和5年現在は、諏訪神社で神事を行ったあと、愛宕神社、亀屋旅館、蔭磯橋津守前、東町、蔭磯橋を経由して、星廻宮神社に到着する。星廻宮神社はお旅所になっており、神事（潮垢離）が行われる。その後、遠藤油店、小学校（久之浜第一小学校）大橋、西町公園、大場丁字路、小学



図1 諏訪神社の神幸経路 (令和5年5月4日)

校大橋を経由して、久之浜第一小学校に到着する。久之浜第一小学校は、星廻宮神社と同様にお旅所になっており、神事（潮垢離）が行われる。その後、阿美屋前、小学校（久之浜第一小学校）駐車場、阿美屋前、立町踏切、九反坪、九反坪信号機前、久之浜・大久支所前を経由して諏訪神社に還御し、還御祭と直会を行う。

4社の神輿は、諏訪神社で神事を行ったあと、順番に神輿の渡御をするが、久之浜第一小学校（お旅所）を出発し、九反坪の分岐で津守神社・星廻宮神社の神輿とは別れ、久ノ浜駅前信号機前、亀屋旅館を経由してそれぞれの神社に還御する。残る愛宕神社の神輿も、久之浜・大久支所で諏訪神社の神輿と別れ、支所前の後原を経由して愛宕神社に還御する。

震災前までは、大久川河口に渡御していた。また、震災前までは正午から夕方にかけて神輿の渡御をしていたが、震災後は遠方から担ぎ手が多く来るようになったため、神幸距離を短くし、かつ午前中で終わるように変わった。

(7) 祭りの内容

潮水の扱い／祭礼前日の5月3日に、東区の区長が海岸に潮汲みにいく（写真1）。令和5年の蛭田陽子氏（いわき市文化財課）の調査によると、通常はペットボトルに潮水を汲み、そのまま潮垢離を行う星廻宮神社に置いてくるが、令和5年は立派な木桶に汲んだため、祭礼当日に星廻宮神社に持参するという。祭礼当日、その潮水をコップに移し替えて各神輿に供え（写真2）、神事（潮垢離）を行う。神事後、潮水はその場にまいて次の場所に渡御する。

震災前までは、大久川河口の河川敷にお旅所が設けられ、そこで神事を行ったあとに水中に渡御していた。震災後は、堤防が高くなった影響で河口に下りられなくなり、現在のやり方へ変わった。

実施内容／4社合同の寄合祭である。神輿の渡御の順番は、津守神社、諏訪神社、愛宕神社、星廻宮神社であり、この順番は当初から踏襲されてきた。いずれの神社も神輿を上下に激しく揉み、それ

ぞれ威勢のいい掛け声をするのが特徴である（写真3～5）。令和5年の渡邊彩氏の聞き取り調査によると、戦前・戦中は、神輿を海中にどっぷり浸けて、船で引っ張ってもらったことがあったという。

神輿の渡御では、子ども神輿も1基渡御している。震災前までは、子ども神輿20基ほどが渡御していたが、震災後住民が別の場所に移住した影響で子どもの数が減少し、子供会の解散が相次いだ。その後、子ども神輿が4基寄贈されたが、実際に使用しているのは1基のみだという。

渡御する際、猿田彦、神楽、稚児巫女も同行し、共に町を練り歩く（稚児巫女は星廻宮神社まで）。稚児巫女は、通常6年生が地区の6町内から1人ずつ選出されるが、人数次第では大久地区に声をかけることがある。

神輿の担ぎ手として、双里祭典実行委員会（石川町双里）が参加しているが、交流するようになったきっかけは、震災前に遡る。令和5年に双里祭典実行委員会から参加していた鈴木氏によると、いわき市出身の政治家・吉野正芳氏が福島3区から出馬して比例当選した際（平成21年：2009か）、石川町双里の住民が吉野氏に「山と海の交流ができないか」と相談を持ち掛けたのがきっかけだという。震災が発生した翌日、石川町双里の住民は、久之浜地区の住民に毛布や豚汁などを配給したという。以降、双里祭典実行委員会は、毎年神輿の担ぎ手として参加しているほか、秋に石川町内で行われる例大祭では、久之浜地区の住民を招待しているという（写真6）。

令和6年現在は多くの担ぎ手が参加しているが、将来的に担ぎ手をどうするかが課題だという。そこで、令和6年から、担ぎ手募集の手段の一つとして諏訪神社のX（旧Twitter）を開設し、募集を呼びかけたところ、市外から担ぎ手が参加したという。

（8）祭礼の状況

諏訪神社が鎮座している久之浜地区は、震災の影響で津波と火災の被害を大きく受けた。震災の年は役員で神事のみ実施したが、翌年には合同神幸祭が再開した。この年は、未だに住宅の基礎部分しか残っていない状況だったが、あえて震災前の経路で渡御したところ、住民は家の前で神輿を待っていたという。宮司は「少しでも日常を取り戻すことが復興の力になる。人の交流が、人びとを元気にさせる源になる」との思いで取り組んできたという。なお、4社のうちの1社、星廻宮神社の社殿は震災で流失したが、平成26年（2014）にアサヒビール旧西宮工場（兵庫県）に鎮座していた旭神社の社殿を譲り受けた。『福島民報』平成26年7月20日付によると、この社殿は、昭和3年（1928）に建立されたのち、空襲や阪神淡路大震災などの災禍を乗り越えてきたものであり、今回、震災復興祈願のために寄贈されたという。

新型コロナウイルス感染症（COVID-19）が流行した令和2～4年（2020～22）は神輿の渡御を中止し、神事のみ実施した。ただし、令和4年（2022）5月3・4日は星廻宮神社に神輿を出した。令和5年は、5月4日のみ神輿の渡御をした。

（9）芸能等

浦安の舞／稚児巫女が、数十年前まで舞を奉納していた。しかし、稚児巫女は1年ごとに交代するので、令和6年現在は行われていない。今後、稚児巫女を2年以上務められるようになれば、浦安の舞を復活させたいと宮司は考えている。

（10）関連資料

参考文献・資料

久之浜第二小学校編『郷土誌 久之浜第二小学校』明治45年（1912）・昭和7年（1932）

久之浜第一小学校編『郷土誌 久之浜第一小学校』昭和7年（1932）

福島県立博物館『福島県立博物館調査報告第28集 福島県における浜下りの研究』（1997）

山名隆弘監修『いわきのお宮とお祭り』『いわきのお宮とお祭り』刊行会（2009）

小泉明正『浜通りの熊野神社めぐり』歴史春秋出版（2011）

いわき市『いわき市ふるさとだより』第12号（2012）

「2年ぶりの例大祭にぎわう 地域の早期復興などを祈願」『いわき民報』平成24年（2012）5月7日付

「復興願い社殿を寄贈 兵庫の神道青年会 津波で流失のいわきの神社に」『福島民報』平成26年（2014）7月20日付

星野英紀、弓山達也編『東日本大震災後の宗教とコミュニティ』ハーベスト社（2019）

【齋藤りぼん】



写真1 潮水を汲む（久之浜町久之浜東町 R5.5.3 いわき市文化財課 蛭田陽子氏）



写真2 神輿にお供えされた潮水（星廻宮神社 R5.5.4）



写真3 諏訪神社の神輿を激しく揉む（久之浜町久之浜北畑田 R5.5.4）



写真4 諏訪神社神輿の渡御（久之浜町久之浜北町 R5.5.4）



写真5 愛宕神社神輿の渡御（久之浜町久之浜町 R5.5.4）



写真6 震災翌年の合同神幸祭（久之浜町内 H24.5.4 諏訪神社宮司 高木美郎氏）

28. いわき市 三嶋神社

(1) 神社の概要

名 称／三嶋神社 通称：ミシマサマ

所在地／いわき市^{ひさのはままちたのあみよこうち}久之浜町田之網字横内93

由 緒／勧請年など詳細は不明。享保4年（1719）12月再建の棟札^{むなふだ}があり、明治6年（1873）に田之網村社となる。

(2) 祭りの名称

神幸祭

(3) 祭りの由来

(4) 祭 日

昭和7年（1932）作成の『福島県標葉郡久之浜郷土誌』には「祭日ハ九月九日ナリ」との記載がある。神社の幟に「奉納三嶋神社 昭和五十三年旧六月十五日 氏子中」とあり（写真1）、昭和53年（1978）当時は毎年旧暦6月15日に行われていたことが分かる。前日の6月14日には、同地区内にある波立薬師^{はつたちやくし}で盆踊りが行われた。

平成11～12年（1999～2000）頃までは旧暦7月8日に行われていたが、平日だと担ぎ手が確保できないため、新暦7月の夏休み前の最初の日曜日に行うようになり、平成23年（2011）の東日本大震災以降は海の日の前日に行うようになった。

(5) 伝承団体

諏訪神社（Ⅲ-27）宮司、総代会の神輿世話人。

(6) 神幸経路（図1）

神幸地／江之網海岸^{えのあみ}

神幸経路／神社を出立後（写真2）、北上して田之網集会所付近の洞門をくぐり、圓成院^{えんじょういん}を通過して西ノ内地区へ向かう。西ノ内を通過して（写真3）柿内で折り返す。例年は折り返し地点付近で休憩をとるが、令和6年（2024）は少し戻った丁字路で休憩した（休憩所①、写真4）。休憩後、再び洞門をくぐって左折し、国道6号との合流点で折り返す。お旅所である田之網集会所で休憩と昼食をとる。昼食後、集会所を出発して神社の前を通過後、現区長宅前で休憩し（休憩所②）、江之網へ向かう。江之網集会所で折り返し、お旅所がある江之網橋の下まで歩く。お旅所到着後、橋の下の階段を下りて神輿ごと海に入り、神輿を激しく揉む（写真5・6）。海から上がると神輿をお旅所に安置して神事を執り行う（写真7）。神事終了後、江之網地区内の往路で回らなかった家々も回りながら来た道に戻り、神社へ帰社する。

(7) 祭りの内容

潮水の扱い／神輿が海中に入るため、潮水を汲むこと（お潮採り）はしない。

実施内容／猿田彦と総代が先頭につき、笛が続く。笛の吹き手は1人で震災前に集会所の広場で行われていた盆踊り（櫓は津波で消失）で笛を覚え、祭りでも笛を吹く。神輿の担ぎ手は白鉢巻に白無地法被^{たすき}を纏^{やぐら}がけにし、ゴム底付の足袋を履く。子ども神輿は車に載せて巡行し、子どもたちは「三嶋神社」「三嶋神社」と書かれた旗を持って神輿の列につく。

神輿が通る道沿いの家々では、桶やたらい、ビニールプールなどあらゆるものに水を溜めておく。神輿がやってきて、家々の前で「エーサーノー」「ソ（ゴ）ーライ」の掛け声に合わせて神輿を揉む間、家人は神輿や担ぎ手に向かって準備しておいた水を盛大に何度もかける。なかにはホースで水



図1 三嶋神社の神幸経路（令和6年7月14日）

をまく人もおり、海に入る前から担ぎ手たちは全身ずぶぬれになる（写真8）。宮司によるとこれには「水のご祝儀」の意味があるという。真夏の暑い最中であり、熱中症対策にもなっている。

お旅所（田之網集会所）での昼食休憩時には、その場にいた人たちにお護符として平らな丸餅が配られる。神輿が江之網地区内を歩いて江之網橋下のお旅所まで到着すると、担ぎ手たちが神輿を担いで橋の下の坂道を下り、石や砂利の岩場を通過して海辺まで下り、笛に合わせて掛け声を出しながら海に入る。担ぎ手の胸付近の深さまで海中を進み、「エーサーノー」「ソ（ゴ）ーライ」と掛け声を出しながら神輿を20回程度激しく揉む。海中で激しく揉むため、神輿の屋根から下は海水に浸かる。令和6年は海中で複数回揉むことを計3回行った。神輿が海から上がると、お旅所に安置し、担ぎ手たちが海に入るなどして休憩している間に神事が執り行われ、総代や世話人、担ぎ手代表、笛の吹き手などが玉串を神輿に奉納する。

還幸時は、神社の参道に入るのを世話人に押し戻され、来た道に戻って近隣の家々の前で神輿を揉み、再度世話人に阻まれることを繰り返したのち、参道に入り、階段を上って神社境内に神輿を安置する。神輿が安置されると、宮司により祝詞が奏上される。最後に永久総代（明治時代までの三嶋神社宮司の家系）による挨拶と三本締めで終了。役員、担ぎ手は着替えをしたあとに集会所で直会を行う。神輿は水をかけて洗い、祭礼翌日に役員が手入れを行う。総代の方の話では、海水を含んだ神輿は重く、後始末が大変なため、大人には怒られたという。

(8) 祭礼の状況

地区の元役員の方によると、平成の始め頃までは波立、^{はつたち}舟門、^{ふなと}江之網の3か所で海に入っていた。旧国道6号の波立トンネルの中を、神輿を担いで通り、舟門に下りて海に入り、その後、江之網トン

ネルを通過して江之網の海に入ったが、現在はトンネル内の通行ができないため、江之網だけに入るようになった。3回海に入っていた頃は体が「こたこたになった」（非常に疲れて動くのがつらいようす）という。

この地区は東日本大震災での津波被害と東京電力福島第一原子力発電所事故による影響で多くの住民が避難し、集落から人がいなくなり、祭りも中断した。当時の総代長が「祭りをやろう」と声を掛け、平成24年（2012）から復活し、令和元年（2019）まで続けられてきたが、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の拡大のため翌2年（2020）から神輿渡御は中断し、境内に神輿を出して神事のみを執り行ってきたが、同5年（2023）に神輿渡御も復活した。

現在、田野網地区在住の担ぎ手は数人しかおらず、その他は同地区に以前居住していた人と結婚して縁のある人や住民の会社の同僚などが参加し、神輿を担いでいる。また、震災以降、久之浜町の復興支援に携わる静岡県の人たちが三嶋神社の祭礼に応援にきたこともあった。

(9) 芸能等

—

(10) 関連資料

—

参考文献・資料

福島県標葉郡久之浜町大久村学校組合久之浜小学校『福島県標葉郡久之浜郷土史』昭和7年（1932）

鈴木俊『時の流れの中で… いわき市大久と久之浜の歴史—』（2018）

諏訪神社の公式 SNS X. com/Suwa_Hisa（令和7年4月閲覧）

【渡邊 彩】

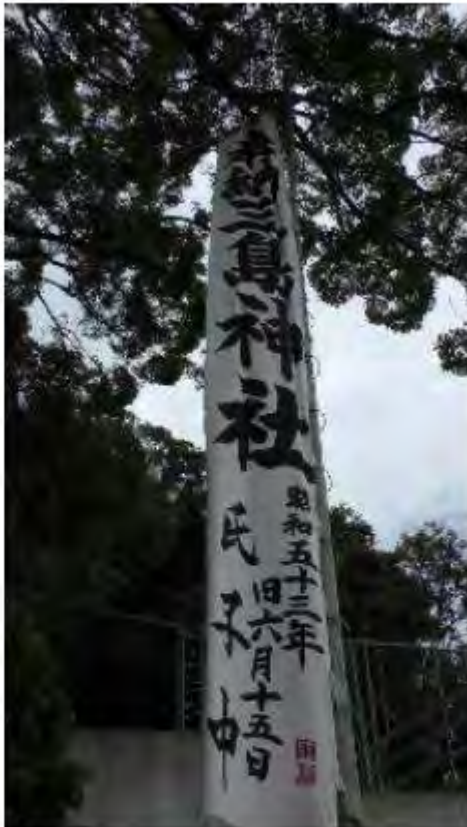


写真1 三嶋神社幟（三嶋神社 R6. 7. 14）



写真2 神輿の出立（三嶋神社 R6. 7. 14）



写真3 神輿の神幸（田野網字西ノ内 R6. 7. 14）



写真4 休憩所 (田野網字西ノ内 R6. 7. 14)



写真5 神輿を担いで海中を進む (江之網海岸 R6. 7. 14)



写真6 海中で神輿を揉む (江之網海岸 R6. 7. 14)



写真7 お旅所での神事 (江之網海岸 R6. 7. 14)

写真8 沿道の家々から水を掛けられる (田野網字横内 R6. 7. 14)



29. いわき市 熊野神社

(1) 神社の概要

名 称／熊野神社（御齋所山）

所在地／いわき市田人町黒田字齊道117

由 緒／延暦元年（782）6月、征夷大將軍坂上田村麻呂が蝦夷征伐後に熊野本宮から勧請し、菊田荘の鎮守神としたと伝えられる。

(2) 祭りの名称

浜下り（ハマクダリ）

(3) 祭りの由来

—

(4) 祭 日

8月1日（旧6月15日）。祭礼は7年に1回に実施するほか、田人町内の別当川に渡御する「渡御祭」を4年に1回実施する。『郷土誌 田人第一小学校』によると、5年に1回神輿の渡御をしていることが記載されているが、いつから現在の周期になったかは不明である。

(5) 伝承団体

熊野神社（御齋所山）宮司、氏子総代。

(6) 神幸経路（図1）

神幸地／神輿が錦町の須賀海岸に下る。

神幸経路／平成25年（2013）の神幸は、8月3日、4日の2日間にわたって行われた。

初日は、御齋所山の熊野神社里宮から奥宮まで神輿を移し、奥宮仮殿前で出御祭を行う（写真1）。その後、集落のK家前を経由して田人町天ノ川のお旅所でお旅所祭を行う（写真2）。その後、下黒田公民館前を経由して、里宮に戻る。

2日目は、御齋所山の熊野神社の里宮から出発し（写真3）、田人町黒田、平石、妻橋、井戸沢を経由して沼部町の櫛田建設にてお旅所祭を行う（写真4）。その後、錦町の須賀海岸に向かい、塩垢離神事を行い、神輿が海に浸かる（写真5・6）。神事を行ったあとは、勿来支所で錦町御宝殿の熊野神社（Ⅲ-31）祢宜らと合流して御宝殿の熊野神社に向かい、神事を行う。最後は、御齋所山の熊野神社と御宝殿の熊野神社両社の神輿が別れ、御齋所山の熊野神社の神輿は里宮へ戻る。到着後、到着祭および直会を行う。

なお、御宝殿の熊野神社に立ち寄るのは、御齋所山の熊野神社が御宝殿の熊野神社の姉妹神社にあたるためである。

(7) 祭りの内容

潮水の扱い／供えない。

実施内容／神幸行列は、前駆、大旗、大榎、大麻榎、紅白子旗、幣束、笛、太鼓、大榎、御太刀、御弓、賽銭箱、御唐、稚児、四神鉾、神輿で構成される。そのほか、平成25年の浜下りでは、諏訪神社（江名／Ⅲ-33）、出羽神社（平中神谷／Ⅳ-81）、熊野神社（好間町）の宮司が協力している。

御宝殿の熊野神社での神事は、両社合同で執り行う（写真7）。まず、馬に乗った宮司ら一行が参道から本殿に向かい、到着祭を行う。到着祭後、両社の再会を祝して「酒迎いの儀」、直会を行う。その後、御宝殿の熊野神社で稚児田楽・風流（国指定重要無形民俗文化財）を見学して両社が別れる。

かつて（具体的な年代は不明）は、神輿を担いで約1週間かけて巡行していたが、直近は車輦神

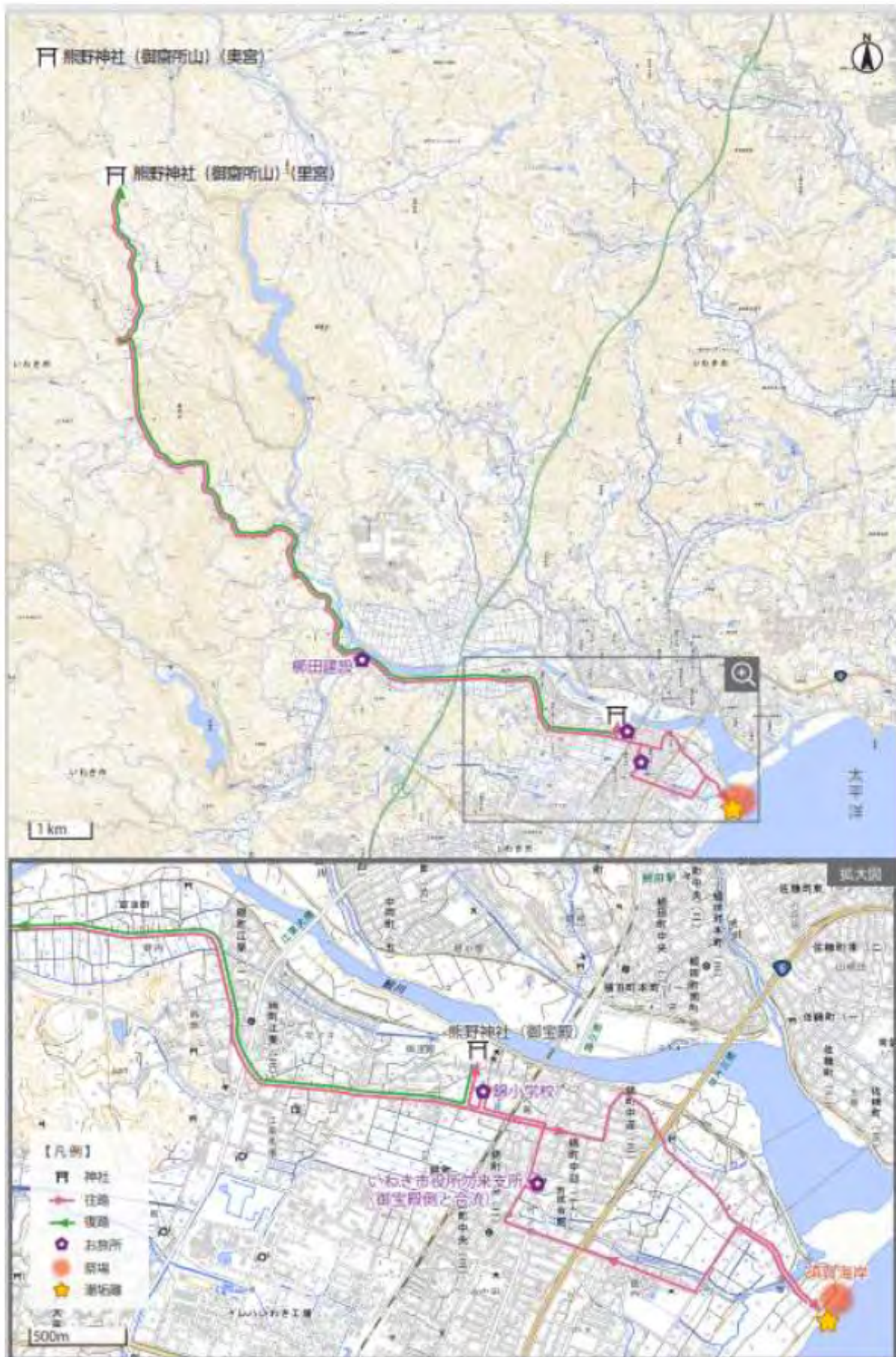


図1 熊野神社(御齋所山)の神幸経路(平成25年8月3・4日)

奥での渡御で、2日間かけて巡行している。

(8) 祭礼の状況

熊野神社の浜下りは、担い手の不足により、昭和42年（1967）を最後に途絶えていた。

そんななか、平成23年（2011）3月11日の東日本大震災、および4月11日の福島県浜通り地震の影響で、神社の奥宮は、土台が裂けて社殿が傾く被害を受けた。そこで、同年10月に下谷神社（東京都台東区）の宮司や関係者が、仮社殿と仮拝殿を参道の石段の下に設置した。奥宮のご神体と神輿は、里宮に移動した。

宮司は、震災前より浜下りの復活を考えていたが、震災を経験し、復興で住民を元気づけたいという思いを持つようになり、浜下り復活への思いがよりいっそう強くなったという。そして、数年の準備を経て、平成25年、46年ぶりに浜下りが復活した。

また、この際に協力した江名の諏訪神社の宮司によると、浜下りが復活したのは、先代宮司の念願でもあった。先代宮司は震災後に亡くなったが、地区の区長が先代宮司の思いをくみ、「力を合わせてやらないか」と声をかけたのも、また復活のきっかけになったという。

浜下りの復活にあたっては、神社本庁の「過疎地域神社活性化への取り組み」助成金を一部活用して実施したという。住民や宮司はまた浜下りを実施したいと考えており、令和8年（2026）の実施を視野に入れている段階である。

(9) 芸能等

—

(10) 関連資料

—

参考文献・資料

田人第一小学校編『郷土誌 田人第一小学校』明治45年（1912）

「25年ぶりの熊野神社大祭 錦町 文化財の田楽、獅子舞い披露」『いわき民報』昭和42年（1967）8月2日付

「3万の人出でにぎわう 錦町・熊野神社大祭」『福島民報』昭和42年（1967）8月3日付

福島県立博物館『福島県立博物館調査報告第28集 福島県における浜下りの研究』（1997）

山名隆弘監修『いわきのお宮とお祭り』『いわきのお宮とお祭り』刊行会（2009）

小泉明正『浜通りの熊野神社めぐり』歴史春秋出版（2011）

「4日に熊野神社の本祭 鉦立神事や45年ぶり浜下り」『いわき民報』平成25年（2013）8月1日付

「鉦立今年は五穀豊穡 いわき・御宝殿熊野神社例大祭」『福島民友』平成25年（2013）8月6日付

「熊野神社で例祭を開催 46年ぶり「浜下り」も行う」『いわき民報』平成25年（2013）8月7日付

「46年ぶり浜下り大祭 いわきの御斎所山熊野神社」『福島民報』平成25年（2013）8月8日付

太田宏人「被災地神社〔復興〕ルポ 第14回「震災を生きる」人たち」『皇室』67 扶桑社（2015）

【齋藤りぼん】



写真1 熊野神社奥宮仮殿前での出御祭 (H25.8.3 熊野神社宮司 芦間好弘氏)



写真2 お旅所でのお旅所祭 (田人町黒田天ノ川 H25.8.3 熊野神社宮司 芦間好弘氏)



写真3 神輿が熊野神社を出発する (H25. 8. 4 熊野神社宮司 芦間好弘氏)



写真4 お旅所でのお旅所祭 (榎田建設 H25. 8. 4 熊野神社宮司 芦間好弘氏)



写真5 須賀海岸での集合写真 (H25. 8. 4 熊野神社宮司 芦間好弘氏)



写真6 神輿が海に入る (須賀海岸 H25. 8. 4 熊野神社宮司 芦間好弘氏)



写真7 両社の神輿が並ぶ(熊野神社〔御宝殿〕 H25. 8. 4 熊野神社宮司 芦間好弘氏提供)

30. いわき市 愛宕神社・那智神社・津神社

(1) 神社の概要

名称／愛宕神社 通称：アタゴサマ

所在地／いわき市小浜町台9

由緒／延宝4年(1676)、隣の黒須野村から遷宮。元禄4年(1691)火災により焼失、同6年(1693)現社地に再建遷宮した。

名称／那智神社 通称：ゴンゲンサマ

所在地／いわき市小浜町中ノ作212

由緒／永正6年(1509)、紀伊の熊野権現を勧請したという。

名称／津神社 通称：ミョウジンサマ

所在地／いわき市小浜町渚122

由緒／貞享2年(1685)、摂津の津の宮を勧請したという。

(2) 祭りの名称

愛宕神社、那智神社、津神社三社合同例祭

愛宕神社神輿渡御(ハマクダリ)

(3) 祭りの由来

□

愛宕神社の神輿洗礼は明治時代初め頃からはじまったという。

(4) 祭 日

7月第3日曜日(海の日の前日)

元来、愛宕神社例祭は旧暦6月24日、那智神社は旧暦11月18日、津之神社は旧暦9月15日であったものを昭和17年(1942)頃から愛宕神社の例大祭に合わせ執り行うようになった。昭和42年(1967)頃から4月24日、さらに平成23年(2011)の東日本大震災前の時点では海の日に行われていた。

(5) 伝承団体

植田八幡神社宮司、小浜区長、社総代役員、青年団消防団、子ども会等約40人。

(6) 神幸経路(図1)

神幸地／小浜港奥の砂浜

神幸経路／愛宕神社から県道239号を渡り台地区へ上り小休止。坂を下り、那智神社参道前で休憩、渚地区に入り津神社参道前で休憩、小浜港奥の砂浜のお旅所で神事。海中を渡御し(写真1)、津神社前を通り過ぎ、県道239号を通り還幸。往復約2.5キロメートル。

(7) 祭りの内容

潮水の扱い／汲まない。

実施内容／愛宕神社の例祭にともなう小浜海岸への神輿渡御(ハマクダリ)に際し、那智・津の両社はそれぞれ参道前での愛宕神社の駐輿にあたって、神職、総代役員らが各社に詣でて例祭を行う。

令和6年(2024)7月14日(日)の祭りのながれを以下に記載する(以下、時間はおおよその目安)。

09:00頃 地区役員集合。

09:30 子ども会、消防団、青年団等集合。子どもは旗持ち(浴衣に法被姿)、青年団、消防団等は鳴り物および神輿を担当(浴衣姿で笛太鼓、神輿の担ぎ手は浴衣に白の上衣)。

10:10 愛宕神社例祭神事。神職、総代役員崇敬者等昇殿し祝詞奏上、玉串奉奠。青年団消防団、子



図1 愛宕神社・那智神社・津神社三社合同例祭の神幸経路 (令和6年7月14日)

供会等は社庭に待機。

- 10:35 笛、太鼓の鳴り物のなか、神職がご神体を神輿に移す。
- 10:43 神事終了後にお神酒拝戴、神輿を社前に下ろし、渡御の準備。
- 10:45 社庭で神輿（8人で担ぐ）を時計回りに3周させて11:50頃出発。行列は、幟（3流）、神職、神輿、鳴り物の順。県道239号を渡り、11:01頃集落の小道を上り台地区で休憩。坂を下りて那智神社へ。巡行にあたってはあらかじめ道の所どころに砂をまき、神輿の通り道であることを示す。
- 11:21 那智神社参道石段の踊り場に神輿を安置。担ぎ手、鳴り物、子どもたちは参道前で休憩。
- 11:28 神職、総代役員らはさらに石段を上り、那智神社社前にて例祭神事。那智神社を出発し渚地区津神社へ。
- 11:58 津神社の参道階段入り口に神輿を安置し休憩。
- 12:00 神職、総代役員らは階段を上り津神社社前にて例祭神事。
- 12:16 津神社から小浜港に向かい、その奥の砂浜へむかう。砂浜では砂をレール状に盛った神輿の道を作り、その先に四方に青竹を立て、注連を張り、中央に台形に砂を盛りお旅所とする。
- 12:25 神輿を海に向けてお旅所に安置し神事を斎行。神職が五穀豊穰海上安全等の祝詞奏上、玉串奉奠、お神酒拝戴をする。
- 12:45 神事終了後、担ぎ手が神輿を波打ち際に進めて3周するうちに勢いが付く。
- 12:50 事前の申し合わせとは異なり、神輿を担いで海に入る（腰ぐらいまで。神輿の状態を考慮し濡らさないことを注意される）。
- 12:55 しばし海上で神輿を担いだあとに浜に上がり、帰路は沿道の民家からホースで散水を受け

つつ、県道239号を通過して愛宕神社へ還幸（巡行路約2.5キロメートル）。

13:13 社庭を3周して社前に安置。

13:17 神輿を拝殿に入れ、鳴り物のなか、13:21頃、神職がご神体を本殿に還す。

13:24 小浜区長が14年ぶりの例祭の無事執行を謝し、次年以降の斎行を期して挨拶、一同手締めをして終了。

(8) 祭礼の状況

平成22年（2010）7月まで毎年斎行されていたが、翌年の東日本大震災で中絶。津波の被害や住民の高齢化、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の流行などにより再開が危ぶまれる状態だったが、資金を積み立てて社前の整備や神輿の修理などをし、令和6年7月、14年ぶりに渡御を斎行。

なお、事前には、修理はしても神輿そのものの老朽化、担ぎ手の不足もあって海には入らず、浜での神事のみとの申し合わせであった。

(9) 芸能等

—

(10) 関連資料

—

参考文献・資料

「波をけたてミコシ渡御 小浜、愛宕神社の奇祭」『いわき民報（夕刊）』昭和52年（1977）4月25日付

「いわきの“まつりと行事”、⑮ 小浜 愛宕神社のお祭りお潮取り海へ走り込む御輿 渡御を祝う沿道の人達」和田文

夫『いわき民報（夕刊）』昭和52年（1977）5月9日付

山名隆弘監修『いわきのお宮とお祭り』『いわきのお宮とお祭り』刊行会（2009）

【四家久央】



写真1 愛宕神社の神輿渡御（小浜海岸 R6.7.14）

31. いわき市 熊野神社

(1) 神社の概要

名称／熊野神社

所在地／いわき市 錦町御宝殿31

由緒／社伝では、大同2年(807)、紀州熊野新宮および本宮、那智の3所から現在の錦町長子に勧請したことがはじまりとされる。ここに造営された仮宮から3羽のカラスが飛び立って止まった場所が御宝殿で、これにより弘仁元年(810)に遷宮、菊田荘の総鎮守となったと伝えられている。

(2) 祭りの名称

例大祭

(3) 祭りの由来

寄神の形態／勅使(学齢前の男児)。なお、言い伝えによれば、はるか昔の祭礼では実際に京都から勅使が招かれていたのだが、戦国時代に廃れ、以後、童子が務めるようになったという。

禁忌／勅使は、自宅を出発してのち祭礼終了まで、地上の移動はすべて青年に抱かれるか馬に乗って行われる。青年には、2日間勅使の足を地につけてはならないと厳命される。

勅使は、社務所の中に設けられた「勅使の間」ですごす。この部屋は現在でも女人禁制で、祭りが終了するまでは、母親であっても入室できない。なお、父親と氏子総代から選ばれた世話役が2日間付き添う。

(4) 祭日

毎年海の日の前日に宵祭り、海の日に本祭りが行われる。平成末頃までは、7月31日・8月1日(旧暦のほぼ6月15日にあたる)に行われていたが、氏子や青年らの都合等により上記の日程となった。山口(1938)によれば、「古くは舊六月一五日が祭日であったが、現在は八月一日に行ふ」というから、本来は6月15日であったようである。

(5) 伝承団体

熊野神社宮司、大倉区

(6) 神幸経路(図1)

神幸地／須賀海岸

神幸経路／勅使一行は、熊野神社を出発すると錦小学校の近くにある永井家に立ち寄り、小休止する。そののち、一行は須賀海岸まで徒歩で向かう(勅使は騎乗)。中迎の集落を横断し、そののち国道6号線を横断(道路を横断するのではなく、下をくぐる)、須賀海岸へと向かう。途中、適宜休憩はするがお旅所のようなところはない。往路は約3.5キロメートル。なお、復路はマイクロバスを利用する。雷雨などが発生した際には中止となる。

(7) 祭りの内容

潮水の扱い／汲まない。

実施内容／作占神事や芸能など多彩な要素のある祭りであるが、ここでは「勅使潔斎」の儀礼についてのみ取り上げる。

宵祭りの日の午後4時頃、宮司が勅使出立を知らせる合図の太鼓を叩く。勅使は、社務所の「勅使の間」から世話役の青年に抱きかかえられて馬に乗せられる。勅使には、父親や総代、田楽童子、青年会の人びとが従い、行列を作って須賀海岸へと向かう。馬上の勅使には傘がさされ、白毛槍が掲げられる。神社から海岸までは約3キロメートルの道のりであるが、勅使以外は全員徒歩である(写真1)。海岸へ赴く途中、永井家に立ち寄り、馬の轡を交換する。適宜休憩はとるものの、お旅



図1 熊野神社の神幸経路（現行）

所のようなところはない。

須賀海岸に到着すると、勅使は青年会の世話役に抱かれて馬から降ろされ砂浜へ下りていく。砂浜で、装束をすべて脱がされて（この時は、砂浜に敷いた敷物の上に立つ）全裸になると、下帯姿の青年会の世話役に抱かれて海に入っていく（写真2）。大人の腰ほどの深さのあたりまで進み、波を3回受けて潮垢離を行う。これをオシオコリと呼ぶ。

その後は、また浜で装束をつけ、再び青年に抱かれて移動する。平成より以前の時代には、復路も行列を作り馬で戻ったのかもしれないが、現在は、マイクロバスを待機させておき、全員、車で神社へと戻るのが慣例となっている（馬は青年団の世話役らとともに、徒歩で戻る）。

なお本祭りでは、最後に勅使と神輿の渡御が行われる。本殿から出発した神輿は、参道から道路を挟んだ向かい側にある「元宮」と呼ばれる場所との間を往復するのみで集落を巡ったりはしない。

勅使は、本来は、宵祭りでは徹夜するしきりとなっている（眠らせてもらえない）。ゆえに、神輿渡御の頃には、疲れ果てて眠ってしまうのが通例なのだが、この行列において、馬上で勅使が眠ってウトウトと舟をこいだり、馬の背に突っ伏して寝てしまったりすると（写真3）、沿道の人たちのなかには「神がついた」といって拝む姿が見られる（なお、寝ない時には寝たふりをさせる）。

祭りのおおよその内容

- 1日目：宵祭り／勅使宅での饗応、勅使の潮垢離、稚児田楽の奉納、古川権左衛門奉仕の呼び出し、丑の刻参拝。
- 2日目：例 祭／鉾立て（作業）、神事、役馬参拝、鉾立て神事、稚児田楽の奉納、風流の奉納、神輿渡御、勅使饗応、早馬疾走、東御霊神社参拝。

(8) 祭礼の状況

平成23年（2011）の東日本大震災や新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の流行の際には、神事

のみで祭礼は行わないこともあった。また、異常気象によるゲリラ雷雨や熱中症など、勅使や田楽童子らに危険が及ぶ可能性がある場合には、儀礼の中止を判断することもある。震災以後は、祭礼を執行する青年の人たちが参加しやすいように、祭礼の日程を何度か試行錯誤した結果、現在の日程に落ち着いている。

国指定重要無形民俗文化財「御宝殿の稚児田楽・風流」指定昭和51年（1976）。

(9) 芸能等

稚児田楽／小学生の男児8人による田楽。6人はビンザサラ、2人は、鉾を1本ずつ持って舞う。ビンザサラは、氏子らの手作りである。昭和の中頃までは、田楽童子（ザラッコと呼ぶ）を務めた子どもは、稚児田楽の舞手から抜けるときに、ビンザサラの板1枚に名前を記入した。鉾は赤と白の2種類あり、赤の鉾にはカラスが、白の鉾にはウサギが描かれている。これは「鉾立神事」に用いられるものを小型にしたものである。状況にもよるが、宵祭りと本祭りの2日間で6～7回の奉納を行う。なお、笛と太鼓の囃子がつく。

風流（鷺舞、鹿舞、青龍舞、獅子舞）／長子地区の氏子が交代で、白い幕で囲われた檣に上って舞う。鹿舞は、雌雄2匹の舞でそれぞれが頭をつけて2人で舞う。鷺舞・青龍舞・獅子舞は頭をつけて1人で舞う。獅子舞の頭は、神楽の頭である。こちらにも笛と太鼓の囃子が付く。

(10) 関連資料

参考文献

山口弥一郎「磐城御宝殿熊野神社の祭礼行事」『旅と伝説』三元社（1939）
山名隆弘監修『いわきのお宮とお祭り』『いわきのお宮とお祭り』刊行会（2009）

【丹野香須美】



写真1 浜へと到着した勅使の一行（須賀海岸 H27. 7. 31）



写真2 須賀の浜での勅使のオシオコリ（須賀海岸 H30. 7. 15）



写真3 勅使が馬上で眠ると神が憑いたという（熊野神社 H27. 8. 1）

32. いわき市 伊勢両宮神社

(1) 神社の概要

名称／伊勢両宮神社

所在地／いわき市勿来町四沢伊勢林1

由緒／文禄年間（1592～1599）に、領主窪田山城守家盛の叔父道通が勧請したのが始まりと伝えられているが、詳細は不明。

(2) 祭りの名称

ハダカマツリ、ハダカマイリ

(3) 祭りの由来

この祭礼における「浜下り」は、新しく創作された習俗である。ゆえに、お旅所のような場所はない。

「トリゴヤ」は、1月7日のいわき市内各地でみられる伝統的な正月送りの習俗である。現在は、砂浜がなくなってしまったので、「勿来温泉 関の湯」裏の浜辺に小屋を建てているが、この地域では、北町の浜辺（勿来関田ポンプ場の近く）に、トリゴヤが作られ行事が行われていたという。戦中戦後で一時中断していた時期があったが、昭和40年（1965）に復活した。そのときに、勿来の町を盛り上げることができるような祭りを作れないかという話になり、厄年の男性らが海に入って身を清める神輿の海中渡御が提案された。

もともとこの地域には、毎年1月1日は歳旦祭・元旦祭と称し、年が明けると、各家々では家内安全などを願って神社からお札を受け、古いお札は1月7日に焚き上げるという習慣があった。厄年のお札もこの時に受けてくるわけだが、それをトリゴヤの時に行おうということになったらしい。

昭和40年に始まり、以降一度も中断することなく続けられてきた。

戸数の減少などでトリゴヤの行事ができなくなってしまった地域なども包含し、現在の規模になっている。

(4) 祭 日

毎年1月7日。ただし、消防の出初式と重なるなど、都合で前後するときがある。

(5) 伝承団体

伊勢両宮神社宮司、関田連合自治会（関田、駅東、駅西、四沢）

(6) 神幸経路（図1）

神幸地／須賀

神幸経路／鳥小屋での神事ののち、10人程度の男性に担がれた神輿は、北町の集落を北上するように、駆け足で伊勢両宮神社へ向かう。途中、一軒の民家で小休止するが、基本的には1.5キロメートルのマラソンとなる。拝殿で神事ののち、勿来駅方面へ降りていき、関田西の地域を南下するように縦断、再び須賀の海岸へと戻る。往路は、3キロメートル程度の道程となるが、これもほとんど休まず駆けて巡る。総行程は約6キロメートル。途中にお旅所のようなものはない。

(7) 祭りの内容

潮水の扱い／汲まない。

実施内容／12月の第1土曜日に粟嶋神社（いわき市勿来町四沢字 向16）にある竹林から、タケを切り出しておく。

1月7日の午前中に、タケを関田の浜辺へと運び、2間四方位程度の小屋を建てる。小屋の中には、簡易の炉を切り神棚を作る（写真1）。小屋の入り口付近に、先端に少し葉を残した1本のタケを



図1 伊勢両宮神社の神幸経路 (令和7年1月7日)

立て、そのてっぺんにダルマ（地元企業が毎年買い替える）を吊り下げる。小屋の傍らに、少し砂を盛って作った台座を設け、その上に米俵を積んで作った神輿を置く。神輿には「奉納 令和六年厄年者 還暦者 一同」（令和6年の場合）と書かれた大きな木札を正面につける（写真2）。

日が暮れはじめると、地域の内外から人びとが正月飾りなどを持ち寄り、小屋の周辺に積み上げていく（写真3）。正月飾りを持ち寄った人びとは、500円程度を心づけとして設置された箱に入れるしくみになっている。

日が沈み、あたりが暗くなると、厄年の男性と消防団などの若者が15人程度集まってくる。彼らが神輿の担ぎ手で、上半身裸でステテコを履いている。やがて18時頃になると酒を酌み交わす。それが済むと神輿を担ぎ、小屋の周りを時計回りに3度巡ったあと浜を出発し、伊勢両宮神社へと駆け足で向かう。

途中、好意で設けられた休憩所で軽く饗応を受け、再び走り出す。

伊勢両宮神社（内宮）の拝殿（土間になっている）へと神輿を担ぎ入れ、正面に据える。神輿を担ぐことができないなどの理由がある厄年の男性などは、先に拝殿で待機している。

拝殿で神事が行われ（写真4）、最後に厄払いのお札が配られる。

神事が終了すると再び神輿を担ぎ、山を駆けおりにいく。駅の西側の住宅街を駆け抜け、再び関田の浜へと戻る。

浜へと戻ってきたら、周囲を時計回りに3周し、そのあと海の中へと入っていく（写真5）。波を3回受けたら浜へと上がる。そののち、小屋の中で神事が行われ（写真6）、彼らは役目を終える。なお、すぐ近くに「関の湯」という温泉付き宿泊施設があるため、彼らはここの温泉で体を温めたあと小宴をもつ。

神事が終了すると、中の炉や神棚が撤収される。還暦・厄年の人、自治会長ら4人が、ワラで作った松明を持ち、小屋の四隅に同時に火をつける。瞬く間に小屋は火に包まれ、人びとの持ちよっ

た正月飾りなども、火の粉を巻き上げながら激しく燃え上がっていく（写真7）。完全に鎮火したことを確認して、祭りは終了となる。

翌日は、朝から浜辺の片づけとゴミ（正月飾りについての金属など）拾いを行う。

直会は、1か月後をめどに、後日改めて設ける。

（8）祭礼の状況

昭和57年（1982）の『いわき民報（夕刊）』には、「松飾りが山と積まれた鳥小屋に火が放され、大人も子供も竹の先につけたもちを焼きながら、「ホーイホーイ、ホーイホーイ」と唱えて正月様を送った」とある。『いわき民報』のその他の記事によると、この習慣は平成の初め頃までは続いていたようであるが、現在は行われていない。

また、神輿の担ぎ手も多い時では40人ほどいたが、平成の中頃に入ると担ぎ手の減少が始まり、担ぎ手の確保は課題の一つとなっている。現在では、回覧板などで担ぎ手を募集したり厄年の人たちに直接働きかけたりして担ぎ手を確保しているが、それでも足りない時には消防団にも声をかける。平成時代の初め頃までは、小屋も3日前に作り、交代で毎晩見張りをしながら酒盛りをしたというが、人手不足により、現在では当日にほとんどの作業を行っている。

平成23年（2011）の東日本大震災の時には、幸いにもこの地域は被害が比較的小さくて済んだが、それはこのご神威だと語る人もいる。

新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の流行時も中断されることなく実施された。流行以前は、味噌田楽の販売や甘酒の配布をしていたが、さすがに流行期は自粛した。しかし、感染症法5類への移行により、再び味噌田楽などの販売が始まり、祭りらしい賑やかさが戻りつつある。

かつては小屋の炉に、タケで作った盃を入れて爛酒にしたが、これも感染防止のために紙コップとなった。

（9）芸能等

—

（10）関連資料

—

参考文献・資料

「ミコシ真冬の海へ 関田で厄払いの裸参り」『いわき民報（夕刊）』昭和57年（1982）1月11日付
山名隆弘監修『いわきのお宮とお祭り』『いわきのお宮とお祭り』刊行会（2009）

【丹野香須美】



写真1 トリゴヤの中に設けられた神棚（関田の浜 R7.1.7）



写真2 神輿 (関田の浜 R6. 1. 7)



写真3 トリゴヤ (関田の浜 R6. 1. 7)



写真4 伊勢両宮神社での神事 (R7. 1. 7)



写真5 海中渡御 (関田の浜 R7. 1. 7)



写真6 トリゴヤの中での神事 (関田の浜 R7. 1. 7)



写真7 燃えさかるトリゴヤ (関田の浜 R7. 1. 7)

33. いわき市 諏訪神社

(1) 神社の概要

名称／諏訪神社

所在地／いわき市江名 走出162

由 緒／桓武天皇の時代、征夷大將軍坂上田村麻呂が蝦夷征伐でこの地を通った際、諏訪大明神を勧請したと伝えられる。

(2) 祭りの名称

諏訪神社春季例大祭

(3) 祭りの由来

(4) 祭 日

毎年5月4日（旧4月8日）。5月3日が宵祭、4日が本祭。『常磐毎日新聞』昭和11年（1936）12月23日付には、5月8日が本祭であることが記載されている。その後、5月5日に変更されたのを経て（具体的な年代は不明）、数年前から4日になった。

(5) 伝承団体

諏訪神社宮司、諏訪神社の氏子（900戸）。

(6) 神幸経路（図1）

神幸地／神輿が江名浜に渡御する。

神幸経路／令和6年（2024）は、諏訪神社にて神事を行ったあと、走出団地（2か所）、北口団地、明神様（写真1）、舟本町（写真2）、寺作、藤ヶ丘、風越、安竜団地（2か所）の各お旅所を經由して江名魚市場（祭場）にてお潮採り神事を行う（写真3）。その後、諏訪神社に戻って還御祭、直会



図1 諏訪神社の神幸経路（令和6年5月4日）

を行う。なお、令和元年（2019）まで藤ヶ丘と風越の間に江名公民館に渡御していたが、令和5年（2023）より渡御しなくなった。

（7）祭りの内容

潮水の扱い／供える。バス通りに面した岸壁で潮水を汲み（写真4・5）、それをお潮採り神事で使用。お潮採り神事では、サカキを潮水に浸して神輿にかけ、祝詞を奏上する（写真6～8）。

実施内容／宵祭は氏子総代のみが出席し、直会を行う。

本祭では、本神輿1基、子ども神輿3基が渡御する。新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の流行前までは、各神輿をそれぞれ担いで渡御していた（ただし、子ども神輿は小学生が担ぐが、午前中のみである）。

本神輿の担ぎ手は40～50人だが、交代要員がないのが課題であるという。また、子ども神輿の担ぎ手の小学生が減少しているため、近年、子ども神輿は神幸経路の1区（諏訪神社から舟本町あたりまで）、2区（いわき信用組合から内陸に入ったあたりまで）、3区（江名郵便局から真福寺あたりまで）をそれぞれ渡御していた。

子ども神輿がおのおのの地区を渡御したのち祭場に到着し、本神輿の到着を待つ。到着次第、お潮採り神事を行う。昭和20年代までは、お潮採り神事の際に神輿を海中に担ぎ入れていたが、令和6年現在はお潮採りで汲んだ潮水にサカキを浸して神輿にかけるようになった。また、お潮採りの場所も以前と変わった。お潮採り後、祭場へ行く際に船に神輿を載せていたこともあったという。

令和5年（2023）はいずれの神輿も車輦神輿での渡御だったが、令和6年は子ども神輿を5年ぶりに担いで渡御した。ただし、担ぎ手の小学生が少なかったため、神輿は祭場前を何往復かするのみで、かつ担いだ神輿は1基のみだった。令和6年の調査時は1区の神輿を担ぎ、2・3区の神輿は祭場にあらかじめ飾っておく形式をとった。令和7年（2025）以降は、担ぐ神輿、飾る神輿を毎年交代で実施する予定だという。

（8）祭礼の状況

諏訪神社が鎮座している江名地区は、東日本大震災で津波の被害を受けた。これによる祭礼の変化はなかったものの、震災の年は神輿の渡御を行わず、諏訪神社で神事のみ行った。その際、潮汲みは行わなかった。

新型コロナウイルス感染症（COVID-19）が流行した令和2～4年（2020～22）のあいだも、震災の年と同様に神事のみ行ったが、その際に使用する潮水は、宮司が汲んでいた。令和5年から神輿の渡御が復活したが、この年は車輦神輿での渡御だった。令和6年は、子ども神輿1基のみ担ぎ、本神輿は車輦神輿での渡御だった。

（9）芸能等

—

（10）関連資料

—

参考文献・資料

江名小学校編『郷土誌 江名小学校』明治45年（1912）

「石城の神社と佛閣（二）」『常磐毎日新聞』昭和11年（1936）12月23日付

福島県立博物館編『福島県立博物館調査報告第28集 福島県における浜下りの研究』（1997）

山名隆弘監修『いわきのお宮とお祭り』『いわきのお宮とお祭り』刊行会（2009）

「みこし繰り出し地区に活気 いわきで春季例大祭」『福島民報』令和6年（2024）5月6日付

「港町の商業繁栄願う いわき・江名諏訪神社」『福島民友』令和6年（2024）5月7日付

【齋藤りぼん】



写真1 お旅所でのお旅所祭 (江名東町 R6.5.4)



写真2 お旅所での直会 (江名北野町 R6.5.4)



写真3 祭場の本神輿と子ども神輿 (江名東町 R6.5.4)



写真4 海をお祓いする (江名東町 R6.5.4)



写真5 潮水をバケツで汲む (江名東町 R6.5.4)



写真6 汲んだ潮水を供える (江名東町 R6.5.4)



写真7 潮水とサカキで神輿をお祓いする (江名東町 R6.5.4)



写真8 潮水を含んだサカキをいただく (江名東町 R6.5.4)

34. いわき市 諏訪八幡神社

(1) 神社の概要

名称／諏訪八幡^{すわはちまん}神社

所在地／いわき市^{いわきまち}泉町6丁目10-17

由緒／大同年中（806～810）に、亀石ヶ原に諏訪八幡両神を勧請したのがはじまりと伝えられる。

天文年中（1532～55）に大津波によって社殿破却、滝尻山の上に遷座したという。寛永5年（1628）、内藤政晴によって、泉藩祈願社に定められる。さらに延宝2年（1674）に現在の場所に遷座、現本殿は寛政8年（1796）の造営とされる。

(2) 祭りの名称

（諏訪神社の）春の例大祭

(3) 祭りの由来

漂着伝説／むかし、現在の「亀石」があるあたりまでは、海だった。そこへ神が流れ着いたので、亀石に祀られたが、大津波が来て流されてしまった。そこで、諏訪山に遷った。

(4) 祭日

毎年5月5日

(5) 伝承団体

諏訪八幡神社宮司、滝尻。

(6) 神幸経路（図1）

神幸地／なし

神幸経路／宮司は騎乗し、神輿と花笠をトラックに載せて行列が始まる。氏子らは徒歩である。行列は、住宅街を抜けて1キロメートルほど進み、常磐バイパスのそばに設けられたお旅所①〔亀石神幸所〕へ到着。神事ののち、常磐バイパスに沿うようにして約1キロメートル北上、お旅所②〔札幌場神幸所〕へ。ここで方向を変え、滝尻の町を横断するように県道15号線・県道240号線を約2キロメートル進み、泉駅へと向かう。お旅所③〔駅前神幸所〕では、昼食もかねて1時間程度小休止。その後、1丁目から7丁目にかけて約2キロメートルを縦断するようにして、お旅所④〔旧公民館前神幸所〕・お旅所⑤〔北野神社神幸所〕をめぐる還御する。全行程、約6キロメートル。なお、お旅所①〔亀石神幸所〕から「亀石」までは、60メートルほどである。

(7) 祭りの内容

潮水の扱い／汲む。

実施内容／当該祭礼では、「個人の浜下り」の要素がみられる。

神社で神事のあと、神輿が滝尻の地域を渡御するが（写真1）、最初のお旅所で潮水が献じられる。

潮水は、祭礼の前日、吉田氏が桶に汲んでくる（写真2）。その前は吉田氏の父親が汲んでいたが、昭和40年（1965）頃若くして亡くなってしまった。そこで、当時まだ高校1年生だった吉田氏は、母親に指示されてハツァキ（八崎：藤原川の河口、現在のサンマリーナのあたり）まで自転車で行き、潮を汲んできた。それが最初だという。以降60年にわたって、家に不幸のあった時以外は潮水を汲みつづけている。吉田氏の古い屋敷は藤原川のそばにあり、滝尻周辺でも知られた名家であった。自宅近くに設けられた祭礼のお旅所では饗応なども行っていたらしい。

祭礼の当日、このお旅所が第一のお旅所となる（亀石神幸所）。神事では、桶のなかに入っている潮水にサカキをひたし（写真3）、そのサカキで氏子らを祓う。神事はこれだけで、その後神輿

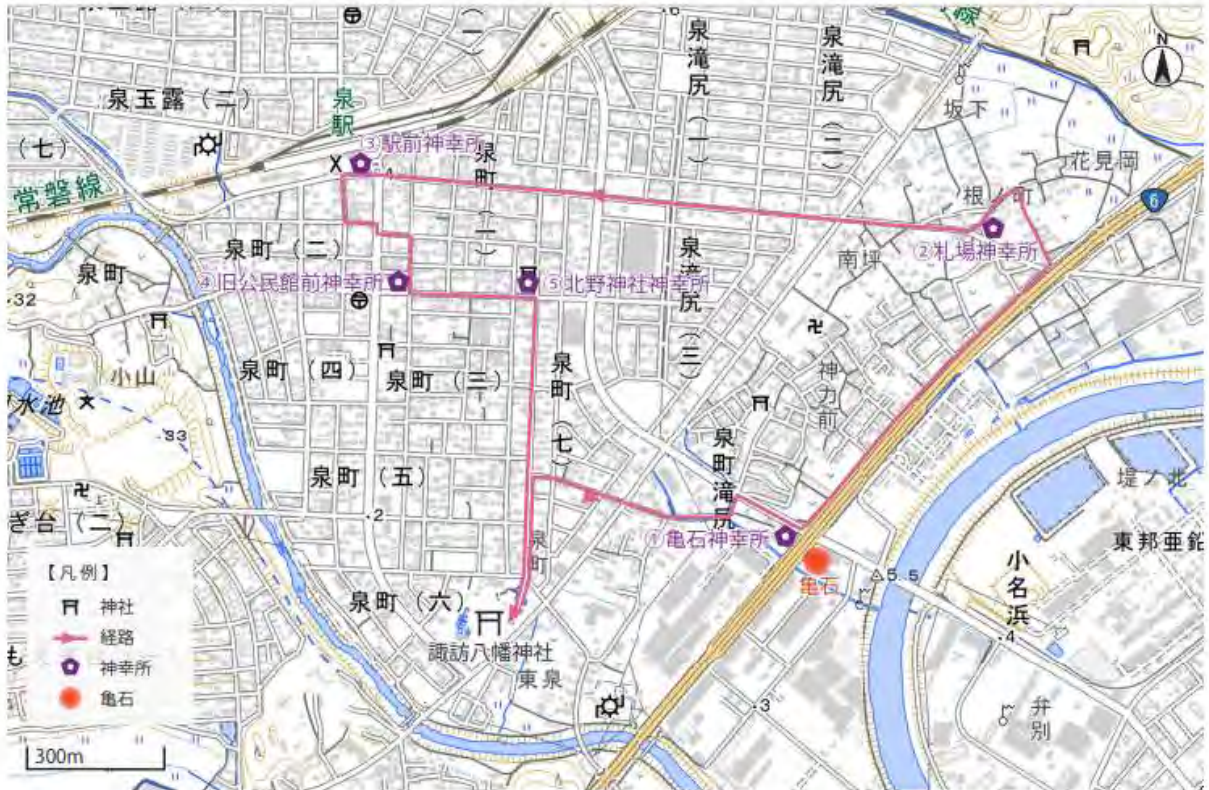


図1 諏訪神社の神幸経路（令和6年5月5日）

は出発してしまう。しかし、吉田氏はそのあと、桶の潮水を近くの「亀石」（写真4）まで持っていき、そこに設けられている神棚に潮水を桶のまま供えて拝礼する（写真5）。実は、吉田氏は前日から潮水を汲んで桶のままおいておくので、真水が入っているものと間違えられないように海藻やサザエなどを桶のなかに入れておくようにしている。「亀石」の神棚には、そのときのサザエなどを献じている。潮水は、その後排水溝へ捨てる。この「亀石」での儀礼は、吉田氏のみが行うものである。

神社禰宜によれば、なぜ潮水を汲んで供えるのかは不明で、潮水を汲むことには、神社は何も関わっていないという。ただし、むかし（昭和頃か？）は、神社の神輿が^{おおつるぎ}大剣海岸へ下りたが、大剣海岸がなくなってしまったので、現在は下っていないという。「亀石」を祀っているのも、吉田氏であり、祭礼において神社との関わりはないようである。

なお、この祭礼では子どもたちの樽神輿も出る。泉小学校の子ども会が、造花を作り家々に配る。また家々では、カドグチにバケツを置き、ツツジやフジの花などを飾った。これをハナムカエという（写真6）。この習慣は、現在では下川地区の数軒で見られるのみとなっている。

(8) 祭礼の状況

新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の流行においては、神輿の渡御は中止され、役員のみで神事を行った。令和5年度（2023）から、本格的に再開。

(9) 芸能等

—

(10) 関連資料

—

参考文献・資料

山名隆弘監修『いわきのお宮とお祭り』『いわきのお宮とお祭り』刊行会（2009）



写真1 神輿はトラックに載せて渡御する (泉町滝尻 R6.5.5)



写真2 潮水を汲んだ桶 (泉町滝尻 R6.5.5)



写真3 「亀石」神幸所での神事。サカキに潮水をひたす (泉町滝尻 R6.5.5)



写真4 亀石 (泉町滝尻 R6.5.5)



写真5 吉田氏の参拝 (泉町滝尻 R6.5.5)



写真6 ハナムカエ (泉町滝尻 R6.5.5)

35. いわき市 温泉神社

(1) 神社の概要

名称／温泉神社

所在地／いわき市常磐湯本町三箱322

由緒／延喜式内社。社伝によれば、古代は三箱山（湯ノ岳）をご神体としていたという。のちに山上から下りて高倉山や観音山などたびたび遷座し、宝暦9年（1759）現地に遷座したという。また、神社には漂着神伝説がある。

(2) 祭りの名称

温泉神社例大祭（いわき湯本温泉さつきまつり）

なお、例大祭の2日前の「潮汲み神事」、前日の「宵宮祭」、当日の「例大祭」と3日間にわたって行われる（いくつかの祭りが含まれる）。

(3) 祭りの由来

その昔、三柱の神々が下川の浜に上がり、とても良い所だと笑い合った。また、神々は落ち着き先を話しあい、浜に近い津神社（IV-56）、温泉の湧く三箱山の温泉神社、川を遡り静かな環境の渡辺町中釜戸の諏訪神社（IV-70）としてそれぞれ鎮座し、年に一度この浜で会うことを決めたという。なお、神々が笑い合ったというのでその上陸地を「神笑」と名付けたという。

(4) 祭 日

5月1日／潮汲み神事

5月2日／例大祭宵宮祭、献湯祭、湯汲み神事

5月3日／例大祭、神輿渡御、お旅所神事

(5) 伝承団体

温泉神社宮司、神社総代長、氏子（常磐湯本町約650戸）、いわき湯本温泉さつきまつり実行委員会（いわき湯本温泉旅館協同組合、同観光協会等）、氏子による祭典実行委員会。

(6) 神幸経路（図1）

神幸地／いわき市泉町下川大畑の八崎海岸（もとは泉町下川神笑の浜）

神幸経路／潮汲み神事においては神社から泉町下川大畑までを往復。例大祭神輿渡御では湯本町内を巡行。

温泉神社から天王崎、湯本駅前を通過し、常磐関船町、常磐下湯長谷町と南下、さらに常磐西郷町、常磐長孫町を経て泉町玉露（「花立」という峠があり、神輿が渡御していた頃はここでお旅所神事を行い、休憩後、一気に浜へ下りて行ったという（関連資料②）、泉町、泉町東泉から川を渡り泉町下川へ。神山前、田宿、神笑と昔の道を通り、かつては海岸だった小名浜臨海工業団地を抜け大畑に上り、さらに海岸に下りサンマリーナ駐車場へ。ここまで車で約13キロメートル。ここから徒歩で八崎岬の防波堤まで500メートルあまり。帰路は駐車場から東泉まで戻り、そこから県道20号いわき上三坂小野線（旧国道6号）を通る約13キロメートル、車・徒歩あわせて往復約27キロメートル。

(7) 祭りの内容

潮水の扱い／汲んだ潮水のうち、青竹に入れたものは例祭で神輿等を清めるのに用い（サカキの小枝で神輿に潮水を振り掛ける）、白木の樽に入れた潮水は、1年間神前に供えられる（写真1）（潮汲み神事前日の4月30日に中身を空ける）。

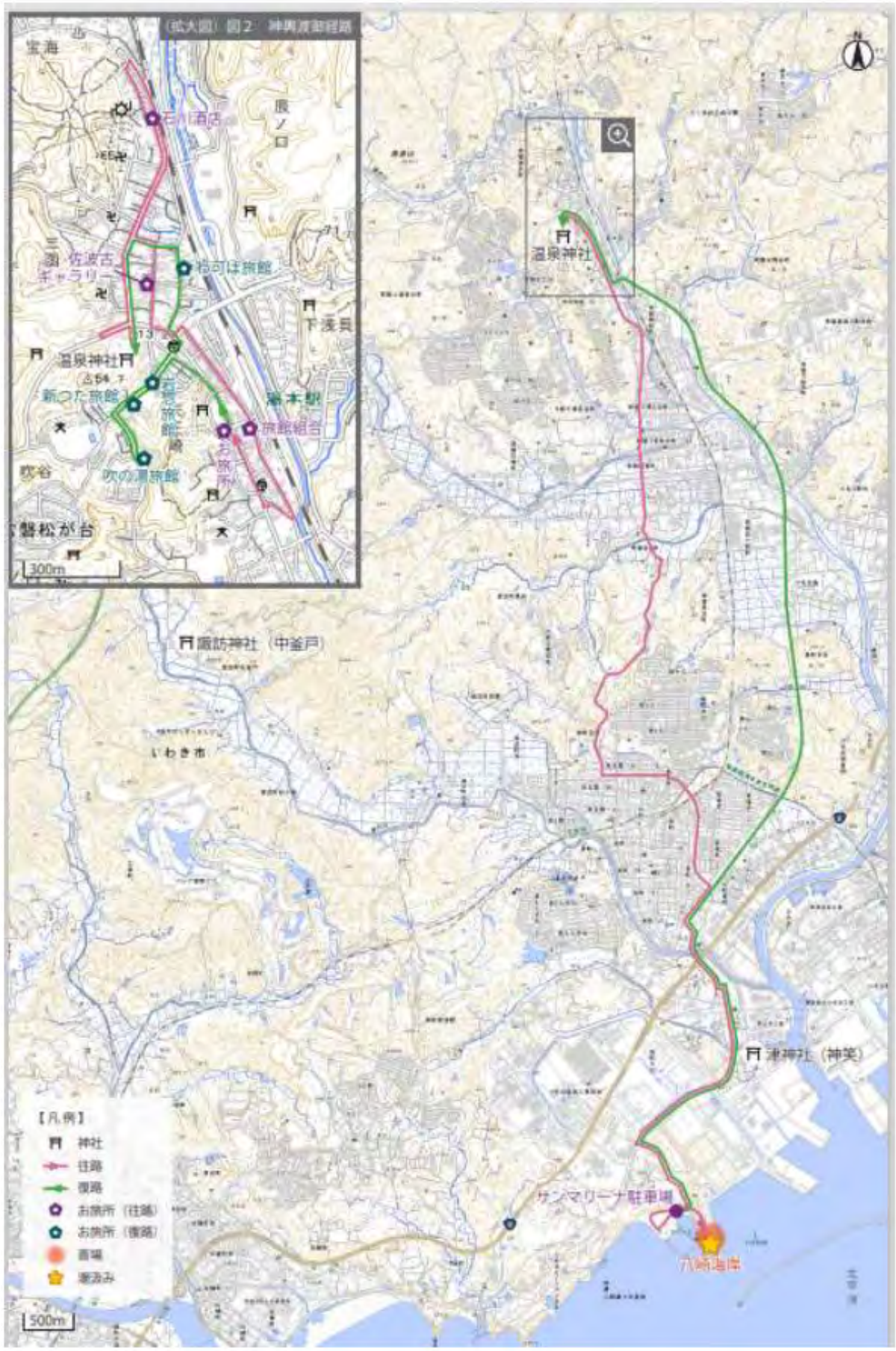


図1 温泉神社の潮汲み経路 (令和5年5月1～3日)

実施内容／令和5年（2023）5月（以下の時間はおよその目安）

① 潮汲み神事／5月1日

潮汲み神事は出立祭、潮汲み祭、報告祭からなる。

出立祭

9:00 温泉神社の法被姿で潮汲み所役3人（総代長と総代2人）が拝殿外陣に着座。祭主（ここでは祢宜）により修祓、内陣中央の案上（机の上）に供えられた潮汲み樽等（中央に注連縄を巻いた白木製角樽）1本、その前に円鏡（銅製。丸に五三桐紋、藤原光長銘）が下げられ「温泉神社神潮水」と書かれた小旗、その前に「温泉神社神潮水」と書かれた小旗、左右に角樽状に作り栓にスギ葉を挿した青竹筒2本を大幣で祓い、次いで潮汲み所役を祓う（青竹筒は毎年神社の職員が作る）。道中の安全を願う祝詞奏上。祭主玉串奉奠、次いで潮汲み所役代表（総代長）が玉串奉奠（ほかは列拝）し終了。

9:20 小旗や角樽、竹筒、大幣、玉串八脚案、バケツ、柄杓、漏斗などの荷物を車に積み、祢宜ならびに潮汲み所役が乗り込み、1台で神社を出発。往路はなるべく昔ながらの道を通り、泉町下川大畑の大剣海岸（いわきサンマリーナ）へ。

潮汲み祭

10:00 サンマリーナ着。荷物を持ち海岸を10分ほど岬に沿って歩き、防波堤を目指す。潮汲み所役2人が防波堤の根元に降り（写真2）、バケツで潮を汲む。防波堤上でそれぞれ角樽、竹筒に潮水を入れ、八脚案上に小旗と共に並べ、大幣を置き（写真3）、10:20、開式。修祓、小旗、潮水樽筒、潮汲み所役を祓い、祝詞奏上（このとき三神が寄り合って笑い合った地が「神笑」となったことが述べられる）。祭主、潮汲み所役代表が玉串奉奠し終了（写真4）。10:40、サンマリーナ発。復路は旧6号国道を通って神社に向かう。

報告祭

11:10 神社着。小旗、角樽、竹筒をもとのように神前に供え、11:20頃から開式。式次第は出立祭とほぼ同じ。祝詞奏上で、無事に潮水を持ち帰ったことを報告。11:30に終了。

- ・前佐波古直己宮司（昭和18年生）によれば、平成23年（2011）の東日本大震災前は5月1日と5月5日の2回泉町下川に汲みにいき、1日の潮水は3日の例祭で御幸山のお旅所神事に使用し、5日のものは神前に供えられたという（その前は例祭当日に1回という）。
- ・潮を汲む前に下川の区長宅に浜を借りる挨拶をし、汲んだあと、下川の旧家（ねっこだいじん）28軒に挨拶に回る。この時各戸で酒と肴（刺身など）が出されたという（サカムカエ）。5日の時は潮汲み神事のお札を持参したという。なお、この日は泉町下川の津神社（IV-56）の例祭と重なるため、お膳だけ置かれている家もあったという。
- ・もとは神々が上陸したとされる下川の神笑の浜に汲みにいっていた。その当時は浜から伝馬船で100メートルほど沖に出て潮を汲んだという。潮汲み所役には総代と神職、さらに髪結の亭主（髪に神に因む、これに選ばれるのは名誉なことだった）を加えた3人という。
- ・また、以前は5月8日（もとは旧暦4月8日）が祭礼であり、その時は8日の朝に汲みにいったという。現在は車で移動するが、以前は徒歩であった。なお、温泉神社宮司がその父から聞いたとして、ある時、サカムカエで酔った潮汲み所役が帰り道、長孫あたりの田圃の畔で潮が入った樽を枕に寝てしまう。気がつくとき栓が外れて潮水がこぼれていたのが慌てて田の水を入れ、潮水と称して神事に供えたが、開けてみるとオタマジャクシが出てきてしまい、中身をすり替えたのが露見してしまったという話が残る。東日本大震災後、下川の28戸への挨拶はしなくなった。
- ・宮司によれば、江戸時代までは、温泉神社も（神社のある湯本村は天領であり、他領への優越感があったという）毎年下川（泉領）まで神輿渡御していたのだが、ある時、中釜戸（湯長谷領）

の諏訪神社の神輿と前後の争いになった。双方槍や刀を供奉していたうえ、酒に酔ってもいたのか大きな喧嘩となった。このため泉・平・湯長谷各藩が仲裁に入り、以後“温泉神社は下川に神輿渡御をせず、潮汲みのみ”“中釜戸の諏訪神社は7年に1度の浜下り”となったという。

*1 湯本村は延享4年(1747)から幕領となる。ただし、下記の(10)関連資料から比定した年代の事件であれば、当時の湯本村は磐城平領である。

② 例大祭宵宮祭、献湯祭、湯汲み神事／5月2日

湯本温泉の旅館等から奉納された温泉の樽と共に、境内の「神籬^{ひもろぎ}の湯」に湧く湯を桶に汲み、神前に供えて湯泉の恵みに感謝する祭り（写真5）を行う。近年、町興しの願いを込めて斎行されるようになった。

準備として、境内「神籬の湯」脇に設置された青竹机の中央に湯汲み桶を置く。その奥に前日に汲まれた潮水が入った青竹筒2本を置く。潮水の一部は蓋付きの小さな曲げ容器に移されサカキの枝が添えられ、祓串と共に湯汲み桶の脇に置かれる。

19:00 社前に温泉旅館組合、観光協会、氏子崇敬者、青年会等が列席するなか、神事が始まると法被^{はっぴすがた}姿の役付きの者たちが「神籬の湯」の前に並ぶ。祓宜による修祓、さらに曲の容器を持ちサカキで中の潮水を湯汲み桶に振りかけ清める。次いで湯汲み所役、参列者と清めていく。

湯汲み所役によって桶に湯が汲まれ、その桶は輿に乗せられ祓宜ほか10人ほどの行列を組んで社殿に運ばれる、この時、青竹筒も一緒に湯汲み所役によって運ばれ、神前に供えられ、神事が執り行われる。19:30頃終了。

③ 例大祭、神輿渡御、お旅所神事／5月3日

9:00 花火とともに開式。宮司ならびに祓宜、氏子役員等「神籬の湯」の前に並ぶ。祓宜により修祓、宮司ならびに参列者を昨日同様潮水で清める。一同社殿内に参進。宮司が本殿を開扉して神事斎行。

10:00 神事終了。参列者等神酒拝戴。社前では神輿の組み立て、男神輿に神霊を入れるなど渡御の準備が行われる。太鼓奉納演奏がされる。

12:00 猿田彦や袴姿の御幣持ちや祭典役員、法被姿の旗持ちなどと共に、トラックに載せた大神輿、次いで青年会等が担ぐ男神輿、子ども神輿、花神輿（女神輿）と神輿4基を連ね、神社を出発。湯本町内を約5キロメートルにわたって渡御。途中8か所^{*2}で神輿を留め休息をするが、神事、芸能などは伴わない。ただし、順路の中ほど、湯本駅の正面、御幸山下「うお昭旅館」前の広場^{*3}においてお旅所神事を斎行（写真6）。広場に神輿を並べ、男神輿の先棒に板を渡し、水や塩、米、神酒、野菜などの神饌を供え、その両側に竹筒の潮水を置く。サカキの枝を添え潮水の入った曲げ容器、祓串も置かれる。

14:00 神事開始。祓宜が神輿ならびに宮司、参列者を祓串で祓い清めたあと、曲げ容器をとりサカキの枝で神輿、宮司ならびに参列者に潮水を振りかけ、さらに清めをする。宮司による祝詞奏上。宮司、次いで参列者が玉串奉奠して、14:15頃神事終了。芸能、神酒の振舞等は行われず。休息後、14:30頃巡行再開。16:30頃還幸、男神輿から神霊を本殿に戻し閉扉。

17:00頃、社前にて祭典委員長（社総代長）、実行委員長等の挨拶により3日間にわたる一連の例大祭行事が終了。

*2 事前配布の日程表によれば、①石川酒店、②佐波古ギャラリー、③旅館組合、④お旅所（うお昭旅館前の広場）、⑤岩惣旅館、⑥吹の湯旅館、⑦新った旅館、⑧わかば旅館で休息（図2）。

*3 以前（昭和30～40年代頃）は、海の見える御幸山の山上まで神輿を担ぎ上げ、お旅所神事を行っていたという。

(8) 祭礼の状況

令和2年(2020)は中止するも、以降は継続して執行。

(9) 芸能等

(10) 関連資料

① 「四家家日記」 安政六年（1859）九月二十七日条

〔四家家日記〕 安政六年九月二十七日条
(九月) 廿七日 晴
(中略)
土用 湯本村温泉神社、泉御領下川村江塩垢離御幸、尤昨日御幸下川村二御仮社相建一夜御留り、今廿七日夜二入御帰宮之由
但シ、毎年四月御祭礼之節、往古八下川村江塩こり御幸御座候由、喧嘩ヲ出来其後中絶致、湯本村之内天王崎御幸山江御幸、塩水下川村より取寄せこり致候由、今般病流行ニ付百三拾余年ニ而下川村江御幸御座候由
(後略)
高坂村四家又左衛門「四家家日記」(安政六年正月〜十二月)

資料解説

磐城平領で「給人格」を持つ上層百姓の日記。
「病（安政コレラ）流行」という緊急時に泉領下川への1泊2日にわたる臨時の浜下りが130余年ぶりに行われたことが記される。また、当時は「昔は4月の例祭時に浜下りをしていたが、喧嘩を機に（逆算すると1720年代、享保頃か）浜への渡御を止め、潮水を取り寄せ神事をするようになった」と認識されていたことが分かる。
なお、『東北民俗資料集』(4)に佐々木長生氏による当時の宮司佐波古直貞氏（75歳）への聞き書きがある。それには「(前略) 毎年下川に潮水汲みに下る。安政のころから神輿の下ることをやめたが、社総代2人が朝早く歩いて下川まで下る(後略)」とあり、この日記に記される安政6年の下川への臨時渡御が浜に下りる最後のものとなったと思われる(安政は7年3月に万延と改元)。

② 『玉露村々誌 磐城国菊田郡』 明治16年（1883）

名勝 花立山

(中略)

往古磐前郡湯本村（三箱）温泉神社、例年必ス本郡下川村海濱ニ祭ル、其便路ニ当ルヲ以テ途ヲ此ニ取り神輿ヲ山麓（字湯名道）ニ鎮ス、齋ス処ノ花車亦茲ニ止ル之其称ノ花立タル所以ナリ、中古ヨリ故ヲ以テ海濱ニ祭ラス（今ニ至リ例年温泉神社祭典ノ日ニ当リ此道ニ抛リ海水ヲ下川村ニ取り以テ祭ルト云）ト云々

(後略)

磐城市文化財調査委員会編集『磐城市史資料集 第3集』磐城市教育委員会（1965）

参考文献・資料

佐々木長生「浜下り神事の分布と考察」(岩崎敏夫編『東北民俗資料集』(4) 萬葉堂書店 1975)
山名隆弘監修『いわきのお宮とお祭り』『いわきのお宮とお祭り』刊行会（2009）

【四家久央】



写真1 年間通して温泉神社の拝殿内陣中央に祀られる潮水（角樽）(R6. 5. 17)



写真2 潮汲み所役（大畑八崎の海岸 R5. 5. 1)



写真3 潮汲み祭、祭壇（大畑八崎の海岸 R5. 5. 1)



写真4 潮汲み祭（大畑八崎の海岸 R5. 5. 1)



写真5 献湯祭（温泉神社拝殿 R5. 9. 5. 2)



写真6 お旅所神事 潮水で神輿を浄める（湯本駅正面、御幸山公園下の広場 R5. 5. 3)

36. いわき市 愛宕花園神社

(1) 神社の概要

名称／愛宕花園神社

所在地／いわき市平下神谷字宿183

由緒／愛宕神社は康平年間（1058～65）に珂遇突智命を、花園神社は文禄元年（1592）に瓊々杵命、木花聞耶姫命を御祭神としてこの地に移したと伝えられる。昭和12年（1937）、県社に昇格して愛宕花園神社と改められた。

(2) 祭りの名称

御神幸祭（神輿渡御祭）

「愛宕花園神社の由来」パンフレットには、「御塩神事」と表記されている。御塩神事は、愛宕花園神社の古式七祭の一つに数えられている。

(3) 祭りの由来

—

(4) 祭日

毎年5月3日。5月2日に例大祭、5月3日に渡御祭を行う。

当初は4月8日に行っていたが、明治42年（1909）1月に5月15日に変更。その後、4月15日に変更したのを経て（具体的な年代は不明）、昭和52年（1977）に5月3日に変更した。変更になった理由は、もともとの時期だと田植えの時期とかぶってしまうためである。

(5) 伝承団体

愛宕花園神社宮司、愛宕花園神社の氏子総代。

(6) 神幸経路（図1）

神幸地／吉田博令「愛宕花園神社旧来七祭（3）」によると、明治39年（1906）頃までは神輿が四倉に下りていたが、翌年以降は新舞子の釜ノ台（ユースホステル）に下りていた。しかし、平成23年（2011）の東日本大震災後に消波ブロックが設置された影響で、翌24年（2012）からは平下神谷の沢帯公園になった。

神幸経路／神幸経路には、「上回り」と「下回り」がある。

上回りは、愛宕花園神社を出発し（写真1～3）、馬場先（大鳥居先）、お宮（愛宕花園神社）後ろ宿、サニータウン、岸前（澤村神社）、後原（横川内科医院駐車場）、一里塚（リリーブホールかべや駐車場）、馬洗、下川原、六十枚（旧井出自動車工業）、表川、中通、六十枚公民館、沢帯の順で巡行する。そのうち、お宮後ろ宿、サニータウン、一里塚、馬洗は太鼓でお知らせして通過するが、それ以外の場所は「サカムカイ」になっており、各所で神事を執り行う（写真4）。

その後、沢帯公園に到着したら神幸式（祭典）が行われる。沢帯公園での祭典終了後は、大苗代、中原、赤沼構造改善センター、三夜様（二十三夜堂）、御城公園、JA福島さくら草野支店、仲田、草野駅前、来迎寺、馬場先（大鳥居先）の順で巡行する。そのうち、仲田は太鼓でお知らせして通過するが、それ以外の場所は「サカムカイ」であり、神事を執り行う。

以上の経路で巡行後、愛宕花園神社に神輿が戻る「宮入り」が行われる。令和6年（2024）は、上回りで行われた。

下回りは、上回りの逆のルートである。上回りとは、毎年交互に行われている。



図1 愛宕花園神社の神幸経路（令和6年5月3日）

(7) 祭りの内容

潮水の扱い／供えない。かつて（具体的な年代は不明）は神輿が海に入ったというのが、吉田博令「いわき浜紀行～17～」には、神輿は飾り神輿のため、海水に浸すようなことはしないとある。

実施内容／令和6年現在の祭礼の当番は、下神谷、赤沼、六十枚の3地区から輪番制で行っている。

2日の例大祭では、神饌を供える「献饌」が行われる。献饌では、氏子総代が三宝に載せた神饌を、神饌所から本殿までリレー形式で渡す（伝供道）のが特徴である。その他、浦安の舞、あるいは豊栄の舞が奉納される。

3日の渡御祭神幸行列は、太鼓（下神谷、赤沼、六十枚から毎年輪番制で1人選出）、猿田彦、神主、氏子総代（各自サカキを持って移動）、「浦安の舞」舞手（いれば）、笛、大字の区長で構成される。平成26年（2014）までは、下神谷、赤沼、六十枚の青年会30人程度で神輿を担いで移動していたが、青年会の解散の影響で、平成27年（2015）からは車輦神輿での渡御になった。また、令和5年（2023）から、神輿を載せたトラックに注連縄とササダケを設置するようになった。

沢帯公園での神幸式では、神事のほか、「献饌」が行われる。献饌では、氏子総代が三宝に載せた神饌（米、酒、野菜、果物など）を、下座から神輿までリレー形式で渡す（写真5）。これは、ほかの浜下りでは見られない非常に珍しい儀式である。献饌後は、直会が行われる。その他、各サカムカイでは神事が行われ、家内安全や商売繁盛、安産などを祈願する。令和6年の鏈水実氏の調査によると、サカムカイには住民が多数参拝に来ており、その際にお札が配られるが、その都度、車で神輿についていく記者が毛筆で名前等を記入したという。また、佐々木長生「御旅所への神幸 浜下りの神事—いわき地方を中心に—」から、各サカムカイには注連縄やお札が飾られていることが読み取れる（令和6年現在は、一部のサカムカイのみになった）。

吉田博令「愛宕花園神社旧来七祭（3）」によると、明治39年（1906）頃は、愛宕花園神社をはじめ、11社の神輿が四倉^{よつぐら}に下りていた。その際、四倉町内の御免橋から旅館海気館まで神輿行列をすることになったが、行列の順序をくじ引きで決めたところ、愛宕花園神社の神輿が最後尾になってしまった。当時の担ぎ手は、日露戦争の凱旋兵であったことから荒れ気味で、前に並んでいた神輿に胴突きをして壊してしまった。そうした経緯があり、翌年から新舞子浜に浜下りするようになったという。また、その後四倉周辺では喧嘩神輿が行われており、神輿がなかなか帰ってこなかったという。当時、喧嘩神輿をやっていた人は令和5年（2023）現在80歳くらいになる。

(8) 祭礼の状況

神幸式を行っていた新舞子の釜ノ台（ユースホステル）は、震災で津波の被害を受けた。そのため、震災が発生した年は中止し、翌年復活した。しかし、これまでの場所には消波ブロックが設置されたため、神幸式は沢帯公園で行われるようになった。

また、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）が流行した令和2～4年（2020～22）も中止していたが、令和5年から通常どおり行われるようになった。

(9) 芸能等

浦安の舞／コロナ禍前までは、神幸式や各サカムカイで舞が奉納されていた（近年は神幸式のみ）。

舞手は、草野小学校の3年生から6年生が4人程度であり、コロナ禍前まで10年ほど行われていた。

コロナ禍明けの令和5年は、県外の大学生が舞手として参加した。今後は、人数が集まれば実施するという。

(10) 関連資料

参考文献・資料

「愛宕花園神社の由来」パンフレット（製作年不明）

「石城の神社と佛閣（二）」『常磐毎日新聞』昭和11年（1936）12月20日付
 吉田博令「愛宕花園神社旧来七祭（3）」『潮流』15 いわき地域学会（1988）
 吉田博令「いわき浜紀行～17～」『いわき民報』平成5年（1993）4月28日付
 福島県立博物館『福島県立博物館調査報告第28集 福島県における浜下りの研究』（1997）
 吉田博令「愛宕花園神社旧来七祭りについて」『福島の民俗』34 福島県民俗学会（2006）
 山名隆弘監修『いわきのお宮とお祭り』『いわきのお宮とお祭り』刊行会（2009）
 吉田博令「愛宕花園神社について」『潮流』37 いわき地域学会（2009）
 佐々木長生「御旅所への神幸 浜下りの神事—いわき地方を中心に—」福島県立博物館編『福島県立博物館紀要』37（2023）

【齋藤りぼん】



写真1 愛宕花園神社での神事（R6.5.3）



写真2 愛宕花園神社を出発する①（R6.5.3）



写真3 愛宕花園神社を出発する②（R6.5.3）



写真4 サカムカイでの神事（平下神谷後原 R6.5.3）



写真5 祭場での献饌（沢帯公園 R6.5.3）

37. いわき市 白山神社

(1) 神社の概要

名称／白山神社

所在地／いわき市平下大越字石田167

由緒／奈良時代中期の勧請と伝えられる。大乘坊山安祥院あんしょういんの守護神として祀られ、宝暦3年(1753)に羽黒白山大権現と称されるようになる。明治維新の神仏分離を経て「白山神社」となった。社殿の裏山から清水が湧き出しており、無病息災の「オミタラシ」としてあがめられている。なお、神社周辺には、国史跡「根岸官衙遺跡群」がある。

(2) 祭りの名称

御祭礼

(3) 祭りの由来

—

(4) 祭日

毎年5月4日（古くは5月7日だったというが、いつ頃から変化したのかは不明。）

(5) 伝承団体

白山神社宮司、下大越・上大越

(6) 神幸経路 (図1)

神幸地／大越浦

神幸経路／神輿は、手作りの台車に載せられ、氏子らによって引かれていく。

最初のお旅所①〔坪内〕(写真1)は、神社から約300メートルほど東へ進んだ辻の道端に設けられている。ここでの神事・稚児舞奉納ののち、神輿は一度県道15号線へ出て南へ進み、根岸の集落へと入っていく。〔坪内〕から〔根岸〕のお旅所までは、約1キロメートルほどである。〔根岸〕のお旅所②(写真2)は、道の南側にあるコンクリート壁に設けられている。この後は一路、大越浦を目指す。〔根岸〕のお旅所からは約2キロメートルの道のりである。お旅所③〔須賀〕(写真3)で神事等が終了すると、ここで昼食休憩を1時間程度とる。その後、来た道を1キロメートルほど戻るようにして、次のお旅所④〔新田〕へと向かう。このお旅所も辻の道端に設けられている。神事等ののち、再び県道15号線へ出て、細田のお旅所⑤〔宿〕へ到着。このお旅所は道路沿いだが、お旅所としてのスペースが設けられている。神事等ののち、県道15号線を馬頭観音のところまで進み、上大越の水田の中を進む。沼畑の辻まで進んだら、ここで小休止する。ここにお旅所はない。ここから夏井小学校を通過して、最後のお旅所⑥〔上大越〕へと到着。お旅所⑤〔宿〕からは約2キロメートルの道のりとなる。

神事等ののち、神社まで愛谷江筋あいやえすじにそって約500メートルの道を進み、神輿は還御となる。全行程約8キロメートルを氏子らはすべて徒歩で渡る。

(7) 祭りの内容

潮水の扱い／サカキに潮水を浸す。

実施内容／白山神社での神事、稚児舞の奉納が済むと、神輿は大越浦へと出立する（なお、高齢化により神輿を担ぐのではなく、台車に載せて引いている）。

最初のお旅所〔坪内〕①では、地域の人びととともに神事と稚児舞の奉納が行われ、のち人びとが持ち寄った料理や酒で、小宴「オサカムカエ」となる。神輿は、次のお旅所②へと向かうが、地域の人びとは神輿が去ったあとも、その場にシートを敷いて宴を続ける(写真4)。

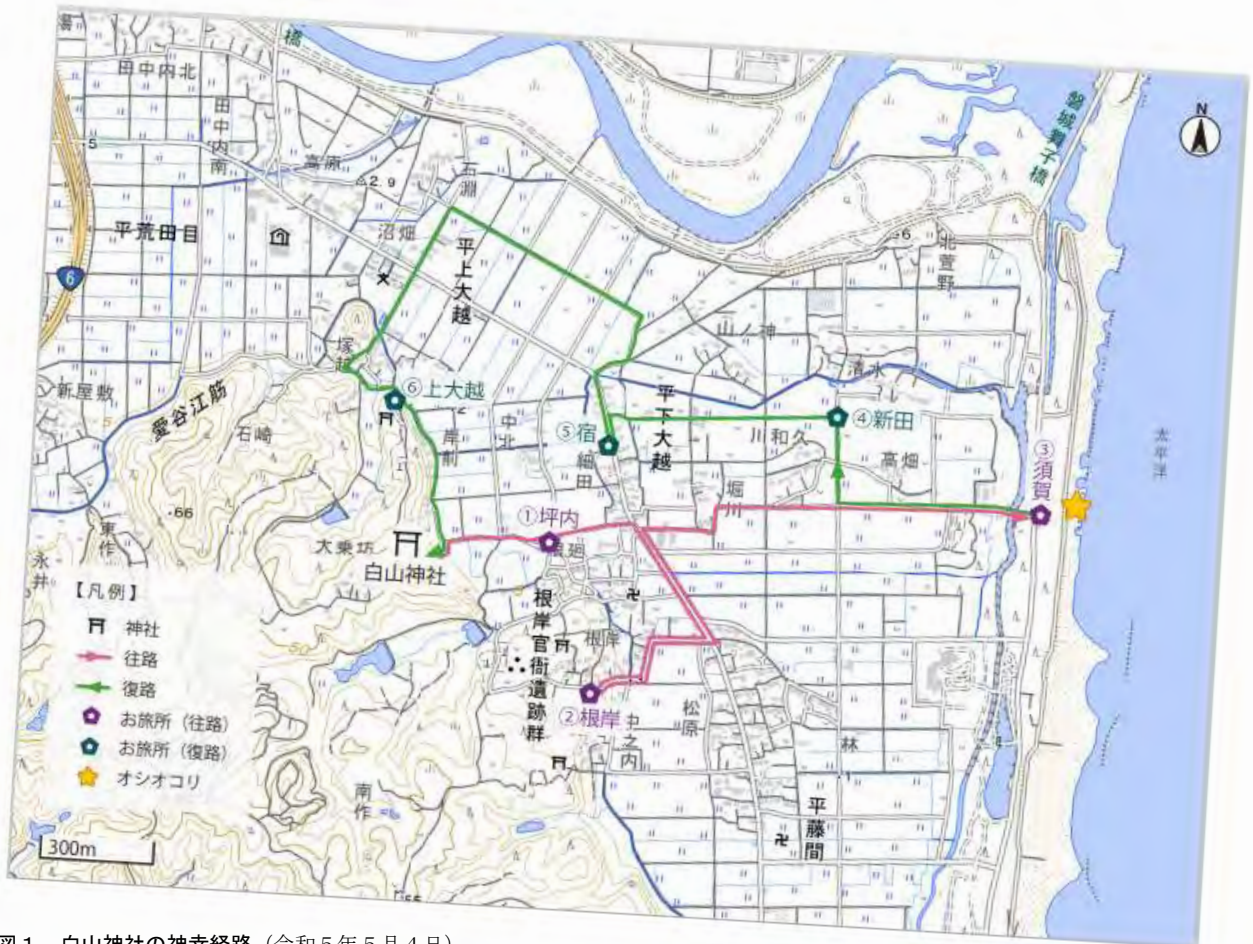


図1 白山神社の神幸経路 (令和5年5月4日)

次のお旅所②〔根岸〕でも同様に、神事と稚児舞の奉納(写真5)ののち小宴となるが、ここでは小宴は続かない。ここまでが、上大越の集落である。このあと神輿は下大越の水田のなかの道を通り、一路、海を目指す。

豊間四倉線とぶつかったところの松林のなかにお旅所③〔須賀〕がある。砂を盛りつけて台座とし、その上に神輿を据える。宮司がテングサマ(猿田彦)、氏子数名を引き連れ、松林を抜けて砂浜へと向かう(写真6)。宮司のみ海に入り、サカキを潮水に浸す(写真7)。これを「オシオコリ」という。なお、昭和40年(1965)頃までは、神輿ごと海へと入っていたが、神輿がソゲル(「痛む」の意)ので、浜辺で神事をするだけになったという。潮水につけたサカキを持って、お旅所に戻り、そのサカキで神事を行う。その後、ここで昼食・休憩となる。

昼食が済むと、高畑近くの十字路に設けられた旅所④〔新田〕へと向かう。ここには、集落の人たちが大勢集まって神輿を迎える(写真8・9)。これまでのお旅所と同様に、神事と稚児舞の奉納があるが、ここでは集落で決めた担当者によりお旅所が準備され、あらかじめ注文を受けていたお札を配るのが慣例となっている。

そののち、細田のお旅所⑤〔宿〕、蒼前神社前のお旅所⑥〔上大越〕へと向かい、同様に神事と稚児舞の奉納を行うが(写真10~12)、このお旅所⑤⑥は、大國魂神社(II-11)の祭礼でもお旅所として使用されている。大國魂神社は、往路で立ち寄り、白山神社は復路で立ち寄る。

お旅所⑥での神事等が終了すると、還御となる。

なお、神輿が拝殿から出る時、拝殿に入る前に、建物の周囲を3回時計回りに回る。

それぞれのお旅所には、四方を竹で囲い、門松のように飾り立てた2本のマツやタケに、サカキの枝を2本添えたりする。いずれもそこに縄を渡して、3本の綱を下げるという飾り方をする。お

旅所での饗応には、酒と焼いたタイがつく。餅も供える。

この祭礼には、「ガニメシ（サワガニのおこわ）」を作る習わしがあった。昭和の頃までは、子ども神輿も出ており、たいへん賑やかな祭礼だった。

(8) 祭礼の状況

新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の流行の際に中断。令和5年（2022）に4年ぶりに開催。しかし、稚児舞は行われなかった。そもそも、それ以前から舞手となる子ども（小学3～6年生の女兒）がおらず、稚児舞の廃絶が危ぶまれていた。しかし、令和6年（2023）の祭礼で復活した。稚児舞の経験のある中学生と、さらに新たに小学生にも声をかけ、13人で奉納した。お旅所の数が多く、その都度奉納しなければならないが、人数が多いので交代制にすることができた。

上大越・下大越は、人びとの結束が比較的強い地域で、古い習慣などもよく残る地域である。しかし、高齢化が進み、小高い山の中腹にある神社から神輿を下ろすのが難しくなりつつある。それでも、大工仕事得意な氏子らが、創意工夫して作った台車や滑車などをうまく用いて、神輿の渡御を行っている。

(9) 芸能等

女兒による稚児舞。今から60年ほど前に、^{しらやまひめ}白山比咩神社（石川県）に行って習い覚えてきたものだという。

(10) 関連資料

—

参考文献・資料

岩崎敏夫編『東北民俗資料集』(4) 萬葉堂書店（1976）

山名隆弘監修『いわきのお宮とお祭り』『いわきのお宮とお祭り』刊行会（2009）

【丹野香須美】



写真1 お旅所①〔坪内〕(R5. 5. 4)



写真2 お旅所②〔根岸〕(R5. 5. 4)



写真3 お旅所③〔須賀〕での稚児舞奉納（新舞子浜 R6. 5. 4）



写真4 お旅所①【坪内】では、神輿が去った
あとも小宴が続く (R5. 5. 4)



写真5 お旅所②【根岸】での稚児舞奉納 (R6. 5. 4)



写真6 浜下り (大越浜 R5. 5. 4)



写真7 宮司がサカキを潮水に浸す (大越浜 R6. 5. 4)



写真8 お旅所④【新田】 (R5. 5. 4)



写真9 お旅所④【新田】で準備された献饌 (R6. 5. 4)



写真10 お旅所⑥【上大越】 (R6. 5. 4)



写真11 お旅所⑥【上大越】での神事 (R5. 5. 4)



写真12 お旅所⑥【上大越】での
稚児舞奉納 (R6. 5. 4)

38. いわき市 八劔神社

(1) 神社の概要

名称／八劔神社

所在地／いわき市平下高久字馬場300

由緒／平安時代の天喜年間（1053～57）、源義家が東夷征伐で来た際、自身の宝剣に錦の御旗を添えて氏神八劔大明神に奉納し、必勝祈願をするとともに、熱田神宮の分霊を勧請したと伝えられる。

(2) 祭りの名称

塩求祭（シオゴリトリ）

(3) 祭りの由来

『福島県における浜下りの研究』には、「祭りには必ず白い鳥をあげて直会で食べた」と記載されているが、現宮司はそのような話は聞いたことがないという。

(4) 祭日

毎年5月4日。5月3日に宵祭、5月4日に本祭を行う。『常磐毎日新聞』昭和11年（1936）12月27日付には、5月7日が本祭であることが記載されているが、先代宮司の代から現在の日付になった（具体的な年代は不明）。

(5) 伝承団体

八劔神社宮司、八劔神社の氏子総代。

(6) 神幸経路（図1）

神幸地／神輿が高久海岸に渡御する。ただし、『いわきのお宮とお祭り』によると、かつて（具体的な年代は不明）は薄磯海岸まで渡御していたという。

神幸経路／かつて（具体的な年代は不明）の経路は、八劔神社を出発し、平沼ノ内の餓鬼堂横穴群を経由して薄磯海岸に行っていた。

令和6年（2024）現在は、八劔神社で予告祭を行ったのち、馬場、中妻、川和久、八幡、根岸、原の各集落のお旅所で神事と直会を行う（写真1）。各集落を回ったあと、高久海岸にて塩求祭を行う（写真2）。その後、海岸の近隣の祭場（新舞子ハイツ付近の空地）で神事と直会を行う（写真3）。そこから八劔神社に向かい、到着後、了告祭を行う（約8キロメートル）。

なお、川和久から八幡までの区間で、宮司は兼務している二荒神社（平下山口／IV-78）の神事に出向いている。

(7) 祭りの内容

潮水の扱い／高久海岸で行われる塩求祭で、宮司が神事を行い、禰宜がお潮採りをする（写真4）。

その際、神輿は近隣の祭場に置いていく（神輿は、海岸のほうに向けて置く）。塩求祭で汲んだ潮水は、最後神社にお供えする。

一方で、『福島県における浜下りの研究』には、神輿を海の中に担ぎ入れるとの記載が見られる（オシオモリ）。令和6年、塩求祭に参加していた氏子総代によると、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）が流行する前（具体的な年代は不明）までは行われていたという。

実施内容／八劔神社出発後、祭場までの各お旅所で集落安全祈願の神事、直会を行う。各お旅所には注連縄が張られており、その両脇にはサカキやサツキ、ツツジ、フジなどの花が飾られている（写真5）。直会では、お神酒と紅白ナマスを口にするが、高久地区の紅白ナマスには、サクラエビが入っているのが特徴である。

塩求祭では、お潮採りをして海上安全を祈願する。以前（具体的な年代は不明）は、終了後その

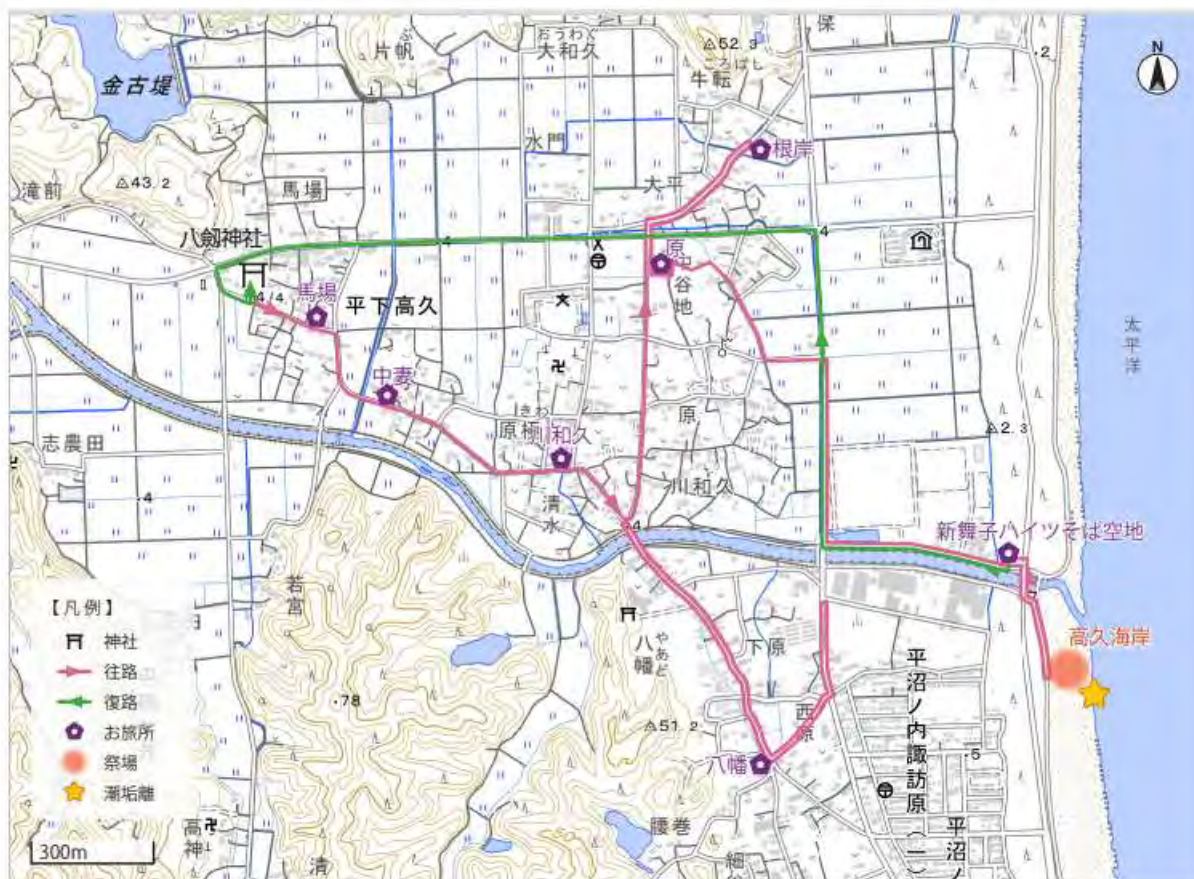


図1 八劔神社の神幸経路 (令和6年5月4日)

場に莫藎を敷いて直会をしていた。

もともとは、大人神輿、子ども神輿ともに担いで渡御していた。令和6年現在は、大人神輿は担ぎ手がある時は担ぎ、いない時は車輦で渡御する。子ども神輿は、リヤカーに載せて子どもたちが引くが、担ぎ手の子どもたちがいる時は担いで渡御する。令和6年は、馬場から中妻までは大人神輿、子ども神輿ともに担いで渡御 (写真6・7)、中妻から根岸までは大人神輿は担ぎ、子ども神輿はリヤカーで渡御 (写真8)、根岸から原までは大人神輿が車輦、子ども神輿がリヤカーで渡御、原から祭場まではともに担いで渡御した (祭場から八劔神社まではともに車輦神輿での渡御)。大人神輿の担ぎ手は、各集落の青年会員のほか、昨年より外国人技能実習生が参加しており、各集落で交代しながら渡御している (写真9)。

平成初期までは喧嘩神輿をやっており、神輿をぶつけあっていたという。そのため、神輿は重くできていた。令和6年に参加していた氏子総代によると、神輿は250キログラムほどあるという。

(8) 祭礼の状況

新型コロナウイルス感染症 (COVID-19) が流行した令和2～4年 (2020～22) は神輿の渡御をせず、八劔神社で予告祭のみ実施していた。その際に使用する潮水は、宮司と禰宜が汲みにいていた。令和5年 (2023) から神輿の渡御を再開した。この年は、宮司が代替わりしてから初めての渡御となった。

(9) 芸能等

—

(10) 関連資料

—

参考文献・資料

高久小学校編『郷土誌 高久小学校』昭和7年(1932)

「石城の神社と佛閣(六)」『常磐毎日新聞』昭和11年(1936)12月27日付

福島県立博物館『福島県立博物館調査報告第28集 福島県における浜下りの研究』(1997)

山名隆弘監修『いわきのお宮とお祭り』『いわきのお宮とお祭り』刊行会(2009)

【齋藤りぼん】



写真1 お旅所での神事(平下高久川和久 R6.5.4)

写真2 高久海岸での塩求祭(R6.5.4)



写真3 祭場での神事(平下高久南谷地 R6.5.4)



写真4 高久海岸でのお潮採り (R6.5.4)



写真5 お旅所の飾りつけ (平下高久中妻 R6.5.4)



写真6 大人神輿の神輿渡御 (平下高久馬場 R6.5.4)



写真7 大人神輿と子ども神輿がすれ違う (平下高久馬場 R6.5.4)



写真9 神輿を揉む (新舞子ハイツ R6.5.4)



写真8 子ども神輿の神輿渡御 (平下高久八幡 R6.5.4)

39. いわき市 薄井神社

(1) 神社の概要

名称／薄井神社

所在地／いわき市平薄磯字三反田221

由緒／『豊間の郷土誌』によると、古くは白石大明神と称していた。もとは薄磯字北ノ作に鎮座していたが、元文4年(1739)に別当修徳院によって寺域の一角に遷宮したという。大正6年(1917)の暴風により境内が崩壊し現在地に移った。

(2) 祭りの名称

例大祭、お潮採り

(3) 祭りの由来

漂着神伝承／昭和14年(1939)調査の「磐城豊間村薄磯の漁村民俗資料」には、ご神体が明神磯に「お上がりになった」との伝承があると記載されているが、神社を兼務する豊間の諏訪神社(IV-76)宮司の大嶺氏によると、そのような伝承はないという。

(4) 祭日

「磐城豊間村薄磯の漁村民俗資料」によると、昭和14年(1939)当時は「毎年七月七日」に行われ、「昔は四月八日」に行われていたという(ともに旧暦)。宮司によると、ゴールデンウィークが制定されるようになってから新暦5月4日になったらしい。5月5日だったこともあるが、4日に例大祭、翌5日に片付け、という都合から、現在は5月4日に定着したようである。

(5) 伝承団体

諏訪神社(豊間)宮司、薄井神社総代会、薄磯青年会、消防団、子ども会。

(6) 神幸経路(図1)

神幸地／薄磯築港

神幸経路／薄井神社を出立後、県道382号(豊間四倉線)の丁字路で安波大杉神社の神輿と合流し、神輿を揉む。ここで2基の神輿をトラックの荷台に載せ、災害公営住宅薄磯団地集会所へ向かう。薄磯団地集会所前で神輿を揉んで(写真1)団地を出発後、薄磯2丁目の新興住宅地内を回って薄磯1丁目を通り、金倉稲荷神社前で折り返す。民宿鈴亀(区長自宅)の庭で神輿を揉み、県道382号に出て塩屋埼灯台方向へ進み、つるや売店付近で神輿をトラックから降ろして担ぐ。雲雀乃苑と山六観光前で神輿を揉み、神輿を担いだまま薄磯築港へ下りて神輿を安置する(写真3)。築港で潮水を汲んで11時頃から神事を行う。神事終了後、築港を出発していわき震災伝承みらい館を通過し薄磯集会所へ向かう。集会所に到着後、昼食と休憩をとる。休憩後、集会所を出発して東日本大震災慰霊碑・水難海難慰霊碑前を通過し薄井神社へ遷宮する。

(7) 祭りの内容

潮水の扱い／神輿が塩屋埼灯台下の築港に到着すると、総代または地区役員が波打ち際へ向かい、バケツに潮水を汲む(写真4)。汲んだ潮水は柄杓で紙コップに移し、お神酒、大根と人参のナマスとともに2基の神輿に供える。神事が始まり、神官による祝詞奏上後、神輿に供えた潮水を前後4か所の担ぎ棒の先端へ数回に分けて掛ける(写真5)。お神酒も同様に掛け、ナマスも4か所に少しずつ置く(写真6)。

実施内容／神社拝殿での神事には総代、区役員、神輿担ぎ手(薄磯青年会・消防団)、子ども会保護者代表、警察官が参列する。境内には薄井神社神輿と子ども神輿が安置され、神事終了後、担ぎ手数人が徒歩数分の距離にある安波大杉神社へ向かい、ほかには薄井神社境内で待機する。安波大杉神



図1 薄井神社の神幸経路 (令和5年5月4日)

社にて神職と総代、担ぎ手による神事後、神輿にご神体が移され、神輿を担いで安波大杉神社を出立する。薄井神社の神輿と子ども神輿も神社を出立し、安波大杉神社神輿と合流し、神輿を揉む。神輿を揉む際は薄井神社の神輿ではなく、小型の安波大杉神社の神輿を使う。太鼓は消防団車両に積んで移動し、笛は録音したものを流す。2基の神輿はトラックに載せて地区内の大半を神幸するが、子ども神輿は子どもたちが担いで歩く。薄磯団地集会所では神輿を車両から下ろし、「ヨイヤサーノイエー」の掛け声で神輿を担ぎ上げ、激しく揉む。子どもたちはここで休憩する。神輿の下の賽銭受けには大漁旗が用いられている(写真2)。神輿の巡行は金倉稲荷神社前が折り返し地点となるが、ここでは神輿を揉むことはしない。

塩屋埼灯台下の築港に到着すると、オシオトリの神事が執り行われ、神事終了後、お神酒とナマスが皆に振る舞われる。築港を出たあとは薄磯集会所へ向かう。集会所の敷地には四方に青竹を立てて注連縄が張られ、神輿を安置して昼食をとる(直会)。子ども神輿も合流し、子どもたちはここで解散する。11時45分頃に大國魂神社(II-11)の神輿を載せたトラックが集会所へ到着する。この場所で同神社の神輿が休憩する。ここでの神事には薄磯区長、総代役員も参加する(写真7)。玉串奉納は薄磯関係者、大國魂神社の順で行われた。

休憩後、集会所近辺の住宅を回ってから神輿を車両に載せて薄井神社へ戻る。神社に到着するとまず安波大杉神社の神輿を社殿の前に安置し、次いで薄井神社の神輿を担ぎ、「ヨイヤサーノイエー」「ホイッサホイッサ」の掛け声を掛けながら鳥居をくぐり、階段を上る。社殿の周りを右回りで3周したあと(写真8)、拝殿の前で神輿を揉み、そのまま拝殿の中へ神輿を担ぎ入れ拝殿の中で上下に激しく揉み、神輿を拝殿から出して境内に安置する。その後、神輿の解体作業を行い、ご神体を本殿へ戻す。片付けが終わって終了となる。安波大杉神社の神輿も戻し、片付けを行

う。

総代長によると、薄磯地区は漁業関係者が多く「暴れもんばかりいたとこだから」、皆酔っぱらって神輿を担ぎ、30年位前（平成初期頃か）までは神輿渡御の途中に乗り合いバス4～5台の通行を止めたこともあったという。当時は青年会も30～40人ほどおり、神輿をずっと担いで回った。また、時期は不明だが、道路がまだ舗装されておらず砂利道だった頃は、足袋が2～3足泥だらけになった。担ぎ手は現在のような浴衣姿ではなく、猿股を履いていた。お昼を過ぎるとお酒が入り、神社に帰社するのは夜の11時頃だったという。

平成23年（2011）の東日本大震災以前は、築港でのお潮採りの神事後に神輿を担いで薄磯海岸に下りてゴマ磯の岩の上に神輿を置き、再度ここで潮水を汲んで神輿に供えた（写真9）。その後、宿で昼食をとり、再び地区内を渡御する際に神輿が海に入ったが、海水で神輿の金属部分が錆びて修理に出すなど大変だったという。海に入ったのは薄井神社の神輿だけで、安波大杉神社の神輿は子ども会で担いでいた。青年会によると「神輿は漆が塗られているため海水に濡れると痛むので総代さんたちには毎年怒られていたが、漁業関係者が多いので、本気では怒らない。本当は神輿が海に入るのが嬉しく、ニヤニヤしながら怒られた」という。震災でゴマ磯が小さくなってしまい、危険なため、震災後はゴマ磯でのお潮採りは行われていない。また、震災以前は神輿を車に積んで砂浜に入ることができた。現在は神輿を担いで砂浜に下りる道がなくなったことから、神輿が砂浜に下りることもなくなったが、平成29年（2017）は神輿が海に入った。

「磐城豊間村薄磯の漁村民俗資料」には、薄磯の浜にほかの神社の神輿も集まって「さかむかへ」の祝いが行われた、という内容の記述があるが（関連資料参照）、区長も総代長もそのような光景を見た記憶がないとのことで、かなり前に行われなくなったと推測される。

（8）祭礼の状況

薄磯地区は東日本大震災の津波により甚大な被害を受けた。『福島県域の無形民俗文化財被災調査報告書2011～2013』によれば、薄井神社の氏子250戸中、津波被害を免れたのは16戸だったといい、多くの世帯が被災して地区から離れ、人口は著しく減少した。

海岸から離れた場所に位置する薄井神社は、鳥居が倒壊したが津波の被害はなく、神社で保管していた神輿も無事だった。祭礼時に各町内と神社に立てる幟旗や青年が着用する揃いの浴衣などは津波で流出したが、翌年5月には例大祭が行われ、住宅の基礎だけが残された地区内を神輿が渡御した。この地区には震災後さまざまなボランティアの支援が入り、例大祭も支援を受けながら行われてきた。また、災害公営住宅の整備や高台に住宅地が造成されたことで、再びあるいは新たに薄磯地区に居住するようになった人たちも例大祭に参加するようになり、祭りが薄磯地区のあらたなコミュニティーを形成する手段のひとつとなっている。

新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の影響で令和2年（2020）から同4年（2022）まで神輿渡御は中止していたが、令和5年（2023）は4年ぶりに神輿が町内を回った。

（9）芸能等

（10）関連資料

「磐城豊間村薄磯の漁村民俗資料」（抜粋）

（六）さかむかり

B おしほとりときかむかへ

毎年七月七日（昔は四月八日）各神社が浜に下つて潮をとるが、大國魂神社は豊間の磯で、八剣神社はこの磯で、両二荒神社白山神社は護摩磯で、佐麻久嶺神社は中屋の磯で、薄井神社はやどの明神磯でその事を行ふ。何れもその磯に、昔お上りになつたといふ事に由来するのである。（中略）

佐麻久嶺神社の神輿は薄磯の青年が受取り海に入る。

各所で潮をとつた神輿は薄磯の浜に集つて海に面して並ぶ。てんまを台として到着順に並び、又同じ順におさかむかへの祝をするのであるが、全部の神輿が並ぶのは堂々として立派である。尤も飯野の二荒神社の如き五年に一度のお下りであり、佐麻久嶺神社ももとは毎年であつたが今は矢張り五年に一度であるから、毎年全部の神輿が浜に並ぶわけではない。又この浜の青年との間にいさかひがあつて来ることを中止してゐる神社もあるさうである。兎に角さかむかへの世話は薄磯の社総代達が主となつて取り行ふのであつて当日は多忙である。青年漁師みな出て供物を供へる。さかむかへには先づ高砂、庭のいさごの如きめでたき謡を三つうたふ。こゝの区長とか社総代が代表して発声する。次にめでたを三つうたふ。此方で一つやれば向ふで一各神輿側で一やるといつた具合に両方でやるのである。それがすむと酒盛となる。夕刻神輿は皆帰路につき、この村の青年達は村はづれまで送ることを習慣とする。よその神輿は帰つてもこゝの薄井神社のは町をもみ歩き社にもどるのは夜中の十二時頃になつたりすることもあるといふ。

磐城民俗研究会「磐城豊間村薄磯の漁村民俗資料」『旅と伝説』第12年第11号（1939）

参考文献・資料

須藤春峰『豊間の郷土誌』（1966）

佐々木長正「浜下りの神事の分布と考察」（岩崎敏夫編『東北民俗資料集』（4） 1975）

いわき市神社総代会第三方面部会神社誌編纂委員会『神社誌』昭和54年（1979）

岩崎敏夫「漁村の生活聞書1 豊間村の話」『村の生活聞き書』（1991）

山名隆弘監修『いわきのお宮とお祭り』『いわきのお宮とお祭り』刊行会（2009）

民俗芸能学会福島調査団『福島地域の無形民俗文化財被災調査報告書2011～2013』（2014）

【渡邊 彩】



写真1 薄磯団地集会所前で神輿を揉む（R5. 5. 4）



写真2 賽銭（おひねり）を入れる住民。漁業地区らしく賽銭受けは大漁旗を使用（薄磯南作 R5. 5. 4）



写真3 神輿を担いで薄磯築港へ下りていく（薄磯築港 R5. 5. 4）



写真4 総代または地区役員が波打際で潮水を汲む（薄磯築港 R5. 5. 4）



写真5 神輿に供えた潮水とお神酒を担ぎ棒の前後4か所に掛ける (薄磯築港 R5.5.4)



写真6 潮水とお神酒を掛けたあとにナマスを供える (薄磯築港 R5.5.4)



写真7 薄磯集会所に大國魂神社の神輿が到着。神事には薄磯の関係者も参加する (薄磯中街 R5.5.4)



写真8 神社へ帰社し、社殿の周りを時計回りに3周する (薄磯神社 R5.5.4)



写真9 ゴマ磯の岩の上に神輿を置いて神事を行う (薄磯神社 H19.5.4)

40. いわき市 飯野八幡宮

(1) 神社の概要

名称／飯野八幡宮 通称：ハチマンサマ

所在地／いわき市平字八幡小路84

由緒／康平6年(1063)、源頼義が石清水八幡宮から勧請したという。また、文治2年(1186)、源頼朝の命により関東御領好嶋荘の惣社として勧請されたとの別伝がある。宝治元年(1247)、伊賀光宗が好嶋西荘の預所となり、代々その子孫が神職を勤める。なお、伊賀氏は、室町時代、光隆の代から飯野氏を名乗る。

(2) 祭りの名称

潮垢離神事(例大祭関連神事のうち流鏝馬神事にともなう)

(3) 祭りの由来

官司によれば、飯野八幡宮の潮垢離神事や流鏝馬神事は鎌倉時代・南北朝時代からの伝統であり、斎場である藤間浜は夏井川河口と滑津川河口との中間にあつて、川水の入らない清浄な浜であることから選ばれたという。また、南北朝時代この地を治めていた伊賀氏(飯野氏)は北朝にくみし、海路を採る南朝方を捕らえるよう命を受け、浜に軍勢を出したとも伝えられ、浜に騎馬で向かうのは行軍の意味もあつたという。

*1 『いわき市史』第8巻 原始・古代・中世資料「飯野文書」9-1「岩城郡八幡宮縁起注進状案」建暦2年(1212)には「建暦元年四月十五日 八幡宮御浜出」。同3-21「奥州管領府奉行人連署奉書」貞和2年(1364)には「当社放生会流鏝馬已下社役等事」等の文言が見える。

(4) 祭日

平成23年(2011)から9月15日の例大祭直前の金曜日(流鏝馬神事の前日)。もとは9月13日(旧暦では8月13日)。

(5) 伝承団体

飯野八幡宮官司、流鏝馬神事騎手、氏子総代2人。

(6) 神幸経路(図1)

神幸地／藤間浜(いわき市平藤間字川前63-3)

神幸経路

往路／八幡宮を出て八幡小路から揚土の坂を下り、田町に出てそのまま南下、平中町交差点を左折して旧国道6号(県道いわき上三坂小野線、国道399号)を東へ。新川町交差点でいったん右折したあと左折して県道甲塚古墳線に入り東に向かい、道なりに六十枚から県道小名浜四倉線を南下し、藤間浜駐車場まで車移動で約10キロメートル。駐車場から砂浜の潮垢離祭斎場まで徒歩で約500メートル(往路計約10.5キロメートル)。

復路／斎場から駐車場まで徒歩で約500メートル。帰路につく。途中、宮脇で北西(斜め右)に入り国道399号を潜り、下川原、鎌田町と北上して禰宜町から西へ。いわき駅前を通り、田町から北上して揚土の坂を上り八幡宮まで約11キロメートル(復路計約11.5キロメートル)。

総計約22キロメートル(車21キロメートル、徒歩約1キロメートル)。

なお、車移動になってからは、道路事情等により必ずしも一定しないという。

(7) 祭りの内容

潮水の扱い／騎手が角樽に潮水を汲み持ち帰る。

実施内容／藤間浜で官司、騎手が海に入り身を清める。騎手が潮水を汲む際、馬も波打ち際を進み、

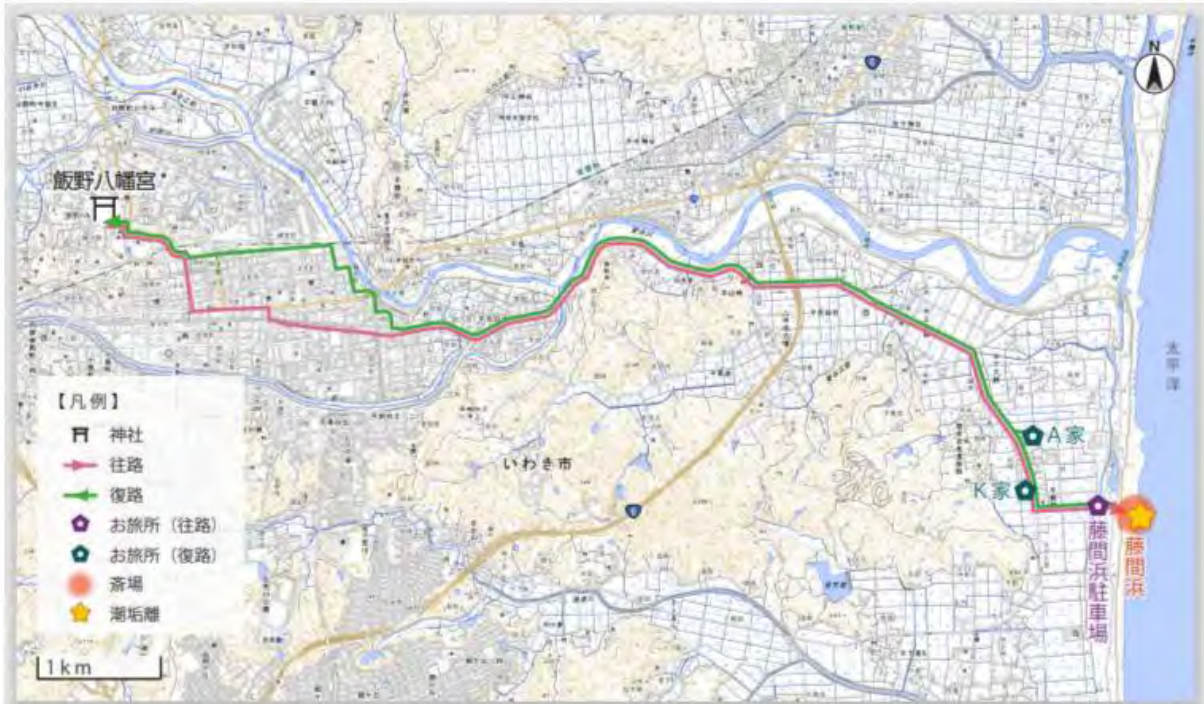


図1 飯野八幡宮の潮垢離経路（令和6年9月6日）

脚元を海水に浸す。角樽に汲んだ潮水は、流鏝馬神事の騎手によれば、翌日の流鏝馬神事に際して装束へ着替えるために沐浴する際、風呂に混ぜて使用するという。なお、『いわきのお宮とお祭り』によれば、馬の四脚もこの潮水で清めるとあるが、宮司によれば、これは馬が波打ち際に入るのを嫌がった場合であるという。

以下、令和6年（2024）9月6日実施の内容を記す。

- 9:30（以下、およその時刻） 宮司、騎手、社総代役員2人等あわせて数人、車2台に分乗し八幡宮を出発。震災以前は藤間浜まで決まった道を騎馬で往復したという。
- 10:00 藤間浜駐車場到着、^{なこそ}勿来の乗馬クラブから来た馬（タンゴ号）と合流し海岸へ。
- 10:20 砂浜にゴザを敷き、宮司は白衣、騎手は下帯に着替えをして海に入る（写真1）。
- 10:25 騎手は角樽を携えて潮水を汲む。
- 10:30 馬も騎手にひかれて波打ち際を進む（写真2）。ゴザの端に潮水を入れた角樽を中央に置き、それに弓（弓袋に入れられ、紙垂が付けられる）を載せ、矢を砂に突き立てて、これらを祭壇とする。神酒と浜で拾った貝殻（酒盃とする）を供える。海から上がった宮司は烏帽子に狩衣、騎手は烏帽子と白衣姿に着替えて神事となる。
- 10:48 潮垢離祭斎行。角樽、弓矢および騎手、馬、参列者を祓い串で清め、宮司による祝詞奏上（写真3）、騎手、総代役員の玉串奉奠等をして10:58頃直会となる（写真4）。神酒を貝殻の盃で^{さかな}拝戴。この時、弁当のほかに恒例として海苔の佃煮を肴にする。
- 以前、神事・直会には藤間地区の住民も参加、もとは角樽に酒を入れ、浜に持ち込んで酒宴となり、これが空になってから潮水を汲み入れたという。
- 11:38 ゴザ等を片付けして浜をあとにする。神事で使用した祓串・玉串は波打ち際に立て残す。
- 12:00 藤間地区でサカムカエ^{*2}。久保木家では座敷の床の間に弓を安置し、宮司を上座に総代役員、騎手と座を占める（写真5）。家人から挨拶を受け、酒・肴^{*3}を勧められる。宮司から高砂、四海波の謡^{うたい}、これに応じて当主からは目出度^{めでた}が謡われる。しばし^{けんしゅう}献酬のち、騎手が座を立てて家人を集め、弓を振ってお祓い^{ゆみはらい}（弓祓：写真6）をして座がお開きとなる。外に出ると騎手は馬に乗

り、庭を7回、空駆する（写真7）。久保木家を辞去し、青木家に向かう。青木家では空駆を5回してサカムカエとなる（写真8・9）。次第は久保木家とほぼ同じ。家人に弓祓をして帰路につく。途中、以前は騎馬で通ったとされる道を通る。

15:00 八幡宮着（宮司、役員らはこのあと、社内で御籠と称して酒席を設けるといふ）。

*2 通常は星野家、久保木家、青木家の3軒に立ち寄るが、今回、星野家は中止となった。

*3 肴は、別火（ブドウ・ナシ・みつ豆など果物類、刺身、酢の物など火を使わないもの）を付ける。

(8) 祭礼の状況

東日本大震災からの復興の拠り所となるよう、発災の年である平成23年9月にも通常規模で斎行された。その後、令和元年（2019）9月までは例年どおり斎行されたが、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の流行により、令和2～4年（2020～22）の例大祭は規模を縮小し、境内での諸神事は行われたが神輿渡御はせず、流鏝馬神事も境内をひき馬するにとどめた。なお、潮垢離神事は藤間地区でのサカムカエは見合わせたが、浜での神事は斎行されつづけた。令和5年（2023）からはもとに復している。

(9) 芸能等

(10) 関連資料

① 飯野八幡神社のやぶさめまつり（抜粋）

四、飯野八幡神社のやぶさめまつり

十三日、藤間の海岸で神官・やぶさめが塩ごりをとる。昔は、午前四時ごろ神社を出たが、今は午前九時ごろで、神官と白装束のやぶさめ二騎、総代二名で行き、はらいの祝詞ののち、海に入って塩ごりをとる。この神事は、見るものに、海上はるかかなたの神を迎えるおごそかな儀式を思わせる。その後、平藤間にある久保木・青木の両家に立ち寄り久保木家で七回、青木家で五回走る。両家では火を使わない料理を準備し簡単な宴のあと、一同でめでたをうたう。帰途、大越の宿で三回走る。また、この日、タルに塩水をくんで来て神殿内をきよめる。また氏子が集まって、しめ縄の掛けかえをするのも、この日である。

いわき市史編さん委員会『いわき市史』第7巻 民俗（1972）

② 県社 飯野神社（抜粋）

例祭ノ式ハ、毎歳八月九日ヨリ神事ニ関スル者一統社務所ニ於テモノイミ、全月十三日濱辺ニ出テ身潔ノ祓式ヲ行フ 全月十四十五日ノ両日神殿ニ昇リ祭祀修業ス、最モ古来ヨリ流鏝馬放生會神事ヲ勤ム十五日正卯ノ刻渡御祭ノ式アリ

平第二小学校編「郷土誌 平第二小学校」明治45年（1912）

参考文献・資料

山名隆弘監修『いわきのお宮とお祭り』『いわきのお宮とお祭り』刊行会（2009）

【四家久央】



写真1 潮垢離する宮司と騎手（藤間浜 R6.9.6）



写真2 潮垢離をする馬 (藤間浜 R6.9.6)



写真3 塩垢離祭宮司祝詞奏上 (藤間浜 R6.9.6)



写真4 貝盃で直会 (藤間浜 R6.9.6)



写真5 久保木家サカムカエ (藤間地区 R6.9.6)



写真6 久保木家弓祓 (藤間地区 R6.9.6)



写真7 久保木家空駆 (藤間地区 R6.9.6)



写真8 青木家空駆 (藤間地区 R6.9.6)



写真9 青木家サカムカエ (藤間地区 R6.9.6)

41. いわき市 諏訪神社・安波大杉神社・出羽神社

(1) 神社の概要

名称／諏訪神社 通称：アキサマ

所在地／いわき市四倉町西3-60

由緒／天長3年(826)に田戸地区の白山に居館していた田戸修理太夫が諏訪明神を勧請し、白山中腹に奉斎した。文治5年(1189)に鈴木重家が紀州から田戸郷に移り住み、その子孫が文明元年(1469)に現在地へ遷座した。通称を「アキサマ」というのは、諏訪大社の秋宮(下諏訪)の分霊を勧請したためと伝わる。慶長18年(1613)、鳥居忠政侯から神領が寄進された。

名称／安波大杉神社 通称：アンバサマ

所在地／いわき市四倉町西3-60(諏訪神社境内)

由緒／諏訪神社の摂社。漁業関係者に信仰される。塩木地区の八坂神社に祀られていた大杉明神(安波明神)を江戸時代に諏訪神社境内に遷座したという。

名称／出羽神社 通称：ハグロサマ

所在地／いわき市四倉町西3-62(諏訪神社境内)

由緒／諏訪神社の摂社。延宝2年(1674)創建といわれる。天和3年(1683)社殿再建の棟札あり。伝説によれば四倉町内の鈴木甚左衛門宅地内に老松があり、付近一帯は沼地で雑草が繁茂していた。その中に夜間、羽黒大明神のご尊体に似たものが光を放っていたため、神殿を建立したという。明治期以前は神仏習合により「羽黒大権現」と呼ばれていたという。神仏分離令により明治2年(1869)、出羽神社と改称した。

(2) 祭りの名称

例大祭、お潮汲み神事。昭和35年(1960)まで毎年旧暦4月8日に行われていたことから「お八日さま」とも呼ばれていたが、現在は呼ばれていない。出羽神社は、もとは旧暦6月15日に大祭を執行していたが、諏訪神社祭礼に合わせて旧暦4月8日に行われるようになったという。

(3) 祭りにまつわる伝承

『大日本名蹟図誌 第拾貳編 磐城岩代之部 第五卷』や『いわきのお宮とお祭り』によると、田戸の白山神社と塩木の八坂神社へそれぞれ3年に1度神輿が渡御する。

諏訪神社宮司によると、永年総代の長谷川家にオシズサマという神様(茨城県シズタマ神社(静神社)から勧請したとの伝承あり)のご神体があり、これを諏訪神社に持ってきてもらい社殿に納めてから、諏訪神社のご神体を神輿に移す。オシズサマが来ないと祭りが始められないといわれた。ご神体の留守を守ってもらうという意味ではないかとのこと。また、長谷川氏が必ず米と餅と神饌を持参する。

(4) 祭日

諏訪神社所蔵の「神輿順序 経費収支 駅通貯金(基本金) 奉供当番 雑事録」4冊を調査した緑川健氏の報告によると、昭和35年までは旧暦の4月8日に行われていた。翌36年(1961)から新暦の5月8日に変更され、昭和44年(1969)頃に5月5日、同63年(1988)から5月4日となった。

(5) 伝承団体

諏訪神社宮司、諏訪神社総代会、憩いクラブ、善友会、清水会、青年会、子供会

(6) 神幸経路 (図1)

神幸地／四倉海岸(平成23年[2011]の東日本大震災後は道の駅よつくら港)

神幸経路／社殿での神事後、諏訪神社、安波大杉神社(アンバサマ)、出羽神社(ハグロサマ)の3基



図1 諏訪神社の神幸経路（令和4年5月4日）

の神輿をトラックに載せ、10時に諏訪神社を出立（写真1）。仲町地区の翹屋前（四倉町東四丁目）で休憩後、県道41号線（小野四倉線）を横断して新町地区を進み、四倉町六丁目の四倉町と久之浜町田之網地区との境（旧石城郡と旧双葉郡の境）付近で折り返す（写真2・3）。額賀胃腸科内科医院前で休憩し、11時30分に四倉築港へ到着、道の駅よつくら港にて神事を行い（写真4）、昼食と休憩をとる。道の駅を出立後、仲町地区を通過して本町地区へ向かい、大川魚店前で休憩後、関係者がマイクロバスに乗り、塩木地区へ移動する。塩木地区内を巡行しながら八坂神社へ向かい（写真6）、神社到着後、神事を執り行う。14時、八坂神社を出立、再びマイクロバスに乗り、四倉駅前には到着後、本町地区を進む。15時、諏訪神社へ帰社した。

(7) 祭りの内容

潮水の扱い／細井裕次郎「祭りの変遷とその意味 ―福島県いわき市四倉町諏訪神社例大祭を巡って―」によると、昭和10年（1935）頃のお潮汲み（お潮採り）神事は、海岸に神輿を安置し、神輿渡御の際に一緒に運ばれる大櫛の枝を船頭が折って首元に挿し、船名を記した酒樽を持って波打ち際まで走り、お神酒を砂浜にかけてその場を清め、サカキにもお神酒を3度かけて清めてからサカキを海水に浸し、神輿の所へ戻ってサカキに付いた潮水を神輿の屋根に振りかける。これを3回繰り返した。この形態は昭和40年代末頃まで行われていたという。略式は、桶に潮水を汲んでサカキを浸し、神輿に振りかけることを3回繰り返す。

神事は漁港で行われることもあった。平成22年（2010）のお潮汲み神事は四倉海岸で行われ、各神輿の担ぎ手代表がお潮汲みをした。潮汲み神事後、神輿の海中渡御が行われ、氏子や有志団体が担ぐ複数の神輿が掛け声とともにいっせいに海に入った（写真7）。

東日本大震災以後、お潮汲み神事は中断していたが、令和5年（2023）から道の駅よつくら港に

て復活した。同7年(2025)は、漁協で汲んだ潮水を樽に入れて神輿から離れた場所に置き、漁業関係者が「タイリョータイリョー(大漁大漁)」と言いながらサカキにお神酒を振りかけて樽の中の潮水に浸したあと、神輿の前に置いた木桶まで行き、桶の上でサカキにお神酒をかけてサカキについた潮水を落とす。神輿と樽との間を3往復する。そのあと神輿の担ぎ手も同様に行った。木桶に溜まった潮水は帰社後、神前に供えるという(写真8)。

実施内容／令和4年(2022)は、新型コロナウイルス感染症(COVID-19)の防止対策として神輿をすべてトラックへ載せて渡御し、総代長、猿田彦、神職、先導車(太鼓・楽団)、安波大杉神社(善友会)、出羽神社(青年会)、諏訪神社(憩クラブ)、神職、清水会(館下稲荷神社)、子供会の順で渡御した。このほかに八幡神社(同町地引地内)の神輿も出た。沿道の人びとが賽銭(オヒネリ)を神輿に投げ入れる(写真5)。

例大祭では塩木地区の八坂神社、田戸地区の白山神社、四倉町内を3年に1度ずつ神幸し、令和4年は塩木地区の八坂神社へ神幸した。四倉町内を回る年は、通常の神幸では行かないような所も回る。総代によると、四倉海岸での海中渡御後にこれらの神社まで神輿を担いで回っていたため、非常に疲れたという。神輿を担ぐ際には「キヤリウタ」が歌われるという。

神社に帰社して神輿を安置し、神事を行ったあとにご神体を神輿から本殿に戻す。その後、氏子、総代、有志らが社殿の周りを「センドーセンドー」と言いながら、左から時計回りに3周し、神社の神輿蔵に神輿を戻し、終了となる。

神社に残された寄進棟札や雑事録を調査した緑川健氏の「四倉の合同例大祭～昭和30年代の神輿の浜下り～」によると、諏訪神社の神輿渡御は江戸時代後期には行われていたという。また、明治20年(1887)の神輿渡御順序は「第一 諏訪神社神輿 第二 鹿島神社神輿(白岩) 第三 十市神社神輿(玉山) 第四 天照皇大神宮神輿(原高野)」となっており、近隣の神社の神輿が諏訪神社境内に集まって四倉町内を渡御し、浜下りを行っていたことが分かる。安波大杉神社神輿の渡御は大正4年(1915)から、出羽神社神輿の渡御は大正10年(1921)からである。

昭和30年(1955)3月に四倉町・大浦村・大野村が合併し四倉町となった。これを記念し、上仁井田の諏訪神社(IV-89)、狐塚の稲荷神社(IV-88)、名木の八幡神社(IV-87)の神輿も加わり、四倉3町村の神社神輿が四倉の諏訪神社へ集結し、四倉海岸でお潮汲み神事と海中渡御が行われた。昭和31年(1956)5月17日付の地元夕刊紙『いわき民報』は、四倉の例大祭に14基の神輿が出ていっせいに町内を巡行し、見物客で町は約3万人の出入で賑わったと報じている。原高野の天照皇大神宮(IV-74)と上仁井田諏訪神社は昭和35年まで、十市神社(IV-85)、白岩の鹿島神社(IV-86)、名木八幡神社、狐塚稲荷神社は同43年(1968)まで四倉の諏訪神社へ集結し、合同例大祭に参加していた。

昭和30年代、北洋サケマス漁業が全盛期だった四倉では、祭礼日が従来の旧暦4月8日だと北洋船の出航期と重なり、漁師たちが祭りに参加できなくなることから、昭和36年に祭礼日を新暦5月8日に変更した。

昭和57年(1982)、神輿を保管していた神庫内で火災が発生し、諏訪神社、安波大杉神社、出羽神社の神輿3基が焼失した。そのため奉賛会を組織して町民から寄付を募って神輿を新調し、翌58年から善友会(新町を中心に結成)、仲連会(仲町中心)、憩クラブ(本町中心。元野球チーム)の3団体が神輿を担ぐことになった。さらにもう1基神輿を購入し、女性が担ぐ女神輿が生まれた。また、善友会から清水会が分かれ、館下稲荷神社の神輿を担ぐようになった。これらの団体には地元有志だけでなく、市外県外からも神輿担ぎが好きな人びとが加わっている。

(8) 祭礼の状況

東日本大震災後に工事で堤防が造られたことにより、神輿が浜に下ることが難しくなり、海岸で

のお潮汲み神事と神輿の海中渡御（浜下り）は行われなくなった。諏訪神社宮司によると、神輿の担ぎ手不足が震災前から生じており、特に震災以降は担ぎ手が確保できず、諏訪神社以外の神輿はトラックに載せて渡御する形式となった。

令和2年(2020)は新型コロナウイルス感染症の影響で神輿を出さず最小限の人数で神事のみ行い、翌3年は境内に神輿を出して神事のみ行った。同4年は感染防止対策としてトラックにすべての神輿を載せて町内を渡御した。同5年から道の駅よつくら港にてお潮汲み神事を復活させ、同6年(2024)には担ぎ手を募集して諏訪神社の神輿担ぎが再開した。

(9) 芸能等

(10) 関連資料

「いわきの“まつりと行事、⑩～浜下りをする神輿～」(抜粋)

四倉の浜へ下りた九社というのは、四倉の諏訪神社、羽黒神社、大杉神社（あんばさまと呼ぶ）大野地区から、鹿島神社、十市神社。大浦地区から八幡神社、稲荷神社、諏訪神社（上仁井田）。平の原高野、大神宮と九社である。それに、子どもたちの天神宮が四ツか五ツ加わるのだから、そのにぎわいは大変であった。

もともとは名木の八幡、狐塚の稲荷、上仁井田の諏訪といった神社は、仁井田浦へ出たのが、一時観光協会などからの要請などもあって、四倉の浜まで出たのであったが、人手なども少なくなったりして、元のように仁井田浦になった。

原高野の大神宮も数年前から、浜でお潮を汲んでいだけで、神輿はムラ内を回るだけ。大野地区の二社も二、三年こちら渡御はムラ内だけとなった。それでも、四倉の街内から樽神輿が出るようになって、今年は樽神輿三組が出されたので、六つの神輿が浜に並んだ。

○

四倉町館山の諏訪神社を、土地では「アキサマ」と呼んでいる。

(中略)

このアキサマの神輿が浜へ下りると、行列には大櫛がかつがれて加わる。この櫛も浜へ飾られる。浜祈祷がおわると浜の人たちは、その大櫛の小枝を折って、海水に浸してそれを振りかける。これを三回、七回、九回と繰り返す。左手に一升ビンを持って、海水を櫛の小枝で大櫛にふりかける度に、酒をそそぎかける。

それをするのに、波打ちぎわと大櫛の間を、人々はかけあくる。大櫛は丸坊主になって、太い幹だけになってしまう。

このことを、「お潮をとる」といっている。

和田文夫「いわきの“まつりと行事、⑩～浜下りをする神輿～」『いわき民報（夕刊）』昭和52年6月6日付

参考文献・資料

渡邊市太郎「石城郡 磐城国石城郡四ツ倉町全景」『大日本名蹟図誌 第拾貳編 磐城岩代之部 第五巻』(1906)

佐々木長生「浜下り神事の分布と考察」(岩崎敏夫編『東北民俗資料集』(4) 萬葉堂書店 1975)

細井裕次郎「祭りの変遷とその意味 —福島県いわき市四倉町諏訪神社例大祭を巡って—」『長野県民俗の会会報 第20号』(1997)

山名隆弘監修『いわきのお宮とお祭り』『いわきのお宮とお祭り』刊行会 (2009)

緑川健「地域学講座『四倉学』平成29年度 第3回 四倉の合同例大祭 ～昭和30年代の神輿の浜下り～」いわき市立四倉公民館 (2018)

佐々木長生「御旅所への神幸 浜下りの神事—いわき地方を中心に—」『福島県立博物館紀要 第37号』(2023)

「四倉町総鎮守諏訪神社」ホームページ www.suwajinja.jp (令和7年4月閲覧)

【渡邊 彩】



写真1 諏訪神社出立。総代、宮司、猿田彦の後に太鼓、神輿が載った車が続く（四倉町西3丁目 R4.5.4）



写真2 仲町地区を神幸する（四倉町東4丁目 R4.5.4）



写真3 新町地区を神幸する（四倉町6丁目 R4.5.4）



写真4 神事（道の駅よつくら港 R4.5.4）



写真6 塩木八坂神社（四倉町塩木 R4.5.4）



写真5 神輿が通ると沿道の住民がオヒネリを神輿めがけて投げ入れる（四倉町東2丁目 R4.5.4）



写真7 東日本大震災前の神輿の海中渡御のようす。左から諏訪神社、出羽神社、安波大杉神社（四倉海岸 H13.5.4）



写真8 「タイリョータイリョー」と言いながらサカキにお神酒を振りかけて樽の中の潮水に浸したあと、神輿の前に置いた木桶まで行き、桶の上でサカキにお神酒を振りかけてサカキについた潮水を落とす（道の駅よつくら港 R7.5.4）

第IV章

基本調査



1. 新地町 子眉嶺神社		岩崎真幸
(1)神社の概要	<p>名 称／子眉嶺神社 所在地／相馬郡新地町駒ヶ嶺字大作44</p> <p>由 緒／子眉嶺神社は「奥之相善」「勝善さま」とも呼ばれ、馬の守護神として信仰されてきた。延喜式内社の一座ともいう。『郷土史（駒ヶ嶺村）』（明治45年〔1912〕）によれば、祭神は大人の夷子別之神で、妻に娶ったのも同じく大人の白媛神であった。この2神は馬を飼い、馬の病を治したという伝説がある。</p> <p>別な伝説では、敏達天皇の時、罪を犯した某姫が空船で流され都から今神浜に漂着した。浜に住む糠塚権大夫が妊娠していた姫を助け海岸に木屋を建てて住ませた。その後嶺を伝って子眉嶺神社近くに住まい、ここで駒に似た児を産んだ。糠塚権大夫と地元の菅野八大夫はその子を扶養し、子眉嶺社はその子を祀った社で、社前の今羽山には母の姫を祀る。奥宮は鹿狼山山頂。</p>	
(2)祭りの名称	オハマサガリ、午年御縁年大祭、御遷宮	
(3)祭りの由来	—	
(4)祭 日	例祭は旧暦3月7日、旧暦7月7日。オハマサガリは12年ごとの午年、社殿の修復、屋根替えのとき。	
(5)伝承団体	子眉嶺神社宮司、子眉嶺神社氏子。	
(6)神幸経路	オハマサガリは、神輿を担いで行列をつくって今神の浜にさがり、神社に還御した。	
(7)祭りの内容	<p>潮水の扱い／潮水の扱いは現在では不明。</p> <p>実施内容／午年や社殿の修復や屋根替えなどのときに、神輿の行列をつくり駒ヶ嶺、藤崎を通して今神の浜に下がった。休み所には川砂を敷き、その上に神輿を休ませた。村の人たちは神輿が通るときは羽織袴でお迎えした。かつて神が上がったという権現堂の近くの今神浜に祭場を設け、注連を張ったなかに神輿を安置して祭りを行う。佐々木長生氏による昭和47年（1972）頃の聞き書き調査によれば、かつては（具体的な年代は不明）浜で流鏝馬などもあったという。</p>	
(8)祭りの状況	<p>佐々木氏が聞き書きした昭和47年頃には、すでにオハマサガリはなく、神輿は集落内を回るようになっていた。例祭には飼育している馬の参詣があった。相善原では競馬も行われたという（大正時代末頃まで）。今神は新地町南端に位置し太平洋岸が今神浜であった。新沼浦（相馬市）に続き、今神には今神浦とも呼ばれた潟湖が広がっていた。新沼浦、今神浦は大正7年（1918）頃から干拓に着手して開発が進み、集落も移転した。昭和58年（1983）からは相馬共同火力発電所新地発電所敷地になり、今神浜の面影はない。</p>	
(9)芸能等	高田神楽が神輿に随行する。	
(10)関連資料	—	
参考文献・資料	<p>佐々木長生「浜下り神事の分布と考察」岩崎敏夫編『東北民俗資料集』（4） 萬葉堂書店（1975）</p> <p>新地町史編さん委員会編『新地町史』資料編（1982）</p> <p>新地町史編纂委員会『新地町史』自然・民俗編（1993）</p>	

2. 新地町 八重垣神社		岩崎真幸
(1)神社の概要	<p>名 称／八重垣神社 所在地／新地町埜木崎字木崎158</p> <p>由 緒／ご神体は海からあがったもので、お姿はキュウリだという。当社の氏子は、キュウリは作れなかった。</p>	
(2)祭りの名称	浜下り	
(3)祭りの由来	—	
(4)祭 日	旧暦4月15日から4月3日に変わった（昭和46年〔1971〕頃の聞き書き）	
(5)伝承団体	諏訪神社（福田／Ⅲ-1）宮司	
(6)神幸経路	—	
(7)祭りの内容	<p>潮 水／神輿を海に担ぎ入れる。</p> <p>実施内容／昭和46年頃は毎年行っていた。神輿が神社を出て木崎、作田、埜の集落を回る。この3集落には「移しの宮」が祀られているので神輿はそこで休む。埜浜に着くと神輿を担いで海に入</p>	

	って潮垢離をとった（昭和46年頃の聞き書き）。
(8)祭りの状況	平成23年（2011）の東日本大震災の津波で被災した集落のため、現在は不明。
(9)芸能等	—
(10)関連資料	—
参考文献・資料	岩崎敏夫編『東北民俗資料集』(4) 萬葉堂書店（1975）

3. 相馬市 鹿島神社		岩崎真幸
(1)神社の概要	<p>名 称／鹿島神社 通称：オカシマハン 所在地／相馬市石上字鹿島前71 由 緒／石上の藤橋館を本拠にした藤橋胤泰は古くからこの地の鹿島神を祀っていた。天正某年、病に罹った子息のためにこの神に祈ったところ治癒した。お礼のため配下の今野宗右衛門を常州鹿島に遣わした。今野は社に籠り2夜を徹して奇石を得た。この石を持ち帰り、鹿島祠として祀り直した。ご神体は白色高さ8寸余、直径2尺余の丸石で、子石を産むという。合祀する木花咲耶姫は良縁を授け、安産、育児の神、武籠槌神は海陸路安全、旅人行程安穩の神という。神仏分離以前、別当は羽黒派正明院であった。</p>	
(2)祭りの名称	遷宮祭、ゴセングウ（御遷宮）ともいう。	
(3)祭りの由来	—	
(4)祭 日	12年ごとの辰年に屋根替え（茅葺き屋根の時代）、社殿の補修境内の整備をして遷宮祭をする。平成24年（2012）壬辰の遷宮祭は11月11日であった。	
(5)伝承団体	鹿島神社宮司、鹿島神社氏子。	
(6)神幸経路	参道で行列を組み、神社を出発して石上の集落内を徒歩で回り、石上前田の旧農業協同組合大野支所の広場の祭場に至る。斎竹を立て神輿を安置し神事を行う。再び行列を組み石上集落内を回って還幸する。	
(7)祭りの内容	<p>潮水の扱い／御遷宮には前日の前夜祭に松川浦から潮水を汲み神前に供える。潮水は遷宮祭当日行列にお供することも、祭場で供えることもない。</p> <p>実施内容／遷宮祭には下記の配役で行列を組み、歩いて石上内を回り、農協広場に設けた祭場で御神体を開帳する。また、塚部神楽や地区の手踊なども奉納し、再び神社に戻り石上集落を一巡する。行列には「お枕持ち」と呼ばれる配役がある。和服を着て安産祈願のオマクラを抱える「お枕持ち」はその年結婚した女性が務める。また遷宮祭には、館主の子孫の藤橋家の末裔と茨城県鹿嶋市の鹿島神宮から献幣使を迎える。</p> <p>ご神体が大きな丸石のため、神輿は祭りのたびに作り直す。重くて担ぐのが大変なので軽トラックの荷台にご神体を納めた社殿を作りつける。行列の配役は次のとおり。</p> <p>先導天狗、先導禰宜、社名旗、遷宮祭旗、奉迎使、五色旗、法螺貝、角笛、楽太鼓、楽人、神宝剣、神鏡、新宮旗、唐櫃、御霊代、本宮宮司、本宮禰宜、將軍幟、征夷大將軍、鋒、日天月天幟、槍、櫛箱、お枕持ち、五色旗、稚児連、祭主、副祭主、巫女、金幣大榎、藤橋館館主、武者、五色旗、子ども神輿、四方固武者、奉納踊、奉賛員、世話人一般奉迎員（平成28年列帳）</p>	
(8)祭りの状況	子ども神輿も出すが少子化がすすみ担ぎ手が足りない。遷宮祭は多くの人手を必要とするので、少子高齢化がすすむと祭りそのものの存続が難しくなる。	
(9)芸能等	各地区から出す奉納芸能はその都度異なる。隣接する塚部の塚部神楽には奉納してもらう。	
(10)関連資料	—	
参考文献・資料	相馬市史編纂会編『奥相志』（『相馬市史』4 資料編1 1969） 相馬市『相馬市史』9 特別編Ⅱ民俗（2017）	

4. 相馬市 日吉神社		岩崎真幸
(1)神社の概要	<p>名 称／日吉神社 所在地／相馬市柏崎字表114 由 緒／元禄6癸酉年（1693）の創建。別当修験天王院。元禄10丁丑年（1697）2月27日、相馬昌</p>	

	嵐が柏崎村で鷹狩りをした。ところが鷹が行方不明になったため、当祠に祈願したところ鷹が舞い戻った。それ以来、昌胤の命で社地を日吉山と称し、宮に九曜紋を附すようになった(『奥相志』柏崎村)
(2)祭りの名称	遷宮祭、ご遷宮。
(3)祭りの由来	12年ごと申年に遷宮祭を行う。『奥相志』柏崎村に「申歳毎に磯部に神幸し、遷宮祭あり」とあり、磯部の浜に遷宮していたという記録があるが、詳細は不明。
(4)祭 日	例祭は3月13日、遷宮祭の祭日の決まりはないが、申年ごとの春に行われてきた。
(5)伝承団体	小泉の八坂神社宮司、柏崎の日吉神社氏子。遷宮祭は氏子総代、行政区長を中心に実行委員会を組織。
(6)神幸経路	『奥相志』に磯部に神幸したという記録はあるが、浜下りの事実は確認できない。伝承は聞かない。
(7)祭りの内容	潮水の扱い／祭りに潮水を汲んで供えることはしていない。 実施内容／平成28年(2016)丙申3月13日に遷宮祭を行った。遷宮祭に先立って平成23年(2011)の東日本大震災の地震で崩落した境内の崖の補修を実施している。前日3月12日が宵祭り。宵祭りでは柏崎神楽と神楽七芸の鳥刺しを奉納した。 3月13日の本祭は午前7時30分から神事、8時半厨子のご神体を神輿に移し行列を組む。鳥居前で宝財踊奉納ののち、午前9時神社の下の道を西台の祭場に向けて行列を進め西台祭場着。祭場には紅白の幕を巡らせ、斎竹を立てて神輿を安置する。神輿の前で神事を行い柏崎神楽、鳥刺舞、宝財踊を奉納。行列は西台を10時半に出て11時に作田の祭場に到着。祭場の設えは西台と同様で、神事、芸能の奉納がある。正午に作田祭場を発つ。柏崎の集落を抜けて午後0時半、神社に還御。神輿のご神体を本殿に納めて芸能の奉納ののち柏崎公会堂で直会を行った。 平成28年列帳記載の配役。猿田彦、進行係、御神酒、御神銭、名旗、御神灯、大麻、巫女、稚児、稚児世話人、御神楽、宝財踊、五色旗、救急救護、御神饌、燭台、白幣、金幣、御神刀、御棟札、神櫛、御神鏡、御神輿、斎主、玉串・玉串案、幣束、大榎、警固消防団
(8)祭りの状況	申年のたびに下遷宮をしてから社殿、境内の修復を行い、修復が済むと神輿の行列を整え集落内を巡る遷宮祭を実施してきた。東日本大震災では津波により被災した。しかし古くからの民家は台地上にあったため直接の被害は少なく、平成28年の遷宮祭は実施できた。しかし、少子高齢化がすすみ遷宮祭につきものの芸能の担い手が減少し、それまでのようなかたちで遷宮祭が実施できるかが課題になっている。
(9)芸能等	柏崎神楽、鳥刺舞、宝財踊。このうちの宝財踊は遷宮祭に向けて柏崎老人クラブで踊組を新たに組織したもの。また、鳥刺舞も遷宮祭に向けて復活させた。
(10)関連資料	列帳「平成28年日吉神社御遷宮祭行列御芳名」
参考文献・資料	相馬市史編纂会編『奥相志』(『相馬市史』4 資料編1 1969) 相馬市『相馬市史』9 特別編Ⅱ民俗(2017)

5. 相馬市 日吉神社

岩崎真幸

(1)神社の概要	名 称／日吉神社 通称：アカギノサンノウサマ 所在地／相馬市赤木字鬼越304 由 緒／『奥相志』赤木村には「山王権現祠」、棟札に「元禄七年九月二十七日、立谷邑山王の地よりこゝに移すと」とある。明治12年(1879)の『相馬郡神社明細帳(旧宇多郡)』には「小社日吉神社」「勧請正保年中月日不詳」。『管内神社誌』では創建を正保3年(1646)としている。北畠頭家卿の臣馬場某立谷村に住まい山王権現を氏神とした。のちに馬場某は中村に移るが、村人は靈験あらたかな山王を祀り続け、元禄7年9月に立谷村から赤木村鬼越の地に社を遷したと記している。
(2)祭りの名称	遷宮祭。12年ごと、申年に行う大祭である。
(3)祭りの由来	神輿が巡る祭り(遷宮祭)についての由来はない。
(4)祭 日	遷宮祭は申年の春に行う。
(5)伝承団体	司祭者／涼ヶ岡八幡神社宮司が兼務。 祭祀集団／下赤木集落と氏子で遷宮祭実行委員会を組織して準備、実施する。

(6)神幸経路	かつて山王権現を祀っていた立谷村山王の旧社地に神輿を出し、立谷、赤木、日下石（につけし）の集落を回って神社に還幸する。途中山王社跡、上赤木に祭場を設けて神事芸能の奉納がある。
(7)祭りの内容	潮 水／浜下りの伝承、潮水を汲む伝承は聞かない、 実施内容／下赤木行政区で遷宮祭実行委員会を組織して、平成28年（2016）丙申4月10日に遷宮祭を行った。前年の11月28日に下遷宮。4月10日下赤木集会所から神輿を出し、山王社跡会場に向かう。行列は立谷を経て日立木駅近くの上赤木祭場を通り還御。各祭場では芸能を奉納する。
(8)祭りの状況	『奥相志』に「申年八月中の申日大祭を行ふ。磯部浜に神幸し、立谷、日下石、赤木三邑の者神輿に従ふ」という記載があり、かつて申年ごとに磯部浜に浜下りしていたことが推測できる。
(9)芸能等	平成28年の遷宮祭には立谷神楽、日下石神楽、中屋敷神楽、赤木赤愁会の宝財踊、手踊。
(10)関連資料	棟札は安永5年（1776）、天明8年（1788）、寛政12年（1800）、文化9年（1812）、文政7年（1824）、天保7年（1836）、嘉永元年（1848）、万延元年（1860）、明治5年（1872）・17年（1884）・29年（1896）・41年（1908）、大正9年（1920）、昭和7年（1932）・19年（1944）・31年（1956）・43年（1968）・55年（1980）、平成4年（1992）・16年（2004）・28年（2016）のものが確認できる。屋根替や社殿の修復があり、神幸を伴うが浜下りの有無は不明。
参考文献・資料	『相馬郡神社明細帳（旧宇多郡）』福島県庁文書 明治12年（1879） 相馬市史編纂会編『奥相志』（『相馬市史』4 資料編1 1969） 福島県神社庁相馬支部『管内神社誌』（2006） ほか

6. 相馬市 大雷神社		岩崎真幸
(1)神社の概要	名 称／大雷神社 通称：坪田のライジンサマ 所在地／相馬市坪田字宮東3-2 由 緒／天長3年（826）6月17日坪田村の7か所に落雷し、その1か所に青色の奇石があった。村人がこれを怪しんでいたところ通りかかった徳一大師が、これ則ち雷石なり神として祀れば幸福を得べしと言った。そこで祠を建てて里社とした。（『奥相志』）	
(2)祭りの名称	—	
(3)祭りの由来	早魃には藩からの命で宇多郷の者は当社に参詣し、3日から7日間参籠すれば必ず霊験があったという。大早魃には松川鶴ノ尾岬に神輿を渡御し領主神官僧侶、老幼の男子が供奉すれば降雨をみたという。明治3年からこの神事は廃された（『管内神社誌』）。	
(4)祭 日	—	
(5)伝承団体	涼ヶ岡八幡神社宮司	
(6)神幸経路	—	
(7)祭りの内容	『奥相志』『坪田邑』に「宇多郷の総鎮守たり。古来年に早すれば則ち神輿を松川の海浜にうつして、雨を海神に乞ふに、忽然として膏雨を注ぐ。下民歡喜の袖を濡し、神輿を本祠に帰す」とある。近世の記録であり、近代以降この行事が行われたのかどうかは不明。	
(8)祭りの状況	—	
(9)芸能等	毎年6月に豊作祈願の春祭り、9月に豊作感謝の秋祭りがあり、春秋の祭りには宇多郷内各集落の神楽の奉納がある。福島県指定重要無形民俗文化財「宇多郷の神楽」である。	
(10)関連資料	—	
参考文献・資料	相馬市史編纂会編『奥相志』（『相馬市史』4 資料編1 1969） 福島県神社庁相馬支部『管内神社誌』（2006） 相馬市『相馬市史』9 特別編Ⅱ民俗（2017）	

7. 飯館村 綿津見神社		多田仁彦
(1)神社の概要	名 称／綿津見寺神社 所在地／相馬郡飯館村草野字宮内156 由 緒／大同2年（807）に若野神社として創建された。その後、元和6年（1620）熊川氏が草野	

	館に居館の折、熊川家の氏神である八龍神を合わせ祀り、社号を「八龍大明神」とした。明治3年(1870)神仏分離令により「綿津見神社」に改称した。平成18年(2006)に鎮座1200年祭を斎行した。祭神は大綿津見大神、五十猛神、鎌倉権五郎景政、玉依姫神、蘭於迦美神。
(2)祭りの名称	浜おり
(3)祭りの由来	—
(4)祭 日	毎年旧暦4月19日。現在は新暦4月29日。
(5)伝承団体	綿津見寺神社宮司、草野・宮内・小宮・伊丹沢・深谷地区氏子。
(6)神幸経路	神社→現在の南相馬市原町区大原→真野
(7)祭りの内容	—
(8)祭りの状況	現在は例祭と3年に一度の例大祭(神輿渡御)を行っている。明治・大正・昭和を通じ、お浜下りは行われていない。戦後まもなく、南相馬市大原の手踊りが当綿津見神社の例祭で披露されたとの話が伝わっている。
(9)芸能等	—
(10)関連資料	—
参考文献・資料	飯館村史編纂委員会『飯館村史』第3巻「民俗」(1976)

8. 飯館村 山津見神社		多田仁彦
(1)神社の概要	<p>名 称／山津見神社</p> <p>所在地／相馬郡飯館村佐須字虎捕266</p> <p>由 緒／源頼義が東征の際、山の神の神示により山中に潜む凶賊、橘墨虎を捕らえた。捕らえた山の山頂にお礼として社殿を設け、虎捕山山津見神社と称した。山仕事・漁業関係の人びとの信仰が篤い。また白狼を眷属としており、社殿の天井に描かれているニホンオオカミの図像は全国的に珍しい。</p>	
(2)祭りの名称	お浜下り	
(3)祭りの由来	—	
(4)祭 日	現在は、毎年旧暦10月15・16・17日。	
(5)伝承団体	山津見神社 (II-3) 宮司、佐須地区氏子。	
(6)神幸経路	—	
(7)祭りの内容	—	
(8)祭りの状況	毎年山御講が旧暦10月15・16・17日に行われる。明治・大正・昭和を通じ、お浜下りは行われていない。	
(9)芸能等	—	
(10)関連資料	—	
参考文献・資料	飯館村史編纂委員会『飯館村史』第3巻「民俗」(1976)	

9. 南相馬市 伊勢大御神		二本松文雄
(1)神社の概要	<p>名 称／伊勢大御神 通称：カミノダイジングウ</p> <p>所在地／南相馬市鹿島区南 柚木宮前119</p> <p>由 緒／応永13年(1406)岩松義政が鎌倉から行方郡千倉 荘に下向した際、篤く信仰していた伊勢の内宮の分霊を南屋形に勧請し、神職として伊勢四日市から四日市日光太夫を招いた。のち、天正11年(1583)、相馬利胤が南柚木に社殿を新築し、現在地に遷宮した。また、この地方に十二神楽、太神楽、大蛇神楽を伝えたといわれている。</p>	
(2)祭りの名称	—	
(3)祭りの由来	—	

(4)祭日	毎年11月3日（もとは旧暦9月16日）
(5)伝承団体	伊勢大御神宮司、南柚木地区の人びと。
(6)神幸経路	—
(7)祭りの内容	潮水の扱い／供えない 実施内容／宮司へのアンケート調査によると、神輿と担ぎ棒が残っているので、時期は不明だが、以前はお浜下りしていたと思われる。潮垢離したかは不明。
(8)祭りの状況	中断
(9)芸能等	「南柚木の太蛇神楽」は中村藩領内では最も古いとされている。南柚木の太夫頭 <small>たゆうがしら</small> であった森家を中心とする七太夫によって継承されてきた。
(10)関連資料	四日市文書（南相馬市指定有形文化財）
参考文献・資料	福島県鹿島町『鹿島町史』第6巻 民俗編（2004） 福島県神社庁相馬支部『管内神社誌』（2006） 南相馬市『原町市史』第9巻 特別編II「民俗」（2006）ほか

10. 南相馬市 牛頭天王		二本松文雄
(1)神社の概要	名称／牛頭天王 <small>ごもてんのう</small> 所在地／南相馬市鹿島区北海老字天森17 由 緒／円明寺跡。江戸時代の別当は円明寺泰観、神主は可内守重正。文政6年（1823）、円明寺は宝蔵寺に合院。本尊は牛頭天王。	
(2)祭りの名称	御濱降、御浜降、御浜下	
(3)祭りの由来	疫病退散を祈願した。	
(4)祭日	毎年7月15日。江戸時代には、寛政8年（1796）は旧暦6月15日、享和2年（1802）は旧暦8月8日、文政8年（1828）は旧暦11月7日、弘化4年（1847）は旧暦6月7日、文久元年（1861）は旧暦6月23日に祭りが行われている。	
(5)伝承団体	宝蔵寺。北海老地区の人びと。	
(6)神幸経路	—	
(7)祭りの内容	潮水の扱い／汲まない 実施内容／現在は浜下り・潮垢離はしていないが、7月に夜籠りを行い、次の日に祭典を行った。江戸時代の列帳には、鉾、神、散米、供物、奉幣、神幣、神馬、幡、武者、供馬、別当、神主、肝入、村長、組頭の順に行列が記されている（『鹿島町史』第6巻）。	
(8)祭りの状況	廃絶	
(9)芸能等	太蛇神楽。南海老の農民門右衛門が、自らの手で獅子頭を彫り奉納した。疫病が流行した時、この獅子頭を出してお祓いすると収まったという（『鹿島町史』第6巻）。	
(10)関連資料	「牛頭天王御濱降行道記」寛政8年、「牛頭天王御濱降蛇帳 <small>おろちまじょう</small> 」寛政8年、「牛頭天王御浜降行烈帳」享和2年（1802）、「牛頭天王御濱降行烈帳」文政8年、「牛頭天王御浜下行烈帳」弘化4年、「門右衛門神楽」と呼ばれる古い神楽の頭の一部などが南海老の大澤家に保管されていたが（『鹿島町史』第6巻）、平成23年（2011）の東日本大震災の津波で流出した。	
参考文献・資料	相馬市史編纂会『奥相志』（『相馬市史』4 資料編1 1969） 福島県鹿島町『鹿島町史』第6巻 民俗編（2004）	

11. 南相馬市 塩釜明神		二本松文雄
(1)神社の概要	名称／塩釜明神 <small>しおがま</small> 旧所在地／南相馬市鹿島区北海老字姥 <small>うば</small> 懐 <small>うぼ</small> （現存しない） 由 緒／往古から八沢は製塩地で、浦周辺には各村で製塩の神として塩釜明神が祀られていた。もとの別当は喜宝山照山院。江戸時代に宝蔵寺の合院となり、以後は別当宝蔵寺。明治末に祠堂は朽廃し、宝蔵寺に塩釜明神の棟札のみが現存する。本尊は塩釜明神。	

(2)祭りの名称	御遷宮
(3)祭りの由来	江戸時代には塩は中村藩の特産品であったことから、製塩生産の神として祭祀され、北海老の人びとに信仰された。別当は宝蔵寺。
(4)祭 日	旧暦6月17日・7月10日(『奥相志』)。文久元年(1861)酉年の列帳では旧8月19日、文久3年(1863)亥年の列帳では旧暦2月4日とある。
(5)伝承団体	—
(6)神幸経路	—
(7)祭りの内容	潮水の扱い／ — 実施内容／江戸時代に北海老村で生産された塩が中村藩から買上されたことを祝い、製塩業の繁栄を祈願した。塩方役人、目付、湊奉行、肝入らが列し、宝剣、幡、大榎、神歌、大蛇等の役が行列し、大蛇神楽が奉納された。潮垢離したかは不明。
(8)祭りの状況	廃絶。明治時代末に祠堂は朽廃して、祭りは廃止。
(9)芸能等	大蛇神楽
(10)関連資料	「塩釜大明神御遷宮神楽行烈帳」文久元年、「為八沢湊成就御神楽御下帳」文久3年などが南海老の大澤家に保管されていたが(『鹿島町史』第6巻)、平成23年(2011)の東日本大震災の津波で流出。
参考文献・資料	相馬市史編纂会『奥相志』(『相馬市史』4 資料編1 1969) 南相馬市『鹿島町の神社と仏閣』(2009)

12. 南相馬市 金砂神社 二本松文雄

(1)神社の概要	名 称／金砂神社 所在地／南相馬市鹿島区南海老字南町31-1 由 緒／鎮座・来歴不詳。祭神は沙土煮神で陰神。これに対し北海老の鶏足神社の祭神は泥土煮神で、陽神とされる。
(2)祭りの名称	—
(3)祭りの由来	—
(4)祭 日	江戸時代は旧暦9月9日。浜下りしたのは遷宮時。現在は毎年5月5日(浜下りはしない)。
(5)伝承団体	伊勢大御神宮司(シモノダイジングウ)、南海老地区・北海老地区の人びと。
(6)神幸経路	経路は不明だが、神幸地は北右田の浜(通称、高屋釜の浜)。
(7)祭りの内容	潮水の扱い／ — 実施内容／浜に渡御していたが、潮垢離したかは不明。江戸時代は湯花を捧げたが、現在は伝わっていない。
(8)祭りの状況	現在は浜に下りて潮垢離はしないで、南海老・北海老行政区の役員と宮司で神事を行う。
(9)芸能等	—
(10)関連資料	—
参考文献・資料	福島県鹿島町『鹿島町史』第6巻 民俗編(2004) 南相馬市『鹿島町の神社と仏閣』(2009)

13. 南相馬市 薬師堂 二本松文雄

(1)神社の概要	名 称／薬師堂 所在地／南相馬市鹿島区北右田字薬師堂21 由 緒／元禄年間(1688~1704)に中村藩5代藩主相馬昌胤が3間四方の堂を再建し、頂部に九曜文をつけたといわれる。江戸時代には堀江山医光寺が別当をしていたが、北海老の宝蔵寺に合寺された。本尊は薬師三尊。
(2)祭りの名称	オハマサガリ

(3)祭りの由来	—
(4)祭 日	12年ごとの戌年旧暦4月8日、堂宇の修復・屋根替時。
(5)伝承団体	宝蔵寺住職、北右田地区・南右田地区の人びと。
(6)神幸経路	経路は不明だが、神幸地は南海老字釜前の浜（高屋釜の浜）
(7)祭りの内容	潮水の扱い／区長が潮垢離を行う。波を3つ越え、白木の桶に潮水を汲んで奉納する。 実施内容／祭りの1週間前から精進（オベッカ：お別火）する。 小島田の神楽が来ないと行事を行うことができないといわれる。
(8)祭りの状況	廃絶
(9)芸能等	小島田の神楽・田楽を奉納
(10)関連資料	—
参考文献・資料	福島県立博物館『福島県立博物館調査報告第28集 福島県における浜下りの研究』（1997） 福島県鹿島町『鹿島町史』第6巻 民俗編（2004） 南相馬市『鹿島町の神社と仏閣』（2009）

14. 南相馬市 愛宕権現 二本松文雄

(1)神社の概要	名 称／愛宕権現 所在地／鹿島区大内字滝沢か（社は現存しない） 由 緒／『奥相志』によれば、江戸時代に滝沢寺（現在は廃寺）の境内に祠を建て、漂着したご神体を鮭川の鎮守愛宕権現としてあがめて祀ったという。祭神は愛宕権現。
(2)祭りの名称	例祭
(3)祭りの由来	漂着神伝承／『奥相志』によれば、文治某年（文治年間〔1185～90〕）9月24日、漁師が港口に網をかけて鮭を捕っていたところ、ご神体が網にかかって出現したという漂着神伝承を持つ。
(4)祭 日	旧暦6月24日（『奥相志』）
(5)伝承団体	大内・鳥崎地区の人びと。
(6)神幸経路	経路は不明だが、神幸地は鳥崎浜
(7)祭りの内容	潮水の扱い／ — 実施内容／鳥崎浜に神幸し、大内・鳥崎両村から1戸につき1人を出して神幸に参加した。潮垢離したかは不明。
(8)祭りの状況	廃絶
(9)芸能等	旧暦9月27日に神酒をささげ、音楽や舞いを奉納した。
(10)関連資料	—
参考文献・資料	相馬市史編纂会『奥相志』（『相馬市史』4 資料編1 1969） 福島県鹿島町『鹿島町史』第6巻 民俗編（2004） 南相馬市『鹿島町の神社と仏閣』（2009）

15. 南相馬市 浮洲神社 二本松文雄

(1)神社の概要	名 称／浮洲神社 別称：浮津明神、浮洲明神、鮭の豊漁を祈り鮭川明神とも呼ばれている（『福島県における浜下りの研究』では浮津神社とあるが、現代の名称は浮洲神社）。 所在地／南相馬市鹿島区大内字明神前150 由 緒／慶長年間（1596～1615）に建立されたといわれる。大内・鳥崎両村の鎮守であった。江戸時代の別当は修験光福院。
(2)祭りの名称	—
(3)祭りの由来	—
(4)祭 日	江戸時代は旧暦9月9・19・29日。現在は12年ごとの子年。4月9日・旧暦9月9日

(5)伝承団体	鹿島御子神社宮司、大内地区の人びと。
(6)神幸経路	経路の詳細は不明。『奥相志』に神幸地の記載はないが、『福島県における浜下りの研究』に神幸地は「烏浜」と記載されている。
(7)祭りの内容	潮水の扱い／ — 実施内容／江戸時代は祭日に神酒を捧げ、音楽や舞いを奉納した。潮垢離したかは不明。
(8)祭りの状況	廃絶
(9)芸能等	音楽・舞
(10)関連資料	—
参考文献・資料	相馬市史編纂会『奥相志』（『相馬市史』4 資料編1 1969） 福島県立博物館『福島県における浜下りの研究』（1997） 南相馬市『鹿島町の神社と仏閣』（2009）

16. 南相馬市 若宮八幡神社		二本松文雄
(1)神社の概要	名 称／若宮八幡神社 所在地／南相馬市鹿島区 塩 崎字葉木沼176 由 緒／南北朝時代、江垂の日吉神社創建の頃に若宮弓矢八幡として勧請されたといわれる。弓矢八幡は武人の守護神。	
(2)祭りの名称	御遷宮祭、お浜下り	
(3)祭りの由来	もともとのご神体は 霊 山の北畠頭家ゆかりの流れをくんでいるとも、それ以前の八幡信仰ともいわれている。	
(4)祭 日	12年ごとの午年の旧暦3月15日。現在は4月15日か9月15日の前の日曜日。平成26年（2014）は9月7日。1日のみで裏祭り（2日目）はなし。	
(5)伝承団体	日吉神社（II-4）宮司、塩崎地区の人びと。	
(6)神幸経路	若宮八幡神社→第一建場→塩崎公会堂→第二建場→ 醜 迫→第三建場→房田→若宮八幡神社	
(7)祭りの内容	潮水の扱い／汲む 実施内容／祭り当日の朝、役員が烏崎浜へ行き、烏崎の区長が潮垢離を行い、波を3枚越えた所で新しい桶で潮水を汲む。浜に設けた祭壇に神輿を安置し潮水を供える。潮水を一升瓶に入れて神社に運び供える。神輿を中心に行列を組み、塩崎行政区内を練り歩く。途中の各建場で神輿を休ませ、芸能を奉納する。弓を射るのは的場のある神社境内のみで、建場では弓を空打ちする。	
(8)祭りの状況	継続。若宮八幡神社を含め、若木神社、大鳥神社、醜迫神社、影町水神社、宮内神社、聖徳堂、十二天社、西ノ入山神社、端山神社、妙見神社の計11社をまとめてこの日に祭礼を行う。前回は平成26年9月7日。	
(9)芸能等	日置流 印西派弓術礼射。江戸時代には24家の歩兵がいて、浮田・小山田の歩兵と合わせて弓手1組を作るなど、弓の技術が高い者が多かった。塩崎の獅子舞。昔（具体的な年代は不明）は 奴 振り、 猩々手踊（子供手踊。猩々山車とは別）、田植踊りも奉納した。	
(10)関連資料	—	
参考文献・資料	相馬市史編纂会『奥相志』（『相馬市史』4 資料編1 1969） 南相馬市『鹿島町の神社と仏閣』（2009）	

17. 南相馬市 報徳二宮神社		二本松文雄
(1)神社の概要	名 称／報徳二宮神社 所在地／南相馬市鹿島区 寺内字横峯229 由 緒／横峯集落は昭和21年（1946）に開拓富農対策に基づいて入植した人びとの集落である。地元の鎮守として、同26年（1951）に神奈川県小田原市鎮座の二宮神社の御分霊を勧請した。祭りは二宮尊徳。	
(2)祭りの名称	遷宮祭	

(3)祭りの由来	江戸時代に中村藩では報徳仕法を導入し農村復興に成功したことから、現在の相馬・双葉地方では二宮尊徳を農業の神として崇めている。開拓地の五穀豊穡・勸農開拓を祈願して祭りを行っている。
(4)祭 日	12年ごとの辰年4月
(5)伝承団体	男山八幡神社 (Ⅲ-11) 官司、上寺内行政区の人びと。
(6)神幸経路	報徳二宮神社→上寺内行政区→報徳二宮神社
(7)祭りの内容	潮水の扱い／汲む 実施内容／神幸して、潮垢離を行う。
(8)祭りの状況	令和6年(2024)には実施
(9)芸能等	柝窪の神楽
(10)関連資料	—
参考文献・資料	南相馬市『鹿島町の神社と仏閣』(2009)

18. 南相馬市 降居神社		二本松文雄
(1)神社の概要	名 称／降居神社 所在地／南相馬市鹿島区岡和田字細内39 (『福島県における浜下りの研究』の山下は誤記) 由 緒／口碑によれば、大昔、神が龍にまたがって浮田の下原に降りたという。その地を羽龍という。ここに下りたことから降居大明神とあがめ、祠を建てて祀ったという。なお、旧社地から現在地へ遷宮している。	
(2)祭りの名称	御遷宮祭 (下らないのでお下がりとはいわない)	
(3)祭りの由来	—	
(4)祭 日	12年ごとの申年。本来は旧暦4月8日。前回は平成28年(2016)4月10日。	
(5)伝承団体	男山八幡神社 (Ⅲ-11) 官司、浮田・車川・岡和田・牛河内・小山田地区の人びと。	
(6)神幸経路	旧社地(神が降りて居た所)でお祓い→降居神社(神輿に神体をのせる)→浮田・岡和田・牛河内・小山田・車川(行政区に1つずつ建場がある)→降居神社	
(7)祭りの内容	潮水の扱い／烏崎区長が汲む 実施内容／明治時代中頃までは浜に下りて潮垢離神事を行った。明治時代中頃以降は各大字の建場で休んで神幸するかたちに変更し、昭和41年(1966)4月8日の御遷宮でもそのかたちで行った。氏子総代長・会計等計3人と官司が烏崎海岸に行く。朝5時か6時頃、烏崎区長が潮垢離を行い、新しい桶で潮水を汲む。潮水を持って神社に戻り、サカキの枝に潮水を付けて神輿にかける。	
(8)祭りの状況	継続	
(9)芸能等	浮田の子供手踊。平成16年(2004)に実施したが、その後団体は解散。	
(10)関連資料	—	
参考文献・資料	福島県立博物館『福島県における浜下りの研究』(1997) 福島県鹿島町『鹿島町史』第6巻 民俗編(2004) 南相馬市『鹿島町の神社と仏閣』(2009)	

19. 南相馬市 山津見神社		二本松文雄
(1)神社の概要	名 称／山津見神社 所在地／南相馬市鹿島区榎原字山岸94 由 緒／元和年間(1615~24)、現スズ木山、山頂の八幡平に建立したといわれる。藩主から社領一石五斗一合二勺を受けていた。安永6年(1778)、野火により社殿および所蔵の古文書等が焼失。嘉永4年(1851)、別当徳性院。明治26年(1893)に社殿が大破したため再建。大正6年(1917)3月、村社格となる。林産業守護 村内安泰などが祈願されている。	
(2)祭りの名称	遷宮祭	
(3)祭りの由来	—	

(4)祭 日	12年ごとの酉年。平成17年（2005）は4月17日。
(5)伝承団体	男山八幡神社（Ⅲ-11）宮司、檀原地区の人びと。
(6)神幸経路	山津見神社→檀原地区内→山津見神社
(7)祭りの内容	潮水の扱い／ — 実施内容／潮垢離したかは不明
(8)祭りの状況	継続
(9)芸能等	檀原の万作踊り・綾踊り。平成17年が最後。
(10)関連資料	嘉永4年（1851）の棟札に「別当徳性院」とある
参考文献・資料	南相馬市『鹿島町の神社と仏閣』（2009）

20. 南相馬市 山王権現 二本松文雄

(1)神社の概要	名 称／山王権現 所在地／鹿島区山下字 狸内（社は現存しない） 由 緒／『奥相志』によれば、正長元年（1428）、京都坂下（祇園の現在の八坂神社か）からこの地に勧請したといわれる。祭神は山王権現。江戸時代は、別当修験妙宝院。
(2)祭りの名称	祭礼
(3)祭りの由来	—
(4)祭 日	12年ごとの申年。
(5)伝承団体	山下地区・浮田地区・角河原地区の人びと。
(6)神幸経路	経路の詳細は不明だが、神幸先は鳥崎浜。
(7)祭りの内容	潮水の扱い／ — 実施内容／江戸時代には申年ごとに祭礼があり、鳥崎浜に神幸した。山下、浮田、角河原村の者が従った。潮垢離したかは不明。
(8)祭りの状況	廃絶
(9)芸能等	—
(10)関連資料	—
参考文献・資料	相馬市史編纂会『奥相志』（『相馬市史』4 資料編1 1969） 福島県立博物館『福島県における浜下りの研究』（1997） 福島県鹿島町『鹿島町史』第6巻 民俗編（2004）

21. 南相馬市 御山神社 二本松文雄

(1)神社の概要	名 称／御山神社。江戸時代は葉山大権現。近代は葉山神社。江戸時代以降、一山や地域を「御山」と称している。『鹿島町史』民俗編、『福島県における浜下りの研究』等には葉山神社と記載されているが、現在の名称は御山神社。 所在地／南相馬市鹿島区御山字御山沢19 由 緒／天長3年（826）、千倉庄真野の里（現在の南相馬市鹿島区）の盲人元都が羽国村山郡寒川井庄の葉山祠（現在の山形県寒河江市・村山市・大蔵村の境にある葉山）から行方郡真野（現在の南相馬市鹿島区）の真野川上流、三本松の峰に勧請（分霊）したといわれる。あるいは、初め山下村安倉竹の塚山に鎮座したが、永正元年（1504）に栃窪村北嶽三本松の峰に遷したともいわれている。修験と結びついたハヤマ信仰の山で、作神、祖霊神として信仰されてきた。永正元年（1504）から別当本山派修験の玉東院。江戸時代には中村藩主相馬家から代々崇敬を受け、堂宇の修復や神田の寄進を受けている。神仏混交の山として広く信仰を集めてきたが、明治時代の神仏分離政策の一環として明治5年（1872）に「修験宗廃止令」が出され、神幸形態を修験道から神道に変えることとなった。により多くの仏堂が消滅した。近代の社掌（旧制度での神職の職名）は渡部氏。
(2)祭りの名称	浜下り。安政3年（1856）は、御濱下り。

(3)祭りの由来	代々、中村藩主相馬家の庇護を受けていた。3代藩主勝胤（のちの忠胤）の代に葉山権現の「浜下り」を執行。その際、行列に使用する兵具は藩から貸与されており、以来「浜下り」の都度借用するのが恒例となっていた。19世紀後半には上真野・真野・鹿島・八沢地区の人びとが参拝した。
(4)祭 日	60年周期（江戸時代の記録では一定していない。社殿修復の折に臨時で行われたか）。『福島県における浜下りの研究』では4月8日とあるが、旧暦10月8日。ハヤマは4月8日に山から下りて子孫の農耕を見守り、10月8日に山へ帰るといわれている。
(5)伝承団体	鹿島御子神社（Ⅲ-12）宮司、御山・栃窪地区の人びと。
(6)神幸経路	明治21年（1888）の祭礼では、葉山神社→真野村→鹿島村→八沢村→上真野村→葉山神社と巡り、各村に数か所の建場があった。 昭和40～50年（1965～75）頃は、御山神社→御山→栃窪→栃窪の公園（御旅所）→御山神社
(7)祭りの内容	潮水の扱い／ — 実施内容／江戸時代から明治21年までは、祭礼にかかわる人びとや神幸経路は現在の鹿島区で最大規模であったと考えられる。江戸時代の浜下り遷宮には、藩主相馬家から行列の持ち物として兵具を出すのが定例で、長槍12本（笠・看板衣付）・弓12張（塗弦矢厘）、火縄銃12挺（銃丸厘火薬火縄付）、幕1束を伴った。
(8)祭りの状況	中断。最後に行ったのは昭和40～50年（1965～75）頃。60年周期なので、その後は行っていない。
(9)芸能等	明治21年、各村の建場を巡る際、地元の諸芸を奉納した。上真野村では、手踊（岡和田）・手踊（小山田）・獅子（小池）・手踊（上栃窪）。八沢村では、大蛇神楽（南 柚木）・神楽（南柚木）・大蛇（南海老）・神楽（北屋形）。真野村・鹿島村は不詳。 昭和40～50年頃は、栃窪の神楽、栃窪の手踊。栃窪の神楽は地区内で門付けした。
(10)関連資料	「御神楽列帳」天保2年（1831）・安政3年（1856）・明治21年（1888）
参考文献・資料	相馬市史編纂会編『奥相志』（『相馬市史』4 資料編1 1969） 福島県立博物館『福島県における浜下りの研究』（1997） 佐藤高俊編 相馬市博物館資料叢書『旧相馬中村藩家老家文書』11（2010）ほか

22. 南相馬市 三島神社

二本松文雄

(1)神社の概要	名 称／三島神社 所在地／南相馬市原町区本町1-1 由 緒／社伝によれば、嵯峨天皇の代、嘉祥年間（9世紀中頃。この時代の天皇は仁明天皇、文徳天皇）に坂上田村麻呂が都から遷して建立したというのが、伊豆の三島明神を勧請したものか（『奥相志』）。宮司によれば、菅田分命がこの里を治め、産土正宮を建てた所を三嶋沖と称し、のちに坂上田村麻呂がこの地で戦をした際、この地の産土の御祖大神に勝利を祈願して社を建てたという（『管内神社誌』）。
(2)祭りの名称	—
(3)祭りの由来	—
(4)祭 日	毎年4月14日
(5)伝承団体	三島神社宮司、原町区ほかの人びと。
(6)神幸経路	—
(7)祭りの内容	潮水の扱い／神前に供える。 実施内容／渡御しない。
(8)祭りの状況	—
(9)芸能等	—
(10)関連資料	明治3年（1870）12月14日の棟札に「毎年四月十四日濱下利」と記載されている。
参考文献・資料	相馬市史編纂会編『奥相志』（『相馬市史』4 資料編1 1969） 福島県神社庁相馬支部『管内神社誌』（2006）

23. 南相馬市 雷神社		二本松文雄
(1)神社の概要	<p>名 称／雷神社 所在地／南相馬市原町区信田沢字戸ノ内の山上 由 緒／『奥相志』によれば、大昔、大原村にあった宮が、洪水で流れ来た。村人がこれを取り上げてこの地に遷したという。祭神は 雷神。江戸時代は、別当真言宗松等院、</p>	
(2)祭りの名称	例祭	
(3)祭りの由来	漂着伝説／洪水で宮が大原から現在地に漂着したという。	
(4)祭 日	旧暦4月17日（『奥相志』）	
(5)伝承団体	信田沢の人びと。	
(6)神幸経路	経路は不明だが、『奥相志』によれば神幸地は萱浜。	
(7)祭りの内容	—	
(8)祭りの状況	—	
(9)芸能等	—	
(10)関連資料	—	
参考文献・資料	<p>相馬市史編纂会『奥相志』（『相馬市史』4 資料編1 1969） 福島県立博物館『福島県立博物館調査報告第28集 福島県における浜下りの研究』（1997） 南相馬市『原町市史』第9巻 特別編Ⅱ 民俗（2006）</p>	

24. 南相馬市 出羽神社		二本松文雄
(1)神社の概要	<p>名 称／出羽神社 所在地／南相馬市原町区泉 字宮前336 由 緒／『奥相志』によれば「例祭八月十五日。祠官佐藤和泉正。伝へ云ふ、天長七庚戌年創建の旧社なりと。泉、北泉、渋佐三邑の鎮守」とある。</p>	
(2)祭りの名称	—	
(3)祭りの由来	—	
(4)祭 日	4月15日（『福島県における浜下りの研究』）	
(5)伝承団体	日吉神社（Ⅱ-4）宮司、泉地区の人びと	
(6)神幸経路	神幸経路は不明だが、『福島県における浜下りの研究』には神幸地は北泉浜とある。	
(7)祭りの内容	—	
(8)祭りの状況	現在は下らない	
(9)芸能等	泉の神楽	
(10)関連資料	—	
参考文献・資料	<p>相馬市史編纂会『奥相志』（『相馬市史』4 資料編1 1969） 福島県立博物館『福島県立博物館調査報告第28集 福島県における浜下りの研究』（1997）</p>	

25. 南相馬市 虚空蔵堂		二本松文雄
(1)寺院の概要	<p>名 称／虚空蔵堂。古くは、久利虚空蔵（『奥相志』） 所在地／南相馬市原町区小沢字下戸屋廻 由 緒／本尊の虚空蔵菩薩は、漂着神（仏）伝承を持つ。「虚空蔵菩薩縁起」によれば、弘仁年間（810～824）海上から怪風が起り、虚空蔵尊像が波をひるがえして光明を發し、波打ち際に寄った。漁夫がこれを拝して安置し、村人も拝するようになったという。本尊は虚空蔵菩薩（長さ8寸〔約24センチメートル〕）。伝承では空海作と伝えられる。脇侍は不動明王（長さ5寸〔約15センチメートル〕）と毘沙門天（長さ5寸〔約15センチメートル〕）。寛政10年（1798）銘の直径1尺（約30センチメートル）の鰐口があり、源之丞、卯左衛門、長九郎の寄進者名があった。厨子は、天明年間（1781～89）に中村藩主相馬怨胤が参拝ののちに寄付したもので、黒塗で鍍金さ</p>	

	れた金物と金紋が付いている。江戸時代は別当戸屋山正法寺（『奥相志』）。 小沢では、ウナギは虚空蔵尊の使いとか化身という言い伝えがあり、ウナギを食べないという禁忌があった。堂内にはウナギを描いた絵馬やウナギの木像などが奉納されていたが、現在は廃堂となっている。
(2)祭りの名称	お浜下り
(3)祭りの由来	—
(4)祭 日	江戸時代は毎年旧暦3月13日・旧暦9月13日。市も開かれた。現代は、例祭が毎年3月13日・9月13日。お浜下りは日を定めず、屋根替えなどお堂の工事竣工の折に行った。
(5)伝承団体	上太田の岩屋寺、小沢の人びと。
(6)神幸経路	虚空蔵堂→小沢集落→小沢浜→虚空蔵堂
(7)祭りの内容	潮水の扱い／5人の代表が新桶で潮水を汲む。住職がサカキに付けた潮水を輿に振りかける。 実施内容／虚空蔵菩薩を輿に移し、岩屋寺住職、小沢集落の人びとが行列を組み、集落を一巡し、小沢浜の祭場に向かう。浜では輿を海に向かって安置し、潮水を供える。法要・神楽の奉納などを執行了のち、竣工なった虚空蔵堂に還御する。
(8)祭りの状況	平成23年（2011）に発生した東日本大震災後、中止。震災の津波で集落は壊滅的な被害を受け災害危険区域に指定されたうえ、福島第一原子力発電所事故の避難指示を受け、住民の多くが地区外へ移転することとなった。地元で虚空蔵堂を守る住民がほとんどいなくなり、やむなく虚空蔵堂を廃し、津波被害を免れた本尊は岩屋寺に合祀された。
(9)芸能等	小沢の神楽
(10)関連資料	—
参考文献・資料	相馬市史編纂会編『奥相志』（『相馬市史』4 資料編1 1969） 南相馬市『原町市史』第9巻 特別編Ⅱ「民俗」（2006）

26. 南相馬市 綿津見神社 二本松文雄

(1)神社の概要	名 称／綿津見神社。江戸時代は八龍神祠。 所在地／原町区江井字南 廻197 由 緒／伝えでは、永長元年（1096～97年）建立。もと、館内の地に鎮座し江井氏の護神であった。江井氏が他村に移ったあとに祠が壊れ、村人が神社を現在地に遷した。江戸時代の祭神は八龍権現で、別当修験井玉山明善院、江戸時代末は別当大乘院。
(2)祭りの名称	—
(3)祭りの由来	—
(4)祭 日	旧暦4月8日（『奥相志』）
(5)伝承組織	相馬小高神社宮司、江井地区の人びと。
(6)神幸経路	『福島県における浜下りの研究』では、『奥相志』に記載として「神幸地 小浜」とあるが、『奥相志』に神幸地の記載はない。
(7)祭りの内容	—
(8)祭りの状況	—
(9)芸能等	—
(10)関連資料	—
参考文献・資料	相馬市史編纂会『奥相志』（『相馬市史』4 資料編1 1969） 福島県立博物館『福島県立博物館調査報告第28集 福島県における浜下りの研究』（1997） 佐々木長生「四月八日と浜下り —相馬地方の八龍神の浜下りを中心に—」『日本風俗史学会東北・北海道支部 研究紀要』第4号（2022）

27. 南相馬市 相馬小高神社奥の院		二本松文雄
(1)神社の概要	<p>名称／相馬小高神社奥の院（太祖神社）</p> <p>所在地／南相馬市小高区小高字古城13</p> <p>由 緒／明治時代以降東京目白の相馬邸にあった相馬本家の太祖神社。相馬家ではお妙見様と称していた。江戸時代には藩主相馬家の守護神妙見として江戸藩邸に祀られていたと考えられる。昭和26年（1951）、目白の相馬邸から小高神社境内に遷された。</p>	
(2)祭りの名称	お浜下り	
(3)祭りの由来	『管内神社誌』には、「昭和26年（1951）、旧相馬子爵家の守り本尊である太祖神社（妙見）を小高神社境内にご神体と共に奉遷して奥の院となし、同28年（1953）に奥の院の正遷宮式を盛大に挙行し、村上浜にお浜下りした」とある。	
(4)祭 日	昭和28年4月22日（奥の院の正遷宮式）	
(5)伝承団体	相馬小高神社、小高区ほかの人びと。	
(6)神幸経路	神幸経路は不明だが、神幸地は村上浜。	
(7)祭りの内容	潮水の扱い／ — 実施内容／昭和28年4月22日、奥の院の正遷宮式を盛大に挙行し、村上浜に浜下りした。	
(8)祭りの状況	お浜下りは廃絶。野馬追には扉を開けて祭祀している	
(9)芸能等	—	
(10)関連資料	—	
参考文献・資料	福島県神社庁相馬支部『管内神社誌』（2006）	

28. 南相馬市 八坂神社		二本松文雄
(1)神社の概要	<p>名称／八坂神社</p> <p>所在地／南相馬市小高区水谷字武州86</p> <p>由 緒／海東小太郎成衡の五男、行方五郎隆行が鎮守として牛頭天王の社殿を建立したが、文保年間（1317～19）に家が途絶えた。のちに相馬氏の一族岡田胤家が水谷村を支流に分与してこの地に住み、鎮守とした。</p>	
(2)祭りの名称	御浜渡御、遷座祭	
(3)祭りの由来	「大正元年10月大正天皇即位を記念して改築起工式を行い、大正3年10月に竣工。	
(4)祭 日	旧暦6月15日・8月15日。 社殿改築竣工時（大正3年10月15日）に御浜渡御、遷座祭が執行された（『小高町史』）。	
(5)伝承団体	蛸沢稲荷神社（Ⅲ-21）宮司、水谷地区の人びと。	
(6)神幸経路	経路は不明だが、御浜渡御した。	
(7)祭りの内容	—	
(8)祭りの状況	社殿改築竣工時のみで、その後は行っていない。	
(9)芸能等	—	
(10)関連資料	—	
参考文献・資料	相馬市史編纂会『奥相志』（『相馬市史』4 資料編1 1969 小高町『小高町史』（1975）	

29. 南相馬市 日鷲神社		二本松文雄
(1)神社の概要	<p>名称／日鷲神社</p> <p>所在地／南相馬市小高区女場字明地159</p> <p>由 緒／平安時代末から鎌倉時代／平将門が鷲宮を尊信し武運を祈ったとも、相馬師常が奥州合戦で鷲宮に祈誓して勲功をあげたともいわれる。元亨年間（14世紀中頃）に相馬重胤の奥州下</p>	

	向に伴い、 ^{みょうけん} 妙見・ ^{しおがま} 塩釜の神と共に ^{しもうきのくに} 鷲宮を下総国から ^{なめかた} 奥州行方郡に遷した。
(2)祭りの名称	お浜くだり、お浜おり。
(3)祭りの由来	昭和・平成時代には、社殿造営、屋根替え、石段大修理などの落成時に祭りを執行した。
(4)祭 日	不定期で社殿造営などの落成日。
(5)伝承団体	日鷲神社宮司、女場・ ^{つのべうち} 角部内地区の人びと。
(6)神幸経路	日鷲神社→女場地区と村上地区の境（神社の東約400メートル）→日鷲神社。
(7)祭りの内容	潮水の扱い／昭和初期までは神輿を担いで海に入ったが、その後は氏子総代が角部内の浜で潮水を汲んできて奉納するようになった。角部内の浜で潮垢離するのは、氏子のいる行政区で浜に近い ため。 実施内容／現代は浜まで行かず、女場地区と村上地区の境まで渡御した。
(8)祭りの状況	昭和27年（1952）の社殿造営、同60年（1985）の石段大修理、平成元年（1989）の本殿屋根替えの際に実施。
(9)芸能等	特になし。以前は神楽があったが、破損してなくなった。
(10)関連資料	—
参考文献・資料	相馬市史編纂会編『奥相志』（『相馬市史』4 資料編1 1969）

30. 南相馬市 星神社 二本松文雄

(1)神社の概要	名 称／星神社 所在地／南相馬市小高区行津宮下58 由 緒／大同3年（808年）創建といわれている。 ^{しお ぼたかのり} 標葉隆範が領する標葉郡に属し、領内の鎮守として社殿を寄贈され崇敬されていた。しかし、 ^{めいおつ} 明応年間（1492～1501）、標葉氏が相馬氏に滅ぼされた。寛政7年（1795）、 ^{みみがい} 耳谷・ ^{かみうら} 行津・ ^{しもうら} 上浦・ ^{うらじり} 下浦・浦尻の五か村の鎮守となった。
(2)祭りの名称	お浜下り
(3)祭りの由来	昭和48年（1973）、社殿の修理落成を祝って。
(4)祭 日	社殿の修理落成時等
(5)伝承団体	星神社宮司、行津地区の人びと。
(6)神幸経路	星神社→浦尻浜→星神社
(7)祭りの内容	潮水の扱い／潮垢離をし、潮水を汲んでいた。 実施内容／浦尻浜に渡御し、浜で神事を行った。
(8)祭りの状況	お浜下り神事は昭和48年（1973）の社殿屋根修理竣工時に執行した。その後は行っていない。
(9)芸能等	神楽などさまざまな芸能を奉納した。
(10)関連資料	—
参考文献・資料	相馬市史編纂会編『奥相志』（『相馬市史』4 資料編1 1969） 福島県神社庁相馬支部『管内神社誌』（2006）

31. 双葉町 諏訪神社 大里正樹

(1)神社の概要	名 称／ ^{すゐ} 諏訪神社 所在地／双葉郡双葉町大字両竹字花ノ木240 由 緒／ —
(2)祭りの名称	ハマサガリ
(3)祭りの由来	—
(4)祭 日	—
(5)伝承団体	—

(6)神幸経路	—
(7)祭りの内容	—
(8)祭りの状況	諏訪神社の浜下り行事に関しては『福島県における浜下りの研究』21ページ下段に祭りの名称のみ記載されるが、今回の調査においては、当該社祭礼での「浜下り」は確認されなかった。 当該社は東京電力福島第一原子力発電所から約5キロメートルに位置し、平成23年（2011）の東日本大震災による被害状況として、『東日本大震災 神社・祭り一被災の記録と復興一写真編』によれば「本殿・幣殿・拝殿とも全壊、拝殿は平成23年11月以降余震により倒壊、立入禁止地域のため修復・倒壊防止できず。本殿・幣殿は震災後に倒壊」とある（153ページ）。震災後、長く避難指示が出されていたが、両竹地区全域の避難指示は平成29年（2017）3月31日付で解除され、その後、社殿も再建されている。
(9)芸能等	—
(10)関連資料	—
参考文献・資料	福島県立博物館『福島県立博物館学術調査報告書第28集 福島県における浜下りの研究』（1997） 神社新報社『東日本大震災 神社・祭り一被災の記録と復興一写真編』（2016）

32. 双葉町 稲荷神社 大里正樹

(1)神社の概要	名称／稲荷神社 所在地／双葉郡双葉町大字中田字大佛廻34 由緒／—
(2)祭りの名称	ハマサガリあるいはオサガリ
(3)祭りの由来	—
(4)祭日	2月初午
(5)伝承団体	稲荷神社宮司
(6)神幸経路	神幸先は「中浜」との記載がある。
(7)祭りの内容	潮水の扱い／供えない（アンケート調査より） 実施内容／現在、神輿の渡御は行わない（アンケート調査より）。下記の文献には祭事は「20年ごと」「20年に1回くらい」の頻度で行い、「社殿の屋根がえ、修築」を伴うとの記載がある。
(8)祭りの状況	稲荷神社の浜下り行事に関しては『東北民俗資料集』4の70ページおよび『福島県における浜下りの研究』（1997）21・57・77ページに上記した項目について記載されるが、今回の調査においては、当該社祭礼での「浜下り」は確認されなかった。 当該社は東京電力福島第一原子力発電所から約4.5キロメートルに位置し、令和7年（2025）4月現在も帰還困難区域内に位置する。平成23年（2011）の東日本大震災による被害状況として、『東日本大震災 神社・祭り一被災の記録と復興一写真編』によれば「本殿・幣殿・拝殿・手水舎・境内社・狛犬・石灯笼1基半壊」「神社の被害状況は半壊状態で、屋根はたわみ、瓦はズレて、雨漏りが数ヶ所あり畳が盛り上り腐食しています。また、鳥居、狛狐、灯笼、手水等も倒れ、社殿前の所が地盤沈下し、亀裂が入り倒壊のおそれもある状況」とある（151ページ）。
(9)芸能等	—
(10)関連資料	—
参考文献・資料	岩崎敏夫編『東北民俗資料集』（4）萬葉堂書店（1975） 福島県立博物館『福島県立博物館学術調査報告書第28集 福島県における浜下りの研究』（1997） 神社新報社『東日本大震災 神社・祭り一被災の記録と復興一写真編』（2016）

33. 富岡町 麓山神社 大里正樹

(1)神社の概要	名称／麓山神社 所在地／双葉郡富岡町大字上手岡字麓山2 由緒／—
(2)祭りの名称	—

(3)祭りの由来	—
(4)祭 日	9月15日
(5)伝承団体	—
(6)神幸経路	神幸先は「小良ヶ浜」との記載があるほか、昭和47年（1972）時点で「現在、途中まで下る」との記載がある。最後の神輿巡幸があった昭和60年（1985）も海浜へは下りなかったという。住民の記憶によれば、昭和60年当時の神幸経路は、麓山神社を出立し杉内の交差点を右折、上千里の街道沿いの集落を通過。夜ノ森入口バス停付近で休憩（休場①）し夜ノ森方面へ向かった。JR常磐線を第二躑躅橋から越えて左折し北上、その後、夜ノ森郵便局交差点を左折し、躑躅橋で常磐線を再び越え西進、高津戸にて左折し地藏院前を通過、上手岡集会場（児童館・農村広場）付近で休憩（休場②）、その後は神社まで往路と同じ経路で上千里の街道沿いの集落を通過、日南郷の上手岡バス停付近で休憩し（休場③）、神社へ戻ったという（IV章トビラ図参照）。
(7)祭りの内容	—
(8)祭りの状況	麓山神社の浜下り行事に関しては『東北民俗資料集』に、上記した項目について記載されている。また『福島県における浜下りの研究』にも同様に記載されるが、今回の調査においては、当該社祭礼での「浜下り」は確認されなかった。当該社では別に、福島県重要無形民俗文化財指定の「麓山の火祭り」行事が伝承されている。 当該社は東京電力福島第一原子力発電所から約9キロメートルに位置し、平成23年（2011）の東日本大震災による被害状況として、拝殿が一部破損したほか、『東日本大震災 神社・祭り一被災の記録と復興一写真編』によれば「境内擁壁全壊、手水舎全壊、鳥居1基全壊、鳥居1基半壊、社務所半壊」とある。震災後、長く避難指示が出されていたが、上手岡地区の避難指示は平成29年（2017）4月1日付で解除された。あわせて社務所の再建等、境内の整備も進み、翌30年（2018）に震災後初の「麓山の火祭り」が開催された。
(9)芸能等	—
(10)関連資料	—
参考文献・資料	岩崎敏夫編『東北民俗資料集』（4） 萬葉堂書店（1975） 福島県立博物館『福島県立博物館学術調査報告書第28集 福島県における浜下りの研究』（1997） 神社新報社『東日本大震災 神社・祭り一被災の記録と復興一写真編』（2016）

34. 富岡町 王塚神社

大里正樹

(1)神社の概要	名 称／ ^{おおつか} 王塚神社 所在地／双葉郡富岡町大字本岡字王塚834-1 由 緒／ —
(2)祭りの名称	オサガリ
(3)祭りの由来	—
(4)祭 日	旧暦2月8日
(5)伝承団体	—
(6)神幸経路	神幸先は「富岡の公園へ」との記載がある。
(7)祭りの内容	—
(8)祭りの状況	王塚神社の浜下り行事に関しては『福島県における浜下りの研究』の22ページに上記した項目について記載されるが、今回の調査においては、当該社祭礼での「浜下り」は確認されなかった。 当該社は東京電力福島第一原子力発電所から約9キロメートルに位置し、平成23年（2011）の東日本大震災後、長く避難指示が出されていたが、王塚地区の避難指示は平成29年（2017）4月1日付で解除された。夫震災による被害状況として、境内の「王塚神社再建記念碑」（2020年）によれば「原子力発電所の事故により王塚神社は震災により被害を受けた本殿の補修が難しくなり震災後八年に再建」したとある。
(9)芸能等	—
(10)関連資料	—

35. いわき市 見渡神社		渡邊 彩
(1)神社の概要	<p>名 称／見渡神社 通称：ミョウケンサマ もとは根渡神社と称していたが、明治6年（1873）に見渡神社と改称した。 所在地／いわき市久之浜町末続字岸内123 由 緒／詳細は不明。祭神は国常立命</p>	
(2)祭りの名称	神幸祭	
(3)祭りの由来	—	
(4)祭 日	毎年4月8日前の土日（土曜日が宵宮祭、日曜日が例大祭）	
(5)伝承団体	諏訪神社（久之浜／IV-35）宮司、末続地区（上・中・下区）。	
(6)神幸経路	宵宮祭で上地区のオカリヤ（見渡神社 久之浜町末続字北大沢地内）へ神輿を移す。 例大祭当日はオカリヤを出立し、中地区のお旅所（末続集会所 久之浜町末続字鍋田49）を経て下地区へ至り、海岸近くのお旅所へ向かう。神輿の海中渡御とお旅所での神事後、見渡神社にて神事を行い、神輿を神社に戻して解散する。	
(7)祭りの内容	<p>潮水の扱い／潮水を汲んで供えることは行っていない。 実施内容／神輿は下区にある見渡神社（岸内地内）に保管されており、宵宮祭の日に上地区にあるオカリヤに移す。翌日の例大祭ではオカリヤ前で神事を行ったあと、白装束の担ぎ手たちが神輿を担ぎ、上・中・下地区内を通過して海を目指す。神輿は大人神輿と子ども神輿がある。担ぎ手が少ないため、人家がない場所は軽トラックに神輿を載せて神幸する。 また、2段になった大きな傘状のタケの骨組みに紙で作った花を張り付け、宿主の家紋や「交通安全」「五穀豊穡」「奉納見渡神社」「御祭典」などと書かれた行灯を取り付けた「ハナフキ」（「しん花」とも呼ぶ）を各区で1本ずつ作って渡御する。もとは上中下の各地区に宿があり、そこでハナフキを作ったが、震災後は末続集会所にて合同で作っている。祭り終了後、開いた花とつばみを1セットずつ各戸へ配る。</p>	
(8)祭りの状況	東日本大震災が発生した平成23年（2011）は中止し、翌24年に海岸での神事は中止のままで祭り自体は再開した。平成26年（2014）に海中渡御を行う完全なかたちでの祭りが再開されたが、その後、海岸に防潮堤が設置されたため、神輿を担いで砂浜に下りることはできなくなり、現在は海岸近くのお旅所で神事を行っている。	
(9)芸能等	獅子神楽	
(10)関連資料	平成18・19年の祭礼時の諏訪神社所蔵写真	
参考文献・資料	福島県標葉郡久之浜町大久村学校組合久之浜小学校『福島県標葉郡久之浜郷土史』昭和12年（1937）高井潤「集落の暮らしを撮る—原発から30km圏にて—」『5 Designing Media Ecology 03』（2015）鈴木俊『時の流れの中で… —いわき市大久と久之浜の歴史—』（2018）ほか	
参考文献・資料	福島県立博物館『福島県立博物館学術調査報告書第28集 福島県における浜下りの研究』（1997）	

36. いわき市 鬼越神社		丹野香須美
(1)神社の概要	<p>名 称／鬼越神社 通称：チンジュサマ 所在地／いわき市錦町鬼越下63 由 緒／鬼越城主安倍貞任が文殊菩薩を祀ったことが始まりとされる。鬼越山神徳寺を別当とし、元禄4年（1691）に多聞天を合祀した。明治に入り神徳寺は廃され、以後「鬼越明神」として尊崇を集めた。祭神は日本武命。</p>	
(2)祭りの名称	例祭	
(3)祭りの由来	—	
(4)祭 日	毎年4月8日。昭和時代までは、7年ごとに大祭があった。	
(5)伝承団体	熊野神社（御宝殿／III-31）宮司、江栗区	
(6)神幸経路	—	
(7)祭りの内容	潮水の扱い／須賀海岸で潮水を汲み、神前に供える。	

	実施内容／7年ごとの大祭では、神輿は安良の浜へと渡御し、「オシオゴリ」が行われた。昭和時代までは、タケに造花をつけた花笠をかざしながら、行列を作った。
(8)祭りの状況	現在は、神事のみ行う。
(9)芸能等	—
(10)関連資料	—
参考文献・資料	山名隆弘監修『いわきのお宮と祭り』『いわきのお宮と祭り』刊行会（2009）

37. いわき市 東照宮神社 丹野香須美

(1)神社の概要	名 称／東照宮神社 所在地／いわき市錦町鬼越下64 由 緒／祭神は源 家康
(2)祭りの名称	例祭
(3)祭りの由来	—
(4)祭 日	毎年4月8日（もとは旧暦4月17日に行っていた）
(5)伝承団体	熊野神社（御宝殿／Ⅲ-31） 宮司、江栗区
(6)神幸経路	—
(7)祭りの内容	潮水の扱い／潮水を神前に供える。 実施内容／ —
(8)祭りの状況	現在は、神事のみ行う。なお八坂神社を合祀しており、7月31日の祭日には、子どもたちが木版刷りのお札を作って頒布していた。往時は、神輿や女の子の花神輿なども出てにぎわった。
(9)芸能等	—
(10)関連資料	—
参考文献・資料	山名隆弘監修『いわきのお宮と祭り』『いわきのお宮と祭り』刊行会（2009）

38. いわき市 星之宮神社 丹野香須美

(1)神社の概要	名 称／星之宮神社 所在地／いわき市錦町中ノ町60-ロ 由 緒／真言宗青木山宝徳院末の新蔵院の持仏（虚空蔵菩薩坐像）を神仏分離後、星之宮神社として祀った。祭神は大極天帝天之御中主神。
(2)祭りの名称	ミノカサマツリ
(3)祭りの由来	—
(4)祭 日	毎年10月13日
(5)伝承団体	熊野神社（御宝殿／Ⅲ-31） 宮司、祭長子区
(6)神幸経路	—
(7)祭りの内容	潮水の扱い／区長が須賀海岸で潮水を汲んで神前に供える。 実施内容／潮垢離は行わない。
(8)祭りの状況	現在は、神事のみ行う。
(9)芸能等	—
(10)関連資料	—
参考文献・資料	山名隆弘監修『いわきのお宮と祭り』『いわきのお宮と祭り』刊行会（2009）

39. いわき市 稲荷神社		丹野香須美
(1)神社の概要	<p>名称／稲荷神社</p> <p>所在地／いわき市錦町細谷99</p> <p>由 緒／もと江栗馬場の通称「十日の森」にあったが、明治末期に現在の場所に移ったと伝えられる。祭神は稲倉魂命、猿田彦命、大宮比売命。</p>	
(2)祭りの名称	例祭	
(3)祭りの由来	—	
(4)祭 日	毎年旧暦10月9日の祭りだったが、10月の下旬になった。	
(5)伝承団体	熊野神社（御宝殿／Ⅲ-31）宮司、江栗区	
(6)神幸経路	—	
(7)祭りの内容	<p>潮水の扱い／潮水を神前に供える。</p> <p>実施内容／潮垢離は行わない。かつては、子どもたちが拝殿に泊りこんで、木版刷りの神札を作り、祭りの際に配った。こうしたことは、昭和32年（1957）を最後に行われていない。</p>	
(8)祭りの状況	現在は、神事のみ行う。	
(9)芸能等	—	
(10)関連資料	—	
参考文献・資料	山名隆弘監修『いわきのお宮と祭り』『いわきのお宮と祭り』刊行会（2009）	

40. いわき市 八坂神社		丹野香須美
(1)神社の概要	<p>名称／八坂神社</p> <p>所在地／いわき市錦町宮ノ前59・60</p> <p>由 緒／大同元年（806）、坂上田村麻呂によって勧請されたと伝えられる。祭神は素戔嗚尊。</p>	
(2)祭りの名称	例祭（神輿渡御祭）	
(3)祭りの由来	—	
(4)祭 日	毎年7月30・31日。熊野神社（御宝殿／Ⅲ-31）の宮司が兼務しているため、熊野神社の例祭と重ならないよう、1日ずらしていた。	
(5)伝承団体	熊野神社（御宝殿）宮司、中田区	
(6)神幸経路	お旅所の数が多い。渡御ルートがいくつかあり、年によって変化する。須賀海岸へ渡御するルートの時だけ、浜へ下りる（毎年ではない）。	
(7)祭りの内容	<p>潮水の扱い／潮水を神前に供える。</p> <p>実施内容／潮垢離は行わない。中田地区内の7か所に旗がたてられる。サカムカエの場所は、大規模工場の社宅などの協力を得て、15か所設置される。工場の社員らも参加するので、盛大なお祭りとなっている。子どもの樽神輿もある。</p>	
(8)祭りの状況	新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の流行により中断したが、継続。	
(9)芸能等	—	
(10)関連資料	「八坂神社蔵古文書」（近世）がある。ただし、祭礼関係については未確認。	
参考文献・資料	山名隆弘監修『いわきのお宮と祭り』『いわきのお宮と祭り』刊行会（2009）	

41. いわき市 諏訪神社		丹野香須美
(1)神社の概要	<p>名称／諏訪神社 通称：スワサマ</p> <p>所在地／いわき市山田町岸ノ内112</p> <p>由 緒／天長6年（829）4月8日、信濃国諏訪神社より勧請したという説もあるが、詳細はよくわからない。祭神は建御名方命。</p>	
(2)祭りの名称	例祭（7年ごとの祭礼は「出社大祭」）	

(3)祭りの由来	—
(4)祭 日	毎年4月8日
(5)伝承団体	熊野神社（御宝殿／Ⅲ-31） 宮司、神社周辺
(6)神幸経路	—
(7)祭りの内容	潮水の扱い／区長が潮水を汲んで、神前に供える。 実施内容／岩間浜で潮垢離を行っていた。昭和30年（1955）頃までは、春（4月8日）と秋（11月25日）の年2回の実施だった。7年に1度の出社大祭には、「山田奴（山田下担当）」「長持（山田上担当）」の芸能がついた。岩間海岸への神輿渡御は、これらの行列とあわせ、その人数は100人を越す規模だったという。岩間には「宿」があり、一行を盛大に迎え歓待した。そうした行列も平成に入って簡略化された。
(8)祭りの状況	現在は、神事のみ行う。
(9)芸能等	長持
(10)関連資料	「祭ニツキテノ慣習」（抜粋） 神社祭禮餘興ノ状況 イ、北野神社（上山田） 諏訪神社（下山田） 四月八日 右二社ノ祭禮ニハ七年毎ニ聞エ高キ山田奴ノ行列アリ 本村ニ於ケル代表的ノモノニシテ隣村植田町岩間海岸マデ神ノ渡御ノ供ヲナス コノ行列ヲ見物セントシテ途中ノ人出夥シ 祭典ノ翌日ハ笠ヌキト称シテ神前ニ集ヒ奴ヲ奉納シ終ツテ大字區長宅ニテナス慣例ナリ 七年毎ノコトナレバ村民モ相当期待シ万難ヲ排シテモ奉納セントスル意気アリ 是ニ要スル費用トシテ一戸貳拾円近クノ金ト数日ノ日時トヲ要スルモ神ニ対スル唯一ノ奉仕ト考ヘ居レリ 奴ハ徳川時代ノ大名行列ヲ型取シモノニシテ行列ノ順序トシテハ早馬 御輿 供御ニ引續キテ (1) 長刀 (十二三才以下ノ子供ガ揃ヘノ支度ヲシテ長刀ヲカツグ) (2) オハコ (箱ヲカツイタル二人組ガ離レズニ歩ク) (3) シヤゴマ (4) ナガエ (5) トリ毛 (6) 長持 トイフ順ニ並ビテドツコイナノナー ト拍子ヲ揃ヘトリ毛ヲ動カシ動作ヲナシ又時々威勢ヲワケルタメ空砲ヲ發射ス 菊田小学校編『郷土誌 菊田小学校』昭和3年（1933）
参考文献・資料	山名隆弘監修『いわきのお宮と祭り』『いわきのお宮と祭り』刊行会（2009）

42. いわき市 月山神社 丹野香須美

(1)神社の概要	名 称／月山神社 通称：ガッサンサマ 所在地／いわき市山田町社岡117 由 緒／この地域の「出羽三山」の講中によって勧請されたものと伝えられる。小高い場所に鎮座する「ガッサンサマ」は、かつては女人禁制で、拝殿までしか登れなかったという。祭神は月読命。
(2)祭りの名称	例祭（7年ごとの祭礼は「出社大祭」という）
(3)祭りの由来	—
(4)祭 日	毎年4月8日
(5)伝承団体	熊野神社（御宝殿／Ⅲ-31） 宮司、山田上・山田下
(6)神幸経路	—
(7)祭りの内容	潮水の扱い／潮水を神前に供える。 実施内容／潮垢離は行わない。山田の上と下とで、交代で役割を担った。「山田奴（山田下担当）」「長持（山田上担当）」の芸能がつき、祭りを盛り上げていた。平成時代の中頃には絶えた。
(8)祭りの状況	現在は、神事のみ行う。
(9)芸能等	長持
(10)関連資料	—
参考文献・資料	山名隆弘監修『いわきのお宮と祭り』『いわきのお宮と祭り』刊行会（2009）

43. いわき市 武塔天神神社		丹野香須美
(1)神社の概要	<p>名称／武塔天神神社 通称：テンジンサマ 所在地／いわき市山田町戸ノ内215 由 緒／天長年間<small>てんちやう</small>の勧請<small>かんとせう</small>といわれる。祭神は素戔嗚尊<small>すさのおのみこと</small>。</p>	
(2)祭りの名称	出祭 <small>でまつり</small> 、戦前は出社祭 <small>でしかまつり</small> といった。	
(3)祭りの由来	—	
(4)祭 日	毎年4月8日	
(5)伝承団体	熊野神社（御宝殿／Ⅲ-31）宮司、旧山田村（小山田・戸ノ内）	
(6)神幸経路	—	
(7)祭りの内容	<p>潮水の扱い／岩間浜で潮水を汲み、神前に供える。 実施内容／潮垢離は行わない。4月8日の例祭は、山田町滝川大林山にある権現山の大神社と併せて執行している。権現山は初西の遊山の山で、旧11月初西の日には村人が飲食を楽しんだという。この行事は戦後には廃れた。天狗、笛太鼓、武者行列、長持行列などが随行し盛大に行われていた。祭りは、戦後の早い時期に絶えた。</p>	
(8)祭りの状況	現在は、神事のみ行う。	
(9)芸能等	長持など	
(10)関連資料	—	
参考文献・資料	山名隆弘監修『いわきのお宮と祭り』『いわきのお宮と祭り』刊行会（2009）	

44. いわき市 鹿島神社		丹野香須美
(1)神社の概要	<p>名称／鹿島神社 所在地／いわき市山田町林崎230 由 緒／大同元年（806）の勧請と伝えられる。祭神は武甕槌命<small>たけみかづちのみこと</small>。</p>	
(2)祭りの名称	例祭	
(3)祭りの由来	—	
(4)祭 日	毎年4月8日	
(5)伝承団体	熊野神社（御宝殿／Ⅲ-31）宮司、林崎・大津	
(6)神幸経路	鮫川へ下る途中に、サカムカエの場所がいくつか設けられていたという。	
(7)祭りの内容	<p>潮水の扱い／潮水を神前に供える。 実施内容／鮫川で潮垢離を行っていた（川のどのあたりなのか、またいつ頃までなのかは不明）。昭和33年（1958）以降、神輿渡御は行われていない。かつては、子どもたちの「山車」、青年会の「長持」などの芸能があった。</p>	
(8)祭りの状況	現在は、神事のみ行う。	
(9)芸能等	長持	
(10)関連資料	—	
参考文献・資料	山名隆弘監修『いわきのお宮と祭り』『いわきのお宮と祭り』刊行会（2009）	

45. いわき市 北野神社		齋藤りぼん
(1)神社の概要	<p>名称／北野神社 所在地／いわき市山田町堀ノ内131 由 緒／享徳2年（1453）、秋山越中守隆重が堀の関岡館からこの地に遷宮したと伝えられる。祭神は菅原道真<small>すがはらのみちざね</small>。</p>	
(2)祭りの名称	北野神社大祭	

(3)祭りの由来	—
(4)祭 日	毎年4月第1日曜日（旧暦4月8日）。例祭は毎年行われるが、大祭は7年に1回行われる。
(5)伝承団体	國魂神社（遠野町滝）宮司、北野神社の氏子総代20人程度（2年に1回交代）。
(6)神幸経路	かつて（具体的な年代は不明）は岩間海岸まで神輿の渡御をしていたが、令和5年（2023）現在は海岸に渡御していない。現在は北野神社を出発し、地区の砂子公民館、仮宿を経由して北野神社に到着する。仮宿の場所は、近年旧オカベ製材の反対側の道路に面する空地になることが多い。
(7)祭りの内容	潮水の扱い／大祭以外の年も含め、毎年供える。毎年潮汲みをお願いしている家があり、その家の人に岩間海岸（汲むようす、場所は非公開）で一升瓶に潮水を汲んでもらい、神前に供える。実施内容／近年は、一部の経路を除いて車輦神輿で渡御をしている。仮宿では熊野神社（御宝殿／III-31）の一行と合流する。仮宿は、御宝殿の熊野神社の氏子総代と相談して場所決めをしている。
(8)祭りの状況	令和5年は大祭の年に当たらなかったため、潮水のお供え（神事）のみ実施した。神事後には、氏子総代が地区内（上山田地区）の氏子100軒ほどに札を配布したほか、宮司が諏訪神社（下山田地区／IV-41）、船引大明神社で神事を行った。最後に大祭を実施したのは平成26年（2014）である。前回の大祭は、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の影響で実施しなかった。次回の大祭は令和8年（2026）に実施予定であるが、人員、時間の関係で実施できるかは未定である。
(9)芸能等	山田奴／昭和59年（1984）まで、神輿と一緒に渡御していた。奴行列は、先騎（天狗）、先軀、顧問、榊持、小旗、大旗、錦旗、神輿係、笛、太鼓の順になる。山田奴は、文化11年（1814）4月8日に北野神社と諏訪神社に奉納されたのが始まりとされている。『郷土誌 菊田小学校』によると、山田奴は、徳川家の大名行列をかたどった芸能とされる。また、『常磐毎日新聞』大正13年（1924）3月21日付には、「有名な山田奴が神輿に供奉して岩間海岸に進む筈で沿道植田町等も頗る賑ひを見るべく同村にては目下祭典準備に忙殺されつゝある」という記載があり、その賑やかさを読み取ることができる。山田奴は、昭和33年（1958）にいったん途絶えたが、同59年（1984）に復活し、令和5年現在、下山田地区の山田奴保存会によって継承されている。なお、山田奴の行列が描かれた絵馬（明治15年〔1882〕8月作成）が、北野神社に奉納されている。
(10)関連資料	「山田奴行列絵馬」明治15年（1882）
参考文献・資料	「山田村の奴行列 諏訪神社祭禮」『常磐毎日新聞』大正13年（1924）3月21日付 菊田小学校編『郷土誌 菊田小学校』昭和8年（1933） 秋山善左衛門『山田奴役割帳』いわき市山田町 平成6年（1994） ほか

46. いわき市 諏訪神社 丹野香須美

(1)神社の概要	名 称／諏訪神社 所在地／いわき市中之作字植作21 由 緒／もと根渡神社と称した。元中年間（1384～92）に南北朝時代の第3代南朝の長慶天皇の遺臣が北朝軍に敗れて落ちのびた際、中之作の龍ヶ崎に上陸し、ここに宿営したという言い伝えもあるが、明治になってから信州諏訪神社から勧請し、諏訪神社と号した。祭神は建御名方命。
(2)祭りの名称	例祭
(3)祭りの由来	—
(4)祭 日	毎年5月3日
(5)伝承団体	—
(6)神幸経路	—
(7)祭りの内容	—
(8)祭りの状況	『福島県における浜下りの研究』には、記載されるが、本調査においては、当該社祭礼での「浜下り」は確認されていない。
(9)芸能等	—
(10)関連資料	—

参考文献・資料	福島県立博物館『福島県立博物館調査報告第28集 福島県における浜下りの研究』（1997） 山名隆弘監修『いわきのお宮と祭り』『いわきのお宮と祭り』刊行会（2009）
---------	---

47. いわき市 稲荷神社		四家久央
(1) 神社の概要	名称／稲荷神社 所在地／いわき市永崎字川畑220 由 緒／享保年間（1716～35）の勧請（別伝には永崎館主矢田左衛門影定の氏神社であったともいう）。明治12年（1879）、村社に列し、宇気母智神を祀る。明治24年（1891）、社殿新築するも大正6年（1917）に台風で倒壊、翌年、応急に復旧するがしだいに損壊し、昭和52年（1977）、社殿を新築し正遷宮する。祭神は倉稲魂神（宇気母智神）。	
(2) 祭りの名称	例大祭	
(3) 祭りの由来	—	
(4) 祭 日	毎年5月4日（もとは5月7日）	
(5) 伝承団体	諏訪神社（小名浜／IV-55） 宮司、氏子（永崎、洋光台）。	
(6) 神幸経路	本神輿、台車で巡幸（神社→永崎浜→浜に沿って一旦南下→洋向台→永崎小学校→神社）	
(7) 祭りの内容	潮水の扱い／氏子総代などが潮水を汲んで神輿に供える。 実施内容／海には入らないが浜に出る。	
(8) 祭りの状況	令和5年（2023）以降、再び浜に出ている。	
(9) 芸能等	—	
(10) 関連資料	—	
参考文献・資料	「いわきの“まつりと行事”⑩ 花を飾ったお祭り 永崎釜戸 稲荷神社七千万円投じ改築15年ぶりに長持ち踊りが復活」和田文夫『いわき民報（夕刊）』昭和52年（1977）6月13日付 山名隆弘監修『いわきのお宮と祭り』『いわきのお宮と祭り』刊行会（2009）	

48. いわき市 根渡神社		齋藤りぼん
(1) 神社の概要	名称／根渡神社 所在地／いわき市折戸字折戸82 由 緒／永享元年（1429）に勧請したと伝えられる。祭神は表筒之男命、中筒男命、底筒男命。	
(2) 祭りの名称	根渡神社例大祭	
(3) 祭りの由来	—	
(4) 祭 日	毎年5月4日（旧暦4月8日）。『郷土誌 永崎小学校』には、5月10日に神輿の渡御をしたことが記載されているが、いつから現在の祭礼日になったかは不明である。	
(5) 伝承団体	諏訪神社（江名／III-33） 宮司、江ノ浦地区（折戸）の住人。ただし、江ノ浦地区は諏訪神社の氏子になる。	
(6) 神幸経路	根渡神社にて神事後出発し、バス通り、海岸沿いを経由して、江ノ浦（祭場）にてお潮採り神事を行う。その後、中之作、坂本釣具店周辺（折戸）を経由して旧江名出張所で還御祭と直会を行い、根渡神社に到着する。	
(7) 祭りの内容	潮水の扱い／供える。区長兼氏子総代長が江ノ浦で潮水を汲み、神事で使用する。 実施内容／神事では、サカキを潮水に漬けて神輿に飾り、祝詞を奏上する。神幸経路は道が悪いため、本神輿は神社に置いておく。その代わりに、一番小さい子ども神輿を使って渡御する。出発前の神事では、この子ども神輿にご神体に移される。子ども神輿は、令和6年（2024）現在も担いで渡御している。また、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の流行前までは、盆囃子（笛・太鼓）を小学6年生3、4人でやっていた。盆囃子の指導者は、江名の獅子舞の継承にも携わっている。	
(8) 祭りの状況	平成23年（2011）の東日本大震災の年は神輿の渡御を行わず、根渡神社で神事のみ行った。その際、潮汲みは行わなかった。感染症が流行した令和2～4年（2020～22）の時期も、震災の年と同様に	

	神事のみ行ったが、その際に使用する潮水は、宮司が汲んでいた。令和5年(2023)から神輿の渡御が復活した。
(9) 芸能等	—
(10) 関連資料	—
参考文献・資料	永崎小学校編『郷土誌 永崎小学校』昭和7年(1932) 福島県立博物館『福島県立博物館調査報告第28集 福島県における浜下りの研究』(1997) 山名隆弘監修『いわきのお宮と祭り』『いわきのお宮と祭り』刊行会(2009)

49. いわき市 小名浜観音		丹野香須美
(1) 神社の概要	名 称／小名浜観音 所在地／いわき市小名浜大原字甲新地 由 緒／— (如意輪観音像を祀っていたらしい)	
(2) 祭りの名称	子安観音の寒供養	
(3) 祭りの由来	伝承／約800年前、難産で苦しむ庄屋の妻を救うため、大原郷に立ち寄った中尊寺の管長著名法師が、如意輪観音を彫って安産を祈願したところ、無事出産したという。	
(4) 祭 日	毎年1月19日(22日というときもある)	
(5) 伝承団体	住職、崇敬者らか	
(6) 神幸経路	—	
(7) 祭りの内容	潮水の扱い／— 実施内容／住職が潮垢離を行う。寒供養では、砂浜に設けた祭壇で合掌したあと、住職が如意輪観音像を抱いて海に入り、いわきの海で亡くなった死者の霊を慰めたという。この如意輪観音像は、十九夜観音仏として安産、子育て、縁結び祈願などに信仰を集めていたらしい。ときには、この祭礼において信者らも住職とともに寒行を行ったという記事もある。	
(8) 祭りの状況	廃絶(観音堂も取り壊され、如意輪観音像の所在も不明)。	
(9) 芸能等	—	
(10) 関連資料	—	
参考文献・資料	「子安観音の寒供養」『いわき民報(夕刊)』昭和54年(1979)1月23日付 「小名浜子安観音で「寒供養」」『いわき民報(夕刊)』昭和56年(1981)1月20日付 「菩薩と厳寒の海へ」『いわき民報(夕刊)』昭和57年(1982)1月21日付(ほか)	

50. いわき市 鹿島神社		渡邊 彩
(1) 神社の概要	名 称／鹿島神社 所在地／いわき市小名浜南富岡字北ノ内11 由 緒／第12代景行天皇の皇子小碓命の奉祀とも、延暦20年(801)、征夷大將軍坂上田村麻呂が常陸国鹿島神宮の分霊を勧請し、旧社地・小名浜鳥居下に社殿を造営したとも伝えられる。慶安3年(1650)、湯長谷藩主内藤忠興による社殿造営以来、歴代領主の信仰を受けた。祭神は武甕槌命。	
(2) 祭りの名称	例大祭	
(3) 祭りの由来	—	
(4) 祭 日	毎年5月4日。時期は不明だが、以前は旧暦4月8日だった。	
(5) 伝承団体	佐麻久嶺神社(IV-82) 宮司、鹿島神社氏子。	
(6) 神幸経路	もとは小名浜鳥居下に社殿が造営された(現在のいわき東警察署鳥居下交番のうしろが本殿跡地)。昭和43年(1968)、臨海工業地帯および小名浜港湾の拡充により、福島県の施策上やむを得ず現在の社地(南富岡)に新社殿を造営し移転した。このため、現社地は氏子区域外に位置しており、例大祭での神輿渡御は旧社地周辺を神幸する。	

(7)祭りの内容	潮水の扱い／現在は神前に供えない。 実施内容／小名浜本町通りを挟んで東側が諏訪神社（小名浜／IV-55）の氏子居住地域、西側が鹿島神社氏子居住地域となり、神輿渡御の際に本町通りで諏訪神社と鹿島神社の神輿が鉢合わせする。この時、両者の神輿がぶつかって諏訪神社側の氏子に怪我人が出たため、諏訪神社の例大祭は1日早めて5月3日に変更となったという。 神社が現在地に移転する前は浜下りも行われていたと思われるが移転後は行われていない。宮司によると、泉町下川神楽の浜に下りていたのではないかとのこと。 現在は本神輿、担神輿、女神輿、子ども神輿、さらに東北一の太鼓が神幸する。
(8)祭りの状況	新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の影響により、令和2・3年（2020・21）は役員のみで神事を行い、神輿渡御は中止。令和4年（2022）は「勝ち運太鼓」（削り抜き太鼓としては東北一の大きさ）と神輿を車に乗せて、神輿渡御を実施した。
(9)芸能等	—
(10)関連資料	—
参考文献・資料	佐々木長生「浜下りの神事の分布と考察」『東北民俗資料集』（4）萬葉堂書店（1975） 山名隆弘監修『いわきのお宮と祭り』『いわきのお宮と祭り』刊行会（2009）

51. いわき市 住吉神社 丹野香須美

(1)神社の概要	名 称／住吉神社 所在地／いわき市小名浜住吉字住吉1 由 緒／景行天皇の御代、武内宿禰により、東北総鎮守として祀られたとの言い伝えがある。祭神は、住之江三神（表筒男命、中筒男命、底筒男命）。
(2)祭りの名称	秋の大祭
(3)祭りの由来	祭りの由来ではないが、浜下りに関係した次のような言い伝えがある。 あるとき、日照りが続いたので神輿を出して浜下りをしたところ、その帰途、大雨が降りだし洪水になった。あまりの雨に、人びとは神輿を途中で投げ出して逃げた。そのときイノシシが現れて神輿を神社までかついで運んできたという。ゆえに、今でもこの周辺の人々は、猪を食べてはならないといわれている。
(4)祭 日	毎年10月第2土日（本来は旧暦9月12・13日）
(5)伝承団体	住吉神社宮司および住吉地区の総代15～16人が中心となって催行。勅使は、住吉地区から選出するのが慣例だが、昨今は少子化により周辺地域からも選ばれるようになった。かつて（平成の中頃あたりか）は、勅使を務めることはたいへんな名誉とされ、親戚などの饗応のため結婚披露宴並みのお金がかかるといわれたが、現在はそのような慣行はなくなっている。
(6)神幸経路	車（トラック）に勅使を載せ、小名浜大原を抜けて小名浜港へと向かう。小名浜魚市場の前で神事を執り行う。なお、かつては藤原川にそって浜へ向かったという。この時代の経路は不明。
(7)祭りの内容	潮水の扱い／勅使安着式において、船上から竹筒に汲んで神前に供えていたこともあったという。 現在は港の海洋深層水をあらかじめ汲んでおき、神前（漁船に設ける）に供えておく。 実施内容／潮垢離は行わない。宵宮に浜下り神事勅使参向式を行い、勅使安着式を船上にて行う。 流鏝馬も行われる。
(8)祭りの状況	いわき市指定無形民俗文化財（平成16年指定）
(9)芸能等	—
(10)関連資料	—
参考文献・資料	山名隆弘監修『いわきのお宮と祭り』『いわきのお宮と祭り』刊行会（2009） いわき市文化財保護審議会監修『いわき市の文化財』いわき市教育委員会（2017）

52. いわき市 諏訪神社 四家久央

(1)神社の概要	名 称／諏訪神社 所在地／いわき市小名浜諏訪町23-1
----------	--------------------------------

	由 緒／式外の古社。建仁元年（1201）、当地の豪族岩崎将監が信州の諏訪大社から御分霊を岡小名宮ノ作に勧請（元宮）。至徳2年（1385）現在地に遷座したという。祭神は武御名方命、八坂刀禰神。
(2)祭りの名称	例大祭、浜下り祭
(3)祭りの由来	—
(4)祭 日	毎年5月3日（もとは旧暦4月3日）
(5)伝承団体	諏訪神社宮司、小名浜地区のおおむね東半分（旧米野村、旧中島村、旧西町村、旧中町村、旧岡小名村）、また「神輿会」として茨城県や東京方面からも担ぎ手などに有志を募る。
(6)神幸経路	<p>神幸地</p> <p>①元宮遙拝所（小名浜岡小名広畑）：もともとの鎮座地（岡小名宮ノ作）を望む。</p> <p>②小名浜新魚市場（岡小名辰巳町）で「浜下り祭」執行。</p> <p>③港ヶ丘えびすや前（駐輦所神事）</p> <p>④古湊御霊神社（参拝）いずれも「車輦」コース</p> <p>（担ぎ神輿は、港の観光施設に隣接する「アクアマリンパーク」で「道饗祭 大神振神事」を開催）</p> <p>神幸経路</p> <p>①「車輦」コース／小名浜地区を南北に貫く通称“鹿島街道”のおおむね東部分を「四役」など30人ほどの行列で本神輿をトラックに載せて渡御する。諏訪神社→元宮遙拝所→小名浜新魚市場（浜下り祭）→いわき・ら・ら・ミュウ→旧魚市場→港ヶ丘えびすや（駐輦所神事）→古湊（御霊神社参拝）→中島→西町→岡小名原木田→湘南台→諏訪神社還幸。</p> <p>②「担ぎ神輿渡御」コース／神輿会などが、港の観光施設付近や小名浜中心市街（鹿島街道以東）を担いで渡御する（なお、「浜下り祭」を行うのは「車輦」のみである）。</p> <p>*天狗所役（猿田彦）、神楽所役（獅子）、ウズメ所役（おかめ）、太刀所役（脇差を持つ）の4役。旧小名浜4か村（米野、中島、中町、西町）の各代表1人が勤める。</p>
(7)祭りの内容	潮水の扱い／潮水を汲み、真水と共に供える。 実施内容／潮垢離は行わない。漁協の職員が魚市場内の海水の出る蛇口からペットボトルに汲み、真水と並べてコップに注いで神酒や塩、カツオや野菜果物などと共に祭壇に供える。神輿を載せたトラックを祭壇前に誘導し、祭礼を行い、車輦参加者、漁協関係者が拝礼、終了後はそのまま片づけられる。
(8)祭りの状況	令和2年（2020）は中止。同3・4年（2021・22）は車輦渡御のみで浜下り祭は行った。令和5年（2023）からおおむね平常どおりの規模となる。
(9)芸能等	—
(10)関連資料	—
参考文献・資料	山名隆弘監修『いわきのお宮と祭り』『いわきのお宮と祭り』刊行会（2009）

53. いわき市 鹿島神社		四家久央
(1)神社の概要	<p>名 称／鹿島神社</p> <p>所在地／いわき市常磐上矢田町花木下34</p> <p>由 緒／式内社。磐城郡七座の一つ。神護景雲2年（768）創建という。領主の崇敬も篤く元禄11年（1698）には磐城平藩主内藤義孝から「鹿嶋大明神」の神号額が奉納された。江戸時代までは別当神宮寺が祭事を管掌、明治2年（1869）に官社となる。祭神は武甕槌命。</p>	
(2)祭りの名称	例大祭、神輿渡御	
(3)祭りの由来	明治20年（1888）、神輿と神楽殿を新設し、中絶していた渡祭を復活、小名浜町まで神輿渡御。小名浜町の海岸で渡祭式を執行して還幸し、これを恒例とした。明治33年（1900）以降、近村の江名村海岸漁民が不漁を嘆き本社に祈願、江名村海岸で渡祭式を執行して還幸。以後、たびたび豊漁となったという。	
(4)祭 日	毎年5月3日（もとは旧暦4月8日）	
(5)伝承団体	立錫鹿島神社（IV-80）宮司。もとは鹿島村7大字（上矢田、下矢田、松久須根、米田、三沢、飯田、走熊）、現在は3大字（常磐上矢田町、常磐松久須根町、常磐三沢町）。	

(6)神幸経路	明治20～32年（1889～99）は鹿島村各大字、玉川村、小名浜町を巡行し、小名浜町の海岸に神幸。明治33年以降に、近村の江名村海岸漁民が不漁を嘆き本社に祈願。これにより村内各大字を巡行して江名村海岸に神幸。
(7)祭りの内容	—
(8)祭りの状況	宮司によれば昭和の終わり頃から行われていない。 『上矢田の沿革』によれば、鹿島神社の祭典について「いまはつぎのようになっている」として「5月5日例大祭（中略）毎年神輿の渡御、浜下りも行われる」とある。
(9)芸能等	—
(10)関連資料	「神輿渡祭届」 上矢田村鎮座 郷社鹿島神社 右者当郷社神輿ノ儀ハ破損以来渡祭中絶致居候処、今般神輿購求候ニ付先例ノ通り旧四月八日小名浜村渚点ニ渡祭仕候間此段為念御届申上候也 明治二十年三月二十八日 右社々惣代 園部 茂作 [㊟] 全 黒木 治郎右エ門 [㊟] 全 金成 専昭 [㊟] 祠 官 吉野 勝栄 [㊟] 福島県磐前郡平町外十九ヶ村 戸 長 石川 権介 [㊟] 菊多 福島県磐城郡長 白井 遠平 殿 磐前 金成信成『上矢田の沿革—先祖の足跡をたずねる—』昭和61年（1986）
参考文献・資料	鹿島郷土誌編纂委員会編『鹿島郷土誌』昭和55年（1980）

54. いわき市 白山神社		齋藤りぼん
(1)神社の概要	名 称／白山神社 所在地／いわき市鹿島町上蔵持字滝浪 9 由 緒／棟札には、延暦23年（804）、征夷大将軍坂上田村麻呂が勸請すとある。弘仁2年（811）、一村の鎮守神として奉祀したと伝えられる。祭神は菊理姫乃命、相殿神（船魂神社）／大海津見大神。	
(2)祭りの名称	白山神社例大祭	
(3)祭りの由来	白山神社では、船魂神社の「フナダマサマ」が祀られており、それを例大祭時に江名でお迎えする。	
(4)祭 日	毎年5月4日（旧暦4月8日）。『鹿島郷土誌』には、5月7日に神輿の渡御をしたことが記載されているが、いつから現在の祭礼日になったかは不明である。	
(5)伝承団体	諏訪神社（江名／Ⅲ-33）宮司、白山神社の氏子総代。	
(6)神幸経路	かつて（具体的な年代は不明）は神輿が江名浜に下っていたが、近年は蔵持地区内を巡行するのみに変わった。また、例大祭は下蔵持の熊野神社（Ⅳ-54）と合同で行っており、毎年交代で当番を務めている。白山神社が当番の場合、白山神社で神事を行い、富士工営(株)、かしま荘の各お旅所を経由して熊野神社に到着し、還御祭を行う。熊野神社が当番の場合、熊野神社で神事を行い、かしま荘、富士工営(株)の各お旅所を経由して白山神社に到着し、還御祭を行う。	
(7)祭りの内容	潮水の扱い／供える。区長兼氏子総代長が江ノ浦で潮水を汲み、神事で使用する。潮水はタケでできた樽に汲んでくる。 実施内容／神事では、サカキを潮水に漬けて神輿に飾り、祝詞を奏上する。お旅所では神事が行われないが、お札を配っている。令和元年（2019）までは神輿を担いで渡御していたが、令和6年（2024）現在は担ぎ手不足であり、神輿の渡御が行われなくなった。また、『いわきのお宮とお祭り』によると、かつてはお潮採りを根渡神社の神事と合わせていたというが、令和6年（2024）現在は、別々に行われている。	
(8)祭りの状況	平成23年（2011）の東日本大震災の年は神輿の渡御を行わず、白山神社で神事のみ行った。その際、	

	潮汲みは行わなかった。新型コロナウイルス感染症（COVID-19）が流行した令和2～4年（2020～22）は、白山神社で神事のみ行った。その際に使用する潮水は、宮司がペットボトルに汲んでいた。令和5年（2023）以降も神事のみになったが、潮汲みは氏子総代に一任しているという。なお、コロナ禍以降も熊野神社と交代で当番を務めており、令和6年は白山神社、令和7年（2025）は熊野神社が当番である。当番の神社には、あらかじめ神輿を運んでいる。
(9) 芸能等	—
(10) 関連資料	—
参考文献・資料	鹿島郷土誌編纂委員会編『鹿島郷土誌』昭和55年（1980） 福島県立博物館『福島県立博物館調査報告第28集 福島県における浜下りの研究』（1997） 山名隆弘監修『いわきのお宮と祭り』『いわきのお宮と祭り』刊行会（2009）

55. いわき市 熊野神社		齋藤りぼん
(1) 神社の概要	<p>名称／熊野神社</p> <p>所在地／いわき市鹿島町下蔵持字戸ノ内87</p> <p>由 緒／延暦23年（804）正月、征夷大将軍坂上田村麻呂が勧請したと伝えられる。祭神は五十猛命、速玉男命、伊弉冉尊、泉津事解男命。</p>	
(2) 祭りの名称	熊野神社例大祭	
(3) 祭りの由来	—	
(4) 祭 日	毎年5月4日（旧暦5月7日）	
(5) 伝承団体	諏訪神社（江名／III-33）宮司、熊野神社の氏子総代。	
(6) 神幸経路	かつて（具体的な年代は不明）は神輿が江名浜に下っていたが、近年は蔵持地区内を巡行するかたちになった。また、例大祭は上蔵持の白山神社（IV-53）と合同で行っており、毎年交代で当番を務めている。熊野神社が当番の場合、熊野神社で神事を行い、かしま荘、富士工営（株）の各お旅所を経由して白山神社に到着し、還御祭を行う。白山神社が当番の場合、白山神社で神事を行い、富士工営（株）、かしま荘の各お旅所を経由して熊野神社に到着し、還御祭を行う。	
(7) 祭りの内容	<p>潮水の扱い／供える。区長兼氏子総代長が江ノ浦で潮水を汲み、神事で使用する。潮水はタケでできた樽に汲んでくる。</p> <p>実施内容／神事では、サカキを潮水に漬けて神輿に飾り、祝詞を奏上する。お旅所では神事が行われないが、お札を配っている。令和元年（2019）までは神輿を担いで渡御していたが、令和6年（2024）現在は担ぎ手不足であり、神輿の渡御が行われなくなった。</p>	
(8) 祭りの状況	平成23年（2011）の東日本大震災の年は神輿の渡御を行わず、熊野神社で神事のみ行った。その際、潮汲みは行わなかった。新型コロナウイルス感染症（COVID-19）が流行した令和2～4年（2020～22）は、熊野神社で神事のみ行った。その際に使用する潮水は、宮司がペットボトルに汲んでいた。令和5年（2023）以降も神事のみになったが、潮汲みは氏子総代に一任しているという。なお、コロナ禍以降も白山神社と交代で当番を務めており、令和6年は白山神社、令和7年（2025）は熊野神社が当番である。当番の神社には、あらかじめ神輿を運んでいる。	
(9) 芸能等	—	
(10) 関連資料	—	
参考文献・資料	鹿島郷土誌編纂委員会編『鹿島郷土誌』昭和55年（1980） 福島県立博物館『福島県立博物館調査報告第28集 福島県における浜下りの研究』（1997） 山名隆弘監修『いわきのお宮と祭り』『いわきのお宮と祭り』刊行会（2009）	

56. いわき市 津神社・出羽神社・根渡神社		四家久央
(1) 神社の概要	<p>名称／津神社</p> <p>所在地／いわき市泉町下川字神竈184</p> <p>由 緒／神龜5年（728）に紀州熊野宮から勧請、津大明神と称した。岩城常隆からの神田の寄進や、江戸時代には御朱印十石を受けるなど崇敬が篤かった。明治になり津神社と改称。祭神は大海津見神。</p>	

第IV章 基本調査

	<p>名 称／出羽神社 所在地／いわき市泉町下川神山前119 由 緒／大同元年（806）に羽州羽黒山から分霊を勧請、羽黒大権現と称した。岩城常隆から神田七町歩の寄進、江戸時代には御朱印十石を受ける。明治になり出羽神社と改称。祭神は宇迦之御霊神。</p> <p>名 称／根渡神社 所在地／いわき市泉町下川畑中160 由 緒／勧請年等不詳、万治3年（1660）、泉藩主内藤右近が社殿を造営、根渡大明神と称し崇敬をあつめた。明治になり根渡神社と改称。祭神は瀬織津姫神。</p>
(2)祭りの名称	3社合同例祭
(3)祭りの由来	字神笑の津神社には、大昔、津・温泉・諏訪の3神が嶽の浦に寄り集まり大笑いし、年に1度の再会を約してそれぞれの地に鎮座した。その海岸を「神笑」と称したとの伝承がある
(4)祭 日	毎年5月5日（もとは旧暦4月15日）
(5)伝承団体	<p>諏訪八幡神社（泉町／III-34）、泉町下川地区氏子。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・津神社：神笑、田宿、前ノ原、井戸内、大畑、大剣 ・出羽神社：神山前、谷地川、宿ノ川、稲子塚、薬師前 ・根渡神社：畑中、稲子塚、川向
(6)神幸経路	平成23年（2011）の東日本大震災前までは、神輿は出羽神社（女坂・北側）から県道泉岩間植田線（239号線）に出て、神山前、谷地川、宿ノ川、稲子塚、田宿、前ノ原と各地区を巡り、宝珠院橋を渡り津神社へ、井戸内、神笑を巡行。さらに大畑貝塚公園（大剣）からサンマリーナの海岸に下り、浜下りを行った。そこから東緑地公園（畑中）、根渡神社へ行き、いったん泉もえぎ台へ向かってから出羽神社へ戻った。現在は大畑貝塚公園でお旅所神事をし、浜に下りることはなくなった。
(7)祭りの内容	<p>潮水の扱い／汲まない。</p> <p>実施内容／令和6年（2024）5月5日の内容を以下に記す。</p> <p>神職が津神社、根渡神社、出羽神社の順に巡り、それぞれの神社で例祭神事を行う。津神社、根渡神社の両神輿はそれぞれトラックに載せられ出羽神社へ向かう。トラックから降ろされた両社の神輿は参道前に並び、出羽神社の神輿を子ども神輿等と共に待つ。</p> <p>10:00 3社の神輿が揃うと出立の神事をし、出羽、津、根渡の順に神輿の車列を作って下川地区全体を巡幸。</p> <p>12:00 大畑貝塚公園で3社揃ってお旅所神事を行う。</p> <p>昼食後13:00に流れ解散となった。</p> <p>東日本震災前はさらに下ってサンマリーナ駐車場まで3社で渡御し、津神社のみは海に入った。</p>
(8)祭りの状況	浜には下りないが継続中。
(9)芸能等	芸能は伴わないが、下川地区沿道の各所で家の門口に季節の花を飾る。
(10)関連資料	<p>「(3)津神社」(抜粋)</p> <p>伝説</p> <p>大昔津、温泉、諏訪三神嶽の浦により給い美しい所と大笑に答ひ給いて津明神は海に臨む磯見見山に温泉権現は湯の湧く湯の岳に諏訪権現は釜戸山へと一年一度の再会を約し鎮座すという三神大笑いせし所今に神笑と称す。</p> <p>宮司 飯塚久寿</p> <p>下川郷土史調査委員会『下川郷土史』昭和57年（1982）</p>
参考文献・資料	山名隆弘監修『いわきのお宮と祭り』『いわきのお宮と祭り』刊行会（2009）

57. いわき市 鹿島神社 渡邊 彩

(1)神社の概要	<p>名 称／鹿島神社 通称：カンマサマ 所在地／いわき市泉町小山164 由 緒／征夷大将軍坂上田村麻呂が延暦21年（802）に常陸国鹿島神宮の分霊を菊田郡泉村八木屋小迫子関に勧請したという。天正5年（1577）に類焼。元禄4年（1691）、内藤政親が現社地へ遷祀した。祭神は武甕槌天神。</p>
----------	--

(2)祭りの名称	例大祭
(3)祭りの由来	—
(4)祭 日	毎年5月3日。明治44年(1911)の『郷土史』では5月8日、昭和7年(1932)の『郷土史』では4月15日とある。その後、時期は不明だが5月5日となり、子供会の都合により平成20年(2008)頃に5月3日となった。
(5)伝承団体	鹿島神社宮司、大字泉区(区長主催)。祭りは区の行事で、祭りを執り行うかの是非を決めるのも区長。
(6)神幸経路	令和元年(2019)祭礼時/鹿島神社にて祭典後、10時に立出。小山、横山、堀ノ内、玉露7丁目、玉露2丁目、玉露と神幸し、歩道橋前にて休憩。休憩後、泉町2丁目、泉町4丁目、泉町5丁目、泉町3丁目と神幸、12時~13時、泉神社で昼食休憩。昼食後、泉町1丁目、泉町2丁目、泉町4丁目と進み、13時50分、鹿島神社へ帰社。
(7)祭りの内容	潮水の扱い/コロナ禍以前(2020年以前)は神前に潮水を供えていた。 実施内容/神社での祭典終了後、猿田彦、笛、太鼓、本神輿、各地区の樽神輿(子ども神輿3基:泉上子供会・玉露子供会・泉第一子供会)の順で地区内を渡御する。各子供会の地区に入ると、その地区の子ども神輿が本神輿のあとにつく。 正確な年代は不明だが、先々代の宮司の頃までは泉町下川地区田宿(藤原川河口。川澄家付近)へ神輿が下りていたという(現宮司は浜下りを見た記憶はない)。 浜下りをしなくなってからは、潮汲みは代々、下川字田宿の川澄家の男子が奉仕していた。祭礼の日の早朝、総代1人と猿田彦が下川地区字田宿の川澄家に向かった。川澄家ではお膳を用意して総代と猿田彦をもてなす。この間に川澄家の男子が潮水を汲みにいき、その潮水を受け取って神社に戻った。川澄家の男子が亡くなり、潮水汲みの奉仕ができなくなったことから、以後は神社側が直接潮水を汲むことと取り決め、昭和59年(1984)5月5日に川澄家、下川区長、泉区长、鹿島神社、氏子総代表の間で覚書を交わした。 神社側が直接潮水を汲みにいくようになってからは、例大祭の早朝(5時30分~6時頃)に総代と猿田彦の2人で汲みにいくようになり、東日本大震災後は小浜海岸に汲みにいくようになった。小浜海岸は漁港脇になだらかなスロープがあり、潮水を汲みやすい。 笛の吹き手は、小中学生から大人まで多数おり、NPO法人の申請をしている。
(8)祭りの状況	令和2年(2020)以前は神輿が出ていたため潮水も汲んだが、新型コロナウイルス感染症(COVID-19)の影響により、令和2年以降は渡御および潮汲みは中止となった。令和6年(2024)には神輿渡御が行われた。
(9)芸能等	—
(10)関連資料	「塩水汲行事(泉鹿島神社大祭御供)について」覚書 昭和59年5月5日 鹿島神社所蔵
参考文献・資料	泉小学校編『郷土史 泉小学校 泉村郷土誌(明治44年福島県訓令第34号)』(1911) 泉小学校編『郷土誌 渡辺小学校(昭和7年福島県訓令第2号)』(1932) 佐々木長生「浜下りの神事の分布と考察」『東北民俗資料集』(4) 萬葉堂書店(1975) ほか

58. いわき市 八幡白山神社		丹野香須美
(1)神社の概要	名 称/八幡白山神社 通称:ハチマンサマ 所在地/いわき市 泉町玉露字定田34 由 緒/康平5年(1062)、源 頼義が奥州平定の際に、放った矢がこの地に落ちたという伝承がある。白山神社とともに泉町玉露字定田の山腹にあったが、明治8年(1875)年に合祀されたと伝えられる。祭神は磐田別命、菊理姫神。	
(2)祭りの名称	(秋の) 例大祭	
(3)祭りの由来	—	
(4)祭 日	毎年10月スポーツの日(平成11年までは10月10日)	
(5)伝承団体	諏訪八幡神社(III-34) 宮司、泉玉露1・3・5・6丁目(旧「八木屋」)・泉町玉露	
(6)神幸経路	八幡白山神社を出発し、泉玉露5丁目から1丁目、泉駅裏手を経由して4丁目から6丁目、5丁目へと巡り、還御する。平成23年(2011)の東日本大震災により移住した人たちのところへも巡るの	

	で、かつての神幸経路と大きく変化した。
(7)祭りの内容	潮水の扱い／祭礼当日早朝にサンマリーナの浜（かつては天 ^{おおつるぎ} 剣海岸）から潮水を手桶に汲み、神前に供えておく。これをオシオクミといい、昔は2人組で青竹竿に吊って持ち帰ったという。この潮水は、サカキの枝につけて、お清めに使う。 実施内容／潮垢離は行わない。子ども会の子どもたち10人ほどがお囃子（笛）を奉納する。
(8)祭りの状況	新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の流行においても、車載にて神輿渡御を実施した。子ども神輿もでる。また、神幸所の都合と要請もあり、介護施設が新たに渡御経路に追加された。
(9)芸能等	お囃子
(10)関連資料	—
参考文献・資料	山名隆弘監修『いわきのお宮と祭り』『いわきのお宮と祭り』刊行会（2009）

59. いわき市 八坂神社 齋藤りぼん

(1)神社の概要	名 称／八坂神社 通称：テンノウサマ 所在地／いわき市常磐水野谷町錦沢143 由 緒／鎌倉時代頃、水野谷郷をおさめていた水谷氏が疫病退散のために水野谷山山頂に「牛頭天王宮」（八坂神社の前身）を建立したと伝えられる。明治2年（1869）に八坂神社と改められた。祭神は建速須佐之男。
(2)祭りの名称	春の例祭
(3)祭りの由来	—
(4)祭 日	毎年5月4日（旧暦5月7日）
(5)伝承団体	金刀比羅神社（常磐関船町諏訪下）宮司、八坂神社の氏子総代。
(6)神幸経路	かつて（具体的な年代は不明）は、神輿が小名浜に下っていた。令和5年（2023）現在は、水野谷地区内を巡行するかたちが変わった。まず、八坂神社で神事を行い、出発する。その後、梅林寺前（水野谷駐輦所）で諏訪神社（常磐関船町／IV-64）の神輿と合流し、潮水神事を行う。神事後、諏訪神社側と別れ、水野谷地区内を巡行し、八坂神社に到着する（7キロメートル）。
(7)祭りの内容	潮水の扱い／供える。5月4日早朝、氏子総代が小名浜で潮水を汲んでくる。それを、潮水神事の際にサカキに漬けて神輿にかける。 実施内容／例祭では、宮司が兼務している諏訪神社の神輿と合流し、合同で神事を行う。また、水野谷地区の子どもたちを集めて行うのも特徴である。『いわきのお宮とお祭り』によると、例祭では本神輿、子ども神輿、花神輿が渡御すると記載されている。
(8)祭りの状況	新型コロナウイルス感染症（COVID-19）が流行した令和2～4年（2020～22）は実施しなかったが、令和5年（2023）には4年ぶりに例祭を行った。ただし、車輦神輿での渡御である。
(9)芸能等	—
(10)関連資料	—
参考文献・資料	福島県立博物館『福島県立博物館調査報告第28集 福島県における浜下りの研究』（1997） 山名隆弘監修『いわきのお宮と祭り』『いわきのお宮と祭り』刊行会（2009）

60. いわき市 日吉神社 齋藤りぼん

(1)神社の概要	名 称／日吉神社 所在地／いわき市常磐岩ヶ岡町山王作96 由 緒／永承4年（1049）4月、岩城則道が常陸国から奥州へ下向する際、近江国の日枝権現の分霊を勧請したと伝えられる。明治2年（1869）に日吉神社と改められた。祭神は大山咋神。
(2)祭りの名称	日吉神社例大祭（潮水神事）
(3)祭りの由来	—
(4)祭 日	毎年5月4日（5月5日）。『郷土誌』には4月7日に潮水渡祭が行われたことが記載されている

	が、いつから現在の祭礼日になったかは不明である。
(5)伝承団体	金山神社 (IV-63) 宮司、日吉神社の氏子総代。
(6)神幸経路	かつて(具体的な年代は不明)は、神輿が泉町下川の浜(藤原川)に渡御していたとのことだが、『郷土誌』には小名浜に渡御していたことが記載されている。令和4年(2022)現在は、地区内を巡行するかたちが変わった。神幸経路は、藤原川の土手づたいに泉町下川に向かったと考えられる。令和4年現在は、日吉神社を出発して常磐馬玉町の境界、常磐岩ヶ岡町、常磐西郷町の境界、常磐長孫町の境界などを經由して日吉神社に到着する。
(7)祭りの内容	潮水の扱い/供える。氏子総代が、5月4日早朝に小名浜の海(アクアマリン方面)に行き、一升瓶に潮水を汲む。汲んだ潮水は杯に入れ、そこに葉っぱ(サカキカ)を漬けて参列者にかける。実施内容/河川に渡御していた頃の内容は不明。令和4年現在は、磐崎公民館(常磐西郷町)に札場があるため、そこでお祓いをする。宮司が本務としている金山神社同様、祝詞奏上と玉串奉奠の間に潮水神事がある。お祓い後に神輿の渡御をする。なお、現在は車輦神輿での渡御である。
(8)祭りの状況	令和4年の調査によると、新型コロナウイルス感染症(COVID-19)が流行する前までは毎年神輿の渡御をしていたが、感染症の流行が拡大した令和2年(2020)になってからは潮水神事の実施に変わった。
(9)芸能等	—
(10)関連資料	—
参考文献・資料	磐崎小学校編『郷土誌 磐崎小学校』明治45年(1912) 長倉小学校編『郷土誌 長倉小学校』明治45年(1912) 藤原小学校編『郷土誌 藤原小学校』明治45年(1912) ほか

61. いわき市 牛神社 四家久央

(1)神社の概要	名 称/牛神社 通称:ウシミヤ 所在地/いわき市常磐馬玉町大久保103 由 緒/勧請年等不詳。一般に、社名は社前の牛に似た大岩に因むという。また、前温泉神社宮司によればオオクニヌシ等のヌシがウシに転訛したものという。牛角型石斧が御神宝とされ、鎮座地である馬玉の地名は曲玉が転化したものという。祭神は大日靈命。
(2)祭りの名称	例祭
(3)祭りの由来	—
(4)祭 日	毎年5月5日(旧暦4月7日)
(5)伝承団体	温泉神社 (III-35) 宮司、常磐馬玉町氏子
(6)神幸経路	渡御しない
(7)祭りの内容	潮水の扱い/潮水は決まった場所ということはなく、汲んできて神前に供える。 実施内容/潮垢離は行わない。神事のみ。
(8)祭りの状況	『いわきのお宮とお祭り』によれば、本社に加え、常磐長孫の八幡神社 (IV-62)、常磐西郷の金山神社 (III-63)、常磐岩ヶ岡の日吉神社 (IV-60) の4社が小名浜松の中の休憩所で一堂に揃い、その後、小名浜魚市場前のお宮に集結し、海に入ったという。
(9)芸能等	—
(10)関連資料	—
参考文献・資料	山名隆弘監修『いわきのお宮とお祭り』『いわきのお宮とお祭り』刊行会(2009)

62. いわき市 八幡神社 四家久央

(1)神社の概要	名 称/八幡神社 所在地/いわき市常磐長孫町八幡平79 由 緒/口伝によれば、本社は前九年の役に際し源頼義軍が東海道(浜街道)を北進、泉玉露の
----------	---

	花立山を越え当地に到着、武運長久・子孫繁栄を祈念し八幡神を勧請、神号を「長孫」としたという。祭神は磐白別命。
(2)祭りの名称	例祭
(3)祭りの由来	—
(4)祭 日	毎年5月4日（もとは5月7日）
(5)伝承団体	温泉神社（Ⅲ-35）宮司、常磐長孫町氏子
(6)神幸経路	渡御しない
(7)祭りの内容	潮水の扱い／決まった場所ということはなく、潮水を汲んできて、神前に供える。 実施内容／潮垢離は行わない。神事のみ。
(8)祭りの状況	現在は神事のみで神輿を出さなくなった。戦前、神輿は若者に担がれ長孫を出発し、常磐岩ヶ岡、常磐馬玉、泉町本谷を巡り小名浜富岡から二ツ橋へ、小名浜松の内にあった鹿島神社（昭和43年富岡へ移転）、同町内の「加工場（現在の交番前）」で休憩をした。ここで常磐西郷の金山神社（Ⅳ-63）、常磐岩ヶ岡の日吉神社（Ⅳ-60）、常磐馬玉の牛神社（Ⅳ-61）とあわせて4社が一堂に会して小名浜魚市場前のお宮に集結し、海に入ったという。帰路は小名浜から大原、玉川の住吉神社、島、岩ヶ岡を巡り長孫へ還幸した。戦後も何度か神輿渡御があったが、その後小名浜へは行かなくなった。ただ、しばらくの間小名浜の潮水を汲んで神輿を清め、村巡りしていた。
(9)芸能等	—
(10)関連資料	—
参考文献・資料	山名隆弘監修『いわきのお宮と祭り』『いわきのお宮と祭り』刊行会（2009）

63. いわき市 金山神社

齋藤りぼん

(1)神社の概要	名 称／金山神社 所在地／いわき市常磐西郷町金山102 由 緒／康平6年（1063）3月、源頼義が詔を奉して東征する際、美濃国不破郡府中の金山彦大神の分霊を奉して戦捷を遂げたと伝えられる。祭神は金山彦神、金山比売神。
(2)祭りの名称	金山神社例大祭（潮水神事）
(3)祭りの由来	—
(4)祭 日	毎年5月4日（5月5日）。『石城郡に於ける神社』や『常磐毎日新聞』昭和11年（1936）12月24日付には5月7日に行われていたことが記載されているが、いつから現在の祭礼日になったかは不明である。
(5)伝承団体	金山神社宮司、金山神社の氏子総代。
(6)神幸経路	かつて（具体的な年代は不明）は、神輿が泉町下川の浜（藤原川）に渡御していたとのことだが、『石城郡に於ける神社』や『福島県における浜下りの研究』には小名浜に渡御していたことが記載されている。令和4年（2022）現在は、地区内を巡行するかたちが変わった。神幸経路は、藤原川の土手づたいに泉町下川に向かったと考えられる。令和4年現在は、金山神社を出発して常磐西郷町内のセブンイレブン、磐崎公民館、落合八幡神社などを経由して金山神社に到着する。
(7)祭りの内容	潮水の扱い／供える。氏子総代が、5月4日早朝小名浜の海（アクアマリン方面）に行き、一升瓶に潮水を汲む。汲んだ潮水は杯に入れ、そこに葉っぱ（サカキカ）を漬けて参列者にかける。実施内容／河川に渡御していた頃は、宮司が馬に乗って先導していた。また、当時は帰路でよその神輿と喧嘩する「あばれみこし」がたびたび行われていた（どちらかの神輿を川に落とす）。そのため、神社に帰ってくるのが午後7～8時になっていた。当時、あばれみこしに携わっていた人は、令和4年現在80代くらいになっている。 なお、河川への渡御は先代の宮司の代までやっており（昭和の戦後くらいまでと推察される）、神輿は水に入っていないという（現地でのお祓いのみと推察される）。戦時中は、神主が戦場に駆り出されて手薄になったため、寺の僧侶が祭礼を執り行っていたこともあった。新型コロナウイルス感染症（COVID-19）が流行する前までは、神社の本殿にて氏子総代が参列してお祓いが行われており、祝詞奏上と玉串奉奠の間に、上記の潮水をかける儀式があり、お祓い後に神輿の渡

	御をしていた。なお、近年は車輦神輿での渡御であるが、一部の区間は子どもたち（西郷子供会）が神輿を担いでいた。子どもたちの人数は、年々減少している。
(8)祭りの状況	令和4年の調査によると、新型コロナウイルス感染症が流行する前までは毎年神輿の渡御をしていたが、令和2年（2020）になってからは潮水神事のみの実施に変わった。
(9)芸能等	—
(10)関連資料	—
参考文献・資料	磐城高等女子学校3学年編『石城郡に於ける神社』磐城高女（出版年不明） 「石城の神社と佛閣（四）」『常磐毎日新聞』昭和11年（1936）12月24日付 福島県立博物館『福島県立博物館調査報告第28集 福島県における浜下りの研究』（1997）ほか

64. いわき市 諏訪神社		齋藤りぼん
(1) 神社の概要	名 称／諏訪神社 所在地／いわき市常磐関船町諏訪下9-1 由 緒／延暦20年（801）5月、征夷大将軍坂上田村麻呂が蝦夷征伐の際、陸奥国菊田郡昼野邑に諏訪大明神を勧請したと伝えられる。祭神は建御名方大神、相殿神／八坂刀禿大神。	
(2) 祭りの名称	春の例祭	
(3) 祭りの由来	—	
(4) 祭 日	毎年5月4日（旧暦4月7日）。『常磐毎日新聞』大正15年（1926）5月7日付には5月7日、昭和54年（1979）の『石城郡誌』には4月7日に神輿の渡御がされたことが記載されているが、現在の祭礼日になるまでの経緯は不明である。	
(5) 伝承団体	金刀比羅神社（常磐関船町諏訪下）宮司、諏訪神社の氏子総代、矢津子供会、下湯長谷子供会（かつては宿内子供会、上関子供会）。	
(6) 神幸経路	昭和31年（1956）まで、神輿が小名浜に下っていた。ただし、『福島県における浜下りの研究』には、下川神笑海岸に渡御していた旨が記載されている（年代不明）。令和5年（2023）現在は、地区内を巡行するかたちになった。 まず、諏訪神社で潮水神事を行い、神社を出発する。その後、迎駐輦所、上関駐輦所を経由して梅林寺前（水野谷駐輦所）で八坂神社（IV-59）側と合流し、神事を行う。八坂神社側と別れ、塚ノ越、杭田、愛宕神社前駐輦所、古宿、下湯長谷団地、新道、白鳥境、梅ノ房、磐崎中学校前、桜ヶ丘、下湯長谷駐輦所、町下、勝善橋、野木前、旭ヶ丘、上湯長谷駐輦所、上ノ台、希望ヶ丘、釜ノ前、第二釜ノ前、上ノ台団地、松が台、湯台堂駐輦所、南・北・西団地、梅ヶ平、小野田、梅ヶ平、高倉、作ノ道、松栢館前、湯本駅前、矢津団地の各地を経由して諏訪神社に到着し、還御祭と直会を行う。	
(7) 祭りの内容	潮水の扱い／供える。昭和31年までは、小名浜に神輿の渡御をしていた。令和5年現在は、5月4日早朝に氏子総代が小名浜で潮水を汲んでくる。それを、潮水神事の際にサカキに漬けて神輿にかける。 実施内容／本例祭は、愛宕神社（常磐関船町馬場）と合同で執り行う。また、例祭当日は、宮司が兼務している八坂神社の神輿と駐輦所で合流し、合同で神事を行う。かつて（具体的な年代は不明）神輿は毎年担いでいたが、人員不足や経済的負担が大きいことから、神輿を担ぐのは3年に1回になった（残りの2年は車輦神輿での渡御）。 例祭では、氏子区である宿内子供会、上関子供会、矢津子供会、下湯長谷子供会がそれぞれ子ども神輿で渡御していたが、宿内子供会は10年前、上関子供会は1年前に解散した。そのため、現存しているのは、矢津子供会と下湯長谷子供会である。矢津子供会は、諏訪神社での神事後、矢津団地内を回る。下湯長谷子供会は、午前7時に諏訪神社で神事を行ったあと、下湯長谷地区を回る。	
(8) 祭りの状況	新型コロナウイルス感染症（COVID-19）が流行した令和2～4年（2020～22）は実施しなかったが、令和5年（2023）は4年ぶりに例祭を行った。ただし、車輦神輿での渡御である。	
(9) 芸能等	—	
(10) 関連資料	—	

参考文献・資料	「湯本諏訪祭禮」『常磐毎日新聞』大正15年（1926）5月7日付 石城郡役所『石城郡誌』昭和54年（1979） 福島県立博物館『福島県立博物館調査報告第28集 福島県における浜下りの研究』（1997）ほか
---------	--

65. いわき市 熊野神社		四家久央
(1)神社の概要	名称／熊野神社 所在地／いわき市常磐下船尾町古内146 由 緒／社伝によれば、天智天皇の時代に紀州熊野から勧請され、建長元年（1249）、笛が森館主岩崎三郎隆久によって字古内地内の熊野作に遷座されたという。明治の神仏分離令以前は熊野大権現と称し、その別当大室院は本山派修験の警前郡正年行事職を勤め、本社はその中心道場となっていた。祭神は速玉男之命、伊邪那美神、事解之男神。	
(2)祭りの名称	例祭、神輿渡御	
(3)祭りの由来	—	
(4)祭 日	毎年5月5日（もとは旧暦4月7日）	
(5)伝承団体	熊野神社（常磐藤原町／IV-67）宮司、常磐下船尾町氏子。	
(6)神幸経路	下船尾町内を巡行	
(7)祭りの内容	現在は例祭神事のあと、町内をトラックに載せて巡行。戦前は例祭を旧暦4月7日に斎行。神輿は小名浜野田、小名浜岩出、小名浜林城の各村を巡り祭儀を行い、小名浜富ヶ浦へ神幸し潮水行事を執行した。	
(8)祭りの状況	潮水の扱い／どの場所という決まりはないが、潮汲役が潮水を汲んでくる。 実施内容／潮汲役は午前3、4時起きをして朝暗いうち、人に見られないうちに汲みにいくという。古い潮汲桶がある。発輿時、潮垢離の祝詞を読み、汲んできた潮水で神輿を浄める。神輿渡御は、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の流行により令和2年（2020）から中断。	
(9)芸能等	—	
(10)関連資料	—	
参考文献・資料	山名隆弘監修『いわきのお宮と祭り』『いわきのお宮と祭り』刊行会（2009）	

66. いわき市 熊野神社		四家久央
(1)神社の概要	名称／熊野神社 所在地／いわき市常磐白鳥町電ヶ崎66 由 緒／勧請年等不詳。もとは熊野大権現と称し、湯長谷藩主内藤家の産土神社として崇敬された。戊辰戦争により棟札、古記録等を焼失。明治2年（1869）に熊野神社と改称。祭神は速玉男之神、伊邪那美命、事解之男神。	
(2)祭りの名称	例祭	
(3)祭りの由来	—	
(4)祭 日	毎年5月5日（もとは旧暦4月7日）	
(5)伝承団体	熊野神社（常磐藤原町／IV-67）、磐白鳥町氏子。	
(6)神幸経路	神社から磐崎中学校（湯長谷館跡）、桜ヶ丘団地を巡り、白鳥町上ノ原から岡を下りお旅所小泉家へ。坂を上って神社へ還幸。	
(7)祭りの内容	潮水の扱い／潮汲役の人が決まった場所ということはなく潮水を汲んできた。 実施内容／神事のみ。発輿時、汲んできた潮水で神輿を浄めた。古い潮汲桶がある。	
(8)祭りの状況	神事のみ。平成23年（2011）の東日本大震災前までは毎年神輿を出していたが、震災以降行っていない。現在は休止中。	
(9)芸能等	—	
(10)関連資料	—	

参考文献・資料	山名隆弘監修『いわきのお宮と祭り』『いわきのお宮と祭り』刊行会（2009）
---------	---------------------------------------

67. いわき市 熊野神社 四家久央

(1)神社の概要	<p>名 称／熊野神社 所在地／いわき市常磐藤原町藤代172 由 緒／縁起によれば、延暦2年（783）、佐藤権守藤原吉次が紀州熊野三山の御分霊を勧請、以降佐藤家が代々神職を勤める。往時は社殿のほか、供僧6院、修験者や流鏑馬の坊等を備えていた。天文年間（1532～55）に火災に遭い旧記社殿等焼失し衰微するも、元和2年（1616）、磐城平藩鳥居家によって再建。湯長谷藩主内藤家からも神田等の寄進を受ける。明治になって熊野神社と改称、指定村社に列せられる。祭神は速玉男之命、伊邪那美命、事解之男神。</p>
(2)祭りの名称	例大祭、神輿渡御
(3)祭りの由来	—
(4)祭 日	毎年4月第2日曜日（もとは4月8日）、ただし、大祭（神輿渡御）は5年に1度。
(5)伝承団体	熊野神社宮司、熊野神社神輿渡御祭典委員会（敬神会）。
(6)神幸経路	<p>常磐藤原町内を巡幸。 神社→①一本木、高橋電機前→②蕨平、ハワイアンズ→③川上、北郷家→④藤波神社→⑤後山、佐藤商事→⑥大光明境内広場→⑦常磐ポーリング→⑧下組の八坂神社→⑨大石、白山神社→還幸</p>
(7)祭りの内容	<p>潮水の扱い／潮汲役が小名浜に潮水を汲みにいく。 実施内容／大祭当日、神輿渡御に際し、神輿に添えて潮水の入ったプラスチック容器がトラックに載せられる。先代宮司の話では、昔、下川まで神輿渡御していた。決まった旧家（家名は不詳）でサカムカエしていたという。浜下りしなくなってもしばらくは、潮水を汲むときにその旧家に寄ったという。神幸の途中、お旅所（藤波神社や白山神社等、必ずしもどこで執り行うかは決まっていない）で、潮垢離の祝詞を上げ、玉串を汲んできた潮水に浸し、振り掛けるようにして、神輿を浄める。なお、神輿が出ない年は、潮水は汲まない。 以下、令和7年（2025）4月13日の実施内容を記す。 8:30 拝殿から神輿を社前に引き出し、神輿の準備をする。 8:40 例祭神事執行。 9:00 神事後潮水の容器を神輿に添え、花火を合図に発輿。鳥居前でトラックに載せ、太鼓車、神輿車、乗用車2台（宮司、猿田彦、祭典役員等）の計4台で出発。 10:10 藤波神社前（常磐藤原町小炭焼）で潮垢離神事執行。町内を巡幸。 12:00頃 還幸（この間、神社では大道芸や餅撒き等の余興あり）。</p>
(8)祭りの状況	5年に1度の斎行。令和2年（2020）は新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の流行のため中止。令和7年（2025）、10年ぶりに町内への神輿渡御を斎行
(9)芸能等	—
(10)関連資料	<p>「福島県磐城国石城郡磐寄村大字藤原字藤代鎮座 村社熊野神社之景」（抜粋） 祭神 速玉之男命 伊邪那美命 事解之男命 当社ハ延暦二年佐藤権守藤原吉次ノ勧請スル所也 （中略） 毎年卯月初八日下川磯ニ於テ潮垢離ヲ為ス神幸ニ供奉スルモ騎馬廿騎歩者一百五十人装束ノ美人目ヲ眩ス後チ故有リテ潮垢離ノ神事廃セリ 渡邊市太郎『大日本名蹟図誌 第拾弍編 磐城岩代之部 第五巻』明治39年（1906）</p>
参考文献・資料	山名隆弘監修『いわきのお宮と祭り』『いわきのお宮と祭り』刊行会（2009）

68. いわき市 八坂神社 四家久央

(1)神社の概要	<p>名 称／八坂神社（熊野神社境内社） 所在地／いわき市常磐藤原町藤代172 由 緒／勧請年等不詳。祭神は素戔鳴尊。</p>
(2)祭りの名称	例祭

(3)祭りの由来	—
(4)祭 日	毎年7月第4日曜日
(5)伝承団体	熊野神社（常磐藤原町／IV-67）宮司、常磐藤原町内の3集落（一本木、寺方、大石）。
(6)神幸経路	白山神社（常磐藤原町大石）にてお旅所神事
(7)祭りの内容	<p>潮水の扱い／潮汲役があらかじめプラスチック容器に汲んでおき、拝殿内祭壇に供物と共に供えられる。</p> <p>実施内容／令和5年（2023）7月23日の実施内容を以下に記す。</p> <p>10:00 例大祭神事。約20分で終了。神職が拝殿内に置かれた神輿に神霊を移すと、潮水の入ったプラスチック容器に玉串を浸し、数度神輿に振りかけ清める。神幸の祝詞を奏上し、奉斎者一同（社頭掲載の資料で11人）にお神酒の拝戴。拝殿から神輿を引き出し紅白幕とサカキの枝で飾られたトラックに載せる。</p> <p>10:30過ぎ 発輿。軽トラに載せられた太鼓を先頭に、神輿を載せたトラック、そのあとに神職等に乗せた車で神社を出発、村回りをする（一本木集落に隣接するスパリゾートハワイアンズや、字大石の白山神社などで神事を行う）。かつて（具体的な年代は不明）は潮水を泉の下川から汲んだという。汲む前後で立ち寄る家があり、酒肴のもてなしがあったという。</p> <p>なお、宮司は祭礼当日、兼務社の祭礼と重なったため、田人町黒田の熊野神社（御齋所山／III-29）の神官が奉斎した。以前の宮司の話では「当日、神輿に付いて潮水を持って歩く。白山神社で潮垢離神事、祝詞奏上し、神輿に潮水を掛けて浄める」ということであったが、今回の調査では八坂神社拝殿内で潮水を神輿に振り掛け、潮水は拝殿内にそのまま供えられていた。</p>
(8)祭りの状況	令和2・3年（2020・21）は中止、令和4年（2022）から神輿渡御再開。
(9)芸能等	—
(10)関連資料	—
参考文献・資料	—

69. いわき市 鹿島神社 渡邊 彩

(1)神社の概要	<p>名 称／鹿島神社</p> <p>所在地／いわき市渡辺町洞字上ミ60</p> <p>由 緒／勧請年は不詳だが、征夷大將軍坂上田村麻呂が常陸国鹿島神宮の分霊を菊田郡泉村八木屋小迫子関に勧請したという。元禄4年（1691）内藤政親が洞村字上ミへ遷祀した。現社地は文政11年（1828）に社掌大友守善より寄進されたもの。祭神は武甕槌大神。</p>
(2)祭りの名称	例大祭
(3)祭りの由来	—
(4)祭 日	毎年4月第2日曜日。平成15年（2003）頃に先代宮司が亡くなってから、4月14日だった祭日を現行の4月第2日曜日に変更した。昭和7年（1932）刊行の『郷土誌』に4月8日と記載がある。
(5)伝承団体	鹿島神社（泉町／IV-57）宮司、渡辺洞区（区長主催）。
(6)神幸経路	神社を出立し、常磐勿来線を通して洞、田部をまわり、稲荷神社で休憩と渡御祭を行い、水田の中の道を通して帰社する。
(7)祭りの内容	<p>潮水の扱い／新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の流行以前（2020年以前）は神前に潮水を供えていた。</p> <p>実施内容／鹿島神社での神事後、神輿渡御を行う。本神輿が神社から下りてきたところ（門前）で周辺在住の氏子がお神酒を用意して神輿を迎える。神輿の一行は歩きながらお神酒を飲む。稲荷神社での渡御祭では、汲んできた潮水を桶に入れて神輿の前に飾って神事を行う。終了後、氏子と役員にナマスが配られる。その後、鹿島神社へ帰社する。時期は不明だが、以前は神輿が泉町下川地区田宿へ下りていたという。</p> <p>浜下りをしなくなってからは、潮汲みは代々、下川字田宿の川澄家の男子が奉仕していた。川澄家の男子が亡くなり、潮水汲みの奉仕ができなくなったことから、以後は神社側が直接潮水を汲むことと取り決め、昭和59年（1984）5月5日に川澄家、下川区長、泉区长、鹿島神社、総代代表の間で覚書を交わした（IV-57参照）。神社側が直接潮水を汲みにいくようになってからは、例</p>

	大祭の早朝に総代と猿田彦の2人で汲みにいくようになった。東日本大震災後は小浜海岸に汲みにいくようになった。小浜海岸は漁港脇になだらかなスロープがあり、汲みやすい。
(8)祭りの状況	令和2年(2020)以前は神輿が出ていたため潮水も汲んだが、新型コロナウイルス感染症の影響により、令和2年以降、神輿渡御および潮汲みは中止となった(令和4年時点)。
(9)芸能等	—
(10)関連資料	—
参考文献・資料	渡辺小学校編『郷土誌 渡辺小学校(昭和7年福島県訓令第2号)』(1932) 佐々木長生「浜下りの神事の分布と考察」『東北民俗資料集』(4) 萬葉堂書店(1975) 福島県立博物館『福島県立博物館調査報告第28集 福島県における浜下りの研究』(1997) ほか

70. いわき市 諏訪神社		四家久央
(1)神社の概要	名 称／諏訪神社 所在地／いわき市渡辺町中釜戸滝ノ沢1 由 緒／天平元年(729)藤原宗広の創建という。また、天平2年(730)2月18日、信州諏訪大社から下川浜にご神体が着御という。祭神は建御名方命。	
(2)祭りの名称	御磯出式奴子行道大祭	
(3)祭りの由来	泉下川の古口某の網(塩桶とも伝わる)にご神体が入り、浜に上陸。泉村、初田(田部)で休憩して中釜戸の和武台に鎮座したとの伝説にちなむ。 また、諏訪、津、温泉の3神が下川の浜に上陸、良い場所であると大笑する。3神が各地に鎮座するにあたって年に1度、浜での再会を約したという伝説も残る。	
(4)祭 日	原則7年に1度の斎行。 5月7日／笠揃式 8日／行道 9日／笠拔式(もとは旧暦4月7・8・9日)	
(5)伝承団体	諏訪神社宮司、いわき市渡辺町中釜戸、上釜戸、松小屋	
(6)神幸経路	宮本の中釜戸から田部・初田、洞、泉・天神前、滝尻を経て下川の犬剣海岸(もとは神笑海岸)まで約9キロメートル。	
(7)祭りの内容	潮水の扱い／汲まない 実施内容／丸一日をかけて中釜戸から下川の海岸までご神体を載せた神輿が、大名行列を模した「奴子行道」を伴い巡幸、夜、浜で神官がご神体を潮水に浸し清めた。その後、所縁のある家に寄り還御。「笠揃い式」「笠抜き式」と前後あわせると3日間におよぶ大祭であった。 各集落での「まつり」の役割分担は以下のとおり。上釜戸：殿様付きと家老付きの奴子行道(行列：2組)。中釜戸：社元として御輿行道(行列：1組)。神官が乗馬で付く。松小屋：木舟明神の木舟に乗った神輿(行列：1組)。使者が出る。「殿様」「家老」は上釜戸の特定の家筋の両親の欠けていない子どもが務めた。 5月7日は笠揃式。使者が3集落やご神体を引き揚げたという下川の古口家などに挨拶に回る。潮垢離場の選定、各所に注連縄を張る。神社へ戻って殿様、家老へ報告のあと、笠揃いと称して各集落で行列を組み神社前大鳥居から参道へ行道をする。夜中、社前の仮屋に置かれた神輿に神官が神体を移す 8日は行道。朝8時頃神社前出発。3集落それぞれ役割の行列を組み神輿に供奉する。田部の初田(昼食)と泉の天神前(夕食)で仮宿式ののち、下川の海岸に午後7時頃到着。宮本の中釜戸のみが神輿を供奉して剣浜の潮取場に向かう。四方に青竹を立て、砂を盛った祭壇に神輿を安置し、午後8時頃(本来は丑三つ時という)、古口家の者ただ1人を案内として、神官が神輿からご神体を取り出し、抱きかかえ、一気に波際まで駆け寄り、ご神体を潮に浸して浄める。その後、再び3集落で行列を組み、古口家の仮宮に行宮し、祭典を執行してかがり火のなか酒宴となった。奴や長持の振り込みがあったという。午後10時頃迎えがきて帰路に就いた。もとは酔いながら真夜中に帰路につき明け方に村に着いたという。 9日は笠拔式。笠抜き神事(もとは再び振り込みをしたが)。神官は上釜戸、松小屋へ挨拶、神官と中釜戸の役員のみで神輿を神社に納め、大祭終了となった。	
(8)祭りの状況	昭和47年(1972)以降斎行されず(なお、3集落同時の催行は、昭和35年(1960)実施をもって、以後は行われていない『釜戸郷風土記』)。	

(9) 芸能等	神幸に大名行列を模した奴子行道（行列）が付いた。『福島県史』によれば（江戸時代中期）享保頃からのことかと推定。また、行道の途中、飛び入りで俗謡を囃す「長持」の振り込みが入った。
(10) 関連資料	「中釜戸の諏訪神社」（抜粋） 神笑の海岸で、古口某が塩取していた時、塩桶に入ってきたのが、諏訪の大明神で白竜であった。それを竹筒に入れて家へもってきて、神棚の下に祀った。その晩夢じらせで、俺は諏訪の大神だということで、おがんでもらったら、諏訪の大神で渚の音の聞えないところに祀ってくれということで中釜戸に祀られた。そして、七年に一度は大名行列で神笑にお下りになり、あがった神笑海岸で洗いごりして、救われた家を訪問して帰るといふ。 佐々木長生「浜下り神事の分布と考察」岩崎敏夫編『東北民俗資料集』（4）萬葉堂（1975）
参考文献・資料	「磐城釜戸の奴行道」『福島県史』23 民俗 1 福島県（1964） 山名隆弘監修『いわきのお宮と祭り』『いわきのお宮と祭り』刊行会（2009） 矢萩英雄「釜戸の奴子行列（道）」『釜戸郷風土記』（2011）

71. いわき市 諏訪神社 丹野香須美

(1) 神社の概要	名 称／諏訪神社 所在地／いわき市平下大越字根岸225 由 緒／鎌倉時代後期、長者平の延館城の邸内社として祀られ、後年、観音山に遷座したと伝えられる。祭神は、建御名方命。
(2) 祭りの名称	例祭
(3) 祭りの由来	—
(4) 祭 日	毎年9月第3月曜日「敬老の日」の前々日の土曜日と、前日の日曜日（旧暦7月27日に行われていた）。
(5) 伝承団体	白山神社（Ⅲ-37）宮司、下大越
(6) 神幸経路	—
(7) 祭りの内容	潮水の扱い／ — 実施内容／獅子舞の舞手が大越浦の海岸で潮垢離、神社に参籠・潔斎をする。三匹獅子舞が奉納される。
(8) 祭りの状況	『福島県における浜下りの研究』には記載されるが、本調査においては、当該社祭礼での「浜下り」は確認されていない。諏訪神社に相殿として八坂神社（Ⅳ-72）があり、こちらは「浜下り」がある。
(9) 芸能等	—
(10) 関連資料	—
参考文献・資料	山名隆弘監修『いわきのお宮と祭り』『いわきのお宮と祭り』刊行会（2009） 福島県立博物館『福島県立博物館調査報告第28集 福島県における浜下りの研究』（1997）

72. いわき市 八坂神社 丹野香須美

(1) 神社の概要	名 称／八坂神社（諏訪神社合祀社） 通称：テンノウサマ 所在地／いわき市平下大越字根岸225 由 緒／由緒に関する言い伝え等は確認できていない。祭神は素戔嗚尊。
(2) 祭りの名称	テンノウサマ、胡瓜祭
(3) 祭りの由来	—
(4) 祭 日	毎年旧暦6月15日だったものが、現在は7月の第3土曜日となっている。ただし、佐々木（1976）によれば、諏訪神社の祭礼で旧7月28日とある。
(5) 伝承団体	白山神社（Ⅲ-37）宮司、下大越
(6) 神幸経路	—
(7) 祭りの内容	潮水の扱い／総代表・区長・神主が禊をし、潮水を汲み、神前に供える。 実施内容／佐々木（1976）によれば、「祭りには神楽が集落を舞い歩く。神楽を舞う青年たちは、練習中からお祭りまで潮垢離をとる。海から竹筒に潮水を汲んできて、笛の音が高くなるように

	とこの水を笛にかけて吹いた」という。なお、当該地域の神楽はすでに絶えている。
(8)祭りの状況	新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の流行により中断したが、継続。
(9)芸能等	—
(10)関連資料	—
参考文献・資料	佐々木長生「浜下り神事の分布と考察」岩崎敏夫編『東北民俗資料集』（4）萬葉堂書店（1976） 山名隆弘監修『いわきのお宮と祭り』『いわきのお宮と祭り』刊行会（2009）

73. いわき市 新山神社 渡邊 彩

(1)神社の概要	名 称／新山神社 所在地／いわき市平藤間字中之内73 由 緒／貞和元年（1345）創建。安政5年（1858）に由緒記録等を焼失し、由緒詳細は不明。文政6年（1823）拝殿建設、大正13年（1924）改築。明治9年（1876）村社に列せられる。祭神は 大日靈靈貴命。
(2)祭りの名称	例大祭、ハマクダリ
(3)祭りの由来	—
(4)祭 日	毎年5月4日。約40年前（1980年代）に5月5日から5月4日に変わった。以前は4月8日だったといわれるが、いつ頃かは不明。
(5)伝承団体	新山神社宮司、区長、副区長、総代など8人（氏子63戸）。
(6)神幸経路	20～15年位前（平成12～20年頃か）までは神輿が海岸まで下りた。神社を出立後、県道小名浜四倉線を左折、字柴崎（かんぼの宿方向）、藤間沼を通過して藤間海岸へ出た。海岸で潮垢離をとり、オサカムカエ後、北谷地、県道小名浜四倉線を右折、ホンダプリモ（6番）、新林愛宕地蔵（5番）、松原消防詰所（4番）、宮司宅前（3番）、林（2番）、松原（1番）、中之内鳥居下（1番）の7か所のミキシヨ（神酒所か）でオサカムカエを行い、帰社した。 現在は、神輿は海岸まで行かず、地区内を渡御する。宮司らが沼田地区、松原橋（藤原川）を渡って藤間浜で潮垢離をとる。藤間構造改善センターに地域の人たちが一堂に会し、潮垢離神事とオサカムカエを行う。
(7)祭りの内容	潮水の扱い／潮水に浸したサカキでお祓いをする。 実施内容／神輿が海岸まで下りていた頃は、注連縄を張って砂盛りをした場所に神輿を安置し、宮司が海に向かって歩き、波打ち際で潮垢離をとり、オサカムカエを行った。オサカムカエでは潮水に浸したサカキとヌサ（祓い麻）で修祓のお祓い、祝詞奏上、氏子や企業の家内安全や身体堅固、交通安全を祈願した。海岸でのオサカムカエの際には、神社がカツオの生姜煮を用意するという習わしだった。子ども神輿もオサカムカエの場所（藤間海岸）で合流し、昼食を取り、その後解散する。本神輿は帰路に7か所のミキシヨ（神酒所の意か）を6番、5番、4番、3番、2番、1番（2か所）の順に回ってオサカムカエを行った。現在は宮司と猿田彦、総代（4人）が海岸へ行き、波打ち際で神職がヌサを付けたサカキを潮水に浸す。ミキシヨでのオサカムカエは行わず、改善センターで氏子・総代等が一堂に会してオサカムカエをする。
(8)祭りの状況	令和2～4年（2020～22）は新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の影響により神輿渡御は行わず神事のみ執り行った。子ども神輿は少子化のため、震災以前より出していない。
(9)芸能等	—
(10)関連資料	—
参考文献・資料	佐々木長生「浜下りの神事の分布と考察」『東北民俗資料集』（4）萬葉堂書店（1975） 山名隆弘監修『いわきのお宮と祭り』『いわきのお宮と祭り』刊行会（2009）

74. いわき市 天照皇大神社 渡邊 彩

(1)神社の概要	名 称／天照皇大神社 通称：ダイジングウサマ 所在地／いわき市平原高野字高原62 由 緒／延元2年（1294）西小川右近尉陸冬が伊勢神宮の神霊を勧請した。内藤義孝により貞享4
----------	---

	年(1687)社殿の修復、元禄17年(1704)に建替えが行われ、享保13年(1728)内藤政樹、安永4年(1775)代官蔭山外記により屋根替えが行われた。天照皇大神宮・伊勢神社と称していたが、明治15年(1882)現社号に改号した。祭神は大日靈貴尊。
(2)祭りの名称	例大祭
(3)祭りの由来	—
(4)祭 日	毎年5月3日。昭和30年代頃までは旧暦4月8日、平成21年(2009)頃は5月3日に行われていた。
(5)伝承団体	立錫鹿島神社 (IV-80) 宮司、原高野地区の氏子。
(6)神幸経路	佐々木長生氏の調査によると、神輿は旧国道を通り、大森、細谷、小林、仁井田、四倉へと下りた。神輿が四倉に着くと、山丸家にて休み、サカムカエをした。山丸家は昔、殿様へ出入りした家で、畳の上に神輿を置き、神宮がお祓いをした。諏訪神社 (III-41) に到着後、境内で休み、諏訪神社を先頭にほかの神輿とともに四倉町内を渡御し、四倉海岸に下りた。復路では途中の御殿山で休み、御殿地域の人たちがニガシ(煮しめ)やお神酒を持ち寄ってサカムカエをした。
(7)祭りの内容	潮水の扱い/サカキを潮水に浸して神輿にふりかけた。 実施内容/佐々木長生氏の調査によると、四倉海岸では注連縄の張られた祭場に神輿を安置し、地区の有志がどんぶりに潮水を汲んできて、それをサカキに浸して神輿にふりかけた。船役場関係の人たちが、四倉にあがったいきの良い魚を大神宮に供えた。大神宮は、四倉に行っても大事にされ参拝者も多かったという。 緑川健氏の調査によると、四倉町の諏訪神社所蔵の雑事録「神輿順序 経費収支 駅通貯金(基本金) 奉供当番」から、明治20年(1887)には他地区の神社とともに四倉諏訪神社境内に集結して合同で四倉町内を渡御し、海岸へ下りていたことが分かる。この合同神輿渡御には昭和35年(1960)まで参加していた。
(8)祭りの状況	—
(9)芸能等	—
(10)関連資料	—
参考文献・資料	佐々木長生「浜下りの神事の分布と考察」『東北民俗資料集』(4) 萬葉堂書店(1975) 細井雄次郎「祭りの変遷とその意味 —福島県いわき市四倉町諏訪神社例大祭を巡って—」『長野県民俗の会会報』第20号(1997) 緑川健「四倉の合同例大祭 ～昭和30年代の神輿の浜下り～」『地域学講座「四倉学」平成29年度』いわき市立四倉公民館(2018) ほか

75. いわき市 諏訪神社		渡邊 彩
(1)神社の概要	名 称/諏訪神社 所在地/いわき市平沼ノ内諏訪原403 由 緒/火災に遭い由緒は明らかではない。「海上安全、大漁満足」の守護神として崇敬されている。祭神は武御名方命。	
(2)祭りの名称	例大祭	
(3)祭りの由来	諏訪神社と弁財天(蜜蔵院賢沼寺)が合同で行う祭りで、もともとは別の日に行っていたが、昭和27～28年(1952～53)頃から一緒に行うようになった。	
(4)祭 日	毎年5月3日宵祭り、5月4日本祭り。時期は不明だが、以前は旧暦4月8日だった。 『磐城誌料 歳時民俗記』によると、江戸時代後期の弁財天の祭日は旧暦3月15日だった。	
(5)伝承団体	大國魂神社 (II-11) 宮司、諏訪神社氏子総代、蜜蔵院賢沼寺。	
(6)神幸経路	午前中、町内を本神輿と子ども神輿が渡御し、沼ノ内漁港築港(漁業組合前)がお旅所となる。神輿は蜜蔵院賢沼寺(沼ノ内弁財天。いわき市平沼ノ内代ノ下104)へ渡御する。	
(7)祭りの内容	潮水の扱い/潮水を汲んで供えることは行わない 実施内容/宵祭りでは、青年会の会員が賢沼(弁天沼)に飛び込み、対岸まで泳いでサカキを採りにいった。翌日の本祭りでは、青年会の会員が花やサカキを付けた樽神輿を賢沼に浮かべて担いで泳ぎ、数人が対岸まで泳いでサカキの枝を折り採って口にくわえて樽神輿まで泳ぎ帰る。こ	

	の間、ほかの青年たちは樽神輿につかまって激しく揉みあい、海上安全などを祈願する。樽神輿まで泳ぎ帰ると、樽神輿に付いていたサカキも外して皆でサカキをくわえて岸に泳ぎ戻る。このサカキは家内安全や豊漁にご利益があるとされ、地区の住民は争ってサカキを手中におさめた。沼を泳いでサカキを採ってくることをサカキウケといった。
(8)祭りの状況	大ウナギの生息する環境として国の天然記念物に指定されている賢沼が東日本大震災の地震により液状化し、沼の周辺が崩れ、大きな被害を受けた。賢沼一帯が立ち入り禁止となったため、平成25年(2013)時点では、祭礼は行うが沼を泳いでサカキを採りに行ったり、沼を樽神輿で渡るとは実施されなくなった。
(9)芸能等	—
(10)関連資料	平成15年(2003)5月4日の祭礼を撮影した写真(いわき市暮らしの伝承郷撮影)
参考文献・資料	佐々木長生「浜下りの神事の分布と考察」『東北民俗資料集』(4) 萬葉堂書店(1975) 細井雄次郎「祭りの変遷とその意味 —福島県いわき市四倉町諏訪神社例大祭を巡って—」『長野県民俗の会会報』第20号(1997) 大須賀筠軒『磐城誌料歳時民俗記』(翻刻/夏井芳徳 2003) ほか

76. いわき市 諏訪神社		渡邊 彩
(1)神社の概要	<p>名称/諏訪神社 通称:ヤマッサマ、スワサマ、オブスナサマ</p> <p>所在地/いわき市平豊間字下ノ内100</p> <p>由 緒/大同2年(807)、坂上田村麿が征夷の戦勝を祈願して豊野山頂に諏訪大明神を勧請したという。永仁年間(鎌倉時代)に岩崎三郎隆久によって再興、神領が寄進された。永禄9年(1566)沼ノ内館主志賀右衛門尉によって修復され、神鏡が奉納された(銅製御正体。県指定重要文化財)。寛永元年(1624)現社地に遷座。寛文2年(1662)内藤忠興により社殿が再建された。明治維新前は17か村(豊間、江名、中之作、永崎、上神白、下神白、久保、上蔵持、下蔵持、大能、上矢田、下矢田、上山口、下山口、神谷作、沼ノ内、薄磯)の総鎮守として祀られていた。明治6年(1873)村社に列せられる。祭神は健御名方神・八坂刀賣神。</p>	
(2)祭りの名称	例大祭・お潮採り	
(3)祭りの由来	—	
(4)祭日	毎年5月4日。ゴールデンウィークが制定されるようになり、5月5日または4日に行われるようになったという。昭和56年(1981)には5月5日に行われていた。以前は旧暦4月8日だったというが、いつまでかは不明。	
(5)伝承団体	諏訪神社宮司、諏訪神社総代会。	
(6)神幸経路	<p>経路は総代会が考える。</p> <p>海中へ神輿が入っていた頃の経路/神社出立、県道豊間四倉線(バス通り・旧道)を合磯方面へ進み、兎渡路、合磯を経て二見ヶ浦でお潮採りを行う。お潮採り後、合磯、兎渡路、下ノ内、下町、原町、柳町と神幸し八幡神社(IV-77)で昼食をとり、八幡町、塩場と進み豊間海岸に下りて神輿を担いで海中に入る。その後、塩屋町から豊間漁港(宿)へ向かい休憩後、洞へ。馬頭観音前(薄磯地区との境付近)で休憩後に折り返して原町、下町を神幸し帰社。</p> <p>現在、神輿は海中に入らないが、渡御の経路は上記を踏襲している。</p>	
(7)祭りの内容	<p>潮水の扱い/神前に供える。</p> <p>実施内容/例大祭の朝、神主、総代長、区役員がお潮採りに向かい、神主が波打ち際でバケツに潮水を汲み、そこから柄杓で潮水をすくってコップに入れる。二見ヶ浦の堤防の上で待機していた神輿に神主が潮水を入れたコップを供え、担ぎ棒の先端に潮水をかけて祝詞を奏上する。お神酒、赤飯、ナマス、果物等の振る舞いがあり、担ぎ手や地区の人びとが立ったまま飲食する。このあと、神輿は豊間町内を回り、八幡神社で昼食後、豊間海岸の海に神輿を担いで入った。諏訪神社宮司によると、神輿が海中に入ったのは平成12年(2000)頃までという。</p> <p>祭礼では妙石稲荷神社(平豊間字寺前221)の神輿も出て、一緒に渡御する。昭和56年(1981)刊行の『平豊間の民俗』によると、稲荷神社は下町の諏訪川の川下でお潮採りを行うといい、現在も同様に行われている。</p> <p>宵祭りには船頭たちが集まり海上安全と大漁満足を祈願する。平成23年(2011)の東日本大震災以前は青年会会員が神輿を担いで渡御したが、担ぎ手の減少で交代なしで担ぐのが困難となり、</p>	

	<p>現在は車に載せて回り、宿付近になると車から下ろして宿まで担ぐ。帰社の際、諏訪神社の鳥居を神輿がくぐってしまうともうあとに戻れないため、鳥居の前で引き返して再び町内を回ることもあった。また、大國魂神社 (II-11) や中山様 (佐麻久嶺神社/IV-82) と祭礼日が同じため、渡御の途中でこれらの神輿と鉢合わせすることもあった。豊間の神輿の揉み方は荒く、飾り類は外してある。海中に浸かって濡れた神輿は拭いてから保管しなければならず、総代たちは神輿が海中に入るのを嫌がった。</p> <p>佐々木長生氏の調査によると、昭和47年(1972)頃は祭り前日に漁師たちが神社に籠り、3時頃に神官を先頭に海に飛び込んで身を清めた。八幡町、柳町、塩屋町、原町、下町の部落ごとに休み所があり、近所の人たちが筵を敷いて神輿を迎え、神官によるお祓いのあとにお神酒をいただく。これをオサカムカエといった。浜に着くとサカキに潮水を浸して神輿にふりかけ、これをオシオトリといった。オシオトリ後、漁師たちが神輿を海中に入れて泳いだ。</p>
(8)祭りの状況	<p>神輿自体には東日本大震災の津波の被害はなかったが、猿田彦の面と装束一式が津波によって流失した。平成24年(2012)または25年(2015)、当時の区長により神輿が新調されて祭りが復活した。令和2～4年(2020～22)は新型コロナウイルス感染症(COVID-19)の影響で神輿は出さず、お潮採りだけを行い、代表者のみで神事を行った。</p> <p>令和5年(2023)以降は神輿渡御も復活した。</p>
(9)芸能等	—
(10)関連資料	—
参考文献・資料	<p>佐々木長生「浜下りの神事の分布と考察」『東北民俗資料集』(4) 萬葉堂書店(1975)</p> <p>早稲田大学日本民俗学研究会『平豊間の民俗』(1981)</p> <p>民俗芸能学会福島調査団『福島地域の無形民俗文化財被災調査報告書2011～2013』(2014) ほか</p>

77. いわき市 八幡神社 渡邊 彩

(1)神社の概要	<p>名 称/八幡神社</p> <p>所在地/いわき市平豊間字八幡町72</p> <p>由 緒/文政2年(1819)神殿破損のため再建された。明治3年(1870)、別当宝蔵寺が火災に遭い、記録類が焼失したため由緒は不明。祭神は品陀別命。</p>
(2)祭りの名称	例大祭
(3)祭りの由来	—
(4)祭 日	毎年9月14・15日前後の日曜(9月第2土日)。時期は不明だが、以前は旧暦8月15日だった。
(5)伝承団体	諏訪神社(平豊間/IV-76) 宮司、八幡神社総代会神社総代会。
(6)神幸経路	—
(7)祭りの内容	<p>潮水の扱い/神輿に供える。</p> <p>実施内容/宵祭りに神輿を倉から本殿に移す。境内では三匹獅子舞が奉納され、獅子頭を神輿の前に供える。例大祭の朝、神主、総代長、総代が豊間海岸に行き、お潮採りを行う。神主が波打ち際でバケツに潮水を汲む。拝殿の神輿の前でバケツから潮水を柄杓ですくって徳利に移し、徳利からコップに注ぐ。それをサカキに付けて神輿の四方に供える。『神社誌』によると、宵祭りに青年団主催で獅子舞が奉納され、集落安全と海上安全を祈願した。本祭りでは神輿渡御が行われ、潮奉獻の神事が行われたという。昭和56年(1981)刊行の『平豊間の民俗』によると、神輿は3年に1度ぐらいしか担がず、担ぐ時には早朝お潮採りをして神輿の寄付者(四家氏)宅でサカムカエし、渡御をしたという。直会にはキュウリとウニの貝焼きのナマスが出た。現在、神輿渡御は行われていない。</p>
(8)祭りの状況	<p>平成23年(2011)の東日本大震災時も祭りが執行された。津波で鳥居に被害が出たが、再建された。神輿渡御がないため、新型コロナウイルス感染症(COVID-19)の影響を受けた令和2年(2020)以降も例大祭は執行されたが、獅子舞は行わず、獅子頭を神輿の前に供えた。令和4年(2022)の本祭りでは境内で獅子舞が奉納された。</p>
(9)芸能等	三匹獅子舞
(10)関連資料	—

参考文献・資料	佐々木長生「浜下りの神事の分布と考察」『東北民俗資料集』(4) 萬葉堂書店 (1975) いわき市神社総代会第三方面部『神社誌』(1979) 早稲田大学日本民俗学研究会『平豊間の民俗』(1981) ほか
---------	---

78. いわき市 二荒神社		齋藤りぼん
(1)神社の概要	名 称／二荒神社 通称：ニッコウサマ 所在地／いわき市平下山口字三島5 由 緒／大同2年(807)に下野国上都賀郡の二荒神社から勧請したと伝えられる。当時は日光権現と称されていたが、明治3年(1870)に二荒神社に改められた。祭神は事代主命。	
(2)祭りの名称	例大祭	
(3)祭りの由来	『福島県における浜下りの研究』には、漂着神伝承について、薄磯の胡麻磯に上陸し、薄磯に浜下りすると記載されている。	
(4)祭 日	毎年5月4日(旧暦5月7日)	
(5)伝承団体	八剣神社(III-38) 官司、二荒神社の氏子総代。	
(6)神幸経路	かつて(具体的な年代は不明)は二荒神社を出発し、高久海岸で潮垢離をとったあと、山口地区全域を巡行し、二荒神社に到着した。『いわきのお宮とお祭り』によると、当時上山口と下山口のそれぞれ1か所で安全祈願の祭事と地区民合同の直会を行っていたという。	
(7)祭りの内容	潮水の扱い／供えない。『いわきのお宮とお祭り』には、かつて(具体的な年代は不明)は神社から高久海岸に下り、潮垢離をとって地区内を渡御したことが記載されている。 実施内容／官司は八剣神社と兼務をしているため、神事は八剣神社と時間をずらして行っている。 かつて(具体的な年代は不明)は神輿の渡御をしていたが、令和5年(2023)現在は神事をを行い、神輿を神社内で飾るのみで、渡御はしていない。また、渡御をしていた当時は、子どもたちが神輿を担いでいた。	
(8)祭りの状況	令和5年現在は神事をを行い、神輿を神社内で飾るのみで、渡御はしていない。	
(9)芸能等	—	
(10)関連資料	—	
参考文献・資料	高久小学校編『郷土誌 高久小学校』昭和7年(1932) 福島県立博物館『福島県立博物館調査報告第28集 福島県における浜下りの研究』(1997) 山名隆弘監修『いわきのお宮と祭り』『いわきのお宮と祭り』刊行会(2009)	

79. いわき市 鹿島神社		渡邊 彩
(1)神社の概要	名 称／鹿島神社 所在地／いわき市平神谷作字神ノ前92 由 緒／大永5年(1525)に常陸の鹿島神社から分霊を勧請したという。明治12年(1879)、村社に列せられる。祭神は武甕槌命。	
(2)祭りの名称	例大祭、お潮採り	
(3)祭りの由来	—	
(4)祭 日	毎年5月4日。時期は不明だが、以前は旧暦4月8日だった。	
(5)伝承団体	諏訪神社(平豊間/IV-76) 官司、鹿島神社氏子。	
(6)神幸経路	—	
(7)祭りの内容	潮水の扱い／境内にお潮をまく。 実施内容／例大祭の朝、総代が沼ノ内の築港でお潮採りをし、一升瓶に潮水を汲んでくる。神社や宿での神事の際に、神官が神輿の担ぎ棒の4か所に潮水を振りかける。神輿の宮入りの時、「 SENDO一、SENDO一」といいながら社殿の周りを3周しながら総代が一升瓶に入っている潮水を境内にまく。沼ノ内の築港でお潮採りをする。 『石城郡誌』に「高久村大字神谷作字神ノ前にあり、武甕槌命を祀る。(中略)例祭四月八日にして古より豊間村大字沼之内字鈴宮へ御幸し、潮を奉じて還行するを例とせり」と記載されている。	

(8)祭りの状況	新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の影響で令和2～3年（2020～21）は中止。
(9)芸能等	—
(10)関連資料	—
参考文献・資料	佐々木長生「浜下りの神事の分布と考察」『東北民俗資料集』（4） 萬葉堂書店（1975） 石城郡役所『石城郡誌』昭和54年（1979） 山名隆弘監修『いわきのお宮と祭り』『いわきのお宮と祭り』刊行会（2009）

80. いわき市 立鉾鹿島神社 四家久央

(1)神社の概要	名 称／立鉾鹿島神社 所在地／いわき市平中神谷字立鉾33 由 緒／社伝によれば大同2年（807）以前の創祀。もとは「塩干山（立鉾山）」の山上に鎮座していたが、その後下山し、山の東北に再建するも天正元年（1573）に焼失。同5年（1577）、岩城親隆により現地に造営されたという。江戸時代までは正一位立鉾大明神とも称されていたが、明治になって立鉾鹿島神社と改称。祭神は武甕槌命。
(2)祭りの名称	例大祭、神輿渡御
(3)祭りの由来	—
(4)祭 日	毎年5月4日（もとは旧暦5月15日）
(5)伝承団体	立鉾鹿島神社宮司、氏子（中神谷の一部、上神谷、上片寄、下片寄）。
(6)神幸経路	神社から一度上神谷に入り、上神谷集会所、八坂神社へ。再び中神谷へ入り愛宕地蔵、大山祇神社、大年神社を経て夏井川の河原（中神谷字 調練場）に出、「渡祭場」でお旅所神事。その後は字宿畑、字後原、字立田帯と各地を巡幸し神事を齋行し神社へ還幸した。
(7)祭りの内容	潮水の扱い／扱まない。 実施内容／例祭神事のあと、町内を神輿渡御する。夏井川河原の「渡祭場」では神事前に青年たちが神輿を担いでそのまま川に入ることがあった。時には川に入る頃、対岸から同日に齋行される大國魂神社（Ⅱ-11）の神輿渡御の太鼓が聞こえるなどすると、担ぎ手もいっそう気合いが入り、向う岸まで渡った年もあった。令和5年（2023）は車載で神輿を出し巡幸、河原に設けた渡祭場に神輿を据えて神事をした。ただ、令和元年（2019）10月の水害に伴う河川改修工事が進むなか、川には入らなかった。
(8)祭りの状況	令和2・3・4年（2020・21・22）と神輿は出さず、渡祭場に青竹4本を立て注連縄を張り、神主、総代、役員と上神谷区長等で神事のみをした。
(9)芸能等	浦安の舞が、神社での祭礼時および、お旅所4か所（上神谷集会所、八坂神社、大山祇神社、愛宕地蔵）で行われる。
(10)関連資料	—
参考文献・資料	山名隆弘監修『いわきのお宮と祭り』『いわきのお宮と祭り』刊行会（2009）

81. いわき市 出羽神社 四家久央

(1)神社の概要	名 称／出羽神社 所在地／いわき市平中神谷字石脇197 由 緒／社伝によれば、出羽国熱海城主佐藤信濃守信貫が承元元年（1207）に神谷郷座主館に來住。出羽国一之宮の鳥海大物忌神、出羽三山の神々を奉齋、徳治年間（1306頃）には片寄五郎義忠により社殿が造営されたという、享保3年（1718）、正一位羽黒大権現の神号を受ける。明治になり出羽神社と改称。大正12年（1923）、郷社に加列。祭神は大物忌神。
(2)祭りの名称	例大祭
(3)祭りの由来	—
(4)祭 日	毎年9月第3日曜日（もとは9月15日祝、元来は旧暦9月7日）
(5)伝承団体	出羽神社宮司、氏子（中神谷の一部）。

(6)神幸経路	中神谷地区内を巡幸、令和元年（2019）まで夏井川の河原（平中神谷字 調練場「権現塚」と称す）でお旅所神事をしていた
(7)祭りの内容	潮水の扱い／汲まない。 実施内容／浜に出ていたのは先代宮司のとき。その後、隣村への神輿の引き渡し等に支障が出て村内を巡行し、夏井川に入り潮垢離。最近では護岸工事により神輿が川に入ることはなくなった。ただ慣わしとして川に入る人もいる。権現塚と呼ばれた村境のお旅所は、バイパス道路の敷地に掛かり、川上に移動するなどたびたび位置が変わった。かつて（具体的な年代は不明）は新築の家があればそこでもサカムカエをしたが、今は総代の所ぐらいでしかやらなくなった。例祭神事のあと、神輿および子ども神輿が町内を巡幸。
(8)祭りの状況	令和元年（2019）10月に大水害があり、翌2年（2020）以降行ってなかった。令和5年（2023）からは町内を渡御。ただ、堤防まで神輿を出したが、護岸工事により河原へ立ち入ることはしなくなった。
(9)芸能等	浦安舞を神楽殿やお旅所（愛宕地蔵、大年神社、天山祇神社）の4か所で奉納。
(10)関連資料	「神輿渡御ノ概略」（年代不明）（抜粋） 神輿渡御ノ儀ハ往古ヨリ村内ヲ巡幸シ、六十枚村権現原ニ御幸シ六十枚村ヨリ神饌物供へ村内安全ヲ祈願シ、ソレヨリ沢帯木浦鎌ノ台ニ至リ、全ジク神饌ヲ供へ海上安全ヲ祈祷シ、漁師等神輿ヲ海へ神幸セシムルヲ以テ大漁ノ徴トナシ、帰途赤沼及下神谷両村ノ御迎アリ、以上ノ村民総出ニテ神輿ヲ担ギ、特ニ花園神社社司ハ衣冠ヲ着テ祈祷ヲナシ、本村ノ堺迄見送ヲナス等祭儀頗ル壯嚴ニシテ盛大ナリ また、同書には、その筆者（志賀康二氏）の記憶として、「昭和二十二、三年の頃までは、沢帯海岸あたりまで遠征した記憶がありますが、現在は中神谷村内だけの渡御となっています。現在も、下神谷・六十枚・赤沼の区長さんを祭典にご招待しています」とある。 『新訂 出羽神社誌』編集委員会『新訂 出羽神社誌』（1993）
参考文献・資料	山名隆弘監修『いわきのお宮と祭り』『いわきのお宮と祭り』刊行会（2009）

82. いわき市 佐麻久嶺神社		渡邊 彩
(1)神社の概要	名 称／佐麻久嶺神社 通称：ゴウシャまたはナカヤマサマ 所在地／いわき市平中山字宮下81 由 緒／延喜式内社。応仁の乱の頃、神官中山彦次郎が戦争にまきこまれ祭事を廃し、旧記や神領を悉く失ったため、その娘が一時矢田村に移り神を勧請して社を建てたが、その後旧地に遷した。天和2年（1682）、雷火により焼失し、内藤義泰が翌年に再建した。祭神は五十猛命。	
(2)祭りの名称	例大祭、ハマクダリ	
(3)祭りの由来	祭神が船で薄磯海岸の中屋磯に上陸し、川を上って現在の地へ祀られたという伝承から、薄磯の中屋磯で潮を汲む。薄磯地区では佐麻久嶺神社のことを「ナカヤマサマ」と呼んで信仰していた。	
(4)祭 日	毎年5月4日宵祭り、5月5日本祭り、5月6日後祭り（片付け、末社熊野神社の祭り）。戦前は旧暦4月7日だったが、戦後に5月5日になった。浜下りは経費がかかるため、2～15年に1度のこともあったが、7年に1度になった。平成16年（2004）以降、浜下りは行われていない。	
(5)伝承団体	佐麻久嶺神社宮司、佐麻久嶺神社総代会。	
(6)神幸経路	神社出立後、キノスケ（中山区内）、十文字（柳町・諏訪下）、藁谷・小山、小泉、吉野谷、赤・桜町を神幸して帰社する。平成16年（2004）の浜下り経路は、神社出立後、地区内を回ってから県道下高久谷川瀬線を通って高久地区に向かい、八剣神社（III-38）でサカムカエを行う。小名浜四倉線を沼ノ内地区方面へ進み、沼之内諏訪原地区からバス道路（旧道）に入る。弁天様前停留所付近で薄磯地区の青年に神輿を引継ぎ、公民館でサカムカエを行う。その後、薄磯海岸中屋磯へ向かった。	
(7)祭りの内容	潮水の扱い／汲んで供える。 実施内容／現在は、潮垢離の神事と地区内の神輿渡御が行われている。平成23年（2011）の東日本大震災の数年前まで、例大祭当日の早朝に薄磯区の役員が中屋磯で迎えてくれ、潮水を汲んでくれた。その後、浜で刺身やお神酒などでもてなしを受けた。薄磯区から自出度・四海波などの謡が歌われ、神社側からも返礼として謡を歌ったが、このもてなしは薄磯区長交替を契機に行われなくなった。以後は神社が独自に潮垢離をとるようになり、例大祭当日の早朝に宮司や総代長、	

	<p>区長など総勢5～6人で中屋磯へ向かい、磯の岩の間から潮水を汲んでくる。社殿での神事後、車に神輿を載せて地区内を渡御し、7か所でサカムカエを行い、1年間の安全を祈願する。サカムカエの場所付近では神輿を車から下ろして担ぐ。サカムカエでは坪の人たちが神輿を迎え、神事と直会のあとにお祝いの話を語る。</p> <p>昭和10年代には、複数の神社の神輿が潮垢離をとったあとに薄磯海岸に集まって合同でサカムカエの祝いを行ったという記録があるが、宮司によるとこの行事は見たことがないという。浜下りの際は、沼之内弁財天付近で神輿を薄磯の青年たちに引き渡し、彼らが神輿を担いで薄磯地区内を渡御し海に入った。帰路、神輿を引き継ぐ際には、神輿を渡す渡さないといったやりとりが行われた。祭りが近くなると、神官は水をかぶるなどの禊をして四つ足の動物を食べない。昭和40年代には社殿にお籠りをしていた。いつ頃かは不明だが、かつては家族と別れてオベッカをしていたという。</p>
(8)祭りの状況	<p>海岸までの神輿渡御は昭和25年(1950)頃までは行われていたようだが、現在は地区内の渡御のみとなっている。最後に浜下りが行われたのは平成16年(2004)で、鎮座1300年記念に合わせて約50年ぶりに行われた。令和4年(2022)は新型コロナウイルス感染症(COVID-19)拡大のため、各団体代表者のみで神事を行い、その後、車に神輿を載せて渡御した。</p>
(9)芸能等	<p>巫女舞(浦安の舞か)。現在は子どもが少ないため、行っていない。</p>
(10)関連資料	<p>昭和22年(1889)の神輿渡御写真が残っており、宮司は馬に乗っている。平成16年に行われた浜下り・神輿渡御の写真もある。</p>
参考文献・資料	<p>磐城民俗研究会「磐城豊間村薄磯の漁村民俗資料」『旅と伝説』第12年第11号(1939) 佐々木長生「浜下りの神事の分布と考察」『東北民俗資料集』(4) 萬葉堂書店(1975) 山名隆弘監修『いわきのお宮と祭り』『いわきのお宮と祭り』刊行会(2009)</p>

83. いわき市 神明神社 齋藤りぼん

(1)神社の概要	<p>名称/神明神社 所在地/いわき市平上高久字竹後51 由緒/具体的な創建年代は不明だが、鎌倉時代、室町時代頃だと伝えられる。祭神は天照皇大神、伊弉那岐命、伊弉那美命。</p>
(2)祭りの名称	<p>例大祭</p>
(3)祭りの由来	<p>なし</p>
(4)祭日	<p>毎年4月第2日曜日(旧暦3月15日)</p>
(5)伝承団体	<p>二荒神社(平上高久/IV-84)宮司、神明神社の氏子総代。</p>
(6)神幸経路	<p>かつて(具体的な年代は不明)は、神明神社を出発し、上高久地区内を回り、薄磯海岸に渡御していた。</p>
(7)祭りの内容	<p>潮水の扱い/供えない。 実施内容/薄磯海岸に神輿を置いて祈祷するが、神輿は海中に入らない。</p>
(8)祭りの状況	<p>近年は祭りの規模が縮小しており、神輿の渡御は行わず、神事のみ行っている。</p>
(9)芸能等	<p>—</p>
(10)関連資料	<p>—</p>
参考文献・資料	<p>山名隆弘監修『いわきのお宮と祭り』『いわきのお宮と祭り』刊行会(2009)</p>

84. いわき市 二荒神社 齋藤りぼん

(1)神社の概要	<p>名称/二荒神社 所在地/いわき市平上高久字植田郷159 由緒/具体的な創建年代は不明だが、宇都宮大明神を勧請したと伝えられる。祭神は田心姫命、大己貴命、事代主命。</p>
(2)祭りの名称	<p>例大祭</p>

(3)祭りの由来	『福島県における浜下りの研究』には、漂着神伝承について、薄磯の胡麻磯に上陸し、薄磯に浜下りすると記載されている。
(4)祭 日	毎年5月4日(旧暦4月7日)。『いわきのお宮とお祭り』によると、例大祭はもともと4月7日に行われていたが、戦後5月4日に改められたと記載されている。また、『神社誌』によると、潮垢離は5年に1度行われたという。
(5)伝承団体	二荒神社宮司、二荒神社の氏子総代。
(6)神幸経路	かつて(具体的な年代は不明)は、二荒神社を出発し、上高久地区内を回り、薄磯海岸に渡御していた。
(7)祭りの内容	潮水の扱い／供えていた。薄磯海岸で神事を行う際に潮水を汲み、神前に供えていた。 実施内容／例大祭当日は、8時に二荒神社で発輿祭(神事)が行われる。その後、高台の雷神と大山祇両宮の例大祭が行われ、正午から神輿の渡御をした。昭和後期から平成初期頃までは、例大祭の日に「ばくだん」(お菓子)を売る人が来ていた。「ばくだん」の材料は小豆や大豆など、各自で持ち寄った。また、昭和中期頃は、着物を着て祭りに行っていたという。
(8)祭りの状況	近年は祭りの規模が縮小しており、神事のみ行っている。新型コロナウイルス感染症(COVID-19)が流行した令和2年(2020)以降は、神輿の渡御をしていない。
(9)芸能等	—
(10)関連資料	—
参考文献・資料	「石城の神社と佛閣(二)」『常磐毎日新聞』昭和11年(1936)12月23日付 いわき市神社総代会第一方部会編『神社誌』昭和55年(1980) 『福島県立博物館調査報告第28集 福島県における浜下りの研究』福島県立博物館(1997) ほか

85. いわき市 十市神社 渡邊 彩

(1)神社の概要	名 称／十市神社 通称：トイチダイミョウジン 所在地／いわき市四倉町玉山字宮ノ脇80 由 緒／称光天皇(1412～27年)の頃、大和国十市郡から勧請。元禄6年(1693)社殿改築。天保4年(1833)安藤侯社殿を再建し除地1反1畝4歩を寄進。社伝に、内藤侯の息女が病に罹り夢に宮城の山林に美丈夫に遭い、祠を建て吾を祀れば汝の病を癒すべしと言われ、山林を搜索して銅像を発見し祠堂を造営したとある。明治6年村社に列せられる。祭神は伊邪那岐命。
(2)祭りの名称	例大祭、ヨーカサマ
(3)祭りの由来	細井雄次郎氏の調査によると、江戸時代には神輿が村内を回り、四倉の蟹洗磯からお潮を汲んできて神輿に供えていた。天明の飢饉をきっかけに神輿渡御は中断したが、潮水を汲むことは続けられたという。佐々木長生氏の調査によると、この祭礼は家族皆が浜に下るものとされ、特に、嫁に来た初めての年は必ず浜に下るものとされたという。体の清めになるといった。
(4)祭 日	毎年5月3日。昭和30年代頃までは旧暦4月8日、平成21年(2009)頃は5月4日に行われていた。
(5)伝承団体	諏訪神社(四倉町／Ⅲ-41)宮司、十市神社氏子。
(6)神幸経路	佐々木長生氏の調査記録によると、神輿は十市神社を出立して玉山温泉神社、表玉山を経て途中、白岩の鹿島神社(Ⅳ-86)と合流し、四倉町の諏訪神社へ向かった。諏訪神社到着後、境内にて休み、集まったほかの神輿とともに四倉町内を渡御し、四倉海岸に下りた。
(7)祭りの内容	潮水の扱い／潮水を二升枀に汲んでサカキを浸し、神輿にふりかけた。 実施内容／明治12年(1879)に福島県令に提出した「渡御式再興願」により、翌13年から四倉海岸までの神輿渡御が行われるようになった。緑川健氏の調査によると、四倉町の諏訪神社所蔵の雑事録「神輿順序 経費収支 駅通貯金(基本金) 奉供当番」から、明治20年(1887)には他地区の神社とともに四倉諏訪神社境内に集結して合同で四倉町内を渡御し、四倉海岸へ下りていたことが分かる。四倉の浜では神輿を担いで首あたりまで海中に入ったあと、注連が張られた祭場に海に向けて神輿を安置し、漁師たちが二升枀に潮水を汲んでサカキに浸して神輿にふりかけた。四倉での合同神輿渡御には昭和43年(1968)まで参加していたが、以降は四倉まで下りず、玉山地区内を神幸するようになった。
(8)祭りの状況	平成21年頃は担ぎ手不足により車(台車)に神輿を載せて地区内を渡御した。令和2年(2020)か

	ら新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の影響で、神事のみ執り行われてきた。
(9) 芸能等	—
(10) 関連資料	—
参考文献・資料	佐々木長生「浜下りの神事の分布と考察」『東北民俗資料集』(4) 萬葉堂書店 (1975) 細井雄次郎「祭りの変遷とその意味 —福島県いわき市四倉町諏訪神社例大祭を巡って—」『長野県民俗の会会報』第20号 (1997) 緑川健「四倉の合同例大祭 ～昭和30年代の神輿の浜下り～」『地域学講座「四倉学」平成29年度』いわき市立四倉公民館 (2018) ほか

86. いわき市 鹿島神社		渡邊 彩
(1) 神社の概要	名 称／鹿島神社 通称：カシマサマ 所在地／いわき市 ^{よつくらまちしらいわ} 白岩 ^{みやの} 宮ノ前46 由 緒／勧請年不詳。明治6年(1873)村社に列せられる。寛永6年(1629)内藤忠興侯、元禄11年(1698)内藤義孝による社中再興の棟札あり。祭神は武甕槌命。	
(2) 祭りの名称	例大祭	
(3) 祭りの由来	大須賀筠軒『磐城郡村誌』に、この神社のご神体が四倉町の金洗(蟹洗海岸)の亀の子石にあがったとの記載があるという。鹿島様は安産の神として信仰され、出産時にはお守りやお札を受けてきて、産後、4月8日には赤ん坊を背負ってお礼返しに四倉の浜まで参詣に行ったという。	
(4) 祭 日	毎年5月3日。昭和30年代頃までは旧暦4月8日、平成21年(2009)頃は5月3日に行われていた。	
(5) 伝承団体	諏訪神社(四倉町／III-41) 宮司、鹿島神社氏子。	
(6) 神幸経路	佐々木長生氏の調査によると、神社立後、途中で玉山の十市神社(IV-85)と合流し、四倉町の諏訪神社へ向かう。諏訪神社到着後、境内で休み、諏訪神社を先頭にほかの神輿とともに四倉町内を渡御した。諏訪神社の神輿は江之綱山に行くが、鹿島神社の神輿はカネアライ(蟹洗)に行って神事を行い、昼食をとる。昼食後、四倉海岸へ下りてほかの神々と合流し、神輿を担いで海中に入る。復路も往路と同じ道順で、五反田で十市神社と別れ、神社に戻る。	
(7) 祭りの内容	潮水の扱い／蟹洗の亀の子石の上に神輿を安置し、サカキを潮水に浸して神輿にふりかけた。 実施内容／亀の子石での神事後、その場で神輿を前にして昼食をとる。弁当は毎年米を集めて赤飯を炊いて持っていった。昼食後、四倉海岸へ向かい、ほかの神々と一緒に拝む。その後、神輿を担いで海中に入れて清める。海から上がったなら、注連縄の張られた祭場に神輿を海のほうに向けて安置し、宮司が祝詞をあげる。漁師たちの参拝も多く、お神酒や魚などが供えられた。緑川健氏の調査によると、四倉町の諏訪神社所蔵の雑事録「神輿順序 経費収支 駅通貯金(基本金)奉供当番」から、明治20年(1887)には他地区の神社とともに諏訪神社境内に集結して合同で四倉町内を渡御し、海岸へ下りていたことが分かる。この合同神輿渡御には昭和43年(1968)まで参加していたが、以降は四倉まで下りず、白岩地区内を神幸するようになった。神輿が四倉海岸まで下りない時は、代表者が潮垢離をとってきた。また、神輿に渡辺氏宅の氏神(熊野)を一緒にして四倉海岸まで下りた。神社に戻ると「センドーセンドーセンドー」と3回言い、氏子の1人が幣束を持って社殿の周りを駆け足で33回まわる。ご神体は神輿に入れたままで「宮まぶり」といって神社で夜を明かし、翌日、神宮 ^{カミヤ} がご神体を本殿に移した。	
(8) 祭りの状況	令和2年(2020)から、新型コロナウイルス感染症(COVID-19)の影響で、神事のみ執り行われるようになったが、感染症拡大以前は車に神輿を載せ、一部担いで白岩地区内を渡御していた。	
(9) 芸能等	—	
(10) 関連資料	—	
参考文献・資料	大須賀筠軒『磐城郡村誌』明治10～11年(1877-78) 佐々木長生「浜下りの神事の分布と考察」『東北民俗資料集』(4) 萬葉堂書店 (1975) 緑川健「四倉の合同例大祭 ～昭和30年代の神輿の浜下り～」『地域学講座「四倉学」平成29年度』いわき市立四倉公民館 (2018) ほか	

87. いわき市 八幡神社		渡邊 彩
(1)神社の概要	<p>名 称／八幡神社 所在地／いわき市四倉町名木葱作58 由 緒／岩城三郎隆行公が再建し神領を寄進した。古くは名木・長友・戸田三村の鎮守であったが享保年間以後は名木村のみの鎮守となった。祭神は蒼田別命</p>	
(2)祭りの名称	例大祭	
(3)祭りの由来	—	
(4)祭 日	毎年5月3日。昭和30年代頃までは旧暦4月8日	
(5)伝承団体	司祭者／諏訪神社（四倉町／Ⅲ-41）宮司、八幡神社氏子。	
(6)神幸経路	佐々木長生氏の調査によると、神社を出立し、根岸、上名木、下名木へと下り、下名木の荒神下（村境）で休んだあと、仁井田海岸へ向かった。復路は往路と異なり、特に決まった道順はない。	
(7)祭りの内容	<p>潮水の扱い／サカキを潮水に浸し、神輿に3回ふりかけた。 実施内容／佐々木長生氏の調査では、神輿にお供をして子どもたちの天神様も下った。神輿が地域内を回る時、各戸では門口にお神酒を用意しておき、神官がその酒を神輿に振りかけて清める。神輿が来ると、その年に来た嫁たちは神輿と一緒に浜まで下りた。下名木の荒神下では神官の祈祷があり、ちょっとした酒盛りが行われた。仁井田浜には、上仁井田の諏訪神社（Ⅳ-89）、狐塚の稲荷神社（Ⅳ-88）、八幡神社の順で下りた。八幡神社には社守りの制度があり、社守りがサカキを口にくわえ、注連のついた大櫛を担いで渡御する。お潮採りの時は、その大櫛から小枝を折って3回神輿に潮水を振りかける。その後、神輿を海水に担ぎ入れて清めた。細井雄次郎氏の調査によれば、明治時代には八幡神社の神輿は仁井田浜に下りてお潮採りの神事を行っていたという。昭和30年（1955）に四倉町、大浦村、大野村が合併し四倉町となったことを記念して、3町村の神社神輿が四倉町の諏訪神社へ集結し、合同で四倉海岸へ下りるようになったが、お潮採りは仁井田浜で行った。緑川健氏の調査によると、八幡神社はこの合同神輿渡御に昭和43年（1968）まで参加し、四倉町には平成4年（1992）頃まで来ていた。</p>	
(8)祭りの状況	平成30年（2018）当時、神輿は氏子などが担いで渡御を行っていた。令和2年（2020）から、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の拡大により、神事のみ執り行われてきた。	
(9)芸能等	—	
(10)関連資料	昭和10年代に撮影された仁井田浜でのお潮採りの写真（砂浜に安置した神輿にサカキが添えられ、神輿の前には獅子頭が置かれてお神酒と餅状のものが供えられ、神官が神事を行っているようす。岩崎敏夫氏・内藤丈夫氏撮影「磐城の民俗図録」）	
参考文献・資料	<p>佐々木長生「浜下りの神事の分布と考察」『東北民俗資料集』（4） 萬葉堂書店（1975） 細井雄次郎「祭りの変遷とその意味 ―福島県いわき市四倉町諏訪神社例大祭を巡って―」『長野県民俗の会会報』第20号（1997） 緑川健「四倉の合同例大祭 ～昭和30年代の神輿の浜下り～」『地域学講座「四倉学」平成29年度』いわき市立四倉公民館（2018） ほか</p>	

88. いわき市 稲荷神社		渡邊 彩
(1)神社の概要	<p>名 称／稲荷神社 所在地／いわき市四倉町狐塚字八谷50 由 緒／正治元年（1199）岩城小太郎成衡が勧請したと伝えられる。正保4年（1647）再建された。祭神は倉稲魂神。</p>	
(2)祭りの名称	例大祭	
(3)祭りの由来	—	
(4)祭 日	毎年5月4日。昭和30年代頃までは旧暦4月8日	
(5)伝承団体	司祭者／諏訪神社（四倉町／Ⅲ-41）宮司、稲荷神社氏子。	
(6)神幸経路	—	
(7)祭りの内容	潮水の扱い／サカキを潮水に浸し、神輿に3回ふりかけた。	

	実施内容／細井雄次郎氏の調査によると、明治時代には稲荷神社の神輿は仁井田浜に下りてお潮採りの神事を行っていたという。昭和30年（1955）に四倉町、大浦村、大野村が合併し四倉町となったことを記念して、3町村の神社神輿が四倉町の諏訪神社へ集結し、合同で四倉海岸へ下りるようになったが、お潮採りは仁井田浜で行った。佐々木長生氏の調査によると、仁井田浜には、上仁井田の諏訪神社（IV-89）、狐塚の稲荷神社、八幡神社（IV-87）の順で下りた。緑川健氏の調査によると、稲荷神社は四倉での合同神輿渡御に昭和43年（1968）まで参加し、四倉町までは平成4年（1992）頃まで来ていた。
(8)祭りの状況	平成30年（2018）当時、神輿は氏子などが担いで渡御を行っていた。令和2年（2020）から、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の拡大により、神事のみ執り行われてきた。
(9)芸能等	—
(10)関連資料	昭和10年代に撮影された仁井田浜でのお潮採りの写真（砂浜に安置した神輿の前で、神官が神事を行っている。神輿の周りをおおぜいの大人や子どもが取り囲み、神事の様子を見ている。神輿の前にはサカキとお潮採りの桶が見える。岩崎敏夫氏・内藤丈夫氏撮影「磐城の民俗図録」）
参考文献・資料	佐々木長生「浜下りの神事の分布と考察」『東北民俗資料集』（4） 萬葉堂書店（1975） 細井雄次郎「祭りの変遷とその意味 —福島県いわき市四倉町諏訪神社例大祭を巡って—」『長野県民俗の会会報』第20号（1997） 緑川健「四倉の合同例大祭 ～昭和30年代の神輿の浜下り～」『地域学講座「四倉学」平成29年度』いわき市立四倉公民館（2018） ほか

89. いわき市 諏訪神社		齋藤りぼん
(1)神社の概要	名 称／諏訪神社 所在地／いわき市四倉町上仁井田字北浜185 由 緒／具体的な創建年代は不明だが、信州諏訪神社を勧請したと伝えられる。祭神は建御名方命。	
(2)祭りの名称	諏訪神社例大祭（春の例大祭）	
(3)祭りの由来	—	
(4)祭 日	毎年5月4日（旧暦4月8日）。『郷土誌 大浦小学校』や『四倉郷土史』には7月27日と記載されているが、いつから現在の祭礼日になったかは不明である。	
(5)伝承団体	愛宕花園神社（III-36）宮司、諏訪神社の氏子総代。	
(6)神幸経路	諏訪神社を出発後、十九夜様、中華そばかつ実、八坂神社、長瀬医院、岸前、岡田神社、セメント公園、南団地集会所、南細谷旧道、北浜、楽寿荘の順で巡行する。これらのお旅所では、神事が執り行われる。その後、なぎさ亭で潮祭（祭典）が行われる。祭典後は蒲沼を經由して諏訪神社に到着する。なお、平成23年（2011）の東日本大震災前までは、仁井田浜（上仁井田字東山周辺）に渡御していた。	
(7)祭りの内容	潮水の扱い／供えていた。東日本大震災前は、総代長が黒椀に潮水を汲み、神輿の前に供えていた。しかし、震災後に堤防ができてしまった影響で、潮汲みができなくなったため、令和6年（2024）現在は行っていない。 実施内容／神幸行列は、神楽、大太鼓、猿田彦、宮司、本神輿、天満宮神輿、子ども神輿、来賓、氏子で構成される。平成13年（2001）まで上仁井田青年会が本神輿の担ぎ手をしてきたが、担ぎ手不足などの影響で、翌年から令和5年（2023）まで車輦神輿で渡御をしていた。そんななか、氏子総代を中心に担ぎ神輿復活の動きがあり、翌6年に本神輿の担ぎ神輿が復活した。担ぎ手の募集にあたっては、新聞記事のほか、ホームページやチラシなどで広報を行った。その結果、当日は市内外約50人の担ぎ手が参加した。なお、『磐城時報』大正2年（1927）5月5日付によると、本神輿は昭和2年（1927）に購入されたものであり、市内では珍しい京神輿である。『いわき民報』令和6年（2024）5月9日付によると、今回の担ぎ神輿復活にあたり、担ぎ棒を新調して例大祭に臨んだという。	
(8)祭りの状況	東日本大震災の年は、諏訪神社が被災した影響もあり、中止した。 新型コロナウイルス感染症（COVID-19）が流行した令和2～4年（2020～22）は、諏訪神社での神事のみ行った。令和5年から神輿の渡御を再開した。	
(9)芸能等	—	

第IV章 基本調査

(10)関連資料	—
参考文献・資料	大浦小学校編『郷土誌 大浦小学校』昭和7年(1932) 本多徳次『四倉郷土史』四倉郷土史刊行会 昭和33年(1958) 福島県立博物館『福島県立博物館調査報告第28集 福島県における浜下りの研究』(1997) ほかに

↑文献減と行間調整により、53ページにおさめる予定。

調査協力機関・調査協力者

No.	市町村名	神社名	役職
1	いわき市	二荒神社	宮司
2	いわき市	御齋所山熊野神社	宮司
3	いわき市	北野神社	宮司
4	いわき市	諏訪神社	宮司
5	いわき市	八坂神社	宮司
6	いわき市	日吉神社	宮司
7	いわき市	二荒神社	宮司
8	いわき市	愛宕花園神社	宮司
9	いわき市	出羽神社	宮司
10	いわき市	立銚鹿島神社	宮司
11	いわき市	八坂神社	宮司
12	いわき市	温泉神社	宮司
13	いわき市	諏訪神社	宮司
14	いわき市	飯野八幡神社	宮司
15	いわき市	薄井神社	宮司
16	いわき市	新山神社	宮司
17	いわき市	鹿島神社	宮司
18	いわき市	鹿島神社	宮司
19	いわき市	稻荷神社	宮司
20	いわき市	諏訪神社	宮司
21	いわき市	諏訪神社	宮司
22	いわき市	住吉神社	宮司
23	いわき市	伊勢両宮神社	宮司
24	いわき市	出羽神社	宮司
25	いわき市	熊野神社	宮司
26	いわき市	愛宕神社	宮司
27	いわき市	三島神社	総代
28	いわき市	愛宕神社	区長
29	いわき市	伊勢両宮神社	区長
30	いわき市	諏訪八幡神社	総代
31	双葉町	初彦神社	宮司
32	大熊町	初彦神社	宮司
33	大熊町		町区長
34	富岡町	麓山神社	宮司
35	富岡町	諏訪神社	総代
36	檜葉町	木戸八幡神社	宮司
37	檜葉町	木戸八幡神社	総代
38	檜葉町	小埜義団（木戸八幡神社）	総理
39	広野町	鹿島神社	氏子
40	広野町	大滝神社	総代
41	広野町	八雲神社	総代
42	広野町	檜葉八幡神社	宮司
43	富岡町	諏訪神社	宮司
44	浪江町	貴布禰神社	宮司
45	浪江町	苕野神社	請戸芸能保存会
46	浪江町	苕野神社	宮司
47	広野町	大滝神社	元神社総代
48	新地町	駒ヶ嶺神社	宮司
49	新地町	諏訪神社	宮司
50	相馬市	相馬中村神社	事務
51	相馬市	稻荷寄木神社	宮司
52	相馬市	立切熊野神社	宮司
53	南相馬市	男山八幡神社	宮司
54	南相馬市	冠嶺神社	宮司
55	南相馬市	相馬小高神社	宮司
56	南相馬市	虚空蔵堂	元、檀家総代長
57	南相馬市	旧鹿島町各地のお浜下り列帳（写し）	鹿島町歴史民俗資料館 元職員
58	南相馬市	伊勢大御神（上の大神宮）	宮司
59	南相馬市	御刀神社	元、氏子総代
60	南相馬市	津神社・八竜神社	相馬・双葉漁業協同組合 元、理事
61	南相馬市	虚空蔵堂	宝蔵寺住職
62	南相馬市	三日月不動尊	元、台田中行政区長
63	南相馬市	日吉神社・男山八幡神社・（小沢）天神社・（下江井）天神社	お浜下り記録映画制作
64	南相馬市	（小沢）天神社	古写真・新聞記事提供
65	飯館村	山津見神社	宮司

ダミー

ダミー

記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財

「浜通りのお浜下り」調査報告書

発行日 令和8年3月〇〇日

編集・発行 浜通りのお浜下り調査委員会
(事務局：福島県教育委員会)
〒960-8670 福島県福島市杉妻町2番16号
電話 024-521-7787 FAX 024-521-7974

印刷 ○○○○○○○○